福島県文化財調査報告書第398集

常磐自動車道遺跡調査報告34

馬場前遺跡（２・３次調査）

〈本 文 編 1〉

２００３年

福 島 県 教 育 委 員 会
財団法人 福島県文化振興事業団
日 本 道 路 公 団

常磐自動車道遺跡調査報告34

馬場前遺跡（２・３次調査）

〈本 文 編 1〉

口絵１　馬場前遺跡全景

1　86号住居跡全景（南から）

2　86号住居跡複式炉全景（南から）

3　86号住居跡複式炉断ち割り（東から）

4　86号住居跡断面（南から）

5　549号土坑土器出土状況（南東から）

6　1483号土坑断面（南西から）

口絵２　各種遺構細部

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間が開通し，現在は富岡までの区間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており，周知の埋蔵文化財包蔵地に加え，数多くの遺跡等を確認しました。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から，現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成12・13年度に行った楢葉町に所在する馬場前遺跡の２次・３次発掘調査の結果をまとめたものです。

この調査では，縄文時代から中・近世に渡る遺構と遺物が確認されました。中でも今から4,000年前の竪穴住居跡が100軒以上，貯蔵穴と考えられる土坑が1,000基以上発見され，福島県内でも有数の縄文時代中期末葉の大規模集落であることがわかりました。

今後，この報告書が，県民の皆様の文化財に対する御理解を深めるとともに地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた日本道路公団，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成15年３月

福島県教育委員会

教育長　髙　城　俊　春

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模開発に先立ち，対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査につきましては，平成６年度から平成８年度までに，いわき中央ＩＣからいわき四倉ＩＣ間のうち，いわき市四倉町に所在する10遺跡の調査を実施いたしました。さらに，平成９年度以降はいわき四倉ＩＣから富岡ＩＣ予定地間にかかる遺跡の発掘調査を実施しており，平成13年度までにいわき市四倉町・広野町・楢葉町・富岡町の36遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は，平成12・13年度に実施した発掘調査のうち，楢葉町に所在する馬場前遺跡の２次・３次調査の成果をまとめたものです。

この調査では縄文時代から中・近世にわたる遺構と遺物が確認されました。なかでも縄文時代中期末の複式炉を有する竪穴住居跡が100軒以上，貯蔵穴と思われる土坑が1,000基以上発見され，福島県内でも有数の大規模集落であることがわかりました。近世を主体とする時期では，大溝で方形に区画された内部に建物跡が多数見つかりました。これらは隣接する鍛冶屋遺跡の建物跡群とともに，集落を復元する上で大変貴重な調査例となりました。

今後，この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として，広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに，この調査に御協力いただきました日本道路公団東北支社いわき工事事務所，福島県担当部局，楢葉町ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお，埋蔵文化財の保護につきまして，今後ともより一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年３月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　佐　藤　栄佐久

緒　　言

1　本書は，平成12年度及び平成13年度に実施した常磐自動車道（いわき四倉～富岡間）遺跡発掘調査にかかる埋蔵文化財の発掘調査報告である。

2　本書には，楢葉町に所在する下記の遺跡の調査成果について収録した。なお，遺跡所在地の小字名と遺跡名が異なるが，遺跡名は福島県遺跡地図（福島県教育委員会：1996）に従っている。
　遺跡番号54200024；馬場前遺跡（楢葉町上小塙字馬場前・懐内・宮前）

3　この発掘調査事業は，福島県教育委員会が日本道路公団の委託により実施したものであり，実際の調査業務は，福島県教育委員会が財団法人福島県文化振興事業団に委託して行ったものである。

4　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員が調査を行った。

［平成12年度］

文化財主査　福島　雅儀	文化財主査　高橋　三男	文化財主査　佐藤　美穂
文化財主査　富田　　修	文化財主査　高田　昌幸	文化財主査　佐々木　透
文化財主査　斎藤　竜一	文化財主査　高橋　幸司	文化財主査　大竹　正浩
文化財主査　吉田　昌彦	文化財副主査　菊田　順幸	文化財副主査　関　　博人
文化財副主査　鈴木　広子	文化財副主査　千葉　秀樹	文化財副主査　能登谷宣康
文化財副主査　吉野　滋夫	文化財副主査　国井　秀紀	文化財主事　堀川　雄二
文化財主事　小野　忠大	文化財主事　阿部　知己	文化財主事　山元　　出
文化財主事　丹治　篤嘉	文化財主事　坂田由紀子	文化財主事　轡田　克史
文化財主事　三浦　武司	嘱　　託　新海　和広	

［平成13年度］

専門文化財主査　山内　幹夫	文化財主査　吉田　秀享	文化財主査　宮田　安志
文化財主査　茂木　政弘	文化財主査　高橋　幸司	文化財副主査　阿部　智彦
文化財副主査　千葉　秀樹	文化財副主査　小暮　伸之	文化財主事　門脇　秀典
文化財主事　坂田由紀子		

5　本書は頁数の関係から第１分冊（本文編１），第２分冊（本文編２），第３分冊（写真・自然科学分析編）に分冊した。

6　本書の執筆にあたっては，調査を担当した調査員が分担して行い，文責は文末に示した。

7　本書に掲載の地図は，国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の１及び５万分の１地形図を複製使用したものである。「（承認番号）平14東複第444号」

8　付編として掲載した自然科学の諸分析については，次の機関及び個人の協力を得た。
石質鑑定：真鍋健一（福島大学教育学部地学教室）
炭化材樹種同定：株式会社古環境研究所
複式炉炉体土器内部の黒色土の分析：株式会社パリノ・サーヴェイ
出土土器の炭素年代測定：小林謙一（総合大学院大学博士課程後期日本歴史研究専攻），
　今村峯雄（国立歴史民俗博物館）
空中写真：株式会社オリス

9　発掘調査から本報告書を作成するまでに，次の機関と研究者から御指導・御助言をいただいた。
（順不同・敬称略）
福島県いわき建設事務所・楢葉町教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター・国立歴史博物館・財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，一戸町教育委員会，青森県埋蔵文化財調査センター，尖石考古館，井戸尻考古館，横浜市歴史博物館，財団法人かながわ考古学財団・埼玉県大井町教育委員会・埼玉県川越市教育委員会・埼玉県立歴史資料館・埼玉県嵐山町教育委員会
小野正敏，飯村均，橋本澄朗，合田恵美子，江原英，星雅之，小野眞一，中村明央，成田滋彦，小田川哲彦，鵜飼行雄，小林深志，樋口誠司，前沢和之，石井寛，山本暉久，大上周三，恩田勇，坪田幹夫，天ヶ嶋岳，栗岡真理子，村上伸二

10　本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は福島県教育委員会が保管している。

用　　例

1　本文中，もしくは挿図中に使用した略号は次の通りである。

ＮＨ：楢葉町　　ＢＢＭ：馬場前遺跡

Ｌ：遺構外の堆積土層　ℓ：遺構内の堆積土層　ＳＩ：住居跡　ＳＸ：竪穴状遺構

ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：柱列跡　ＳＤ：溝跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＫ：土坑　ＳＧ：焼土遺構

ＳＭ：埋甕　ＳＷｋ：鍛冶遺構　Ｐ：小穴　Ｆ：倒木痕　Ｔ：トレンチ　Ｇ：グリッド

2　本書の遺構図の用例は次の通りである。

（1）方位の表記がない遺構図は，全て真北を指す。座標南北線は真北を示す。

（2）水糸レベルは海抜標高を表す。

（3）縮尺率は掲載する遺構の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率については，スケールの脇に表示した。原則として竪穴住居跡は１/50，１/60，複式炉・カマド跡は１/30，土坑は１/50，竪穴状遺構・井戸跡１/60，掘立柱建物跡・柱列跡１/80，溝跡１/50～１/150，焼土遺構・埋甕・集石遺構・鍛冶遺構は１/20，小穴１/200の縮尺率とした。

（4）ケバは原則として遺構内の傾斜部は⊤で表示したが，相対的に緩傾斜の部分は⊤で表している。

また，⊤は後世の削平が明らかである場合に使用した。

（5）挿図中の網かけ等については，その用例を同図中に表示した。

（6）竪穴住居跡等でピット番号の下に示した「－○」と表記した数字は，床面（検出面）からのピットの深さを示している。

（7）遺構実測図の具体的な用例は実測図用例⑴に示した。

3　遺物実測の用例は次の通りである。

（1）縮尺率は掲載する遺物の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率については，スケールの脇に表示した。原則的には，土器を１/３・１/４縮尺，石器を１/２・１/４・１/６，拓本を１/３縮尺とした。

（2）遺物実測図中の網かけ等については，その用例を同図中に表示した。

（3）計測値は各実測図の下に，推定値は（　）で，遺存値は［　］で表示した。遺物の計測場所は実測図用例⑵に示した。

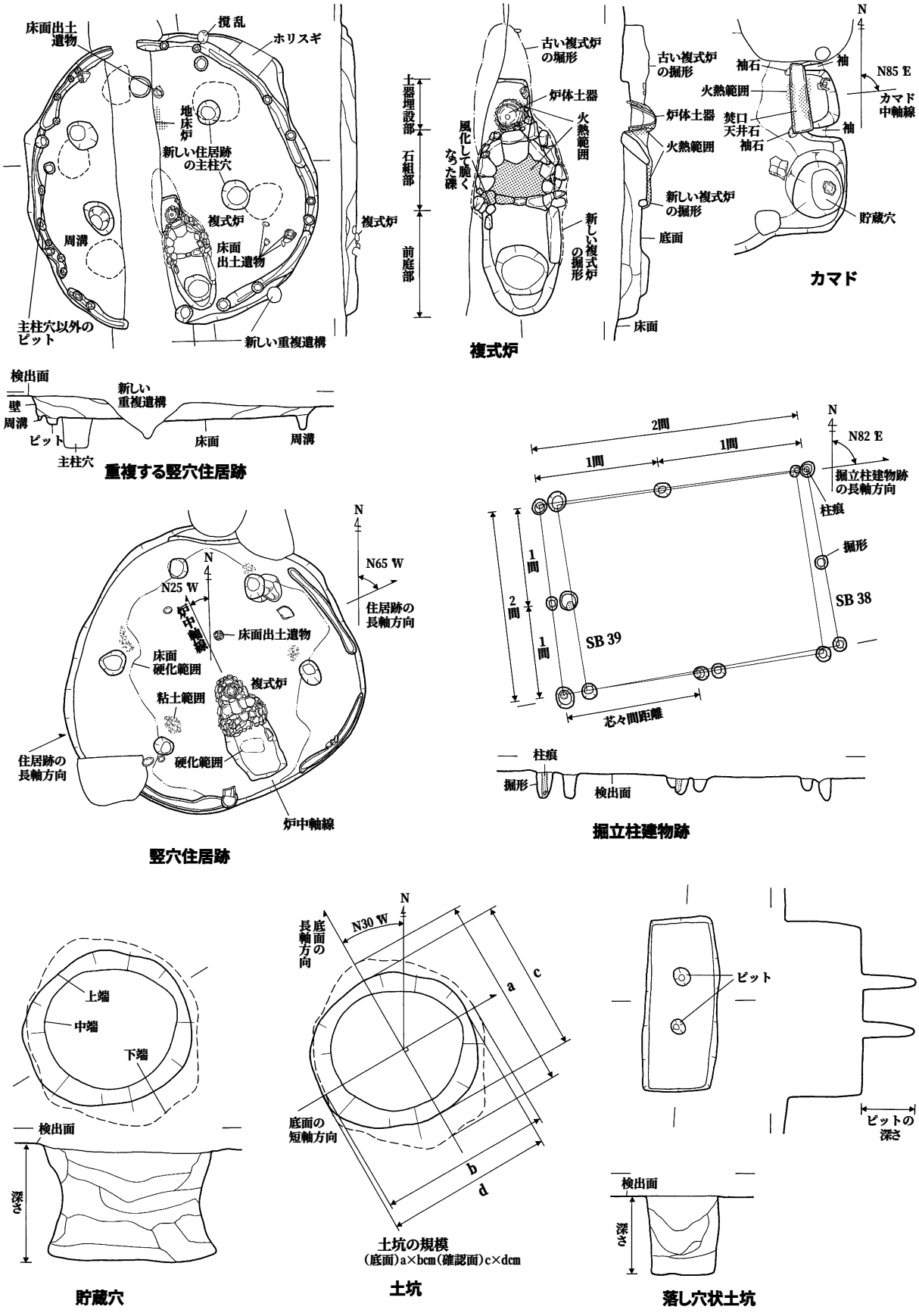
4　文章中の遺物点数は，すべて破片点数である。

5　遺物については各頁ごとに１番から番号を振り，その番号を挿図番号と組み合わせて遺物番号としている。

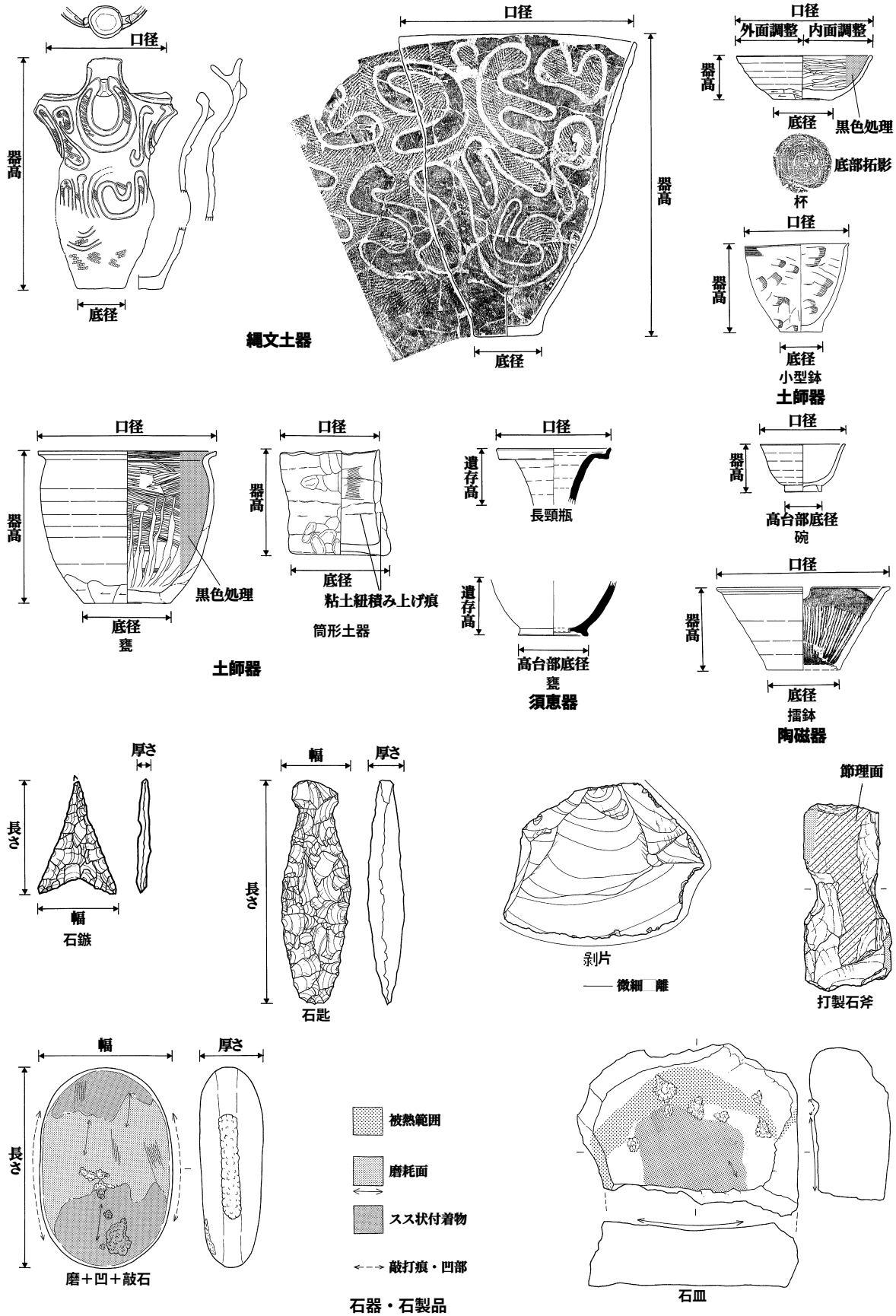
［例］　図７の１番の土器…７図１

6　挿図中の遺物番号は，自然科学分析・写真編中の個々の遺物に付けた番号と一致する。

7　引用・参考文献は，執筆者の敬称を省略し，本文編２の巻末に収めた。


床面出土遺物
撹乱
ホリスギ
地床炉
新しい住居跡の主柱穴
複式炉
周溝
床面出土遺物
主柱穴以外のピット
新しい重複遺構
土器埋設部
石組部
前庭部
複式炉
古い複式炉の掘形
炉体土器
火熱範囲
風化して脆くなった礫
新しい複式炉の掘形
床面
袖石
袖
N
N85 E
カマド中軸線
焚口
天井石
貯蔵穴
カマド
検出面
新しい重複遺構
壁
周溝
ピット
主柱穴
床面
周溝
重複する竪穴住居跡
N
N65 W
住居跡の長軸方向
N25 W
炉中軸線
床面出土遺物
床面硬化範囲
複式炉
粘土範囲
硬化範囲
住居跡の長軸方向
炉中軸線
竪穴住居跡
2間
1間
1間
N
N82 E
掘立柱建物跡の長軸方向
柱痕
掘形
SB 38
SB 39
1間
2間
1間
芯々間距離
柱痕
掘形
検出面
掘立柱建物跡
上端
中端
下端
検出面
深さ
貯蔵穴
N
N30 W
底面の長軸方向
a
c
底面の短軸方向
b
d
土坑の規模
(底面)a×bcm(確認面)c×dcm
土坑
ピット
ピットの深さ
検出面
深さ
落し穴状土坑

実測図用例(1)


口径
器高
底径
縄文土器
外面調整
内面調整
黒色処理
底部拓影
杯
小型鉢
土師器
黒色処理
甕
粘土紐積み上げ痕
筒形土器
遺存高
長頸瓶
高台部底径
碗
須恵器
擂鉢
陶磁器
厚さ
長さ
幅
石鏃
石匙
剥片
微細剥離
節理面
打製石斧
磨＋凹＋敲石
被熱範囲
磨耗面
スス状付着物
敲打痕・凹部
石器・石製品
石皿

実測図用例(2)

総　目　次

第１分冊（本文編１）

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査にいたる経緯

第２節　遺跡の位置と地理的環境

第３節　遺跡周辺の歴史的環境

第４節　調 査 経 過

第５節　調査方法と報告書作成

第２章　遺構の分布と基本土層

第３章　南区の遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

第２節　掘立柱建物跡

第３節　溝　　跡

第４節　井　戸　跡

第５節　土　　坑

第６節　その他の遺構

第４章　北区の遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

第２節　掘立柱建物跡・柱列跡

第２分冊（本文編２）

第３節　溝　　跡

第４節　井　戸　跡

第５節　土　　坑

第６節　その他の遺構

第７節　小　穴　群

第８節　遺構外出土遺物

第５章　ま　と　め

第３分冊（写真編・付編）

写真図版

自然科学分析

付編１　馬場前遺跡の複式炉を構成する礫の産地について

付編２　福島県楢葉町馬場前遺跡出土の炭化材の樹種同定

付編３　馬場前遺跡の遺構内堆積土に認められた黒色土の化学成分分析

付編４　福島県楢葉町馬場前遺跡出土土器の炭素年代測定

目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過 …… 1
第１節　調査にいたる経緯 …… 1
1　常磐自動車道建設事業の概要と平成12年度までの埋蔵文化財の対応 …… 1
2　平成13年度の調査経過 …… 2
第２節　遺跡の位置と地理的環境 …… 3
第３節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 5
第４節　調査経過 …… 9
1　平成12年度の調査経過 …… 9
2　平成13年度の調査経過 …… 12
第５節　調査方法と報告書作成 …… 14

第２章　遺構の分布と基本土層 …… 18

第３章　南区の遺構と遺物 …… 23
第１節　竪穴住居跡 …… 23
69号住居跡（23）　146号住居跡（26）　147号住居跡（28）　161号住居跡（30）
162号住居跡（31）　163号住居跡（33）　164号住居跡（34）　165号住居跡（38）
第２節　掘立柱建物跡 …… 39
91号建物跡（40）　92号建物跡（40）　93号建物跡（40）　94号建物跡（43）
95号建物跡（44）
第３節　溝　　跡 …… 45
６号溝跡（45）　13号溝跡（46）　20号溝跡（46）
第４節　井　戸　跡 …… 46
13号井戸跡（46）　14号井戸跡（47）　16号井戸跡（47）　20号井戸跡（48）　21号井戸跡（49）
第５節　土　　坑 …… 50
第６節　その他の遺構 …… 68
１号鍛冶遺構（68）　９号埋甕（69）

第４章　北区の遺構と遺物 …… 71
第１節　竪穴住居跡 …… 71
５a号住居跡（71）　５b号住居跡（74）　12号住居跡（77）　13号住居跡（78）
14号住居跡（83）　17号住居跡（86）　52号住居跡（89）　53号住居跡（97）
66号住居跡（101）　72号住居跡（106）　76号住居跡（109）　79号住居跡（113）
81号住居跡（117）　82号住居跡（120）　83号住居跡（123）　84号住居跡（125）
85号住居跡（126）　86号住居跡（129）　89号住居跡（143）　90号住居跡（145）
91号住居跡（147）　92号住居跡（151）　93号住居跡（153）

94ａ・ｂ号住居跡（157）　104号住居跡（161）　105号住居跡（163）
106号住居跡（166）　107号住居跡（169）　108号住居跡（175）　109号住居跡（177）
111号住居跡（183）　112号住居跡（188）　113号住居跡（190）　114号住居跡（196）
115a号住居跡（199）　115b号住居跡（206）　116号住居跡（209）　117号住居跡（215）
118号住居跡（218）　119号住居跡（225）　120号住居跡（230）　121号住居跡（233）
123号住居跡（235）　124号住居跡（237）　132号住居跡（241）　133号住居跡（243）
134号住居跡（246）　135号住居跡（247）　136号住居跡（249）　137号住居跡（255）
138a号住居跡（257）　138b号住居跡（259）　140号住居跡（261）　142号住居跡（263）
143号住居跡（271）　144号住居跡（274）　145号住居跡（275）　150号住居跡（278）
151号住居跡（279）　152号住居跡（283）　153号住居跡（287）　154号住居跡（289）
155号住居跡（291）　156a・b号住居跡（292）　158号住居跡（305）
159号住居跡（310）
第２節　掘立柱建物跡・柱列跡 …… 312

挿図・表目次

[挿　図]

図１ 常磐自動車道位置図 …… 1
図２ 周辺の地質・地形分類図 …… 4
図３ 周辺の遺跡 …… 7
図４ 常磐自動車道工事計画略図 …… 10
図５ 第１～３次調査範囲 …… 11
図６ グリッド配置図 …… 15
図７ 遺構分布図と基本土層(1)…… 20
図８ 遺構分布図と基本土層(2)…… 21
図９ 69号住居跡 …… 24
図10 69号住居跡炉 …… 25
図11 146号住居跡と出土遺物…… 27
図12 147号住居跡と出土遺物…… 29
図13 161号住居跡…… 30
図14 162号住居跡と出土遺物…… 32
図15 163号住居跡と出土遺物…… 34
図16 164号住居跡…… 36
図17 164号住居跡出土遺物…… 37
図18 165号住居跡…… 39
図19 91号建物跡 …… 41
図20 92・93号建物跡 …… 42
図21 94・95号建物跡と95号建物跡出土遺物 …… 43
図22 ６・13・20号溝跡 …… 45
図23 13・14・20・21号井戸跡 …… 48
図24 16号井戸跡と出土遺物 …… 49
図25 278・402・405・445・456・457・534・551号土坑…… 51
図26 552・554・556～561号土坑 …… 52
図27 562～564・566・568・569・663・734・741号土坑…… 53
図28 853～855・866～868・875・966号土坑 …… 54
図29 967～969・1549～1553号土坑 …… 55
図30 1555～1560・1562～1564号土坑 …… 56
図31 1566～1574号土坑 …… 57
図32 1575・1581～1587号土坑 …… 58
図33 1588・1589・1591～1597号土坑 …… 59
図34 1598～1604・1606・1607・1611号土坑 …… 60
図35 1605・1608～1610・1613号土坑 …… 61
図36 445・853・854・966・1553・1556号土坑出土遺物 …… 65
図37 1567・1568・1581～1583・1585・1595・1598・1605・1613号土坑出土遺物 …… 67
図38 １号鍛冶遺構 …… 68
図39 ９号埋甕と出土遺物 …… 69
図40 ５ａ号住居跡 …… 72
図41 ５ａ号住居跡炉と出土遺物 …… 73
図42 ５ｂ号住居跡 …… 75
図43 ５ｂ号住居跡出土遺物 …… 76
図44 12号住居跡 …… 77
図45 13号住居跡 …… 79
図46 13号住居跡炉と出土遺物(1)…… 82
図47 13号住居跡出土遺物(2)…… 83
図48 14号住居跡と出土遺物(1)…… 84
図49 14号住居跡出土遺物(2)…… 85
図50 17号住居跡と出土遺物(1)…… 87
図51 17号住居跡出土遺物(2)…… 88
図52 52号住居跡 …… 90
図53 52号住居跡炉と出土遺物(1)…… 93
図54 52号住居跡出土遺物(2)…… 94
図55 52号住居跡出土遺物(3)…… 95
図56 52号住居跡出土遺物(4)…… 96
図57 53号住居跡 …… 98
図58 53号住居跡出土遺物(1) …… 100
図59 53号住居跡出土遺物(2) …… 101
図60 66号住居跡…… 103
図61 66号住居跡出土遺物(1) …… 105
図62 66号住居跡出土遺物(2) …… 106
図63 72号住居跡と出土遺物…… 107
図64 76号住居跡…… 110
図65 76号住居跡カマドと出土遺物(1) …… 111
図66 76号住居跡出土遺物(2) …… 112
図67 79号住居跡と出土遺物(1) …… 114
図68 79号住居跡炉と出土遺物(2) …… 115
図69 81号住居跡…… 118

図70 81号住居跡出土遺物(1) …… 119
図71 81号住居跡出土遺物(2) …… 120
図72 82号住居跡と出土遺物…… 122
図73 83号住居跡と出土遺物…… 124
図74 84号住居跡と出土遺物…… 125
図75 85号住居跡(1) …… 127
図76 85号住居跡(2)と出土遺物 …… 128
図77 86号住居跡…… 130
図78 86号住居跡埋没過程模式図…… 132
図79 86号住居跡炉…… 133
図80 86号住居跡出土遺物(1) …… 136
図81 86号住居跡出土遺物(2) …… 137
図82 86号住居跡出土遺物(3) …… 138
図83 86号住居跡出土遺物(4) …… 139
図84 86号住居跡出土遺物(5) …… 140
図85 86号住居跡出土遺物(6) …… 141
図86 89号住居跡と出土遺物…… 144
図87 90号住居跡と出土遺物…… 146
図88 90号住居跡ｂ炉出土遺物…… 147
図89 91号住居跡…… 149
図90 91号住居跡出土遺物…… 150
図91 92号住居跡と出土遺物…… 152
図92 93号住居跡…… 155
図93 93号住居跡出土遺物…… 156
図94 94ａ号住居跡…… 158
図95 94ｂ号住居跡…… 159
図96 94ａ・ｂ号住居跡出土遺物…… 160
図97 104号住居跡と出土遺物 …… 162
図98 105号住居跡と出土遺物(1)…… 164
図99 105号住居跡出土遺物(2)…… 165
図100 106号住居跡…… 167
図101 106号住居跡炉と出土遺物…… 168
図102 107号住居跡と出土遺物(1) …… 171
図103 107号住居跡出土遺物(2) …… 173
図104 107号住居跡出土遺物(3) …… 174
図105 108号住居跡と出土遺物…… 176
図106 109号住居跡…… 178
図107 109号住居跡炉と出土遺物(1) …… 180
図108 109号住居跡出土遺物(2) …… 181
図109 109号住居跡出土遺物(3) …… 182
図110 111号住居跡…… 185
図111 111号住居跡炉と出土遺物(1) …… 186
図112 111号住居跡出土遺物(2) …… 187
図113 112号住居跡と出土遺物…… 189
図114 113号住居跡…… 191
図115 113号住居跡炉と出土遺物(1) …… 192
図116 113号住居跡出土遺物(2) …… 194
図117 113号住居跡出土遺物(3) …… 195
図118 114号住居跡…… 197
図119 114号住居跡出土遺物…… 198
図120 115ａ号住居跡(1) …… 200
図121 115ａ号住居跡炉と出土遺物(1) …… 202
図122 115ａ号住居跡と出土遺物(2) …… 204
図123 115ａ号住居跡出土遺物(3) …… 205
図124 115ａ号住居跡出土遺物(4) …… 206
図125 115ｂ号住居跡と出土遺物…… 207
図126 116号住居跡…… 210
図127 116号住居跡炉と出土遺物(1) …… 212
図128 116号住居跡出土遺物(2) …… 213
図129 116号住居跡出土遺物(3) …… 214
図130 116号住居跡出土遺物(4) …… 215
図131 117号住居跡と出土遺物(1) …… 216
図132 117号住居跡出土遺物(2) …… 217
図133 118号住居跡(1) …… 219
図134 118号住居跡(2) …… 220
図135 118号住居跡出土遺物(1) …… 223
図136 118号住居跡出土遺物(2) …… 224
図137 119号住居跡…… 226
図138 119号住居跡炉…… 227
図139 119号住居跡出土遺物…… 229
図140 120号住居跡…… 230
図141 120号住居跡炉と出土遺物…… 232
図142 121号住居跡…… 234
図143 123号住居跡…… 235
図144 123号住居跡出土遺物…… 236
図145 124号住居跡…… 238
図146 124号住居跡出土遺物…… 240
図147 132号住居跡と出土遺物…… 242
図148 133号住居跡と出土遺物(1) …… 244
図149 133号住居跡出土遺物(2) …… 246
図150 134号住居跡と出土遺物…… 247
図151 135号住居跡と出土遺物…… 248
図152 136号住居跡…… 250
図153 136号住居跡出土遺物(1) …… 252
図154 136号住居跡出土遺物(2) …… 253
図155 136号住居跡出土遺物(3) …… 254

図156 137号住居跡と出土遺物…… 256
図157 138ａ号住居跡…… 258
図158 138ａ号住居跡出土遺物…… 259
図159 138ｂ号住居跡…… 260
図160 140号住居跡と出土遺物…… 262
図161 142号住居跡…… 264
図162 142号住居跡炉と出土遺物(1) …… 267
図163 142号住居跡出土遺物(2) …… 268
図164 142号住居跡出土遺物(3) …… 269
図165 142号住居跡出土遺物(4) …… 270
図166 143号住居跡…… 272
図167 143号住居跡出土遺物…… 273
図168 144号住居跡と出土遺物…… 274
図169 145号住居跡…… 276
図170 145号住居跡出土遺物…… 277
図171 150号住居跡と出土遺物…… 279
図172 151号住居跡…… 280
図173 151号住居跡炉と出土遺物…… 282
図174 152号住居跡…… 284
図175 152号住居跡炉と出土遺物(1) …… 285
図176 152号住居跡出土遺物(2) …… 286
図177 153号住居跡…… 288
図178 154号住居跡と出土遺物…… 290
図179 155号住居跡…… 292
図180 156ａ号住居跡…… 293
図181 156ｂ号住居跡…… 294
図182 156号住居跡炉…… 295
図183 156号住居跡出土遺物(1) …… 299
図184 156号住居跡出土遺物(2) …… 300
図185 156号住居跡出土遺物(3) …… 301
図186 156号住居跡出土遺物(4) …… 302
図187 156号住居跡出土遺物(5) …… 304
図188 158号住居跡…… 306
図189 158号住居跡炉…… 307
図190 158号住居跡出土遺物…… 308
図191 159号住居跡と出土遺物…… 311
図192 柱間尺による建物跡の配置(1)…… 313
図193 柱間尺による建物跡の配置(2)…… 314
図194 ３・４・15号建物跡 …… 319
図195 ５・６号建物跡 …… 320
図196 ７・８号建物跡 …… 321
図197 ９～12号建物跡 …… 322
図198 13・16・17号建物跡 …… 323
図199 18・20号建物跡 …… 324
図200 19・24号建物跡 …… 325
図201 25ａ・25ｂ・27号建物跡 …… 326
図202 26・29号建物跡 …… 327
図203 30・31号建物跡 …… 328
図204 32・33号建物跡 …… 329
図205 34号建物跡 …… 330
図206 35～37号建物跡 …… 331
図207 38・39・41号建物跡 …… 332
図208 42・46号建物跡 …… 333
図209 47・48号建物跡 …… 334
図210 49・50号建物跡 …… 335
図211 51・61号建物跡 …… 336
図212 62・63号建物跡 …… 337
図213 67・68・70・71号建物跡 …… 338
図214 72～74号建物跡 …… 339
図215 75・76号建物跡 …… 340
図216 77・78号建物跡 …… 341
図217 79・80号建物跡 …… 342
図218 81・83・84号建物跡 …… 343
図219 85・86号建物跡 …… 344
図220 96・97号建物跡 …… 345
図221 ８・９・11・12・15・17号柱列跡 … 352
図222 16・18・22～24・36号柱列跡 …… 353
図223 25・32～35・39・40号柱列跡 …… 354
図224 29ａ・29ｂ・30・44・45・50号柱列跡 …… 355
図225 ５・20・24・31・34・63号建物跡出土遺物と22・25号柱列跡出土遺物 …… 358

［ 表 ］

表1 平成13年度調査遺跡一覧 …… 2
表2 馬場前遺跡周辺の遺跡一覧 …… 8
表3 調査次毎遺構数及び主たる遺物出土点数一覧 …… 18
表4 馬場前遺跡南区掘立柱建物跡一覧 …… 44
表5 南区土坑総括 …… 50
表6 馬場前遺跡南区土坑一覧表 …… 62
表7 建物跡と重複する遺構一覧…… 315
表8 柱間毎建物跡の推定時期一覧…… 318
表9 馬場前遺跡北区掘立柱建物跡一覧…… 346
表10 馬場前遺跡北区柱列跡一覧…… 356

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査にいたる経緯

１　常磐自動車道建設事業の概要と平成12年度までの埋蔵文化財の対応

常磐自動車道は，埼玉県三郷市を起点として，茨城県・福島県浜通り地方を縦貫して宮城県に至る，太平洋沿岸の交通の大動脈として計画された路線である。この計画の内，三郷インターチェンジ(以下ＩＣと略す)からいわき市のいわき中央ＩＣまでは，昭和63年に供用が開始され，さらに，いわき中央ＩＣからいわき四倉ＩＣまでは平成11年３月に供用を開始している。

これら供用が開始された区間の内，茨城県境からいわき中央ＩＣまでの間に所在する埋蔵文化財に関しては，昭和59・60年にいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して４遺跡について発掘調査を実施した。いわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣ間の埋蔵文化財に関しては，平成６年から９年まで好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査をいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施し，四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査を，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センターに委託して実施した。

いわき四倉ＩＣ以北の路線については，平成３年にいわき四倉ＩＣ～富岡ＩＣ間が整備計画路線に格上げされ，平成５年には施工命令が下されている。更に，富岡ＩＣ以北についても，平成８年に相馬ＩＣまでの区間が整備計画路線となり，平成10年に施工命令が下されている。

福島県教育委員会では，いわき四倉ＩＣ以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して，平成６年度より表面調査を実施し，平成10年度までに宮城県境までの表面調査を終了している。この成果を

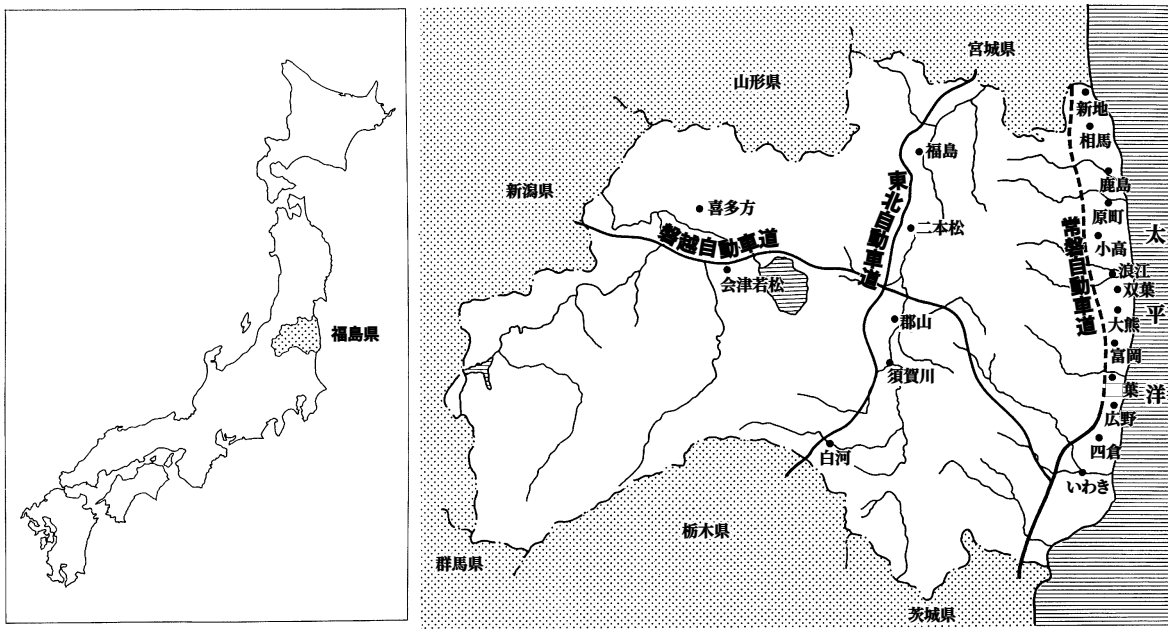


図１　常磐自動車道位置図

受けて，平成７年度よりいわき四倉ＩＣ～富岡ＩＣ間の試掘調査を実施し，平成９年度からは同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始されている。平成９年度はいわき市内の５遺跡と広野町内の１遺跡の発掘調査を実施し，平成10年度はいわき市内の４遺跡，広野町内の３遺跡，楢葉町内の３遺跡，富岡町内の２遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により，路線内に所在する遺跡の内，いわき市内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成11年度は，広野町内の４遺跡，楢葉町内の５遺跡について実施した。平成12年度は，広野町内の１遺跡，楢葉町内の７遺跡，富岡町内の５遺跡について実施した。この平成12年度の調査により，路線内に所在する遺跡の内，広野町内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。（山　内）

２　平成13年度の調査経過

平成13年度常磐自動車道関連の遺跡発掘調査は，20名の体制で開始した。調査対象地は，第12次区間の双葉郡楢葉町から富岡町までである。

発掘調査に先立ち，４月上旬から，昨年度に引き続き発掘調査を行う楢葉町馬場前遺跡，富岡町内で新たに発掘調査が予定されている前山Ａ遺跡や，本町西Ｄ遺跡などの条件整備状況確認を行うとともに，発掘作業員雇用手続きや連絡所設置・駐車場整備などの準備作業を進めた。

調査は，４月16日から富岡町前山Ａ遺跡・本町西Ｄ遺跡，４月24日から楢葉町馬場前遺跡の発掘調査を開始した。このうち馬場前遺跡は３次調査で，町道中島－高田線を挟み北区と南区に分かれる。北区は，町道より北側4,500㎡文化層２枚分（平安と縄文の文化層）の調査であり，養生したシートを剝がして昨年度に続き遺構の精査に取りかかった。南区は，昨年度調査が不可能で新たに条件整備が整った箇所から表土剝ぎを実施した。馬場前遺跡は常磐自動車道楢葉工事区上小塙地区工事の計画により，９月末までの調査期間で開始した。

５月に入り，新たに富岡町本町西Ｃ・本町西Ｂ遺跡の発掘調査を開始した。本町西Ｃ遺跡は先に調査を開始した本町西Ｄ遺跡と沢を隔てて隣接しており，土橋により重機の通行を可能にして表土剝ぎを実施した。本町西Ｂ遺跡は遅沢川と本町西Ｃ遺跡が立地する段丘の崖面に挟まれた場所で，排土箇所が調査区内に限られているため，調査区を南北に分割して排土を交互に移動しながら調査を進めることとなった。

６月12日には，工事が優先される楢葉町馬場前遺跡南区民家脇の1,100㎡について，日本道路公団いわき工事事務所に引き渡しを行った。さらに，６月21日には本町西Ｄ遺跡の発掘調査が終了し，本町西Ｃ遺跡と本町西Ｂ遺跡の遺構検出・精査を重点的に進めることとなった。前山Ａ遺跡では縄文時代中期後葉における複式炉出現期の集落跡の調査が本格的になってきた。

表１　平成13年度調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	時代	所収報告書名
馬場前遺跡	楢葉町上小塙字馬場前他	13,400	縄文・奈良・平安・中近世	常磐自動車道遺跡調査報告34
前山Ａ遺跡	富岡町上郡山字前山	6,800	縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告35
本町西Ｂ遺跡	富岡町本岡字本町西	8,740	縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告36
本町西Ｃ遺跡	富岡町本岡字本町西	5,200	縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告36
本町西Ｄ遺跡	富岡町本岡字本町西	4,000	縄文	常磐自動車道遺跡調査報告36
後作Ａ遺跡	富岡町上手岡字後作	6,400	旧石器・縄文	常磐自動車道遺跡調査報告36

７月18日には，馬場前遺跡と前山Ａ遺跡においてＮＨＫの録画取材を受けた。７月22日には広野町の常磐自動車道北迫川橋連結式の式典にあわせて地元町民との交流イベントが開催され，日本道路公団いわき工事事務所の依頼を受けて㈶福島県文化振興事業団も発掘調査資料の展示協力を行った。

８月になると，各遺跡の発掘調査も佳境に入り，８月２日には楢葉町馬場前遺跡において調査区全体の空撮を実施した。８月11日には富岡町前山Ａ遺跡の現地説明会を実施し，富岡町内外から200名以上の見学者が来跡した。なお，８月27日からは富岡町後作Ａ遺跡の発掘調査を新たに開始した。

９月には楢葉町馬場前遺跡を始めとして，富岡町本町西Ｃ遺跡・前山Ａ遺跡の発掘調査が終了した。前山Ａ遺跡では調査終了に先立ち，９月17日に空中写真撮影を実施した。調査が終了した馬場前遺跡と前山Ａ遺跡については10月４日に日本道路公団いわき工事事務所に引き渡しを行った。

10月は，残る富岡町本町西Ｂ遺跡と後作Ａ遺跡の発掘調査を進めた。後作Ａ遺跡では，10月12日に作業員が現場において病気により急死したため，翌週１週間現場作業を休止した。その後は発掘調査も順調に進み，11月16日には後作Ａ遺跡，11月30日には本町西Ｂ遺跡の発掘調査が終了した。現地引き渡しはいずれも12月５日に行ったが，本町西Ｂ遺跡は先に終了した本町西Ｃ・本町西Ｄ遺跡ともに引き渡しを行った。　（山　内）

第２節　遺跡の位置と地理的環境

福島県は東北地方南端に位置し，その面積は13,782㎢である。この内，およそ８割は山地で占められ，東部には太平洋に沿って阿武隈高地，中央部には奥羽山脈，西部には越後山脈がせまっている。これらの山地はほぼ南北に走り，県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の３地域に区分される。

馬場前遺跡は，浜通り地方南部の双葉郡楢葉町に所在する。町の面積は104.2㎢で，東は太平洋から西は標高400～600ｍの阿武隈高地にかけて東西に広がった土地をもち，西部の約７割が山地で占められる。低地帯は町の北端で東西の幅が約５㎞であるが，南に行くほど狭まって，町の南端では１㎞ほどになる。これは海岸線がほぼ南北を走るのに対し，阿武隈高地東縁(低地帯西縁)を限る双葉断層の走向がＮ10 ℃Ｗを示し，両者が平行しないためである。

楢葉町の地質構造は，浜通り低地帯の西縁を南北方向に走る双葉断層を境として東西で大きく異なっている(図２)。まず断層の西側にあたる阿武隈高地の山間部には，中生代白亜紀の貫入岩の花崗岩類が広く分布している。この阿武隈花崗岩類のなかには，斑糲岩やアプライト，結晶片岩などが散在的に発達する。さらに双葉断層に沿った周辺では，破砕された未変成・弱変成の古生層(高倉山層・郭公山層)が，帯状に発達している。これら古生層の堆積物には，粘板岩・硬砂岩・チャートなどの堆積岩が含まれている。

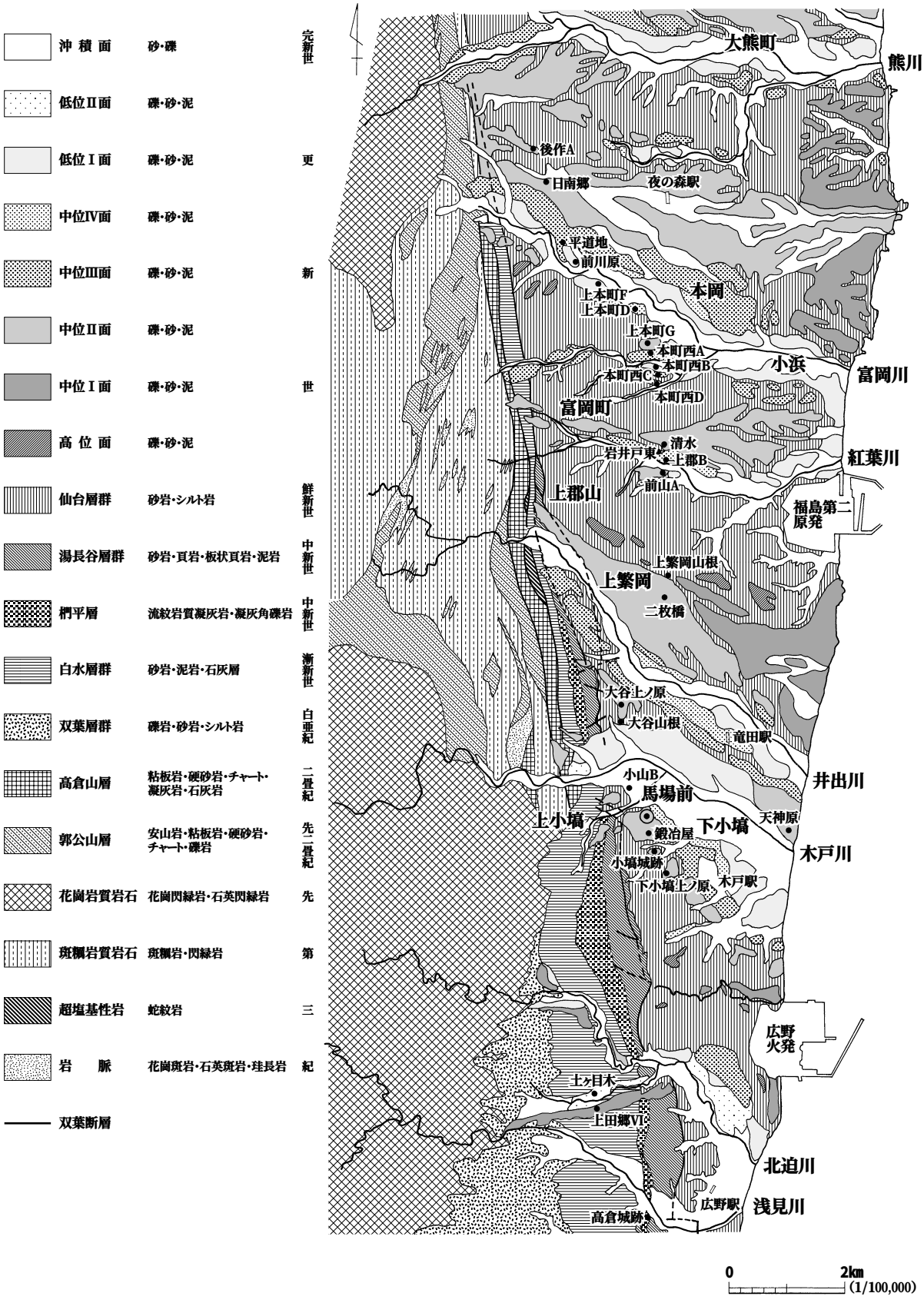


図２　周辺の地質・地形分類図　　（久保ほか1994・鈴木ほか1991・鈴木ほか1994をもとに作成）

次の中生代の地層は，楢葉町南端の大坂地区からいわき市北部にかけて広く分布する双葉層群である。この地層からは，フタバスズキリュウなどの化石が多数発見されている。

次に第三紀層の白水・湯長谷・仙台の各層群は，双葉断層の周辺及び東側に帯状に分布している。漸新世に形成された白水層群は，石城層・浅貝層・白坂層からなり，なかでも石城層には常磐炭田の稼行対象としていた石炭層が堆積している。中新世に形成された湯長谷層群は，下位より椚平層・五安層・水野谷層・亀ノ尾層・平層の５つの地層で構成される。なかでも最下部の椚平層（滝層）の堆積物のなかには，石器石材として利用される流紋岩礫が含まれている。この層は，楢葉町山田岡付近では東西幅500m程の狭長な分布を示すが，いわき方面に向かうにしたがい分布幅を広げ，いわき市四倉町付近では東西幅が３㎞を超える。また五安層の堆積物のなかにも，礫岩中に流紋岩が含まれていることが指摘されている（根本1991）。鮮新世に形成された仙台層群は双葉断層東側の丘陵地に広く分布し，第四紀に形成された段丘面の基盤層を形成している。堆積物は半固結のシルト岩・凝灰岩からなり，多くの火山灰層を介在している。

次に地形であるが，楢葉町の中央には木戸川と井出川が東流し，太平洋に注いでいる。両河川の上流部は，阿武隈高地の基盤をなす花崗岩を浸食してＶ字谷渓谷が形成されている。下流部の両岸には幅0.5～２㎞の沖積面及び数段の河岸段丘が発達する。段丘は，標高の高いもの（年代の古いもの）から順に，高位，中位Ⅰ，中位Ⅱ，中位Ⅲ，中位Ⅳ，低位Ⅰ，低位Ⅱ面と呼ばれている（久保ほか1994）。この内，楢葉町には主に中位面が発達し，その大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦面を形成している。これら中位段丘面は，更新世後期の最終間氷期（約７～13万年前）の海進・海退に伴って形成されたと考えられている（久保ほか1994）。

馬場前遺跡は，標高約50mの中位Ⅱ段丘面に立地し，その段丘面の規模は，東西幅４㎞，南北幅2.8㎞で，木戸川南岸に分布する段丘面のなかでは比較的規模が大きい。遺跡の北側は，沖積面との比高30mの切り立った段丘崖である。この段丘面では最上位に厚さ約２mの風化火山灰質土壌を載せ，その下位に厚さ５m程の花崗岩類円礫混じりの粗粒砂からなる段丘礫層が堆積している。

楢葉町の気候は，西に阿武隈高地，東に太平洋を抱えていることから，夏は海から，冬は山からの季節風の影響を受ける浜通り地方特有のものである。つまり夏は小笠原高気圧から海上を渡ってくる南風を受けて涼しく，内陸部の会津や中通り地方に比べ，過ごしやすい気候といえる。冬のシベリア寒気団からの北北西の季節風は，奥羽山脈や阿武隈高地の西側で雪を降らせるため，山越えして浜通りに吹き下ろすころにはすっかり乾いている。一般に冬に山から吹き下ろす強風をこの地方では「空っ風」と呼び，しばしば乾燥・強風注意報が発令される。併せて暖かい太平洋の海水温の恩恵も受けることから，浜通り地方の冬は比較的暖かい。　（門　脇）

第３節　遺跡周辺の歴史的環境

楢葉町の遺跡は，「双葉断層」と呼ばれる「岩沼―久ノ浜構造線」の東に広がる海岸段丘上と，

木戸川・井出川に浸食されて形成した河岸段丘上，及び自然堤防上や，西側の渓谷域に立地している。本節では，馬場前遺跡周辺の歴史的環境を概述する。

旧石器時代の遺跡は，いずれも後期旧石器時代のものであり，木戸川以北に多く所在する。近年発掘調査を終えた大谷の大谷上ノ原遺跡では，ナイフ形石器・刃部磨製石斧などが出土し，また以前より知られる上繁岡の塩貝，上小塙の中女平，下繁岡の原林，北田の天神原，波倉の北向の各遺跡からは，ナイフ形石器・石刃などの石器が採集・出土している。

縄文時代の遺跡は町内に広く分布し，なかでも中期・後期に属する遺跡が多い。古い時期より追ってみれば，早期の押型文土器片が出土した波倉の北向遺跡，大木３～６式など前期の土器が出土した下繁岡の赤粉遺跡などが挙げられる。中・後期を代表する遺跡は，井出の代遺跡，北田の上ノ原遺跡，そして今回報告する上小塙の馬場前遺跡などがある。前述の２遺跡は本年(平成13年度)楢葉町教育委員会によって発掘調査が行われた。代遺跡からは大木８ａ・８ｂ式期の土器が最も多く，その他，時期を前後して，大木６・７・９・10式期，綱取Ⅰ・Ⅱ式，堀之内式期の土器も出土している。馬場前遺跡では大木９・10式期の資料が大部分で，その他大木８ａ・８ｂ式期もわずかに確認されている。石器では，サメの歯を模倣したような小型の異形石器など特殊な資料が，上ノ原遺跡と馬場前遺跡から出土している。晩期の遺跡としては山所布Ｂ遺跡，向ノ内遺跡が挙げられる。前者からは大洞Ｃ２～Ａ'式期の土器，後者からは大洞Ｃ２式期の深鉢が出土している。

弥生時代を代表する遺跡では，1987年(昭和62年)に国の重要文化財に指定され標識遺跡となった，北田の天神原遺跡が挙げられる。楢葉町では天神原式期の遺跡が比較的多いが，これよりも古い段階の資料としては，山田岡の美シ森Ｂ遺跡から，磨消縄文を伴う変形工字文土器の時期の住居跡や土坑が検出されている。天神原式期としては，下小塙の下小塙上ノ原，前述した山田岡の美シ森Ｂの各遺跡がある。その他，波倉の北向と大倉平，下小塙の久保田，山田岡の宮下，山田浜の崇神山の各遺跡などがある。

古墳時代では，後期の時期である横穴墓群が各所に確認されている。凝灰岩を掘削しているため，遺存状態は比較的良好である。発掘調査されたものでは，波倉の北向，北田の下山根，山田岡の名古谷・松ノ口の各横穴群などがある。集落跡については，未だ発掘調査されていないが，土器の散布地としては上小塙の宮田，井出の浄光西，大谷の海法地，山田岡の広畑と古駅の各遺跡などがある。墳丘については北田の船場，前原の田中内，山田岡の稲荷の３古墳が登録されている。

奈良・平安時代の楢葉は，石城郡に属していたと推定される。この時代の遺跡には，波倉の北向，下繁岡の赤粉・植松，山田岡の古駅，下小塙の下小塙上ノ原，上小塙の鍛冶屋・小山Ｂの各遺跡などがある。この内，赤粉遺跡，鍛冶屋遺跡では竪穴住居跡や掘立柱建物跡が数多く検出され，それぞれ９世紀代に中心をもつ集落跡であることが判明している。また，近年発掘調査を終えた小山Ｂ遺跡でも竪穴住居跡が検出され，墨書土器なども出土している。

中世の楢葉一帯は，岩城氏と相馬氏の勢力の接点となり，中世を通じて攻防の要所であったとされる。城館跡は木戸川を境として南北に認められる。南側には楢葉城跡，小塙城跡，上ノ原城跡，

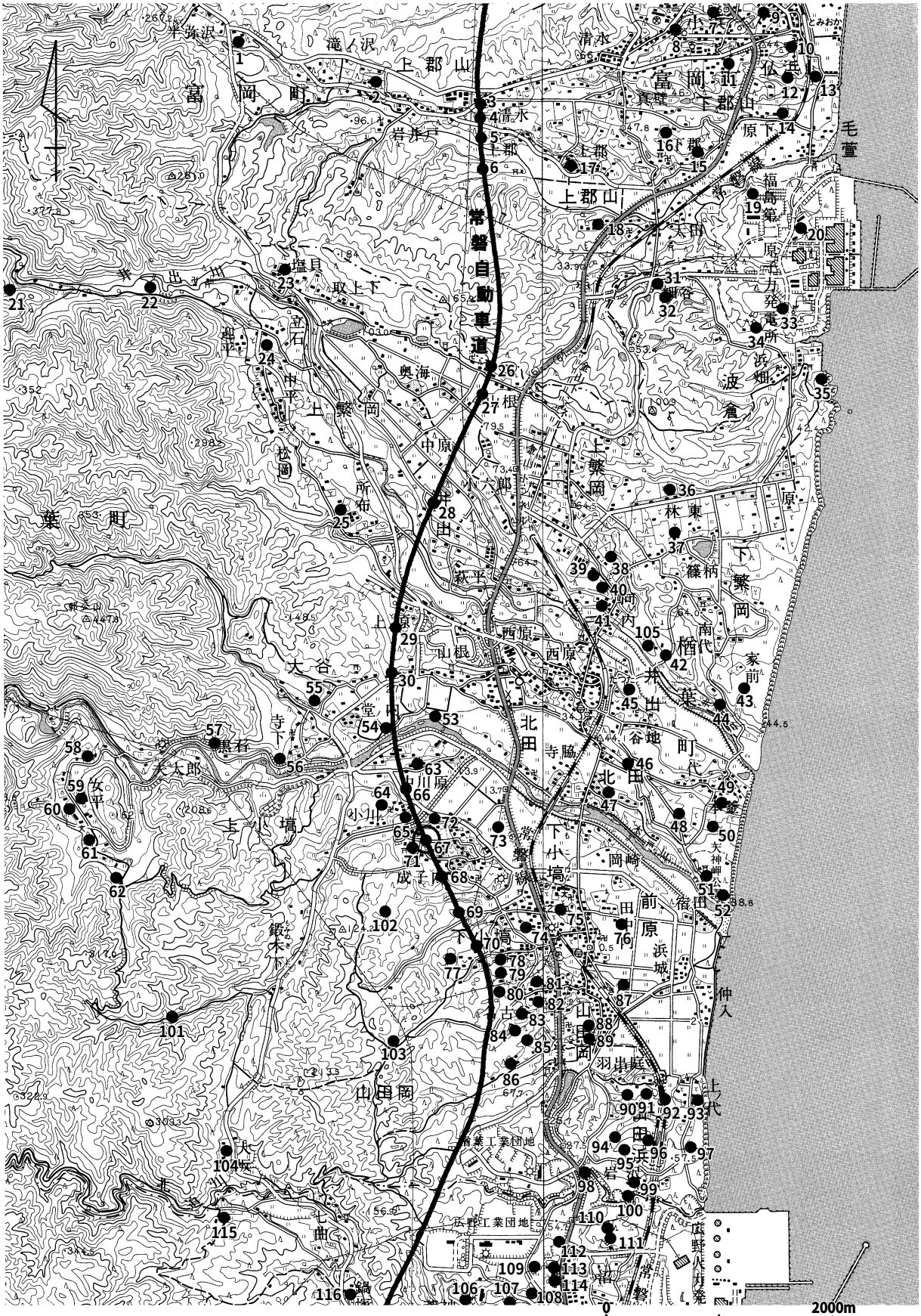


図３　周辺の遺跡

（国土地理院 1/50,000地形図　承認番号平14東複第444号）

表２　馬場前遺跡周辺の遺跡一覧

（№は，図３中の番号に一致する）

№	遺跡名	遺跡番号	所在地	種別	時期
	富岡町	**543**			
1	半弥澤遺跡	00020	上郡山字半弥沢	散布地	縄文
2	滝の沢遺跡	00021	上郡山字滝の沢	散布地	縄文
3	清水遺跡	00057	上郡山字清水	散布地	奈・平
4	岩井戸東遺跡	00059	上郡山字岩井戸	散布地	奈・平・近
5	上郡Ｂ遺跡	00060	上郡山字上郡	集落跡	縄・古墳・平
6	前山Ａ遺跡	00063	上郡山字前山	集落跡	縄・平
7	大作横穴墓群	00038	小浜字中央	古墳	古墳
8	上の町Ａ遺跡	00018	小浜字中央	散布地	縄文
9	釜田遺跡	00043	仏浜字釜田	散布地	古墳～平安
10	仏浜横穴墓群	00025	仏浜	古墳	古墳
11	西原Ｂ遺跡	00024	仏浜字西原	散布地	縄文
12	西原Ａ遺跡	00023	仏浜字西原	散布地	古墳
13	清水尻横穴墓群	00022	仏浜字釜田	古墳	古墳
14	原下遺跡	00031	下郡山字原下	散布地	古墳
15	真壁城跡	00030	下郡山字真壁	城館跡	中世
16	下郡山古墳群	00027	下郡山字真壁	古墳	古墳
17	一本松遺跡	00032	上郡山字上郡	散布地	縄文
18	上郡山館跡	00037	上郡山字太田	城館跡	中世
19	毛萱館跡	00036	毛萱	城館跡	中世
20	毛萱遺跡	00033	毛萱字前川原	散布地	縄文～古墳
	楢葉町	**542**			
21	ウナギ沢製鉄跡	00102	井出字羽山　国有林	散布地	近世
22	羽山遺跡	00005	井出字羽山	散布地	縄文
23	塩貝遺跡	00004	上繁岡字塩貝	散布地	旧･縄･古墳～平
24	立石遺跡	00008	井出字迎平	散布地	縄文
25	所布遺跡	00010	井出字所布	散布地	縄文
26	上繁岡山根遺跡	00093	上繁岡字山根	集落跡	縄・奈・平・近
27	二枚橋遺跡	00108	上繁岡字二枚橋	散布地	縄・平・近
28	奥海遺跡	00087	上繁岡字奥海・苅集	散布地	不明
29	大谷上ノ原遺跡	00089	大谷字上ノ原・山根	集落跡	旧･縄･弥･奈･平
30	大谷山根遺跡	00092	大谷字山根・堤下	製鉄・散	平・近
31	ボラ横穴墓群	00043	波倉字細谷	古墳	古墳
32	五反田横穴墓群	00044	波倉字五反田	古墳	古墳
33	北向遺跡	00046	波倉字北向	集落跡	旧･縄･古墳･平
34	北向横穴墓群	00045	波倉字北向	古墳	古墳
35	養輪城跡	00075	波倉字原	城館跡	中世
36	原遺跡	00072	波倉字原	散布地	奈・平
37	原林遺跡	00047	下繁岡字林東	散布地	旧・縄
38	浄光東遺跡	00049	井出字浄光東	散布地	縄文
39	浄光廃寺	00050	井出字向ノ内	社寺跡	中世
40	浄光西遺跡	00048	井出字浄光西	散布地	縄・古墳～平
41	向ノ内遺跡	00052	井出字向ノ内	散布地	縄・平
42	赤粉遺跡	00079	下繁岡字赤粉・井出字館ノ沢	集落跡	縄・奈・平
43	植松遺跡	00082	下繁岡字植松	集落跡	弥・奈・平
44	小田林遺跡	00100	下繁岡字小田林	散布地	奈・平
45	高橋遺跡	00055	井出字高橋	散布地	縄文
46	下山根横穴墓群	00056	北田字下山根・合張	古墳	古墳
47	船場古墳	00057	北田字新田東	古墳	古墳
48	北門上遺跡	00059	井出字上ノ原	散布地	縄文
49	代遺跡	00058	井出字代	集落跡	縄文
50	井出上ノ原遺跡	00070	北田字上ノ代	集落跡	縄文
51	天神山城跡	00060	北田字上ノ原	城館跡	中世
52	天神原遺跡	00061	北田字天神原	墓域	旧・弥
53	海法地遺跡	00071	大谷字海法地	散布地	奈・平
54	仲田遺跡	00086	大谷字仲田・宮前	散布地	奈・平・近
55	名合沢遺跡	00078	大谷字名合沢	城館跡	中世
56	大谷館跡	00017	大谷字西代	城館跡	中世
57	黒石製鉄跡	00016	大谷字黒石	製鉄跡	近世
58	北女平遺跡	00015	上小塙字女平	散布地	縄文
59	中女平遺跡	00018	上小塙字女平	散布地	旧・縄
60	中倉遺跡	00019	上小塙字中倉	散布地	縄文
61	南女平遺跡	00020	上小塙字女平	散布地	縄文
62	水無遺跡	00021	上小塙字中平	散布地	縄文
63	中川原遺跡	00085	大谷字中川原	散布地	奈・平・近
64	小山城跡	00076	上小塙字小山	城館跡	中世
65	小山Ａ遺跡	00083	上小塙字小山・高田	散布地	中・近
66	小山Ｂ遺跡	00084	上小塙字地蔵堂・小山	集落跡	奈・平・中
67	**馬場前遺跡**	**00024**	**上小塙字馬場前・懐内・宮前**	**集落跡**	**縄･奈･平･中･近**
68	鍛冶屋遺跡	00026	上小塙字鍛冶屋・根ッ子原	集落跡	縄･奈･平･中･近
69	小塙城跡	00027	下小塙字正明寺	城館跡	中世
70	下小塙上ノ原遺跡	00030	下小塙字上ノ原	集落跡	弥・奈・平
71	木戸八幡神社遺跡	00088	上小塙字宮前・宮平	散布地	縄・奈・平
72	岩下製鉄跡	00090	上小塙字懐内・宮前	製鉄跡	近世
73	宮田遺跡	00022	上小塙字宮田	散布地	奈・平
74	大倉平遺跡	00028	下小塙字大倉平	散布地	弥生
75	久保田遺跡	00062	下小塙字久保田	散布地	弥生・古墳
76	田中内古墳	00063	前原字田中内	古墳	古墳
77	上ノ原城跡	00029	下小塙字上ノ原	城館跡	中世
78	焼野横穴墓群	00031	下小塙字焼野	古墳	古墳
79	後沢遺跡	00032	山田岡字堂平	散布地	弥生
80	堂平廃寺跡	00033	山田岡字後沢	社寺跡	中世
81	広畑遺跡	00073	山田岡字広畑	散布地	奈・平
82	宮下遺跡	00035	山田岡字宮下	散布地	弥・奈・平
83	名古谷製鉄跡	00034	山田岡字名古谷	製鉄・散	近世
84	名古谷横穴墓群	00036	山田岡字名古谷	古墳	古墳
85	松ノ口横穴墓群	00074	山田岡字松ノ口	古墳	古墳
86	南作製鉄跡	00037	山田岡字南作	製鉄跡	近世
87	稲荷古墳	00064	山田岡字稲荷前	古墳	古墳
88	古駅遺跡	00077	山田岡字古駅	散布地	奈・平
89	霊泉寺横穴墓群	00101	山田岡字南作	古墳	古墳
90	楢葉城跡	00066	山田岡字館・小館・羽出庭	城館跡	中世
91	館ノ山遺跡	00067	山田岡字館	散布地	縄文
92	陣場横穴墓群	00068	山田浜字羽出庭	古墳	古墳
93	代東遺跡	00069	山田浜字代東	散布地	縄文
94	根ッ子原Ａ遺跡	00096	山田岡字根ッ子原	集落地	平安
95	美シ森Ｃ遺跡	00097	山田岡字美シ森	不明	不明
96	美シ森Ａ/Ｂ遺跡	00094/5	山田岡字美シ森	集落跡	弥･平/縄･弥･平
97	崇神山遺跡	00080	山田浜字上ノ代	散布地	弥～平
98	岩沢磨崖仏	00081	山田岡字岩沢	石造物	近世
99	下岩沢Ａ遺跡	00099	山田岡字下岩沢	不明	不明
100	下岩沢館跡	00098	山田岡字下岩沢	城館跡	中世
101	グダ製鉄跡	00041	下小塙字グダ	製鉄跡	近世
102	山道横穴墓群	00025	上小塙字山道	古墳	古墳
103	上ノ原横穴墓群	00042	下小塙字上ノ原	古墳	古墳
104	大坂遺跡	00065	山田岡字大坂	散布地	縄文
105	井出城跡	00054	井出字館ノ沢	城館跡	中世
	広野町	**541**			
106	堂ノ原遺跡	00059	上北迫字堂ノ原	散布地	古墳～平安
107	中平遺跡	00055	上北迫字中平	散布地	中世
108	二ッ沼西遺跡	00093	下北迫字二ッ沼	散布地	縄文
109	二ッ沼Ⅲ遺跡	00061	下北迫字二ッ沼	散布地	弥生
110	岩沢Ａ遺跡	00098	下北迫字岩沢	散布地	不明
111	岩沢塚	00099	下北迫字岩沢	塚	近世
112	二ッ沼Ⅱ遺跡	00063	下北迫字二ッ沼	散布地	弥生
113	二ッ沼Ⅰ遺跡	00062	下北迫字二ッ沼	散布地	弥生
114	二ッ沼横穴墓群	00060	下北迫字二ッ沼	古墳	古墳
115	狸森遺跡	00001	上北迫字狸森	散布地	旧・縄
116	鍋塚遺跡	00091	上北迫字鍋塚	散布地	奈・平・近

小山城跡が，北側には大谷館跡，名合沢館跡，天神山城跡，井出城跡，蓑輪城跡が残されている。この内，小塙城跡は，常磐自動車道建設に伴い発掘調査が終了している。その他の城館跡については，楢葉町史編纂事業に併せて，縄張り測量調査が行われている。

幕藩体制の頃になると，楢葉一帯は磐城平藩の支配となるが，その後すぐに，上小塙・前原・井出の３ヶ村は，新発田藩，棚倉藩，多古藩と支配が変遷していった。その他，８ヶ村(山田岡・山田浜・下小塙・大谷・波倉・北田・上繁岡・下繁岡)は幕府直轄領となり幕末をむかえる。この時代の遺構としては，井出地区に一里塚が現存する。これは徳川家康が五街道を整備したことに倣って，当地の領主が浜街道に築いたものとされる。このほか，鉄滓の集積地が各所に認められ，製鉄遺跡としては20ヶ所程が確認されている。これは「年貢割付状」に記載のある，鉄年貢に関係するものと考えられている。また製鉄のほかに，製塩，窯業が行われていたことも確認されている。

（高　橋）

第４節　調　査　経　過

馬場前遺跡は，楢葉町内では古くから知られた遺跡であり，『福島県遺跡地図』に登録されている周知の遺跡である。平成６年度，常磐自動車道の建設に伴い福島県教育委員会が実施した分布調査で再確認され，平成７年度には試掘調査が行われた(福島県教育委員会1995・1996)。この試掘結果を受け，平成８年度には工区内面積26,000㎡が確定した(但し，西側に隣接する木戸八幡神社遺跡の100㎡を含む)。そして，図５に示したように，平成11年度に１次調査(調査面積；2,860㎡　能登谷ほか2001)，平成12年度に２次調査(調査面積；18,740㎡　吉野ほか2002)，平成13年度に３次調査(調査面積；13,400㎡)と，３カ年にわたり発掘調査が実施された。

なお，図４に示した工事計画略図は，最終的な計画略図であり，既発表の同種図面とは，町道交差部が若干異なっている。これは，町道の交差部分が，３次調査の時点で調査対象範囲から除外されたためであり，遺跡は町道下に確実に保存されている。また，３カ年にわたる調査対象の総面積は35,000㎡となり，当初の工区内面積とは9,000㎡の差が生じている。この差は，本遺跡が縄文時代と平安時代，さらに中・近世からなる複合遺跡であり，各時代ごとに生活面が異なったため，累積での調査面積となったためである。以下，平成12年度の２次調査及び平成13年度の実施した３次調査についてその経過を概述する。

（吉　田）

１　平成12年度の調査経過

平成12年度に実施した２次調査は当初23,140㎡を対象とした。調査は，最初に遺跡内を東西に横切る町道(中島―高田線)より南側の調査区(以下，南区と称す)を行い，北側の調査区(以下，北区と称す)に関しては，水道管の埋設位置の確認や止水作業に手間取ることから，条件が整い次第実施することとした。

財団法人福島県文化センターでは，当初調査員５名を配し，４月20日より作業員を雇用して調査

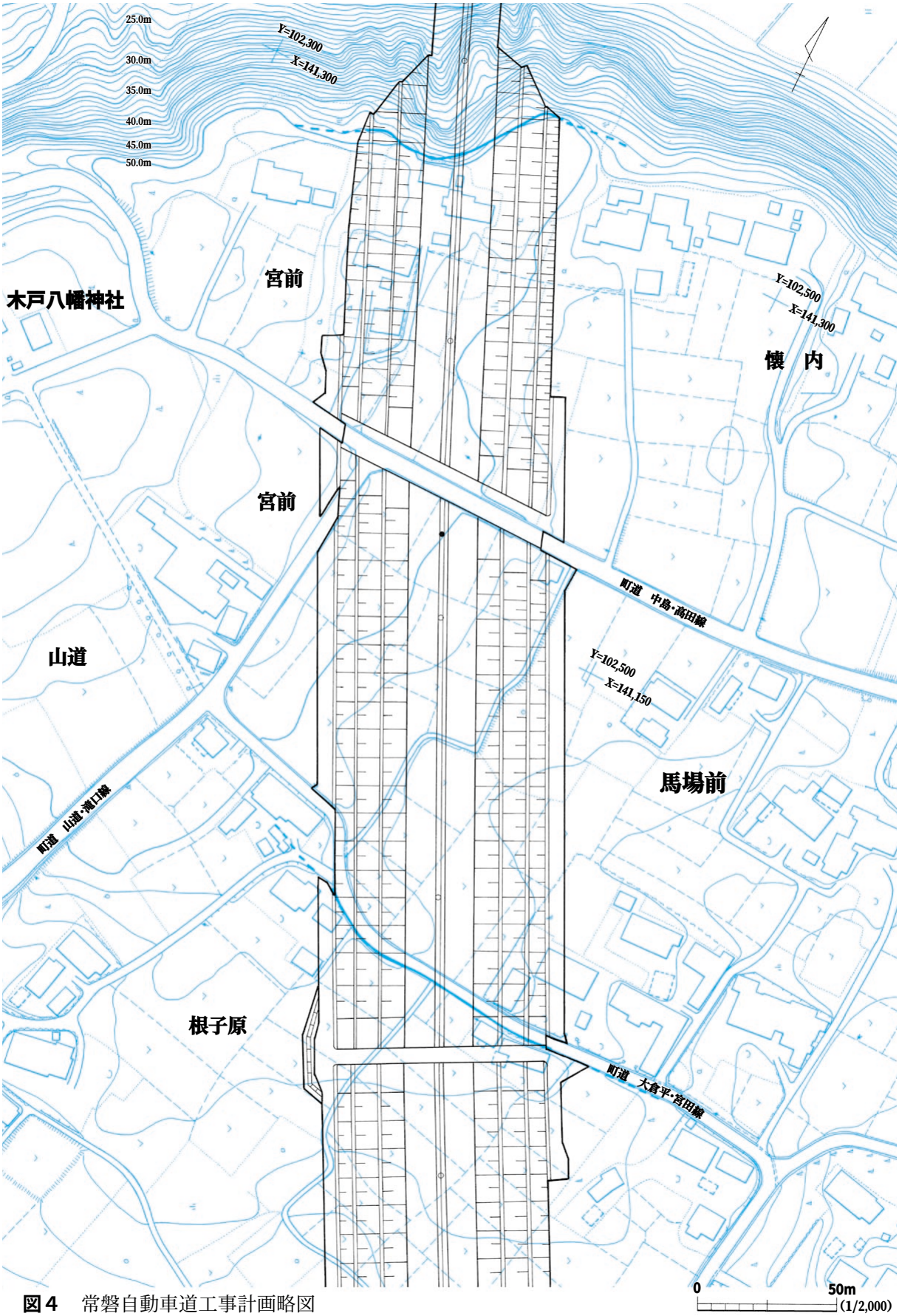


図４　常磐自動車道工事計画略図

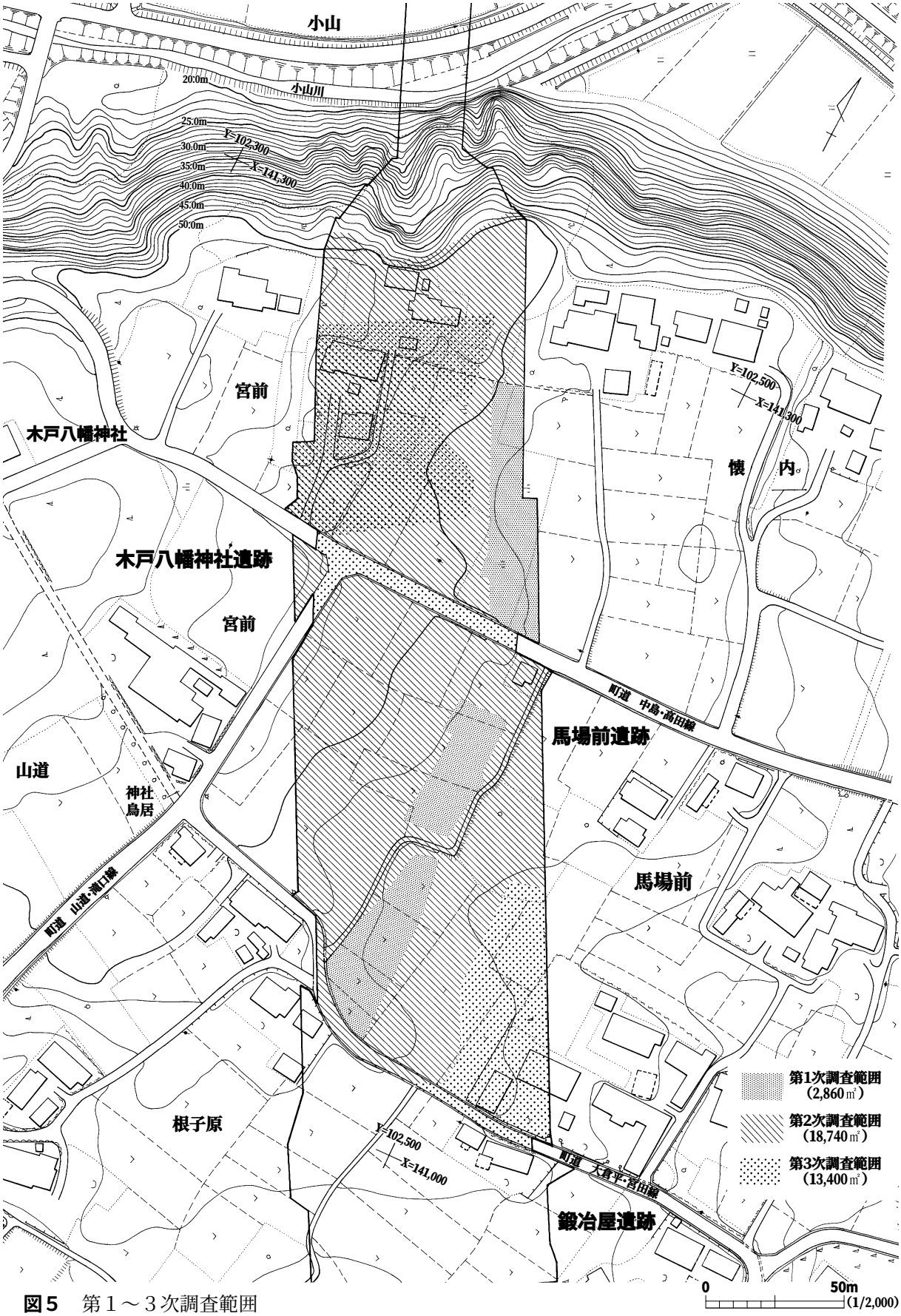

小山
小山川
20.0m
25.0m
30.0m
35.0m
40.0m
45.0m
50.0m
Y=102,300
X=141,300
宮前
木戸八幡神社
木戸八幡神社遺跡
宮前
懐内
Y=102,500
X=141,300
町道　中島・高田線
馬場前遺跡
山道
神社
鳥居
町道　山道・瀬口線
馬場前
根子原
Y=102,500
X=141,000
町道　大倉平・宮田線
鍛冶屋遺跡
第1次調査範囲
（2,860㎡）
第2次調査範囲
（18,740㎡）
第3次調査範囲
（13,400㎡）
0
50m
(1/2,000)

図５　第１～３次調査範囲

の準備に当たった。24日からは南区の表土剝ぎを重機により開始し，表土剝ぎの終了した区域から，順次，人力による遺構精査を開始した。

５月以降，南区の調査は順調に進み，７月上旬には調査の条件が整った北区の調査にも着手することになった。竹林の伐採後，中旬には北区の表土剝ぎを重機により開始するとともに，人力による遺構精査も並行して行った。

８月上旬には，北区に設置していた調査事務所と休憩所を南に隣接する鍛冶屋遺跡の過年度調査終了箇所に移設し，北区の表土剝ぎの全面展開に備えた。

８月21日からは，調査が終了した富岡町本町西Ａ遺跡から調査員４名が加わって調査員９名体制となり，作業員も増員した。９月20日には北区の表土剝ぎが終了した。

９月下旬以降は，調査が南区及び北区の全面に展開することになり，楢葉町内及び富岡町内で同時並行して進められていた他の遺跡の調査終了を受けて，順次，調査員及び作業員の増員が図られ，11月上旬以降は調査員25名，作業員約180名での大所帯で調査に当たった。

調査が進捗するにしたがい，遺跡全体で竪穴住居跡100軒以上，土坑1,000基以上が検出され，北区では方形の区画溝とともに4,000基を超える小穴が検出された。これらの遺構は高密度で分布していたため，前述したように調査員・作業員の増員を図ってこれに対応し，さらに，遺構実測作業の省力化を図るために，南区の一部に関しては，業者委託の空中写真測量を実施した。

しかしながら，このような手段を用いても，当初の調査予定範囲の全てを年内に終了させることが困難な状況となったことから，日本道路公団東北支社いわき工事事務所・福島県教育委員会・財団法人福島県文化センターの３者により，11月22日に常磐自動車道遺跡調査連絡調整会議が催された。この会議において，平成12年度の調査は，北区の上位遺構(中世以降の遺構)と，家屋移転が済んでいない部分を除いた南区について終了させることとなり，北区の下位遺構(縄文・平安時代の遺構)と南区の残り部分については，平成13年度に調査することになった。

12月上旬から下旬にかけては，連日，多くの調査員と作業員が，調査範囲全域に展開することとなったが，12月20日には，ラジオコントロールヘリコプター搭載カメラにより空中写真撮影を行い，翌21日には工事側に南区を引き渡し，22日までには北区の遺構養生と器材収納を終了した。最終的な２次調査面積は，18,740㎡である。

なお，９月23日には現地説明会を開催して遺跡を一般に公開したところ，県内外から約200人の見学者があった。10月11日には，方形に区画する溝跡と掘立柱建物跡について，国立歴史民俗博物館の小野正敏助教授より調査指導を得た。（能登谷）

２　平成13年度の調査経過

平成13年度の３次調査は，前年度未了だった北区の縄文時代と平安時代の遺構範囲と，町道部分(中島―高田線・山道―滝口線・大倉平―宮田線)，及び南区の家屋跡地とその周辺の13,400㎡を対象とした。調査は，年度が明けた４月17日より開始し，重機により，北区では，２次調査で未了だった井戸跡の断ち割り，南区では，民家宅脇の表土剝ぎに着手した。また，調査開始と同時に，作業

員の雇用説明会を楢葉町で開催し，健康状態・通勤方法などの諮問面接も行った。作業員を導入した本格的な調査は４月24日から開始し，調査員10名，作業員60余名の体制を，北区と南区の２つの調査区に分けて実施することとした。

連休明けの５月上旬には，北区では井戸跡の調査や検出した遺構の調査，南区では民家宅脇の表土剝ぎが終了し，遺構検出作業が順調に進んだ。中旬には南北両調査区で，１日の調査遺構数として，竪穴住居跡５～６軒，土坑10数基が同時進行で調査する状態となった。下旬には，南区の民家宅脇で検出した大半の遺構の調査が終了し，北区では井戸跡の調査も終え，調査区内をＬ字状に大きく巡る溝跡の北側周辺まで進捗した。

６月に入ると，南区民家脇の調査が完全に終了し，６月12日には，福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団立ち会いの下，日本道路公団東北支社いわき工事事務所に対し，調査区の引き渡しを行った。６月中旬から下旬にかけては，梅雨前線による降雨のため作業が進展しなかったが，南区に従事していた調査員や作業員が北区に合流し，連日，竪穴住居跡や土坑などの多くの遺構の調査が間断なく行われた。竪穴住居跡は，複式炉を有する縄文時代中期後葉から末にかけてのものであったが，遺構最上位には見慣れない黒色土の投棄土が認められ，この種の堆積土について，その起因や投棄現象の推定のため土壌の採取が行われた。また，２次調査で確認された掘立柱建物跡の中の数棟は，寛永通寶古を出土する土坑を破壊して建てられていたことが判明し，本遺跡が近世にも営まれていたことが確実となった。

７月上旬には梅雨も明け，北区の調査は，今年度予定範囲の半分ほどが終了し，中旬から下旬にかけては，連日の猛暑の中，多くの遺構の調査が繰り返し実施された。調査区内は，さながら月面クレーターのごとくであり，月が替わった８月２日には，上空からの調査区全体の写真撮影を行った。この時点に至っても，南区の町道部分や民家跡地では調査予定が立たなかったが，ようやく盆明けの週より調査が実施できる運びとなった。盆明けの８月23日からは，町道中島―高田線及び中島田中線・山道―滝口線の交差部の表土剝ぎを開始し，下旬からは，この範囲の遺構検出作業に移行した。

９月に入ると民家跡地の調査も開始され，調査員・作業員とも，調査開始時と同様に，北区と南区の２つに分かれた。９月下旬には，北区の調査は，新たに確認された井戸跡の断ち割りを残すのみとなり，調査の主体を南区に移行すると共に，調査収束に向けての器材の片付け，撤収作業に追われた。また，９月17・18日には，複式炉を構成する礫の採取地点推定のため，福島大学真鍋健一教授を招聘し，現地指導及び調査を実施した。

９月末には，今年度予定の全ての調査が終了し，器材搬出・連絡所撤去等を行い，10月２日に，北区及び南区の調査区について，福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団から日本道路公団東北支社いわき工事事務所に引き渡しが行われた。

以上のように，馬場前遺跡の３次調査は，４月24日から始まり，10月４日をもって終了した。雨天日などの作業中止日を除く作業の延べ日数は70日であり，本遺跡が縄文時代中期と奈良・平安時

代及び中・近世の大きく５時代の集落跡からなる複合遺跡であることが判明した。

検出した遺構は，竪穴住居跡39軒，竪穴状遺構１基，掘立柱建物跡５棟，土坑319基，井戸跡12基，溝跡４条，鍛冶炉１基，小穴225基である。出土した遺物の大半は，縄文時代中期末に比定できる縄文土器片と石器であり，この他，平安時代の土師器片や須恵器片，近世の陶磁器片，銭貨，鉄滓などである。（吉　田）

第５節　調査方法と報告書作成

馬場前遺跡の調査においては，平成10年度に実施した１次調査の時点で，国土座標値を基準にした５m四方のグリッドを設定している。グリッドの基準ラインの方向は真北であり，２・３次調査でも，これを踏襲している。

図６に馬場前遺跡のグリッド配置と調査範囲を示した。グリッドの個々の番号は，東西方向をアルファベット，南北方向を算用数字とし，これら２種を組み合わせて，O33グリッド，Z42グリッド等とした。ただ，遺跡範囲が広いため，東西方向に関しては，アルファベット26文字の頭にさらにAのアルファベットを付し，ＡＡ・ＡＢ等と組み合わせて呼んだ部分もある。グリッドの原点であるＡ１グリッドは調査区外の北西にあり，Ａ１グリッド北西角杭の国土座標値は，座標第Ⅸ系のＸ：＋141,400.000m，Ｙ：＋102,300.000mである。

また，調査範囲が広いため，２次調査時に調査区内を東西に横切る町道(中島一高田線)により調査区を設定した。町道より南側の調査区は南区，北側の調査区は北区と称している。

実際の調査では，各グリッドの北西角の杭に表示したグリッド番号を使用して，遺構の位置や遺物の出土場所を把握した。また，遺構の測量の際には，５mの方眼をさらに１m四方に分割した実測基準線番号を設定した。実測基準線番号は，各グリッドの北西端部を原点として，ここから東側と南側に行くごとにＥ１～３，Ｓ１～３とし，それぞれのグリッド番号と組み合わせて使用した。たとえば，R27－Ｅ２・Ｓ３は，R27グリッド北西角の杭の位置から東に２m，南に３m離れた場所を示している。

ただ，この実測基準線番号は，３次調査で初めて採用した方法であり，２次調査時までは，設定したグリッドの国土座標値を一部利用して示している。２次調査時まで使用した方法は，国土座標値を使用しているため，遺構の絶対的な位置は把握できるが，多数の遺構が重複している場合では，遺構同士の位置関係が把握できにくい難点がある。これに対し，３次調査でのそれは，遺構同士の位置関係をグリッド番号で容易に把握できる利点がある。本遺跡は，特に遺構の重複関係が顕著であったため，実測基準線番号は３次調査の時点でグリッド番号と組み合わせたものとし，報告の段階でもこれを採用している。

実際の発掘調査に際しては，調査区内の表土を重機を使用して除去し，その後，遺構の検出作業や遺構の掘り込みを行った。遺構の掘り込みに当たっては，原則として竪穴住居跡などの比較的大

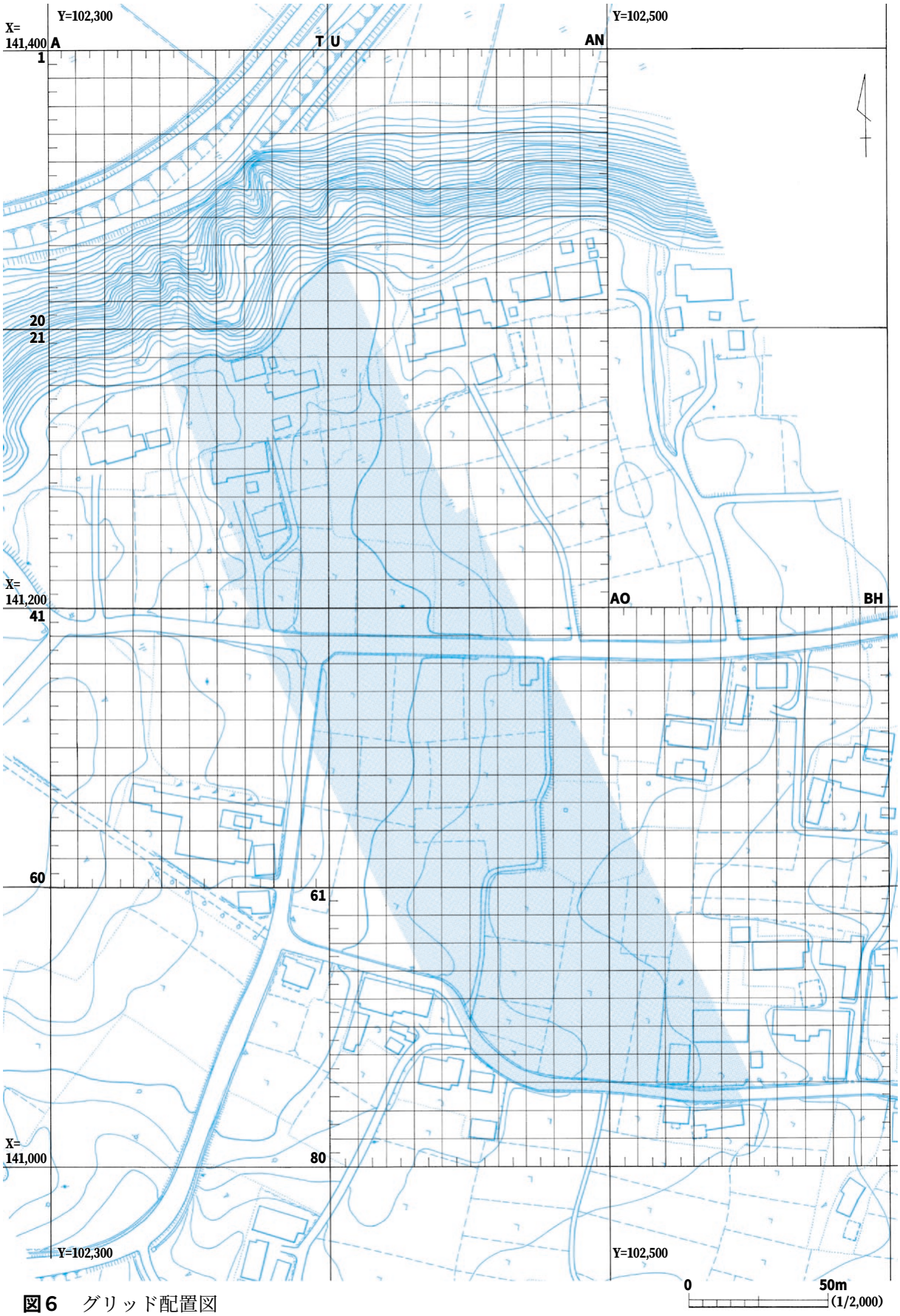

Y=102,300
Y=102,500
X=
141,400
A
T
U
AN
1
20
21
X=
141,200
AO
BH
41
60
61
X=
141,000
80
Y=102,300
Y=102,500
0
50m
(1/2,000)

図６　グリッド配置図

きな遺構は４分割法，土坑等の小さな遺構は２分割法を採用し，掘立柱建物跡の柱穴や小穴，焼土遺構などは半截し，その断面の状態と堆積土を観察した。また，複式炉やカマドに関しては，適宜，土層観察用土手を設定して堆積土の状況を把握し，さらに断ち割りによって構築状態を確認した。

遺構番号は，既調査時の遺構番号からの連番とし，遺構の種類ごとに重複しないよう留意した。また，一つの遺構が複数の調査にまたがる場合，前回の遺構番号をそのまま踏襲した。この他，小穴の遺構番号は，検出できたグリッドごとに１番から付け，グリッド番号と組み合わせ，R14グリッドＰ１等と呼称した。

堆積土については，遺構外堆積土をＬとローマ数字の組み合わせによりＬⅠ・ＬⅡ等とし，遺構内はℓと算用数字の組み合わせによりℓ１・ℓ２等と表記した。さらに，基本的に同一層ではあるが，層中に含まれる挟雑物等(炭化材・炭化物粒・焼土粒など)の割合や度合いにより分層される堆積土については，小文字のアルファベットを付加して使用した。

遺構内堆積土の状態については，自然流入土か人為堆積土かの識別を，次章で後述する基本土層ＬⅣに起因する黄褐色土の多寡をもって判断した。これは，本遺跡のように同一時間帯に形成され，かつ多くの遺構が集中して認められた場合，遺構掘削時の排土処理・排土の移動について，当時の人々がどう対処したのかを推定する重要な視点と考えられる。

本遺跡の遺構の場合，たとえ上位層から掘り込んだ遺構であっても，遺構底面はＬⅣまで達し，これを掘削して構築している。このため，掘削時に生じた排土は，原則的に黄褐色土を含んだものとなる。この黄褐色土を鍵層とし，堆積土中に黄褐色土が不規則にかつ撹はんされたような状態で観察できたものを人為堆積土とみなし，“混土”と言う言葉でこれを示した。実際は，褐色土や暗褐色土中に，黄褐色土が混じる状態が明確に認められ，遺構を埋めている事例が多々見られた。また，色調が異なる２種類以上の堆積土が同一層に認められる場合にも，混土という言葉を使用し，人為堆積土と判断した。

この他，基本土層には認められない色調や土質の堆積土，あるいは掘形等に認められる堆積土についても，人為堆積土と判断した。ただ，これを厳密に実施したのは３次調査からであり，２次調査での一部の遺構に関しては，報告書作成時に，遺構内堆積土をリバーサル写真で確認し，自然堆積土と人為堆積土の識別を行った。

遺物は，基本的に遺構名あるいはグリッド番号と層位を明記して取り上げた。遺構からまとまって出土した遺物については，記録後，１番から始まる遺物番号を振って，取り上げている。また，遺構内，特に複式炉の堆積土の一部を採取し，分析対象の資料とした。

遺構の記録は，原則として1/20縮尺で図化したが，小型の土坑や詳細な遺物出土状況図，複式炉・カマド等は1/10縮尺，掘立柱建物跡や溝跡，小穴等は1/40縮尺を採用したものもある。また，遺跡基底面の地形図は1/200縮尺で測量した。記録写真は，35㎜モノクロームフィルムとカラー・リバーサルフィルムを用い，同一被写体を同一方向・同一コマ数で撮影した。この他，竪穴住居跡や掘立柱建物跡の全景，複式炉やカマド等の全景では，一部６×4.5㎝判のモノクロームフィルム

とカラー・リバーサルフィルムを併用して撮影した遺構もある。さらに，セスナ機やラジオコントロールヘリコプターにより空中からの写真撮影を行い，遺跡の全体像や遺構の集中状態，遺跡周辺の地形が把握できるようにした。

次に，報告書の作成経過について概述する。今回の馬場前遺跡の報告書は，平成12年度に行われた２次調査の内，北区に関する遺構と遺物，及び３次調査の調査成果を合わせた体裁をとっている。これは，２次調査の北区で確認された多くの遺構が，３次調査の遺構と重複し，かつ調査範囲がほぼ同一であることと，遺構の時期が同時期であったためである。このため，２次調査の成果は，平成12年度の時点で南区のみが単独で公表することとなり，北区に関しては平成13年度に，２次調査と３次調査をまとめて実施することとなった。

本格的な報告書作成は，平成13年度４月より行われ，最初に２次調査で確認された遺構の配置図作成と，２次調査で出土した遺物を確認し，報告書掲載遺物の選択を実施した。また，遺物の実測作業や遺構写真の整理作業にも着手した。

３次調査が終了した10月からは，４月に作成した遺構配置図に３次調査での遺構を追加する作業と，遺構図のトレース用原稿作成を開始したが，２次調査の遺構については，前年度の各調査担当者にそれを依頼した。

11月には，２次調査遺構分のトレース原稿がそろったが，新しい遺構により破壊された範囲が平面図に示されていなかったものや，複式炉埋設土器の掘形内堆積土を埋設土器の造り替えと判断しているもの，逆に，断面図では炉の重複がありながらも，平面図には図化されていなかったもの，堆積土中に認められた杭等の痕跡を撹乱と認定したり，焼土塊の集積を焼土遺構として判断したりするものなど，不備な点が若干認められた。さらに，前述した遺構内堆積土の状況では，自然堆積土と人為堆積土の識別が明確ではなく，加えて一部の土坑では，20～40数層に分層された遺構内堆積土が，土層注記の土色ではほぼ同一であり，数種類の堆積土にしか識別できないと言う事例もあった。このため，３次調査の遺構と密接に関係する縄文時代の遺構については，再度写真で見直しを行い，特に断面の状態については逐一確認し，部分的に修正した。ただ，掘立柱建物跡や杭列についてはこのような問題がなかったため，基本的に２次調査のまま報告している。但し，２次調査担当者から変更を要請された柱穴番号については，写真・図面・遺物のネーミングを修正した。

このような状況であったが，12月には遺物の実測がほぼ終了し，遺構のトレース作業に移行した。年が明けた１月から２月にかけては，遺構・遺物のトレース作業と，遺構の計測表，遺構写真の選択，遺物写真の撮影等の作業が同時進行で行われた。３月になり，ようやく原稿・挿図・写真が一揃い出来上がり，編集・校閲を経て，年度が明けた平成14年度に報告書の刊行に至った。

この他，出土した遺物や遺構・遺物の図面，写真等の整理を，平成13年度末から平成14年度当初に実施した。報告書に掲載した遺物については，挿図ごとに整理箱に収納し，遺物番号を記入した。また，各種図面や写真も，挿図番号や写真番号を明記し，台帳の作成を行った。　　（吉　田）

第２章　遺構の分布と基本土層

平成10年度及び12・13年度の延べ３カ年にわたる調査において，馬場前遺跡で確認された遺構は，竪穴住居跡165軒，竪穴状遺構２基，掘立柱建物跡75棟，柱列跡38基，土坑1,530基，溝跡19条，井戸跡21基，集石遺構１基，焼土遺構２基，鍛冶遺構５基，埋甕９基，小穴6,804基である。これらの年度ごとの遺構数は，表３に示した。また，２次調査の北区及び３次調査で出土した遺物は，縄文土器片約21,000点，土師器片約2,700点，須恵器片128点，陶磁器片643点，石器約2,400点であり，この他，土製品４点，土偶１点，鉄・青銅製品９点，銭貨49点，羽口片６点，通風管片２点，るつぼ片１点，瓦片１点，鉄滓78点や炭化物粒，炭化材がある。

３カ年にわたる調査により本遺跡で確認された遺構の分布略図を，図７・８に示した。また，遺構配置図は付図として提示した。本遺跡を概観するため，以下，検出した遺構の分布と基本土層について概述する。

本遺跡で確認された遺構の時代は，大きく縄文時代と奈良～平安時代，中・近世の３つに分かれる。縄文時代の遺構は，縄文時代中期後葉から末葉を主体とし，大木９式期から10式期にかけての複式炉を有する竪穴住居跡が圧倒的に多く，111軒を数える。この他，大木８ｂ式期と思われる竪穴住居跡が６軒(20・71・114・138ａ・138ｂ・150号住居跡；ＳＩ20/１次調査･ＳＩ71/２次調査南区)，同後期初頭に属する竪穴住居跡２軒(56ａ・104号住居跡；ＳＩ56ａ/２次調査南区)も確認されている。また，明確な時期は不明であるが，その特徴から縄文時代早期もしくは前期と推測できるものが２軒(22・165号住居跡；ＳＩ22/１次調査)ある。

複式炉を持つ住居跡は，調査区内を南東から北東方向にかけて弧状に分布し，北区南側では部分的に住居跡がない範囲が認められる。同様に，南区の南西側も住居跡が認められない範囲が見られる。これは，当該期において，北区から南区の北側にかけての範囲が，本遺跡のおおむねの集落範囲であり，集落範囲でも周辺に近い部分に竪穴住居跡が構築され，その内側(東側)に広場的空間

表３　調査次毎遺構数及び主たる遺物出土点数一覧　(複数次にまたがる遺構は，最初の調査次でカウントした)

遺構	１次調査	２次調査（北区）	２次調査（南区）	３次調査（北区）	３次調査（南区）	合　計
ＳＩ	30	34	59	35	7	165
ＳＢ	1	63	6	0	5	75
ＳＡ	6	25	7	0	0	38
ＳＸ	0	0	1	1	0	2
ＳＤ	4	10	3	0	2	19
ＳＥ	3	0	5	8	5	21
ＳＫ	118	735	350	238	89	1,530
ＳＳ	0	1	0	0	0	1
ＳＧ	0	1	0	1	0	2
ＳＷｋ	0	4	0	0	1	5
ＳＭ	2	2	4	0	1	9
ＧＰ	485	3,788	2,206	0	325	6,804
合計	649	4,663	2,641	283	435	8,671

	２次調査（北区）	３次調査	計
縄文土器	12,377	8,635	21,012
土師器	2,220	518	2,738
須恵器	92	36	128
陶磁器	474	169	643
石　器	968	1,442	2,410
計	16,131	10,800	26,931

が存在していたことが推測される。

これ以外の縄文時代の竪穴住居跡の分布は，確認できた軒数が少なく明確ではない。ただ，大木８ｂ式期に比定できる５軒の竪穴住居跡は，北西から南南西方向にかけて弧状を呈するように分布し，前述の複式炉を有する時期の弧状とは，その向きが異なっている点が指摘できる。

この他，縄文時代に属する遺構には，土坑と埋甕(埋設土器)がある。土坑は，同図中に黒点で示したように調査区内の全域で認められ，巨視的に見て，北区でも北西側の竪穴住居跡の周囲は，異常なほどの高密度で分布している。

多くの土坑は，遺構内からの出土遺物が少なく詳細な時期は不明であるが，貯蔵穴と思われる土坑の平面形は大きく２種あり，大木８ａ～８ｂ式期に比定できるものはいわゆるフラスコ形で，壁が内傾するものが多く，大木９～10式期かけてと思われるものは，ビーカー形(円筒形)を呈するものが多い。

埋甕(埋設土器)は確認数が少なく，分布の傾向は不明であるが，竪穴住居跡に隣接してあるものや，住居内の床面から確認されたものが多い傾向がみられる。前述の土坑と合わせても，墓域と思われる明確な範囲は，今回の調査区内では確認できなかった。

次の奈良～平安時代の遺構には，竪穴住居跡と土坑がある。住居跡は北区の北側と北区の南側から南区にかけて，散漫に分布している。ただ，北区の住居跡の時期は，平安時代の９世紀代を主体とするが，南区では８世紀代に比定できる住居跡が多く存在している。本遺跡の南側に隣接する鍛冶屋遺跡は平安時代９世紀を主体とする集落跡であるため，ちょうど南区の北側半分程を挟んで，これの南北側に９世紀代の住居跡が分布していることとなる。

中・近世の遺構には，掘立柱建物跡・柱列跡・溝跡・土坑・井戸跡がある。遺構からの出土遺物が少なく細かな時期設定は困難であるが，おおよそ，北区内をＬ字状に大きく区画する溝跡(12号溝跡)の南側には，中世に比定される掘立柱建物跡が多く見られ，この範囲以外の遺構は，大部分が近世の遺構であると推測している。特に，前述した12号溝跡や，これと平行して北区を南北方向に走る溝跡は，17世紀前半から19世紀にかけてのものであり，この溝跡の方向と掘立柱建物跡の桁行方向がおおむね一致するものが多い。掘立柱建物跡の分布を見ると，12号溝跡の北側と南側に分布の集中が見られ，特に北側では，同一場所で何回かの建て替えが認められるような状態で確認されている。また，南区に見られる細長い溝跡も明確な時期決定はできないが，形状から道跡あるいは字境の溝の可能性が高いものと推測される。

この他，付図に示したように，多数の小穴が両調査区内から確認されている。これの分布を見ると，調査区全域に認められているため傾向の把握はできないが，12号溝跡の北側と東側では，溝跡に沿い幅４～５ｍ程の部分で小穴が少ないことが見て取れる。これは，この範囲に，おそらく溝に沿った土塁状の高まりがあったためと推察している。

次に，本遺跡の基本土層について記述する。本遺跡では，大きくＬⅠ～ＬⅦまでの７層の基本土層が確認されている。

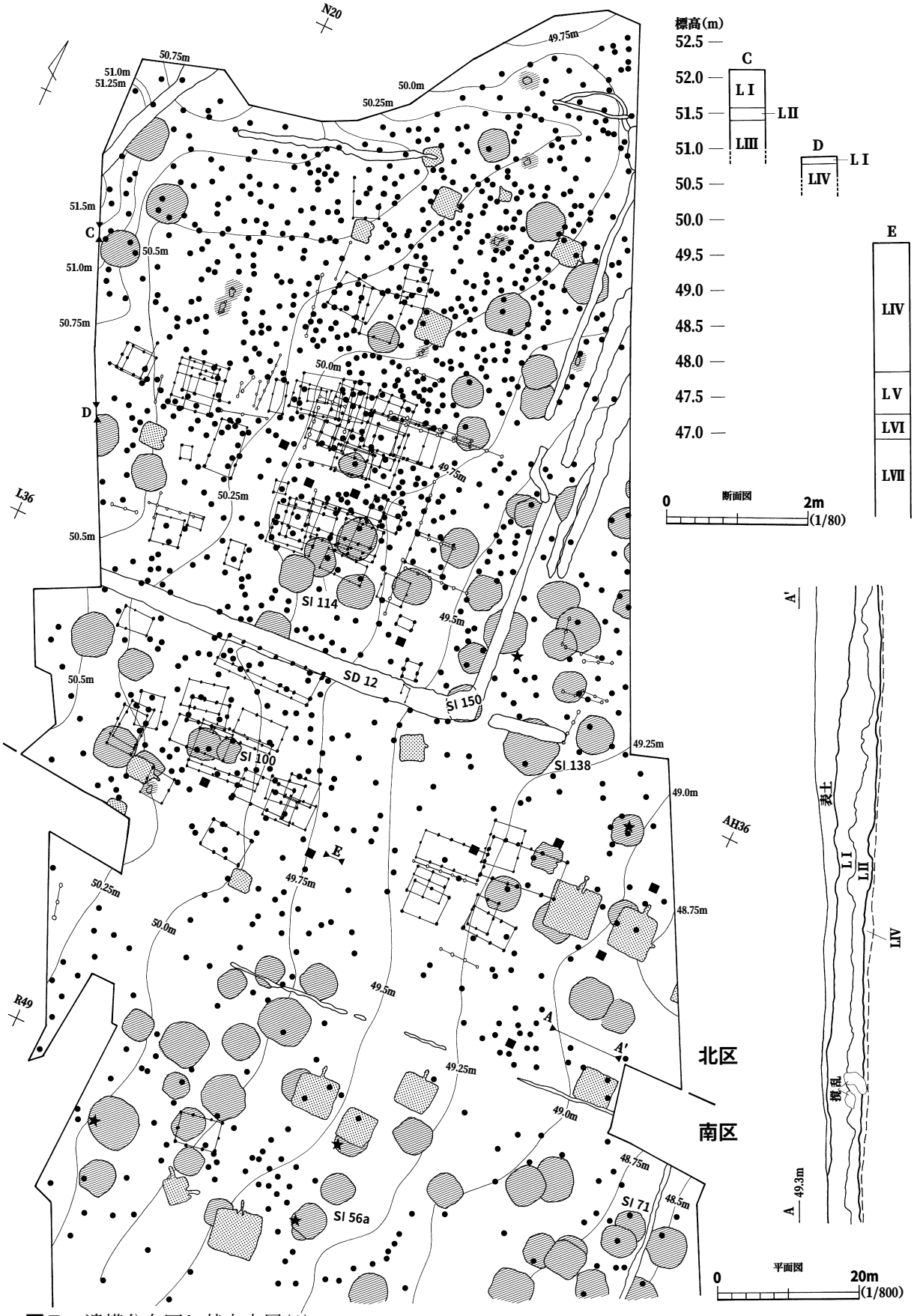


図７　遺構分布図と基本土層(1)

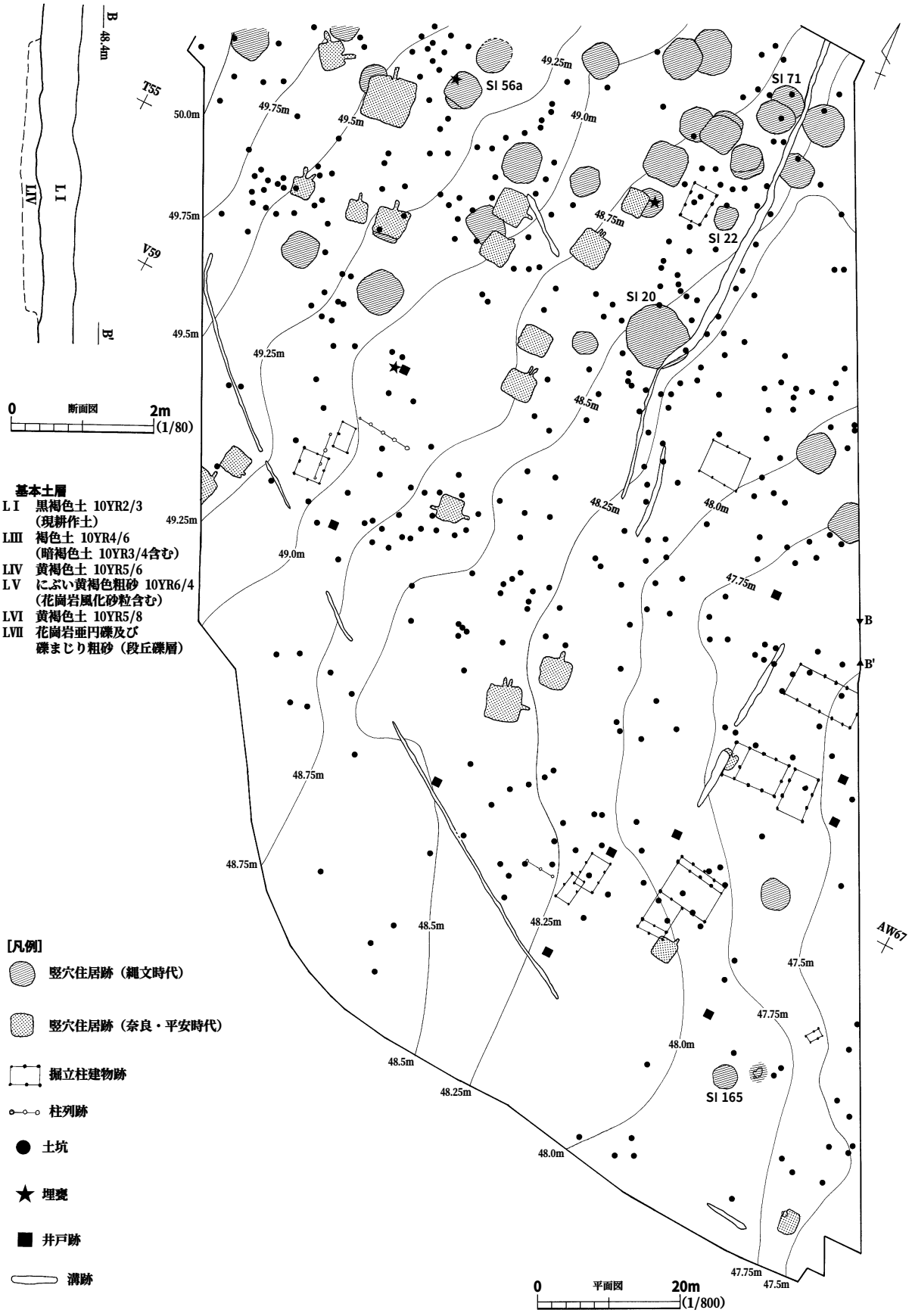


図8　遺構分布図と基本土層(2)

ＬⅠは現表土であり，調査区全域で普遍的に認められる黒褐色土である。層厚は20～50㎝程であり，最も厚い部分では１ｍ弱を測る。調査区の大部分の範囲では，本層直下がＬⅣとなり，各種遺構もＬⅣ上面から検出されたものが多い。これは，本調査区が調査以前は畑地であったため，耕作により下位層をすき込み，本層が形成されたものと考えられる。層中からは，縄文土器片・土師器片・須恵器片・陶磁器片・石器などが出土している。

ＬⅡは，試掘調査時点で確認された明黒褐色土であるが，調査区内では確認できなかった。おそらく，試掘調査時にＬⅠ内を分層したためと推測している。ただ，奈良・平安時代の遺構内には，わずかながら本層と思われる黒褐色土が認められ，中・近世に比定できる遺構では，基本的に本層が堆積しているものと判断している。したがって，本層は，奈良時代以降近世に至るまでの旧表土と推測され，前述したように現表土の耕作により欠層したものと判断している。

ＬⅢは，層厚10～30㎝を測る褐色土もしくは暗褐色土である。北区と南区を分ける町道直下や，１次調査では北区の北端において，わずかに確認できた。縄文時代に比定できる遺構は，基本的に本層が堆積し，奈良・平安時代の遺構にもわずかながら認められる。縄文時代に属する遺構では，明確な遺構掘り込み面が把握できなかったが，おそらく本層が縄文時代の表土であり，当該期の遺構は，本層上面から掘り込まれた可能性が高いものと推測している。

ＬⅣは，その上面が本遺跡の遺跡基底面を構成している。黄褐色土を呈する風化火山灰質土壌であり，層厚は２～2.5m程を測る。ただ，北区の北端部周辺では本層の層厚が薄く，80～100㎝程となっている部分も認められた。大部分の遺構は本層上面から検出され，本層を掘削して構築されている。このため，遺構掘削時に生じた排土は，必然的に本層であり，前章第５節で述べたように，遺構内堆積土の要因を判断する鍵層となり得たわけである。

ＬⅤは，前述の北区北端部のＬⅣの層厚が薄い部分で確認された堆積土である。にぶい黄褐色粗砂層で，風化した花崗岩の真砂を主体とし，花崗岩の小礫を若干含んでいる。井戸跡の断ち割りでは，ＬⅣとＬⅥとの間に薄層として，部分的に堆積していることが確認された。層厚は0.5～１ｍを測る。北区北端部の遺構では，遺構内堆積土に本層を起因とする砂礫が認められたものもある。これは，これらの遺構が掘削された場所が，前述したＬⅣの薄い部分に該当し，排土中に本層の砂礫が紛れ込んだためと判断している。

ＬⅥは，黄褐色を呈するシルト質の風化火山灰質土壌である。ＬⅣより粘性がある。堆積土のなかには橙色を呈するパミスが微量含まれている。層厚は0.3～0.4m程である。ＬⅥはその下位のＬⅦを不整合に覆っている。

ＬⅦは，井戸跡の断ち割りで確認できた堆積土であり，花崗岩類の亜円礫もしくは円礫混じりの粗粒砂からなる段丘堆積物である。亜円礫のなかには長径30㎝を超える巨礫も含まれている。層厚は５ｍ程である。井戸跡は，基本的に本層まで掘り込み，形成されている。本層直下では湧水が認められた。この湧水層より下位には，半固結のシルト岩を主体とする仙台層群(大年寺層)が基盤岩として存在している。　（吉　田）

第３章　南区の遺構と遺物

３次調査の南区では，７軒の竪穴住居跡，５棟の掘立柱建物跡，３条の溝跡，５基の井戸跡，そして鍛冶炉，埋甕がそれぞれ１基，土坑91基，小穴322基が検出された。本章では，これらの遺構と遺物について報告するが，小穴と遺構外出土遺物に関しては，北区のものと合わせて第２分冊（本文編２）第４章第７・８節で報告する。

第１節　竪 穴 住 居 跡

今回南区で検出された竪穴住居跡は，縄文時代に比定されるもの４軒，奈良～平安時代のもの４軒である。このうち，奈良～平安時代に属する146号住居跡と147号住居跡は比較的近接する。これ以外の竪穴住居跡は，南区全体に散在的に分布している。

69 号 住 居 跡　ＳＩ69 （図９・10，写真25・26）

位置・検出面　南区北部の平坦面，Ｘ・Ｙ44グリッドに位置する竪穴住居跡である。住居跡の南半部を２次調査，北半部を３次調査で実施した。２次調査部分に関しては，すでに『常磐自動車道遺跡調査報告29』において報告しているが，２次調査と３次調査の成果をまとめて報告する。本住居跡の西側には298・1568号土坑が隣接し，床面からは900号土坑が検出された。本住居跡の検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色土で埋まった半円形の輪郭を検出した。

重複　床面南東部で900号土坑と重複し，本遺構はそれより新しい。また，住居跡の北半部は，撹乱により壊されている。

堆積土　ℓ１は炭化物粒を多く含む黒褐色土である。ℓ２・３は，基本土層のＬⅢに類似した褐色系の土を基調として，ＬⅣである黄褐色土を塊状に含んでいる。これらℓ１～３は，人為堆積土とみられる。ℓ４～６は，壁際から流れ込んだような堆積状況が観察されることから，自然堆積土と判断した。

平面形・規模　住居跡の北半分を壊されているが，本来は不整円形を呈していたと推察される。現況で確認できる長軸方向は，N76 ℃Wである。規模は東西長で5.2m，南北長はＰ８北端から南壁上端までの遺存長で4.2mである。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。

周壁　床面から70～90 ℃の急な角度で立ち上がり，遺存壁高は15～21㎝を測る。

周溝　遺存する西壁に沿って部分的に溝が確認された。幅は18㎝，床面からの深さは８㎝を測る。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ１とＰ２のほぼ中間に構築されている。円形状の土器埋設部に方

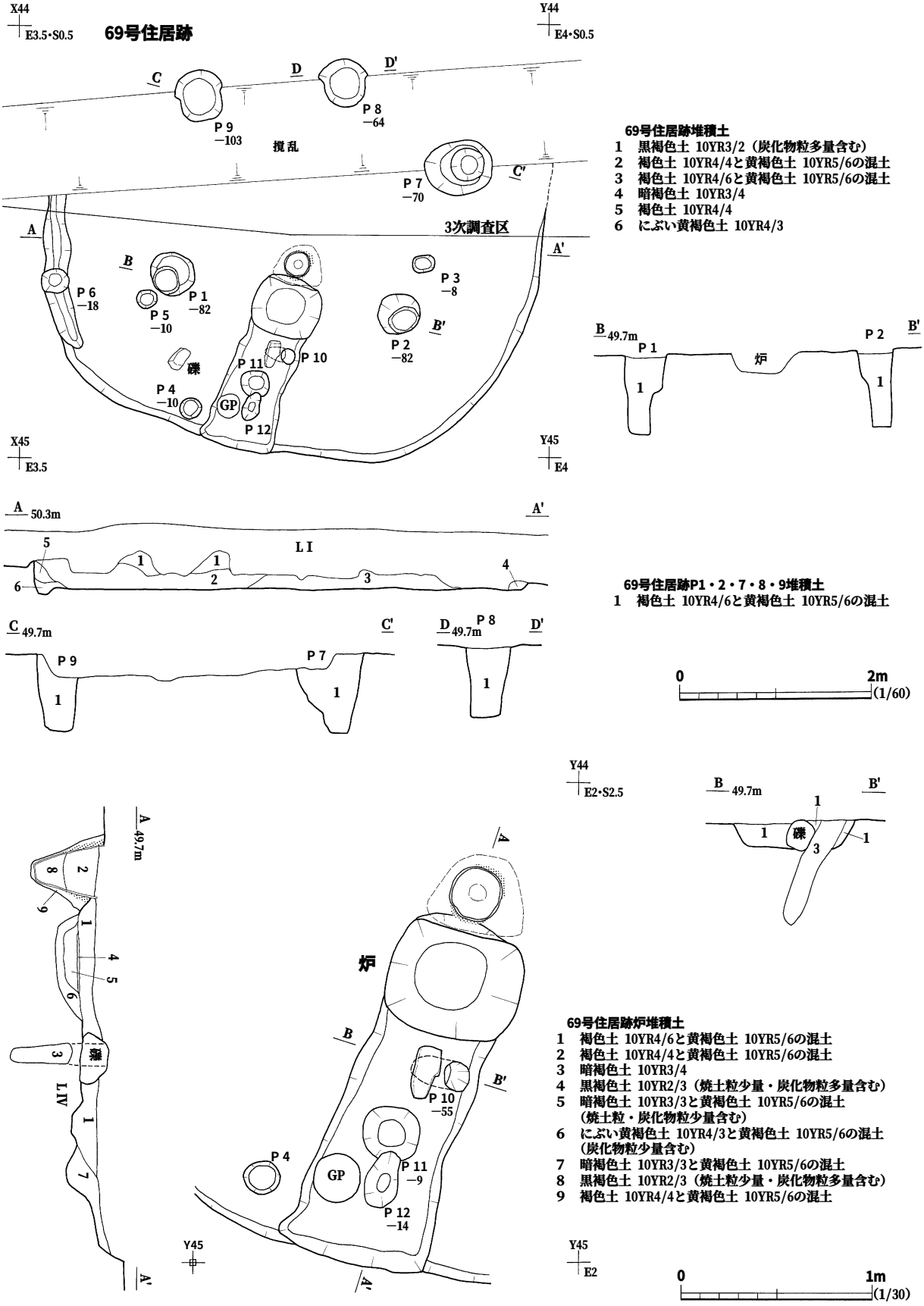

X44
E3.5・S0.5
69号住居跡
Y44
E4・S0.5
C
D
D'
P 8
−64
P 9
−103
攪乱
C'
P 7
−70
3次調査区
A
A'
B
P 6
−18
P 1
−82
P 5
−10
P 3
−8
B'
P 2
−82
礫
P 11
P 10
P 4
−10
GP
P 12
X45
E3.5
Y45
E4
69号住居跡堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒多量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　暗褐色土 10YR3/4
5　褐色土 10YR4/4
6　にぶい黄褐色土 10YR4/3
B 49.7m
P 1
炉
P 2
B'
1
1
A 50.3m
A'
5
LI
1
1
2
3
4
6
C 49.7m
C'
D 49.7m
P 8
D'
P 9
P 7
1
1
1
69号住居跡P1・2・7・8・9堆積土
1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
0
2m
(1/60)
Y44
E2・S2.5
B 49.7m
B'
1
1
礫
3
1
A 49.7m
8
2
9
1
4
5
6
3
礫
LIV
1
7
炉
B
B'
P 10
−55
P 4
GP
P 11
−9
P 12
−14
Y45
A'
69号住居跡炉堆積土
1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　暗褐色土 10YR3/4
4　黒褐色土 10YR2/3（焼土粒少量・炭化物粒多量含む）
5　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土粒・炭化物粒少量含む）
6　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）
7　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
8　黒褐色土 10YR2/3（焼土粒少量・炭化物粒多量含む）
9　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
Y45
E2
0
1m
(1/30)

図９　69号住居跡

形状の石組部が続く形態を呈するが，石組部の礫は全て失われている。さらに，長方形の前庭部が石組部に続く形態を呈している。前庭部の南端は周壁に接している。

(規模)全長215㎝，最大幅71㎝を測る。複式炉とＰ８を通る南北の中央軸線は，Ｎ17°Ｅである。

(堆積土)ℓ１・２・５～７は，基本土層のＬⅣである黄褐色土の塊を多く含むことから，人為堆積土と判断した。ℓ３は後述するＰ10内の堆積土で，しまりのない暗褐色土が堆積していた。ℓ４は炭化物粒を含む黒褐色土で，ℓ４上面には火熱の痕跡が認められた。ℓ８は複式炉機能時の堆積土と思われる。また，ℓ９は掘形内堆積土である。したがって，本炉は，機能時にℓ８が堆積した後，ℓ３・４を除く堆積土により，埋められた可能性が高いものと判断している。

(土器埋設部)口径約30㎝，器高40㎝の炉体土器が埋設されていた。炉体土器周辺の土は，強く焼土化している。

(石組部)石組部の礫はすべて取り外され，方形の掘形のみが遺存していた。石組部の東西長は70㎝，南北長は68㎝，床面から底面までの深さは25㎝を測る。掘形の壁や底面は平滑に整えられ，礫を抜き取ったようなくぼみは認められなかった。したがって，礫を除去した後に掘形を掘り直し，壁面と底面を再整形したものと推察される。また，ℓ４上面には火熱の痕跡が認められたことから，石組部を埋めた後，その上面で火を焚いた可能性が高いと推定している。

(前庭部)平面形は長方形を呈している。規模は東西長71㎝，南北長126㎝を測る。床面から底面までの深さは約10㎝と浅い。底面の北部中央には，30×15㎝の大きさの花崗岩の亜角礫が置かれ，そのすぐ右側にはＰ10がある。この小穴は，東から西方向にかけて斜位に掘削され，底面までの深さは床面より55㎝に達する。小穴の内部には，炭化物粒を含むしまりのない暗褐色土が堆積していたことから，木杭などの有機質のものが充填されていた可能性がある。この小穴は，炉を検出した段階，つまり炉跡堆積土ℓ１上面から確認されている。このことから，図10に埋没過程を示したよう

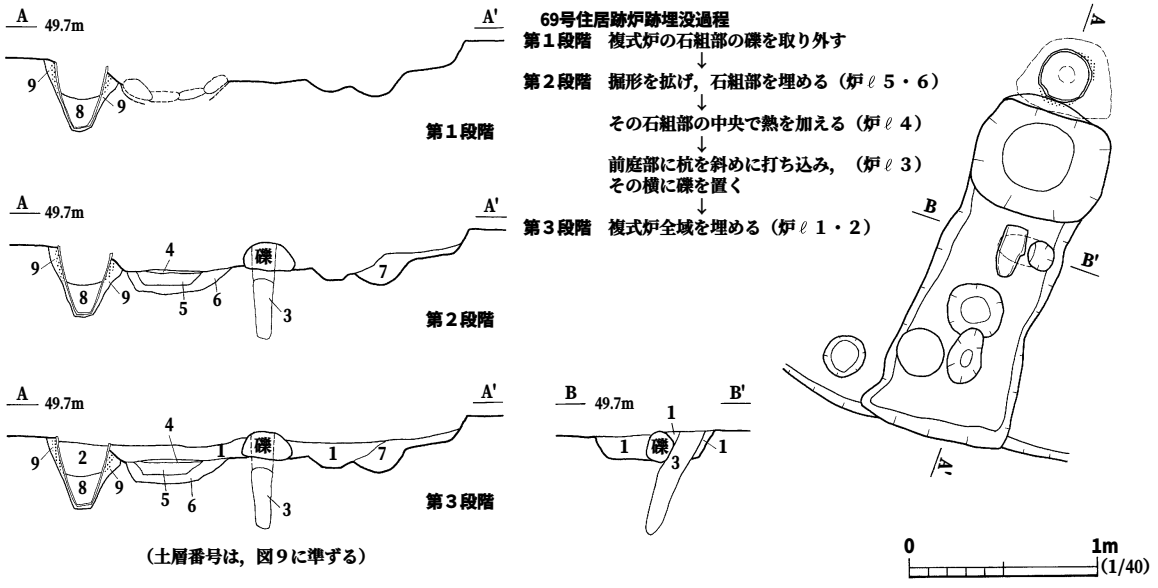


図10　69号住居跡炉

に，炉の廃絶に伴って，前庭部に斜めに木杭を打ち込み，その横に大形礫を置いたものと推察している。そして，その後に杭を打ち込んだ状態のまま，複式炉全体を埋めた可能性が高いものと考えられる。

主柱穴　主柱穴はＰ１・２・７・８・９の５個である。これらの掘形平面形は，不整円形・不整方形を呈する。その規模は，長径43～70㎝，床面からの深さ73～82㎝を測る。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.5m，Ｐ１－Ｐ９間が2.0m，Ｐ８－Ｐ９間が1.5m，Ｐ７－Ｐ８間が1.5m，Ｐ２－Ｐ７間が1.8mで，全体として整った五角形の配置となっている。主柱穴には柱痕はなく，一度柱を抜き取ったあと，人為的に埋めたものと考えられる。

遺物出土状況　本遺構の南半部を調査した２次調査では，床面から縄文土器片17点，周溝の堆積土中から石器11点が出土している。この他に，炉体土器が１点出土している。これらはすでに『常磐自動車道遺跡調査報告29』において報告している。３次調査では遺物は出土していない。

まとめ　本遺構は，複式炉を有する竪穴住居跡である。２次調査で南側，３次調査で北側の調査を行った。上屋構造は５本柱により支えられていたものと推察される。炉跡は廃絶に際して，石組部の礫を取り外した後に再掘削し，さらには杭を打ち込むなどの祭祀的行為を行ったと推察される。同様の行為は86号住居跡でも認められる。本住居跡の所属時期は，炉体土器から判断して縄文時代中期末葉の大木10式期古段階に比定される。　（門　脇）

146 号 住 居 跡　ＳＩ147 （図11，写真117・118）

位置・地形　南区北東部の平坦面，ＡＱ69・70グリッドにまたがって位置する。検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色土で埋まった一辺約4.2mを測る隅丸正方形の輪郭を確認した。

重複　91号建物跡と重複し本住居跡の方が古い。また，北西方向に405号土坑が，北に１号鍛冶遺構が存在している。

堆積土　４層からなり，ℓ１～３は暗褐色土もしくは褐色土を呈する自然流入土である。ℓ４は後述する貼床堆積土である。

平面形・規模　南西と北西の隅が若干丸みを帯びた隅丸正方形で，東西方向が若干長い。長軸方向はN87 ℃Wである。現状での規模は，長軸である東西長4.6m，南北長4.4mを計測する。

床面　床面は，ℓ４とした褐色土と黄褐色土の混土である貼床に形成されている。ほぼ平坦であるが，床面中央部が若干くぼんでいる。

周壁　南・西壁は約80 ℃の急角度で一度立ち上がり，上方は段をなして緩やかに立ち上がっている。北壁と東壁は，80 ℃の角度で直線的な立ち上がりを呈する。壁高は60㎝程である。周溝は確認されなかった。

カマド　北壁のほぼ中央に北へ延びる煙道を検出したが，袖部などは遺存していなかった。

（規模）袖部が遺存していないので不明である。堆積土は住居内堆積土ℓ２・３が確認された。

（燃焼部）煙道口の直下の床面に，50×40㎝の範囲で焼土化した範囲が検出された。焼土化した面の

上面は平坦であり，断ち割りの結果，焼土化は３㎝程の深さまで及んでいた。また，カマド直下からは，Ｐ１とした小穴が確認された。

(煙道)北壁から北へ向かってＬⅣを刳りぬいて構築している。規模は，長さ120㎝，幅20㎝程を測り，煙道底面から天井までの高さは20～25㎝程である。断面の形状は，ほぼ円形を呈する。煙道底面は，吸入口から若干下がり気味で，煙出し穴の直下には浅いくぼみがあり，この部分の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。煙出し穴底面から検出面までの高さは，56㎝を測る。

主柱穴　確認できなかった。

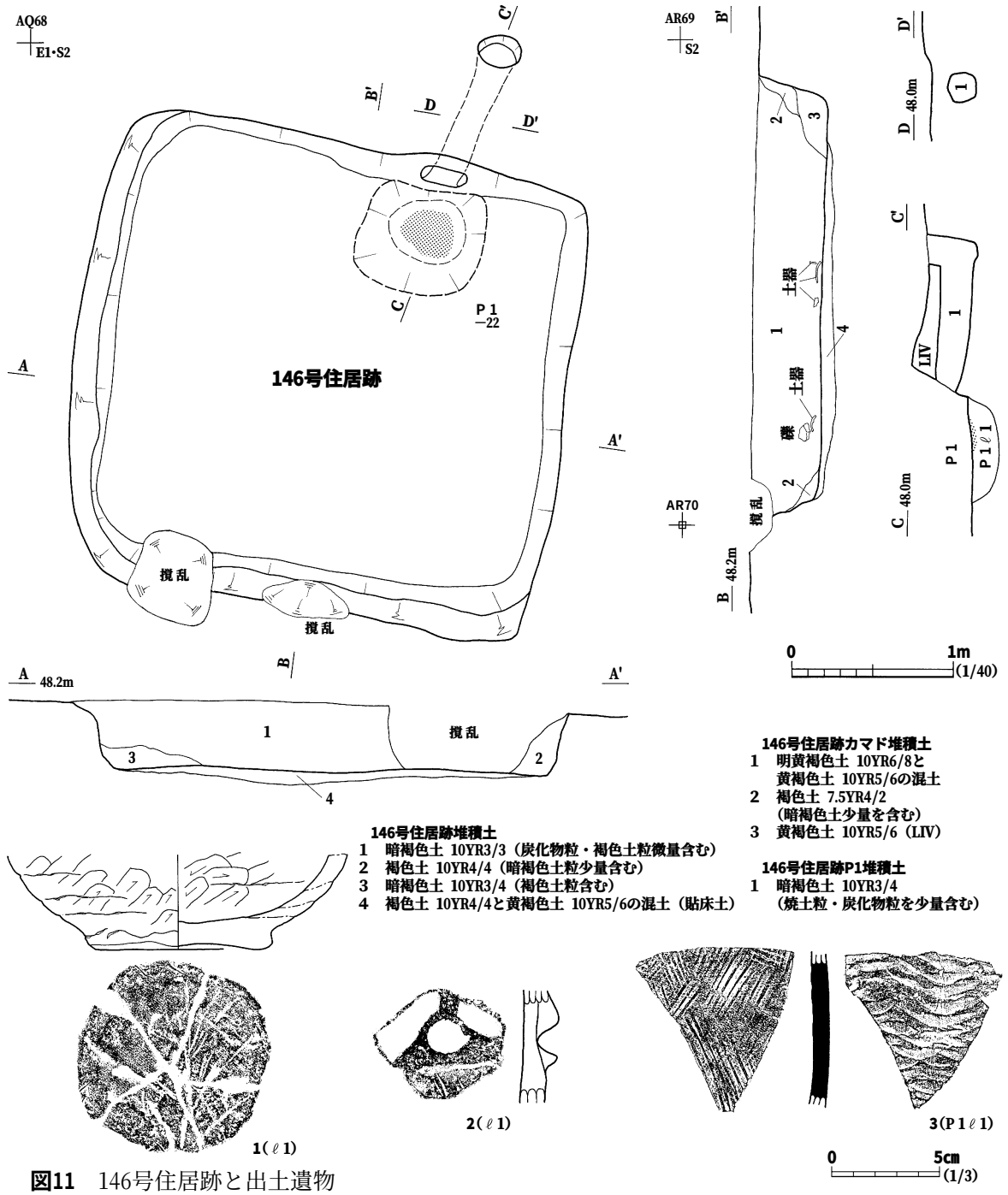


図11　146号住居跡と出土遺物

ピット　前述したように，カマド燃焼部の直下からＰ１とした隅丸方形のピットが確認された。規模は60×75㎝，深さ22㎝程である。貼床の敷設後に掘られており，貼床構築土であるℓ４とは，土質が異なり，焼土粒・炭化物粒を若干含んでいる。

遺物出土状況　ℓ１から縄文土器片59点，土師器片６点，石器４点，羽口１点が出土した。また，Ｐ１からは須恵器片１点が出土している。

遺物　図11に示した。11図１は土師器甕の底部片資料である。外面に輪積み痕，底面には木葉痕がみられる。同図２は，綱取Ⅰ式の口縁部破片と思われる。Ｃ字状突起の下部の盲孔が認められる。胴部には条痕文が認められる。同図３は須恵器甕の体部資料で，外面に平行タタキメ痕，内面に同心円タタキメ痕が観察できる。

まとめ　本住居跡は，北壁にカマドを有するが，カマド袖や燃焼部の天井の構築材は全く残っていなかったので，カマドは故意に破壊したものと考えられる。遺物が良好な状態で出土していないが，出土した土師器甕の底部に木葉痕があったり，ロクロは未使用である点などから，本遺構は奈良～平安時代の８世紀中～後半頃の所産ではないかと考えている。　（宮　田）

147 号 住 居 跡　ＳＩ147 （図12，写真119・120・358）

位置・検出面　南区の北東部，ＡＰ64グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面で，一辺約４ｍを測る不整方形の暗褐色土の広がりとして確認した。遺構検出時には，すでにカマドの火熱範囲が地表面に露出していた。

重複　13号溝跡・92号建物跡と重複し，これらよりも本遺構が古い。

堆積土　住居跡内の堆積土は２層に分層した。ℓ１・２ともに，暗褐色土もしくは褐色土と黄褐色土の混土からなり，壁際に自然流入土を挟まない堆積状況から，本遺構は廃棄された後に，人為的に投棄された土によって埋られたものと判断している。

平面形・規模　西側を13号溝跡に破壊されているが，南北方向に長軸を持つ隅丸長方形であり，長軸方向はＮ３°Ｅである。現況で確認できた壁上端での規模は，長軸である南北長4.0m，短軸の東西長3.8mを測る。床面中央に方形状のくぼみを有し，カマドも破壊されている。

床面　床面は基本土層ＬⅣに形成され，ほぼ平坦である。ただ，床面中央部からは，２×1.8m，深さ20㎝を測る不整長方形の落ち込みが認められた。この落ち込み内にも住居内堆積土ℓ１が堆積していたため，本住居跡に伴う落ち込みと判断した。落ち込みの底面は凹凸が著しく，壁の立ち上がりも緩やかであるので，住居廃絶時に掘り込まれた小穴と推測している。貼床は認められず，周溝も確認できなかった。

周壁　遺存度がわるいが，全体に緩やかに立ち上がっている。とくに北東コーナーにあるＰ１から南側部分で，その立ち上がりが緩やかとなっている。壁高は最大で８㎝程である。

主柱穴　検出されなかった。

ピット　カマドの東側にＰ１とした径40㎝，深さ13㎝程の円形ピットが確認された。

カマド　北壁やや東寄りに，確認された。住居内に張り出すように造られており，袖部や煙道は確認できなかった。燃焼部底面には，東西長140㎝，南北長110㎝の楕円形の掘形があり，これを埋めて，さらに，黒褐色土と暗褐色土を５㎝程敷いて，上面が平坦な壇状施設を造り出している。カマドは，この壇状の施設の上面を燃焼部とする特異な形態を有している。

(堆積土)４層に分層した。燃焼部上位には，堆積土は認められなかった。ℓ１～４はいずれもカマド構築時の堆積土であり，ℓ１・２が前述した黒褐色土や暗褐色土の薄層であり，他はカマド掘形内堆積土である。

(規模)北壁から南側の屋内へ向かって約120㎝，東西長80㎝の規模で造られている。床面から燃焼部底面までの高さは約15㎝である。

(燃焼部)壇状を呈する平坦面の直上に，30×20㎝の範囲で，赤褐色楕円形に広がる焼土化範囲を確認した。断ち割りの結果，５㎝程の深さまで焼土化が及んでいたため，この部分を燃焼部と推定している。

遺物出土状況　床面中央に掘削された落ち込みの南東コーナー部分から，土師器杯と土師器鉢が各１点出土した。２点とも，ほぼ同じレベルで口縁部を上に向けて，正位で出土した。

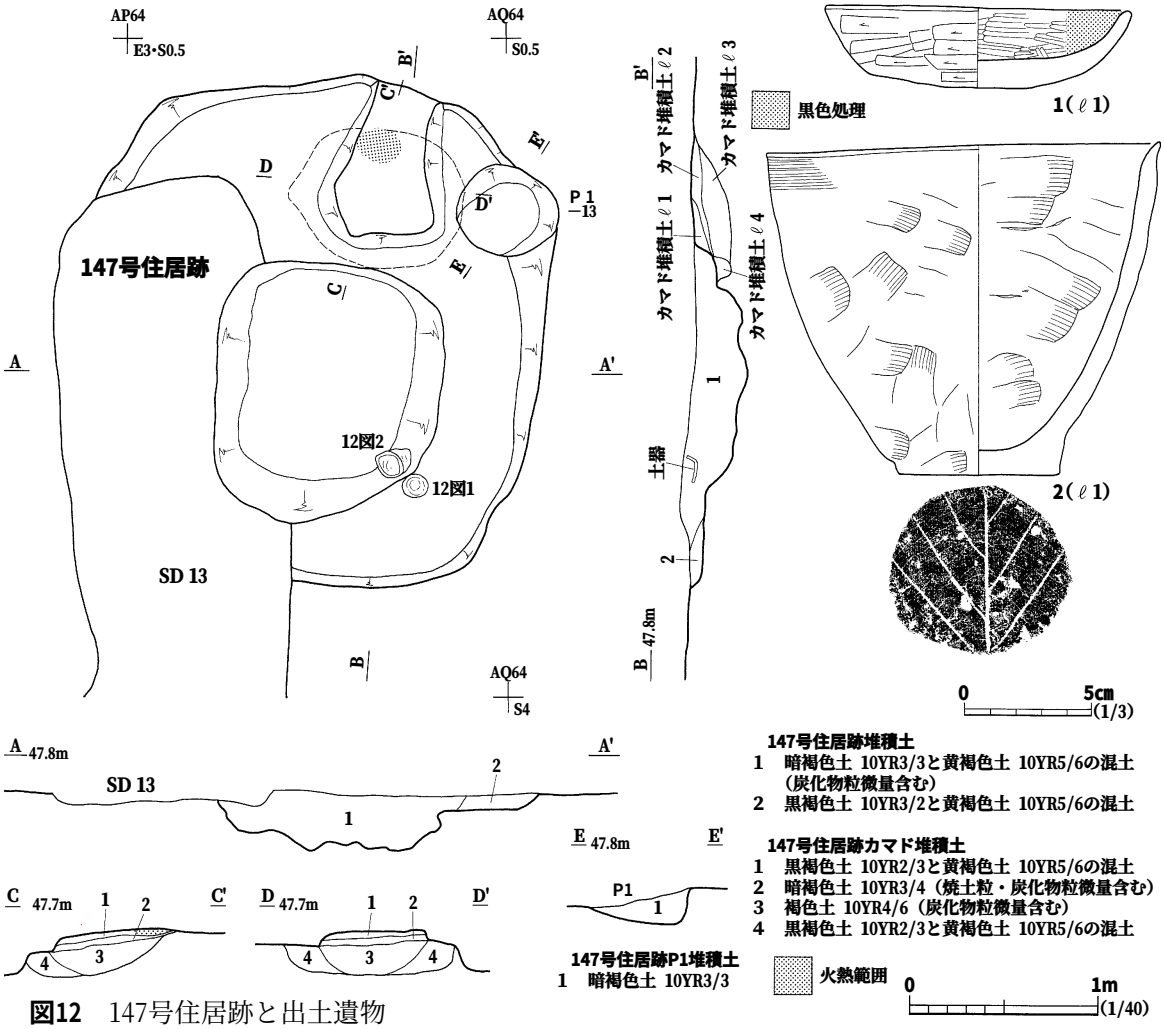


図12　147号住居跡と出土遺物

遺物　12図１は土師器杯である。ロクロは未使用で，外面は横位主体の手持ちヘラケズリ，内面は横位主体の細かいヘラミガキのあと黒色処理が施される。底部と体部の境は明瞭でなく，丸みを帯びて立ち上がっている。12図２は完形の非ロクロ成形の土師器鉢である。底面には木葉痕が，内外面には，横あるいは斜め方向のヘラナデ調整が観察される。口唇部はヨコナデが施されている。

まとめ　本遺構は，カマドを有する竪穴住居跡である。ただ，一般的に認められるカマドとは，その構造がかなり異なっている。本遺構のカマドは，一度床面を掘り込んだ後，それを埋め，土を盛って壇状施設を設置している。この壇状施設の上面で，火を使用していることからカマドとした。また，住居廃棄時には，床面中央を掘削し，土師器の杯と鉢を遺棄して住居全体を埋めている。本遺構の所属時期は，出土した土師器から８世紀中葉前後と推定している。　（宮　田）

161 号 住 居 跡　ＳＩ161 （図13，写真137・138）

位置・検出面　南区北東部の平坦面，ＡＧ・ＡＨ43・44グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の西側には966号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，褐色土で埋まった長方形の輪郭を検出した。検出の時点で，すでに住居跡の東半部は床面の一部が露出していた。

堆積土　ℓ１・２とも貼床構築土であり，黄褐色土の小塊を撹はんしたように含んでいる。床面上位の堆積土は認められなかった。ℓ３はにぶい黄褐色土である。

平面形・規模　東西方向に長軸を持つ長方形と思われるが，西半部はすでに削平を受けている。その規模は，現状で南北長4.5m，東西遺存長2.2mを測る。長軸方向は，ほぼ真北である。

床面　貼床で形成され，ほぼ平坦で中央部が硬く締まっていた。掘形の壁は，底面から70 °のやや

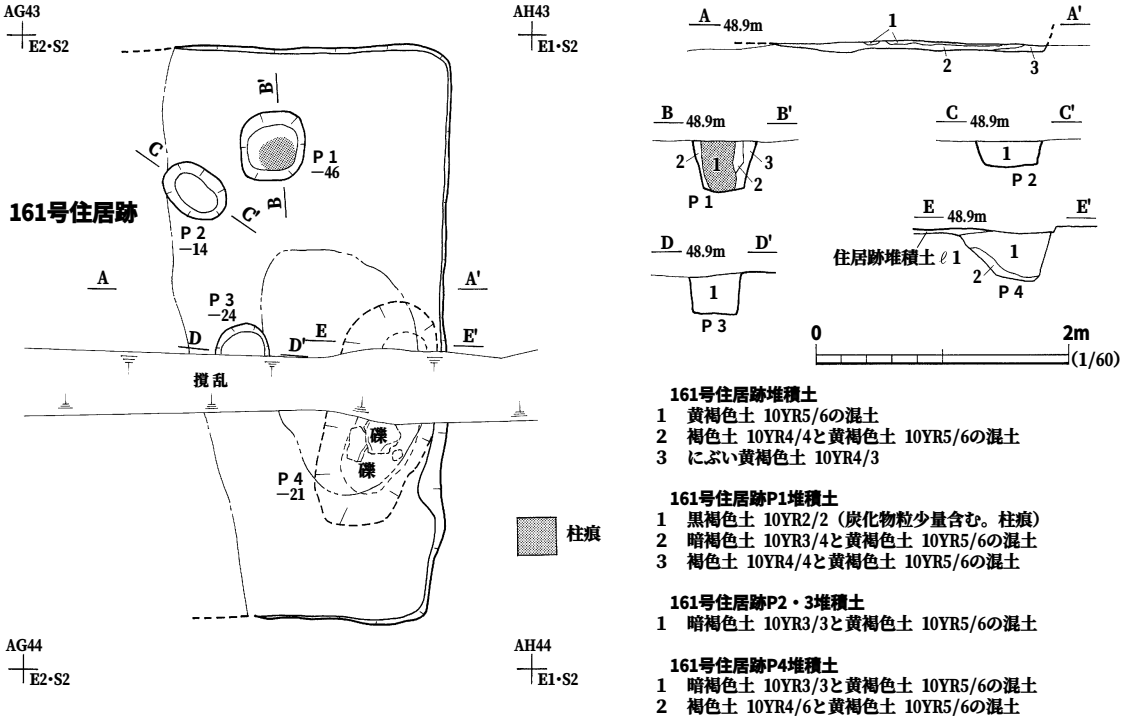


図13　161号住居跡

急な角度で立ち上がり，遺存壁高は３～５㎝を測る。

周壁　削平を受け遺存していなかった。

ピット　小ピットを３個（Ｐ１～３），土坑状のくぼみを１個（Ｐ４）確認した。Ｐ１は床面の北側中央に位置し，径25㎝の柱痕が確認された。平面形は隅丸方形を呈し，規模は50×55㎝，深さ46㎝である。柱穴である可能性が高いが，南半部の相対する箇所にはピットが認められなかった。Ｐ２は，Ｐ１の南西側に隣接する楕円形のピットで，長径52㎝，短径40㎝，深さ14㎝を計測する。Ｐ３は，床面中央に位置する円形のピットである。南半部は撹乱により壊されている。残存規模は径42㎝，深さ24㎝を測る。Ｐ２・３とも用途は不明である。

Ｐ４は東端部中央に確認された楕円形の土坑状のくぼみで，長径182㎝，短径73㎝，深さ21㎝を計測する。黄褐色土塊と炭化物粒を含む暗褐色土で，人為的に埋められたものと判断される。底面はほぼ平坦で，周壁はなだらかに立ち上がっている。底面には，亜角礫２個が廃棄されていた。Ｐ４は，東壁に接していることや炭化物を多量に含む堆積土から判断して，住居廃絶に際してカマド及び貯蔵穴を破壊して，その廃棄土を捨てた可能性が考えられる。

遺物出土状況　Ｐ４の堆積土中から土師器片５点，縄文土器片４点が出土したが，小破片のため図示できなかった。

まとめ　本遺構は遺存状況が悪く，西半分は削平を受けていた。しかしながら踏み締まった床面が検出され，比較的整った長方形の平面形が確認されたことから，竪穴住居跡と判断した。帰属時期は，平安時代と考えている。　（門　脇）

162 号 住 居 跡　ＳＩ162 （図14，写真139・140）

位置・検出面　南区南東部の平坦面，３次調査のＡＶ71グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の南西には165号住居跡，北東には95号建物跡が位置している。検出面はＬⅣ上面であり，検出時に，複式炉の炉体土器と石組部の礫の一部が露出していた。

重複　1595・1598号土坑と重複し，いずれよりも本遺構が古い。

堆積土　本住居跡は削平を受けていたため，確認できた堆積土は，後述する複式炉内の堆積土のみである。

平面形・規模　平面形と規模は，周壁が遺存していないため，不明である。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。複式炉の周辺から北側にかけての南北約３ｍ，東西約2.5ｍの不整な卵形の範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　遺存していない。

複式炉　複式炉は床面硬化範囲の南端部，Ｐ１とＰ２のほぼ中間に構築されている。炉の北・西側と南側は撹乱を受けているが，円形状の土器埋設部に楕円形状の石組部と前庭部が続く，ひょうたん形の平面形態を呈している。

（規模）全長は推定約160㎝，最大幅が67㎝を測り，炉中軸線はＮ16 °Ｅを示している。

（土器埋設部）口径25㎝程の炉体土器が埋設され，その外側に並べられていたはずの縁石は抜き取られていた。炉体土器周辺の土は強く焼土化している。

（石組部）楕円形の掘形内に偏平な礫を敷いて底面とし，その上に，拳大・人頭大の礫を掘形周壁に沿って並べ，側壁を造っている。土器埋設部との間には，特に大きな礫が用いられている。石組部の最大幅は67㎝，南北方向の長さは61㎝を測る。礫は表面に強い火熱を受けて，もろくなったものがある。

（前庭部）側壁が緩やかに立ち上がる皿形状を呈し，北側は狭くなって石組部に続いている。規模は，最大幅56㎝，南北方向の遺存長40㎝を測る。

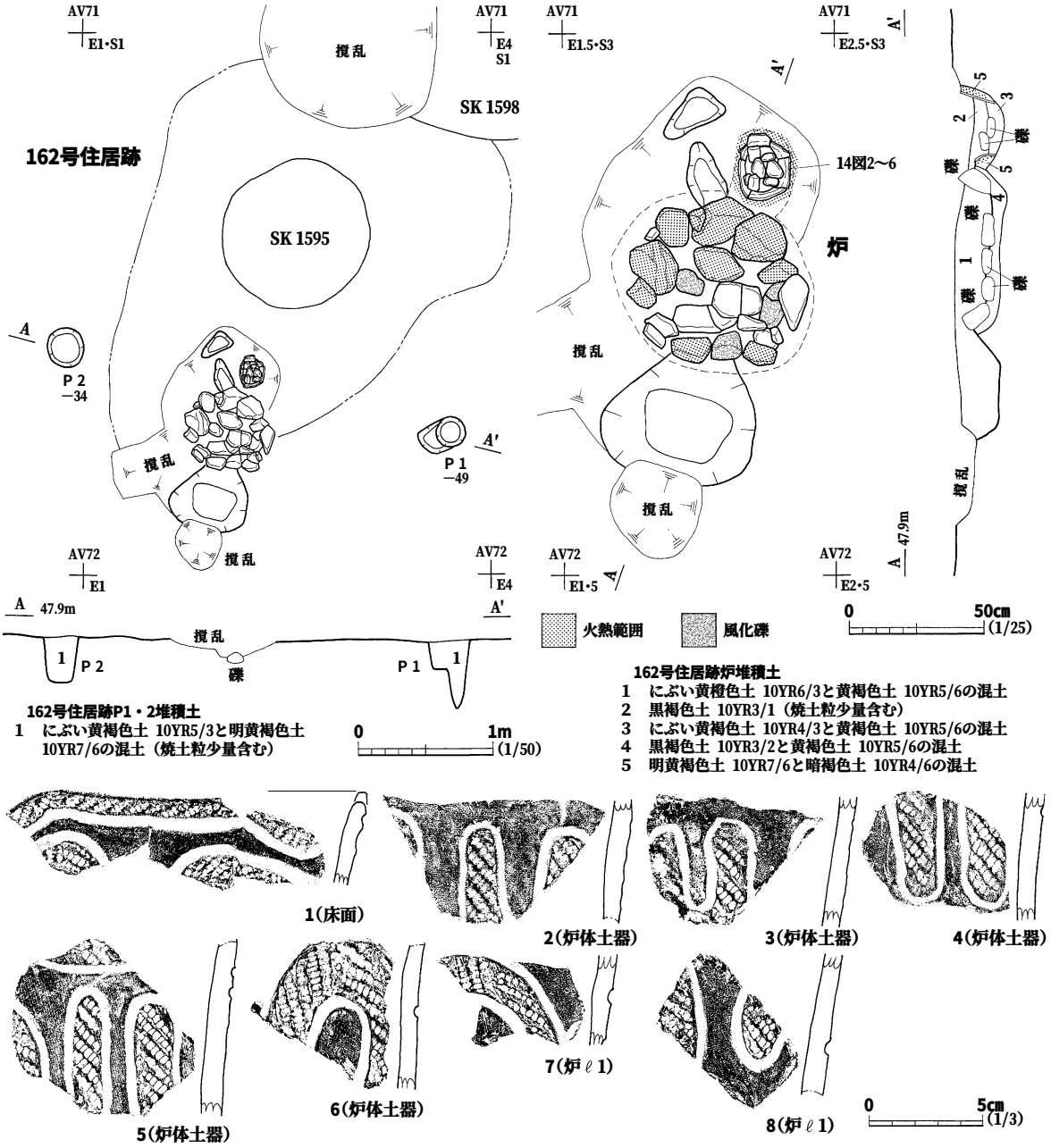


図14　162号住居跡と出土遺物

主柱穴　主柱穴はＰ１・２の２個である。これらは複式炉を挟んだ東西に位置し，Ｐ１－Ｐ２間の距離は2.9ｍを測る。本来は複式炉の主軸線上にもう１個存在し，三角形の配置になっていたと思われるが，炉主軸線上の主柱穴は撹乱によって破壊された可能性が高い。現状の平面形は円形で，断面形はＵ字状を呈している。規模はＰ１が直径22㎝，深さ49㎝，Ｐ２が直径26㎝，深さ34㎝を計測する。Ｐ１の西側には抜き取り痕が認められた。堆積土は，いずれも２種類の土が混じり合う混土であることから，柱を抜き取った後，人為的に埋められたものと思われる。

遺物出土状況　床面から出土したのは，縄文土器片107点，石器１点である。14図１に示した縄文土器は，口縁部を床面に密着させて，土圧で押し潰された状態で出土した。

遺物　図14に示した。14図１は床面から出土した深鉢形土器の口縁部資料で，口縁上端に沈線により区画した縄文帯を施し，以下Ｕ字文あるいはＳ字文が施されるものと思われる。同図２～６は炉体土器である。脆弱だったため遺物取り上げ時に破片となってしまった。いずれも胴部資料であり，縄文帯により，Ｕ字文などが確認できる。同図７・８は，複式炉ℓ１から出土した資料であり，前述した炉体土器と同一個体の破片と思われる。

まとめ　遺存状態は良くないが，複式炉と３本柱構造の上屋を持つ竪穴住居跡と考えられる。複式炉の主軸線はほぼ南北方向を示しており，石組部はやや粗雑な造りで，前庭部は小型化している。廃絶に際しては柱を抜き取った上で，人為的に埋められたものと推測される。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と思われる。　（小　暮）

163 号 住 居 跡　ＳＩ163 （図15，写真141・142）

位置・検出面　南区南東部の平坦面，３次調査のＡＷ74グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北側には1549・1584号土坑，西側には1607号土坑がある。検出面はＬⅣ上面で，床面が露出した状態で検出された。

重複　他遺構との重複関係はない。西側と南側は撹乱を受け，硬化した床面が壊されていた。

堆積土　削平を受けていたため，確認できた堆積土は，後述するカマド掘形内及びピット内の堆積土のみであった。

平面形・規模　平面形と規模は，周壁が遺存していないため，不明である。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。カマドの前面が非常に硬く締まっていた。

周壁　遺存していない。

カマド　床面硬化範囲の北端に，暗黄褐色土で埋められたカマド掘形が確認された。層中には，焼土粒・炭化物粒・粘土粒を含んでいる。カマド掘形の上面に接して，袖の構築材と思われる粘土が遺存していたため，カマドの痕跡と判断した。カマドは住居の廃絶に際して破壊されたものと思われる。掘形の規模は直径約70㎝，深さ10㎝を測る。

ピット　カマド掘形のすぐ東側から，長軸128㎝，短軸112㎝，深さ９㎝を測る不整楕円形のピット

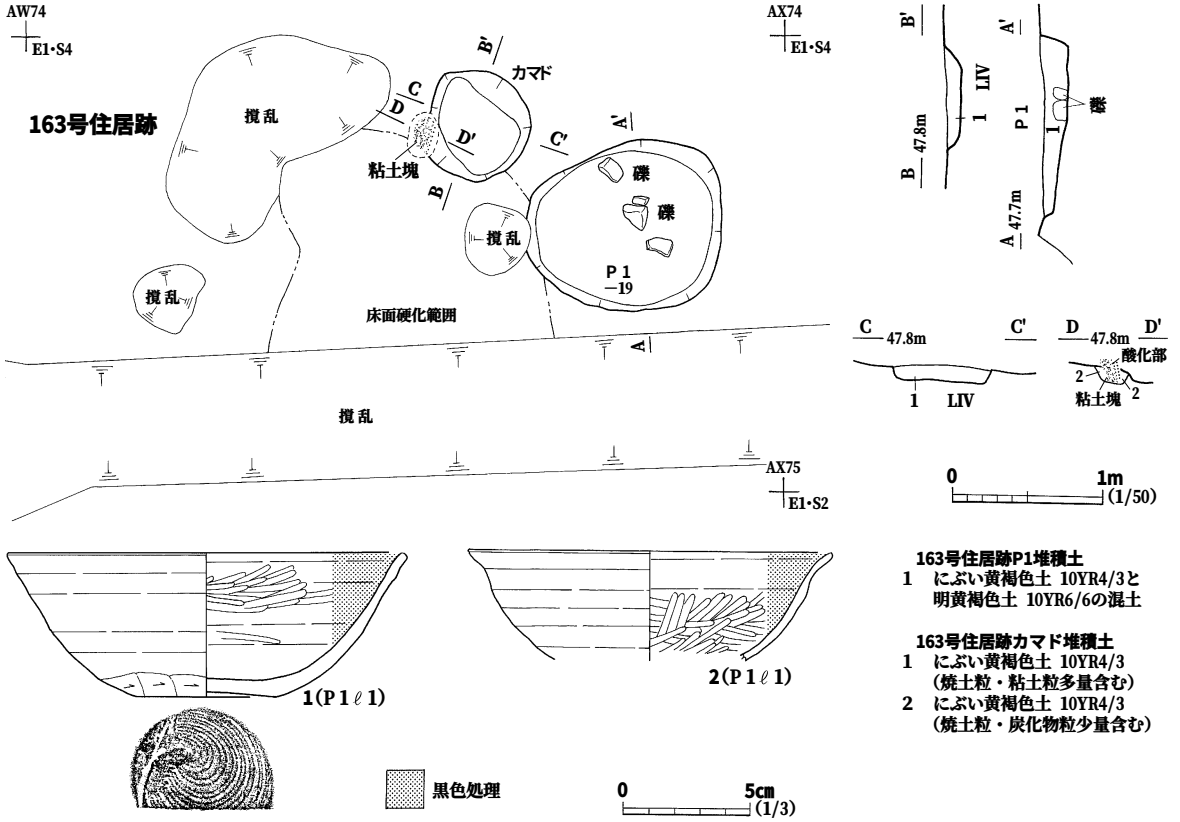


図15　163号住居跡と出土遺物

を検出した。底面はほぼ平坦で，周壁は急傾斜で立ち上がっている。底面には４個の礫が残されていた。カマドとの位置関係から，貯蔵穴であった可能性が高いものと考えている。

遺物出土状況　本住居跡からは縄文土器片２点，土師器片45点，石器４点が出土した。

遺物　図15に示した。いずれもＰ１から出土したロクロ成形の土師器杯である。15図１は底部から内湾気味に立ち上がり，底部外面には回転糸切り痕が観察できる。体部下端は手持ちヘラケズリ再調整が施され，内面には黒色処理が認められる。同図２は，底部を欠損しているが，体部下半から内湾気味に立ち上がり口縁部が外反する。内面には黒色処理が施されている。

まとめ　本遺構は遺存状態が悪いものの，カマドの痕跡や貯蔵穴，踏み締まった床面が検出されたことから，竪穴住居跡と判断した。帰属時期は，９世紀後半頃と推測される。　（小　暮）

164 号 住 居 跡　ＳＩ164 （図16・17，写真143・144・359）

位置・検出面　南区南東部の平坦面，ＡＳ・ＡＴ66・67グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北西側には，1604号土坑が隣接している。検出面はＬIV上面であり，褐色土で埋まった径4.0m程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　重複する遺構はないが，東壁側は撹乱により壊されている。

堆積土　３層に分層した。ℓ１・２は，基本土層のＬIIIに類似した褐色系の土を基調として，ＬIVである黄褐色土を粒状に含んでいる。両層とも壁際から流れ込んだような堆積状況が観察されるこ

とから，自然堆積土と判断した。ℓ３は後述する周溝内堆積土である。

平面形・規模　南北方向に長軸を持つ不整円形である。長軸方向はＮ22 ℃Ｗである。規模は長軸である南北長4.1m，東西遺存長3.8mを測る。

床面　基本土層のＬⅣにより形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。

周壁　床面から70～80 ℃の急な角度で立ち上がり，遺存壁高は15～21㎝を測る。東壁は撹乱によって壊されていた。

周溝　遺存する周壁に沿って溝が確認された。幅は18～43㎝，床面からの深さは5～18㎝を計測した。ℓ３とした褐色土が確認されたが，住居内堆積土と同様，壁際からの流れ込みが観察された。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。遺存状態は良好で，円形状の土器埋設部に方形状の石組部，さらに楕円形状の前庭部が続く形態を呈している。前庭部南端は周溝に接している。

(規模)全長175㎝，最大幅が68㎝を測り，炉中軸線はＮ22 ℃Ｗである。

(堆積土)炉跡堆積土ℓ１～３は住居内堆積土と同じ状況であるため，自然堆積と判断した。

(土器埋設部)遺存径28㎝，深さ25㎝の炉体土器に接して，長さ15㎝前後の亜円礫を並べ縁石としている。東西方向の長さは約50㎝で，炉体土器周辺の土は強く焼土化している。

(石組部)石組部は掘形内に板状礫や拳大の亜角礫を組み上げて，外傾する側壁を造っている。特に，土器埋設部と石組部が接する箇所及び石組部西壁には，大形の板状礫が用いられている。底面は礫が認められず，ＬⅣが露出している。石組部の最大幅は63㎝，南北方向の長さは68㎝，床面から底面までの深さは20㎝を測る。

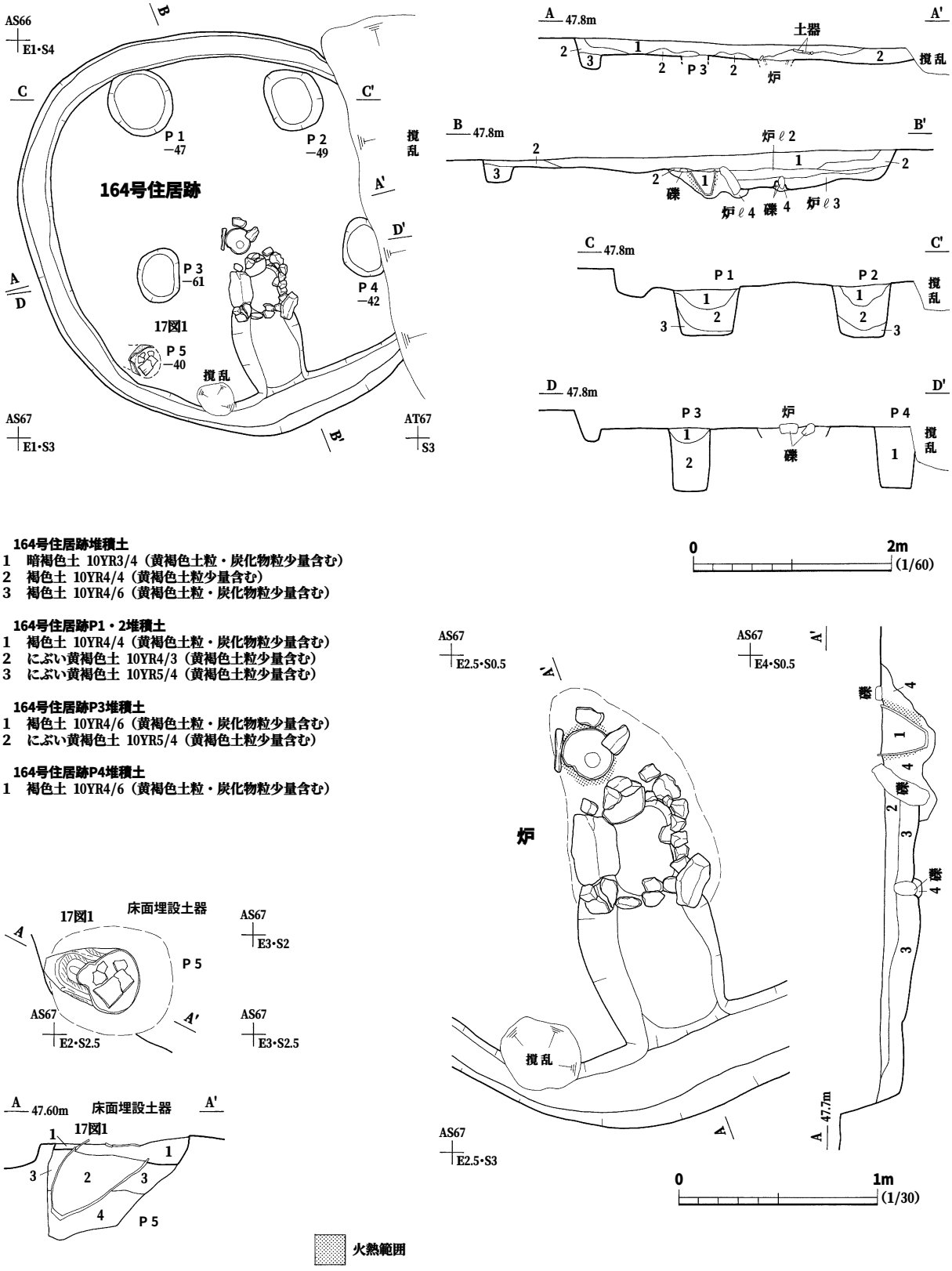
(前庭部)平面形は楕円形状を呈し，炉の中軸線から若干西側に偏っている。規模は最大幅68㎝，南北方向の長さ74㎝を測る。石組部に接する両側縁に偏平な礫を立てて縁石としている。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。これらの掘形平面形は，不整円形・不整方形を呈する。その規模は，長径53～68㎝，床面からの深さ48～62㎝を測る。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.6m，Ｐ１－Ｐ３間が1.7m，Ｐ２－Ｐ４間が1.6m，Ｐ３－Ｐ４間が2.1mで，やや歪んだ台形の配置となっている。これら柱穴には柱痕はなく，一度柱を抜き取ったあと，住居内堆積土同様，自然埋没したものと考えられる。

床面埋設土器（Ｐ５）　床面南西部，周溝に接してＰ５とした掘形内に，深鉢形土器が斜位に埋設されていた。堆積状況から判断する限り，埋設土器内堆積土は，住居内堆積土と同様の自然堆積である。また土器内面には使用によると推察される剝落が部分的に見られたことから，住居機能時には，床面埋設土器は開口していたと考えられる。

遺物出土状況　複式炉からは炉体土器１個体(17図２)の他に，炉跡堆積土から縄文土器片３点が出土した。Ｐ５からは埋設土器１個体(17図１)の他に，Ｐ５の堆積土中から縄文土器片３点(17図６)が出土した。この他，住居内堆積土から縄文土器片120点，石器４点が出土した。

遺物　17図に示した。17図１はＰ５の埋設土器である。ほぼ完形の深鉢形土器で，器形は胴上部か



164号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）

164号住居跡P1・2堆積土
1　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR5/4（黄褐色土粒少量含む）

164号住居跡P3堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/4（黄褐色土粒少量含む）

164号住居跡P4堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）

164号住居跡P5埋設土器堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（焼土粒少量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（焼土粒少量含む）

164号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（焼土塊少量含む）

図16　164号住居跡

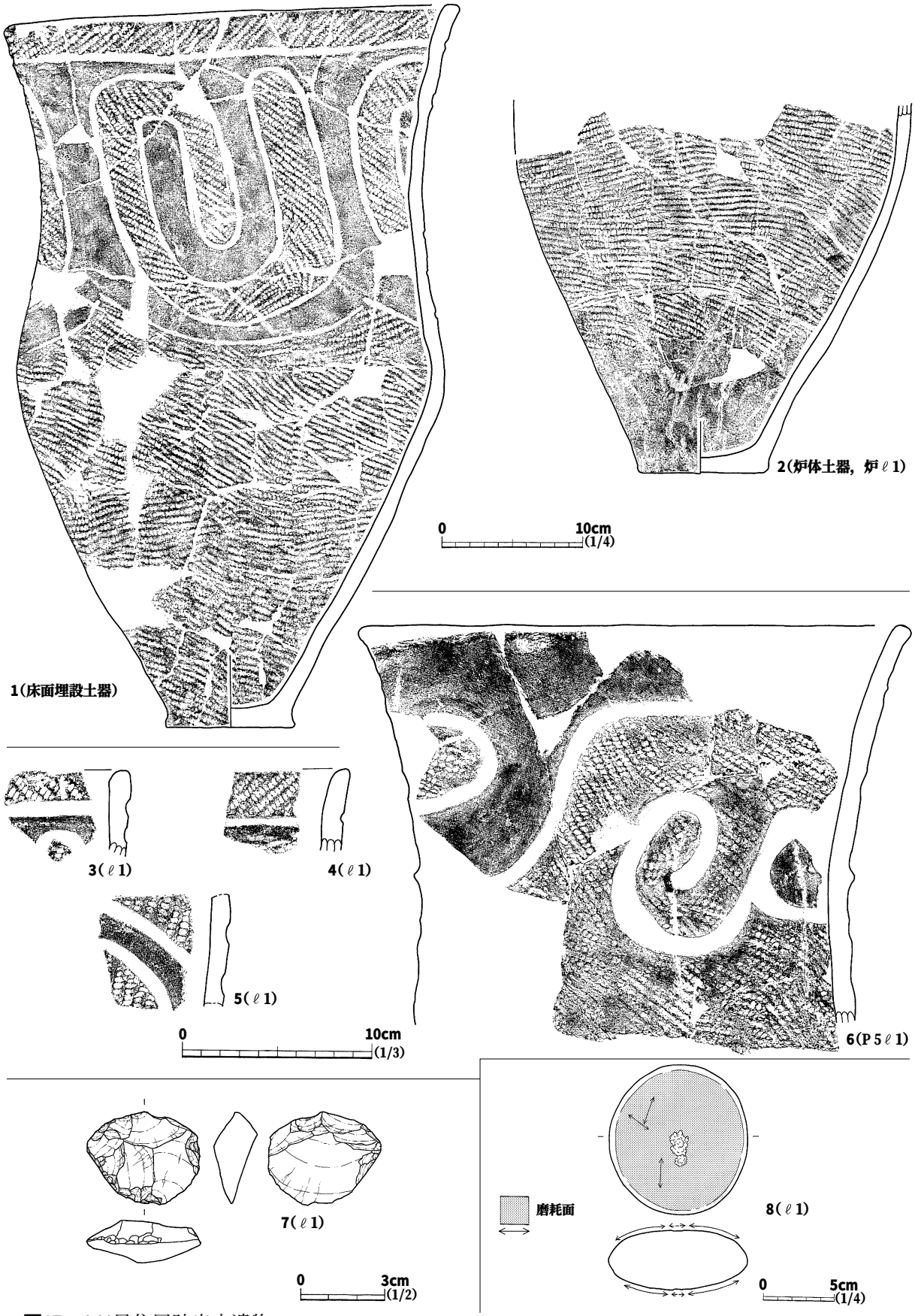


図17　164号住居跡出土遺物

ら口縁部にかけて外反し，胴下部には膨らみを持つ。文様は，胴上部から口縁部にかけての幅広い範囲に描出されている。口縁直下には縄文帯が巡る。その下には逆「の」字状の文様が，沈線区画の縄文帯によって描かれている。これらの文様の施文域は，波状の沈線によって底部付近の地文部と明瞭に区別される。地文はＬＲの原体で施文された単節斜縄文である。

同図２は炉体土器である。胴下部から底部にかけての資料で，器外面にはＬＲの原体で単節斜縄文が施されている。同図３～５は沈線で文様が施されているが，具体的な図形は不明である。地文は３・４がＲＬの原体，５がＬＲの原体を使用した単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。同図６は口縁部から上胴部にかけて，沈線区画の無文帯によるクランク文や沈線による渦巻文が描かれている。地文はＬＲの単節斜縄文である。

同図７は流紋岩製の削器である。背面下側縁に調整剝離を施して，弧状の刃部を作り出している。打面部は粗い交互剝離により除去されている。同図８は磨・凹石である。表裏面に磨耗面，その中央に敲打によるくぼみ痕が観察できる。

まとめ　本遺構は，複式炉を有する竪穴住居跡である。上屋構造は４本主柱により支えられていたものと推察される。所属時期は，床面埋設土器から縄文時代中期末葉の大木10式期古段階に比定される。

（門　脇）

165号住居跡　ＳＩ165（図18，写真145・146）

位置・検出面　南区南東部の平坦面，ＡＴ72グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の東側には162号住居跡が，北側には1603号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，褐色土で埋まった径3.0m程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　重複する遺構はない。

堆積土　ℓ１～３は，基本土層のＬⅢに類似した褐色系の土を基調として，黄褐色土であるＬⅣを粒状に含んでいる。３層とも壁際から流れ込んだような堆積状況が観察されることから，自然堆積土と判断した。

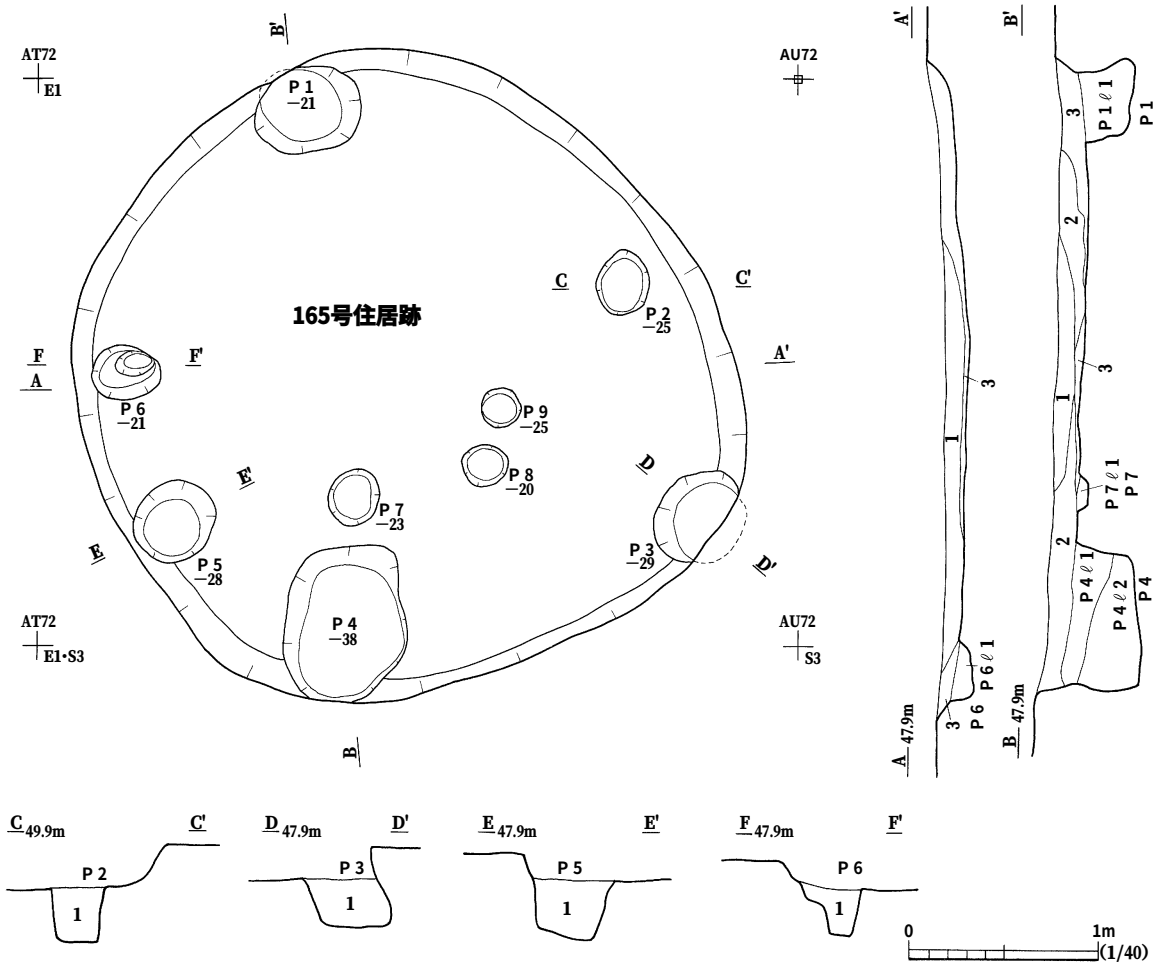
平面形・規模　不整円形である。本住居跡の長軸線は，Ｐ１・３・４を結ぶ線で構成される二等辺三角形の等分線と一致する。この長軸方向は，Ｎ23°Ｗである。規模は長軸の南北長3.4m，これに直交する東西長3.3mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。

周壁　床面から40～50°と緩傾斜で立ち上がり，遺存壁高は10～15㎝を測る。

炉跡　確認されなかった。

主柱穴　主柱穴は壁際を円形に巡るＰ１～６の６個と考えている。特に，Ｐ１・３・４は周壁から外側に張り出し，掘形の壁の立ち上がりは，Ｐ１が15°，Ｐ３が14°，Ｐ５が22°と内傾する。柱穴規模は，長径34～80㎝，床面からの深さ28～38㎝を測る。各柱穴は，壁際に不規則な間隔で配置され，Ｐ１－Ｐ２間が2.0m，Ｐ２－Ｐ３間が1.4m，Ｐ３－Ｐ４間が2.1m，Ｐ４－Ｐ５間が1.1m，



165号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/6（炭化物粒微量含む）

165号住居跡P1～3・5～9堆積土
1　褐色土 10YR4/6（炭化物粒微量含む）

165号住居跡P4堆積土
1　褐色土 10YR4/6（炭化物粒微量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/4（黄褐色土粒少量含む）

図18　165号住居跡

Ｐ５－Ｐ６間が1.0m，Ｐ１－Ｐ６間が1.7mを測る。これら柱穴には柱痕はなく，一度柱を抜き取ったあと，住居内堆積土同様，自然堆積により埋没したものと考えられる。この他，床面中央南東側よりＰ７～９の小穴を確認した。直径20～30㎝，深さ５～10㎝を測る。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

まとめ　本遺構は，壁際に柱穴が円形に巡る竪穴住居跡である。所属時期は，本住居跡の柱穴配置から推測して，縄文時代前期の可能性を考えている。　（門　脇）

第２節　掘立柱建物跡

南区の３次調査では，５棟の掘立柱建物跡が検出された。分布上の特徴をみると，92～94号建物跡はＡＱ・ＡＳの61～64グリッドにまとまっているが，91号建物跡は，これらからやや離れた南に位置し，95号建物跡は，これらより東に位置する。

91 号 建 物 跡　ＳＢ91 （図19，写真207）

本建物跡は南区の東南寄り，ＡＰ～ＡＲ67～69グリッドにまたがって位置する。検出面はＬⅣ上面である。１号鍛冶遺構よりも古く，146号住居跡よりも新しい。また，周辺には縄文時代のものと思われる土坑が集中する。検出時に，暗褐色土と黄褐色土の混土で埋まった20基の小穴を確認し，これらによって構成されるものを91号掘立柱建物跡とした。

本建物跡は，北側と中央の柱間がそれぞれ４間，西側が２間，南側が２間のＬ字状の構造を持ち，北側に庇，南側に庇あるいは玄関と考えられる柱列がともなう。東西辺約11m，南北辺約7.5mを測り，南北両側の東西方向の柱間はそれぞれ180～185㎝とおおむね均等であり，庇までの間隔も約１mと一定している。南北方向の柱間を見るとＰ６－Ｐ11とＰ11－Ｐ16の間隔が，それぞれ約450～470㎝と２間を測る。東側柱列のＰ10－Ｐ15の間隔もほぼ同様である。

本遺構からの出土遺物はないが，本遺構の構造がいわゆる曲屋に近いことから，所属時期は近世かそれ以降と考えられる。（宮　田）

92 号 建 物 跡　ＳＢ92 （図20，写真208）

本遺構は南区の東寄り，ＡＰ～ＡＲ64グリッドにまたがって位置する。検出面はＬⅣ上面で，12基の柱穴よりなる掘立柱建物跡である。西側に13号溝跡と147号住居跡が隣接し，東側には93号建物跡が長軸をほぼ直交するようにして位置する。また北側には，557～559号土坑が東西に並ぶ。

平面形は南北両側柱列が４間，東西の柱列が２間の東西方向が長い長方形であり，規模は東西約８m，南北4.9mを測る。柱間の寸法は，南北両側とも全てほぼ２mを計測するが，東側柱列の柱間はほぼ2.4mである。Ｐ１とＰ11の間には柱穴は検出できなかった。また，柱痕を検出した柱穴もなかった。

出土遺物はないため詳細な時期は不明であるが，柱間からおおよそ近世かそれ以降に属するものと推定される。（宮　田）

93 号 建 物 跡　ＳＢ93 （図20，写真209）

本遺構は南区の東寄りＡＲ・ＡＳ63・64グリッドにまたがって位置する。１m程西に92号建物跡が位置し，568号土坑や559号土坑も近接する。ことに92号建物跡の東側柱列と本建物跡の西側柱列は平行であり，また北側の柱列はほぼ直線状にそろえられている。平面形は東西１間，南北３間の南北方向に長い建物跡であり，規模は東西長が４m，南北長が6.2mを測る。柱穴の径はおおむね30㎝であるが，深さは70～105㎝と若干の差がある。柱穴内の堆積土は，暗褐色土と褐色土の混土で，柱痕は検出されなかった。

出土遺物がないので詳細な年代を決めることはできないが，柱穴内の堆積土や，他の周辺の掘立柱建物跡との方向の共通性から，近世かそれ以降に属するものと考えられる。（宮　田）

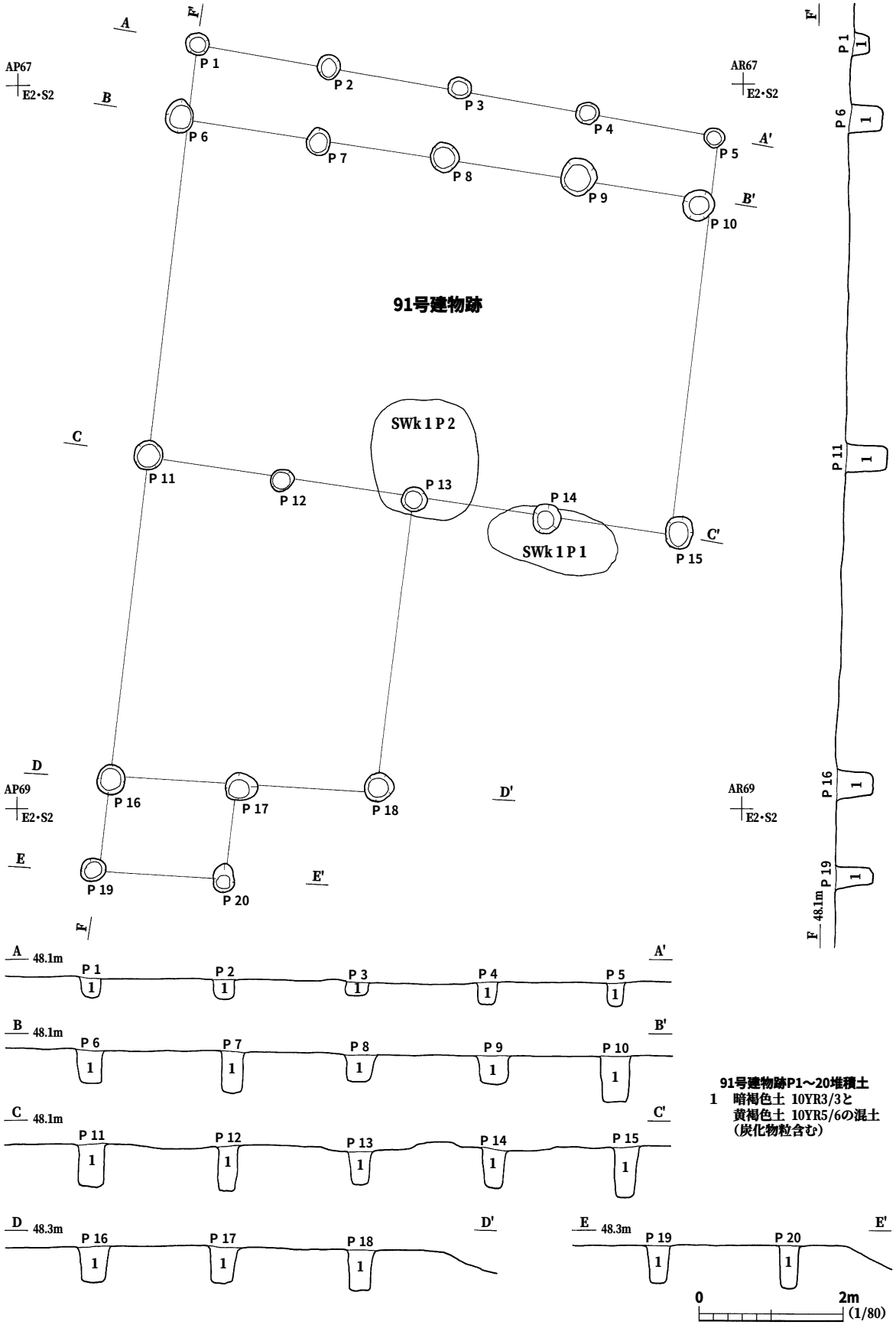

91号建物跡
SWk 1 P 2
SWk 1 P 1
AP67
E2・S2
AR67
E2・S2
AP69
E2・S2
AR69
E2・S2
P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P 10
P 11
P 12
P 13
P 14
P 15
P 16
P 17
P 18
P 19
P 20
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
48.1m
48.3m
91号建物跡P1～20堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と
黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒含む）
0
2m
(1/80)

図19　91号建物跡

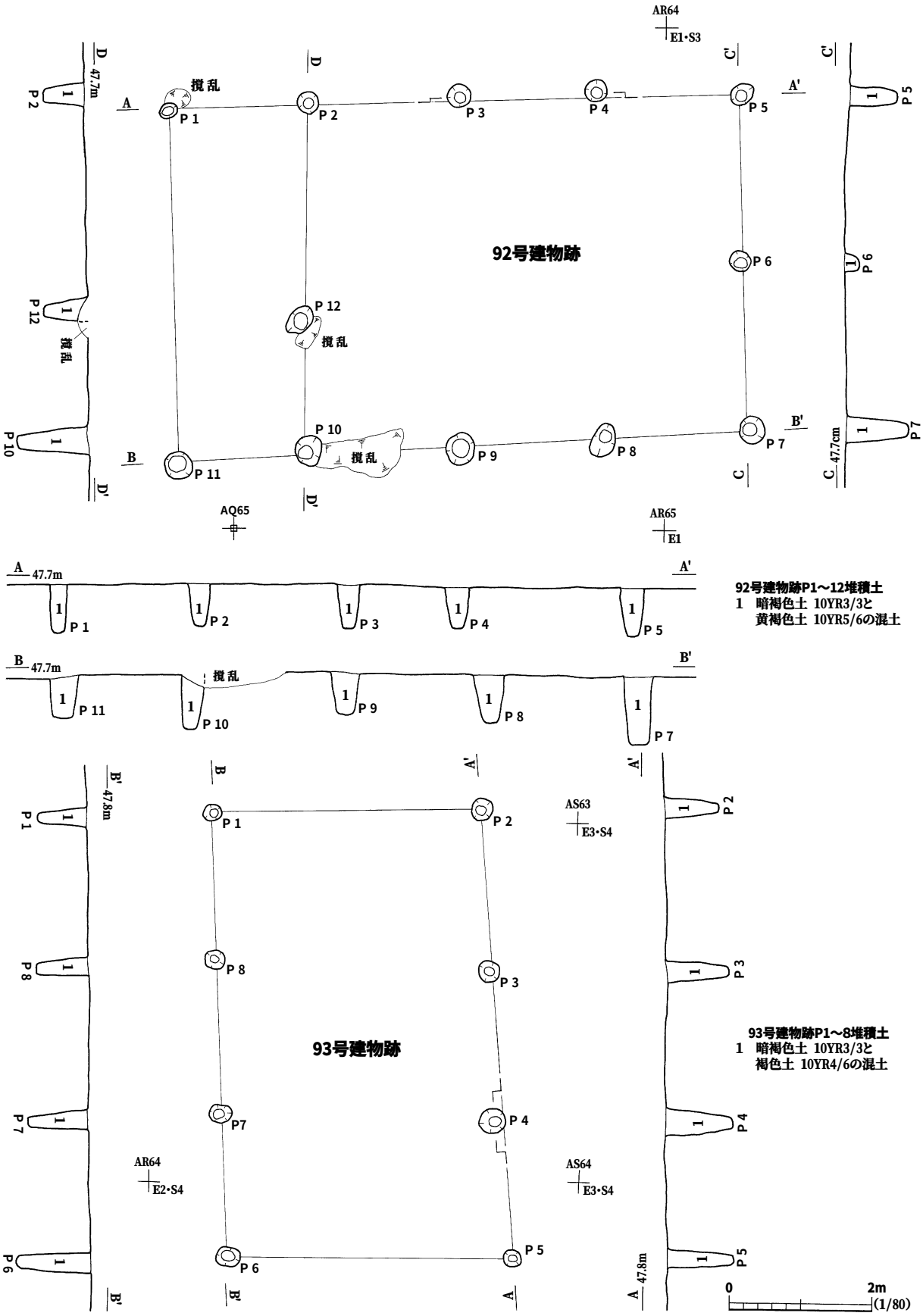


図20　92・93号建物跡

94 号 建 物 跡　ＳＢ94 （図21，写真210）

本遺構は南区の北寄り，ＡＱ～ＡＳ61・62グリッドにまたがって位置する。計13基の柱穴が検出されたが，調査区外にも柱穴が存在すると考えられる。遺構検出面はＬⅣ上面で，563号土坑と重複し本建物跡が新しい。また西側から北側にかけて13号溝跡や561・564号土坑が近接する。

本遺構は東西６間，南北２間の東西方向に長い建物跡で，柱間はＰ１－Ｐ２間が約3.6m，その他の柱間は，南北列ともそれぞれほぼ1.8m間隔である。また，西辺にあたるＰ１－Ｐ13間は4.6m

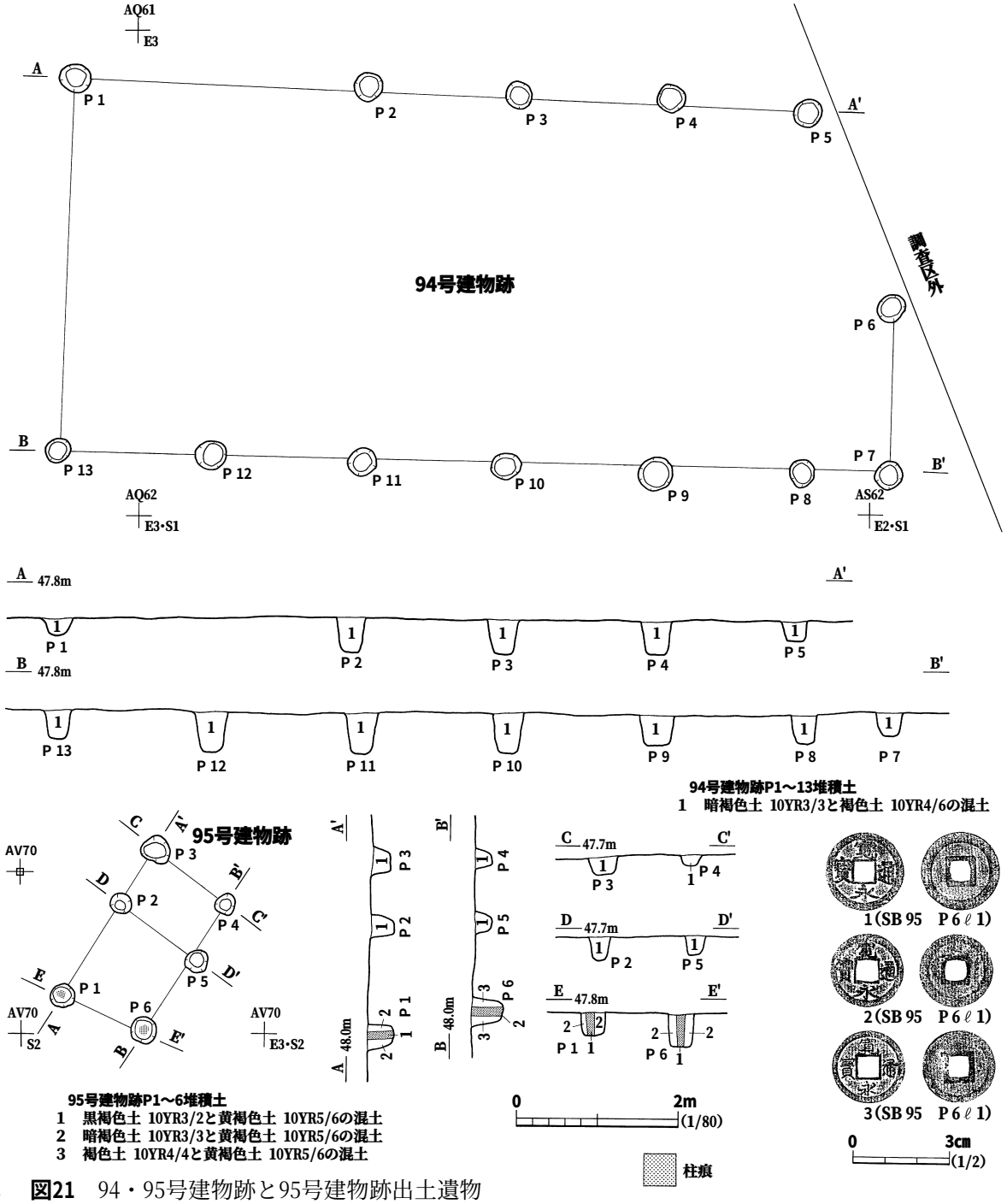


図21　94・95号建物跡と95号建物跡出土遺物

を測り，中間に柱穴は検出されなかった。Ｐ５とＰ６を結ぶ交点は，調査区外にあると予想され，東辺はＰ６－Ｐ７の間隔からして４m前後の２間柱間と推定される。規模は約10.2m，南北約4.6mを測る。柱穴内堆積土は，すべて暗褐色土と褐色土の混土で，人為的に埋めたものと考えられる。

本建物跡からの出土遺物はなかった。本遺構の年代は，他の掘立柱建物跡との並び方の整合性から近世に属する遺構と考えている。（宮　田）

95 号 建 物 跡　ＳＢ95（図21，写真211・360）

本遺構は南区の東寄り，ＡＶ69・70グリッドに位置する。付近には，東側に1589号土坑や1612号土坑が存在するが，重複する遺構はない。検出面はＬⅣ上面であり，平面形は，東西１間，南北２間の南北に長いやや台形気味の長方形建物跡であり，軸線方位はN32 °Eである。規模は，東側柱列で2.1m，西側柱列で2.4m，南側柱列で1.4m，北側柱列で1.4mを測る。柱間の寸法は，東側柱列で北から0.8m＋1.1m，西側柱列で北から0.8m＋1.4mを測る。柱痕はＰ１・Ｐ６で検出されたが，その他では確認されなかった。

本遺構からは，Ｐ６ℓ１から寛永通宝が３点出土している。21図１は「ス貝寶」のいわゆる古寛永である。同図２・３は「ハ貝寶」といわれる新寛永に属するものである。

表４　馬場前遺跡南区掘立柱建物跡一覧

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド番号）	長軸方向	長軸(cm)	短軸(cm)	P番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	P－P	柱間(cm)	柱間(尺)	重複関係 古→新	出土遺物	時期・備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
91	19	ＡＰ・ＡＱ・ＡＲ67・68・69	Ｎ７ °Ｅ	1150	735	Ｐ１	30	25	23	Ｐ１－Ｐ２	185	6.1	ＳＩ146→ＳＢ91→ＳＷｋ１		近世	207		Ｈ13	宮田
						Ｐ２	35	30	27	Ｐ２－Ｐ３	185	6.1							
						Ｐ３	33	30	20	Ｐ３－Ｐ４	180	5.9							
						Ｐ４	30	30	30	Ｐ４－Ｐ５	185	6.1							
						Ｐ５	30	27	33	Ｐ５－Ｐ10	85	2.8							
						Ｐ６	47	40	45	Ｐ１－Ｐ10	105	3.5							
						Ｐ７	37	33	60	Ｐ11－Ｐ12	185	6.1							
						Ｐ８	40	40	40	Ｐ12－Ｐ13	185	6.1							
						Ｐ９	52	50	40	Ｐ13－Ｐ14	185	6.1							
						Ｐ10	45	42	65	Ｐ14－Ｐ15	180	5.9							
						Ｐ11	40	40	60	Ｐ６－Ｐ11	470	15.5							
						Ｐ12	33	30	65	Ｐ11－Ｐ16	450	14.9							
						Ｐ13	35	35	47	Ｐ16－Ｐ17	180	5.9							
						Ｐ14	40	40	55	Ｐ17－Ｐ18	190	6.3							
						Ｐ15	45	37	70	Ｐ16－Ｐ19	135	4.5							
						Ｐ16	40	40	50	Ｐ19－Ｐ20	175	5.8							
						Ｐ17	45	40	52	－	－	－							
						Ｐ18	40	40	57	－	－	－							
						Ｐ19	35	35	53	－	－	－							
						Ｐ20	26	26	60	－	－	－							
92	20	ＡＰ・ＡＱ・ＡＲ63・64	Ｎ88 °Ｅ	800	490	Ｐ１	25	22	65	Ｐ１－Ｐ２	200	6.6			近世？	208		Ｈ13	宮田
						Ｐ２	30	30	60	Ｐ２－Ｐ３	215	7.1							
						Ｐ３	35	33	60	Ｐ３－Ｐ４	190	6.3							
						Ｐ４	32	30	55	Ｐ４－Ｐ５	200	6.6							
						Ｐ５	30	30	65	Ｐ５－Ｐ６	230	7.6							
						Ｐ６	30	30	20	Ｐ６－Ｐ７	240	7.9							
						Ｐ７	40	44	85	Ｐ７－Ｐ８	200	6.6							
						Ｐ８	45	33	70	Ｐ８－Ｐ９	200	6.6							
						Ｐ９	45	40	60	Ｐ９－Ｐ10	220	7.3							
						Ｐ10	43	37	75	Ｐ10－Ｐ11	180	5.9							
						Ｐ11	40	40	60	Ｐ11－Ｐ１	500	16.5							
						Ｐ12	35	35	60	－	－	－							
93	20	ＡＲ・ＡＳ62・63・64	Ｎ２ °Ｗ	620	400	Ｐ１	25	23	70	Ｐ１－Ｐ２	375	12.4			近世？	209		Ｈ13	宮田
						Ｐ２	30	30	77	Ｐ２－Ｐ３	225	7.4							
						Ｐ３	30	30	90	Ｐ３－Ｐ４	210	6.9							
						Ｐ４	40	35	95	Ｐ４－Ｐ５	190	6.3							
						Ｐ５	25	25	95	Ｐ５－Ｐ６	400	13.2							
						Ｐ６	35	27	105	Ｐ６－Ｐ７	200	6.6							
						Ｐ７	33	25	85	Ｐ７－Ｐ８	215	7.1							
						Ｐ８	28	28	73	Ｐ８－Ｐ１	205	6.8							
94	21	ＡＱ・ＡＲ・ＡＳ61・62	Ｎ87 °Ｗ	1015	460	Ｐ１	37	35	20	Ｐ１－Ｐ２	360	11.9	ＳＫ563→ＳＢ94		近世	210		Ｈ13	宮田
						Ｐ２	35	35	45	Ｐ２－Ｐ３	185	6.1							
						Ｐ３	35	30	43	Ｐ３－Ｐ４	185	6.1							
						Ｐ４	35	35	40	Ｐ４－Ｐ５	170	5.6							
						Ｐ５	35	35	25	Ｐ６－Ｐ７	200	6.6							
						Ｐ６	35	35	－	Ｐ７－Ｐ８	105	3.5							
						Ｐ７	35	35	30	Ｐ８－Ｐ９	180	5.9							
						Ｐ８	35	30	35	Ｐ９－Ｐ10	180	5.9							
						Ｐ９	43	43	37	Ｐ10－Ｐ11	180	5.9							
						Ｐ10	35	35	50	Ｐ11－Ｐ12	180	5.9							
						Ｐ11	35	35	52	Ｐ12－Ｐ13	190	6.3							
						Ｐ12	40	35	50	Ｐ13－Ｐ１	460	15.2							
						Ｐ13	30	30	35	－	－	－							
95	21	ＡＶ69・70	Ｎ133 °Ｅ	215	110	Ｐ１	30	30	33	Ｐ１－Ｐ２	135	4.5		寛永通宝３枚	17 世 紀中頃以降	211	360	Ｈ13	宮田
						Ｐ２	27	25	27	Ｐ２－Ｐ３	80	2.6							
						Ｐ３	35	35	22	Ｐ３－Ｐ４	110	3.6							
						Ｐ４	25	25	20	Ｐ４－Ｐ５	80	2.6							
						Ｐ５	30	30	20	Ｐ５－Ｐ６	110	3.6							
						Ｐ６	30	30	40	Ｐ６－Ｐ１	110	3.6							

本建物跡は，本遺跡の掘立柱建物跡の中でも小規模なものである。また南区で今回調査された建物跡の中では規模・方位とも特異である。建物の用途は不明であるが，柱穴から出土した寛永通宝に新寛永が含まれていることから，年代は17世紀中頃かそれ以降に属すると考えられる。　（宮　田）

第３節　溝跡

南区からは３条の溝跡が検出された。このうち13号溝跡を境として，これの西側には掘立柱建物跡群が近接した位置にはなく，南区の土地利用上での区画を想定させる。

６号溝跡　ＳＤ６

（図22，写真216）

本遺構は調査北区との境，ＡＥ～ＡＨ44グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面である。今回調査されたのは，町道中島・高田線の直下であり，東西長は約15mである。前年度調査分とあわせると，途中途切れる部分もあるが，全長約58mに及ぶ溝跡である。溝幅は約30～40㎝であり，検出面からの深さは32㎝である。断面の形状は，周壁との境が余り明確でない，いわゆる

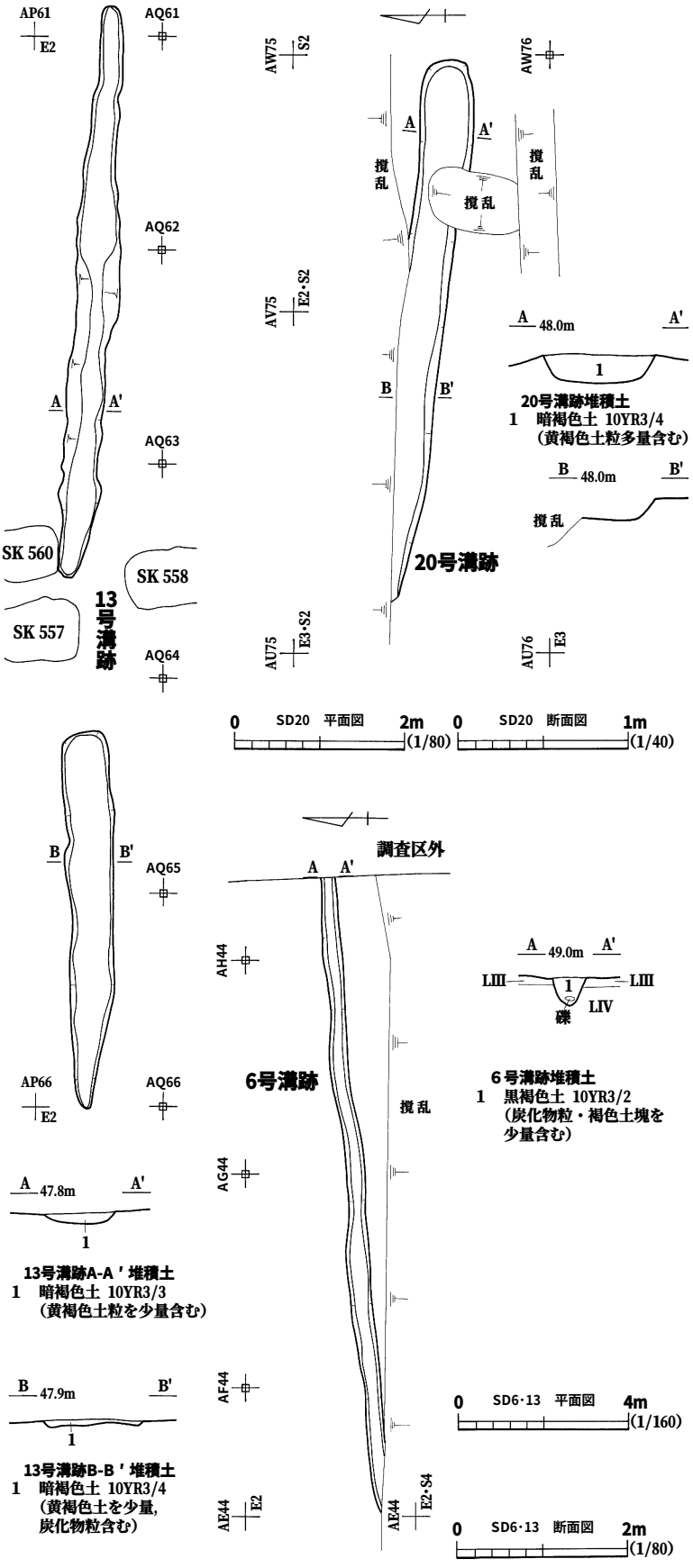


図22　６・13・20号溝跡

薬研状を呈する。遺構内堆積土は炭化物粒や褐色土を含む黒褐色土の１層のみである。本遺構からの出土遺物がなく年代は特定できないが，検出面から中世以降のものと推定される。　（宮　田）

13　号　溝　跡　ＳＤ13（図22，写真219）

本遺構は南北に分かれた２条のものからなり，ほぼ一直線に並ぶことから，両者で一対をなすと判断した。北側の溝はＡＰ60～63グリッドにあり，南側の溝はＡＰ64・65グリッドにある。検出面はＬⅣ上面であり，南北両側の溝はＡＰ64グリッドで約3.6m離れている。この離れた部分には，近世に属すると考えられる557・558・560号土坑が位置する。

また，南側溝は147号住居跡を切って掘られ，北側溝の東側３m程には94号建物跡が，南側溝の東側には92・93号建物跡が存在する。

北側溝の規模は，長さ約13.4m，最大幅１mであり，南側のそれは長さ8.7m，幅1.2mを測る。深さは，ともに５～10㎝前後と浅い。堆積土は，双方とも黄褐色土粒を含む暗褐色土の１層のみで，人為的に埋めたものと考えられる。溝跡の底面はＬⅣ面に達し，平坦な部分もあるが概して小さな凹凸が目立つ。周壁は北側溝で緩やかに立ち上がる部分もあるが，相対的に急角度の部分がある。

出土遺物はないが，遺構の年代としては，堆積土が類似する92・93号建物跡と同じく近世に属するものと思われ，また，掘立柱建物跡群と向きを合わせていることから，区画溝の類であろうと考えられる。　（宮　田）

20　号　溝　跡　ＳＤ20（図22，写真220）

本遺構は南区でも南端に近いＡＵ・ＡＶ75グリッドにまたがって位置する。撹乱とＵ字溝に切られており，遺存状態は悪い。検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は，黄褐色土を多く含む暗褐色土の1層のみであり，人為堆積と判断した。遺存する規模は，長さ約6.2m，深さ約15㎝を測る。

底面は平坦であり，周壁は急角度で立ち上がる。出土遺物はなく詳細な時期や性格は不明であるが，本遺構を破壊する撹乱から近世に属すると判断された人骨が出土しており，この点から本溝跡は近世かそれ以前のものと推測される。　（宮　田）

第４節　井　　戸　　跡

南区では井戸跡が５基検出された。全て素掘りのもので人為的に埋められていた。掘立柱建物跡などに近接する井戸跡もあるが，それだけで個別に存在するものもあり，一様ではない。

13 号 井 戸 跡　ＳＥ13（図23，写真223）

本遺構は南区でも東寄りのＡＳ・ＡＴ64グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。他の遺構との重複はないが，２m程東に93号建物跡が存在する。

平面形は円形を呈し，規模は検出面で径約1.2mであるが，底面は重機による断ち割りを行ったため，半分しか確認できなかった。底径は約80㎝と推定している。検出面から底面までの深さは約2.0mを測り，ＬⅦの砂礫層にまで達していたが，この部分での湧水はなかった。堆積土は12層からなるが，ℓ２～５は褐色土や黄褐色土との混土である。ℓ７以下の層はほぼ水平に堆積しており，人為的に埋めたものと考えられる。底面は平坦であるが，中央部に東西に長い不整形な段差が認められる。壁は約80 ℃で立ち上がり，自然崩落した部分はみられなかった。

本遺構は素掘りの井戸で，出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが，堆積土の最上層が暗褐色土及び黒褐色土であるため，埋められたのは近世頃と考えられる。（宮　田）

14 号 井 戸 跡　ＳＥ14（図23，写真223）

本遺構は南区の東寄り，ＡＳ63グリッドに位置する。他遺構との重複はないが，南東側２mに93号建物跡が，また南方５mの位置には13号溝跡が位置する。検出面はＬⅣ上面で，黒褐色砂質土の広がりとして検出した。

平面形は円形であり，径1.3mを測る。検出面から５m掘り下げたところで湧水が生じたため，それ以下の掘り下げは断念した。周壁は一部崩落部分があるものの，ほぼ垂直に立ち上がっている。遺構内堆積土は９層まで確認した。全体にほぼ水平に堆積している。ℓ１は焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土，ℓ２～７は褐色土や黄褐色土を多く含んだ，人為堆積と考えられる。ℓ２は人頭大の礫を多く含んでいる。ℓ７は地山の明黄褐色土の崩落土を主とする層である。

本遺構は，ほぼ円筒形の井戸である。出土遺物はなく機能した時期は不明であるが，最上層が黒褐色土であることから，埋められたのは近世かそれ以降であると考えられる。（宮　田）

16 号 井 戸 跡　ＳＥ16（図24，写真223・362）

本遺構は南区の東端からやや西へ寄った，ＡＯ・ＡＰ66・67グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面で，礫を多く含む黒褐色土と黄褐色土の混土の広がりとして検出した。重複する遺構はないが，南西３mには278号土坑が，南東３mには91号建物跡が存在する。

調査当初土坑と考えられたが，大量の人頭大の礫が出土したため，途中で井戸跡と判断した。平面形は不整な隅丸正方形で，規模は一辺約2.6mを測る。検出面から約5.3m掘り下げた所でＬⅦの礫層となり，大量の湧水のため，掘り下げを断念した。このため，底面の状況は不明である。

遺構内堆積土は11層に分けられ，ℓ１～10までは多量の礫を含む。ℓ11も暗褐色土と黄褐色土の混土で，おおむね水平に堆積している。周壁は下位から開口部へ向かって漏斗状に開く。

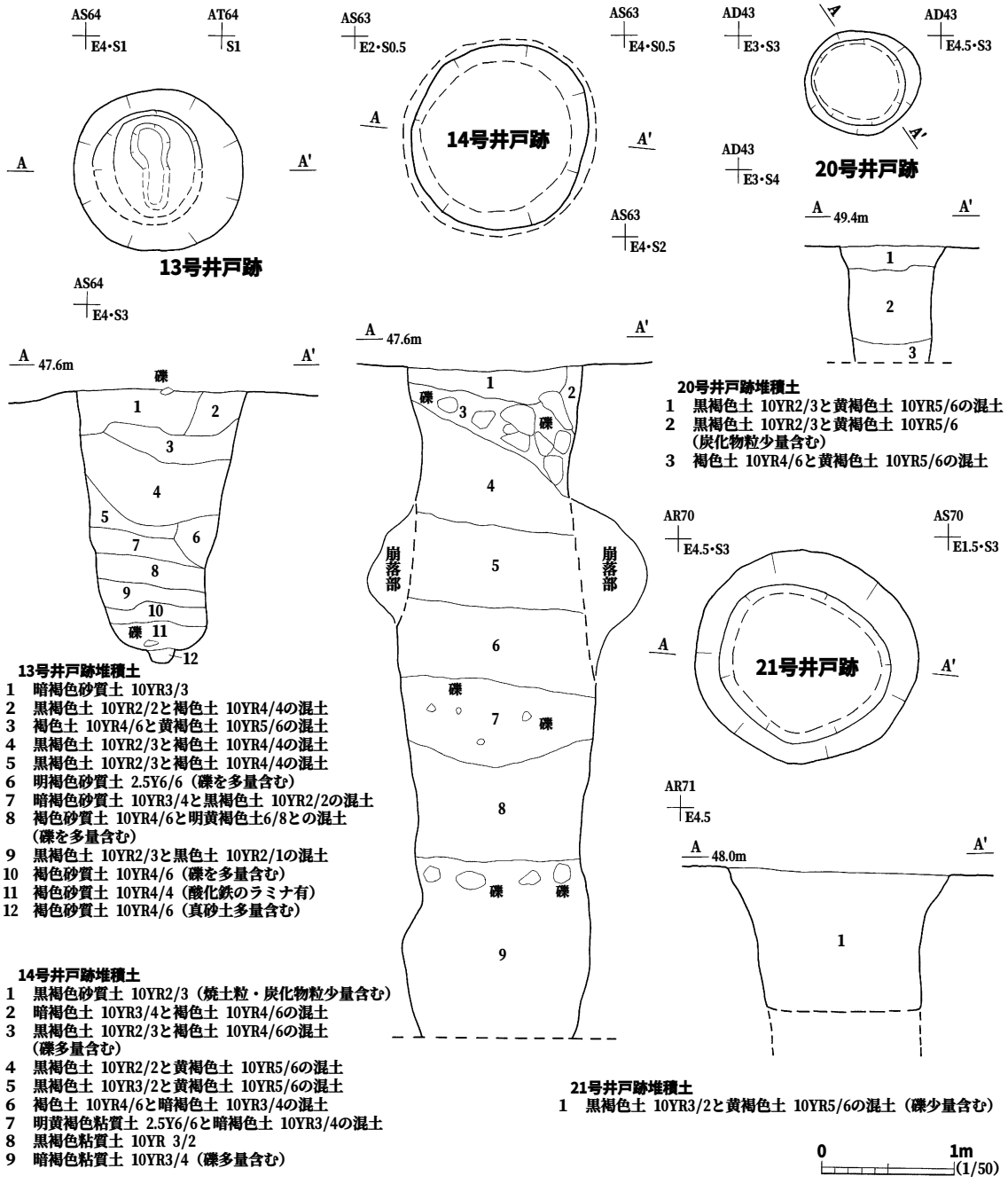
24図１は片口付摺鉢で，10条１単位とする卸目が隙間なく施され，使用による磨耗が激しい。同図２は小型壺の底部で，19世紀後半頃に比定できる。同図３は鉄製の釘である。

本遺構時期は出土遺物から19世紀前半頃の所産と考えられる。また，漏斗状に開く周壁と，礫がくびれ部から下の層には少ない点などから，本井戸跡は他と違って本来は石組み井戸で堆積土中の

多量の石は石組を破壊して投棄したことによるものと推測している。　（宮　田）

20 号 井 戸 跡　ＳＥ20 （図23，写真223）

本遺構は北区との境，町道中島－高田線部分にあたるＡＤ43グリッドに位置する。周辺には土坑が集中している。検出面はＬⅣ上面である。平面形は円形を呈し，上端での規模は径約80㎝を測る。遺構自体が小規模で深く掘り下げるのは危険と判断し，底面までは完掘していないので深さなどは不明である。



13号井戸跡堆積土
1　暗褐色砂質土 10YR3/3
2　黒褐色土 10YR2/2と褐色土 10YR4/4の混土
3　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　黒褐色土 10YR2/3と褐色土 10YR4/4の混土
5　黒褐色土 10YR2/3と褐色土 10YR4/4の混土
6　明褐色砂質土 2.5Y6/6（礫を多量含む）
7　暗褐色砂質土 10YR3/4と黒褐色土 10YR2/2の混土
8　褐色砂質土 10YR4/6と明黄褐色土6/8との混土（礫を多量含む）
9　黒褐色土 10YR2/3と黒色土 10YR2/1の混土
10　褐色砂質土 10YR4/6（礫を多量含む）
11　褐色砂質土 10YR4/4（酸化鉄のラミナ有）
12　褐色砂質土 10YR4/6（真砂土多量含む）

14号井戸跡堆積土
1　黒褐色砂質土 10YR2/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/6の混土
3　黒褐色土 10YR2/3と褐色土 10YR4/6の混土（礫多量含む）
4　黒褐色土 10YR2/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
6　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/4の混土
7　明黄褐色粘質土 2.5Y6/6と暗褐色土 10YR3/4の混土
8　黒褐色粘質土 10YR 3/2
9　暗褐色粘質土 10YR3/4（礫多量含む）

20号井戸跡堆積土
1　黒褐色土 10YR2/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　黒褐色土 10YR2/3と黄褐色土 10YR5/6（炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土

21号井戸跡堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土（礫少量含む）

図23　13・14・20・21号井戸跡

堆積土は３層まで認められ，全ての層にＬIVを基質とする黄褐色土を含み，ほぼ水平に堆積していることから，人為的に埋めたものと考えられる。

本遺構は素掘りの井戸と考えられる。出土遺物がなく年代を決定しにくいが，堆積土が他の近世頃の遺構と類似することから，埋め戻されたのは近世かそれ以降ということになろう。　（宮　田）

21 号 井 戸 跡　ＳＥ21 （図23，写真223）

本遺構は南区の南東部に近いＡＲ・ＡＳ70グリッドにまたがって位置する。検出面はＬIV上面であり，黄褐色土と黒褐色土の混土の広がりとして検出した。他遺構との重複はない。

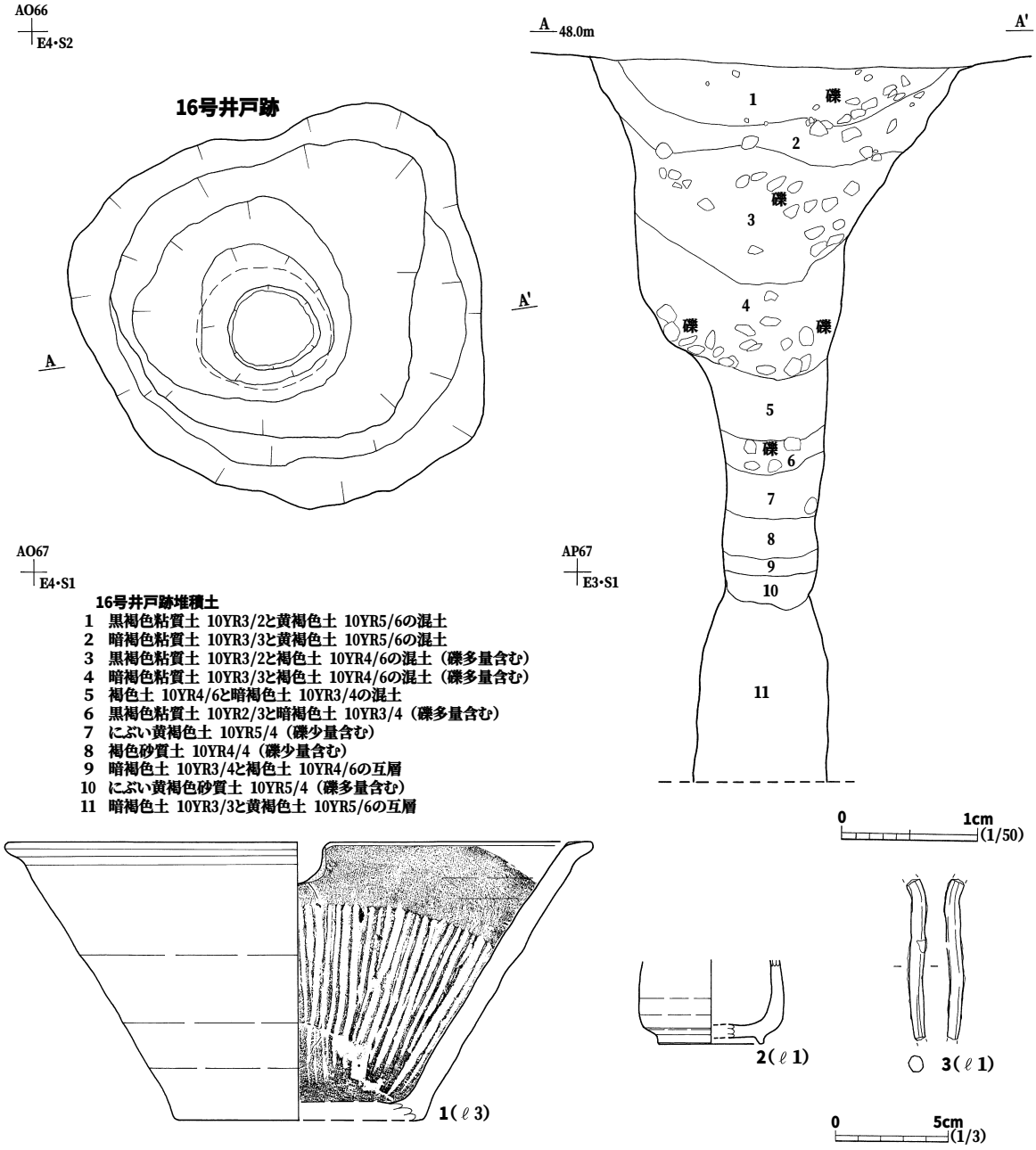


図24　16号井戸跡と出土遺物

平面形はやや不整な楕円形で，検出面での規模は170×150㎝を測る。堆積土の締まりが弱く，作業中の崩落が懸念されたので，完掘はしていない。よって，深さや底面の状況は不明である。

堆積土はℓ１のみ確認した。黄褐色土を含んだ黒褐色土が１m以上の厚さで堆積しており，人為的に埋めたものと考えられる。埋められた時期は堆積土から近世頃と考えられる。　（宮　田）

第５節　土　　坑

遺　構（図25～35，写真226・227・231～233・243・244・255・262・263・273・275・276・281・340～347）

３次調査の南区では，合計91基の土坑が検出された。時代は縄文時代・平安時代・中～近世と幅が広く，年代を特定できないものも少なくない。表５に土坑の総括を表６に遺構計測一覧を示した。なお，遺物が出土した土坑はわずかであるため，土坑の年代を決定するにあたっては，その多くが遺構内堆積土の特徴を根拠としている。

南区で帰属年代を把握しえた遺構は表５の通りである。しかし，ここでは個別にそれらの特性を述べるのではなく，それぞれの特徴ごとに概括的なまとめをおこなって行くこととする。

表５　南区土坑総括

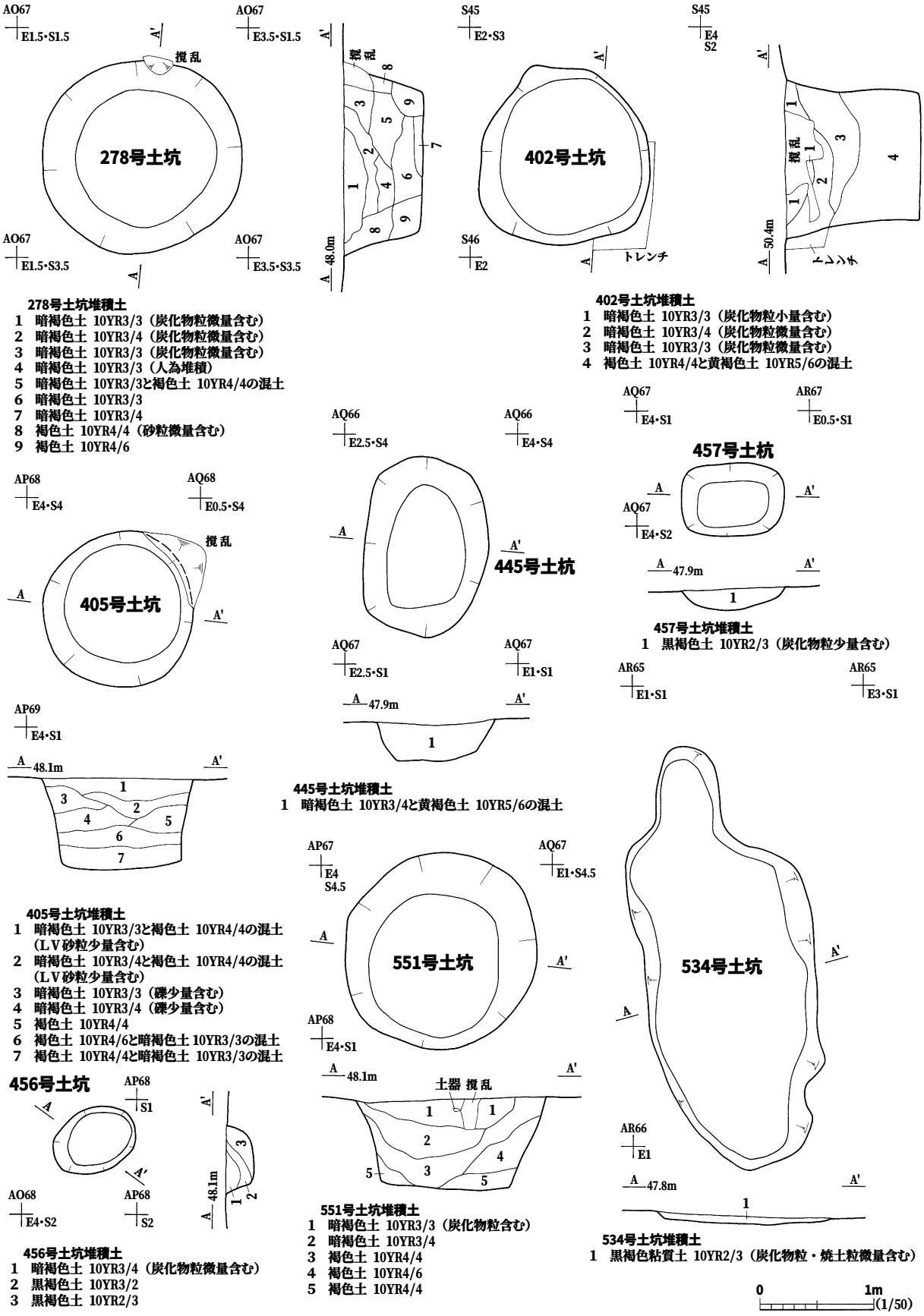
時　代	番　号
縄　文	278・402・405・551・552・556・559・561・568・734・741・966・967・968・969・1551・1552・1553・1555・1556・1557・1562・1563・1564・1566・1567・1568・1571・1572・1581・1586・1588・1593・1596・1599・1600・1604・1605・1606・1608・1609・1610・1611　計43基
平　安	564・566・1602　計３基
中・近世	445・456・457・534・557・558・560・562・563・569・663・853・855・866・867・875・1558・1582・1583・1585・1591・1595・1597・1598・1613　計24基

縄文時代の土坑として代表的な形状のものとしては，円形の土坑と長楕円形の両者がある。前者には，壁が直立するビーカー状のものや内傾するフラスコ状のものが多く，いずれも貯蔵穴と推測される。後者の長楕円形のものとしては，559・1572・1592号土坑の３基が挙げられる。これらは，1572号土坑のように，底面にピットを有し落し穴と考えられるものもあるが，それ以外は底面にピットを有していない。壁の立ち上がりが緩やかであるが，これらも落し穴状土坑の一種と推測される。

平安時代の土坑と考えられるものは564・566・1602号土坑の３基である。明確な特徴は把握できなかった。564号土坑からは須恵器片が，566号土坑からは土師器片が出土している。

中・近世の土坑では，代表的なものの一つに445号土坑がある。本土坑からは人骨こそ出土しなかったが，人為的な堆積土の中から永楽通宝が６枚出土した。死者を葬る際に遺体に添える六道銭と考えられることから，おそらく墓壙と考えられる。

次に，底面に粘土を敷きつめた土坑が挙げられる。平面形では，円形と正方形の両者がある。特に，南区の南端付近で検出された1613号土坑は，木製の桶あるいは樽などを設置した施設と考えられ，敷設粘土であるℓ２上面から寛永通宝が28枚出土している。この他，近世土坑と考えられるも



278号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3（人為堆積）
5　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/4の混土
6　暗褐色土 10YR3/3
7　暗褐色土 10YR3/4
8　褐色土 10YR4/4（砂粒微量含む）
9　褐色土 10YR4/6

402号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒小量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）
4　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

457号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR2/3（炭化物粒少量含む）

445号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

405号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/4の混土（ＬＶ砂粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/4の混土（ＬＶ砂粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（礫少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/4（礫少量含む）
5　褐色土 10YR4/4
6　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/3の混土
7　褐色土 10YR4/4と暗褐色土 10YR3/3の混土

551号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物含む）
2　暗褐色土 10YR3/4
3　褐色土 10YR4/4
4　褐色土 10YR4/6
5　褐色土 10YR4/4

534号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土 10YR2/3（炭化物粒・焼土粒微量含む）

456号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒微量含む）
2　黒褐色土 10YR3/2
3　黒褐色土 10YR2/3

図25　278・402・405・445・456・457・534・551号土坑

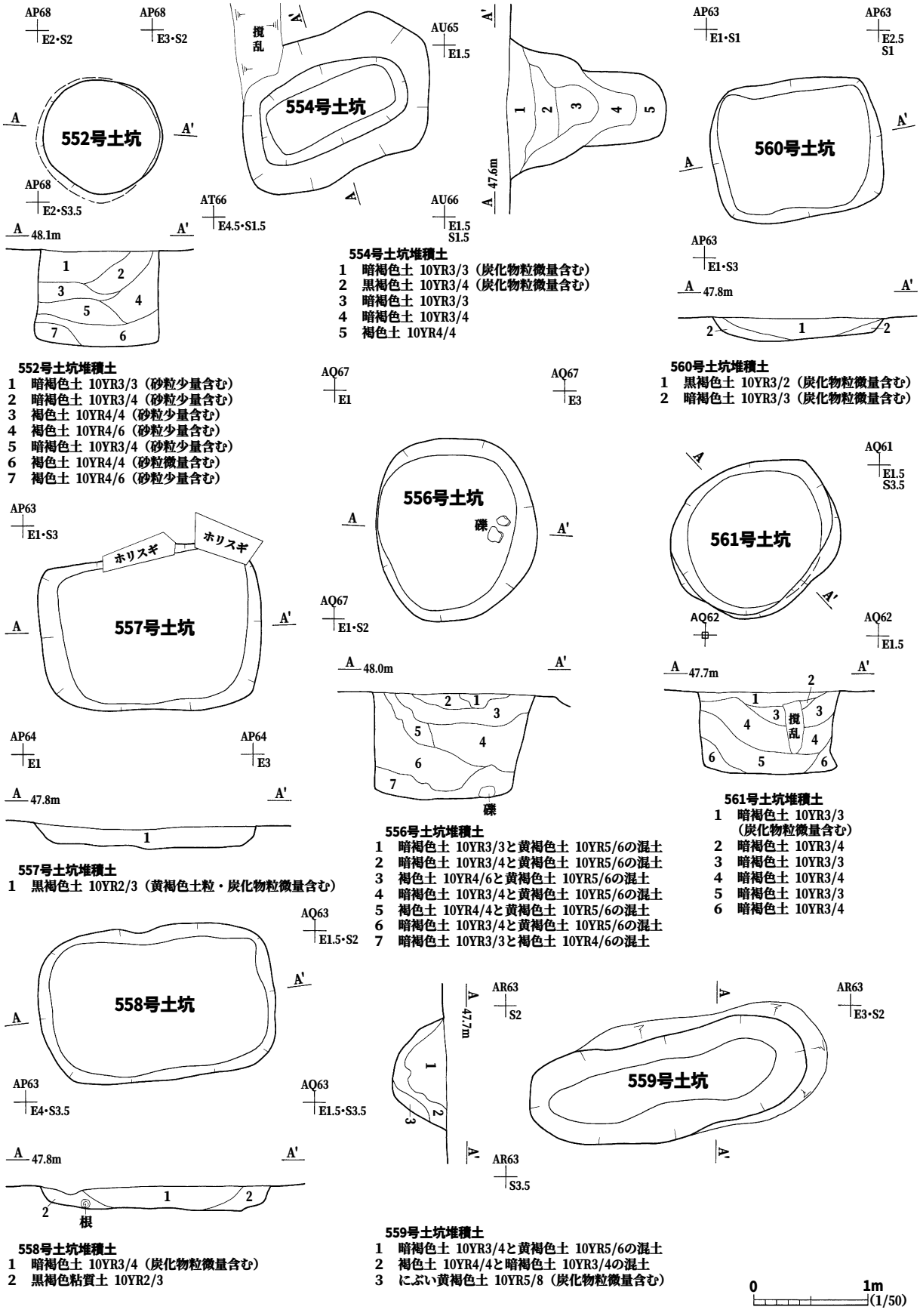
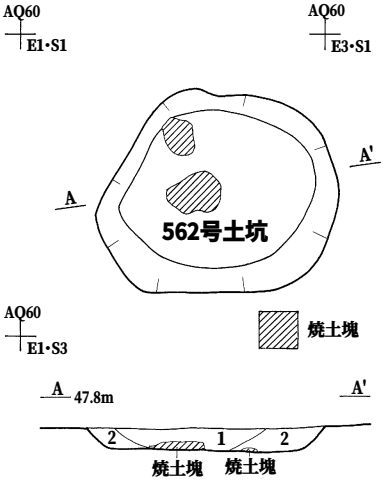
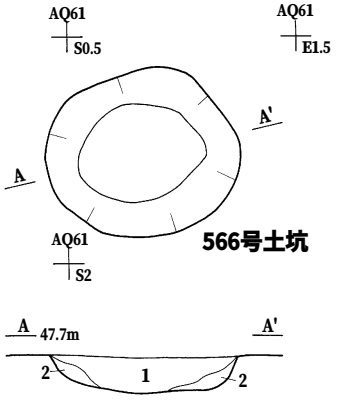


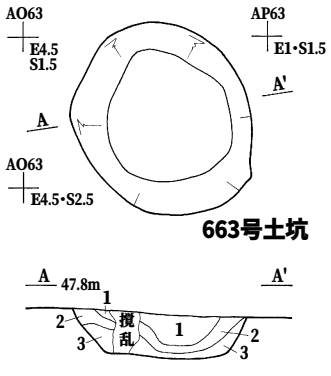
図26　552・554・556～561号土坑



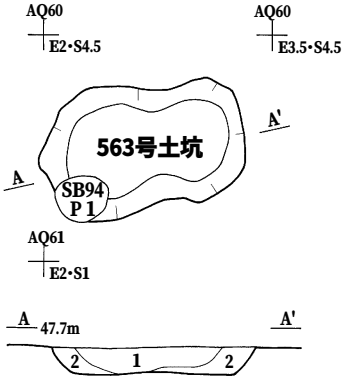
562号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（炭化物片・焼土粒含む）
2　黒褐色土 10YR2/3（焼土粒・塊多量含む）



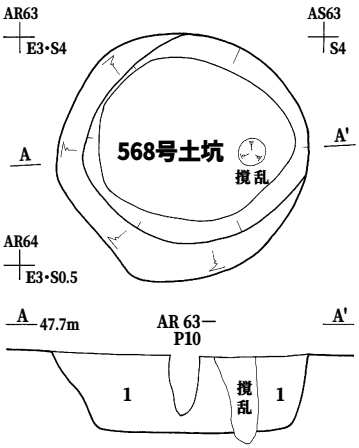
566号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3



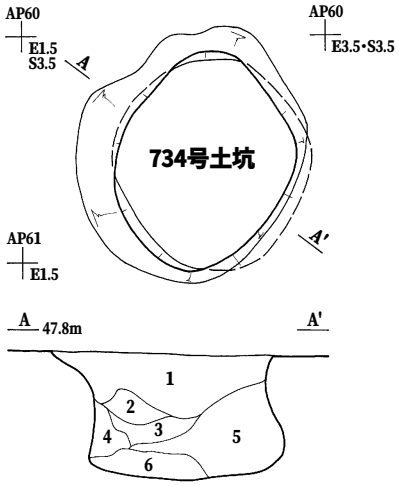
663号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/4の混土



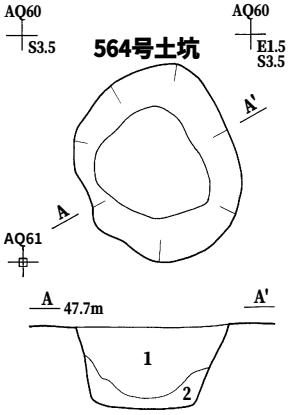
563号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（炭化物粒微量含む）
2　黒褐色土 10YR2/3（炭化物粒微量含む）



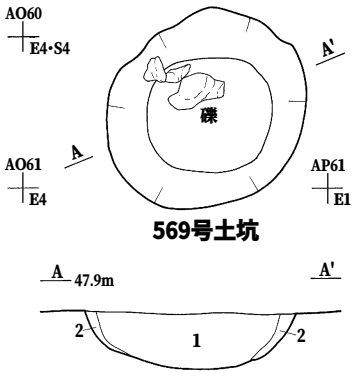
568号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒微量含む）



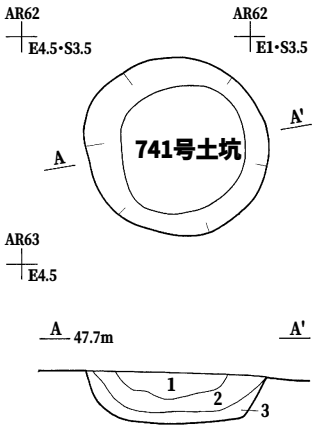
734号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/4
2　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/6の混土
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と暗褐色土 10YR3/3の混土
4　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　暗褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
6　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土



564号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒含む）
2　暗褐色土 10YR3/3



569号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）



741号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4

図27　562～564・566・568・569・663・734・741号土坑

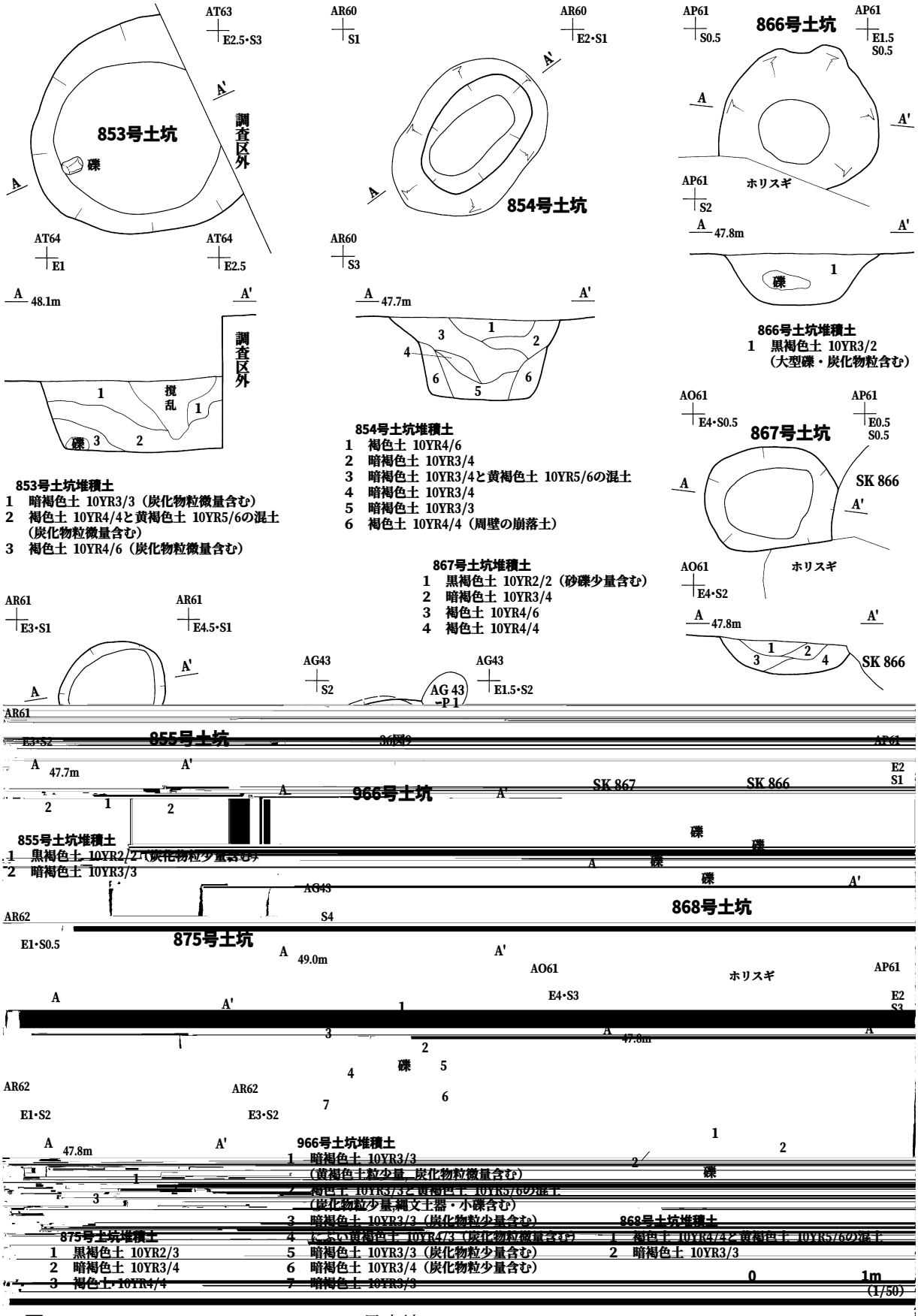
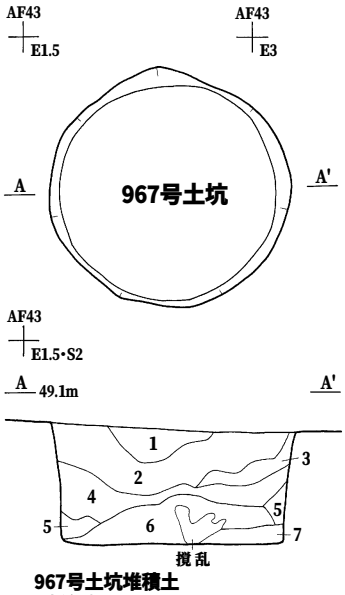
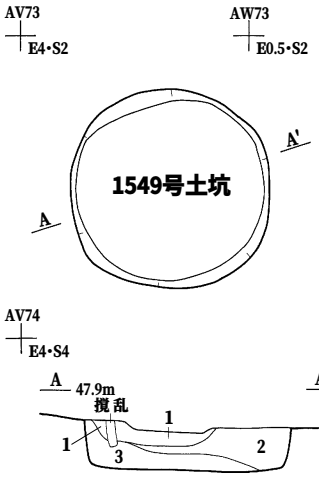


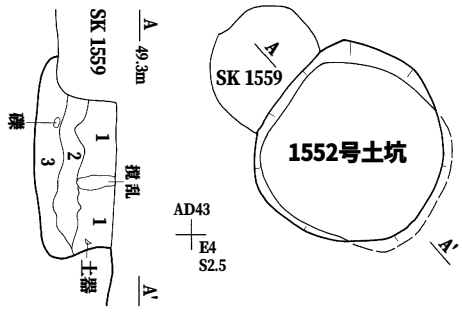
図28　853～855・866～868・875・966号土坑

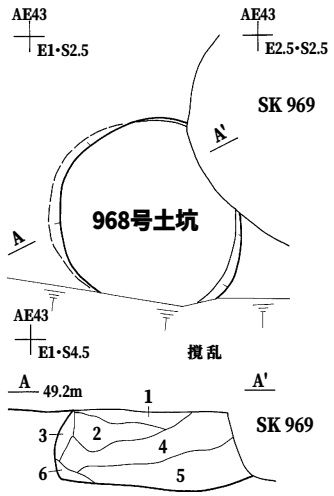


967号土坑堆積土
1　褐色土 10YR3/3
2　褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　暗褐色土 10YR3/3
4　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　暗褐色土 10YR3/3
6　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
7　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

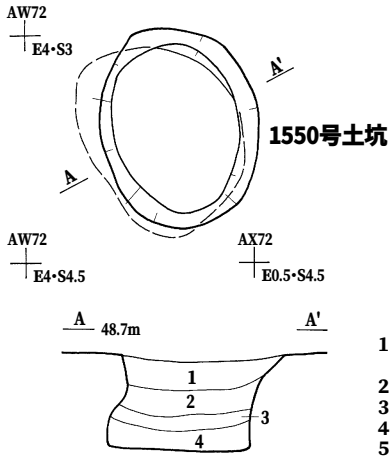


1549号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）

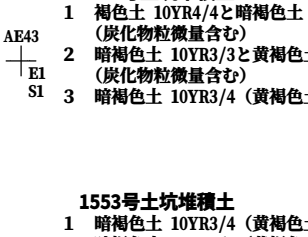




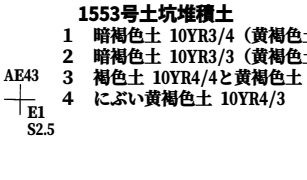
968号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/4（壁の崩落土）
4　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
6　にぶい黄褐色土 10YR4/3



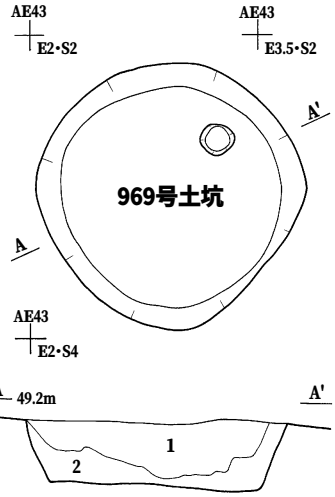
1550号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/6（砂礫少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（砂礫少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（砂粒少量含む）
4　褐色土 10YR4/4（砂粒少量含む）



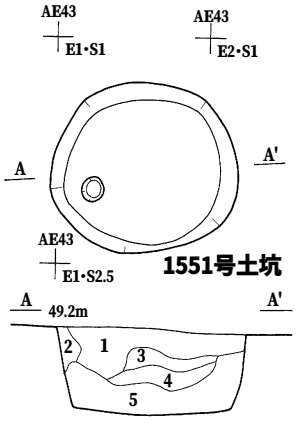
1552号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/4と暗褐色土 10YR3/3の混土（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）



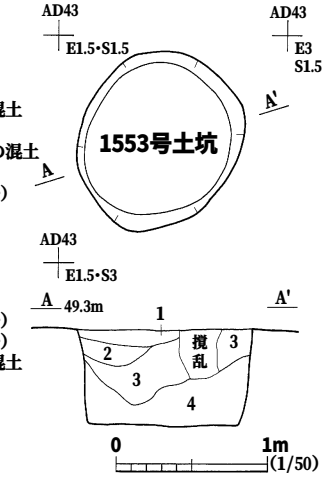
1553号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3



969号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）



1551号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/4（炭化物粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/4の混土
5　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）



1553号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3

図29　967～969・1549～1553号土坑

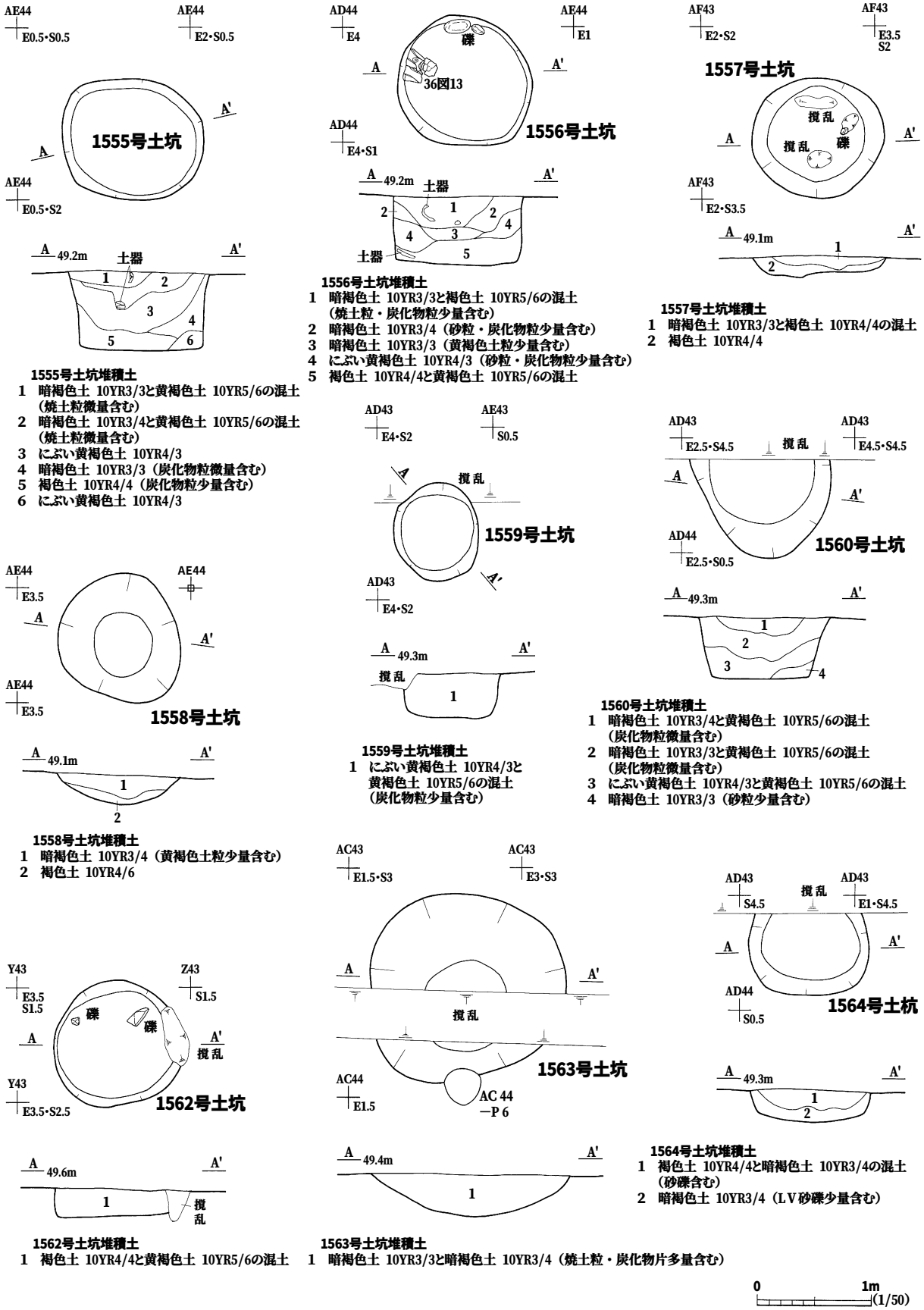
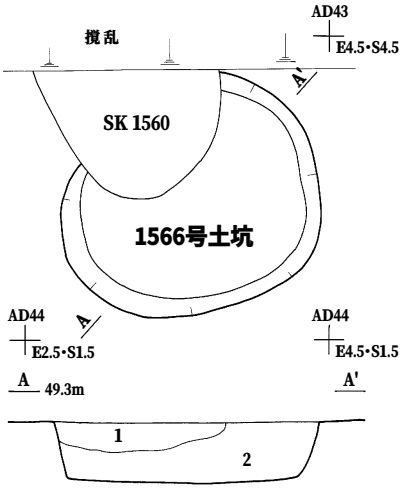
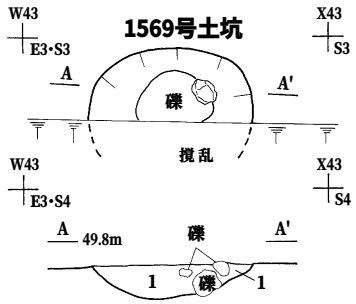


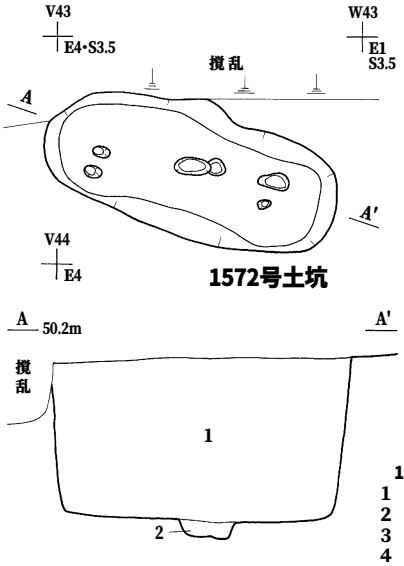
図30　1555～1560・1562～1564号土坑



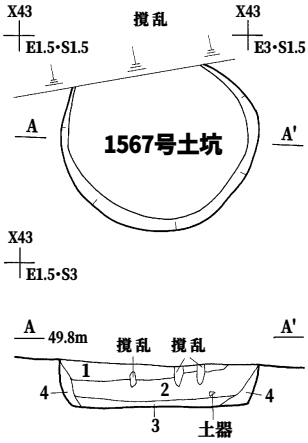
1566号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6（炭化物粒少量含む）



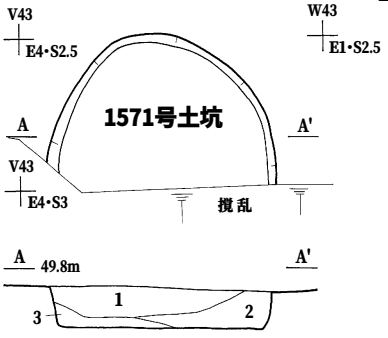
1569号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒多量・礫少量含む）



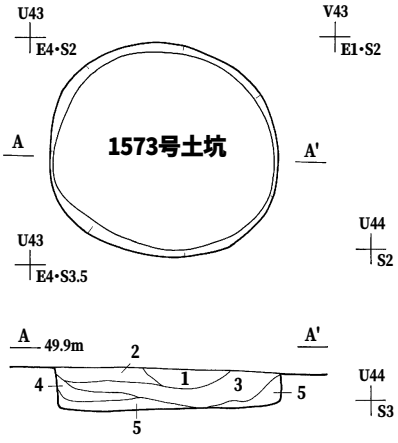
1572号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒・焼土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）



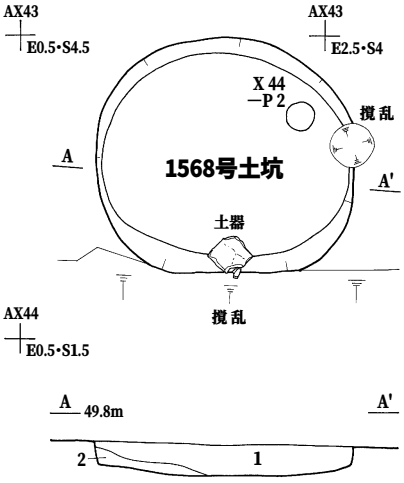
1567号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
3　黄褐色土 10YR5/8（暗褐色土粒少量含む）
4　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）



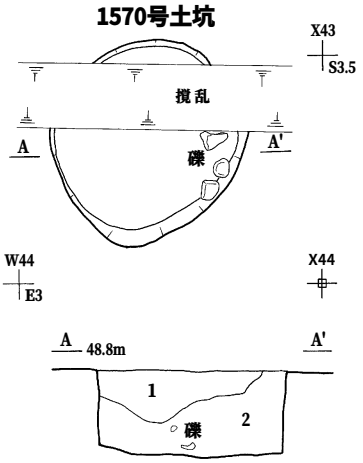
1571号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/4（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR5/4（炭化物粒少量含む）



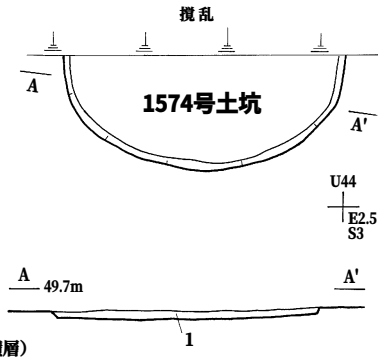
1573号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/6（炭化物粒少量含む）
4　黒褐色土 10YR2/3（炭化物粒多量含む，有機質の集積層）
5　にぶい黄褐色土5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）



1568号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒 10YR5/6少量含む）



1570号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）



1574号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）

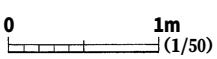
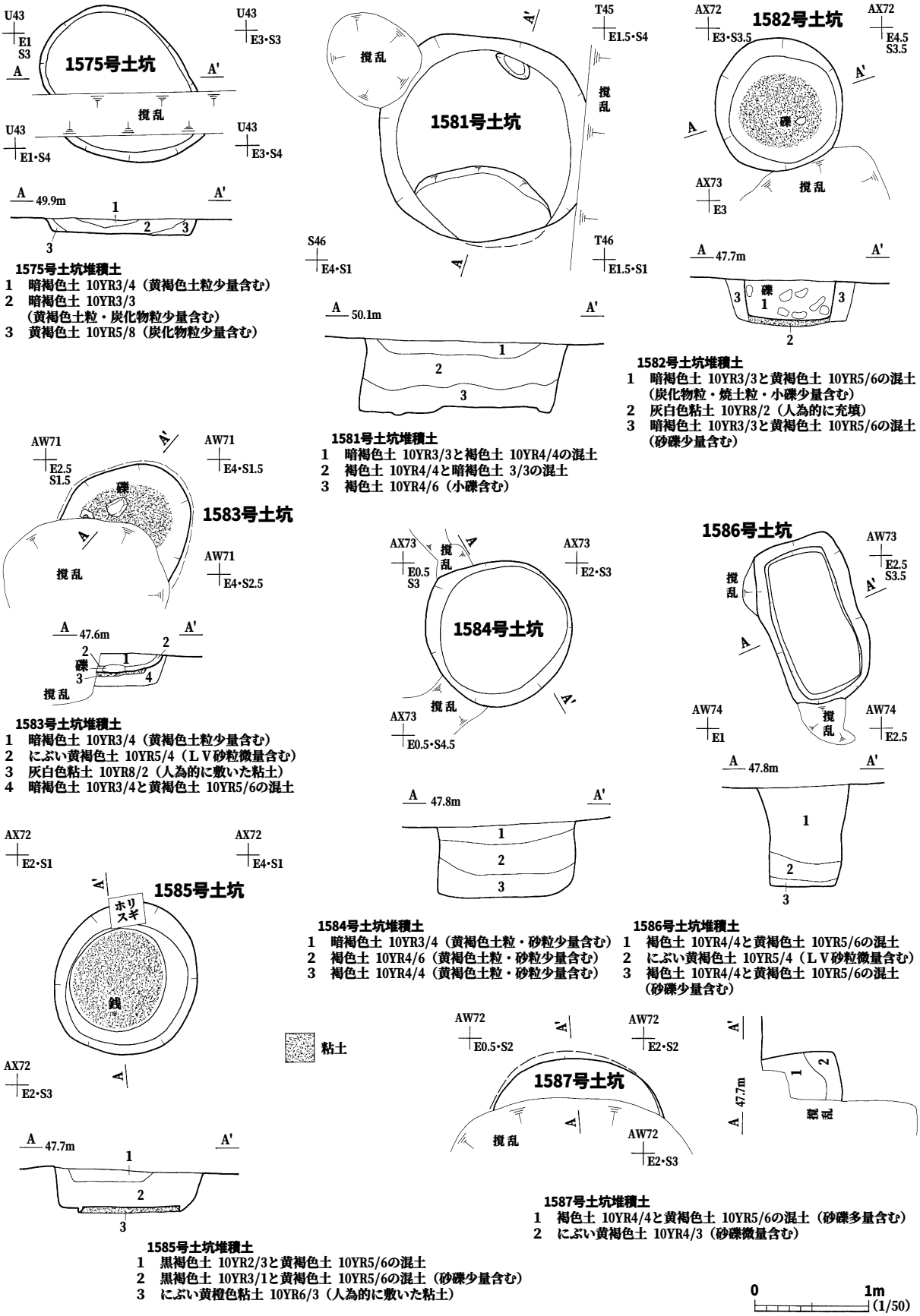


図31　1566～1574号土坑



1575号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3
（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
3　黄褐色土 10YR5/8（炭化物粒少量含む）

1581号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/4の混土
2　褐色土 10YR4/4と暗褐色土 3/3の混土
3　褐色土 10YR4/6（小礫含む）

1582号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒・焼土粒・小礫少量含む）
2　灰白色粘土 10YR8/2（人為的に充填）
3　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（砂礫少量含む）

1583号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/4（ＬＶ砂粒微量含む）
3　灰白色粘土 10YR8/2（人為的に敷いた粘土）
4　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

1584号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・砂粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・砂粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・砂粒少量含む）

1585号土坑堆積土
1　黒褐色土 10YR2/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　黒褐色土 10YR3/1と黄褐色土 10YR5/6の混土（砂礫少量含む）
3　にぶい黄橙色粘土 10YR6/3（人為的に敷いた粘土）

1586号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR5/4（ＬＶ砂粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（砂礫少量含む）

1587号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（砂礫多量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（砂礫微量含む）

図32　1575・1581～1587号土坑

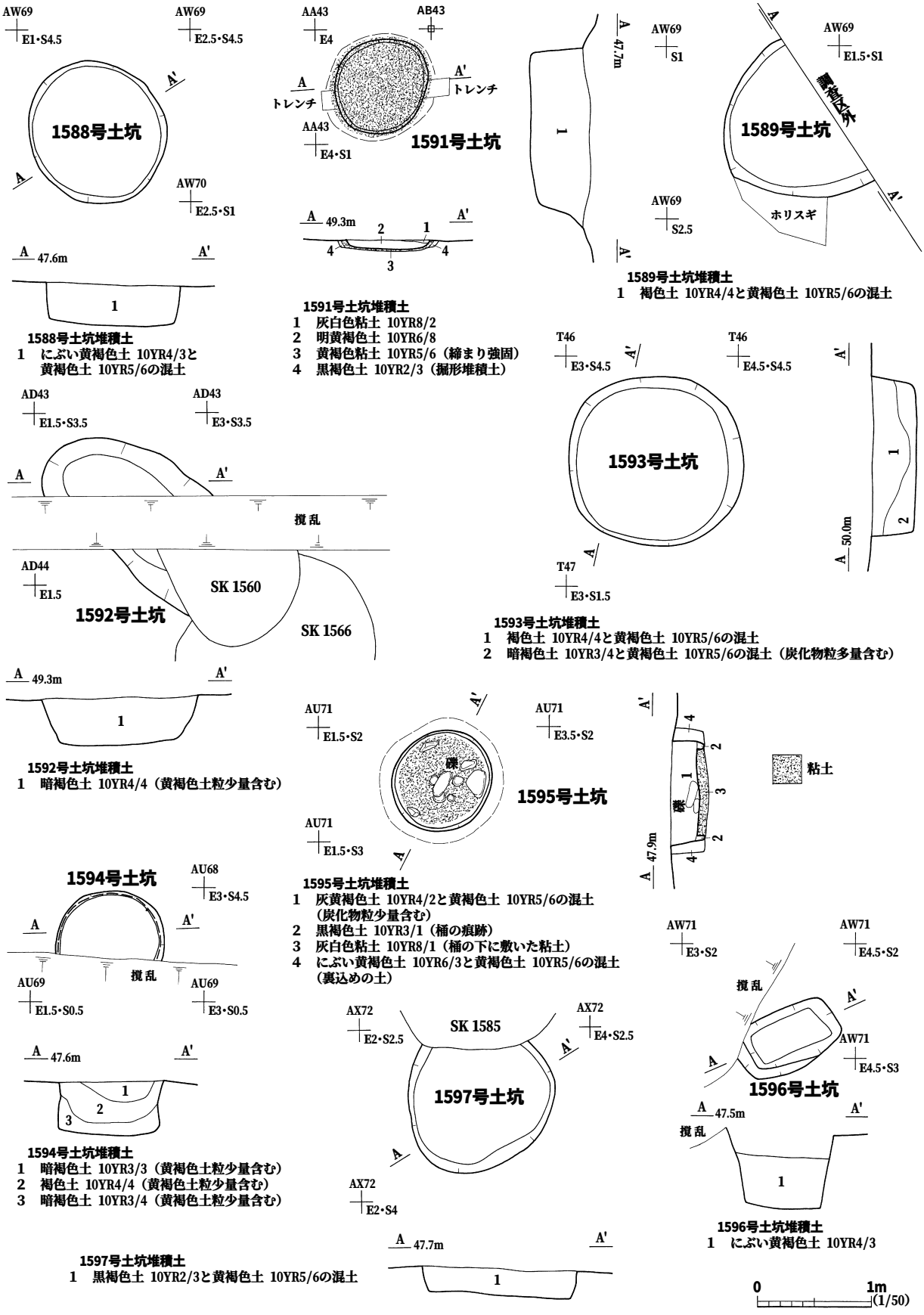


図33　1588・1589・1591～1597号土坑

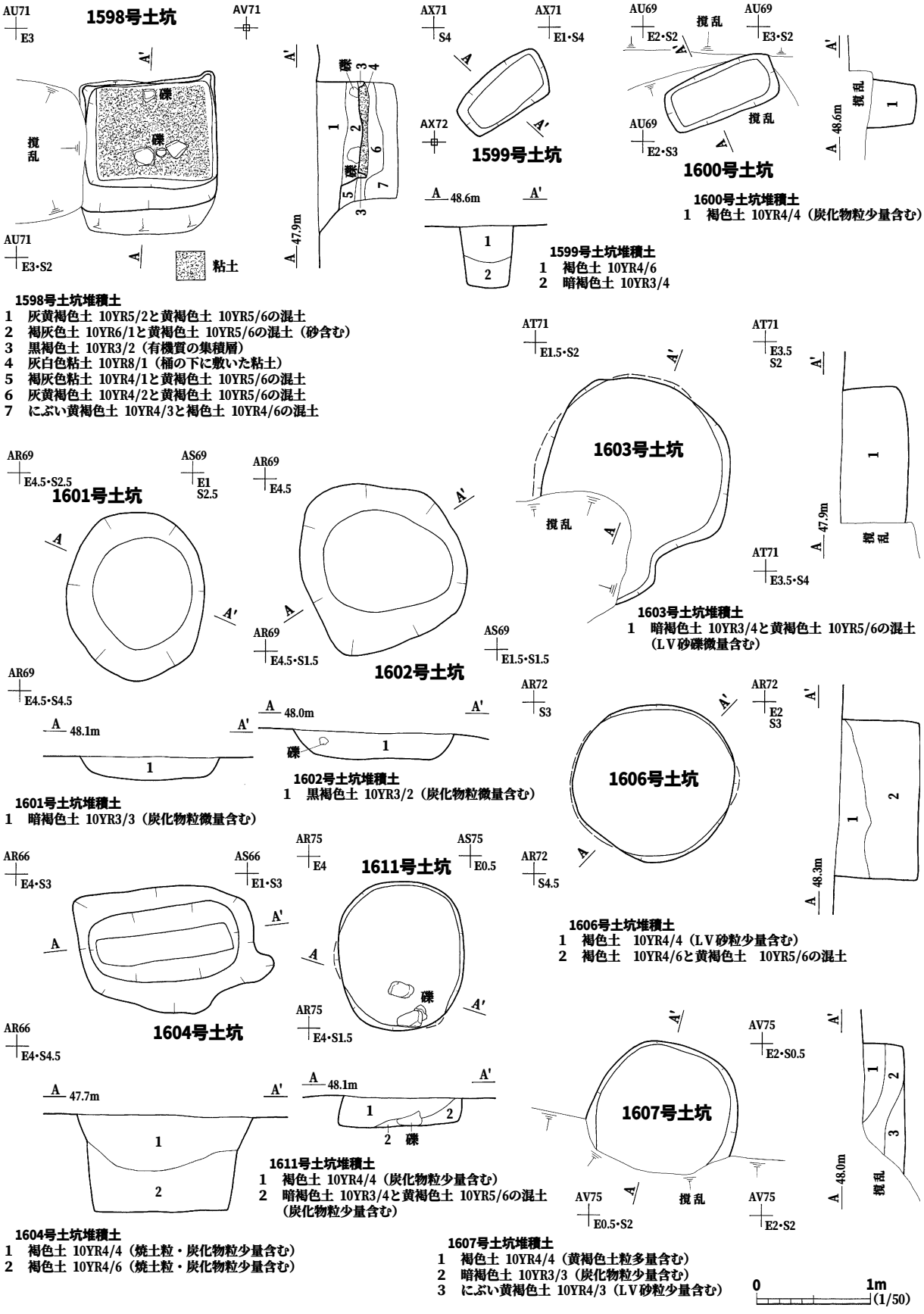


図34　1598～1604・1606・1607・1611号土坑

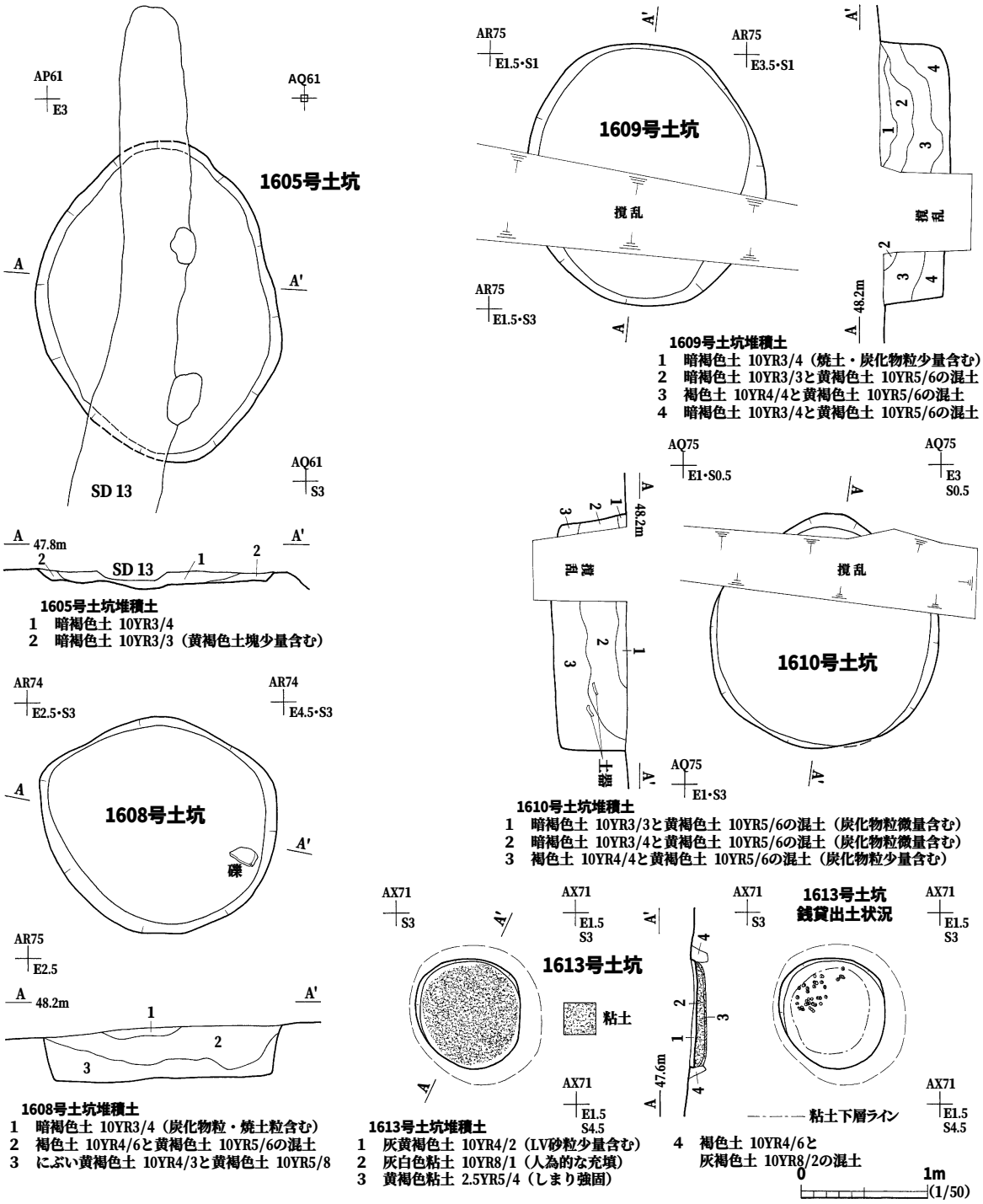


図35　1605・1608～1610・1613号土坑

のには，不整な長方形で底面と壁の境が明確でないものなどがある。　（宮　田）

遺　物（図36・37，写真363・365・368）

図36・37に，抽出した遺物をまとめた。各土坑の出土遺物については，表６を参照願いたい。

遺構番号の若い順から土坑番号を付して説明する。

445号土坑（図36，写真363）36図１～３は銭貨の永楽通宝である。６点出土したがこの内３点を図示した。字体は１・３が２に比べてはっきりし，２では「樂」字が崩れている。

表６　馬場前遺跡南区土坑一覧表(1)

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド番号）	平面形 底面形状	長軸方向	規模 確認面(cm)	規模 底面(cm)	規模 深さ(cm)	断面形 短軸の形状	重複関係 古→新	堆積状況 人為・自然の別と堆積順序 古→新	出土遺物	遺物挿図番号	機能時期	備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
278	25	ＡＯ67	円	Ｎ５℃	170	120	68	皿		自９～６→人５・４→自３～１			縄文	ℓ４は，有機質の集積層の可能性あり。	226			高橋
402	25	Ｓ45	楕円	Ｎ10 Ｗ	155×145	135×120	118	ピーカー		人４→自３～１	石器１		縄文		227			門脇
405	25	ＡＰ・ＡＱ68・69	円	Ｎ25 Ｗ	135	105	80	ピーカー		人７・６→人５～３→自２・１	縄文土器４，石器１		縄文					宮田
445	25	ＡＱ66・67	楕円	Ｎ５℃	160×110	105×65	34	皿		人１	銭貨６，縄文土器１	36	中世？	銭貨；永楽通寶。	231	363		宮田
456	25	ＡＯ68	楕円	Ｎ60℃	75×55	50×45	24	ボウル		自３～１			近世？		232			宮田
457	25	ＡＱ・ＡＲ67	隅丸長	Ｎ88 Ｗ	90×63	62×38	20	皿		自１			近世？		233			宮田
534	25	ＡＲ65・66	不整	Ｎ12 Ｗ	370×150	351×120	10	皿		自１			近世？					阿部
551	25	ＡＰ・ＡＱ67・68	円	Ｎ17 Ｗ	170	120	80	皿		自５～１	縄文土器２，石器１		縄文		243			高橋
552	26	ＡＰ68	円	Ｎ45 Ｗ	100	107	82	ピーカー		自７～１			縄文		243			高橋
554	26	ＡＴ・ＡＵ66	長方	Ｎ63℃	180×130	115×45	140	ピーカー		自５～１	縄文土器２			落とし穴状土坑。	243			宮田
556	26	ＡＱ67	楕円	Ｎ10℃	160×140	135×121	93	ピーカー		自７～１	縄文土器５		縄文	ℓ７は，有機質の集積層の可能性あり。	243			高橋
557	26	ＡＰ63	長方	Ｎ87℃	193×145	160×128	16	皿		自１			近世？		243			高橋
558	26	ＡＰ・ＡＱ63	隅長	Ｎ85℃	203×135	187×110	20	皿		自２・１			近世？		243			阿部
559	26	ＡＲ63	長楕円	Ｎ78℃	265×105	200×38	47	ボウル		自３→人２・１			縄文	落とし穴状土坑？	243			高橋
560	26	ＡＰ63	隅長	Ｎ78℃	150×120	128×101	20	皿		自２・１			近世？		243			阿部
561	26	ＡＰ・ＡＱ61	楕円	Ｎ58℃	150×135	125×115	70	ピーカー		自６～１	縄文土器15，石器１		縄文		244			高橋
562	27	ＡＱ60	楕円	Ｎ80℃	162×140	132×107	15	皿		自２・１	縄文土器４		近世？	底面に焼土塊の投棄あり。	244			高橋
563	27	ＡＱ60・61	不長	Ｎ77℃	135×87	109×60	15	皿		自２・１			近世？		244			高橋
564	27	ＡＱ60	楕円	Ｎ26 Ｗ	125×110	73×68	54	皿		自２・１	縄文土器５，須恵器１		平安		244			高橋
566	27	ＡＰ・ＡＱ61	楕円	Ｎ77℃	125×110	85×65	23	皿		自２・１	縄文土器２，土師器１		平安					高橋
568	27	ＡＲ63・64	円	Ｎ87℃	165	130	52	皿		人１	縄文土器３，石器１		縄文					阿部
569	27	ＡＯ・ＡＰ60・61	楕円	Ｎ67℃	138×125	83×75	36	ボウル		自２・１	礫３		近世	底面より径10～40㎝の礫３個出土。	244			高橋
663	27	ＡＯ・ＡＰ63	不楕円	Ｎ30 Ｗ	135	85	30	皿		自３→人２・１			近世？		255			高橋
734	27	ＡＰ60・61	楕円	Ｎ10℃	175×150	140×120	83	ピーカー		人６～３→自２・１	縄文土器２		縄文		262			高橋
741	27	ＡＲ・ＡＳ62	円	Ｎ80℃	120	81	35	ボウル		自３～１			縄文		263			高橋
853	28	ＡＴ63	円	Ｎ65 Ｗ	190	137	63	皿		自３→人２→自１	縄文土器31，土師器１	36	中・近世？		273			高橋
854	28	ＡＲ60	楕円	Ｎ44℃	155×107	87×40	70	ピーカー		自６～４→人３→自２・１	縄文土器３，土製品１	36		落とし穴状土坑？	273	365		高橋
855	28	ＡＲ61	楕円	Ｎ43℃	95×85	83×76	19	皿		自２・１			近世？					高橋
866	28	ＡＰ61	不円	Ｎ53 Ｗ	140	60	48	ボウル	ＳＫ867→ＳＫ866	自１	縄文土器16，石器２		近世？		275			高橋
867	28	ＡＯ・ＡＰ61	楕円	Ｎ90 Ｗ	115×90	75×59	33	ボウル	ＳＫ868→ＳＫ867→ＳＫ866	自４～１			近世？		275			高橋
868	28	ＡＯ・ＡＰ61	円	Ｎ13 Ｗ	145	130	90	ピーカー	ＳＫ868→ＳＫ867→ＳＫ866	自２→人１	縄文土器９				275			高橋
875	28	ＡＲ62	不楕円	Ｎ12℃	135×110	105×77	38	皿		自３～１			近世？		276			宮田
966	28	ＡＦ・ＡＧ43	楕円	Ｎ15 Ｗ	170	155	115	ピーカー		自７～３→人２→自１	縄文土器25，石器６	36	縄文					宮田
967	29	ＡＦ43	円	Ｎ88℃	160	142	84	ピーカー		人７・６→自５→人４→自３→人２→自１	縄文土器１		縄文	ℓ７は，有機質の集積層の可能性あり。	281			宮田
968	29	ＡＥ43	円	Ｎ42 Ｗ	120	130	50	フラスコ		自６→人５・４→自３→人２→自１	縄文土器12，石器５		縄文		281			宮田
969	29	ＡＥ43	円	Ｎ13 Ｗ	175	142	42	皿		人２・１	縄文土器４，石器１		縄文	底面に径10～20㎝の小穴２基あり。	281			宮田
1549	29	ＡＶ・ＡＷ73	円	Ｎ45℃	140	125	32	皿		自３→人２→自１					340			坂田
1550	29	ＡＷ・ＡＸ72	楕円	Ｎ13 Ｗ	133	127	60	ピーカー		自４～１					341			坂田

表６　馬場前遺跡南区土坑一覧表(2)

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド番号）	平面形 底面形状	長軸方向	規模 確認面(cm)	規模 底面(cm)	規模 深さ(cm)	断面形 短軸の形状	重複関係 古→新	堆積状況 人為・自然の別と堆積順序 古→新	出土遺物	遺物挿図番号	機能時期	備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
1551	29	ＡＥ43	円	Ｎ87 ℃Ｅ	124	102	55	Ⅲ		自５→人４・３→自２→人１	縄文土器14		縄文		341			宮田
1552	29	ＡＤ・ＡＥ43	不円	Ｎ18 ℃Ｗ	145×130	125×120	56	ピーカー		自３→人２・１	縄文土器16，石器７		縄文					宮田
1553	29	ＡＤ43	楕円	Ｎ15 ℃Ｅ	123×105	90	61	ピーカー		自４→人３→自２・１	縄文土器10，石器１	36	縄文		341			宮田
1555	30	ＡＥ44	楕円	Ｎ85 ℃Ｗ	125×105	110×93	66	ピーカー		自６～３→人２・１	縄文土器26，石器７		縄文		341			宮田
1556	30	ＡＤ・ＡＥ43・44	楕円	Ｎ40 ℃Ｗ	120×115	113×100	60	ピーカー		自５～２→自１	縄文土器113，石器９，鉄滓１	36	縄文		341	368		宮田
1557	30	ＡＦ43	円	Ｎ45 ℃Ｗ	110	80	18	Ⅲ		自２→人１	縄文土器24		縄文		341			宮田
1558	30	ＡＥ43・44	不楕円	Ｎ28 ℃Ｗ	115×105	55×50	26	ボウル		自２・１			近世？		341			宮田
1559	30	ＡＤ43	楕円	Ｎ18 ℃Ｗ	83×74	65	38	ピーカー	ＳＫ1552→ＳＫ1559	人１					341			宮田
1560	30	ＡＤ44・43	円	Ｎ83 ℃Ｗ	120	83	53	Ⅲ	ＳＫ1566→ＳＫ1560	自４→人３～１					342			宮田
1562	30	Ｙ43	円	Ｎ45 ℃Ｅ	115	100	26	ピーカー		人１	礫２		縄文	底面より，径10cm程度の礫２個出土。	342			阿部
1563	30	ＡＣ43	円	Ｎ88 ℃Ｗ	170	70	38	Ⅲ		人１	縄文土器17，石器２		縄文		342			阿部
1564	30	ＡＤ43・44	楕円	Ｎ88 ℃Ｅ	104×70	84×60	28	Ⅲ		自２→人１			縄文		342			阿部
1566	31	ＡＤ43・44	楕円	Ｎ60 ℃Ｅ	180×160	155×140	40	Ⅲ	ＳＫ1566→ＳＫ1560	人２・１	縄文土器７，石器２		縄文		342			宮田
1567	31	Ｘ43	円	Ｎ75 ℃Ｅ	130	118	28	ピーカー		自４～２→人１	縄文土器17，石器１	37	縄文		342			門脇
1568	31	ＡＸ43・44	楕円	Ｎ85 ℃Ｗ	170×158	160×135	22	ピーカー		自２→人１	縄文土器24，石器４	37	縄文		343			門脇
1569	31	Ｗ43	楕円	Ｎ88 ℃Ｗ	105	50	22	ボウル	ＳＫ1569→ＳＫ1570	人１	礫１			底面より，径15cm程度の礫１個出土。	343			門脇
1570	31	Ｗ43	不円	Ｎ10 ℃Ｅ	137	125	57	ピーカー		人２→自１				底面より，径10～15cm程度の礫３個出土。	343			門脇
1571	31	Ｖ・Ｗ43	円	Ｎ88 ℃Ｗ	150	136	28	ピーカー		自３～１	縄文土器17，陶磁器１，石器１		縄文		343			門脇
1572	31	Ｖ・Ｗ43	楕円	Ｎ72 ℃Ｗ	198×90	175×55	107	ピーカー		自２・１	縄文土器21，石器４		縄文	落とし穴状土坑。ℓ２は小穴の堆積土。	343			門脇
1573	31	Ｕ・Ｖ43	円	Ｎ89 ℃Ｗ	150	145	31	ピーカー		自５・４→人３～１				ℓ４は，有機質の集積層の可能性あり。	343			門脇
1574	31	Ｕ44	楕円	Ｎ90 ℃Ｅ	185	125	5	Ⅲ		自１								門脇
1575	32	Ｕ43	楕円	Ｎ35 ℃Ｗ	150×120	135×105	15	Ⅲ		自３～１					343			門脇
1581	32	Ｓ・Ｔ45・46	円	Ｎ15 ℃Ｅ	180	167	65	ピーカー		自３→人２・１	縄文土器27，石器８	37		底面南側が段状にくぼむ。	344	368		門脇
1582	32	ＡＸ72	円	Ｎ73 ℃Ｅ	115	95	40	Ⅲ		人３～１	縄文土器１，陶磁器13，鉄滓４，銭貨１	37	近世	銭貨:寛永通寶(新?)桶・樽等の施設堀形。ℓ３は掘形内堆積土。ℓ２は施設粘土。ℓ１は破壊時堆積土。	344			坂田
1583	32	ＡＷ71	楕円	Ｎ85 ℃Ｅ	118	100	30	Ⅲ		人４・３→自２・１	陶磁器２	37	近世	桶・樽などの施設堀形。ℓ４は堀形堆積土。ℓ３は施設粘土。ℓ２・１は施設埋土。	344	368		坂田
1584	32	ＡＸ73	円	Ｎ55 ℃Ｅ	125	117	65	ピーカー		自３～１					344			坂田
1585	32	ＡＸ72	円	Ｎ８ ℃Ｗ	132	100	40	Ⅲ	ＳＫ1597→ＳＫ1585	人４～１	陶磁器１，鉄滓５，銭貨２	37	近世	銭貨:寛永通寶(新?)桶・樽の施設堀形。ℓ４は施設堀形。ℓ３は有機質の残存層。ℓ２・１は破壊時堆積土。	344			坂田
1586	32	ＡＷ73	長方	Ｎ20 ℃Ｗ	146×80	120×57	87	ピーカー		人３→自２→人１			縄文	落とし穴状土坑。	345			坂田
1587	32	ＡＷ72	円	Ｎ90 ℃Ｗ	135	145	68	フラスコ		自２→人１					345			坂田
1588	33	ＡＷ69・70	円	Ｎ45 ℃Ｅ	125	115	35	ピーカー		人１	縄文土器２		縄文		345			宮田
1589	33	ＡＷ69	楕円	Ｎ55 ℃Ｅ	100×151	90×139	57	Ⅲ		人１					345			坂田
1591	33	ＡＡ43	円	Ｎ85 ℃Ｅ	94	80	10	Ⅲ		人４～１			近世	桶・樽などの施設堀形。ℓ４は堀形堆積土。ℓ３は硬化した施設粘土。ℓ２・１は施設粘土。				門脇
1592	33	ＡＤ43・44	長楕円	Ｎ40 ℃Ｗ	180	120	40	Ⅲ	ＳＫ1592→ＳＫ1566→ＳＫ1560	自１					345			門脇
1593	33	Ｔ46・47	円	Ｎ40 ℃Ｗ	155	140	35	ピーカー		人２・１	縄文土器４		縄文		345			門脇
1594	33	ＡＵ68・69	円	Ｎ88 ℃Ｅ	95	85	46	ピーカー		自３～１					345			坂田
1595	33	ＡＵ71	円	Ｎ25 ℃Ｅ	108	102	31	Ⅲ		人４～１	縄文土器１，陶磁器２，石器１，鉄滓３，礫９	37	近世	桶・樽などの施設堀形。ℓ４は堀形堆積土。ℓ３は施設粘土。ℓ２は有機質の集積層。ℓ１は破壊時堆積土。ℓ３上面より径10～20cmの礫９個出土。	346	368		坂田

表６　馬場前遺跡南区土坑一覧表(3)

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド番号）	平面形 底面形状	長軸方向	規模 確認面（cm）	規模 底面（cm）	規模 深さ（cm）	断面形 短軸の形状	重複関係 古→新	堆積状況 人為・自然の別と堆積順序 古→新	出土遺物	遺物挿図番号	機能時期	備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
1596	33	AW71	長方	N65°E	92×55	65×30	70	ピーカー		自1			縄文	落とし穴状土坑。	346			坂田
1597	33	AX72	楕円	N60°E	135×125	123×105	24	Ⅲ		人1			近世		346			宮田
1598	34	AU71	正方	N90°E	115	95×100	69	ピーカー		人7～1	陶磁器9，石器2，鉄製品1	37	近世（18C後半～19C後半）	相馬系陶器主体。桶・樽の施設堀形。ℓ5～7は堀形集積層。ℓ4は施設粘土。ℓ3は有機質の集積層。ℓ2・1は破棄時堆積土。	346			小暮
1599	34	AX71	長方	N50°E	85×44	74×33	55	ピーカー	S K1613→S K1599	自2・1			縄文	落とし穴状土坑。	346			坂田
1600	34	AU69	長方	N67°E	100×45	87×32	43	ピーカー		自1			縄文	落とし穴状土坑。	346			坂田
1601	34	AR・AS69	楕円	N0°E	148×120	100×85	19	Ⅲ		自1					346			宮田
1602	34	AR・AS69	楕円	N82°W	153×140	115×87	23	Ⅲ		自1	縄文土器1		平安以降？		346			宮田
1603	34	AT71	楕円	N7°E	200×155	195×150	58	ピーカー		人1	縄文土器4							宮田
1604	34	AR・AS66	長方	N83°E	155×113	117×23	83	ピーカー		自2・1			縄文	落とし穴状土坑。	347			宮田
1605	35	AP61	楕円	N5°W	250×185	237×170	10	Ⅲ	S K1605→S D13	自2・1	縄文土器161，石器7	37	縄文			368		宮田
1606	34	AR72	円	N45°E	135	128	73	ピーカー		人2→自1	縄文土器13		縄文		347			宮田
1607	34	AV75	円	N83°W	125	112	35	ピーカー		自3～1					347			宮田
1608	35	AR74	楕円	N80°W	190×170	170×150	43	Ⅲ		人3・2→自1			縄文		347			宮田
1609	35	AR75	楕円	N5°E	205×185	195×160	55	ピーカー		人4～2→自1	縄文土器8		縄文		347			宮田
1610	35	AQ75	楕円	N8°E	183×170	170×165	68	ピーカー		人3～1	縄文土器58							宮田
1611	34	AR・AS75	楕円	N28°W	132×108	124×110	28	ピーカー		人2→自1	縄文土器40，礫3			底面より，径20cm程度の礫3個出土。	347			宮田
1613	35	AX71	楕円	N42°W	115×102	102×92	17	Ⅲ		人4～1	陶磁器1，銭貨238以上	37	中・近世？	ℓ2上面より銭貨：萬永通寶(新・銅銭)14以上 萬永通寶(鉄)14以上。桶・樽状の施設堀形。ℓ4は破棄時堆積土。ℓ3は硬化した施設粘土。ℓ2・1は施設粘土。	347	368		宮田

853号土坑(図36)36図４は縄文土器の深鉢の胴部資料である。磨消縄文によりＪ字文が描かれている。後期初頭の称名寺式土器に比定される。

854号土坑(図36)36図５は不明土製品である。取手状を呈し棒状工具により，３カ所に盲孔，１カ所に貫通行がうがたれている。

966号土坑(図36)36図６～８は縄文時代中期に属する深鉢の口縁部資料である。６は，太い隆線によって横位渦巻文と楕円形文が施され，大木９式土器に比定される。７は，口縁部に楕円形文が施され，その下位には枠状の区画文が隆線によって描かれている。区画内は角押文が観察できる。大木７ｂ式に比定される。８は，口縁部の突起破片であり，太い隆線による渦巻文と沈線文が描かれる。大木８ａ式に比定できる。同図９は，深鉢の胴部から底部資料で，３条の下垂する沈線と２条の波状沈線が間隔をおいて施されている。縄文時代中期大木９式期と考えられる。

1553号土坑(図36)36図10は，土器片を円形に整形した土製円盤である。表面にＬＲ縄文が認められる。

1556号土坑(図36，写真368)36図11は深鉢の口縁部片で，無文の口縁部直下に１条の沈線を施し，以下撚糸文が施されている。大木10式期の粗製土器と考えられる。同図12は波状口縁の口縁部に付された突起片であり，内面に８の字状の渦巻き文の一部が認められる。縄文時代後期綱取Ⅰ式と思われる。同図13は胴部がくびれる深鉢形土器で，口縁端部に縄文帯を施し，その直下にU字文が描かれている。胴部には弧状の沈線が

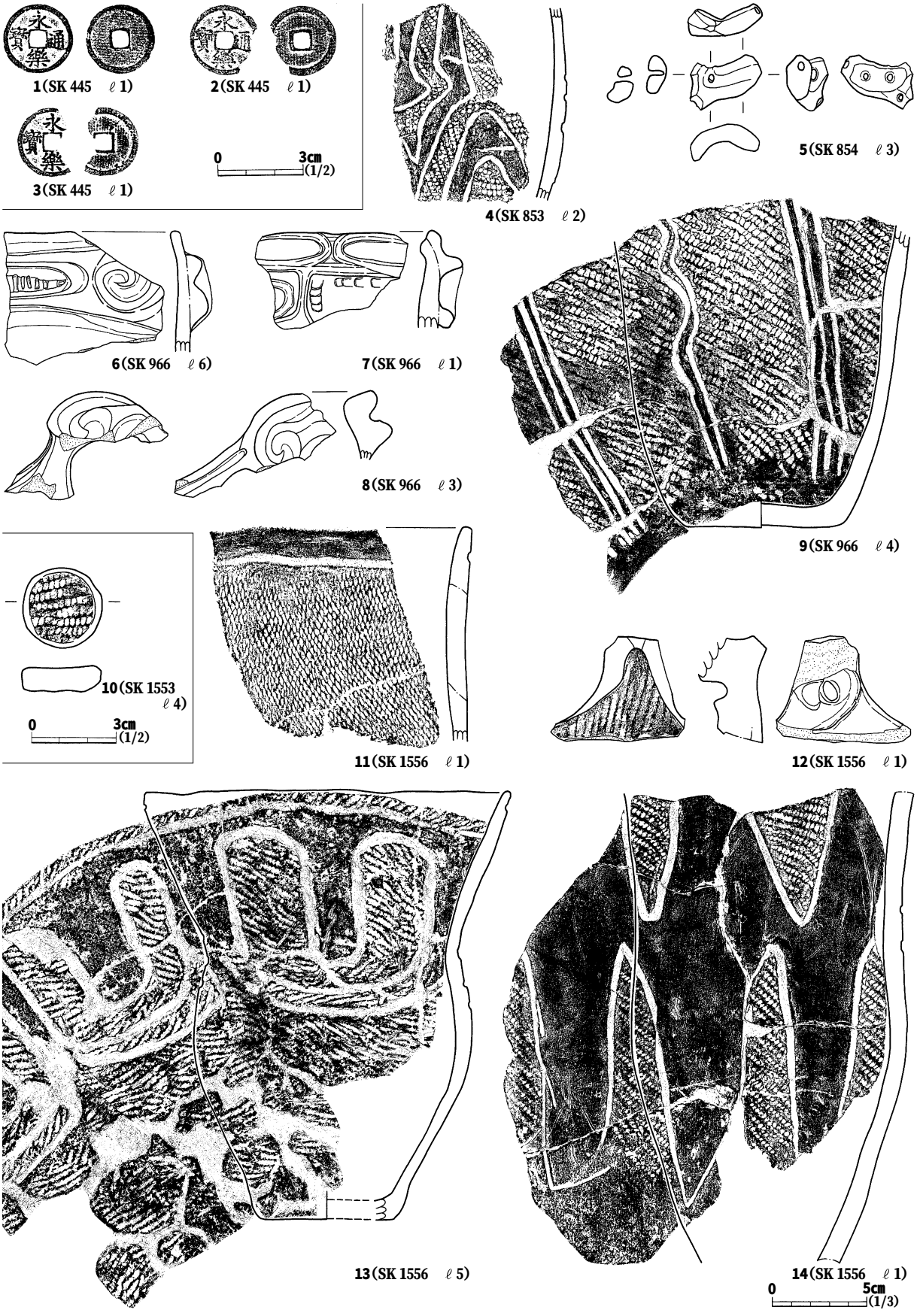


図36　445・853・854・966・1553・1556号土坑出土遺物

施され，文様帯を区画している。胴部には斜縄文が施されている。大木10式期古段階に比定できる。同図14は深鉢の胴部資料で，上下に縄文帯によるＵ字文を配している。大木９式に比定できる。

1567号土坑(図37)37図１は，花崗斑岩製の磨石類である。上下両端部には顕著な敲打痕が観察される。敲打痕によって円礫面が失われ，上端部は角張っている。器面中央には２カ所の浅い凹部があり，その周囲には磨耗痕が観察される。

1568号土坑(図37)37図３は，深鉢形土器の口縁部資料で，無文の口縁部直下に太い隆線を施し，以下斜縄文が施されている。

1581号土坑(図37，写真368)37図２は，流紋岩製の縦長剝片を素材とする石箆である。平面形がバチ形を呈するように，背腹両面に対して平坦な調整剝離を加えている。腹面側中央には，素材剝片の主要剝離面が残っている。背面側の右側縁下端から刃部右端にかけての縁辺部は，使用によって磨耗している。

1582号土坑(図37)37図４は，内面と外面の体部上位にオリーブ色釉が，下位に褐色釉が掛かった椀の破片資料である。同図５は相馬大堀焼系の鉢の底部片である。内面と外面底部，高台部は露胎，外面の胴部には鉄釉を施している。同図６は浅黄色の釉を施した陶器椀の底部で，高台畳付き部分のみ露胎となる。同図７は大型の鉢の底部で，内面と底部，高台部以外の外面に青灰色釉が掛けられる。内面にピン痕が３カ所みられる。同図８は陶器椀の口縁部で，オリーブ黄色の釉が施されている。

同図12は寛永通宝である。錆により銭文が不鮮明だが，「寶」字が「ハ」字状となるいわゆる新寛永であろう。

1583号土坑(図37，写真368)37図９はにぶい黄色釉を施した陶器椀の底部片である。同図10は肥前焼の染付皿である。青色顔料により草木などを描いている。

1585号土坑(図37)37図11は，オリーブ黄色釉を施した相馬大堀焼系の陶器椀である。高台の径が小さい。

同図13は寛永通宝である。錆や破損で字体はやや不鮮明だが，1582号土坑出土のものより薄く，径も小さい。また，字体がやや細く外縁の幅が狭いことから３期の新寛永であろう。

1595号土坑(図37，写真368)37図14は陶器椀で，二次焼成を受けているが，青灰色の釉を浸け掛けにしている。内面にはピン痕が３カ所ある。胎土中には砂が多く含まれ，ざらついている。

1598号土坑(図37)37図15は頸部を欠くが小型壺の体部で，算盤玉状をなす。外面は暗褐色釉，内面にはオリーブ黄色釉が掛けられる。

同図16は木質の付着した鉄製品である。一端がＬ字状に曲げられており，釘の残存品と考えている。

1605号土坑(図37，写真368)37図17は，扁平な楕円形礫の末端部に，粗い調整剝離を施した安山岩製の削器である。表裏面の円礫面には擦痕が観察され，末端部の刃部は弧状を呈している。

同図18は深鉢の口縁部資料で，無文の口縁直下に横走沈線を施し，以下縄文を施している。同図

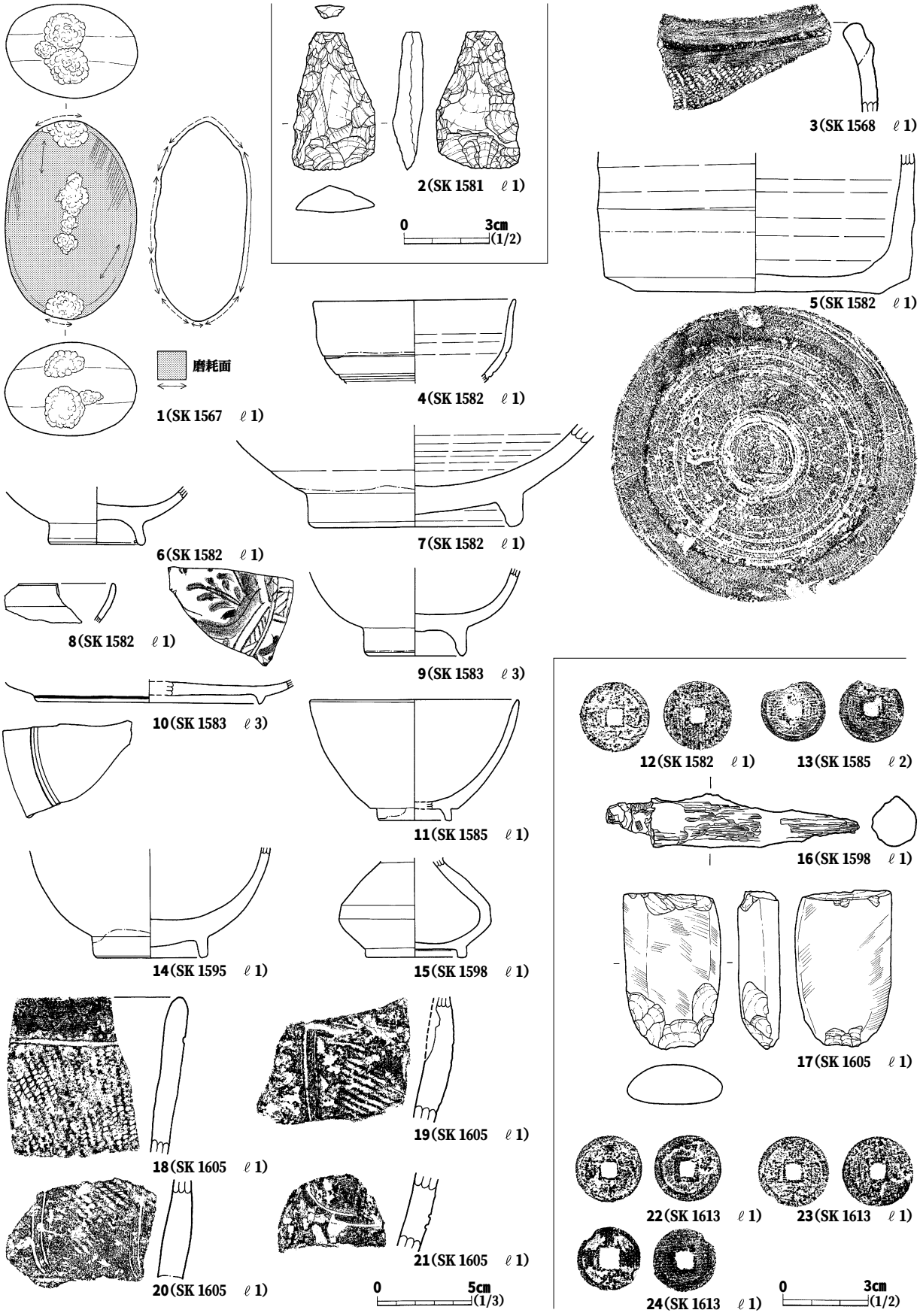


図37　1567・1568・1581～1583・1585・1595・1598・1605・1613号土坑出土遺物

19～21は同一個体の深鉢片で，半截竹管状の工具による擦痕が施されている。18～21は大木10式期の粗製土器と思われる。

1613号土坑(図37，写真368)37図22～24はいずれも寛永通宝である。22は「ス貝寶」の古寛永であり，23も字体から古寛永に含めてよいだろう。24は鉄製の寛永通宝である。背に文字はみられず，背面は外縁の幅が表より広い。字体は寶字の貝画の末尾が不鮮明であるが，「通」字の第１・２画がカタカナの「マ」もしくは「ユ」字状となる。　（宮田・門脇）

第６節　その他の遺構

南区の３次調査では，前節までの遺構の他，鍛冶遺構１基，埋甕１基を確認した。この他，小穴がある。小穴については，北区と合わせて第４章第７節で述べることとする。また，南区の遺構外出土遺物についても，北区と合わせて第４章第８節で述べる。

１号鍛冶遺構　ＳＷｋ１（図38）

本遺構は調査南区の南東寄り，ＡＱ・ＡＲ68グリッドに位置する。若干の撹乱を受けているが，Ｐ１・Ｐ２の２個のピットからなり，91号建物跡の柱穴の上から検出されていることから，本遺構の方が新しい。

Ｐ１の堆積土は１層で，多量の炭化物片と鉄滓を含む。平面形は東西方向に長軸を有する長楕円

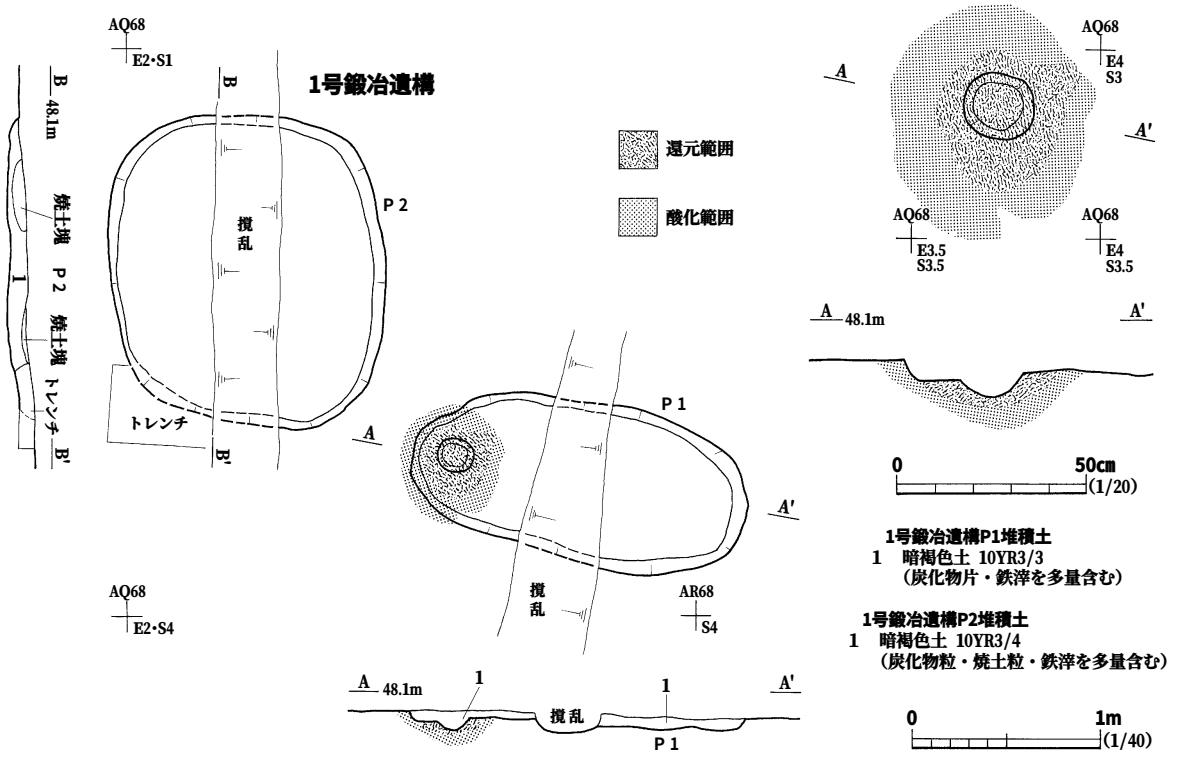


図38　１号鍛冶遺構

形を呈し，規模は180×80cm，深さは10cm程である。底面はほぼ平坦で，西側端に径15cm，深さ10cm程のくぼみが認められる。このくぼみは表面が火熱により硬化しており，中央部は青灰色に色調変化し，その周囲は赤色変化している。断ち割りの結果，検出面より10cm程の深さまで焼土化が及んでいた。

Ｐ２は，Ｐ１の西側のＡＲ68グリッドにあり，径約160cmを測るやや不整な円形を呈する。堆積土は，炭化物粒や鉄滓・焼土粒を多く含む暗褐色土の１層で，焼土が塊状に堆積している。これらの堆積土については，鍛冶操業時の廃棄土と推察している。底面は若干の凹凸があり，周壁の立ち上がりは緩やかであった。

本遺構はＰ１とＰ２から構成され，Ｐ１は鍛冶炉本体と輔等を置いた浅い作業場と考えられ，Ｐ２は焼土や鉄滓などを投棄した小穴と推定している。時期は，重複する91号建物跡よりも新しいので，近世のものと考えている。　（宮　田）

９　号　埋　甕　ＳＭ９　（図39）

南区北部の平坦面，ＡＲ62グリッドに位置する。本遺構の東側には741号土坑が隣接し，北側には94号建物跡，南側には93号建物跡が位置している。検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色系の土で埋まった長軸50cm程の不整楕円形の輪郭と，深鉢形土器の底部と側面の破片を検出した。他遺構との

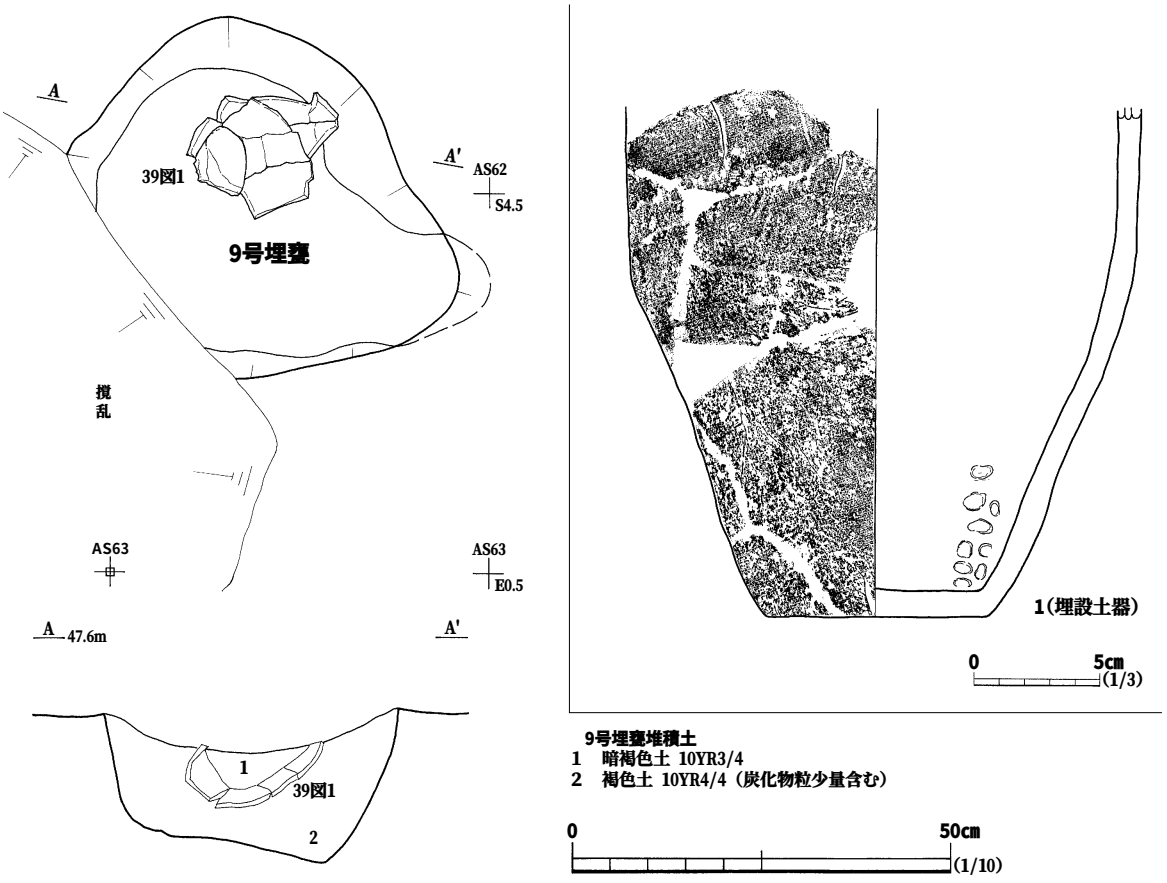


図39　９号埋甕と出土遺物

重複はないが，本遺構の南西側の側壁部分が撹乱により破壊されている。

掘形の平面形は，不整な楕円形を呈する。長軸はＮ40 Ｗであり，その規模は，現状の壁上端で長軸の南北長約50㎝，短軸の東西長約36㎝である。深鉢形土器は，掘形の北側部分にあり，底部を南西側に傾け，掘形底面から14㎝程浮いた状態で埋められている。

遺構内堆積土は２層に分かれ，このうち，ℓ１は埋設土器内堆積土，ℓ２は掘形内堆積土である。いずれも黄褐色土との混土であることから，人為堆積と考えられる。

埋設土器は図39に示した。１は深鉢の胴部から底部にかけての資料であり，口縁部は欠損している。外面は摩滅が著しいが，上胴部には，部分的にＲＬ撚りの原体を縦回転した縄文が認められる。内面は火ハゼ痕，あるいは刺突文と思われる痘痕状のくぼみが見られる。刺突痕とすれば，その工具は先端がやや丸くて，半截竹管状の工具と推察される。

本遺構の時期は，埋設された深鉢が地文のみであるため，明確には不明であるが，本遺跡で主体を成す縄文時代中期末葉と推測している。　（阿　部）

第４章　北区の遺構と遺物

２次・３次の２カ年にわたる調査により，北区からは竪穴住居跡69軒，竪穴状遺構１基，掘立柱建物跡63棟，柱列跡25基，土坑973基，溝跡10条，井戸跡８基，集石遺構１基，焼土遺構２基，鍛冶遺構４基，埋甕２基，小穴3,788基が確認された。これらの遺構と遺物について，以下遺構の種別に報告する。

第１節　竪 穴 住 居 跡

北区で確認された69軒の竪穴住居跡の内，縄文時代のものが54軒，平安時代に属するものが15軒ある。また，縄文時代では，縄文時代中期中葉の時期のものが４軒，同中期後葉から末葉に比定できるものが49軒，同後期前葉と推測されるものが１軒ある。

５ａ・ｂ号住居跡　ＳＩ５ａ・ｂ（図40～43，写真９～11・350）

位置・検出面　北区南東部の平坦面，ＡＣ～ＡＥ39・40グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の西側には，106号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色土で埋まった径5.4m程の不整円形の輪郭を検出した。調査区の関係で東半部は平成11年度（１次調査）に，西半部は平成12年度（２次調査）に調査を行った。調査の結果，建て替えの際に住居跡を拡張し，複式炉と主柱穴を造り替えていることが確認された。以下では，建て替え以後の新しい住居跡を５ａ号住居跡，建て替え以前の古い住居跡を５ｂ号住居跡として報告する。

重複　３号住居跡，63号建物跡，1208号土坑と重複し，いずれよりも５ａ号住居跡が古い。また，前述したように，５ｂ号住居跡が古く５ａ号住居跡が新しい。

５ａ号住居跡　ＳＩ５ａ

堆積土　４層に分層した。いずれの層も周壁からの流れ込みが確認できたため，自然堆積土と思われる。

平面形・規模　円形に近い不整な隅丸長方形である。長軸方向はN70 ℃Wであり，その規模は現状の壁上端で長軸の東西長5.4m，短軸の南北長5.1mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。

周壁　床面から60～70 ℃のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は16～29㎝を測る。北東壁は撹乱によって壊され，遺存していない。

周溝　撹乱で壊された北東部を除き，溝は途切れながらもほぼ全周している。その上端幅は11～34㎝，床面からの深さは４～23㎝を計測する。

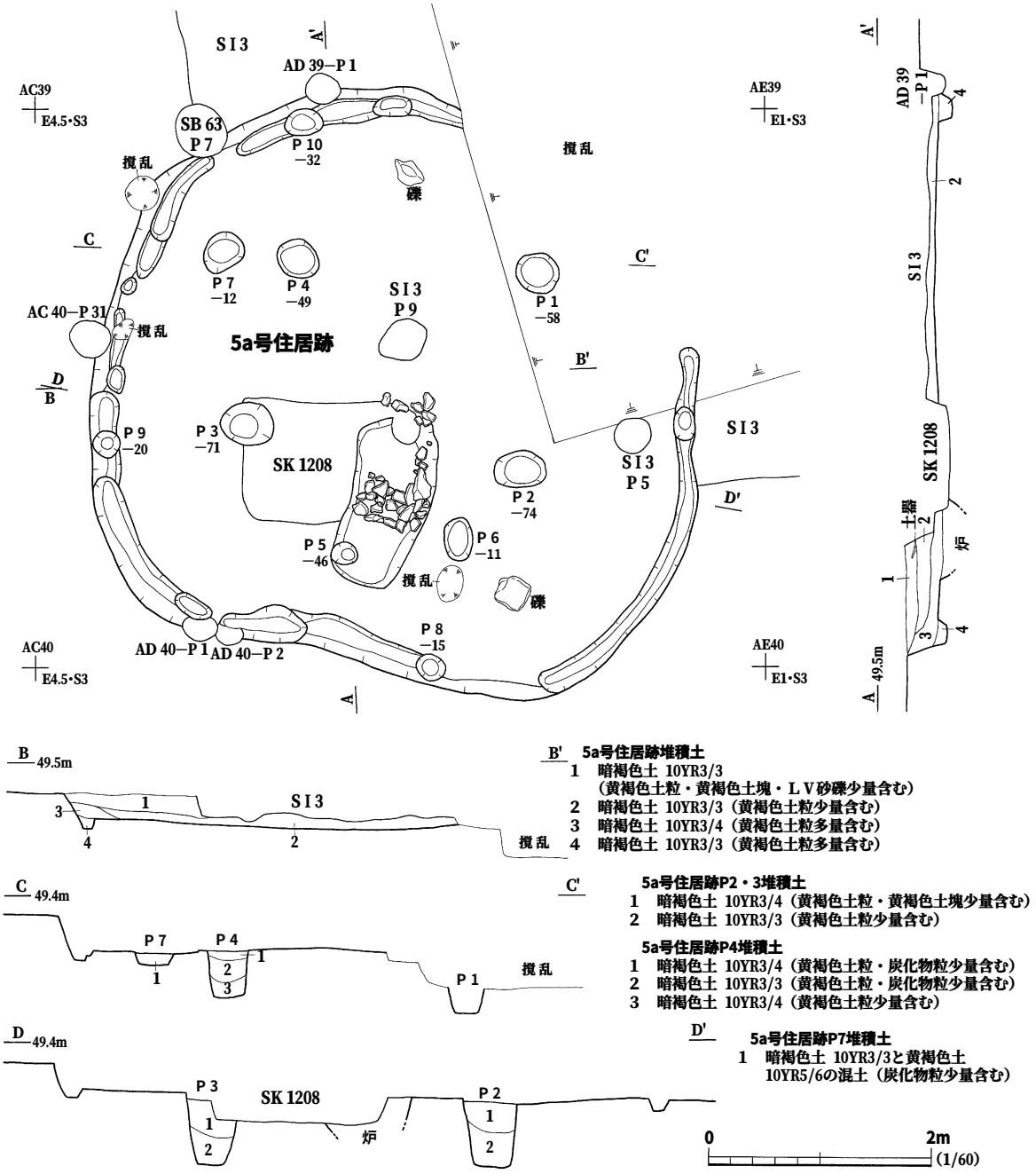


図40　５ａ号住居跡

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ２とＰ３のほぼ中間に構築されている。1208号土坑によって炉体土器と石組部北西部が壊され，土坑堆積土中から，本住居跡の炉体土器と思われる土器が出土している。土器埋設部と石組部の全容は不明だが，前庭部は隅丸長方形を呈している。

（規模）炉中軸線はN20 °Eであり，全長約180㎝，最大幅72㎝を測る。

（堆積土）４層に分層した。ℓ１・２は，暗褐色系の土を基調とし，流れ込みの堆積状況が認められるので自然堆積土，ℓ３は，褐色土中に黄褐色土の小塊を数多く含むことから人為堆積土と考えられる。ℓ４は掘形内堆積土である。

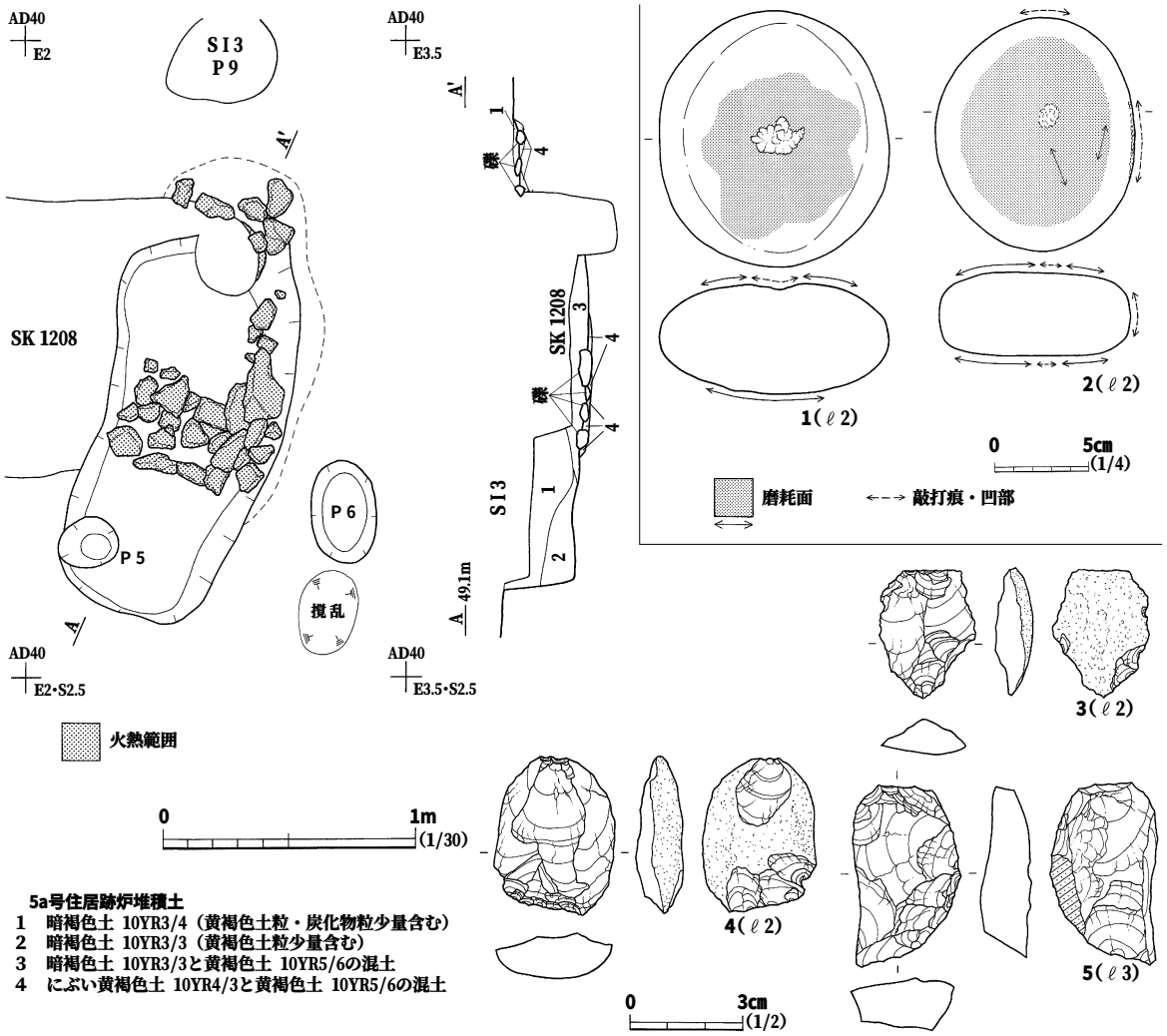


図41　５ａ号住居跡炉と出土遺物

(土器埋設部)長径31㎝，短径20㎝を測る炉体土器の掘形の周囲に，長さ７～15㎝程の角礫を敷き縁石としている。南北方向の長さは推定50㎝で，炉体土器の掘形周辺の土は焼土化している。

(石組部)掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面とし，その上に拳大から人頭大の礫を積み上げて外傾する側壁を造っている。石組部の最大幅は推定70㎝，南北方向の長さは推定75㎝を測る。礫は表面に強い火熱を受けて赤変している。

(前庭部)南北方向にやや長い隅丸長方形であり，壁は東西壁で60～70°，南壁でほぼ直立している。規模は最大幅67㎝，南北方向の長さ57㎝を測る。南西隅の底面からＰ５が検出されている。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。Ｐ１・４，Ｐ２・３は複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ４間が2.1m，Ｐ２－Ｐ３間が2.5m，Ｐ１－Ｐ２間が1.8m，Ｐ３－Ｐ４間が1.6mで，全体的に不整な台形の配置となっている。現状の平面形は，不整円形もしくは楕円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が径37㎝，深さ推定58㎝，Ｐ２が長径46㎝，短径32㎝，深さ74㎝，Ｐ３が長径47㎝，短径37㎝，深さ71㎝，Ｐ４が径40㎝，深さ49㎝を計測する。複式炉の両脇に配置されたＰ２・３は，特に深く造られている。柱穴内の堆積土はいず

れも暗褐色土を基調とし，流れ込みの堆積状況が認められるので自然堆積土と考えられる。

ピット　主柱穴の他に，小さいピットが６個ある。Ｐ５は複式炉の前庭部南西端に位置し，複式炉前庭部に伴うピットと考えられる。規模は径20㎝，深さ46㎝である。Ｐ８～10は周壁近くに配置されていることから，壁柱穴と思われる。規模はＰ８・９が径24～26㎝，深さは15～20㎝で，Ｐ10は東西35㎝，南北24㎝，深さ32㎝を測る。Ｐ６は複式炉の東側，Ｐ７はＰ４の西側に検出された楕円形のピットで，いずれも用途は不明である。規模は長径38～40㎝，短径12～32㎝，深さ11～12㎝を計測する。

遺物出土状況　堆積土中から縄文土器124点，石器15点が出土した。また，1208号土坑から本住居跡の炉体土器と思われる大木10式古段階の土器が出土している。

遺物　縄文土器は復元可能なものが認められなかった。図41に石器を示した。41図１・２は，器面中央部にアバタ状の浅い凹部を有する磨石類である。凹部の周辺には広い範囲にわたって磨耗痕が観察された。２の右側面にはアバタ状の敲打痕が部分的に認められた。同図３・４は楔形の石核である。作業面の上下両端に階段状剝離が認められることから，両極打法によって生じた石核であろう。３はチャート製，４は鉄石英製である。同図５はチャート製の剝片である。腹面末端部に階段状剝離が認められることから，５の剝片剝離法も両極打法の可能性が高い。

まとめ　本住居跡は建て替え以後の竪穴住居跡で，複式炉と不整な台形に配置された４本の主柱穴を有している。本住居跡は建て替えの際に北西・南西方向に向けて拡張され，上屋と複式炉が造り替えられている。ただ，主柱穴の位置がほとんど変わらないことから，上屋の構造や規模に大差はなかったと思われる。また，複式炉もほぼ同じ位置に一回り小型のものが造られている。廃棄後は柱が抜き取られ，住居跡は自然埋没したと推測される。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期末葉と考えられる。（坂　田）

５ｂ号住居跡　ＳＩ５ｂ

堆積土　本住居跡に伴う周溝部にのみ確認できた。ℓ１は暗褐色土を基調とし，黄褐色土の小塊を撹はんしたように含んでいることから人為堆積土と考えられる。

平面形・規模　北西壁から西壁にかけてと，南壁の内側を巡る周溝から，建て替えの際に南壁を約30㎝，西壁を約40㎝拡張していると推定される。また，北壁と東壁の壁際には周溝同士の重複が認められないことから，新旧の住居跡で移動はなかったものと思われる。よって，平面形は円形に近い不整な隅丸長方形であったと思われ，長軸方向はN70 ℃Wである。規模は，現状の壁上端で長軸の東西推定長5.1m，短軸の南北推定長4.7mを測る。

床面　５ａ号住居跡と同一床面であったと判断している。

周壁　建て替えに伴う拡張で南壁と西壁は壊され遺存していない。北壁と東壁は建て替え以後と同じと思われる。

周溝　南西コーナー部を除いた北西壁と南西壁の内側に，周溝が巡るのが確認された。上端幅は10～26㎝，床面からの深さは５～26㎝を計測する。

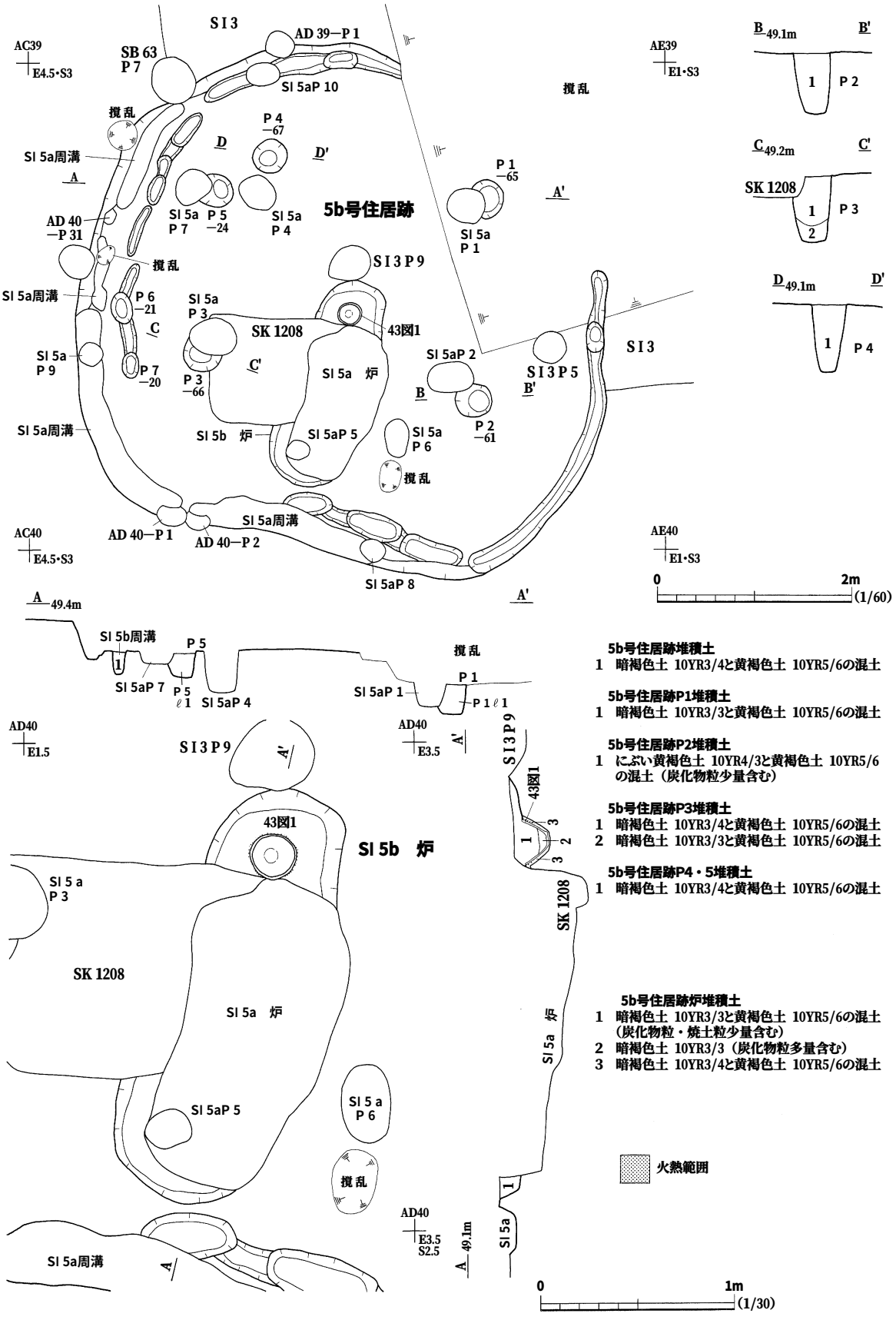

5b号住居跡
SI 3
SB 63
P 7
AD 39—P 1
SI 5aP 10
撹乱
P 4
—67
D
D'
SI 5a周溝
A
SI 5a
P 7
P 5
—24
SI 5a
P 4
AD 40
—P 31
撹乱
SI 3P 9
SI 5a周溝
P 6
—21
C
SI 5a
P 3
SK 1208
43図1
SI 5a
P 9
P 7
—20
C'
P 3
—66
SI 5a 炉
SI 5aP 2
SI 3P 5
B
B'
SI 5a周溝
SI 5b 炉
SI 5aP 5
SI 5a
P 6
P 2
—61
撹乱
SI 5a周溝
AD 40—P 1
AD 40—P 2
SI 5aP 8
A'
AC39
E4.5・S3
AE39
E1・S3
AC40
E4.5・S3
AE40
E1・S3
P 1
—65
SI 5a
P 1
B 49.1m
B'
1
P 2
C 49.2m
C'
SK 1208
1
P 3
2
D 49.1m
D'
1
P 4
0
2m
(1/60)
A 49.4m
SI 5b周溝
P 5
1
SI 5aP 7
P 5
ℓ1
SI 5aP 4
撹乱
P 1
SI 5aP 1
P 1 ℓ1
AD40
E1.5
SI 3P 9
A'
AD40
E3.5
A'
SI 3P 9
43図1
1
3
2
3
SK 1208
SI 5a 炉
SI 5a
P 3
SK 1208
SI 5a 炉
SI 5aP 5
SI 5a
P 6
撹乱
AD40
E3.5
S2.5
A 49.1m
SI 5a
1
SI 5a周溝
A
0
1m
(1/30)
5b号住居跡堆積土
1 暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
5b号住居跡P1堆積土
1 暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
5b号住居跡P2堆積土
1 にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
5b号住居跡P3堆積土
1 暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2 暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
5b号住居跡P4・5堆積土
1 暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
5b号住居跡炉堆積土
1 暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒・焼土粒少量含む）
2 暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒多量含む）
3 暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
火熱範囲

図42　５ｂ号住居跡

複式炉　複式炉は床面の東側，Ｐ２とＰ３のほぼ中間に構築されている。５ａ号住居跡に伴う複式炉を造る際に壊されており，土器埋設部と前庭部の一部のみ遺存する。

(規模)炉中軸線はN20°Eであり，全長は約218㎝，最大幅は土器埋設部掘形にあり，83㎝を測る。

(堆積土)３層に分層した。ℓ１は炉を造り替えた際に本住居跡の炉全体を埋めた土で，暗褐色土中に黄褐色土の小塊を数多く含む人為堆積土である。ℓ２は炭化物粒を多量に含むことから，炉体土器の底部にたまった黒色土の一種と思われる。ℓ３は掘形内堆積土である。

(土器埋設部)確認できた形状は不整な長方形であり，浅い長方形状のほぼ中央に炉体土器が遺存している。炉体土器の上端南端から掘形北端までの長さは47㎝程で，炉体土器周辺の土は焼土化している。

(前庭部)造り替えの際に壊され，南西部の一部が確認できるのみである。隅丸長方形状を呈し，底面から60～85°の角度で立ち上がっている。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。Ｐ１・４，Ｐ２・３は複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ４間が2.3m，Ｐ２－Ｐ３間が2.9m，Ｐ１－Ｐ２間とＰ３－Ｐ４間が2.1mと台形の配置となっている。現状の平面形は不整な円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，径33～40㎝，深さ61～67㎝を測る。柱穴内の堆積土はいずれも暗褐色土中に黄褐色土の小塊が数多く含まれていることから，人為堆積土と考えられる。

ピット　主柱穴の他に小さいピットが３個ある。Ｐ６・７は周壁近くに配置されていることから，壁柱穴と思われる。規模は南北26～36㎝，東西16～20㎝，深さ13～27㎝で，平面形は楕円形を呈する。Ｐ５は径約35㎝，深さ24㎝の円形を呈した小ピットで，北西コーナー部付近で検出された。用途は不明である。

遺物出土状況　炉体土器と，堆積土中から石器１点が出土した。

遺物　43図１に炉体土器を示した。深鉢の胴部下半から底部にかけての資料で，ＬＲ縄文が斜位に施されている。43図２は，珪質凝灰岩製の縦長剝片を素材とした縦形石匙である。基部側は折損している。背腹両面の両側縁は，並列する平坦な調整剝離によって丁寧に加工している。先端部は側縁よりも細かな調整加工で，尖鋭に仕上げている。腹面右側縁上端部の加工痕は，上面の折断面から調整を加えていることから，基部欠損後に再調整を加えたものとみられる。

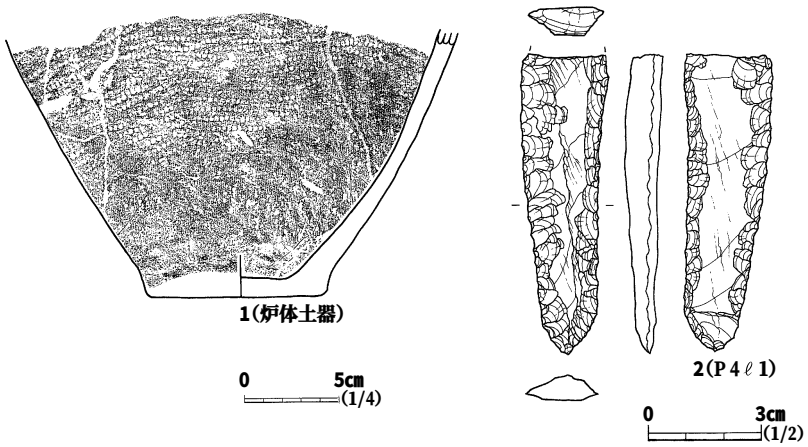


図43　５ｂ号住居跡出土遺物

まとめ　複式炉と，ほぼ台形に配置された４本の主柱穴を有している。本

住居跡の帰属時期は炉体土器から判断できないが，建て替え以前と以後で住居跡の構造に大きな違いが認められないことから，さほど時間差はないものと考え縄文時代中期末葉としたい。（坂　田）

12 号 住 居 跡　ＳＩ12 （図44，写真12）

位置・検出面　北区東端南寄りのＡＡ・ＡＢ31・32グリッドにまたがって位置している。検出面はＬⅣ上面である。本遺構は１次調査で大部分を調査し，２次調査で南西側の一部分を調査した。

重複　13・14号住居跡と重複している。１次調査の報告では，13号住居跡よりも本住居跡が新しいと考えたが，出土遺物の観察及び炉の形態の特徴などをあわせ，本遺構の方が古いと判断した。また，２次調査時の所見より，本住居跡の方が14号住居跡より古い。

堆積土　３層確認された。ℓ１は暗褐色土であり，１次調査では自然流入土と考えたが，基本土層ＬⅣに由来する黄褐色土粒を含んでいることから，人為堆積土と考えている。ℓ２は周溝内堆積土であり，ℓ３は柱穴内堆積土である。

平面形・規模　ほぼ円形であり，直径4.7～5.2mである。

床面　ＬⅣに形成され，中央部付近には踏み締まりが見られる。

周壁　高さ20㎝ほど遺存し，70°前後の急斜度で立ち上がっている。

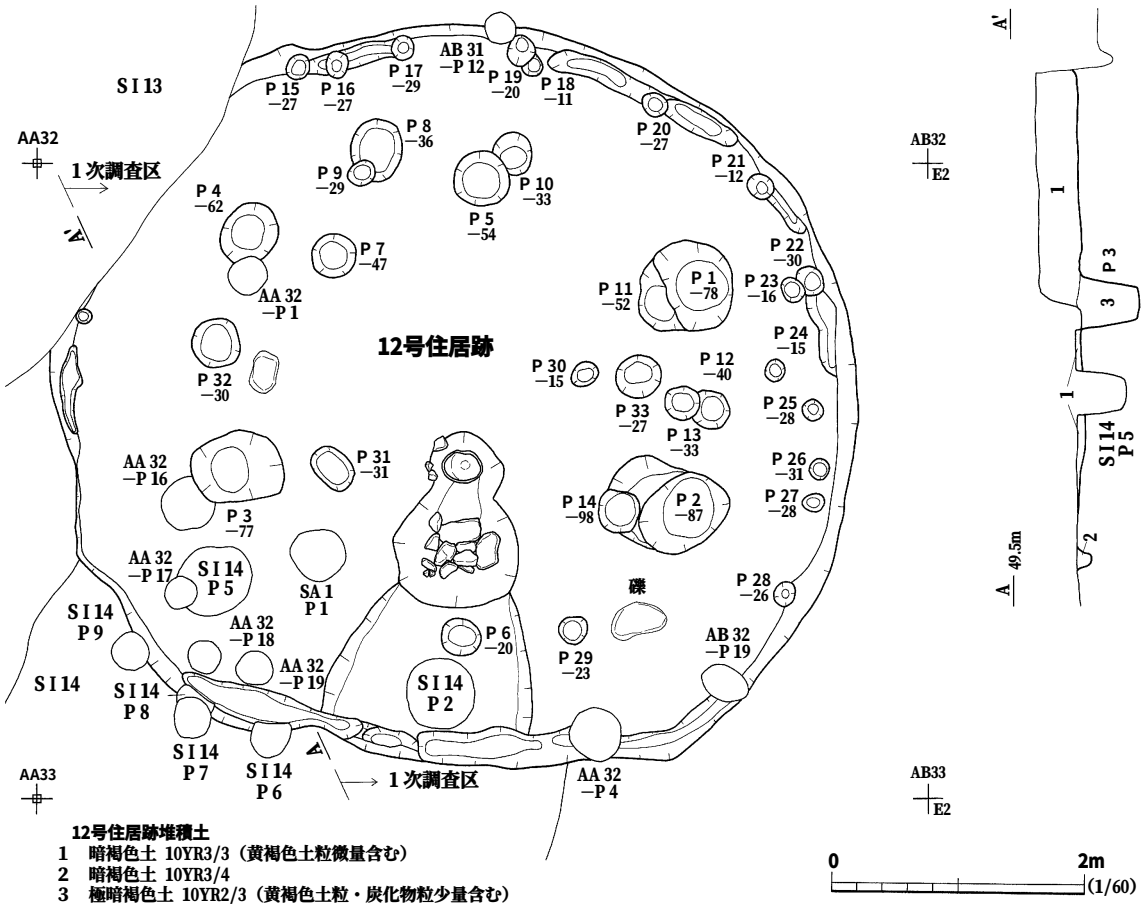


図44　12号住居跡

周溝　断続的に検出されている。遺構の北西部と南西部では検出されなかった。堆積土は，住居跡ℓ１とは異なる自然流入土であり，ℓ１が堆積する以前に，周溝は埋没していたものと判断した。

複式炉　１次調査時に，住居跡の南側中央に土器埋設部・石組部・前庭部から構成される複式炉が検出された。複式炉の長軸方向は，Ｎ５°Ｅである。

主柱穴　Ｐ１～４，Ｐ８，Ｐ10の６個が１次調査で検出され，主柱穴とされている。主柱穴は，複式炉の中軸線の延長上に１個，前庭部に１個，中軸線を挟んで線対称に４基が配置されており，各主柱穴を結んだ平面形は六角形となっている。２次調査では，Ｐ３の西側壁上端のみ確認できた。本住居跡の柱穴内堆積土は１層のみのものが多いため，柱は抜き取られ，掘形は埋められたものと推測される。

ピット　西端部でピットが１個検出され，１次調査で検出されたピットとあわせて，いずれも壁柱穴であると考えられる。

遺物出土状況　２次調査では，堆積土中から縄文土器片が２点出土している。

まとめ　本遺構は１次調査時に大部分が調査されており，報告もすでに行われている。１次調査では，前庭部がスカート状に広がる複式炉，主柱穴６個を含む33個のピット，壁溝が検出されている。２次調査では，残されていた西側部分を調査した。縄文時代中期末葉，大木９式期の竪穴住居跡であり，すでに報告した遺構以外との重複はなかった。ただし，13号住居跡との重複関係は，１次調査報告を訂正し，本遺構のほうが古いと考えたい。　（轡　田）

13 号 住 居 跡　ＳＩ13 （図45～47，写真13・14・350）

位置・検出面　北区東端南寄りのＺ・ＡＡ31・32グリッドにまたがって位置している。検出面はＬⅣ上面である。本遺構は１次調査で東半分を調査し，２次調査では西側を調査した。

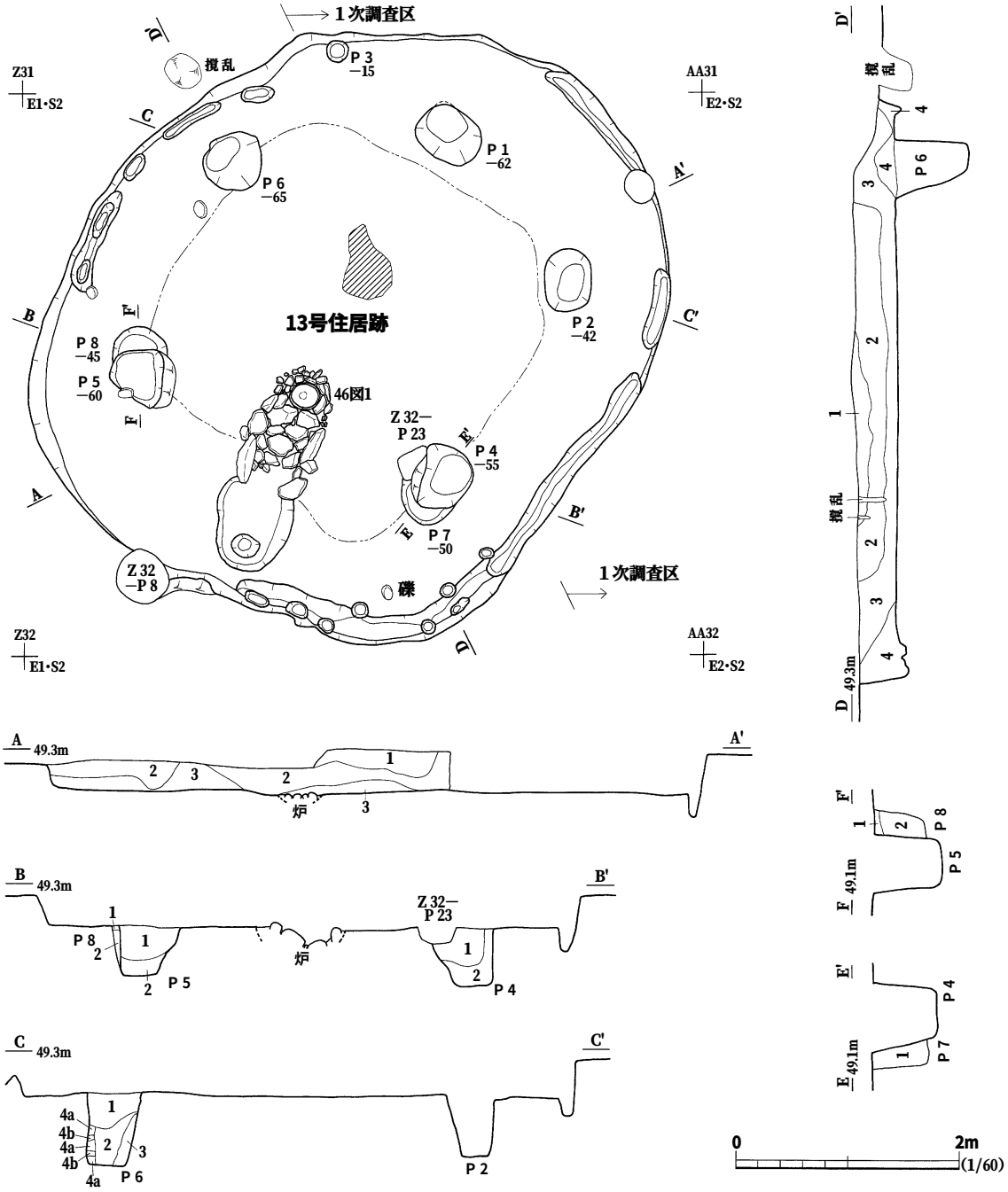
重複　12号住居跡と重複している。１次調査では本遺構のほうが古いと報告しているが，再検討の結果，本遺構の方が新しいと判断した。

堆積土　堆積土は４層に分けることができた。ℓ１は黒色土であり，ℓ２～４は，いずれの層もＬⅣに起因する黄褐色土との混土である。堆積状況から，住居廃絶後に埋められ，最終的に黒色土が投棄されたものと思われる。

平面形・規模　北東から南西方向に長い不整な楕円形を呈し，長軸方向はN30°Ｅである。その規模は長軸長5.5m，短軸長5.1mを測る。北東部が張り出し，南西部分がやや直線的な平面形となっている。

床面　床面はほぼ平坦であり，中央部付近で細かな凹凸のある踏み締まりが検出された。また，床面のほぼ中央，複式炉の中軸線上に，焼土塊の集中する範囲が検出された。断ち割りの結果，酸化面ではなく厚さ１㎝程にわたって焼土粒が集積していたものと判明したが，どのような性格のものであるかは不明である。

周壁　周壁は高さが26～36㎝遺存しており，立ち上がりは80°前後と急斜度である。



13号住居跡堆積土
1　黒色土 10YR2/1（黄褐色土粒小量含む）
2　灰黄褐色土 10YR5/2と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒小量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
4　にぶい黄橙色土 10YR6/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

13号住居跡P4・5堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3
2　暗褐色土 10YR3/3

13号住居跡P6堆積土
1　　にぶい黄褐色土　10YR4/3
2　　黒褐色土 10YR3/2（柱痕）
3　　暗褐色土 10YR3/4
4ａ　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/4の混土
4ｂ　黄褐色土 10YR5/6と褐色土 10YR4/4の混土

13号住居跡P7堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3

13号住居跡P8堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3
2　明黄褐色砂質土 10YR6/6

焼土塊

図45　13号住居跡

周溝　１次調査では，東側半分では壁溝が検出されている。２次調査では，北西部と南部で壁に沿って検出され，壁溝内には小さなピットが多く検出された。これらのピットは壁柱穴であると考えられる。

複式炉　本遺構南側で検出された。平面形は南北に長い楕円形で，土器埋設部・石組部・前庭部からなっている。

(規模)長軸が1.9m，短軸が0.8mを測る。長軸方向はN25 °Eである。

(堆積土)炉跡内堆積土は８層に分けられる。そのうち，ℓ８は掘形内堆積土である。ℓ１～６は，炉廃絶後に本炉を埋めた人為堆積土である。特に，ℓ２は住居内堆積土のℓ３に酷似し，複式炉内と住居跡が同時に埋められたことが指摘できる。ℓ７は炭化物粒を多く含み，炉が機能していた段階に堆積したものと考えられる。

(土器埋設部)１個体の土器を埋め込んでいる。炉体土器の周囲には石組部で使われているものより小さな礫が埋め込まれ，埋設土器の周辺の土が厚さ５㎝程熱を受けて赤色変化していた。

(石組部)平らな大きめの花崗岩の礫が用いられている。底面が平坦になるように礫を敷き詰め，その上に縁石を立てている。土器埋設部との境には，特に大形の礫を使っている。石組部と前庭部との境には礫が置かれていなかった。これらの礫は熱を受けており，赤色変化したものや，風化して砂のようになったものも見られた。

(前庭部)前庭部はＬⅣを掘削して形成している。底面には顕著な踏み締まりは認められなかった。前庭部の手前側，端部に近いところで，直径20㎝程のピットを検出した。住居跡内の柱穴・炉跡の配置から，このピットも本遺構に付帯する設備であったと考えられる。柱痕は検出されず，また主柱穴と考えられる柱穴と比べると規模が小さい。

主柱穴　２次調査で検出されたピットの内，Ｐ４～６は，その配置から本遺構の主柱穴であると考えられる。いずれも平面形は楕円形を基調としている。柱穴の規模は，Ｐ４が長軸60㎝，短軸50㎝，深さ55㎝，Ｐ５が長軸60㎝，短軸50㎝，深さ60㎝，Ｐ６が長軸55㎝，短軸52㎝，深さ65㎝と，ほぼ揃っており，１次調査で検出されたＰ１・２の規模と近似している。これらの柱穴は，いずれも住居床面の中心に向かって内傾して掘られている。

また，Ｐ４・５は，それぞれＰ７・８と重複し，これらの後に建て替えたものである。Ｐ４・５の柱穴内堆積土のうち，にぶい黄褐色土は住居跡ℓ３と共通しており，住居跡の廃絶時に柱は抜き取られ，住居跡と同時に埋没したものと考えられる。Ｐ６では柱痕が認められた。Ｐ６堆積土ℓ２は，Ｐ４・５と同様に，柱の抜き取り後に堆積した土層であり，柱を抜き取る際に柱の根元が折れて残っていた可能性がある。

Ｐ６で柱痕が検出されたことから，本遺構はＰ１・７・８の３本柱から，Ｐ２・４～６の４本柱へと建て替えを行ったものと推定される。この場合，古い段階の柱穴間隔は，Ｐ１－Ｐ７間が3.3m，Ｐ７－Ｐ８間が2.9m，Ｐ８－Ｐ１間が3.4mである。各主柱穴を結んだ形は，二等辺三角形となっている。新しい段階ではＰ２－Ｐ４間が2.0m，Ｐ４－Ｐ５間が2.9m，Ｐ５－Ｐ６間が2.1m，

Ｐ６－Ｐ２間が3.3mである。各主柱穴を結んでできる図形は，Ｐ４－Ｐ５間が狭い台形となっている。本遺構の平面形がややゆがんでいるのは，この建て替えにともなって拡張された可能性も示唆している。

ピット　周壁に沿って小さなピットが多数検出された。これらは壁柱穴と考えられる。

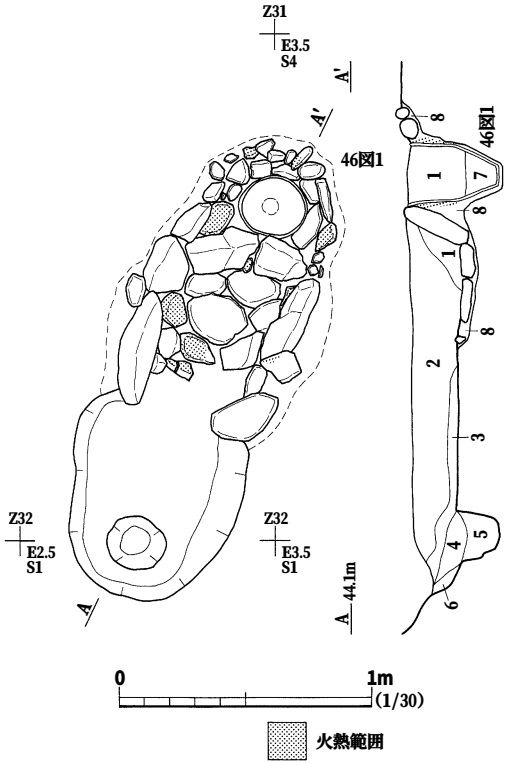
遺物出土状況　本遺構では縄文土器片が112点，石器が16点，須恵器片が１点出土した。須恵器はℓ３から出土しているが，撹乱による混入と考えられる。縄文土器の内１点は炉体土器である。床面から磨石が４点出土した。その他，ℓ３で縄文土器の破片が出土した。この土器は本遺構の廃絶にともなって投棄されたものと考えられる。

遺物　図46に縄文土器を，図46・47に石器を示した。46図１は，炉体土器の深鉢形土器であり，口縁部が欠損している。胴部下半に器壁が薄くなる部分があり，別作りされた底部と胴部を，この部分で接合した可能性がある。胴部の上半には，原体Ｌを横方向に回転した無節縄文が施されているが，特に文様は描かれていない。胴部下半は無文である。内面にはわずかに炭化物の付着痕が認められる。同図２は，深鉢形土器の口縁部から胴部上半の破片資料で，ℓ３から出土した。口縁部が外反する器形で，凹線と充填縄文によって文様を描いている。口唇部直下には水平に引かれた凹線が巡り，凹線より上位には縄文が施されている。凹線の下から胴部にかけては，凹線によって楕円形文と横方向に展開する大きな渦巻文とを施し，文様内部には縄文を充填している。渦巻文は胴部中程まで施されていると考えられる。胴部下半は地文のみが施されていると思われ，胴部中ほどでは渦巻文の外にも消し残された地文が見られる。

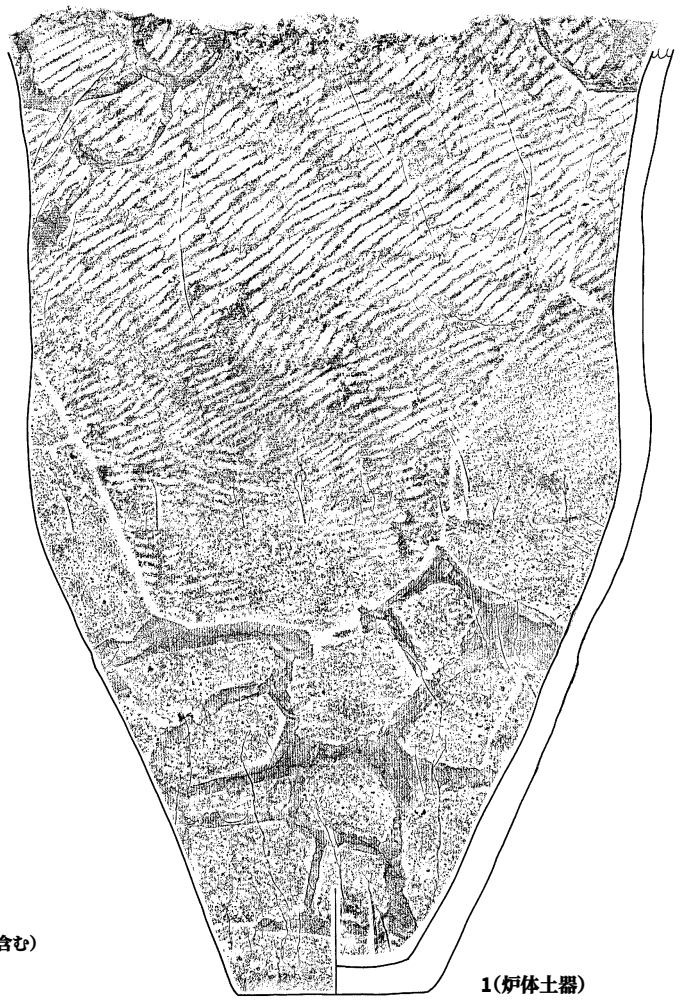
46図３は，玉髄製の二次加工のある剝片である。背面左側縁に面的な調整剝離を加えている。腹面の両側縁にも部分的な加工痕が認められた。同図４は礫面打面から剝がされたチャート製の剝片である。

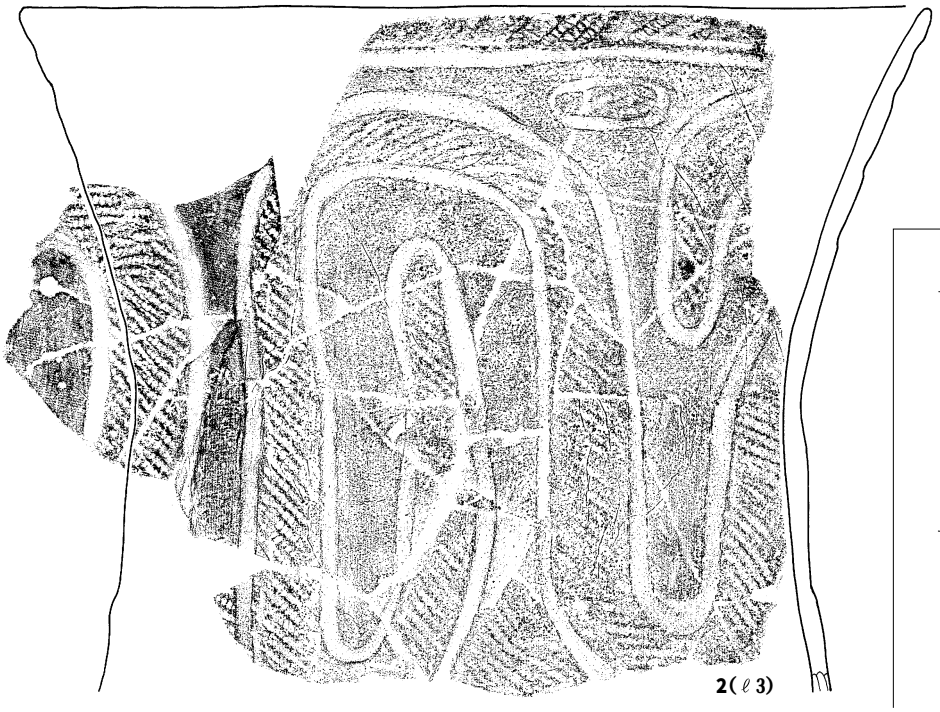
47図１～５は，扁平な自然礫を用いた磨・凹石である。同図１・３はアプライト製の磨石類である。表面には１カ所の浅い凹部が認められた。表裏両面には使用光沢や擦痕を有する磨耗痕が観察された。３の側面部には，部分的にアバタ状の敲打痕が認められた。同図２は花崗斑岩製の磨石類である。両面に磨耗痕が観察された。同図４は石組部を構成していた礫である。花崗岩製の磨石類で，表面には１カ所の浅い凹部が認められた。表裏両面には使用光沢や擦痕を有する磨耗痕が観察された。表面上半部は被熱によって器面が赤色に変化している。同５は片面にのみ磨耗痕がある斑状の流紋岩製の磨石類である。

まとめ　本遺構は，その北東側が１次調査，南西側が２次で調査が行われ，楕円形の平面形を持つ竪穴住居跡である。１次調査では，主柱穴２個，壁柱穴，壁溝などが検出されている。２次調査では，床面で炉跡１基，ピット５個，小ピット多数が検出された。本遺構は，当初３個の主柱穴で上屋を支えた構造であったが，建て替えにより主柱穴を４個に増やしたものと考えられる。また，各柱は抜き取られ，柱穴掘形内や複式炉，あるいは住居全体が人為堆積土により埋められ，最終的には，黒色土の投棄により住居跡は埋没している。出土した遺物から，本遺構は縄文時代中期末葉，



13号住居跡炉堆積土
1　灰黄褐色土 10YR4/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　明黄褐色土 10YR6/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　明黄褐色土 10YR6/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
6　明黄褐色土 10YR6/6
7　黒褐色土 10YR3/1と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒多量含む）
8　灰黄褐色土 10YR4/2





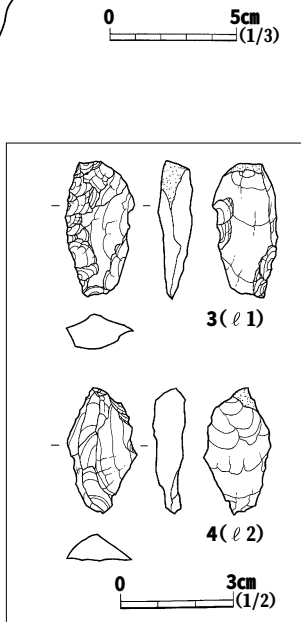


図46　13号住居跡炉と出土遺物(1)

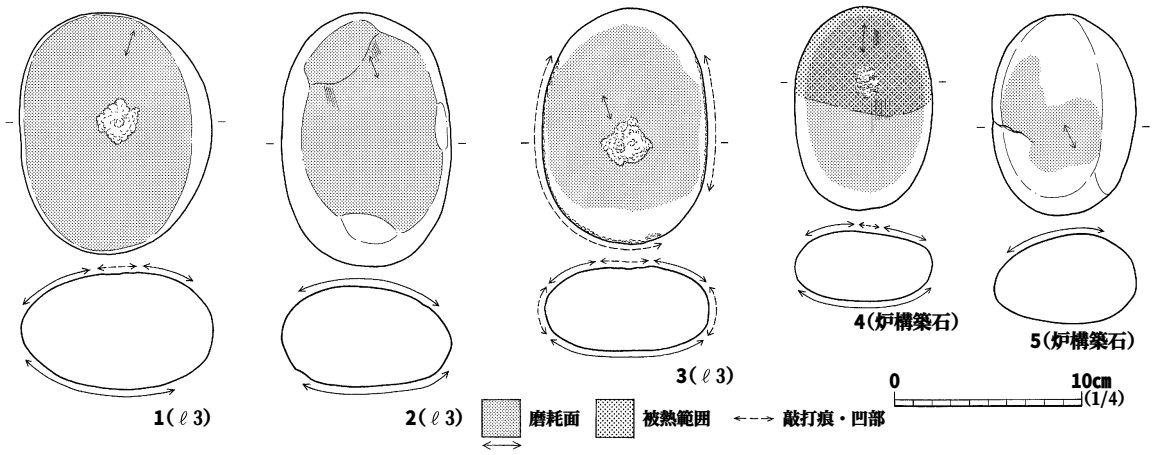


図47　13号住居跡出土遺物(2)

大木10式期古段階に位置付けられる。12号住居跡との重複関係は，１次調査での報告を訂正し，本遺構のほうが新しいと考えたい。　（轡　田）

14 号 住 居 跡　ＳＩ14 （図48・49，写真15・16）

位置・検出面　北区東端南寄りのＺ・ＡＡ32・33グリッドにまたがって位置している。検出面はＬⅣ上面である。本遺構は１次調査で東側半分が調査されている。

重複　12号住居跡と重複し，本遺構の方が新しい。その他，グリッドピット多数に壊されている。

堆積土　３層に分けられた。ℓ１は褐色土であり，壁際からの流れ込みが認められるため，自然堆積土と判断した。ℓ２は，LIVを起因とする黄褐色土を含んでいることから，人為堆積土と思われる。ℓ３は後述する貼床堆積土である。

平面形・規模　北東から南西方向がやや長い円形であり，長軸方向はN20 °Eである。その規模は，長軸長4.5m，短軸長4.3mである。

床面　床面は平坦であるが，踏み締まりは認められなかった。12号住居跡との重複部では，ＬIVに由来する黄褐色土により，部分的に貼床を形成している。

周壁　周壁の遺存率は低く，残りの良い北部で高さ20㎝程であるが，南部では遺存していなかった。

周溝　北部及び西部で，壁に沿って部分的に検出された。

複式炉　楕円形を呈する複式炉が床面南寄りから検出された。土器埋設部・石組部・前庭部から構成されているが，廃絶時に石組部の礫が抜き取られ，さらに土器埋設部から前庭部にかけて破壊されている。また，後世の柱穴に壊されているために，遺存状態が悪い。

(規模)長軸方向はN30 °Eである。長軸2.8m，短軸1.1mと推定される。

(堆積土)炉内堆積土は２層に分けられる。ℓ１は灰黄褐色土と黄褐色土の混土であり，住居廃絶後に人為的に埋められた堆積土と考えられる。堆積土中からは，炉に用いられていたと見られる礫が含まれていることから，炉を埋める際に炉の礫を抜き取り，投棄したものと考えられる。ℓ２は，炉を構築する際の掘形堆積土である。

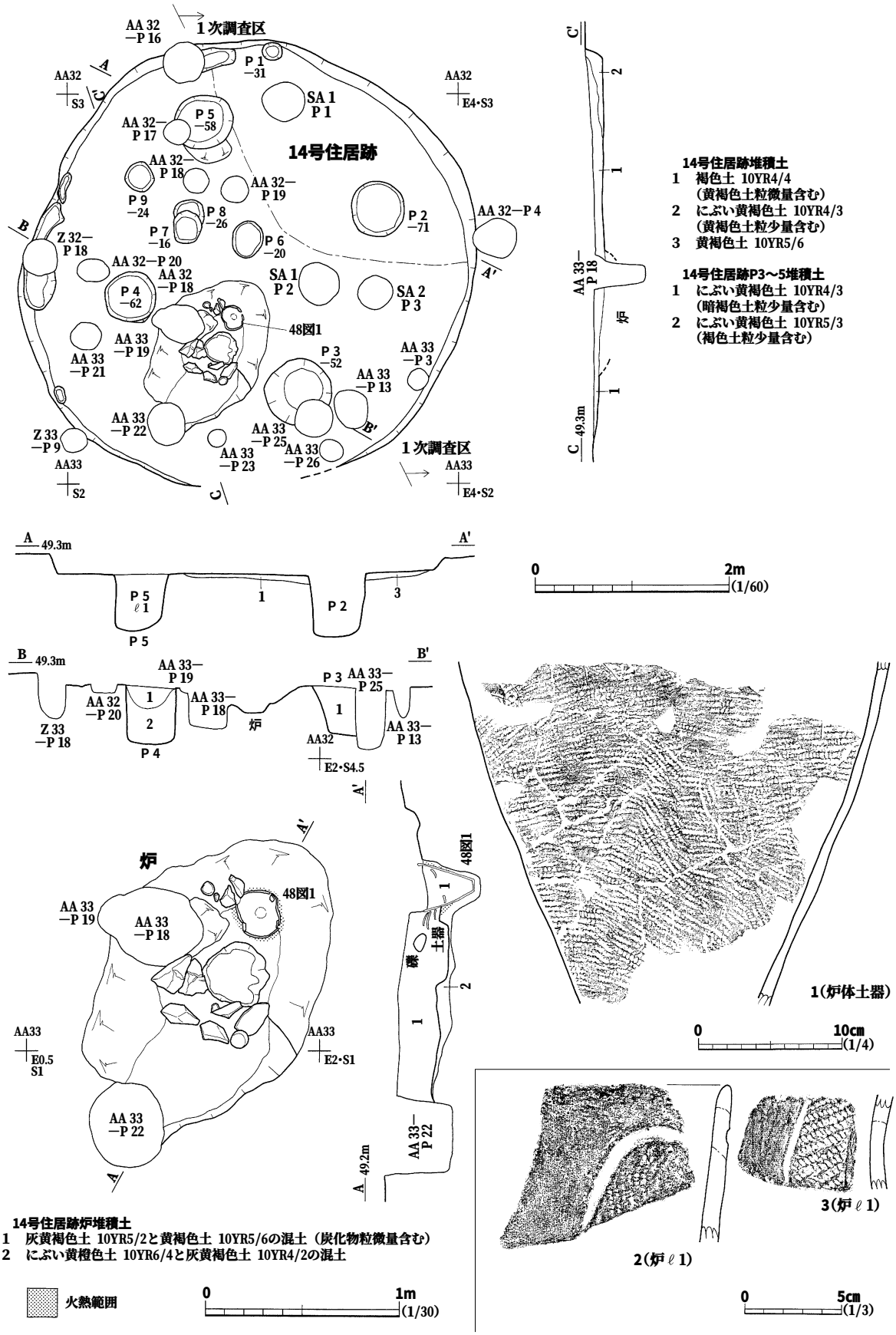


図48　14号住居跡と出土遺物(1)

(土器埋設部)口径30㎝程の埋設土器を１個体，設置して土器埋設部を構築している。炉体土器の周囲には，縁石は認められず，わずかに西側にのみ認められた。さらに，炉体土器の周囲から前庭部にかけては，床面から深さ10㎝程の浅い落ち込みが認められ，炉体土器も，その上半が欠損している。この他，後述する石組部では，礫の抜き取りが行われている。

これらのことから，本炉は，廃棄時に複式炉全体を壊して埋められた可能性が高いと判断している。炉体土器の上半は，廃絶時に破壊された可能性がある。

(石組部)掘形を掘り，底面及び側面に礫を敷いて構築していた。ただ，廃絶時に礫を抜き取ったらしく，礫は底面付近に辛うじて残っている程度である。残っている礫は不定形のものが多い。石組部中央には，礫を抜き取った後，部分的に掘り込んだ小穴状の痕跡が確認された。

(前庭部)前庭部も，土器埋設部や石組部同様，破壊されている。ただ，東壁部分と底面は構築時のまま遺存している。現況で確認できる規模は，壁上端の最大幅で1.0mである。底面に明確な踏み締まりは認められなかった。

主柱穴　２次調査で検出されたピットの内，Ｐ３～５は，形態と規模，配置から主柱穴であると判断した。１次調査で検出されたＰ２とあわせて，これら４個が本遺構の主柱穴であると考えられる。柱穴内堆積土はにぶい黄褐色土を基調とし，住居内堆積土のℓ２と類似する。柱痕が検出されなかったことから，住居廃絶時に柱が抜き取られたものと考えられる。本遺構の主柱穴は，平面形が円形であり，底面は平坦である。それぞれの柱穴の規模は，Ｐ２が直径60㎝，深さ71㎝，Ｐ３が直径66㎝，深さ52㎝，Ｐ４が直径54㎝，深さ62㎝，Ｐ５が直径60㎝，深さ58㎝と，ほぼ同一である。各柱穴間の距離は，Ｐ２－Ｐ３間が2.0m，Ｐ３－Ｐ４間が2.0m，Ｐ４－Ｐ５間が2.0m，Ｐ５－Ｐ２間が2.0mと，いずれも等しくなっており，柱を結んだ形は，ほぼ正方形を呈する。

ピット　Ｐ１・６～９は，いずれも径15㎝前後と規模が小さく，性格不明のピットである。床面から検出したためピット番号を付したが，堆積土は，黒褐色のぼそぼそした土であるため，後世のグリッドピットの可能性が高いものと思われる。

遺物出土状況　本遺構からは縄文土器片217点，石器が15点，陶磁器片３点が出土している。

遺物　図48・49に示した。48図１は複式炉に埋設されていた深鉢形土器であり，胴部のみの資料である。縦や斜め方向に回転施文した縄文が観察できる。同図２

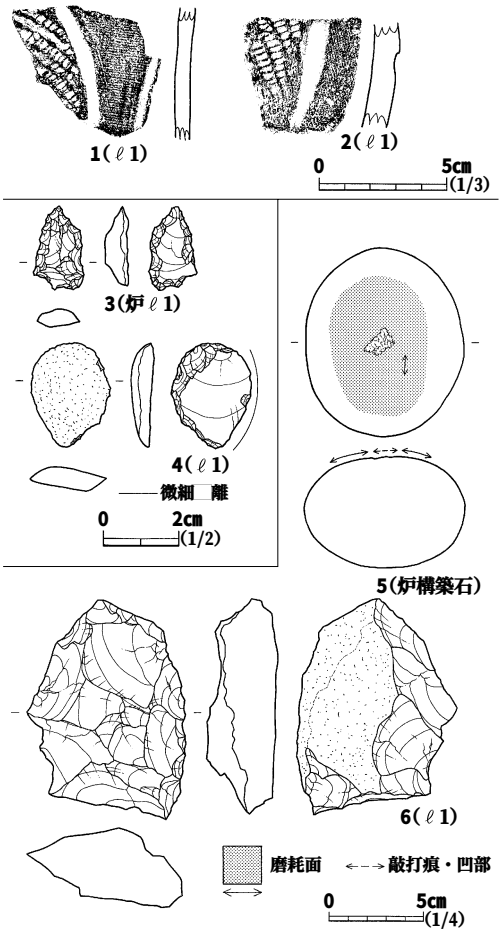


図49　14号住居跡出土遺物(2)

は口縁部資料，49図１・２は胴部破片である。いずれも凹線と充填縄文によって文様が描かれている。

49図３は，鉄石英製の石鏃未製品である。縁辺部を調整した時点で，下端部が欠失したものと推察される。同図４は鉄石英製の二次加工のある剝片である。腹面左側縁に不規則な加工痕が認められ，腹面右側縁には微細剝離が観察される。小形の背付き石器の一種であろう。同図５はアプライト製の磨石類で，片面にのみ磨耗痕が観察された。表面中央には浅い凹部が認められた。同図６はチャート製の石核である。分割面を作業面として，その周囲から求心状に剝片剝離を行っている。

まとめ　本遺構は，破壊され埋められた複式炉と４本柱穴を有する竪穴住居跡である。１次調査において遺構の東側半分を調査し，２次調査では残されていた西側半分を調査した。４本の柱穴はいずれも柱が抜き取られ，住居跡壁際の一部分も埋められていた。

本遺構の所属時期は，炉体土器が地文のみの資料であるため詳細には不明であるが，おおよそ縄文時代中期末葉と推定される。　（轡　田）

17 号 住 居 跡　ＳＩ17 （図50・51，写真17・18・350）

位置・検出面　北区東端ほぼ中央のＹ・Ｚ28・29グリッドで検出された。検出面はＬⅣ上面である。本遺構は，１次調査時に東側が調査され，２次調査時に西側を調査した。２次調査時の段階で，すでに床面が露出していたため，遺存状態が極めて悪い。

重複　２号溝跡と重複し，本遺構の東側が大きく破壊されている。

堆積土　堆積土が残存せず確認できなかったため，堆積状況は不明である。１次調査の段階では，層中に多量の炭化物粒や焼土塊・黄褐色土粒を含んだ11層の堆積土が確認されている。また，後述するように，床面直上からも薄層ではあるが炭化材の集積層が認められている。このことから，本住居跡は火災にあった可能性が高いものと推測している。

平面形・規模　東側が２号溝跡により大きく破壊されているため全体形は不明であるが，おおよそ直径5.2m程の円形を呈していたと思われる。

床面　細かな凹凸のある踏み締まりが広く見られ，床面には薄く炭化物粒の集積層が確認された。

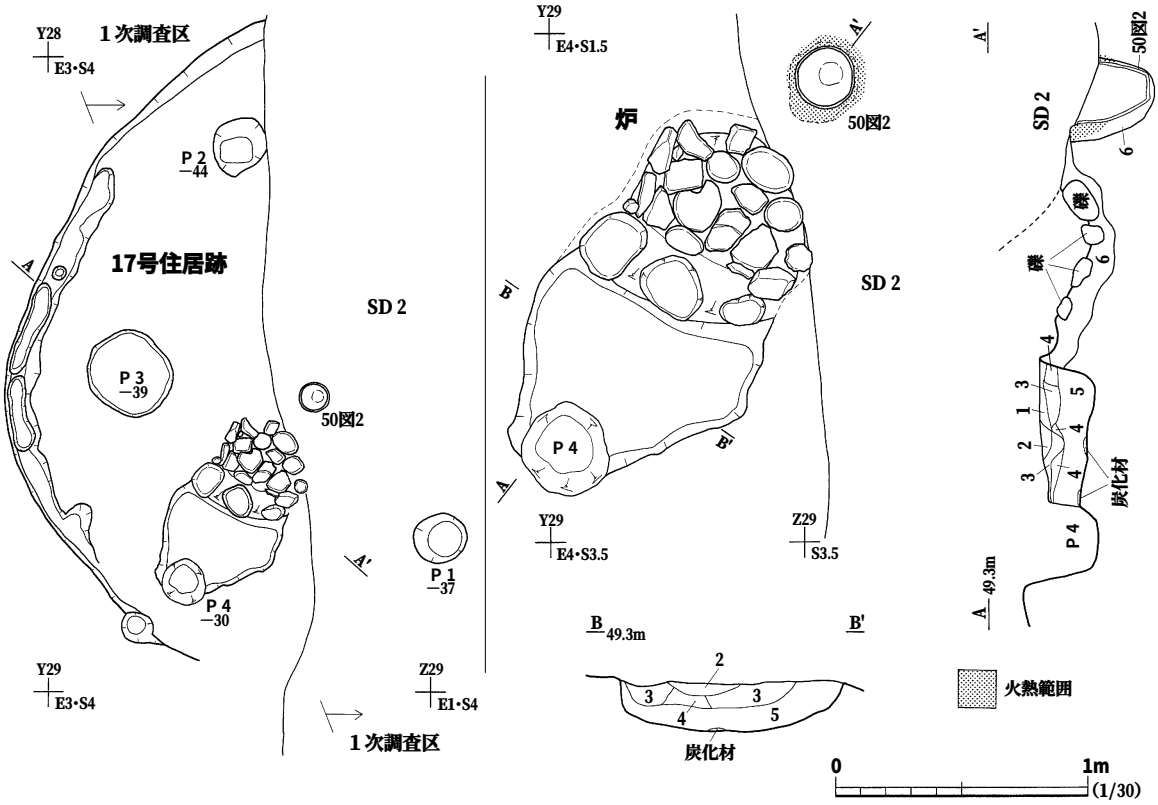
周壁　西壁で高さ10㎝程遺存しているが，南側では検出されなかった。

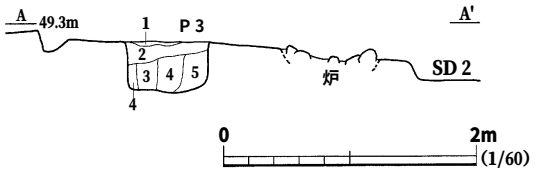
周溝　西壁から南西コーナーにかけて，壁に沿って断続的に検出された。溝の上端幅は20～30㎝程であり，床面からの深さは15㎝程である。

複式炉　土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉で，土器１個体を埋設している。床面の南西側で検出された。土器埋設部の上半と石組部を２号溝跡に壊されている。

（規模）本来楕円形の平面形を呈し，長軸2.2m，短軸0.8mの規模を有していたと推定される。炉の中軸線方向はＮ35 °Ｅである。

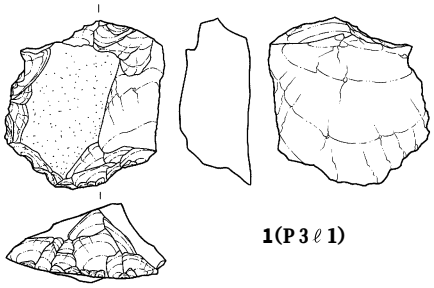
（堆積土）６層に分層された。この内，ℓ１～５は前庭部堆積土であり，２次調査で確認された。なお，石組部及び埋設土器部は１次調査で調査されている。ℓ１・３～５は，いずれも黄褐色土を基調とする人為堆積土である。前庭部底面には床面と同様の炭化材が検出されたことから，これらの





17号住居跡P3堆積土
1　灰黄褐色土 10YR5/2（炭化物粒少量含む）
2　灰黄褐色土 10YR5/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐灰色土 10YR4/1
4　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　にぶい黄橙色土 10YR6/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

17号住居跡炉堆積土
1　灰黄褐色土 10YR5/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　黒褐色土 10YR3/1
3　灰黄褐色土 10YR5/2
4　明黄褐色土 10YR6/6
5　にぶい黄橙色土 10YR6/3
6　褐灰色土 10YR4/1と黄褐色土 10YR5/6の混土



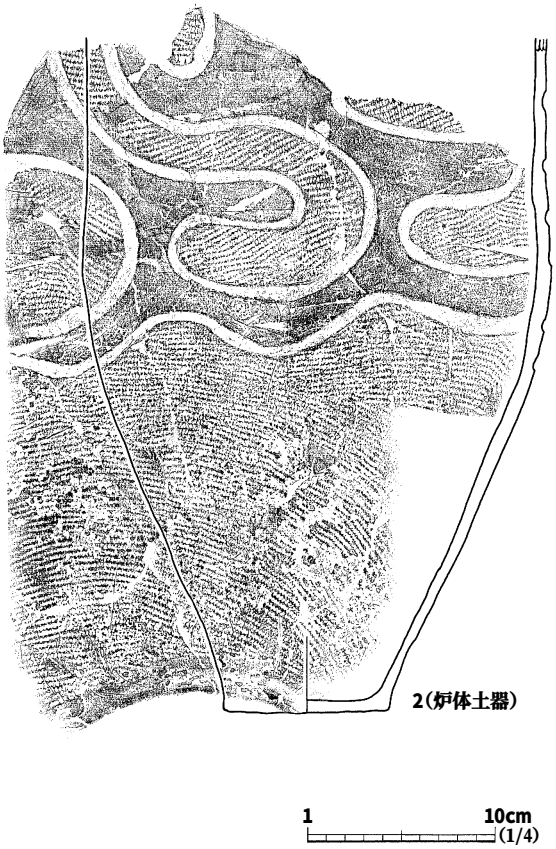


図50　17号住居跡と出土遺物(1)

黄褐色土は，火災後に本炉を埋めた堆積土と判断している。また，ℓ２の黒褐色土も，同様の性状のものと判断している。なお，ℓ６は掘形堆積土である。したがって，本炉は，火災後に埋められた可能性が高いものと推測している。

(土器埋設部)掘形を深く掘って土器を埋設している。炉体土器の上半は２号溝跡に壊されている。土器の周囲の土が５㎝程熱を受けて赤色変化していた。

(石組部)底面から，角礫と円礫を敷き詰めている。側壁の傾斜は緩やかである。前庭部との境には礫の抜き取り穴が見られる。

(前庭部)前庭部は端部に向かって収束し，本遺構の周壁には接していない。全体の形状は，不整な三角形を呈している。底面には明確な踏み締まりは見られなかった。前庭部の端部にピットが検出されたが，誤って土層を観察せずに掘り過ぎてしまった。その規模は，直径35㎝，深さ30㎝を測る。

主柱穴　２次調査で検出されたＰ３が，主柱穴と考えている。直径60㎝程の方形に近い円形で，深さは40㎝程である。土層断面の観察により，直径17㎝の柱痕が認められた。１次調査時に検出されたＰ１・２は，Ｐ３よりも規模が小さいものの，その位置から主柱穴である可能性が高い。これらが主柱穴だとすると，本住居跡は４ないし５本の主柱穴で上屋を支える構造だったものと推測される。しかし，２号溝跡に破壊されているため，残る主柱穴は検出できなかった。なお，各柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ３間が2.8m，Ｐ３－Ｐ２間が1.9mである。

ピット　周溝内で，小さなピットが数個検出された。これらは壁柱穴である可能性がある。

遺物出土状況　縄文土器が７点，石器が６点出土している。縄文土器の１点は炉体土器である。

遺物　図50・51に示した。50図２は，複式炉に埋設されていた深鉢形土器であり，口縁部を欠損している。胴部中央には，１条の波状凹線を施し，これにより文様帯を区画している。胴部上半の文様は，凹線でＳ字状の区画線を描き，文様帯内には縄文が施されている。胴部下半は地文のみとなっている。内面の下半部には，二次焼成を受けて部分的に焼けはじけ痕が認められる。

50図１は，流紋岩製の削器である。背面中央に礫面を残す分厚な剝片を素材とし，打面部と背面右側縁を除く縁辺に腹面側から急斜な調整剝離を施して鋸歯状の刃部を作り出している。51図１は側面に磨耗面を有する砂岩製の磨石類である。同図２は花崗岩製の石皿類である。扁平な礫の平滑面を未加工のまま用いている。表面には光沢を帯びた顕著な磨耗面が認められた。

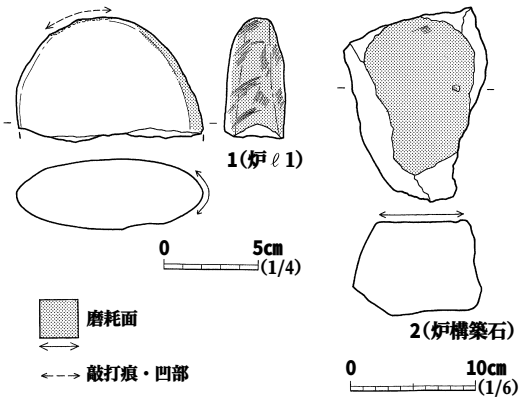


図51　17号住居跡出土遺物(2)

まとめ　本遺構は１次調査と２次調査にまたがって調査された。遺構東側を２号溝跡に破壊されたため全容がわからないが，円形の平面形を呈し，複式炉を有する竪穴住居跡であったと考えている。柱穴は４ないし５個と思われる。床面及び炉内には炭化材が見られ，これの状況から焼失家屋と考えられる。本遺構の所属時期は，炉体土器の特徴

から，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階に位置付けられる。　（轡　田）

52 号 住 居 跡　ＳＩ52 （図52～56，写真19・20・350）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｎ37・38グリッドに所在する。本遺構の西側には，906・1101・1102号土坑，北側には1412号土坑，北東側には1236号土坑，東側には53号住居跡と1106号土坑などの遺構が隣接している。検出面はＬⅣ上面で，円形の暗褐色土の範囲を確認した。

重複　重複する遺構はない。

堆積土　ℓ１は黒褐色土で多量の遺物を含む廃棄土である。ℓ２～４は地山に近い色調の褐色・明黄褐色土で全体的にブロック状を呈していることから，人為的な堆積土と考えられる。ℓ５は壁溝部分にのみ認められる土で，おそらく周溝に立てられた壁板の腐食土と考えられる。

平面形・規模　南北方向に長軸をもつ五角形に近い円形を呈し，炉が接する南壁はやや直線的になる。長軸方向はＮ16 ℃Ｗであり，規模は南北長6.2m，東西長5.9mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに構築されている。部分的に凹凸はあるもののほぼ水平で，全体的に踏み締まりが認められるが，比較的壁際は弱い。

周壁　全周直立気味に立ち上がる。検出面からは，最も深い西壁で30㎝，東壁では15㎝を測る。

周溝　北西壁際以外の全周に認められた。幅10～45㎝，深さ３～40㎝の規模で，内部にはℓ５とした暗褐色土が堆積していた。この暗褐色土は周溝内のみに堆積しており，場所によっては床面に横臥状態で堆積することから，おそらく壁板が立てられていたものと考えられる。ただ部分的にとぎれることや床面から３㎝しかない部分もあり様相は複雑である。

複式炉　複式炉は床面から２基，ａ炉とｂ炉が検出された。ａ炉は南壁に前庭部を接してＰ１・５に挟まれている。ｂ炉はほぼ床面中央に位置する小型の複式炉である。両者は接している。

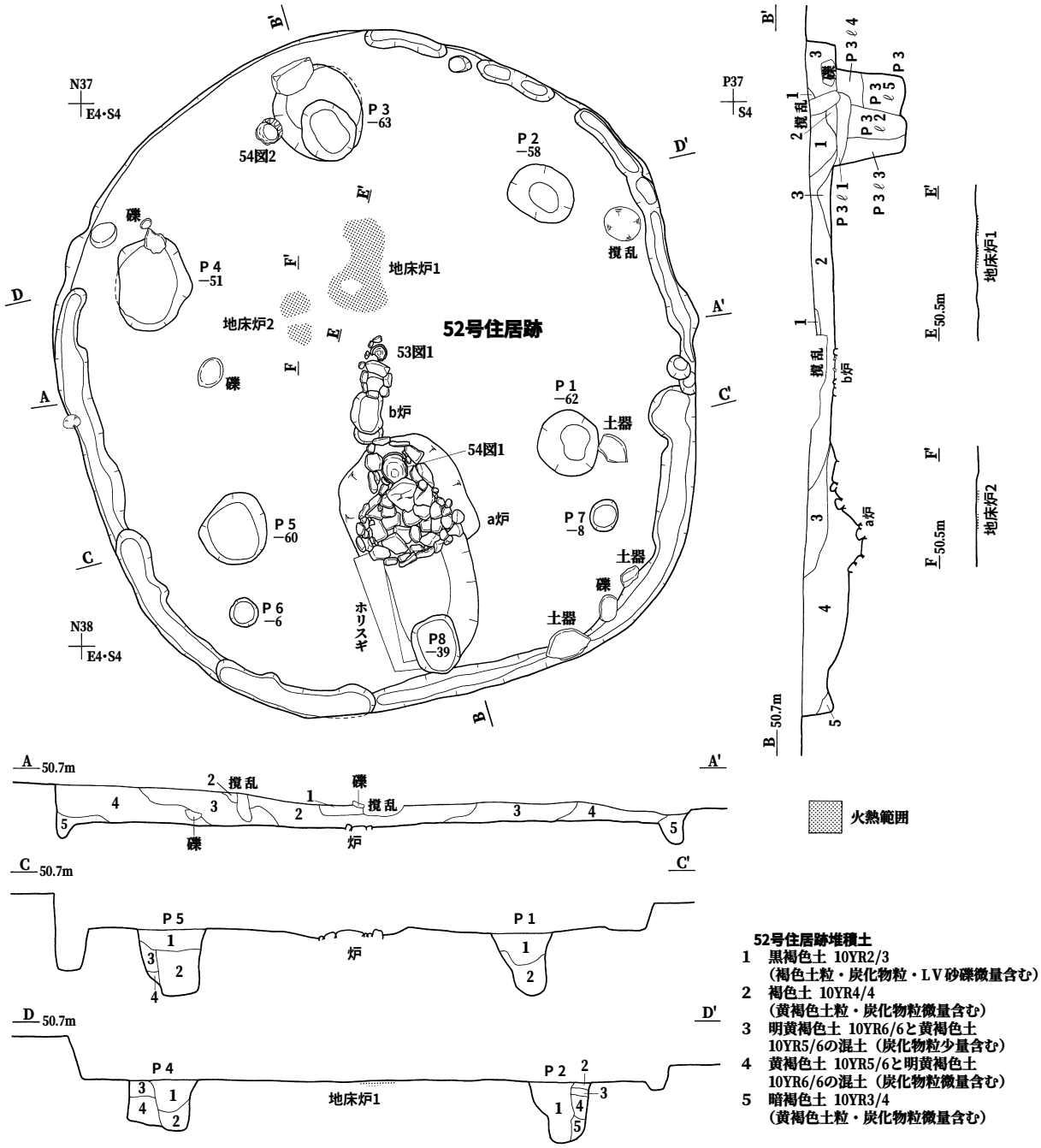
ａ炉　円形配置の石囲いをもつ土器埋設部，台形状の石組部，一部を掘り過ぎたが楕円形状の前庭部から構成される。

（堆積土）ℓ１・２は，それぞれ住居内のℓ４・５に比定される堆積土である。ℓ１は人為堆積土であり，複式炉全体を埋めている。ℓ３は炉体土器内特有の土であり，使用時に堆積した可能性がある。ℓ４・５は，複式炉の構築土で，石組部掘形や土器埋設部の掘形と炉体土器の体部上半以上の隙間に込められている。

（規模）全長240㎝，最大幅100㎝を測る。炉の主軸線は，Ｎ15 ℃Ｗである。

（土器埋設部）土器埋設部は，開口部の径28㎝の炉体土器端部に接して，斜位に偏平な石を不規則に配置し，その外側に直立や横位に石を配して縁石としている。縁石を含む埋設部の南北方向の長さは44㎝で，炉体土器は床面から深さ56㎝まで埋まっており，炉体土器北側の地山露出部分は強く焼けている。

（石組部）偏平な礫を底面に少々隙間を残しつつ配している側壁は，偏平な石を斜位に並べ，上端部には拳大の礫を用いて縁を構成している。炉体土器との境には，比較的大形の板状の礫が用いられ



52号住居跡堆積土
1　黒褐色土 10YR2/3
（褐色土粒・炭化物粒・ＬＶ砂礫微量含む）
2　褐色土 10YR4/4
（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
3　明黄褐色土 10YR6/6と黄褐色土
10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
4　黄褐色土 10YR5/6と明黄褐色土
10YR6/6の混土（炭化物粒微量含む）
5　暗褐色土 10YR3/4
（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）

52号住居跡P1堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/4（炭化物粒微量含む）

52号住居跡P2堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒微量含む）
3　黒褐色土 10YR2/3（炭化物粒微量含む）
4　黄褐色土 10YR5/6（褐色土粒・炭化物粒微量含む）
5　黒褐色土 10YR2/3（炭化物粒微量含む）

52号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（褐色土粒・炭化物粒微量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
4　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
5　にぶい黄褐色土 10YR4/3（褐色土粒多量含む）

52号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（炭化物粒微量含む）
3　明黄褐色土 10YR6/6（黒褐色土粒少量含む）
4　褐色土 10YR4/6（明黄褐色土粒微量含む）

52号住居跡P5堆積土
1　黄褐色土 10YR5/6（炭化物粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/6（黒褐色土粒・炭化物粒微量含む）
3　黄褐色土 10YR5/8
4　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒多量含む）

図52　52号住居跡

ている。南北方向の長さは76㎝で，最大幅は100㎝を測る。赤変している部分は，炉体土器との境に用いられている板状の礫近辺のみで，その他は特に色調の変化は認められない。石組部の掘形は，東西方向に長軸をもつ不整な円形であり，基本的に掘形底面・壁面に石を張り付けているのみであるため，掘形内堆積土はあまり確認されない。土器埋設部と接する部分にのみℓ４が認められる。

(前庭部)前庭部は，全周緩やかに立ち上がり鍋底状の断面形を呈する。南北方向の長さは110㎝，最大幅は推定100㎝を測る。周溝と接する位置にはＰ８がある。

ｂ炉　小型のもので，不規則な縁石をもつ土器埋設部，方形状の石囲部，不整楕円形の前庭部から構成される。複式炉全体を見ても焼土が確認される部分がなく，構築石に被熱の痕跡が認められないことから，燃焼作業を行ったという積極的な証拠はない。

(堆積土)ℓ１は住居内堆積土ℓ２に比定できる。ℓ２は炉体土器内にのみ認められ，炭化物粒を多量に含む黒褐色土であることから，炭化物を溜めておいた可能性が高い。掘形に充填される埋め土はほとんどなく，土器埋設部と石囲部の接する部分にのみ構築土であるℓ３が観察される。

(規模)全長が100㎝，最大幅が30㎝を測り，炉主軸線はＮ10 °Ｅである。

(土器埋設部)口径15㎝の土器を正位に埋設して，口縁部の西側部分にのみ石が並べられている。南北方向の長さは23㎝で，炉体土器は床面から深さ18㎝まで埋まっている。土器埋設部の掘形は炉体土器の形に掘り込まれている。

(石組部)側壁のみに方形に石が配され，掘形底面にはＬⅣが露出していた。南北方向の長さは34㎝，最大幅28㎝を測る。掘形の底面は，土器埋設部に向かってやや傾斜している。

(前庭部)不整楕円形状で南部に段が見られる。東壁以外は，緩やかに立ち上がり，鍋底状の断面形を呈する。南北方向の長さは48㎝，最大幅は30㎝で，前庭部南端はａ炉の土器埋設部に接する。

地床炉　地床炉も２基検出された。

地床炉１　ｂ炉から北へ30㎝の場所にあり，ａ炉の主軸延長線上に位置する。平面形はひょうたん状を呈し，全長95㎝，最大幅55㎝を測る。焼土の厚さは２㎝である。

地床炉２　ｂ炉から北西へ50㎝の場所にある。平面形は楕円形状を呈するが，一部中央部が途切れている。規模は長径45㎝，短径25㎝で，焼土の厚さは１㎝程である。

主柱穴　主柱穴はＰ１～５の５個で，Ｐ１・５はａ炉を挟む位置，Ｐ２・４は地床炉を挟む位置，Ｐ３は北壁中央のａ炉主軸延長線上に位置して，五角形の配置になっている。各柱間は，Ｐ１－Ｐ２間2.3m，Ｐ２－Ｐ３間2.2～2.3m，Ｐ３－Ｐ４間2.2～2.3m，Ｐ４－Ｐ５間2.4mで，2.3m前後を基調としている。各柱穴の形態及び規模は，抜き取り痕跡のため，まちまちである。上端の形態は不整な円形や楕円形を呈し，断面形はU字形や段がつく形のものが認められる。規模はＰ１が南北60㎝，東西56㎝，深さ62㎝，Ｐ２が南北53㎝，東西60㎝，深さ58㎝，Ｐ３が南北88㎝，東西82㎝，深さ63㎝，Ｐ４が南北84㎝，東西66㎝，深さ51㎝，Ｐ５が南北66㎝，東西62㎝，深さ60㎝である。形態が崩れていることや柱痕が確認されないことから，各柱とも抜き取られたと考えられる。またＰ１以外の柱穴には版築が観察される。Ｐ３・４の上端には置石がある。

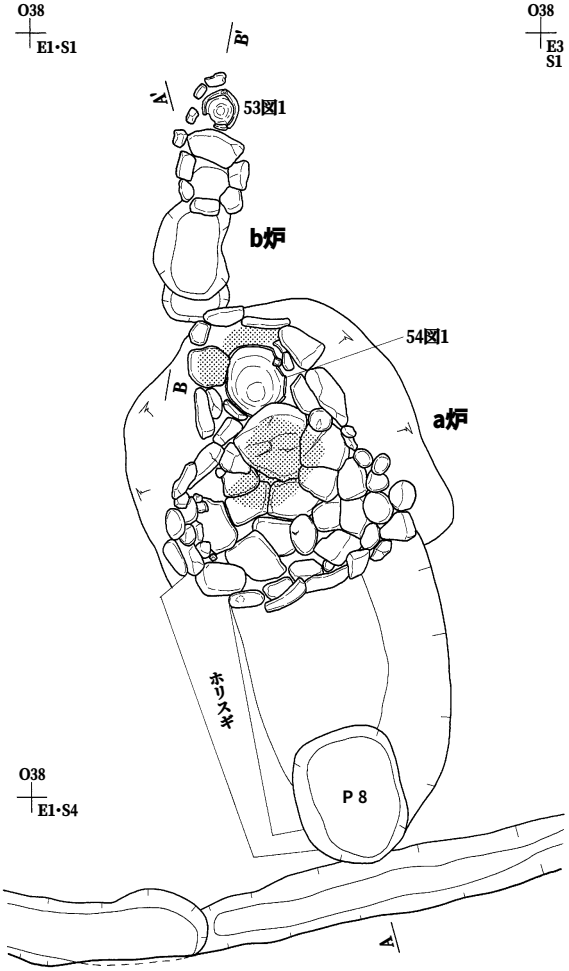
ピット　主柱穴以外に床面・複式炉前庭部から３個検出した。Ｐ６・７は，それぞれＰ１・５から南へ30㎝の場所にあり，それぞれに付属するような配置をとることから，支柱の可能性があると判断した。Ｐ６は円形で径27㎝，深さ６㎝，Ｐ７も円形で径28㎝，深さ８㎝を測る。断面形はＵ字形である。Ｐ８はａ炉前庭部南端部にある。楕円形状を呈し，南北54㎝，東西42㎝，床面からの深さ39㎝を測る。ピット内堆積土は３層あり，ℓ３は使用時の堆積土，ℓ１はピットを埋めた人為堆積土と判断した。したがって，Ｐ１～５の５個の主柱穴と併せて配置を考えるときれいな六角形状を示すが，ピット内堆積土の様相から柱穴とする根拠に乏しいので省いた。

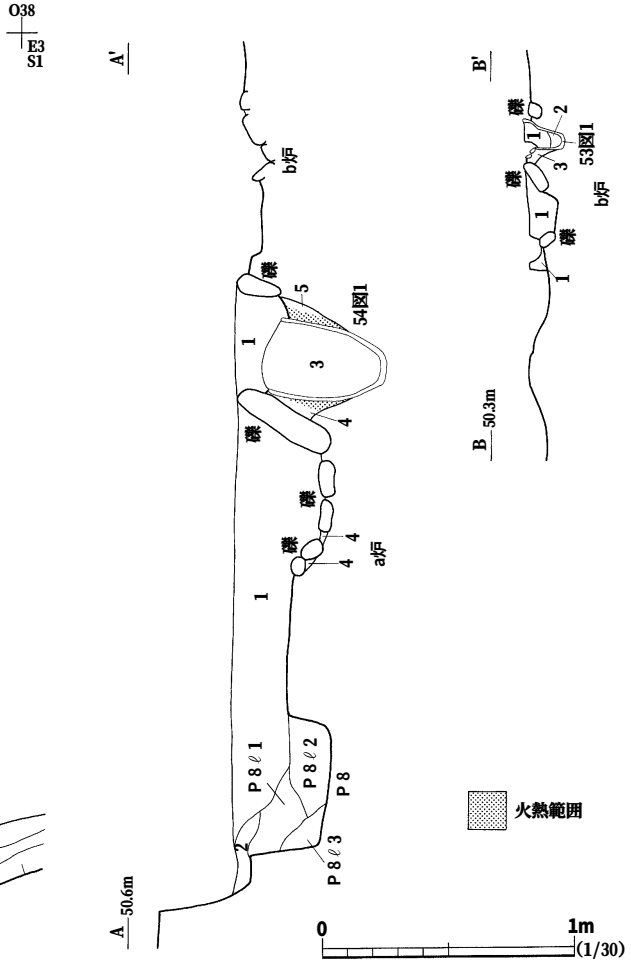
遺物出土状況　床面から出土したのは，縄文土器片30点である。54図２の土器はＰ３西端に正位の状態で置かれていた。55図１の土器は，Ｐ１脇と南壁南東部から出土したものが接合した。どちらも口縁部が床面に接した逆位の状態であった。この他，堆積土中から縄文土器片436点，土師器片５点，石器６点が出土した。

遺物　53～56図に縄文土器を示した。53図１はｂ炉の炉体土器で，キャリパー形の小型の土器である。平口縁であるが，１カ所に上面円形の突起が付く。文様は口縁部と胴部に分かれ，口縁部には上向きのＣ字文とＳ字形の沈線が交互に４単位施されて，Ｃ字文の開口部はつまみ出し状の突起になる。摩滅や破片がないため明確でないが，胴部には上向きのｅ字文がおそらく４単位施される。地文はＬＲ原体を不規則に転がしているが，Ｃ・Ｓ・ｅの各単位文以外は磨り消されている。

54図１はａ炉の炉体土器である。口縁部が欠損しているが，胴部中位で緩く屈曲して，口縁部が外反する器形と考えられる。文様は胴部中位まで施され，それ以下はＬＲ原体を不規則に転がした単節縄文，胴部下半から底部付近で無文となる。文様は磨消縄文によるＵ字文が並列する。一部沈線が閉じずに末端が渦状を呈する箇所もある。54図２は口縁部を欠損するが胴部中位でくびれる器形を呈する。文様帯は上部・下部に分かれ，上部はわずかに沈線が確認できるのみで，下部には懸垂状のモチーフが描かれる。54図３は外反する口縁直下に沈線を一巡させ，それ以下に沈線と充填縄文で文様を描く。54図５は口縁直下に稜を巡らして，稜より上部を無文，下部を地文にしている。54図４も口縁直下が無文の資料で，隆帯で地文部と区画している。隆帯は一部突起になる。54図６，55図９は胴部破片で，前者は稜線，後者は沈線で文様を描く土器である。

55図１は外傾して立ち上がり，口縁部が緩やかに内湾する器形である。口縁直下に沈線を一巡させ，その上部は無文，下部はＲＬ原体を縦に回転した単節縄文のみとなる粗製の土器である。55図２・３も同様な土器と考えられる。55図４・５も口縁直下に沈線を一巡させる土器で，沈線より上部に横回転の縄文を，下部には縦・斜め回転の縄文を施す。55図６は前述した53図１と同様な文様をもつ土器で，４単位の波状口縁でキャリパー形を呈する。口縁直下には，沈線を一巡させ，その下の波頂部下に上向きのＣ字文を４単位，その間に横向きのＣ・Ｖ字文，Ｓ字形の沈線を施す。口縁部文様帯と胴部文様帯の境には横位楕円文が連続し，胴部にはＵ字文と考えられるモチーフが横位に展開する。各単位文様内にはＬＲ原体による単節縄文を充填している。53図２，56図１もキャリパー形の可能性が高いことから，同様な文様構成をもつと考えられる。55図７・８は内湾する口





52号住居跡a炉堆積土
1　黄褐色土 10YR5/6と明黄褐色土 10YR6/6の混土（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒多量含む）
4　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）
5　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

52号住居跡b炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒微量含む）
2　黒褐色土 10YR2/3（炭化物粒多量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

52号住居跡P8堆積土
1　黄褐色土 10YR5/6
2　褐色土 10YR4/4（炭化物粒少量含む）
3　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒多量含む）

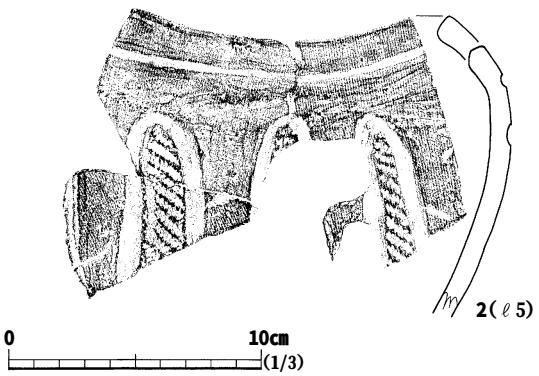


図53　52号住居跡炉と出土遺物(1)

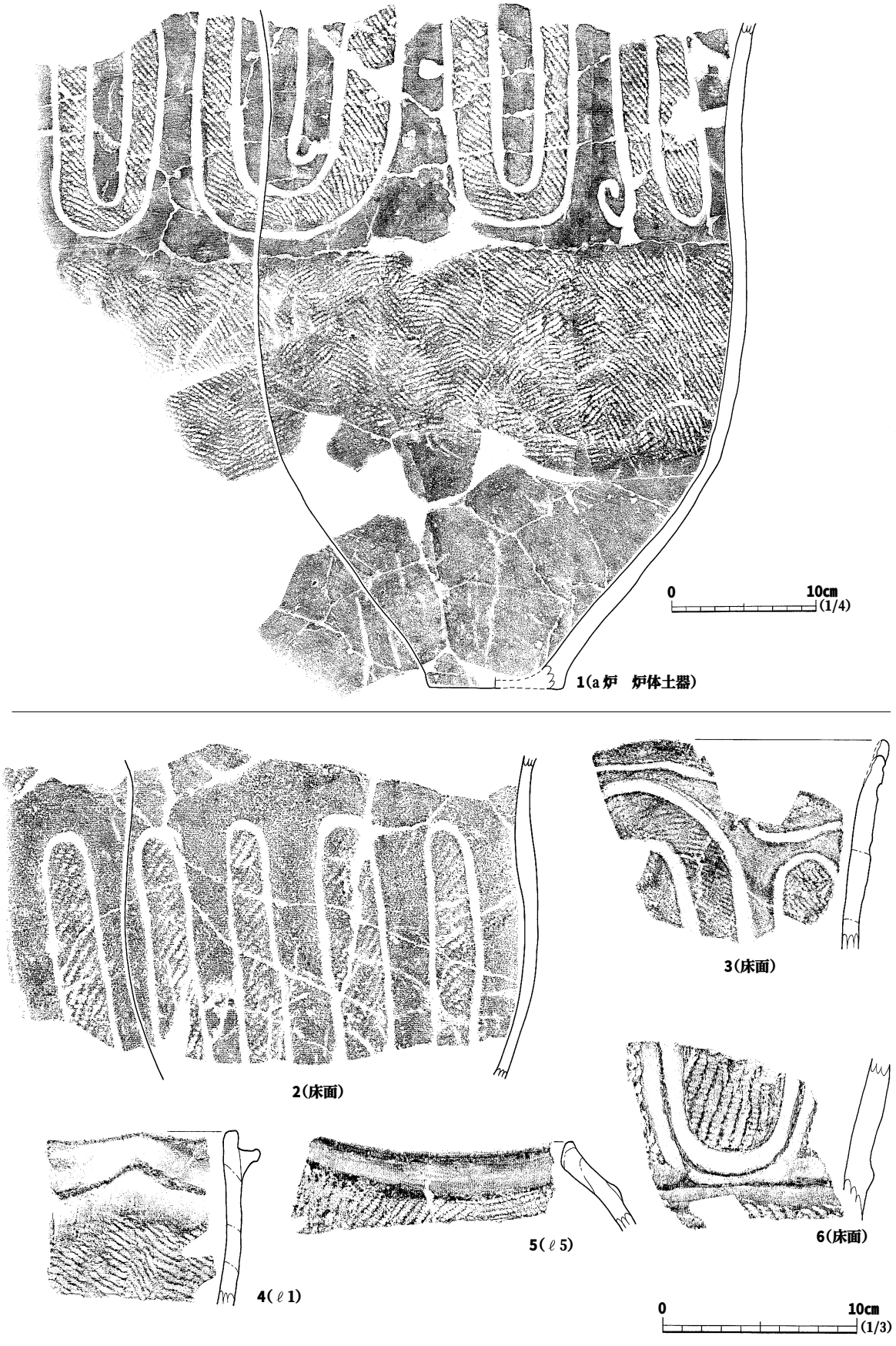


図54　52号住居跡出土遺物(2)

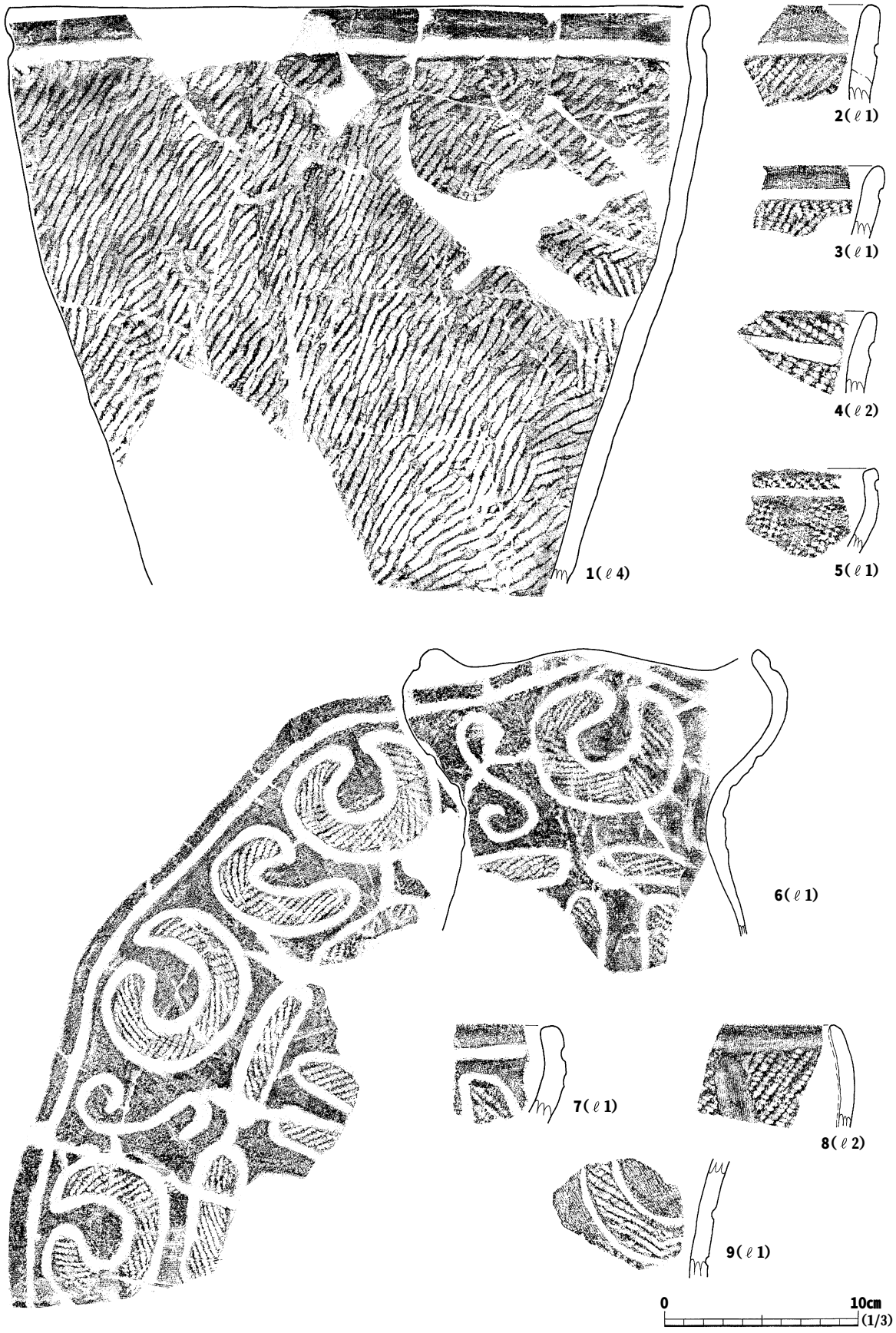


図55　52号住居跡出土遺物(3)

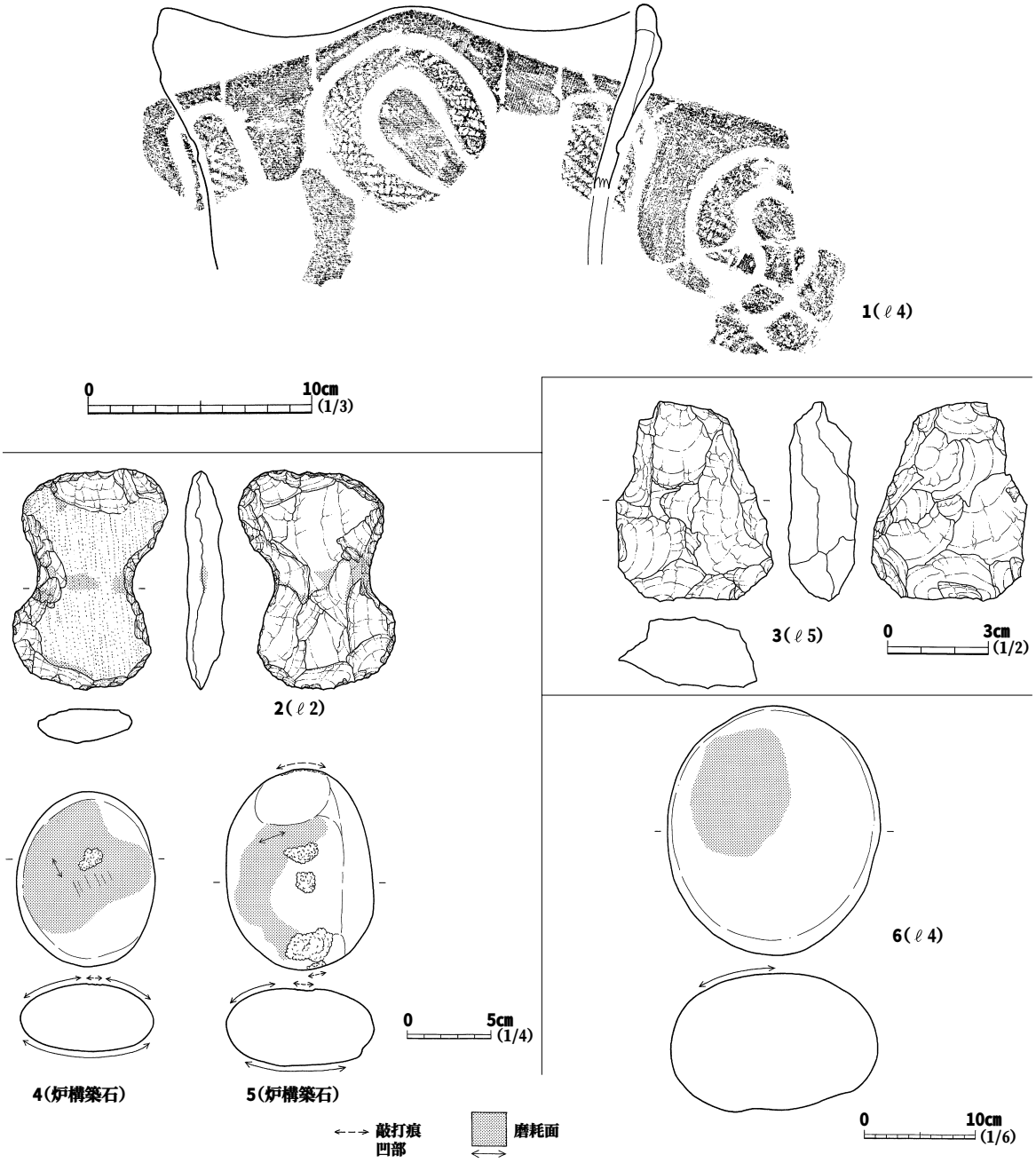


図56　52号住居跡出土遺物(4)

縁直下に沈線を一巡させる土器で，どちらも沈線より上部は無文であるが，下部は，７が沈線で囲い込んだ外部の地文を磨り消し，８が囲い込んだ内部を磨り消している。

56図２は粘板岩製の分銅形打製石斧である。素材には板状の大形剝片が用いられている。下側縁に細かな調整剝離が施されて刃部を形成している。えぐれている部分には磨耗による光沢が見られる。同図３は流紋岩製の剝片素材の石核で，腹面右下部には主要剝離面が残存している。素材の縁辺部を求心状剝離しているが，石質が粗質であるため，有効な剝片剝離には至っていない。腹面左側縁には細かな剝離が見られることから，石篦の製作途中段階の可能性がある。同図４は，花崗斑

岩製の磨石類である。表面中央部に浅い凹部が認められた。同図５は，斑状の流紋岩製の磨石類である。表面中央部にアバタ状の凹部が２カ所認められ，その周囲に磨耗痕が観察された。上下両端には敲打痕がある。同図６は，花崗岩製の石皿もしくは大形の磨石と考えられる資料である。表面にわずかな磨耗光沢が観察された。

まとめ　本住居跡は定型化したａ炉と，その主軸線を挟んで線対称の配置を示す主柱穴により構成され，主軸線延長上には，非常に小型のｂ炉や地床炉１・２があり，Ｐ３では，壁下端に接して置石が認められた。ｂ炉は床面中央に位置し，特に炉体土器は床面の中心位置にあることや，燃焼作業を行った形跡が全くないことから定型的な複式炉とは異なった用途があったことが推測される。住居廃絶時には柱を全て抜き取り，竪穴全体を埋めている。所属時期は炉体土器や床面出土土器から，縄文時代中期後葉の大木９式から大木10式期にかけての時期と考えられる。　（新　海）

53 号 住 居 跡　ＳＩ53 （図57～59，写真21・22・350）

位置・検出面　北区南西部平坦面のＰ・Ｑ38・39グリッドに所在する。本住居跡西側には52号住居跡，北西側に1106号土坑，北側に1235・1292・1427号土坑，南側に1105・1180号土坑が隣接する。検出面はＬⅣ上面で，褐色やにぶい黄褐色土の円形範囲を確認した。

重複　Ｐ３の西脇と北西隅に小穴があるが，いずれよりも本住居跡が古い。

堆積土　３層に分層された。レンズ状堆積であるが，ℓ１・２は黄褐色土粒を含む明るい色調の土であり，人為堆積土の可能性が高い。ℓ３は黒褐色土で壁際に特徴的に見られることから，周溝に埋められていた板材などの腐食層の可能性がある。

平面形・規模　やや東西に膨らむが，ほぼ円形である。長軸方向はＮ72 ℃Ｗであり，規模は検出面の壁上端幅で南北長4.3m，東西長4.5mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに構築されている。やや東側へ傾斜しているがほぼ水平に構築されている。東側一部を除いて強固な踏み締まりの痕跡が確認された。

周壁　遺存状態が悪く，最も残りの良い西壁で13㎝，北壁は残存していなかった。浅いため立ち上がりは不明である。

周溝　北壁の一部と東壁の一部を除いて，壁の下端に沿って一巡する。幅12～47㎝，深さ９～28㎝の規模で，内部の堆積土は場所により違いがあるが，おおむね住居内堆積土より暗い色調の土が確認された。南壁の東部，複式炉前庭部と接する部分で途切れるが，この部分は壁から床面中央に向かって緩やかに傾斜しており，入り口施設があった可能性がある。

複式炉　前庭部末端が南壁中央部に接し，Ｐ１とＰ３に挟まれた場所にある。円形配置の石囲いをもつ土器埋設部，台形状の石組部，末端部がすぼまる長い台形状の前庭部から構成される。

（堆積土）ℓ１～３は，住居内堆積土のℓ１～３に比定できる。ℓ４は炉体土器内に特有の土で，炭化物粒が多く含まれることや，上端に石が認められるなどの特徴がある。炉体土器脇や炉体土器と石組部の接する部分には構築土ℓ５・６が込められる。土器埋設部掘形北壁に接するように直立状

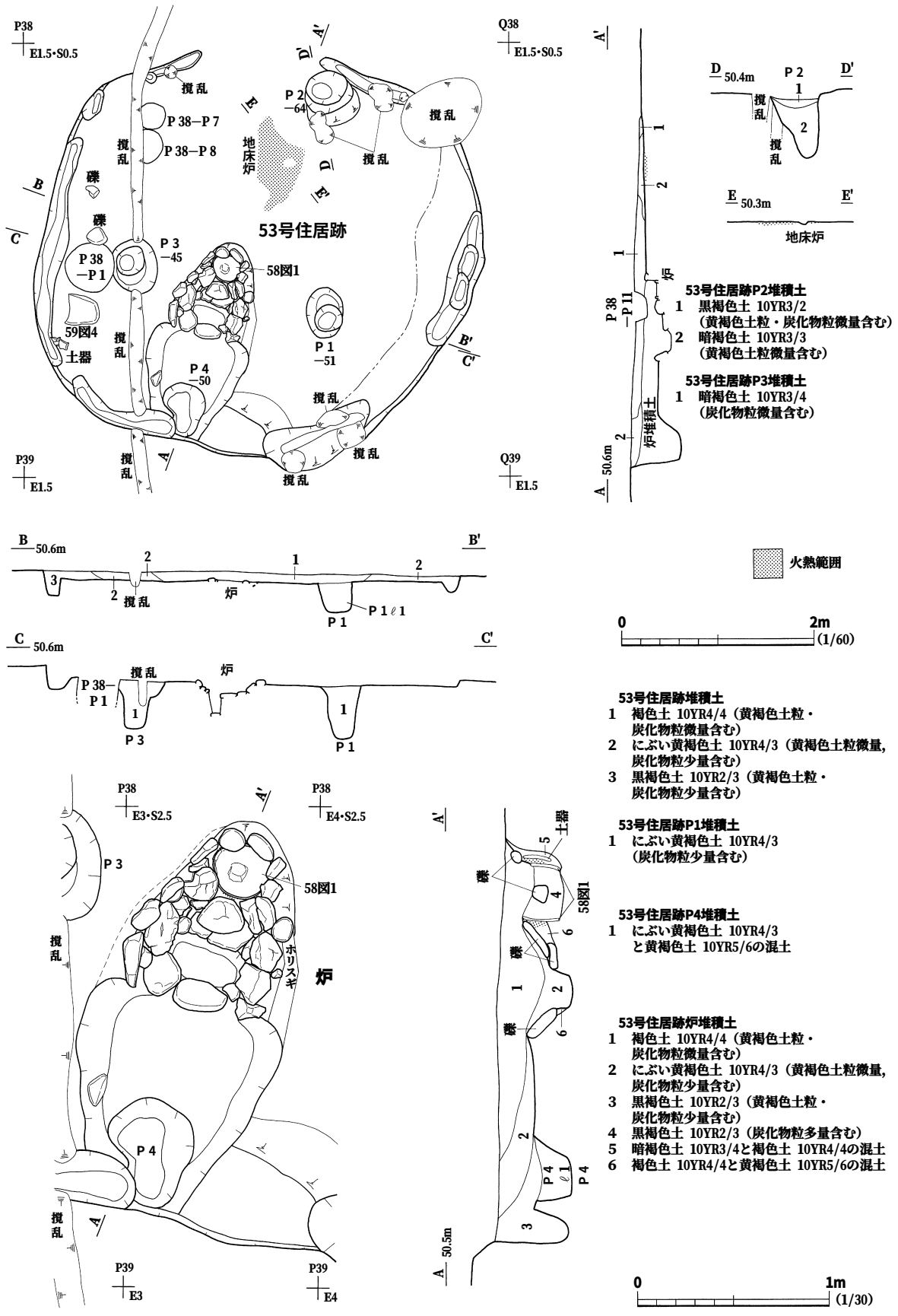

53号住居跡
P38 E1.5・S0.5
Q38 E1.5・S0.5
P39 E1.5
Q39 E1.5
攪乱
地床炉
礫
P 38—P 7
P 38—P 8
P 2 —64
P 3 —45
P 38 —P 1
P 4 —50
P 1 —51
58図1
59図4
土器
A 50.6m
D 50.4m
E 50.3m
炉
炉堆積土
53号住居跡P2堆積土
1 黒褐色土 10YR3/2 (黄褐色土粒・炭化物粒微量含む)
2 暗褐色土 10YR3/3 (黄褐色土粒微量含む)
53号住居跡P3堆積土
1 暗褐色土 10YR3/4 (炭化物粒微量含む)
B 50.6m
C 50.6m
P 1 ℓ 1
火熱範囲
0 2m (1/60)
53号住居跡堆積土
1 褐色土 10YR4/4 (黄褐色土粒・炭化物粒微量含む)
2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (黄褐色土粒微量, 炭化物粒少量含む)
3 黒褐色土 10YR2/3 (黄褐色土粒・炭化物粒少量含む)
53号住居跡P1堆積土
1 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (炭化物粒少量含む)
53号住居跡P4堆積土
1 にぶい黄褐色土 10YR4/3 と黄褐色土 10YR5/6の混土
53号住居跡炉堆積土
1 褐色土 10YR4/4 (黄褐色土粒・炭化物粒微量含む)
2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (黄褐色土粒微量, 炭化物粒少量含む)
3 黒褐色土 10YR2/3 (黄褐色土粒・炭化物粒少量含む)
4 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒多量含む)
5 暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/4の混土
6 褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
P38 E3・S2.5
P38 E4・S2.5
P39 E3
P39 E4
P 3
P 4
ホリスギ
A 50.5m
0 1m (1/30)

図57　53号住居跡

態で土器が裏込め状に埋められているが，炉体土器の固定材と考えられる。

（規模）全長205㎝，最大幅105㎝を測る。炉の主軸線はＮ17 °Ｅである。

（土器埋設部）径29㎝の炉体土器端部に接して，偏平な礫を一重巡らして縁石としている。南北方向の長さは34㎝で，炉体土器は体部下半を割った状態で，床面から深さ30㎝まで埋まっている。土器埋設部の掘形は逆台形状を呈する。

（石組部）側壁に偏平な石を設置して，上端に10～40㎝の石を散発的に並べている。南北方向の長さは66㎝，最大幅82㎝を測る。被熱による赤変部分は認められないが，構築石中の花崗岩は風化が著しい。掘形断面形は下向きの凸形状で２段構造になっている。

（前庭部）全周緩やかに立ち上がる鍋底状の断面形を呈する。南北方向の長さは105㎝，最大幅は104㎝を測る。西壁中央に一つだけ石が設置されている。

地床炉　床面中央よりやや北東側の複式炉主軸線延長線上に位置する。平面形は不整な菱形で，全長47㎝，最大幅24㎝を測る。焼土の厚さは２㎝である。

主柱穴　主柱穴はＰ１～３の３個で，Ｐ２は複式炉主軸線延長線上からやや西へずれた場所に，Ｐ１・Ｐ３は複式炉を挟む東西に位置する。各柱間はＰ１－Ｐ２間2.4m，Ｐ２－Ｐ３間2.6m，Ｐ１－Ｐ３間2.2mを測り，配置は三角形状を呈する。各柱穴規模はＰ１が南北53㎝，東西37㎝，深さ51㎝，Ｐ２が南北58㎝，東西54㎝，深さ64㎝，Ｐ３が南北56㎝，東西46㎝，深さ45㎝を測る。いずれの柱穴も柱が抜き取られ，抜き取りで形成された段により平面形・断面形がゆがんでいる。

遺物出土状況　床面から縄文土器片９点，石器１点が出土したが，縄文土器は小片のため出土状況及び遺物を図示しなかった。59図４は石皿で，Ｐ38グリットＰ１南側から出土した。Ｐ38グリットＰ１内からも同一個体と推察される破片が出土している。このことから，住居廃絶時に破砕されて別々に投棄された後，Ｐ38グリットＰ１が掘り込まれて石皿が転落したと考えられる。この他，堆積土中から縄文土器片82点，石器10点が出土した。

遺物　58図に縄文土器を示した。１は炉体土器で，胴部中位に沈線を一巡させて上部を文様帯にしている。上部は横位に展開する沈線で文様が描かれるが，磨消縄文などは見られない。下部は地文のみで，ＲＬ原体を横や斜めに転がしている。２は内湾する口縁直下に稜線を一巡させ，その上部を無文に，下部に逆Ｕ字形のモチーフを描く。３は口縁直下に沈線を一巡する口縁部資料で，波状口縁になる。６・８・９は同一個体で，沈線で文様を描いてから内部に縄文を充填している。５は沈線で囲んだ外部を磨り消している。４は稜線で，７は隆帯でモチーフを描く土器である。

石器は58図・59図に示した。58図10は鉄石英製の剝片である。背面・腹面の両面とも上側縁に細かな剝離が見られる。59図１は粘板岩製の横刃形石器である。背面上側縁に急斜な整形加工を施し，背面下側縁の鋭い縁辺には，使用光沢を帯びた磨耗痕が観察される。59図２は砂岩製の小形磨石類である。器面には磨耗面の他に複数の敲打痕が観察された。同図３はアプライト製の磨石類である。同図４は花崗岩製の石皿類で，欠損して半分ほどの大きさになっている。上面側縁には縁状の段が形成され，使用面は平滑で部分的に光沢が見られる。

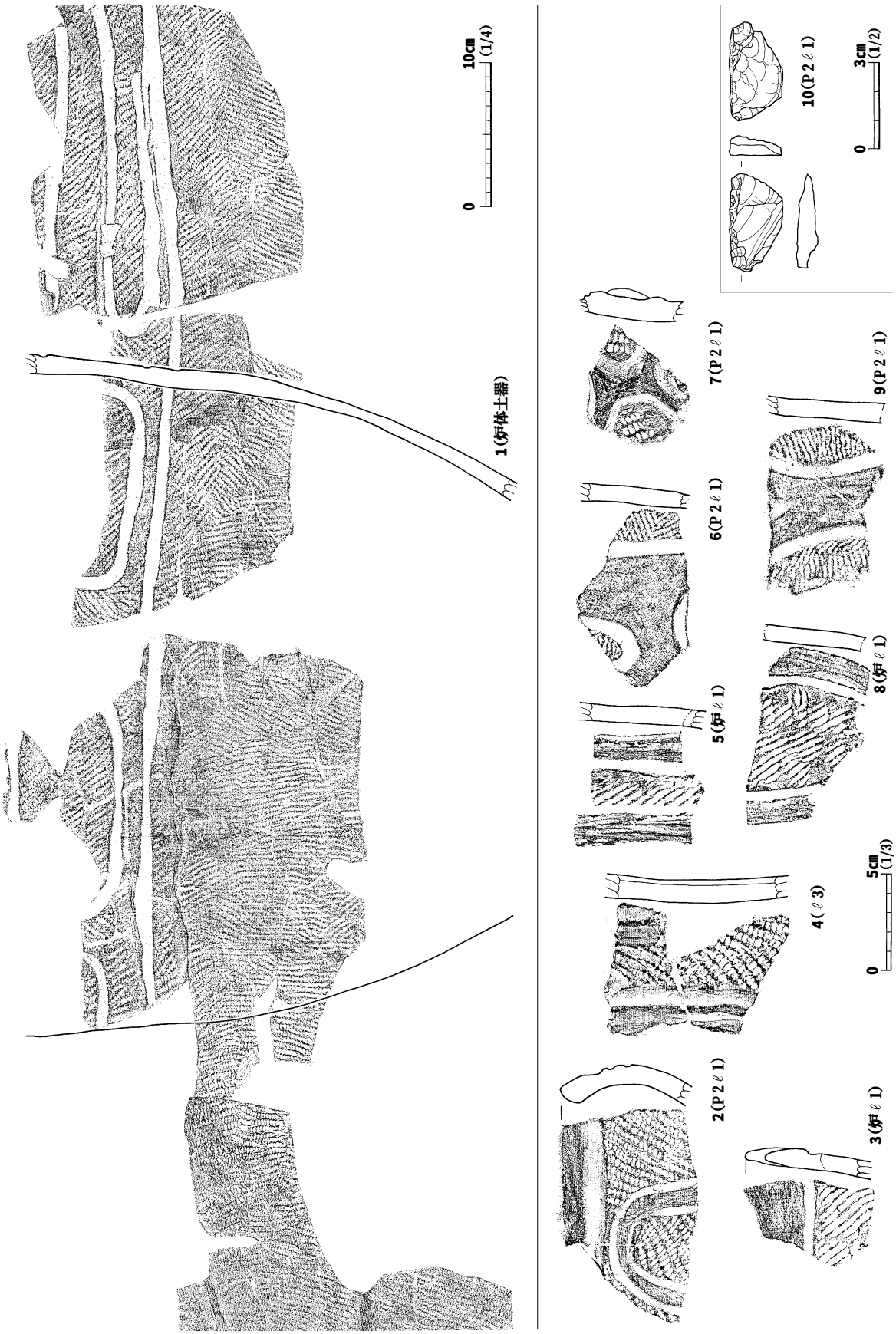


図58　53号住居跡出土遺物(1)

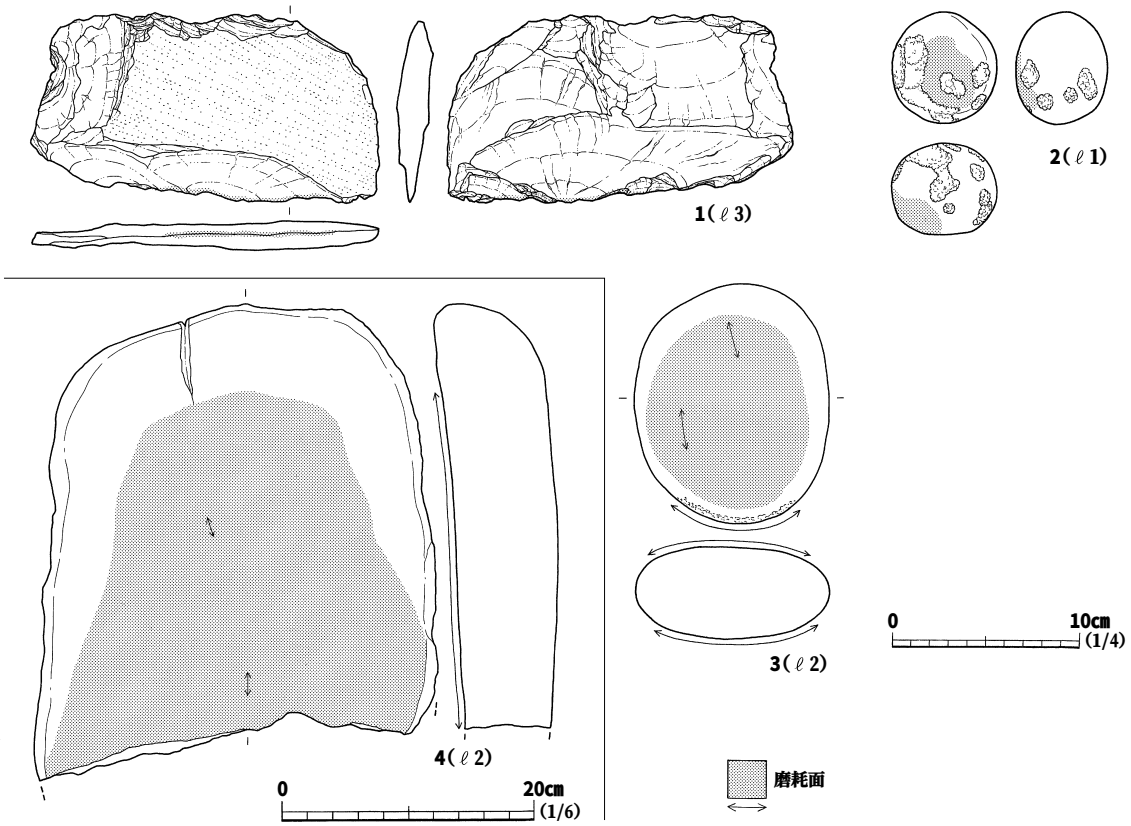


図59　53号住居跡出土遺物(2)

まとめ　本住居跡は，定型化した複式炉と，複式炉の配置に規制される柱配置を有する。複式炉の延長線上には地床炉も見られる。柱は住居廃絶時に抜き取られ，その後竪穴全体が埋められたようである。所属時期は炉体土器や床面出土土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期と考えられる。　（新　海）

66 号 住 居 跡　ＳＩ66 （図60～62，写真23・24・351）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｑ・Ｒ41グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色土の方形の輪郭を検出した。

重複　本遺構は，143・142・145号住居跡，68・71号建物跡，1036・1177・1179号土坑と重複し，143・142・145号住居跡より新しく，その他の遺構よりは古い。遺構の重複関係は古い方から142・145号住居跡→143号住居跡→66号住居跡→1177・1179号土坑，68・71号建物跡の順である。この他，ピット２基と重複しているが，そのうち１基については1179号土坑よりも新しい。

堆積土　住居内堆積土は３層に分けられる。いずれも人為堆積土と判断している。ℓ１は遺構内全体に堆積する暗褐色土で，住居廃絶時に埋められた層，ℓ２は後述するが，住居廃絶時に床面を掘削した範囲に埋められた層と考えている。ℓ３は貼床を構成する人為堆積土である。ℓ３に含まれる黄褐色土塊はＬⅣに基因するもので，貼床には本住居跡を構築する際に掘り込んだ土を用いていると推察される。

平面形・規模　ややゆがんだ長方形である。その規模は，現状の壁上端で東西長3.6m，南北長3.2mを測る。カマドが設置されている本住居跡の長軸方向は，真北を示している。

床面　凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。全面が貼床で形成され，住居跡中央部は非常に堅く踏み締まっている。

周壁　床面から50～82°のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は５～15㎝を測る。

掘形　煙道を除く住居跡全体に床面から２～４㎝の深さで掘り込まれているが，カマド周辺ではやや深く，10～15㎝を測る。

カマド　カマドは東壁のほぼ中央に設けられている。燃焼部が住居跡東壁よりも外側に張り出すという特徴をもつが，袖は遺存しない。

(堆積土)いずれも暗褐色土を呈するが，含有物の多寡や堆積要因によって６層に細分した。いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１は煙道を埋めた堆積土であり，ℓ２は煙道構築時の残土，ℓ３～６はカマド天井や袖部の破壊土と判断した。

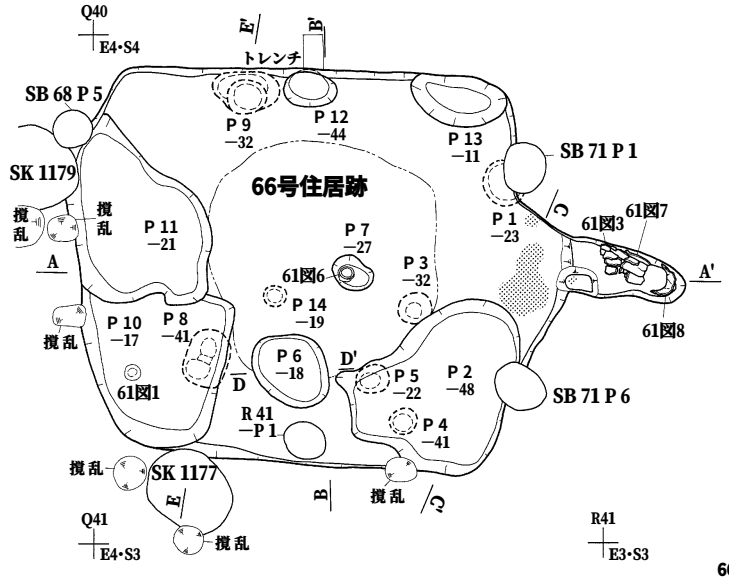
(規模)全長は推定約150㎝，カマド中軸線はほぼ東西を示している。

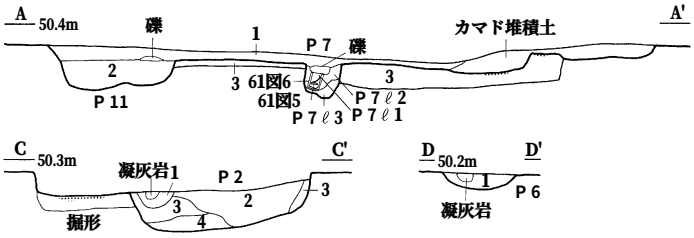
(煙道部)煙道部は１m程住居跡外に延びている。幅は30～44㎝を測る。底面はほぼ平坦で，先端の煙出し部も特にくぼんではいないが，ここから土師器甕が３個体出土している。61図３・７は横倒しの状況で重なり合って，61図８は口縁部を下にして検出された。前者についてはほぼ現位置を保っていると考えているが，後者は若干動いていると推測される。いずれも底部が欠損していることから，煙道部及び煙出し部の底面に使用されたものと考えている。

(燃焼部)住居跡東壁よりも若干外側に張り出して確認されており，周囲よりわずかにくぼんでいる。底面は加熱により２～５㎝の厚さで赤く焼けているが，カマドを構築する袖は遺存していない。そのため，燃焼部の正確な規模は不明であるが，焼土面の範囲から東西約50㎝，南北約80㎝と推測される。なお，カマド内の堆積状況を考慮に入れると，燃焼部は住居廃棄時に壊されたと判断される。すなわち，前述したようにℓ３～６は燃焼部を壊して埋めた層と考えられ，ℓ３に含まれる凝灰岩塊も袖構築材であった可能性もある。

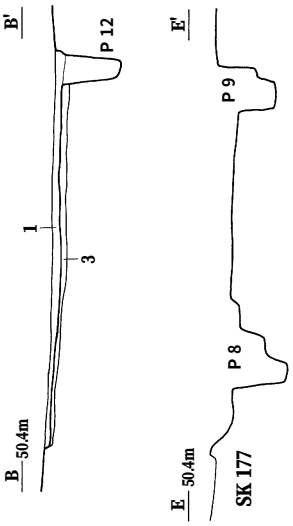
主柱穴　本住居跡の主柱穴と推測されるものはなかった。なお，Ｐ８・９については，底面標高差が10㎝以内でほぼそろっていることから，重複する143号住居跡の主柱穴であった可能性もあるが，これに対応する東側の位置からは柱穴は確認されなかった。

ピット　ピットは合計で13個検出されている。いずれも埋めているため，調査時は全て床下もしくは貼床の一部と考えていたが，報告書作成時に再検討した結果，住居構築時に掘削したものと，住居廃棄時に伴うものとが識別できた。しかし，ピット番号は資料整理の都合上，調査時の順番を踏襲して報告することにする。13個のピットの内，Ｐ２・６・７・10～13の７個は，住居廃棄時に掘り込まれ，そして埋められたものと考えている。Ｐ２・７・10の底面からはそれぞれ遺物が出土しており，土を埋める前に何らかの廃棄行為を行なっていることがわかる。ピット内堆積土で主体をなすのは住居内堆積土のℓ２とした暗褐色土であるが，Ｐ２・７では色調・含有物などによって細





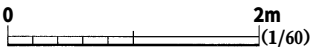
66号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊少量含む）
3　明褐色土 7.5YR5/6と暗褐色土　10YR3/3の混土

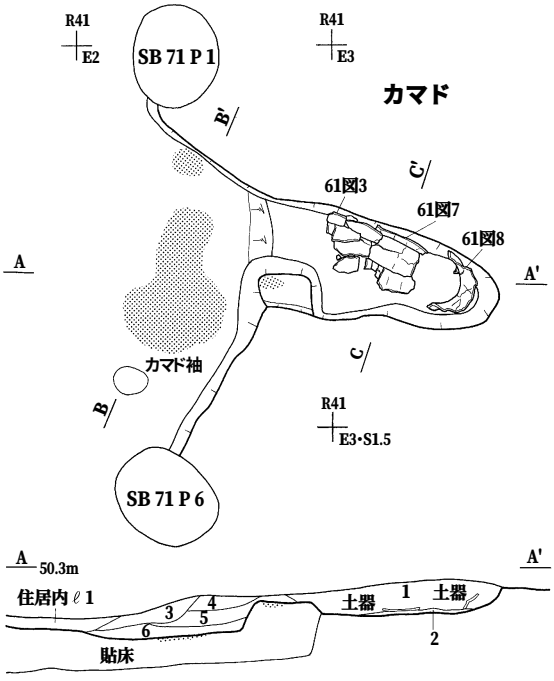


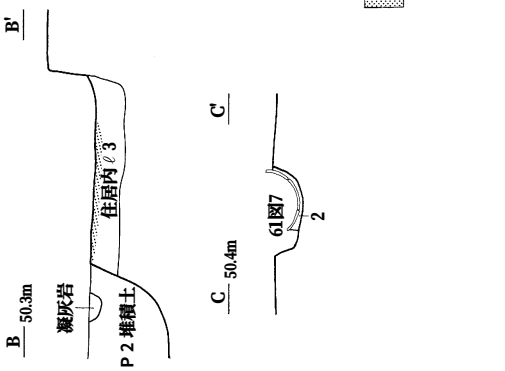
66号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・凝灰岩塊少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

66号住居跡P6堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊微量含む）

66号住居跡P7堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊少量含む）
3　黄褐色土 10YR5/6（暗褐色土塊少量含む）







66号住居跡カマド堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量，焼土塊微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（凝灰岩塊少量，炭化物粒微量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3（焼土塊多量，炭化物粒微量含む）
5　暗褐色土 10YR3/3（焼土塊・炭化物粒少量含む）
6　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒少量含む）

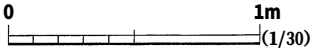


図60　66号住居跡

分している。Ｐ２ℓ１からは径10㎝前後のシルト岩塊が出土している。これと同じ岩塊がＰ６からも出土しているが，こちらの岩塊には被熱の痕跡がある。Ｐ２・６出土の岩塊は，いずれも本住居跡カマド袖の構築材だったものと推察している。廃棄行為の際に，カマドの袖を壊して埋めた可能性も考えられる。Ｐ７からは61図６の筒形土器が出土している。筒形土器は黄褐色土主体の土を埋めた後に据えられており，周囲は暗褐色土主体の土が充填されている。また，上端には石が置かれている。筒形土器の中からは土師器杯の破片（61図５）が出土しているが，土が土器内にわずかしか入っていないため，この石は蓋のような役割を果たしていたと推察される。この筒形土器は他の遺物と同様に廃棄行為に伴うものと考えているが，その具体的な要因については不明と言わざるを得ない。

各ピットの形状は，Ｐ２・７・10・11が不整形，Ｐ６・12・13が楕円形を呈する。規模は，Ｐ２が南北長138㎝，東西長146㎝，深さ48㎝，Ｐ６が南北長58㎝，東西長60㎝，深さ18㎝，Ｐ７が南北長28㎝，東西長31㎝，深さ27㎝，Ｐ10が南北長118㎝，東西長120㎝，深さ17㎝，Ｐ11が南北長149㎝，東西長108㎝，深さ21㎝，Ｐ12が南北長26㎝，東西長43㎝，深さ44㎝，Ｐ13が南北長74㎝，東西長41㎝，深さ11㎝を計測した。

この他，Ｐ１・３～５・８・９の６個は，いずれも住居構築時のピットであり，暗褐色土とＬⅣに基因する黄褐色土が混ざった土で埋められているが，Ｐ２・６・７・10～13に比して黄褐色土の割合が多い傾向にある。

遺物出土状況　61図１・４に示した２点の土師器杯は，それぞれ底部をＰ２・10の底面に密着させて，口縁部を上にした状態で出土した。カマドの煙道部底面からは，61図３・７・８の土師器甕が敷き詰められた状態で出土している。この他，堆積土中から縄文土器片399点，石器類28点，土師器片120点，須恵器片４点，瓦１点が出土した。

遺物　61図に土師器を示した。１・２・４・５はロクロ成形の杯で，１・２・５の内面はミガキの後に黒色処理を施している。１・２は体部下端を手持ちヘラケズリで調整を加えているが，２では，この調整が底部にまで及び，糸切り痕は認められない。４は内外面とも磨滅が著しいが，底部外面では回転糸切り痕がわずかに確認された。なお，２の口縁部の一部と，５の口縁部から体部には，油煙とみられる付着物が観察できる。特に５では口縁端部が割れており，その箇所にも油煙の付着がわずかにみられる。燈芯を置いた部分である可能性がある。

３・７・８はロクロ成形の甕である。３は７・８に比して精巧な作りで，端部は鋭角的になっている。また，体部外面にはロクロ成形後に塗布された粘土が観察される。内面には，ロクロ成形前のナデがわずかに確認される。７・８は，口縁部に粘土紐を積み上げた痕跡が残り，体部内面にはロクロ成形後の縦方向のナデが認められる。体部外面には，７ではロクロ成形後のヘラケズリ，８ではロクロ成形前のヘラナデの痕跡も認められる。また，７の内面にはコゲのような付着物と，二次的な被熱で赤くなっている状況が観察される。

６は筒形土器である。内外面とも粘土紐を積み上げた痕跡が残るが，ユビオサエだけの外面に比

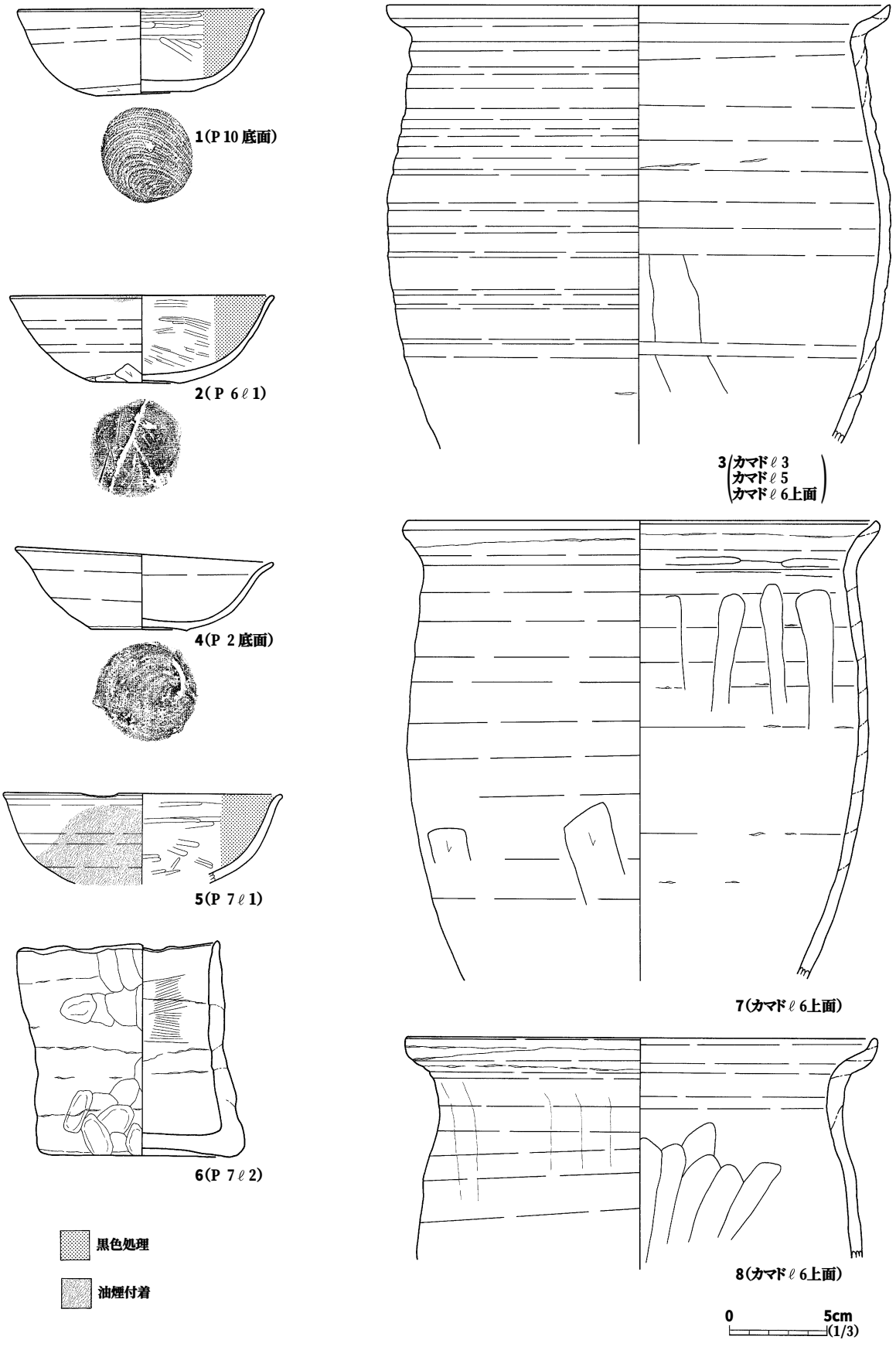


図61　66号住居跡出土遺物(1)

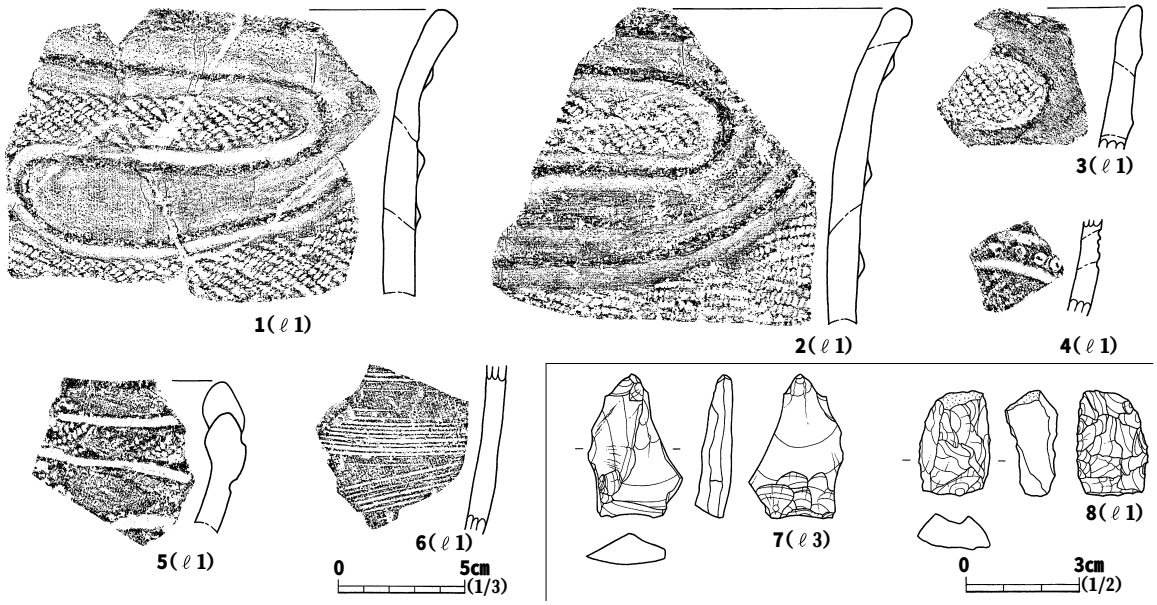


図62　66号住居跡出土遺物(2)

して，内面はヘラナデを施しており，丁寧である。また，底部内面には工具のヘラの先端が当たったものとみられる痕跡が確認された。この幅は２㎝程である。

62図１～６は縄文土器である。このうち，１～３・５はいずれも深鉢形土器の口縁部片で，１～３は平口縁，５は波状口縁を呈する。４・６は胴部片である。１～３は隆線によって蛇行する曲線文が描かれている。接合はしなかったが，１・２は文様構成・胎土・厚さなどが近似することから，同一個体と考えている。４・５は凹線による区画文を文様構成とし，４は凹線区画内に竹管状の工具による刺突文が施されている。６は櫛歯文を地文としている。

62図７・８はチャート製の二次加工のある剝片である。縦長剝片の腹面末端部に面的な調整剝離を加えている。８は鉄石英製の楔形の石核である。裏面両側縁が階段状に潰れていることから，両極打法によって生じた石核もしくは楔形石器である可能性が高い。

まとめ　本住居跡は一辺が３～3.5m程の小規模な住居跡である。カマドの袖は遺存しないが，煙道部及び煙出し部に甕が据えられていた点が特徴的である。また，具体的な性格は明らかにし得ないが，住居機能停止後に何らかの廃棄行為を行なっていることが明らかとなった。本住居跡の時期については，住居機能時が61図３・７・８の甕の特徴から９世紀前葉を中心とした時期，廃棄時が61図６の筒形土器の存在から９世紀中葉頃と考えている。　（丹　治）

72 号 住 居 跡　ＳＩ72 （図63，写真27・28）

位置・検出面　北区南部の平坦面，Ｖ42・43グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色土の方形の輪郭を検出した。しかし，南壁部分は道路による撹乱のため大きく失われている。

重複　本遺構と重複する遺構はピット２個だけで，平面形の切り合い関係で本遺構の方が古いこと

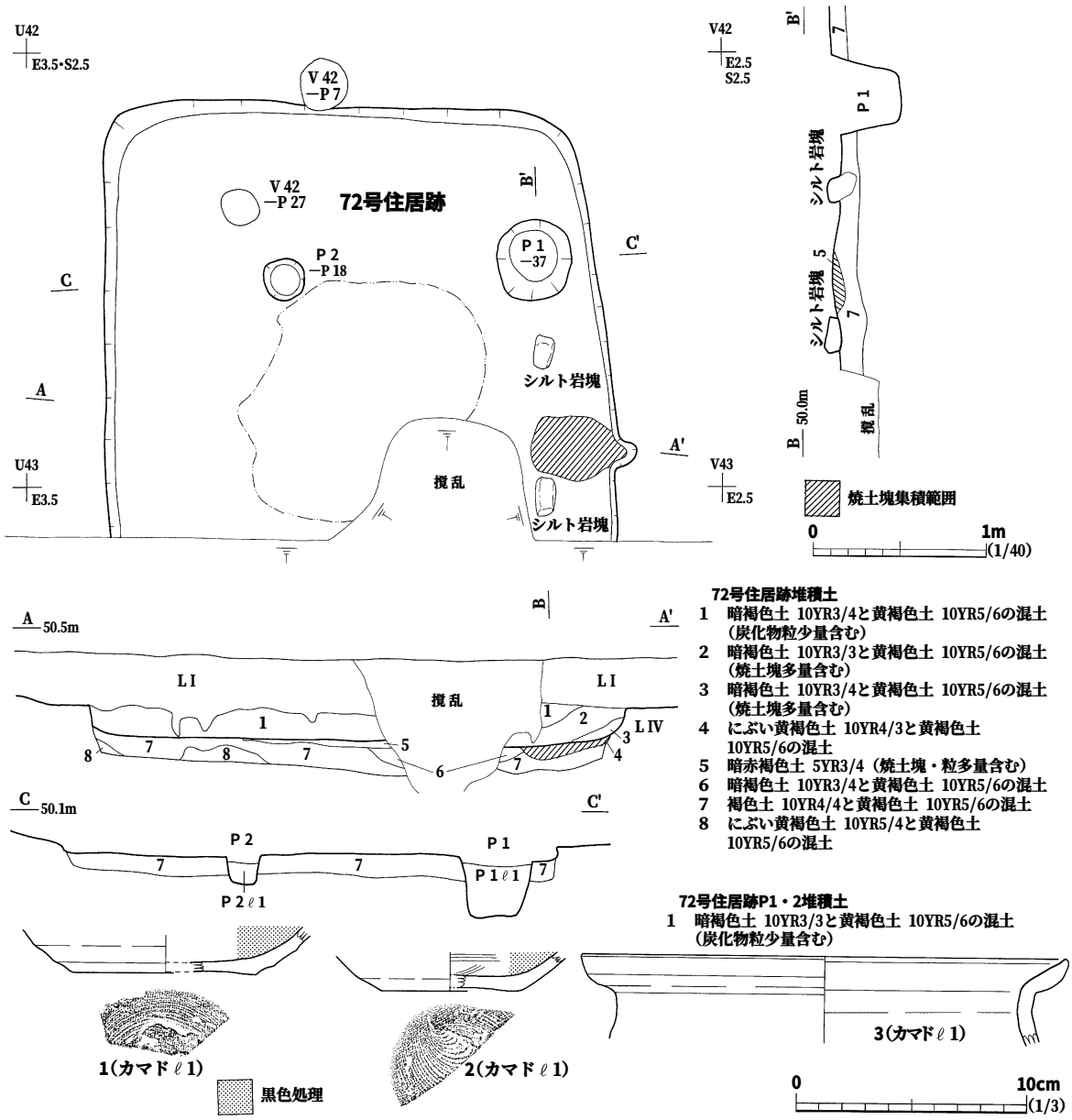


図63　72号住居跡と出土遺物

を確認した。

堆積土　８層に分層した。いずれも黄褐色土の小塊を撹はんしたように含んでいることから人為堆積と判断しているが，ℓ１～４は住居廃棄時，ℓ５～８は住居構築時のもので，堆積要因は異なる。ℓ１～３は近似する層であるが，含有物の多寡などによって分層した。ℓ４は焼土塊や焼土粒を撹はんしたように含んでいることから，カマドの燃焼部を掘り込んだ土をその場に埋めたものと考えている。ℓ５～８は貼床を構成する層である。LIVに相当する黄褐色土を主体としており，本住居を構築する際に掘り込んだ土を用いていると推察される。特に住居跡の中央部にのみ見られるℓ５は黄褐色土の割合が多く，この面が堅く踏み締まっている。

平面形・規模　遺存する形状からは，ややゆがんだ方形を呈すると推測される。その規模は，現状

の壁上端で東西長2.7～3.0m，南北長2.5mを測る。

床面　凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。全面に貼床が施されている。また，住居跡中央部は非常に硬く踏み締まっていた。

周壁　床面から70～80°のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は20～25cmを測る。

掘形　住居跡の床面から10～18cmの深さで掘り込まれている。

カマド　カマドは東壁に設けられている。遺存状態は悪く，燃焼部・袖ともに残っていないが，煙道部はわずかながら東側に延びる状況が確認された。

(規模)全長は推定約60cm，カマド中軸線はほぼ東西を示している。

(煙道部)住居跡東壁から12cm程住居跡外に延びている。幅は14cmを測る。

(燃焼部)カマドの燃焼部は上述の通り壊されており，焼土塊の集積範囲として確認した。その範囲は東西長55cm，南北長37cmを測る。機能時の燃焼部の範囲は不明であるが，焼土面が認められないことから，少なくとも壊された範囲よりは狭かったと考えられる。この破壊された燃焼部を挟んでカマド袖材と推測される凝灰岩の塊が２個確認されている。南側の塊は床面から検出されているため，機能時のものではなく，廃棄された状況のものと判断した。一方，北側の塊は床面から５cm程下にえぐり込んでおり，使用時に据えられていたことが明らかとなった。また，塊の南側は熱を受けている状況が観察された。このような状況からは壊されずに残ったカマドの袖とも推察されるが，燃焼部から北に30cm程離れているため，明確にカマド機能時の袖であるか疑問が残る。なお，北側のシルト岩塊の周囲には，暗褐色土と混ざったシルト岩塊が確認されており，このことからも，カマドは住居廃絶時に壊されていると考えられる。

主柱穴　Ｐ１・２の２個が検出された。本住居跡の主柱穴は本来４本柱と推測されるが，これに対応する南側の位置では道路の撹乱を受けているため，ピットの有無は確認できなかった。Ｐ１－Ｐ２間は1.45mである。現状の平面形は不整な方形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が南北長47cm，東西長46cm，深さ37cm，Ｐ２が南北長25cm，東西長26cm，深さ18cmを計測する。なお，いずれからも柱痕は確認されず，内部の堆積土には基本土層のⅬⅣに近い黄褐色土の小塊が数多く含まれていることから，住居廃絶時に柱を抜き，その後住居跡とともに埋められたものと考えている。

遺物出土状況　床面から出土した遺物はなく，堆積土中から縄文土器片15点，土師器片83点，陶磁器片１点が出土した。

遺物　63図１～３に土師器を示した。いずれもロクロ成形である。１・２は杯の底部片である。内面はミガキの後に黒色処理を施しているが，二次的な被熱によって飛んでしまっている。なお，底部外面には回転糸切り痕が残る。３はロクロ成形の土師器甕で，口縁端部がやや丸みを帯びている。

まとめ　本住居跡は道路によって破壊されているため，全容は明らかにし得なかったが，カマドが住居廃絶時に壊されているという所見が得られた。本住居跡の時期については，出土土器の特徴から９世紀中葉頃と考えている。　（丹　治）

76 号 住 居 跡　ＳＩ76 （図64～66，写真29・30・351）

位置・地形　調査区南東部のＸ・Ｙ36・37グリッドに位置する。ＬIV上面で暗褐色土の方形範囲として確認した。

重複　他遺構との重複はないが，西側に990号土坑が，北西側に1129号土坑が近接する。

堆積土　４層に分けられ，ℓ１～３は人為堆積土、ℓ４は貼床土と考えている。

平面形・規模　平面形はほぼ隅丸方形で，規模は南北長3.7m，東西長3.5mである。北壁を主軸とした場合，主軸方位はN60 °Eで，北東方向を指している。

床面　ほぼ全面に貼床が認められた。

周壁　立ち上がりは急峻で，残存高19～35㎝を測る。

カマド　東壁中央部やや北寄りの位置に設けられていた。燃焼部の両袖の基部と酸化面，煙道の一部が検出された。堆積土は13層に分層したが，ℓ１～５は住居内堆積土に類似する。ℓ６～９は天井部崩落土，ℓ10～12は燃焼部袖構築土，ℓ13は貼床土と考えられる。

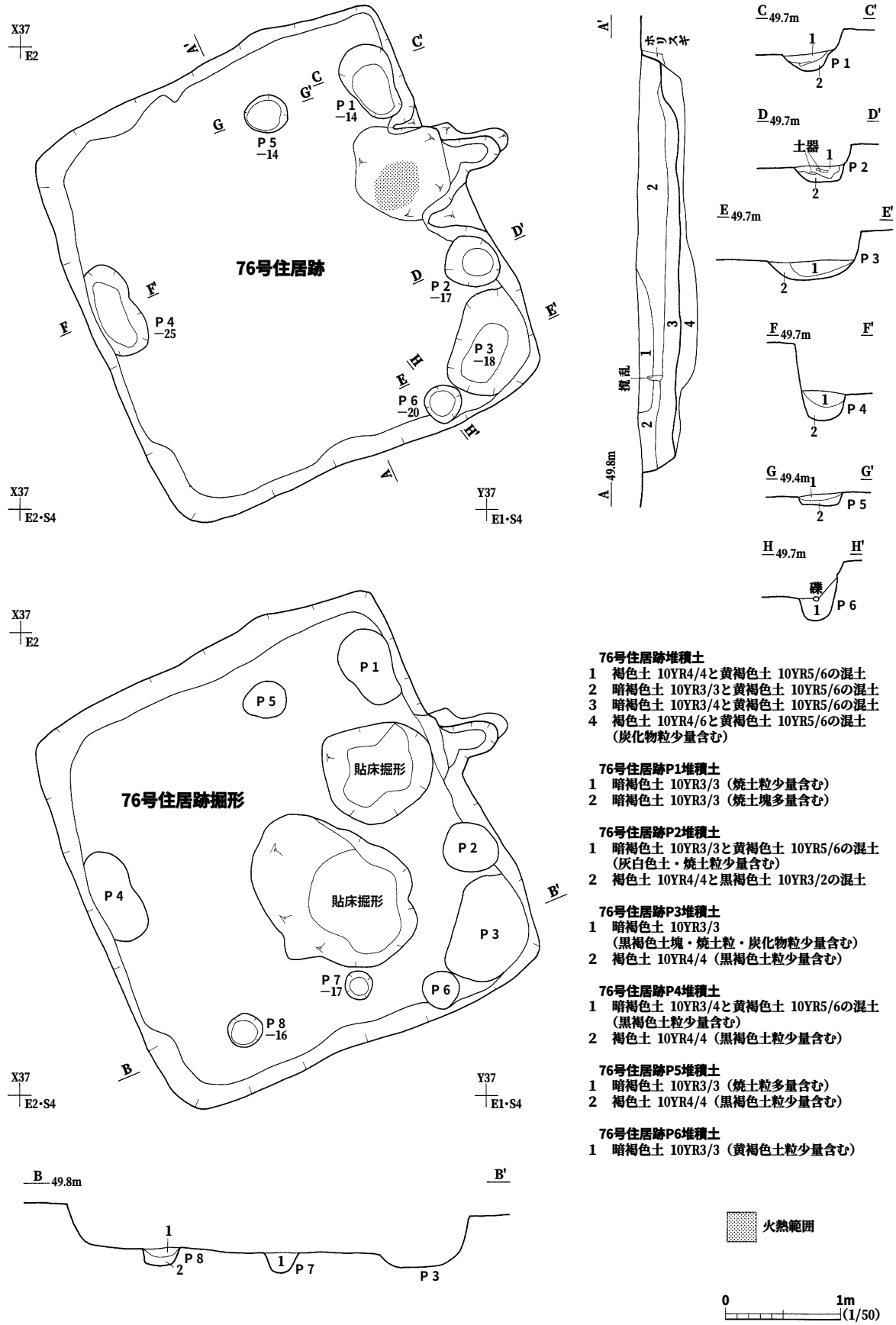
主柱穴　Ｐ５・７・８の３個が確認できた。北西側の主柱穴は確認できなかった。

ピット　Ｐ３は貯蔵穴，Ｐ１・２・４・６は壁柱穴と考えられる。

遺物出土状況　本遺構からは縄文土器片55点，土師器113点，須恵器片１点，石器類７点が出土した。土師器類については，床面やカマド内から，縄文土器はℓ２から出土したものが多数である。

遺物　出土遺物は，図65・66に掲載した。65図１～６，66図１～９はいずれも土師器杯である。65図１はロクロ成形の土師器杯で，口縁部がやや外反する。内面はヘラミガキの後，黒色処理が施される。胴部下位には手持ちヘラケズリが行われ，底部は切り離し後に再調整が施されている。同図２は底部を欠くが，口縁部は外反せず直立気味である。胎土中に白色針状物質が多量に含まれる。同図３は胴部中位からやや直立気味の器形で，外面にロクロ成形が，内面は横位主体の細かいヘラミガキの後，黒色処理が施される。同図４はカマド内出土の資料で，外面はロクロ整形と手持ちヘラケズリが，底部に回転糸切り痕がみられる。他の杯が体部よりも底部が薄いのに対し，本資料は逆に底部が厚い。同図５は内面にヘラミガキの後，黒色処理が施される。体部下位には回転ヘラケズリが施される。胎土中に白色針状物質を含む。同図６は床面出土の杯で，外面ロクロ成形が，内面はヘラミガキの後，黒色処理が施される。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが行われる。胎土中に白色針状物質が多く含まれる。

66図１はロクロ成形，内面ヘラミガキの後，黒色処理が施される。体部はやや丸味を帯び，口縁部で外反する。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整が行われる。同図２・３はロクロ成形の後，体部下端に手持ちヘラケズリ再調整が施される。ともに白色針状物質を多く含む。同図４は底部と体部下端に回転ヘラケズリ再調整が施される。胎土中に砂粒を多く含む。同図５は底部を欠くが，ロクロ成形，内面は細かいヘラミガキの後，黒色処理が行われる。同図６はやや器高が高く，底部から体部下端に回転ヘラケズリ再調整が施される。同図７は体部下端に手持ちヘラケズ



76号住居跡堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）

76号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（焼土塊多量含む）

76号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（灰白色土・焼土粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黒褐色土 10YR3/2の混土

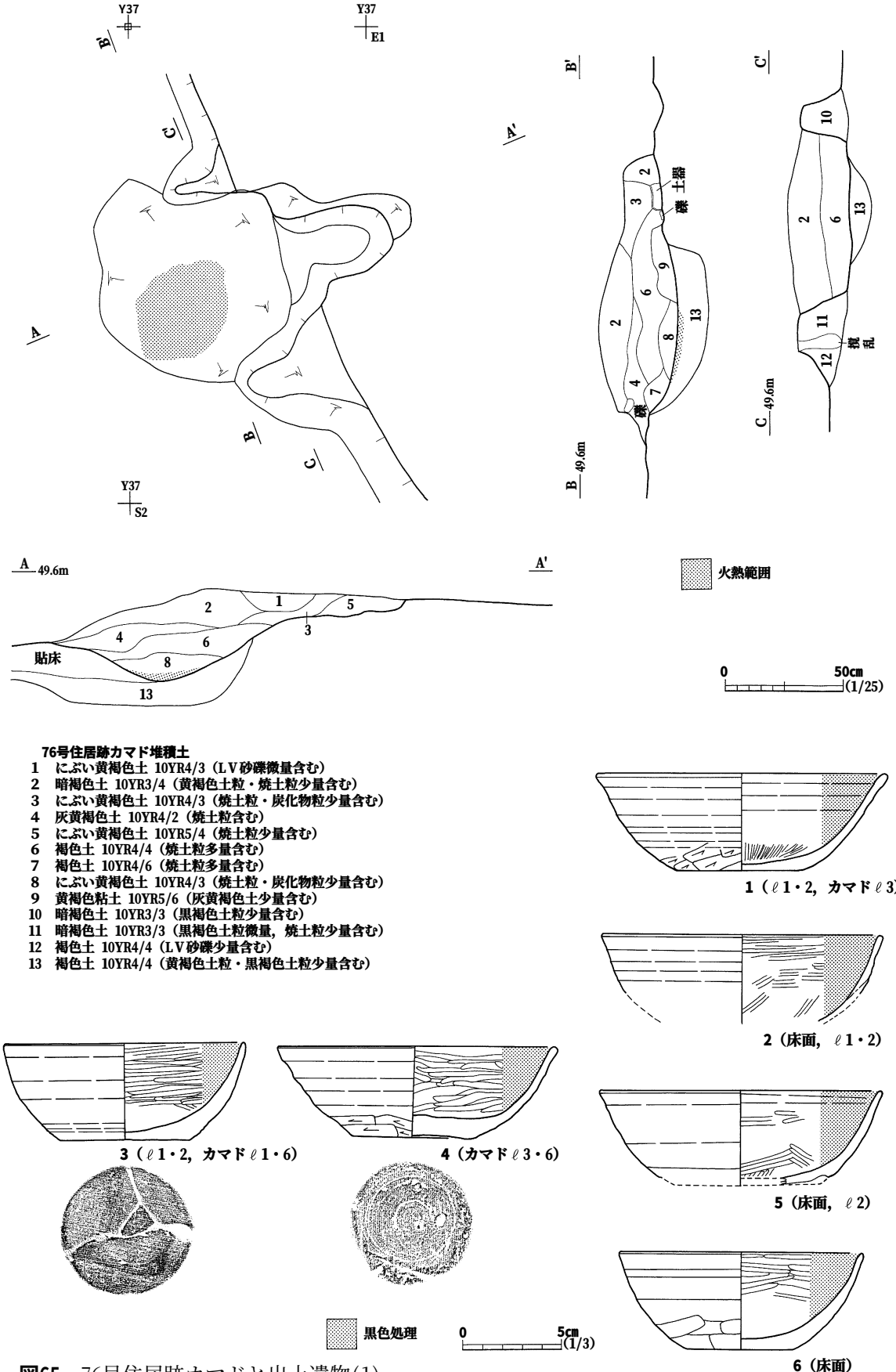
76号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3
（黒褐色土塊・焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黒褐色土粒少量含む）

76号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（黒褐色土粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黒褐色土粒少量含む）

76号住居跡P5堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒多量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黒褐色土粒少量含む）

76号住居跡P6堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）

図64　76号住居跡



76号住居跡カマド堆積土

1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（ＬＶ砂礫微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・焼土粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
4　灰黄褐色土 10YR4/2（焼土粒含む）
5　にぶい黄褐色土 10YR5/4（焼土粒少量含む）
6　褐色土 10YR4/4（焼土粒多量含む）
7　褐色土 10YR4/6（焼土粒多量含む）
8　にぶい黄褐色土 10YR4/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
9　黄褐色粘土 10YR5/6（灰黄褐色土少量含む）
10　暗褐色土 10YR3/3（黒褐色土粒少量含む）
11　暗褐色土 10YR3/3（黒褐色土粒微量，焼土粒少量含む）
12　褐色土 10YR4/4（ＬＶ砂礫少量含む）
13　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・黒褐色土粒少量含む）

1（ℓ1・2，カマドℓ3）

2（床面，ℓ1・2）

3（ℓ1・2，カマドℓ1・6）

4（カマドℓ3・6）

5（床面，ℓ2）

6（床面）

図65　76号住居跡カマドと出土遺物(1)

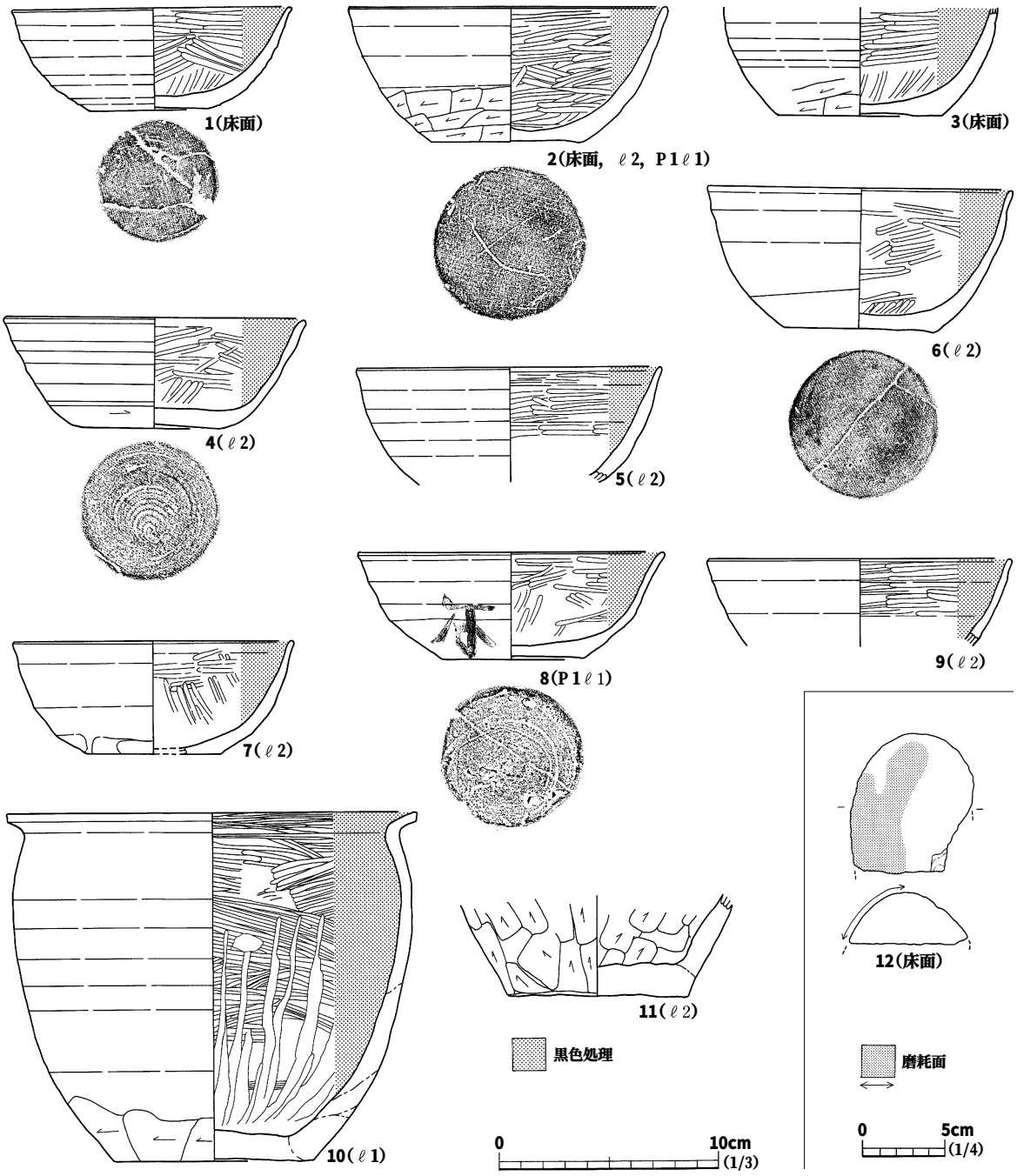


図66　76号住居跡出土遺物(2)

リが施される。同図８はロクロ成形，体部下端と底部は回転ヘラケズリ再調整が行われる。体部中位に正位で「尓」字の墨書がある。同図９はロクロ成形，内面に横位のヘラミガキの後，黒色処理が施される。本遺構出土の他の杯よりも薄い作りである。

同図10はロクロ成形の土師器甕である。胴部上位に最大径を有し，口縁部は短く強く屈曲するように外反する。外面はロクロ成形と体部下端に手持ちヘラケズリが行われる。内面はまず横位のヘラミガキのあと，底部中央から放射状に再度，胴部上位へ向かってヘラミガキが行われている。また，内面には積み上げ痕が平行にみられる。同図11は土師器甕の底部片である。ロクロは未使用で，

外面は縦位のヘラケズリ，内面は底面をヘラ状工具により左回りの渦巻き状にナデている。内面はハケメ調整が施される。外面には二次的に火を受けて赤変した粘土が付着する。同図12は斑状の流紋岩の磨石である。大部分折損しており全容は不明である。部分的に磨耗痕が認められる。

まとめ　本住居跡は東壁にカマドを有する竪穴住居跡で，今回の調査区で検出された同様の竪穴住居跡の中では中型の部類に属する。カマドは住居廃絶に伴って破壊された可能性が高い。所属時期は出土土器の特徴から９世紀頃と考えている。　（高　田）

79 号 住 居 跡　ＳＩ79 （図67・68，写真31・32）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｓ39・40グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面であるが，調査当初，炉跡の部分については土坑と考えて調査したため，必要な情報を得ることができなかった部分が多々ある。土器片や礫が平面的にまとまって出土する状況から，ようやく炉跡であると認識できた。その後で，本住居跡を構成する周溝やピットの確認作業を行なった。

重複　1176・1302号土坑や75号掘立柱建物跡，多数の柱穴と重複するが，そのいずれよりも本遺構の方が古い。また，東側に隣接する82号住居跡とは位置関係から重複すると考えられるが，共に遺存が悪いため，明瞭な切り合い関係は確認されなかった。

堆積土　本住居跡は周壁・床面とも後世の削平により遺存していないため，遺構内に堆積した土は炉跡，ピット内にしか遺存していない。

平面形・規模　遺構の正確な形状・規模については不明であるが，遺存する周溝からは，直径約4.5mを測る不整な円形を呈すると推察される。

周溝　周溝は本住居跡の西側にのみ遺存し，全体の半分ほど巡っているのを確認した。規模は，幅10～20㎝，床面からの深さは５～10㎝を測る。堆積土は褐色土を呈する。

複式炉　複式炉は住居跡南側のＰ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。しかし，後世の削平や後述する炉の破壊行為のため，遺存状況は悪く，石組部・前庭部などの正確な規模・形状については不明である。

炉跡は土器埋設部の状況や断面の観察から，新旧二時期(ａ炉・ｂ炉)あると判断した。すなわち，68図２が新しいａ炉の炉体土器で，68図３が古いｂ炉の炉体土器である。また，ａ炉の機能停止後に石組部を壊していると考えている。

ａ炉　図68の上段の平面図は左側がａ炉の確認状況図であり，土器埋設部南側のピット状のくぼみは破壊行為に伴うものである。また，同右側はａ炉掘形の図である。なお，前庭部の東側は誤って掘りすぎてしまった。

(規模)全長は推定約342㎝を測り，炉中軸線はほぼ南北を示している。

(堆積土)炉跡内に堆積した土は５層に大別したが，この内ℓ１～３はａ炉に伴う堆積土，ℓ４・５はｂ炉に伴うものであり，ℓ４以外は全て人為堆積と判断している。ℓ１は石組部を壊した後に埋めた土で，ＬⅣに起因する黄褐色土粒を多量に含んでいる。また，ℓ１の西側部分では小型の礫が

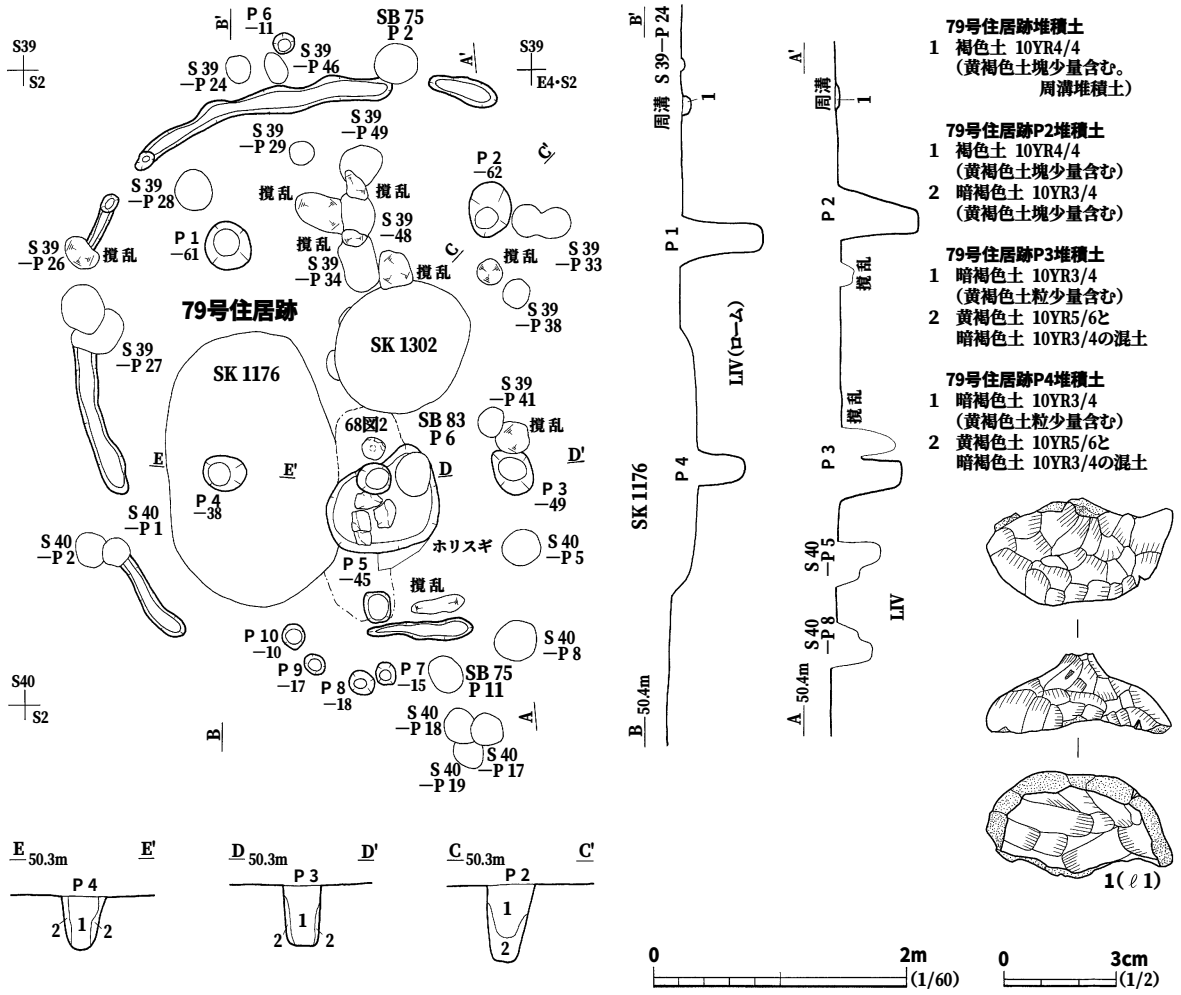


図67　79号住居跡と出土遺物(1)

が多く含まれていた。これらは本来石組部の底面等を構成したものであったと考えている。

ℓ２はａ炉土器埋設部と石組部の掘形に確認できた堆積土である。冒頭に触れた理由から，石組部のℓ２が平面的にどの範囲まで残っていたかは確認できなかったが，少なくとも図に示した石組部の礫の周囲には残存していた。また，土器埋設部掘形のℓ２には土器片が多く含まれている。これはｂ炉炉体土器(68図３)と接合するものがあることから，壊したものをそのまま埋めて掘形内に充填したものと考えている。ℓ３はａ炉の炉体土器(68図２)を据える際に，ｂ炉の炉体土器(68図３)内部に詰めた土と判断した。

(土器埋設部)ａ炉の炉体土器の周囲には縁石は存在せず，土を埋めて構築されている。掘形の規模は東西・南北方向とも長さは約110㎝である。

(石組部)住居廃棄時に壊されているため，石組部の正確な規模については不明である。掘形内に偏平な板状の礫を敷き並べて底面としているが，側壁を構成する石は遺存していない。礫の表面に被熱による赤色変化が明瞭に確認されたのは１点だけであった。ℓ１に含まれていた小型礫の中にも被熱による赤色変化が見られるものはなかった。

(前庭部)石組部の南側には，前庭部に相当するとみられる踏み締まりがわずかながら確認されてい

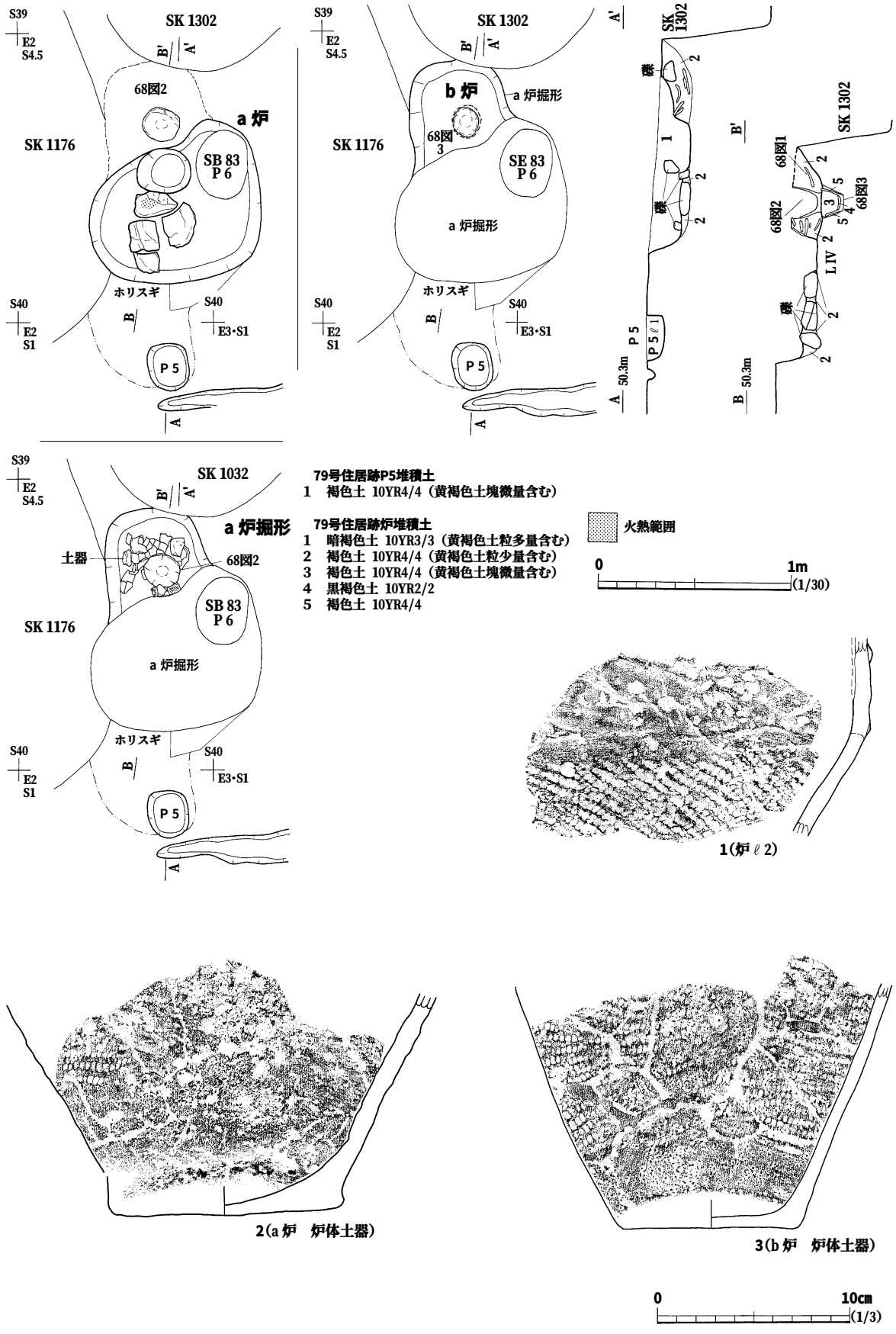


図68　79号住居跡炉と出土遺物(2)

る。その範囲は，最大幅115㎝，南北方向の長さ108㎝を測る。

ｂ炉

（堆積土）ℓ４・５はｂ炉に伴う堆積土である。ℓ４は，ａ炉堆積土のℓ１～３とは明確に区別される黒褐色土で，古い段階の炉機能時に自然に堆積した土の可能性がある。ℓ５は古い段階の炉体土器の掘形堆積土である。

（土器埋設部）古い段階の炉体土器は現状で直径約30㎝の掘形に据えられている。なお，炉体土器の周囲に縁石があったかどうかは不明である。

主柱穴　Ｐ１～４は炉跡を挟んでほぼ左右対称に配列されていることと，底面の標高が，Ｐ１・２は49.5m，Ｐ３・４は49.6mとほぼそろっていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.1m，Ｐ２－Ｐ３間が2.0m，Ｐ３－Ｐ４間が2.3m，Ｐ４－Ｐ１間が1.8mである。現状の平面形は不整な円形あるいは楕円形で，断面形はＵ字状を呈している。規模は，Ｐ１が南北長38㎝，東西長34㎝，深さ61㎝，Ｐ２が南北長35㎝，東西長42㎝，深さ62㎝，Ｐ３が南北長35㎝，東西長31㎝，深さ49㎝，Ｐ４が南北長35㎝，東西長26㎝，深さ38㎝である。Ｐ２，Ｐ３ℓ１，Ｐ４ℓ１は基本土層のＬⅣに近い黄褐色土の小塊が含まれているため，柱材を抜いたところに埋めた土と推察される。Ｐ３ℓ２，Ｐ４ℓ２については，ＬⅣに近似した黄褐色土を主体とした層で，柱の周囲に詰めた版築土と考えている。また，Ｐ１については当初近世の柱穴として調査が行なわれていたため詳細な図面を提示できないが，土色は暗褐色土主体の土であった。これらの主柱穴の平面形が不整形をなすのは，柱材抜き取りの影響と考えている。

ピット　主柱穴の他に，小さいピットが６個検出されている。炉跡前庭部に位置するＰ５は，一辺25㎝前後の方形を呈し，Ｐ１～４と比べると平面形が異なり，規模も小さい。また，底面の標高も50.09mと浅い。Ｐ５は，位置関係や規模からすれば，Ｐ１～４の主柱穴とは別の機能を果たしていたものと推察される。Ｐ６～10は周溝との位置関係から住居跡外のピットの可能性が指摘でき，明確に本住居跡に伴うものとはいえない。しかし近世のピットとは異なるため，本住居跡に伴うとして報告に含めた。いずれも径10～20㎝程の小穴で，黄褐色土粒を含む暗褐色土を呈するという点で共通する。その性格については不明であるが，住居跡との関連を考えるならば，上屋構造の補助的な柱，棚状の施設，出入り口に関連するピットなどの可能性が指摘できる。

遺物出土状況　本住居跡は床面が削平されているため，遺物が出土したのは，炉跡からのみである。68図２・３に示した縄文土器は，炉体土器である。この他，堆積土中から縄文土器片168点，石器類２点，土師器片10点が出土した。

遺物　67図１は土鈴とした。欠損しているため，全体の形状は不明であるが，球形を呈すると推察される。頂部には鈕がわずかに残るが，鈕孔があるかどうかは確認できない。内外面とも細かい単位のヘラナデを施しているが，外面の方が丁寧である。

68図１～３に縄文土器を示した。１は胴部片で，上半には無文部に隆線による文様が施され，下半には地文の縄文が認められる。２・３は炉体土器である。いずれも摩滅が著しく，表面の剝落も

多い。地文の縄文がわずかに観察できる。なお，底部外面に網代痕などは認められなかった。

まとめ　本住居跡は床面や炉の上部も削られているなど遺存状態が悪い。また，周壁の立ち上がりは確認されていないため，規模は周溝から推測している。本住居跡の帰属時期は複式炉の形態，炉体土器の特徴から縄文時代中期後半と推察される。（丹　治）

81号住居跡　ＳＩ81（図69～71，写真33・34・353）

位置・検出面　北区北端の平坦面，Ｓ・Ｔ18・19グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。調査当初，粘土を含んだ暗褐色土の円形を呈する大型土坑と認識し，東半分を半截した。その後掘り下げ作業時に複式炉の施設とみられる炉体土器２個体，石組部と考えられる敷石が確認できたため，検出面は住居跡の床面であると判断し，床面の精査に努めた。複式炉の長軸線延長上には焼土集積範囲，埋設土器，Ｐ１・２が確認できた。

重複　本住居跡の主柱穴が配置する位置に448号土坑が存在するが，調査時に気づかず掘り下げてしまったため，土坑との重複関係は不明である。また，本遺構複式炉の下には447号土坑が重複し，複式炉構築時に一部破壊されていることから本遺構よりも古い土坑であることがわかる。

平面形・規模　すでに床面が露出している状態であり平面形は不明である。Ｐ１東端から複式炉西端までは4.7mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに構築されている。調査以前は竹林であり，根による撹乱が激しく調査時点においても締まりがない状態であったため，踏み締まりの痕跡などは確認できなかった。周溝も確認できなかった。

複式炉　床面が露出していたが複式炉の遺存状態は良好である。土器埋設部・石組部・前庭部の３施設が一体となり楕円形の複式炉を形成している。東側から土器埋設部・石組部・前庭部で構成されている。

（規模）全長は2.1m，最大幅は1.1mである。複式炉の長軸線はＮ75°Ｅと，ほぼ東西方向に向いている。

（堆積土）５層に分層したが，本住居跡が廃絶後に堆積した層，前庭部粘土層，掘形内堆積土に大分できる。ℓ１・２は廃絶後に堆積した層であり，住居内堆積土層である。ℓ３は前庭部の西側上端に貼られている灰白色粘土である。複式炉使用時から粘土を貼っていたものと推測できる。ℓ４・５は掘形内堆積土である。ℓ４は炉体土器１の周囲にのみ確認できるものであり，石組部掘形堆積土は暗褐色土をしたℓ５である。

（土器埋設部）２個体の深鉢形土器が埋設されている。通常，炉体土器が複数埋設される場合には長軸線上に重なるように配するが，本複式炉は長軸線上に２個体並ぶのではなく長軸線を挟んで南北方向に並列し埋設している。南側が口径42㎝の大型の深鉢形土器，北側が口径24㎝の小型の深鉢形土器である。埋設土器の周囲には10～15㎝の礫を巡らして縁石としている。炉体土器周辺は強く焼けている。

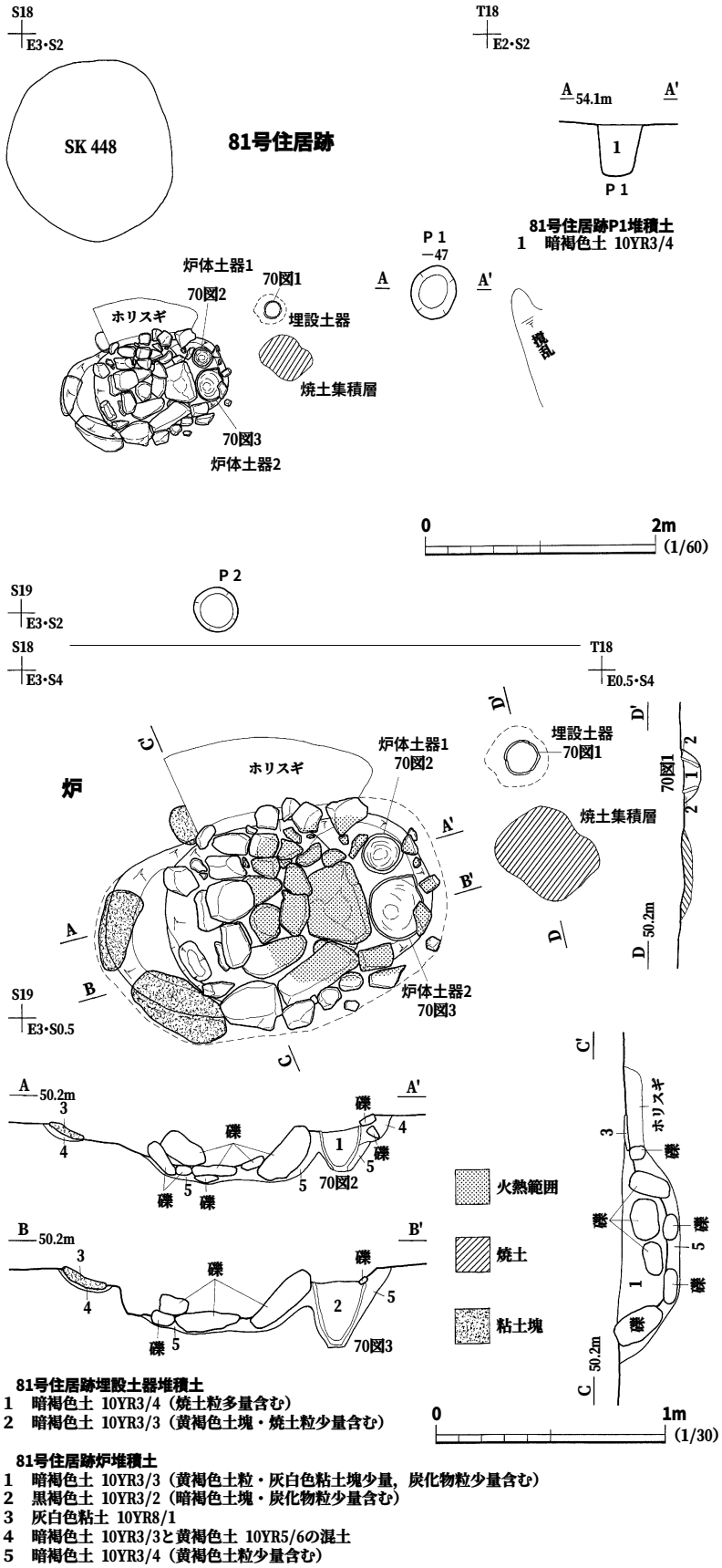


図69　81号住居跡

（石組部）平面形は円形，断面形は船底形を呈している。検出面から石組部底面までの深さは23cmを測る。壁面には30～40cmの礫を用い，石組部底面や床面には小礫を使用している。西壁の礫は原位置から外れ，石組部中央底面に落ちている状態であった。石組部東壁は65°の傾斜で立ち上がり土器埋設部に接する。石組部の西壁の掘形は約60°の角度で立ち上がる。

（前庭部）平面形は三日月状で，長さ40cm，幅90cmを測る。検出面から底面まで５～14cmの深さである。前庭部の西壁上端には２カ所で粘土を巡らしている。この粘土は複式炉を廃棄したときに捨てた粘土ではなく，複式炉使用時から用いられていた粘土であると考えている。

焼土集積範囲　複式炉の長軸線上から焼土の集積範囲を確認した。複式炉の土器埋設部よりも40cm東である。平面形は直径50cmの不整方形である。厚さ５cm程の焼土塊が堆積していた。

埋設土器　複式炉北東側，焼土集積範囲の20cm北に位置する。掘形の平面形は不整円形，断面形は皿状であり，掘形中

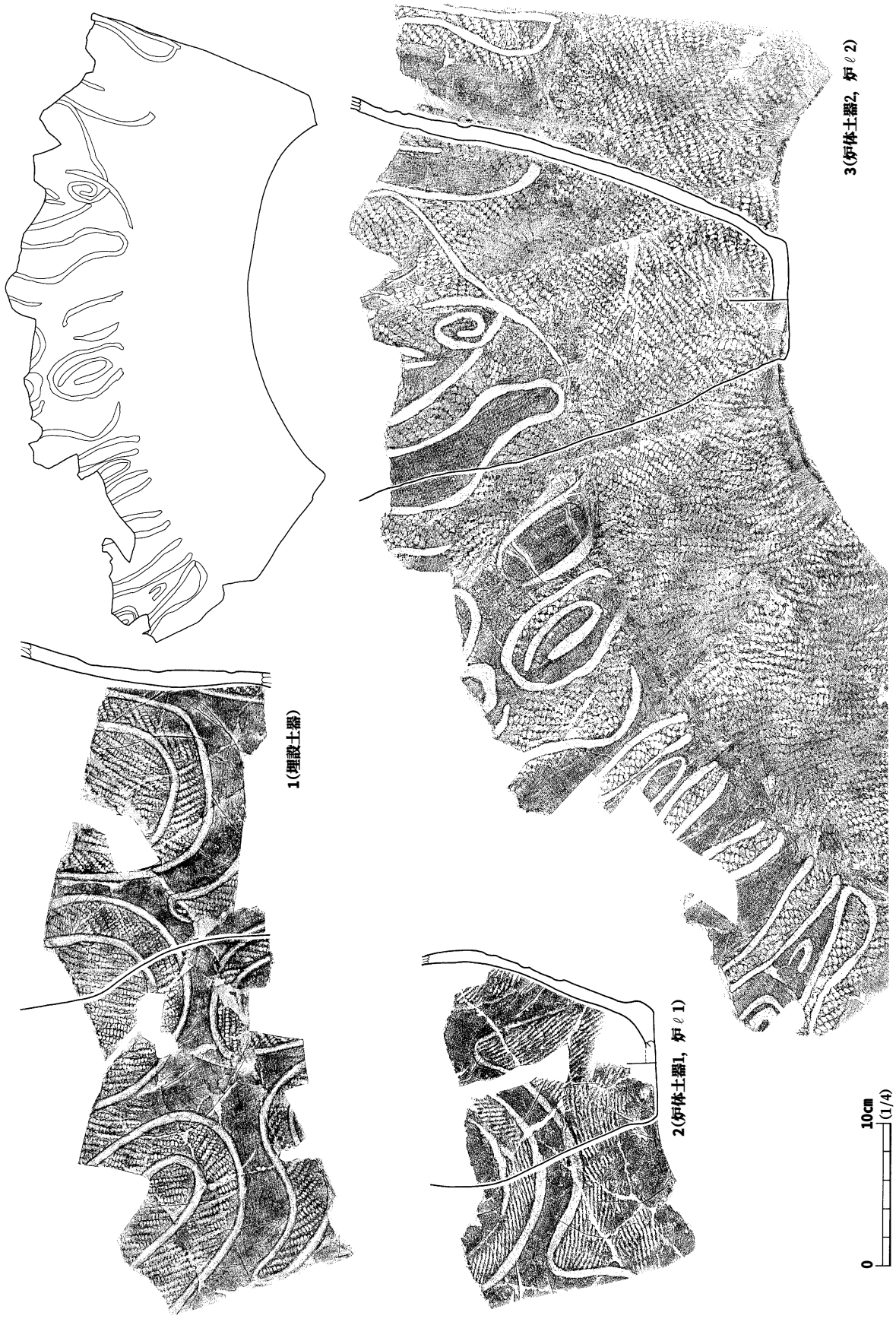


図70　81号住居跡出土遺物(1)

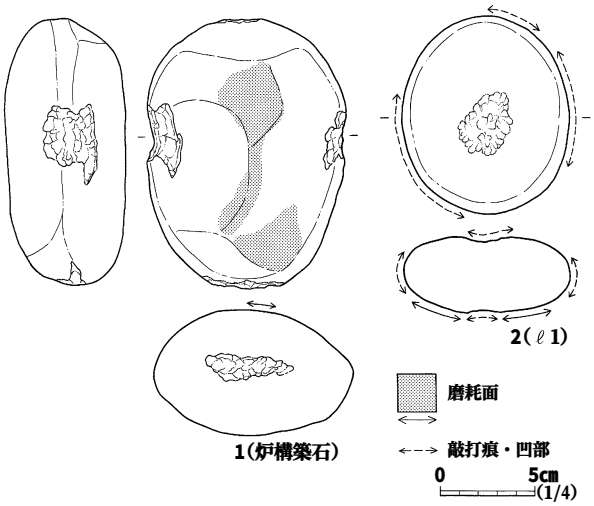


図71　81号住居跡出土遺物(2)

央に深鉢形土器の胴部のみが埋設されている。埋設土器内には焼土粒を多量に含んだ暗褐色土を投げ入れている。

主柱穴　主柱穴を確認できたのはＰ１・２の２個である。Ｐ１は複式炉長軸線上の地床炉より1.5m東に位置する。58㎝×52㎝を測り，検出面から底面まで58㎝である。堆積土は暗褐色土１層のみである。Ｐ２は複式炉の約1.8m南に位置する。これに対応し，複式炉を挟んだ位置にあると考えられる柱穴は，448号土坑掘込み時に気づかずに掘り飛ばしてしまった可能性がある。その他本住居に付属するピットなどは確認できなかった。

遺物出土状況　床面が露出している状況であるので，埋設土器以外出土遺物は確認できなかった。

遺物　図70に縄文土器，図71に石器を図示した。70図１は焼土集積範囲の北側に位置する埋設土器である。深鉢形土器の体部中央から上半にかけての資料で，口縁部と体部下半を欠損している。体部上半にかけて外傾して立ち上がる器形で，外面はU字状などの曲線的な沈線区画内を斜縄文で充填している。同図２は複式炉炉体土器１である。小型の深鉢形土器であり，口縁部を欠損している。底部から体部中程にかけて緩やかに外傾し，口縁部にかけて内湾する器形である。沈線区画内を斜縄文で充填している。同図３は複式炉炉体土器２である。深鉢形土器で口縁部が欠損している。外面には沈線により幾何学的な大木式系土器とは異質な文様を描く。その文様の内外を部分的に磨り消し，無文部を作り出している。東北地方北部の影響が強い土器であろうか。

71図１・２は磨石類である。同図１は複式炉の石組部を構築石に転用する際に，上下・左右の端部を部分的に打ち欠いて整形したものと推測している。同図２は器面の両面に深くえぐれた凹部が認められ，側面部に敲打痕が観察された。

まとめ　本住居跡は馬場前遺跡内の複式炉を有する他の住居跡と比べて，極めて特異な特徴をもつ住居跡である。炉体土器が並列する形態の複式炉をもち，埋設土器などの住居内施設ももち合わせている。複式炉の長軸線は東西方向を向き，複式炉の炉体土器は長軸線を挟むように南北に埋設されている。前庭部の縁辺には粘土が貼られていた。また，住居内施設として，複式炉の東側の長軸線上には焼土集積範囲・埋設土器も形成されている。主柱穴は２個確認できた。複式炉の炉体土器及び埋設土器の特徴から，本遺構の機能していた時期は縄文時代中期末葉と判断している。（三　浦）

82 号 住 居 跡　ＳＩ82 （図72，写真35・36・351）

位置・検出面　北区北部の平坦面，Q24・25グリッドに位置する竪穴住居跡である。本遺構の東側には，本遺構と同様の平面形を示す84・85号住居跡が近接する。また，南東側には681・682号土坑

が隣接している。検出面はＬⅣ上面である。

重複　592・750・1154・1155号土坑，Q24グリッドＰ６・７・９と重複し，592・750号土坑と３基の小穴よりは古く，1154・1155号土坑よりは新しい。

堆積土　ℓ１・２は，暗褐色系の土を基調としている。両層とも多量の褐色土の小塊を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積と判断した。ℓ３～７は，カマド内堆積土である。

平面形・規模　隅丸長方形を呈し，長軸方向はＮ３゜Ｗである。規模は，長辺335㎝，短辺270㎝を測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成され，小さな凹凸が認められるもののおおむね平坦である。また，床面の中央から南側にかけて踏み締まりが認められるが，貼床は認められなかった。

周壁　床面から50～60゜のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は，14～16㎝を測る。東壁北側の一部は，750号土坑によって壊されている。

カマド　東壁中央に取り付いている。遺存状態は比較的良好で，カマド両袖上に焚き口の天井石がのった状態で出土している。また，支脚が確認されている。

(規模)焚き口の幅は52㎝，高さ14㎝前後を測り，焚き口からカマド奥壁までの長さは45㎝である。

(堆積土)カマド内堆積土は５層に分けられ，ℓ３・４はカマド崩落土，ℓ５・６はカマド内埋土，ℓ７が袖石の埋土と考えている。

(袖部)両袖の先端には，カマドの内面側に平らな面を向けた平石が縦長に立てられ，北側袖石の内面側には，被熱により赤色変化した範囲が観察された。袖の石は北側袖に凝灰岩，南側袖には花崗岩が使用されている。

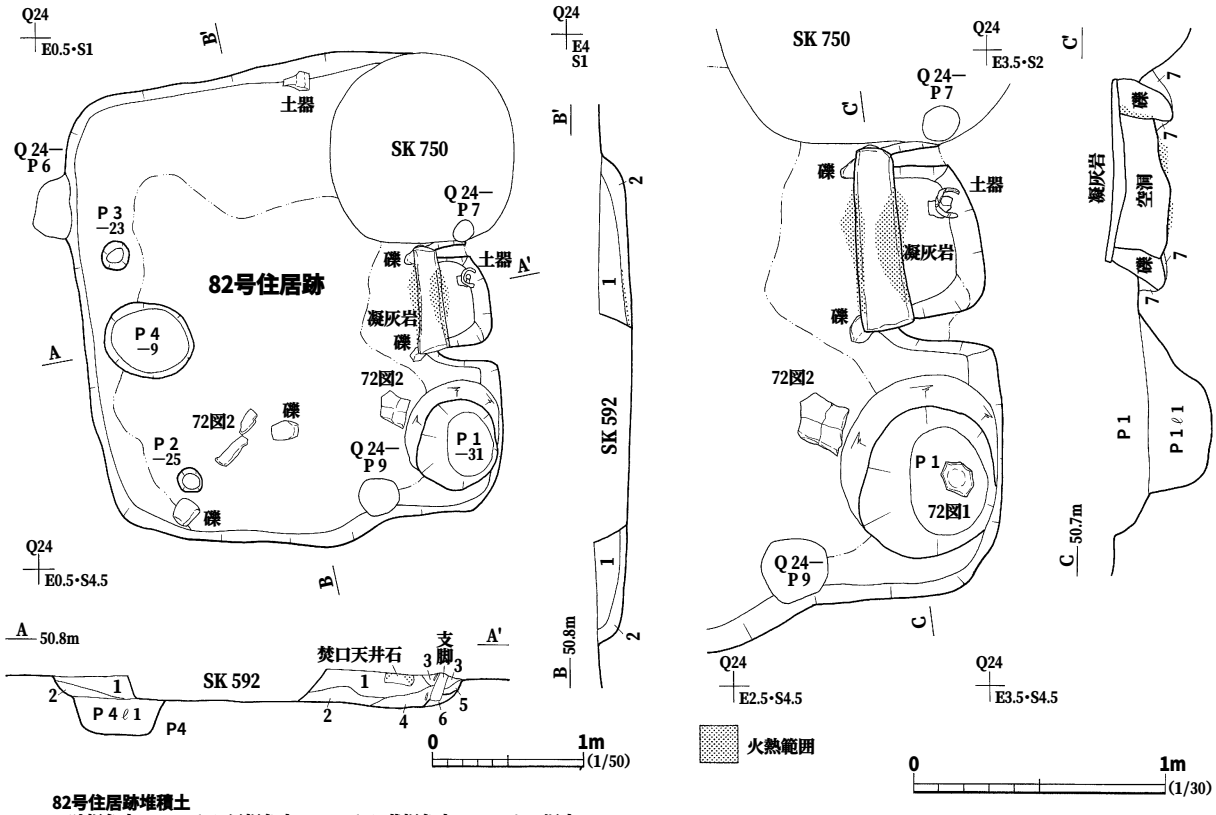
(焚口部)天井には凝灰岩を切り取って造られた長方形の天井石が使用され，その厚さは２～５㎝を測る。石の内外面には，被熱による赤色変化範囲が観察された。

(燃焼部)床面上に形成され，小さな凹凸が認められるもののおおむね平坦である。燃焼面は，焚き口付近で暗赤褐色の南北方向に長くなる長楕円形を呈し，その規模は長径40㎝，短径25㎝，厚さは中心部で最大５㎝を測る。支脚はカマド奥壁の北側で，やや東側に傾いて立っていた。

ピット　ピットはＰ１～４の４個を確認した。Ｐ１は南東壁際，Ｐ２は南西壁際，Ｐ３・４は西壁側に位置している。規模は，Ｐ１が長径71㎝，短径62㎝，Ｐ２・３が径19㎝，Ｐ４が長径58㎝，短径48㎝を測る。Ｐ１は規模や形状からカマド際に位置する貯蔵穴と考えられる。Ｐ２・３は他のピット配列から柱穴とは判断できなかった。Ｐ４は褐色土で埋め戻されているが，性格は不明である。

遺物出土状況　床面から出土したものは，土師器片９点である。72図１は支脚の上に伏せた状態で出土した。この他，堆積土中から土師器片72点，須恵器片４点が出土した。土師器の多くはℓ１から出土している。

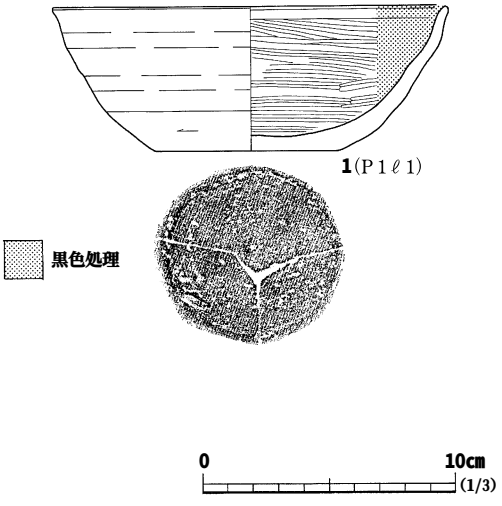
遺物　72図１・２に土師器を示した。１はロクロ成形の杯で約1/2が遺存し，底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる器形を呈する。器面調整は，内面にヘラミガキ後に黒色処理，外面には底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施されている。このため，底部切り離しは不明である。



82号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒多量含む）
3　黄褐色粘質土 10YR5/6（カマド天井崩落土）
4　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒・焼土粒少量含む）
5　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
6　褐色土 10YR4/4（褐灰色粘土塊 10YR5/1　少量含む）
7　褐色土 10YR4/4（灰色粘土塊少量含む）

82号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）

82号住居跡P4堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黒褐色土 10YR3/2の混土



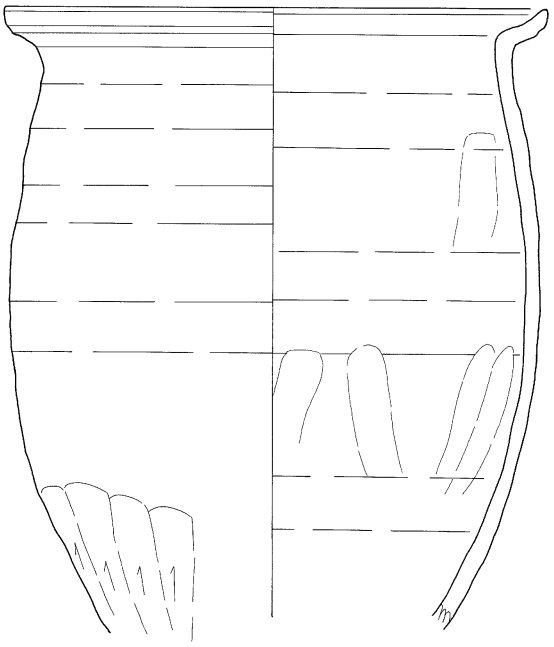


図72　82号住居跡と出土遺物

２はロクロ成形の甕で，胴部がわずかに膨らみをもつ長胴を呈し，口縁部が「く」字状の器形である。器面調整は，内面にヘラナデ，外面の胴部下半にはヘラケズリが施されている。

まとめ　本遺構はカマドを有する住居跡である。カマドの遺存状態が良好であるため，カマド焚き口の造りが明らかになった。また，カマド内の支脚上には土師器杯が伏せられるカマド祭祀が行われている。本遺構の時期は，出土遺物が少なく時期を決定できる資料が乏しいため正確には不明であるが，９世紀後半頃と考えられる。（国　井）

83 号 住 居 跡　ＳＩ83 （図73，写真37・38）

位置・検出面　調査区北西部の平坦面に存在し，Ｋ・Ｌ25・26グリッドに位置する。LIV上面で円形に巡るピット６個と複式炉の土器埋設部・石組部を検出した。

重複　641・642・644・645号土坑より新しい。

堆積土・周壁・周溝　確認されなかった。

平面形・規模　周壁，周溝及び床面の痕跡が確認されないことから，本来の平面形・規模は不明であるが，Ｐ２・５を結んだ線とＰ３・６を結んだ線の交点を中心とし，Ｐ１・４を内部に取り込む円を推定した場合，径4.9ｍを測る。

床面　遺構検出面が本来の床面かどうかは不明であり，踏み締まりや遺物の出土が確認できないことから，後世の削平により床面が削平されている可能性がある。また，周溝も確認できなかったことから，床面範囲を推定することもできない。

複式炉　遺構南部に存在するが，残存状況は悪い。北から土器埋設部・石組部の順に配されている。

（規模）全長102㎝を測り，主軸方位はほぼ南北である。

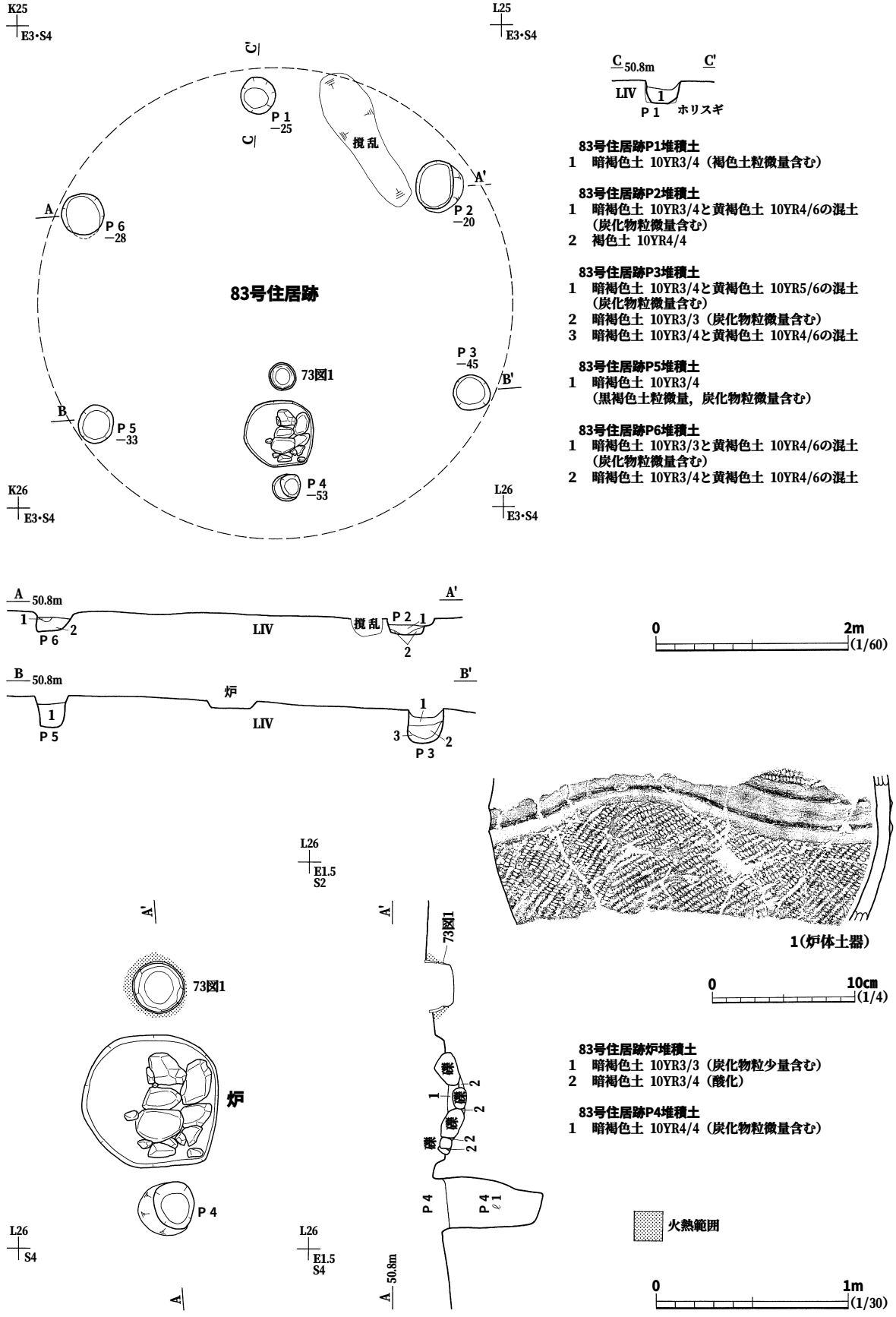
（堆積土）２層に分かれ，ℓ１は炭化物粒を含む暗褐色土，ℓ２は掘形内堆積土である。

（土器埋設部）埋設する土器とほぼ同じ径の掘形の上部に，口縁部・底部を欠いて胴部を輪切りにした深鉢形土器を正位に埋設している。土器の周囲には配石はみられず，最大幅５㎝の焼土化範囲が巡っている。検出面から掘形底面までの深さは15㎝を測る。

（石組部）西半の礫が残存していないが，東西主軸の楕円形ないしは長方形を基調とした平面形と推測される。中央部の礫のみが平坦面を上向きにしており，その周囲の礫は斜めに置かれている。これらの礫は長さ約20～25㎝のものであり，さらに，南縁には長さ８～15㎝の小型の礫が配されている。残存部の規模は南北54㎝，東西50㎝を測り，周囲の礫の最高点から底面の礫の上面までの深さは約10㎝を測る。掘形は径70㎝，深さ17㎝で，底面が緩く湾曲する。

主柱穴　Ｐ１～３・５・６の５個を確認した。平面形は長径36～54㎝の円形ないしは楕円形を呈し，全体の形状は円筒形を呈する。深さは北側のＰ１・２・６が20㎝前後，南側のＰ３・５は30㎝以上を測る。堆積土は１～３層に分かれ，暗褐色土を主体とし，自然堆積土と推測される。

ピット　複式炉石組部の南に隣接するＰ４は，検出面から深さ６㎝までは29×27㎝の楕円形を呈し，それより下位では24×21㎝の楕円形を呈する。堆積土は暗褐色土の１層のみである。深さは53㎝を



83号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（褐色土粒微量含む）

83号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/4

83号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR4/6の混土

83号住居跡P5堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黒褐色土粒微量，炭化物粒微量含む）

83号住居跡P6堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR4/6の混土

83号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（酸化）

83号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR4/4（炭化物粒微量含む）

図73　83号住居跡と出土遺物

測る。

遺物出土状況　複式炉土器埋設部より正位の深鉢形土器１点と縄文土器片６点が出土し，Ｐ１・３堆積土より石器が各１点，Ｐ４堆積土より縄文土器片が１点出土している。

遺物　73図１は炉に埋設されていた深鉢形土器の胴部中央付近で，口縁部付近と底部付近を欠失している。外面の上部には２本の平行する稜線による波状文が巡り，それより下方にはＲＬ原体を縦位回転した縄文が施されている。稜線間は無文で，稜線の両脇には稜線に沿った太い沈線がみられる。

まとめ　残存状態が悪く全容は不明であるが，複式炉をもつ５本主柱の竪穴住居跡と推測される。石組部に隣接するＰ４も柱穴と推測される。遺構の時期は，炉体土器及び複式炉の形態等から，縄文時代中期末葉の大木10式期と推測される。　（能登谷）

84 号 住 居 跡　ＳＩ84 （図74，写真39・40）

位置・検出面　北区北端平坦面のＱ・Ｒ21・22グリッドに位置する。南壁中央にカマドをもつ竪穴住居跡である。遺構検出面はＬⅣ上面で，炭化物粒・焼土粒・土師器片が混入するにぶい黄褐色土の方形範囲として確認した。

重複　本住居跡を横断して延びる８号溝跡が本遺構よりも新しく，検出面から床面までを破壊して

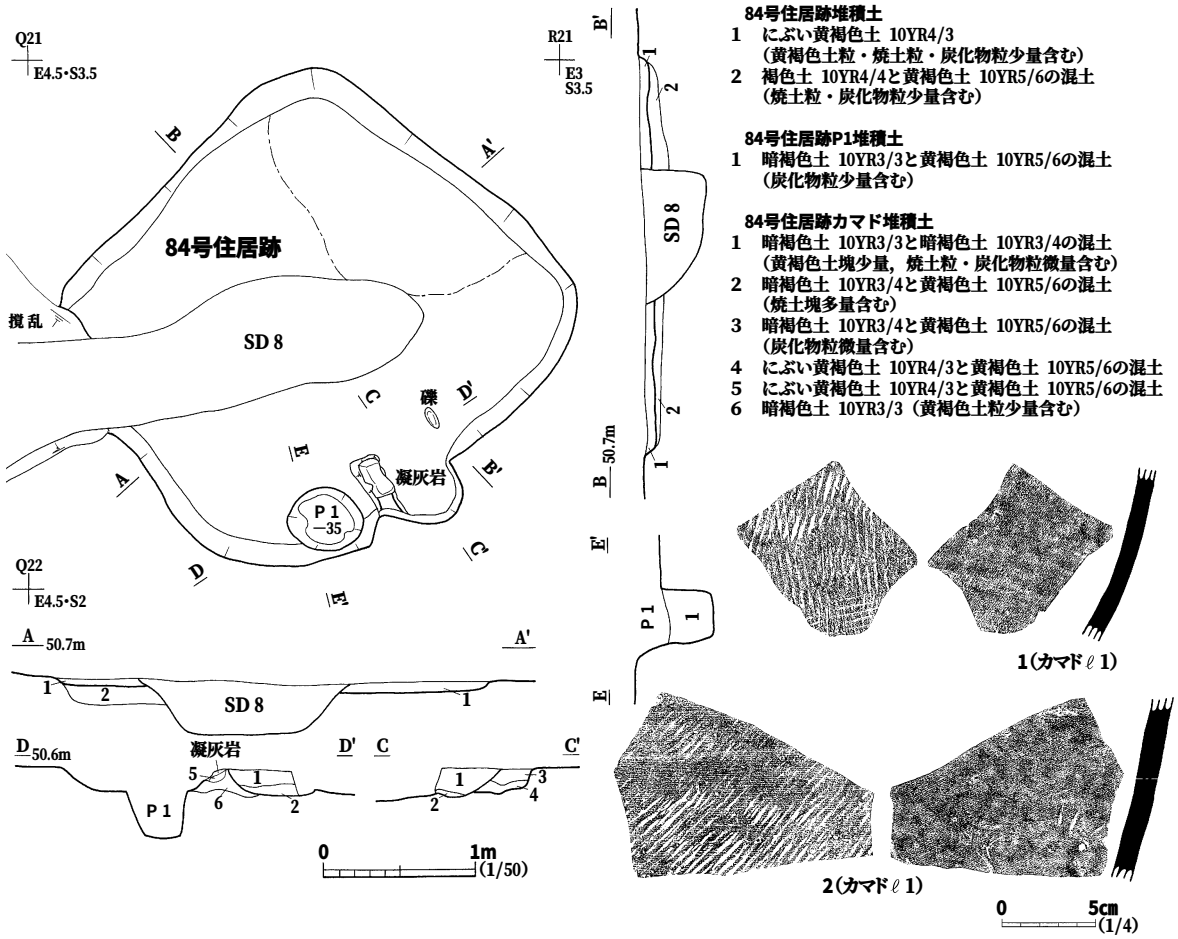


図74　84号住居跡と出土遺物

いる。また，1184・1224号土坑を床面より検出した。

堆積土　堆積土は２層に分層した。いずれも竹の根による撹乱が著しい。ℓ１はにぶい褐色土である。撹乱の影響を受け，自然堆積であるか人為堆積であるかの判別は困難である。ℓ２は褐色土と黄褐色土の混土である。貼床に相当する層と思われる撹乱が激しく，床面上面の硬化状況などは確認できなかった。

平面形・規模　南西隅がやや丸みを帯びる方形である。長軸方向はN50°Wである。規模は東西長2.9m，南北長2.7mである。検出面から床面までは12㎝を測る。

床面　床面は平坦であるが，南側に向かって若干高くなる。踏み締まりや周溝は確認できなかった。床面からは南西隅よりピット１個を確認したのみである。床面を何度も精査したが柱穴らしきピットは確認できなかった。

周壁　床面から55～65°の角度で立ち上がる。遺存壁高は８～12㎝を測る。本遺構北西隅は撹乱により破壊を受けていた。

カマド　南壁中央部に構築され，南壁を幅50㎝，奥行き30㎝程南東側に掘り込んで造られている。遺存状況は悪く，西袖のみ確認できた。燃焼面は確認できなかった。

(堆積土)カマド内堆積土は６層に分層した。ℓ１～４はカマド燃焼部の壁面崩落土及び流入土であると推察される。ℓ５・６はカマド袖構築土である。

ピット　主柱穴は確認できなかった。本住居跡にともなうピットは，カマドの西側から検出したＰ１の１個のみである。直径50㎝の円形で，床面からの深さは35㎝を測る。堆積土は暗褐色土と黄褐色土の混土層１層であり，人為的に埋められている。カマドの隣に位置することや規模から貯蔵穴の機能を果たしていたピットであると考えている。

遺物出土状況　Ｐ１からの出土は１点のみであり，多くがカマド内からの遺物の出土である。

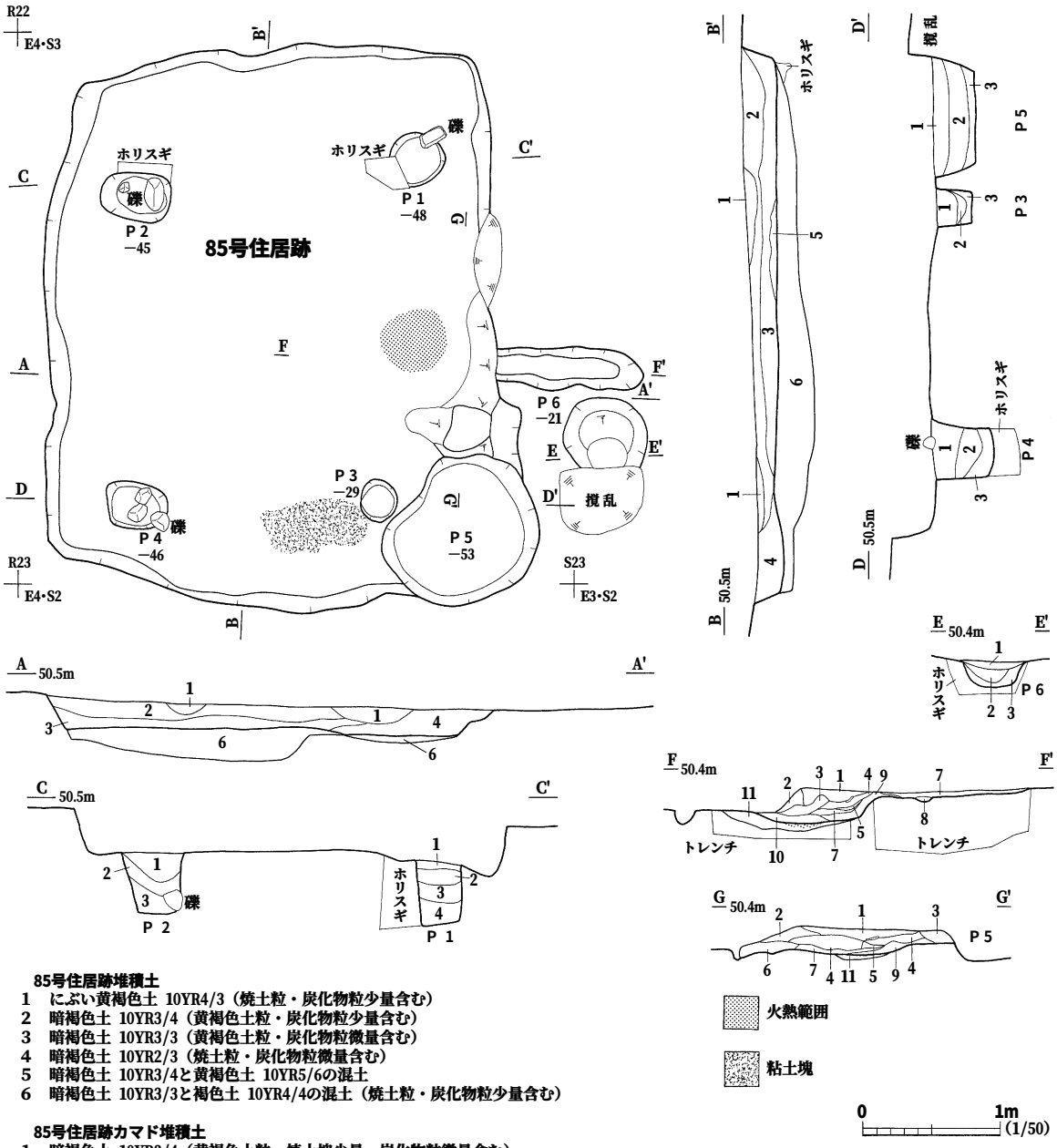
遺物　土師器片16点，須恵器片２点が出土した。須恵器片２点を74図１・２に示した。いずれも大甕の体部下半の資料であり，外面にはタタキ目痕が明瞭に残る。

まとめ　１辺2.5m程度の小型の竪穴住居跡である。南壁中央にカマドを敷設し，方形を呈する。住居内施設はカマド・貯蔵穴のみで，柱穴などは認められなかった。住居内に柱穴は確認できず，壁外柱穴も見られないことから上屋構造については不明である。

本遺構の規模から一般的な住居としての機能ではなく，他の機能を担っていた遺構であるとも考えられる。北区には数軒の同時期の同様な規模の遺構があり，集落・遺構の性格を考慮する上で重要であろう。本遺構の時期は堆積土からの遺物の出土のみであるが，これらの遺物を参考にすると平安時代頃と考えられる。　（三　浦）

85 号 住 居 跡　ＳＩ85 （図75・76，写真41・42・351）

位置・検出面　北区北東部のＲ・Ｓ22・23グリッドに位置する。ＬⅣ上面で暗褐色土の方形範囲として確認された。南西5.3mに134号住居跡，東方7.9mに108号住居跡が存在する。



85号住居跡堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
4　暗褐色土 10YR2/3（焼土粒・炭化物粒微量含む）
5　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
6　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/4の混土（焼土粒・炭化物粒少量含む）

85号住居跡カマド堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・焼土塊少量，炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/6（焼土塊少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量・焼土粒多量，炭化物粒微量含む）
5　明赤褐色土 5YR5/8（暗褐色土塊多量含む）
6　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・焼土塊少量含む）
7　褐色土 10YR4/4（焼土粒・炭化物粒微量含む）
8　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒・炭化物粒多量含む）
9　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量・炭化物粒微量含む）
10　明赤褐色土 5YR5/8（暗褐色土塊少量，焼土塊多量含む）
11　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊・炭化物粒少量含む）

85号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黒褐色土粒・明褐色土粒・焼土塊少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量，焼土粒多量，炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）

85号住居跡P2堆積土
1　褐色土 10YR4/6（ＬＶ砂粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）

85号住居跡P3堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（暗褐色土塊多量，明褐色土粒少量，焼土粒・炭化物粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒多量，焼土粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4（黄褐色土塊多量含む）

85号住居跡P4堆積土
1　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒多量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土塊・粒多量含む）
3　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）

85号住居跡P5堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4

85号住居跡P6堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒・炭化物粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/4（焼土粒微量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3（褐色土粒多量含む）

図75　85号住居跡(1)

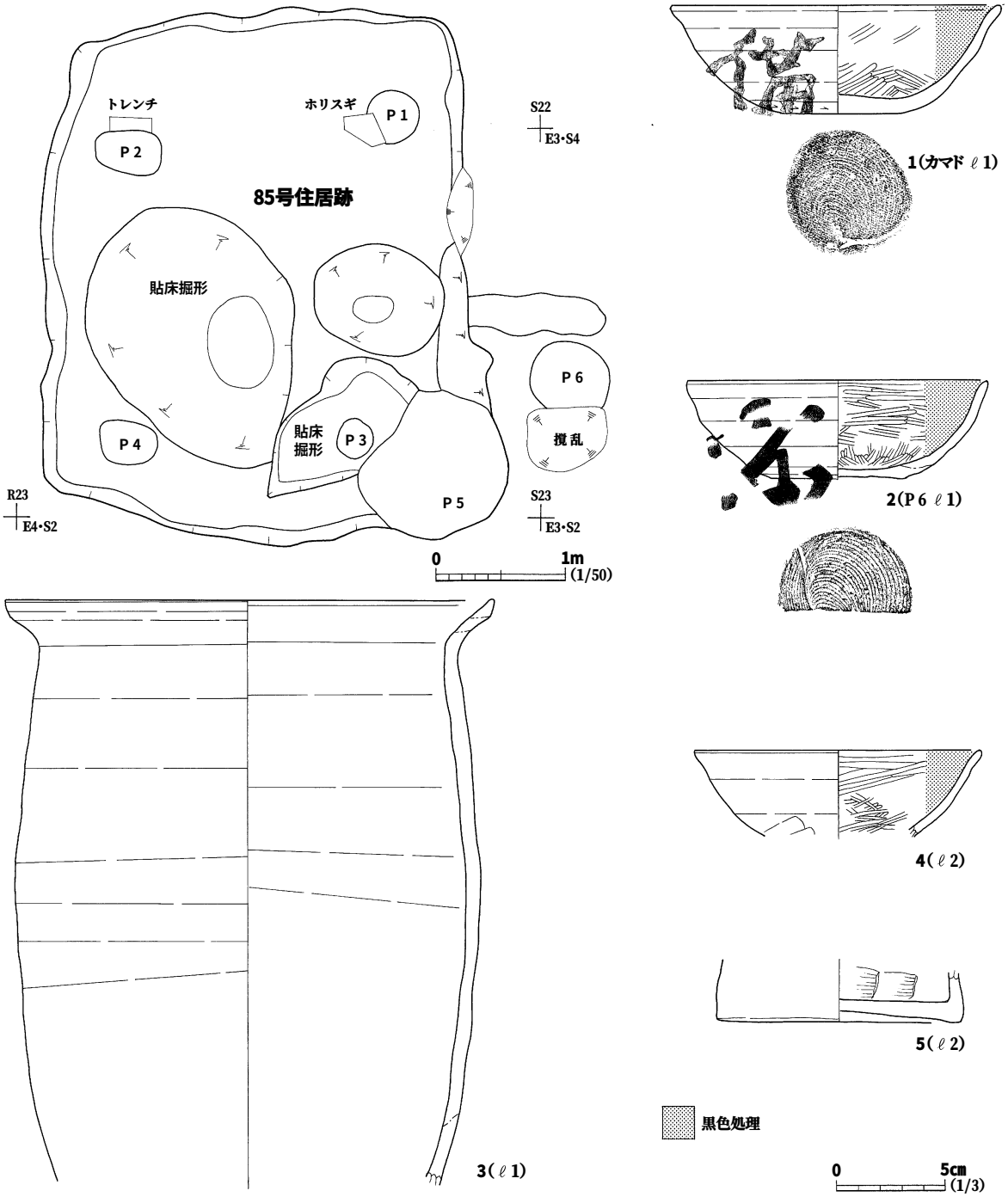


図76　85号住居跡(2)と出土遺物

重複　492・1256・1312～1317・1319号土坑よりも新しい。

堆積土　６層に分けられる。ℓ１・５は人為堆積土，ℓ２～４は流れ込みによる自然堆積土，ℓ６は貼床土と考えている。

平面形・規模　平面形は隅丸長方形で，規模は南北長4.1m，東西長3.5mである。北壁を主軸とした場合，主軸方位はN85 °Eで，ほぼ東西方向を指している。

床面　全面に貼床が施され，平坦に整えられているものの，竹根の進入による撹乱が著しい。掘形

底面は凹凸が見られ，小穴状の落ち込みが２カ所で見られる。

周壁　立ち上がりは急峻で，残存高22～32㎝を測る。

カマド　遺存状態が悪く，東壁の中央部やや南寄りに煙道部と袖部南側基部が検出され，煙道西方の床面で焼土化範囲が検出された。焼土化範囲の規模は径50㎝程度の円形で，煙道の主軸延長線よりもやや北側に位置している。南側袖部は住居構築時にＬⅣをある程度の高さで遺存させ，その上に褐色土を積み上げていたと推察される。両袖部とも袖部自体は破壊されており，床面で検出された多量の粘土塊は袖部の構築材である可能性が高い。煙道は東壁から住居外に向かって約1.1m延びている。堆積土は11層に分層した。ℓ１は流入土で，住居内堆積土に類似する。ℓ２～10はカマド構築土の崩落土，ℓ11はカマド構築時の掘形堆積土と考えている。

主柱穴　床面で検出されたＰ１～４が主柱穴と考えられる。それぞれ，径は27～44㎝，床面からの深さは29～48㎝を測る。４個とも明瞭な柱痕は確認できなかった。

ピット　Ｐ５はカマド脇の貯蔵穴と考えられる。

遺物出土状況　本遺構からは縄文土器片129点，土師器片52点，石器２点などが出土した。土師器は床面やカマドから多く出土する傾向がうかがえる。この内図示したのは，土師器５点である。

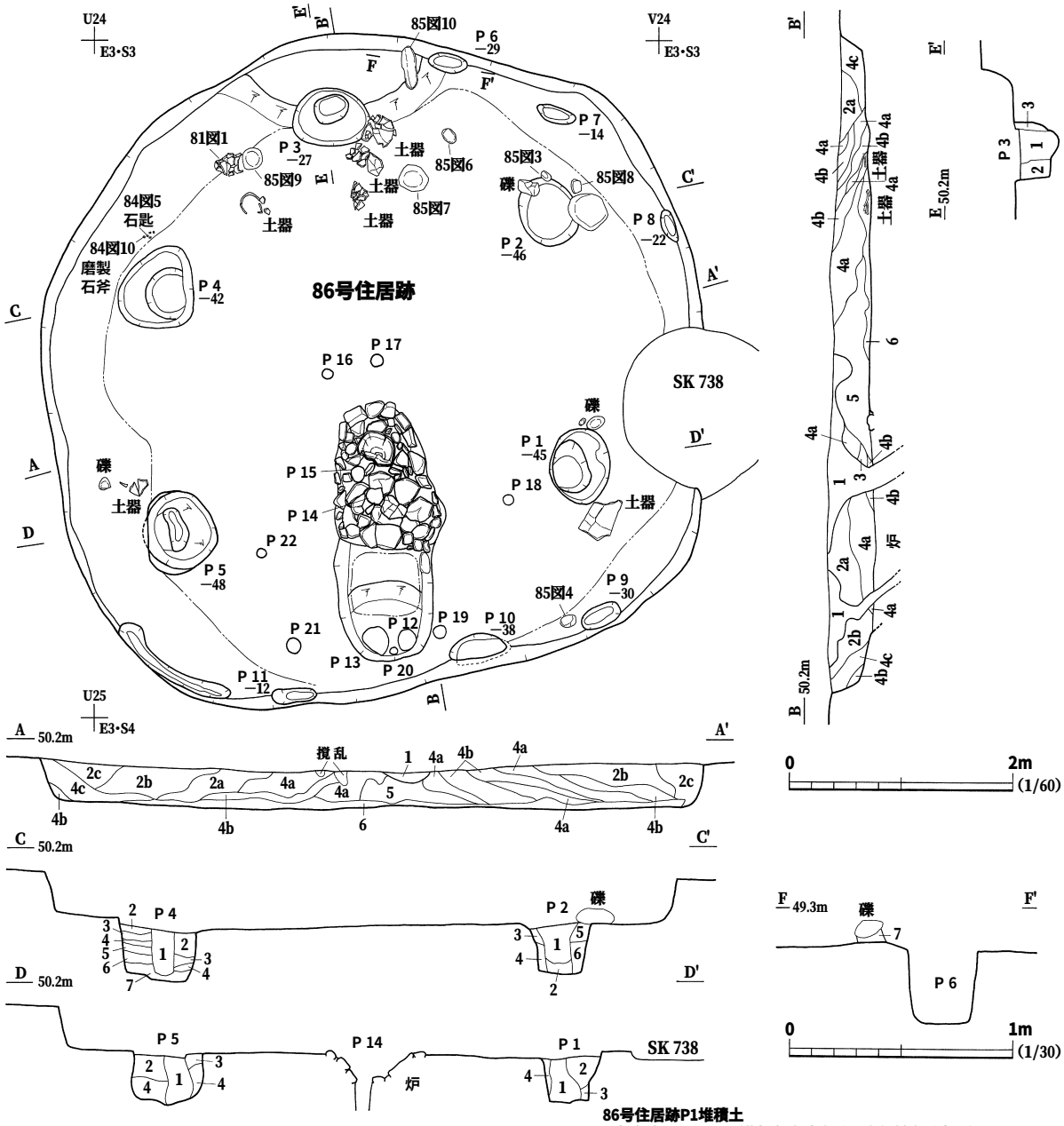
遺物　76図１はロクロ成形の杯である。底部は回転糸切り痕，体部下端に手持ちヘラケズリがみられる。口縁部はやや外反する。内面には細かいヘラミガキの後黒色処理が施される。体部に正位で「備」と読める墨書文字がある。同図２はロクロ成形の土師器杯で，底部には回転糸切痕が観察される。体部に墨書文字が認められる。判読は困難であるが，遺存する墨書部分には，本遺跡の北側にある小山Ｂ遺跡で多く認められた「少川」に共通する字画部分があり，相互の関連が推定される。３はロクロ成形の土師器甕である。４はロクロ成形の杯で，体部下端に手持ちヘラケズリが，内面はヘラミガキの後，黒色処理が施される。５は筒形土器の底部である。やや上げ底で，内面に横位のヘラナデが施される。また，底部には酸化による赤斑が認められた。

まとめ　本遺構は東壁にカマドを有する長方形基調の竪穴住居跡で，今回の調査区で検出された同様な竪穴住居跡の中では中型の部類に属する。住居跡の遺存状態は良好であったが，カマド燃焼部は遺存していなかった。墨書土器には，近接する小山Ｂ遺跡との関連を推定させる資料がある。所属時期は，出土土器の特徴から９世紀初頭頃と推定される。　（高　田）

86 号 住 居 跡　ＳＩ86 （図77～85，写真43・44・352）

位置・検出面　北区東部の平坦面，Ｕ・Ｖ24・25グリッドに位置する複式炉をもつ大型の竪穴住居跡である。本住居跡の周囲には縄文時代中期の円形土坑が数多く検出されている。検出面はＬⅣ上面であり，炭化物粒・焼土粒を多量に含んだ暗褐色土の円形範囲として検出した。堆積土の状況より焼失住居跡の可能性も考慮しながら調査を進めた。

重複　唯一738号土坑が本住居よりも新しい。741・875号土坑はＬⅣ上面で確認されたが，本住居跡がこれらの土坑の一部を壊して造られている。456・457・771号土坑は住居内堆積土中からは



86号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒多量含む）
2a　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）
2b　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）
2c　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒・焼土粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3と焼土粒の混土（黄褐色土粒少量含む）
4a　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土塊多量，炭化物粒・焼土粒少量含む）
4b　黒褐色土 10YR3/1（黄褐色土塊少量，炭化材多量含む）
4c　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊・炭化物粒・焼土粒少量含む）
5　褐色土 10YR4/6（黄褐色土塊少量，炭化物粒微量含む）
6　暗褐色土 10YR3/3（炭化材多量含む）
7　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量，炭化物粒微量含む）

86号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化材多量，焼土塊少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊・炭化物粒少量含む）
3　黒褐色土 10YR3/2（黄褐色土塊少量含む）
4　褐色土 10YR4/4（炭化物粒微量含む）
5　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒微量含む）
6　褐色土 10YR4/4（炭化物粒微量含む）
7　黒褐色土 10YR3/2

86号住居跡P1堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土塊少量，炭化材多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4
4　褐色土 10YR4/6

86号住居跡P2堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土塊・焼土粒少量，炭化材多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・焼土粒少量，炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒・焼土粒微量含む）
4　黄褐色土 10YR5/6（暗褐色土塊 10YR3/4 多量含む）
5　褐色土 10YR4/4
6　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）

86号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化材多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/4（炭化物粒少量含む）

86号住居跡P5堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化材・炭化物粒・焼土粒多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（炭化粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4（炭化物粒少量，焼土粒多量含む）
4　褐色土 10YR4/4（炭化物粒微量含む）

図77　86号住居跡

確認できず，床面を検出してその存在に気付いたので明らかに本住居跡よりも古い遺構である。

堆積土　遺構内堆積土は大分して７層に分層できた。本住居跡は焼失家屋であり，堆積状況より本住居跡の埋没過程が推測できた。また，住居廃絶に関しての祭祀的色彩の濃い可能性が認められた。堆積状況を模式化したものを図78に示したので，最初に，住居廃棄直後から現況に至るまでの埋没過程の説明を行う。

(第１段階)床面直上にはℓ６が確認できる。ほぼ床面全体に広がる炭化材を多量に含む暗褐色土層である。薄層で層厚10㎝未満である。住居廃絶に際して住居に火を放ち，茅や樹皮などの屋根材及び炭化材の樹種同定で判明したクリやヤマグワを用いた梁や桁材の崩落層である。

(第２段階)住居内床面中央部にはℓ５とした褐色土が堆積する。住居中央部のみに認められる土層で，最大で層厚31㎝を測る。第１段階で焼失した屋根材の崩落にともない，重量に堪えきれなくなった屋根の中央が崩落したものと推定できる。このℓ５の存在により，本住居跡は土屋根葺きの竪穴住居跡と想定できる。

(第３段階)ℓ５・６上層には，焼土塊層であるℓ３が認められる。Ｐ１・２・４・５付近の住居内の四隅及び複式炉上にℓ３を投棄している。この段階で“住居送りの儀式”であろうか，複式炉の火に対する畏敬の念からなのであろうか，Ｐ16～22の７本の細い杭を複式炉周辺に不整な六角形上に巡るように打ち込んでいる。なお，この杭を打つ行為は，複式炉が埋没しても複式炉のおおよその位置を捕捉できる作用も持っていたものと判断している。

(第４段階)まだ完全に崩落していない屋根・周壁部分を落とす段階である。ℓ４とした屋根の梁・桁材及び土屋根を人為的に崩落させ，住居の埋没を促進させている。ℓ４はさらに細分してℓ４ａ・ｂ・ｃに分けられる。ℓ４ａはにぶい黄褐色土を主体とした層で，土屋根の構成層であると考えられる。ℓ４ｂは炭化材を多量に含んだ黒褐色土層である。主に梁や桁材の炭化層である。層厚が８～18㎝を測る。住居内中央部においては，土屋根層のℓ４ａと炭化材層のℓ４ｂの互層となっている。ℓ４ｃは暗褐色土で周壁際に認められる層である。住居周壁の崩落土層であろう。

(第５段階)焼け残った屋根材や，屋根にふかれている土を落としても埋まりきらなかった部分にℓ２を投棄して，平坦地を造りだしている段階である。本住居焼失後も当地域をムラとして使用する目的以外にも本住居跡の祭式を完結するためにも必要であった行為なのであろうか。ℓ２は細分してℓ２ａ・ｂ・ｃに分けられる。ℓ２ａは暗褐色土と黄褐色土の混土，ℓ２ｂはにぶい黄褐色土と黄褐色土の混土，ℓ２ｃは暗褐色土と黄褐色土の混土である。いずれも人為的な堆積をしたものである。

(第６段階)第３段階で複式炉の周囲に打ち込んだ細い杭を目印として，埋没しきった住居の複式炉の石組部・前庭部に，それぞれ２本の太い杭を打ち込んでいる。前庭部に位置する２基はＰ12・13，石組部の２基はＰ14・15である。その痕跡が住居内堆積土・複式炉内堆積土のℓ１である。焼土粒・炭化物粒を含んだ暗褐色土であり，本住居跡検出面から140㎝以上の深さまで確認できる。本段階で強く打杭されたようで，土器埋設部の炉体土器の南半分がひしゃげ，石組部底面の敷石も破

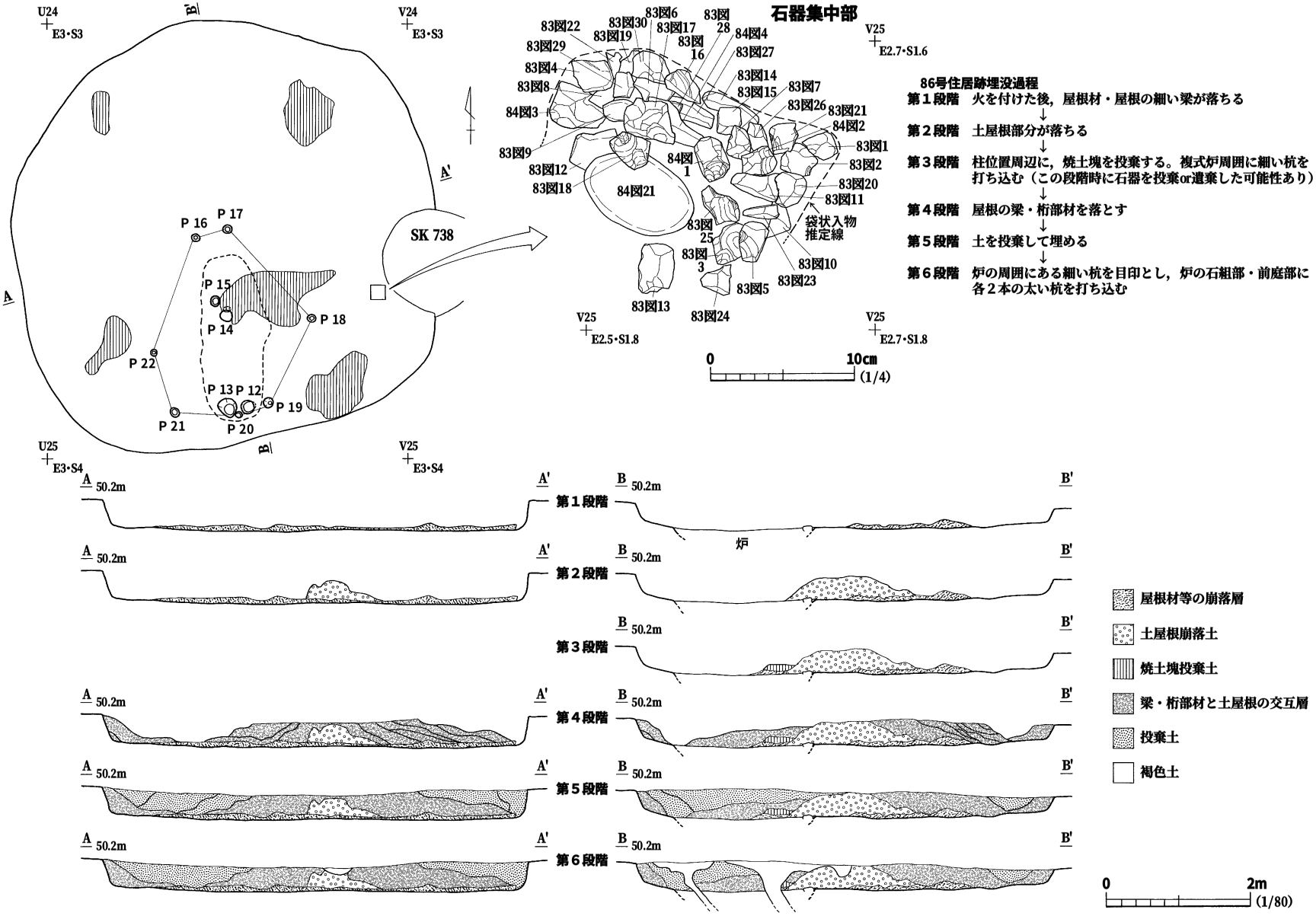


図78　86号住居跡埋没過程模式図

壊してさらに埋め込まれている。

以上が本住居跡の堆積土の状況より推察した埋没過程であるが，第６段階で行われた複式炉に杭を打ち込む行為は，今回報告する69号住居跡でも確認されている。

平面形・規模　円形というよりは，北壁中央がわずかに北に張り出す隅丸五角形に近い。長軸方向はＮ10 Ｗである。規模は南北長5.9m，東西長6.0mである。

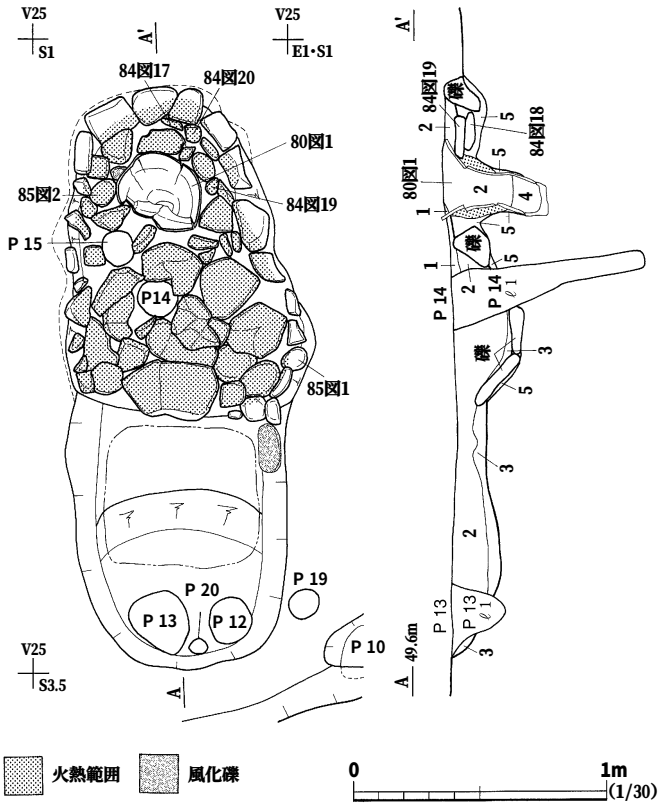
床面　基本土層のＬⅣ面を床面として用いている。床面全体は平坦に整えられている。遺存が良く本住居跡で生活していた痕跡である床面の踏み締まりが確認でき，図77では２点鎖線でその痕跡を示した。Ｐ３から北側の床面は緩やかに一段高く造られていた。この部分は本住居跡の長軸線上にあたり，ＬⅣを掘り残して半月形の祭壇状の施設が設けられている。

周壁　床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁は東壁の一部が738号土坑に壊されている以外は残りは良く，検出面から床面まで30～40㎝を測る。壁際床面には，部分的に壁柱穴が確認された。周溝は確認できなかった。

複式炉　床面の南側，Ｐ１とＰ５の中間に位置している。北側から土器埋設部・石組部・前庭部で構築され，いわゆるダルマ型の形態である。祭式に使用したかと推察される杭打ちの痕跡以外，遺存状況は良い。

(規模)複式炉の全長は2.5m，石組部の全長70㎝，前庭部1.2mを測る。最大幅は1.2mを測る。複式炉の軸線はほぼ真北方向を向いている。

(堆積土)複式炉内の堆積土は５層に分層でき，本住居跡が廃絶後に堆積した層，機能時に堆積した層，掘形堆積土の３つに大分できる。ℓ１～３は廃絶後の堆積である。ℓ１は暗褐色土で，住居内堆積土ℓ３に相当する。ℓ２はにぶい黄褐色土で，住居内堆積土ℓ４ａに相当する。ℓ３は炭化材を多量に含んだ暗褐色土であり，住居内堆積土ℓ６に相当する。複式炉機能時に堆積した層はℓ４のみである。土器埋設部使用時に堆積していった炭化物を多量に含んだ黒褐色土である。湿り気があり，粘質な土質である。掘形堆積土は



86号住居跡P13・14堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒多量含む)(住居跡堆積土ℓ１）

86号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と焼土粒の混土（黄褐色土粒少量含む)(住居跡堆積土ℓ３）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土塊多量，炭化物粒・焼土粒少量含む）
　(住居跡堆積土ℓ４ａ）
3　暗褐色土 10YR3/3（炭化材多量含む)(住居跡堆積土ℓ６）
4　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒多量含む）
5　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土塊少量含む）

図79　86号住居跡炉

ℓ５である。土器埋設部や石組部の掘形に認められた。

（土器埋設部）有底の深鉢形土器１個体を埋設している。埋設土器の南西には杭の痕跡であるＰ15が位置し，打設によって埋設土器がひしゃげてしまっている。埋設土器の周囲には15～25㎝の礫を二重に巡らし，埋設土器と礫の間には小礫を充填する。埋設土器の胴部上半は赤変し，強く火熱を受けた状況が確認できた。

（石組部）東西方向に長軸をもち，平面は楕円形，断面形は船底型を呈す。床面から石組部底面までは40㎝を測る。石組部の北壁は約55°，南壁は約40°で立ち上がる。石組部の壁面・底面には大型の礫を用い，外側には小型の礫を配している。石組部の底面・壁面は大きく火熱を受け，もろい礫が多い。石組部底面の一部は住居廃絶後，Ｐ14の打ち込み杭により使用時の原位置を保っていない礫もある。

（前庭部）平面形は長方形を呈する。底面は緩やかに湾曲しながら立ち上がり壁面となる。深さは石組部に向かって次第に浅くなる。前庭部底面には，複式炉使用時に踏み固められた痕跡が確認できた。図中に２点鎖線で示している。前庭部南端にはＰ12・13を確認した。当初，２対で上屋構造を支える柱痕か，屋外との出入りを自由にする梯子を設置していたピットと判断していたが，前述のように，祭式に際し打杭された痕跡であり，前庭部床面から10㎝程深く打たれている。Ｐ12・13の堆積土は暗褐色土の同一層であり，住居内堆積土ℓ１に相当する。

主柱穴　主柱穴はＰ１～５の５個である。大きな掘形をもち，掘形堆積土を版築して柱を立てている。検出時点で柱痕が抜き取られている状態の主柱穴もあった。５個の主柱穴は複式炉を中心として整然と配列されている。柱痕における芯々間の距離はＰ１－Ｐ２間は2.2m，Ｐ２－Ｐ３間は２m，Ｐ３－Ｐ４間は2.2m，Ｐ４－Ｐ５間は２m，Ｐ５－Ｐ１間は3.5mを測る。Ｐ１とＰ５を結んだ線は複式炉の石組部上を通る。５個の柱穴の規模は長径60～80㎝，短径50～60㎝，深さ27～48㎝を測る。

柱穴内の堆積土は大別して柱痕層と版築層の２つに分層できる。各主柱穴の掘形堆積土は版築が施され，丁寧に構築されているという印象を受けた。Ｐ１の堆積土ℓ１は柱痕抜き取り痕層であり，５㎝大の炭化材を多量に含んだ褐色土，ℓ２は黄褐色土塊を多量に含んだ暗褐色土である。第３段階時に柱を抜き取られ，住居内堆積土ℓ５などが混入した土層の可能性がある。ℓ３・４は版築層である。Ｐ２の遺構内堆積土は６層に分層できた。ℓ１～３は柱痕抜き取り層である。ℓ４～６は掘形内堆積土の版築層である。Ｐ３の遺構内堆積土は３層に分層した。ℓ１は炭化材を多量に含んだ暗褐色土で柱痕層である。ℓ２・３は掘形内堆積土で版築層である。Ｐ４は７層に分層できた。ℓ１は５㎝大の炭化材を多量に含んだ暗褐色土で，柱痕層である。ℓ２～７は掘形内堆積土で暗褐色土・黒褐色土と褐色土の互層になっている。固く締まる版築層である。Ｐ５は４層に分層できる。ℓ１は炭化物を多量に含んだ暗褐色土で，柱痕抜き取り痕層である。ℓ２～４は掘形堆積土であり，版築層である。

ピット　主柱穴の他に本住居跡にともなう施設としてＰ６～11が検出された。住居床面東半分の壁

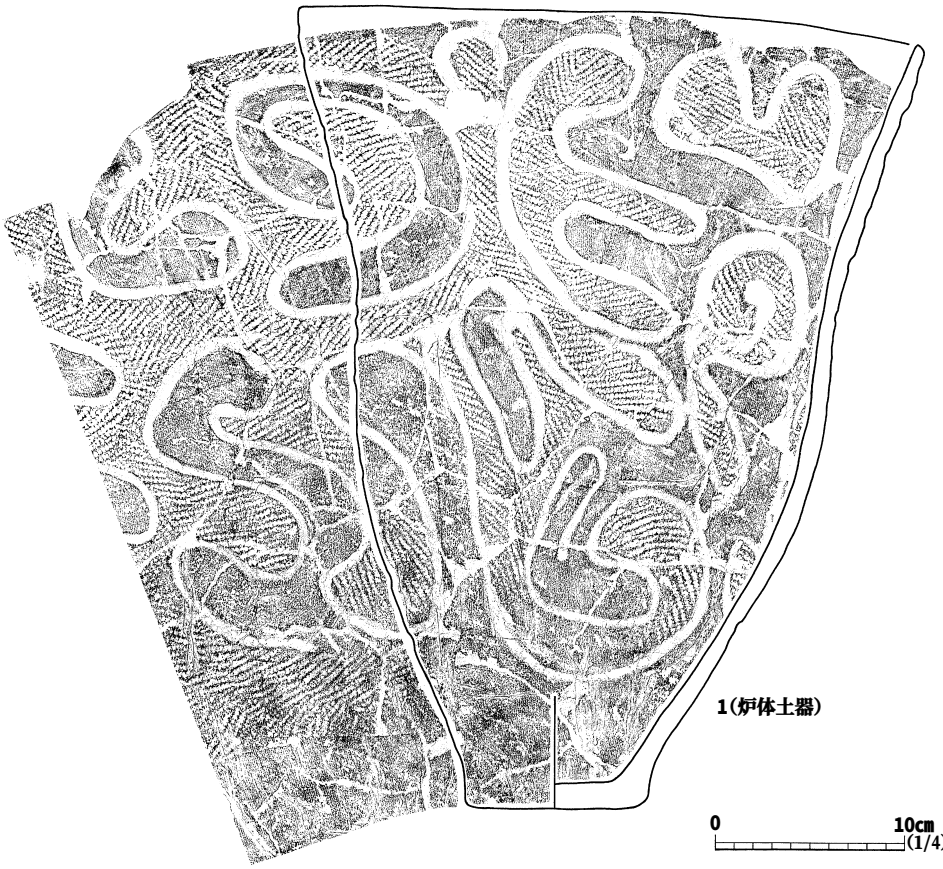
際に巡る。平面形はすべて楕円形である。住居跡北側に位置するＰ６の規模は，長径33㎝，短径14㎝，床面から底面までの深さは29㎝を測る。

また，本住居廃棄時に打設した杭の痕跡としてＰ12～22を検出した。このうち，複式炉内に認められるものはＰ12～15・20である。前庭部南端のＰ12・13内には，住居内堆積土ℓ１と同層の暗褐色土が堆積し，石組部のＰ14・15内にも住居内堆積土ℓ１が堆積している。複式炉の周囲からはＰ16～19・21・22を検出した。土器埋設部北側約30㎝にＰ16・17，石組部とＰ１・５間のほぼ中央にＰ18・22，前庭部を挟んで東西にＰ19・21，Ｐ12・13の間にＰ20が位置する。複式炉を囲むように位置するこれらのピットは第３段階において打設され，おそらく祭式の目印として作用したものと推測している。いずれも直径10㎝前後の円形で，堆積土は暗褐色土である。

遺物出土状況　床面上からは多数の遺物が出土している。各主柱穴の周囲から多く出土する傾向がある。Ｐ１の東側では，34点の剝片・石核と１点の磨石からなる石製遺物集中部が確認された。これらは小形敲石を中心にして，南北15㎝，東西20㎝程の範囲に集中していた。これらは床面より１～２㎝程遊離した状態で出土している。石製遺物は，その出土状況から袋状の入れ物に納められていたと推察されるが，入れ物の痕跡は確認できなかった。おそらく埋没過程で入れ物は炭化・土壌化したものと推察され，石製遺物が床面からわずかに遊離して検出されたのもこのためではないかと推測している。Ｐ２周囲の床面上からは磨石類が多く出土している。Ｐ３周囲からは縄文土器の出土が多く，５個体が床面に置かれている状態で出土した。しかし，いずれも完形品ではないことから，本住居使用時に用いられていた土器ではなく，住居の廃棄にともなって遺棄された遺物であると推測できる。Ｐ４北側の床面からは小形磨製石斧(84図10)・石匙(84図５)が近接して出土している。石製遺物集中部の出土状況と類似している。Ｐ７の西側高まり上には長さ40㎝，幅12㎝の石棒が壁面に立て掛けられた状態で出土している。またＰ１の堆積土中から打製石斧が２点，Ｐ５の堆積土中から小形磨製石斧２点と剝片１点が出土している。

遺物　本遺構の出土遺物は床面出土及びℓ６直上などから多数出土している。縄文土器片が114点，石器片が115点出土している。80図１は炉体土器である。底部から口縁部にかけてラッパ状に広がる深鉢形土器である。体部中位でくびれている。外面には，Ｓ・Ｕ・Ｃ字状のアルファベットに近い文様が沈線によって区画され，その内外面に斜縄文が施文されている。81図１はＰ３周辺の床面から出土した壺形土器である。底部から体部中程にかけて大きく外湾し膨らみをもつ。体部から頸部にかけてくびれ，口縁部に向かって外形する器形である。文様はワラビ手状にミガキによって作られた隆線により描かれ，体部を区画している。体部下半には斜縄文が施されている。同図２～４，82図１～３は深鉢形土器である。いずれも床面出土である。沈線によりアルファベットに近い文様を描き出し，区画線内を斜縄文で充填している。４には沈線文にそって点列が見られる。

83図１～30・84図１～４・21は，Ｐ１東側の石製遺物集中部から出土したものである。利用石材別では珪質頁岩製１点(83図１)，鉄石英製14点(83図２～４・８・13～19，84図１～３)，チャート製６点(83図５・６・９・20～22)，流紋岩製13点(83図７・10～12・23～30，84図４)，アプライト製１点



1の展開図　(1/6)

図80　86号住居跡出土遺物(1)

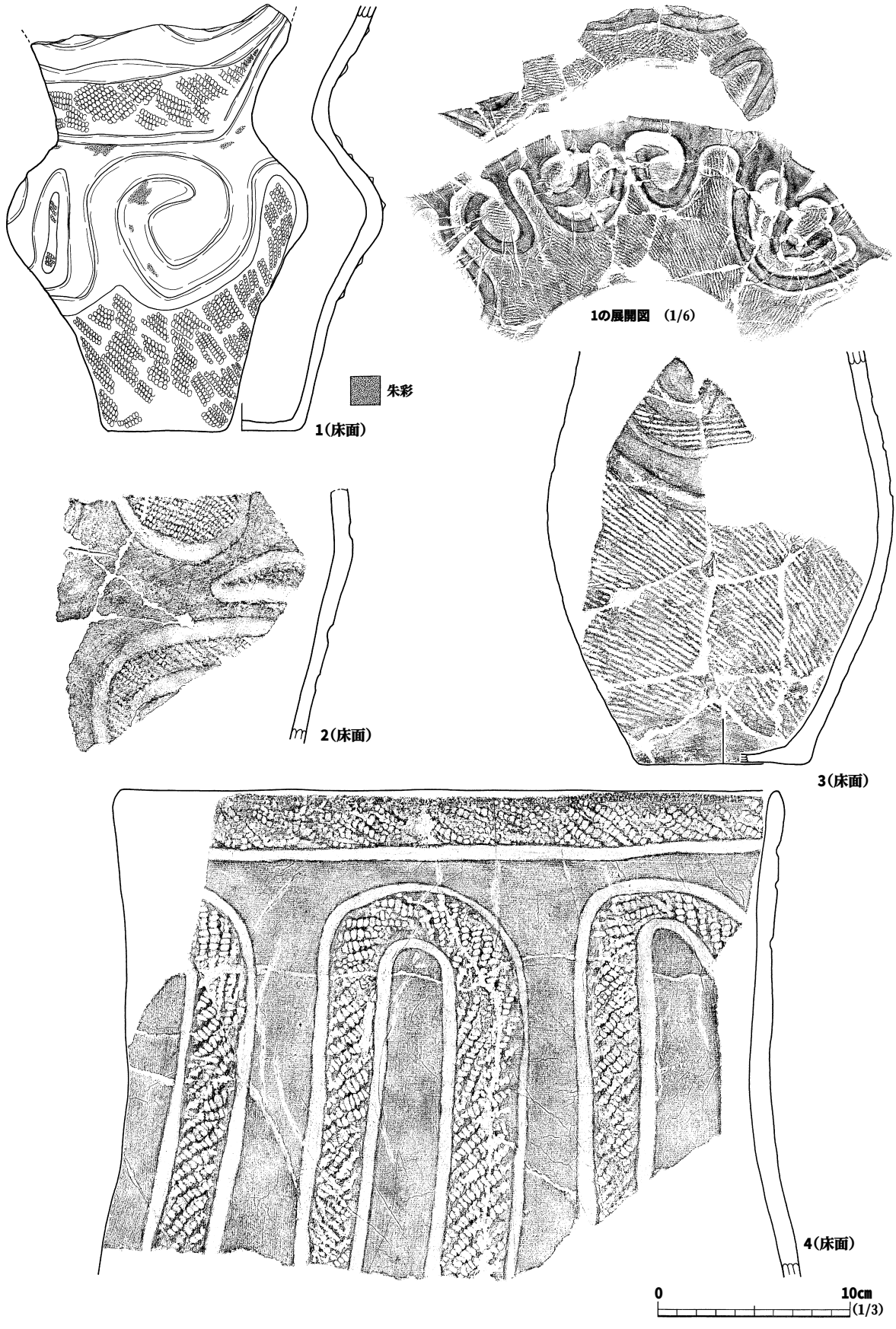


図81　86号住居跡出土遺物(2)

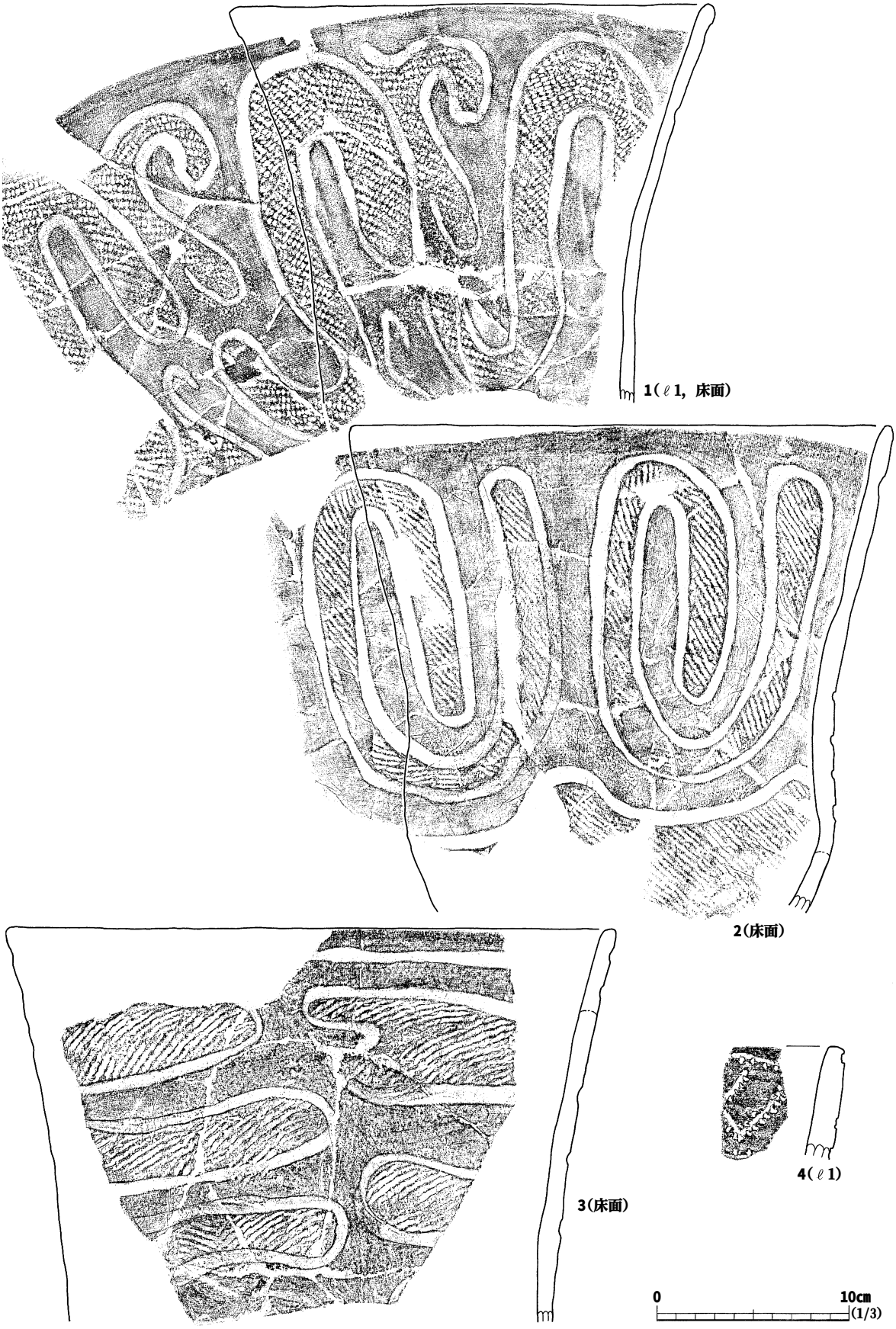


図82　86号住居跡出土遺物(3)

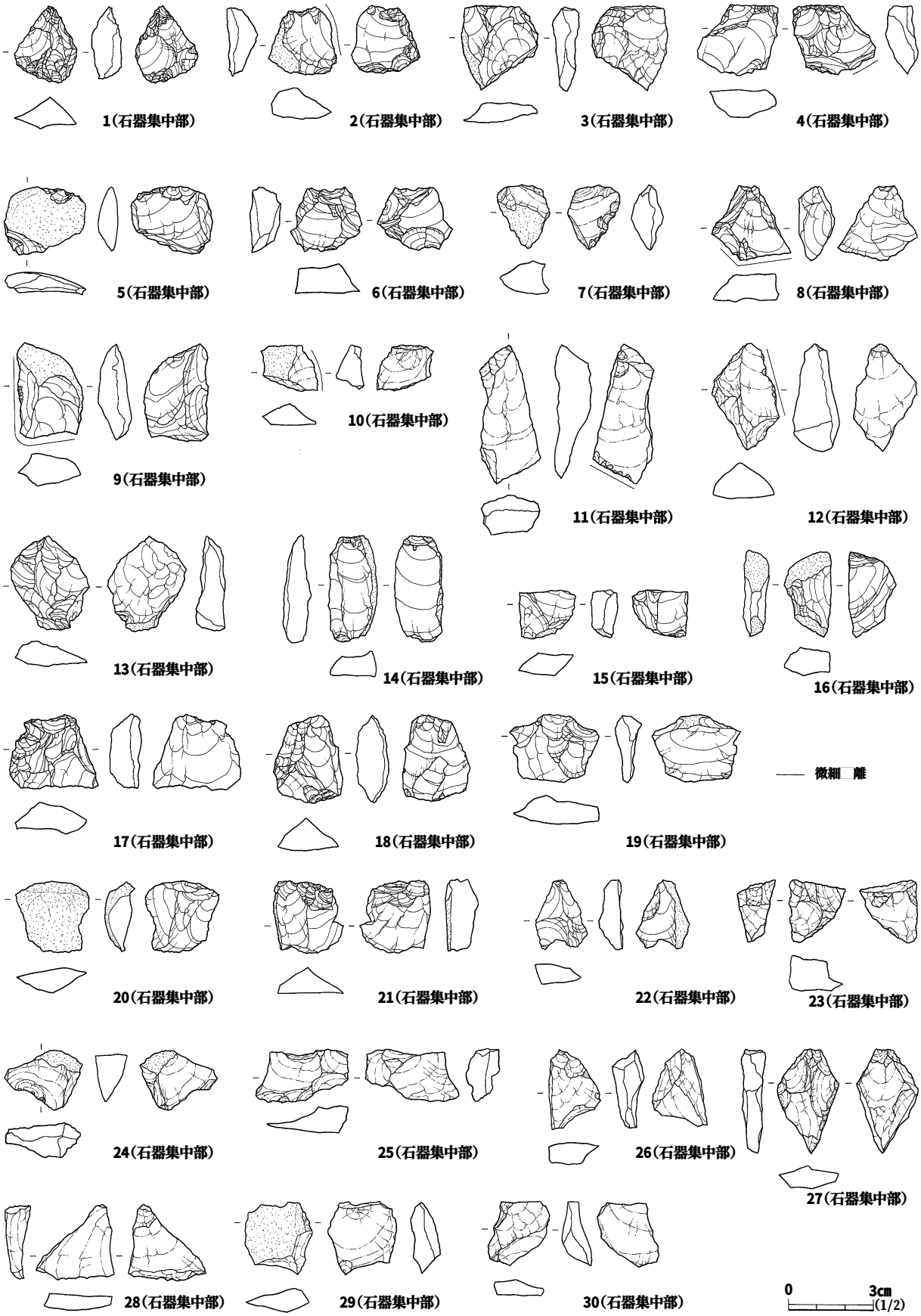


図83　86号住居跡出土遺物(4)

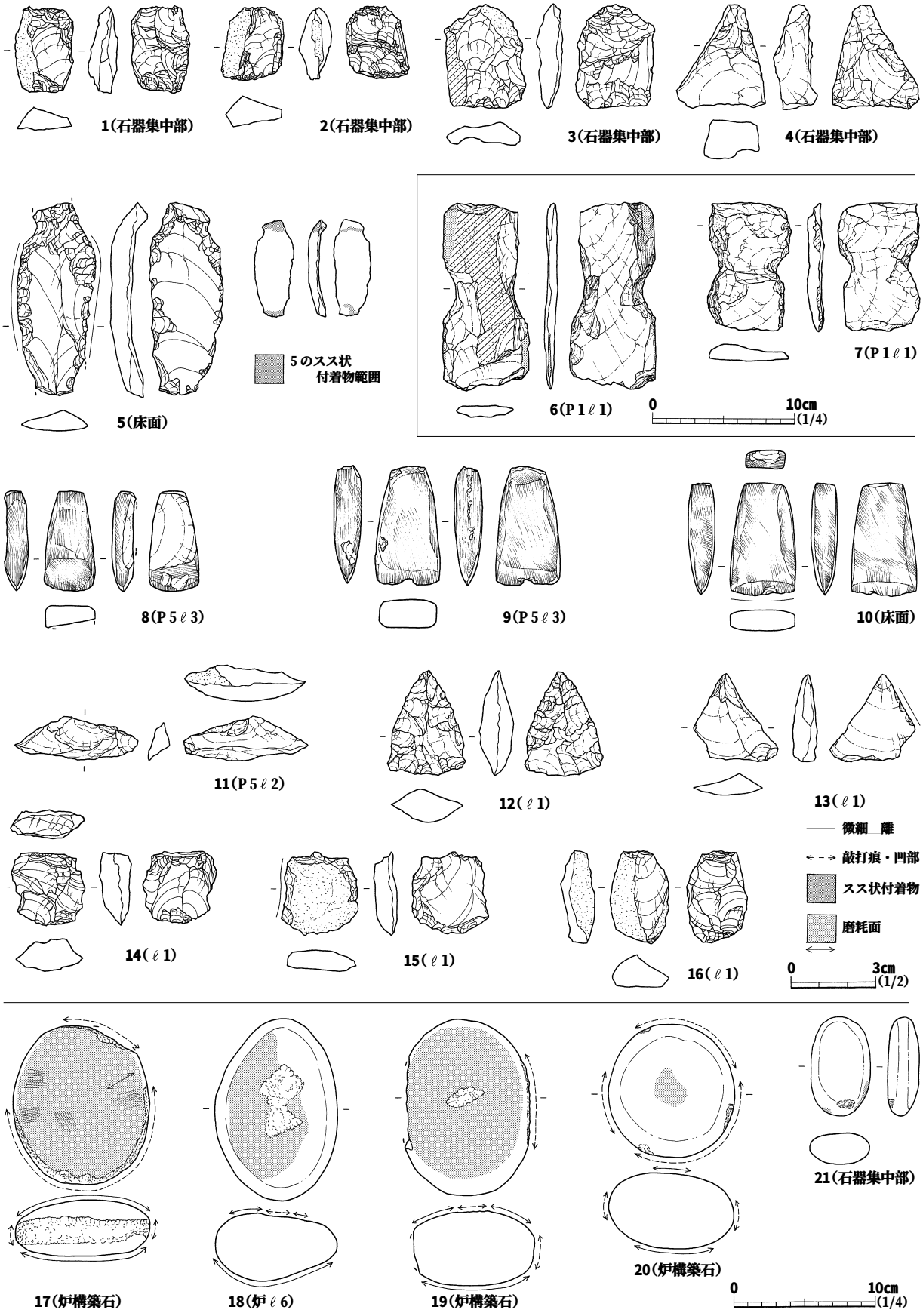
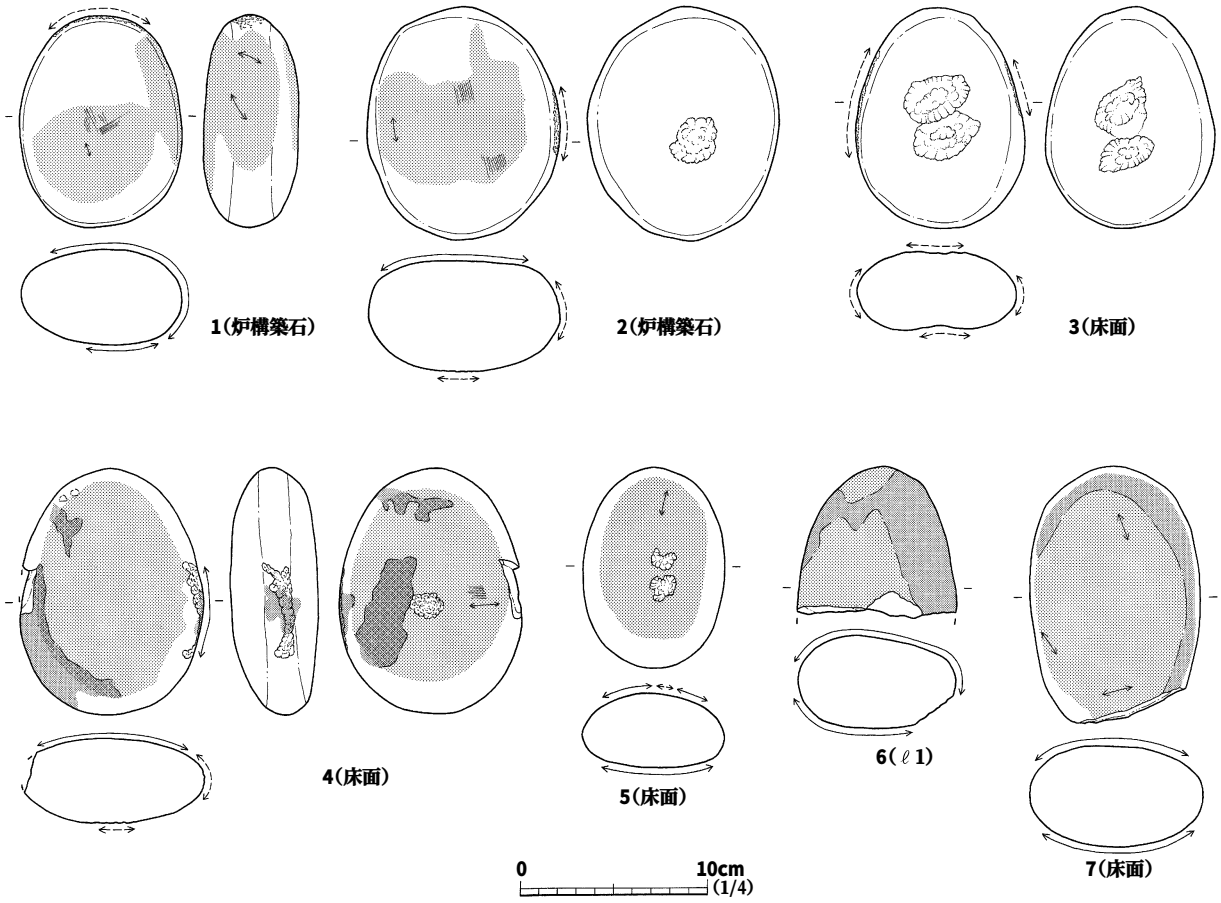


図84　86号住居跡出土遺物(5)



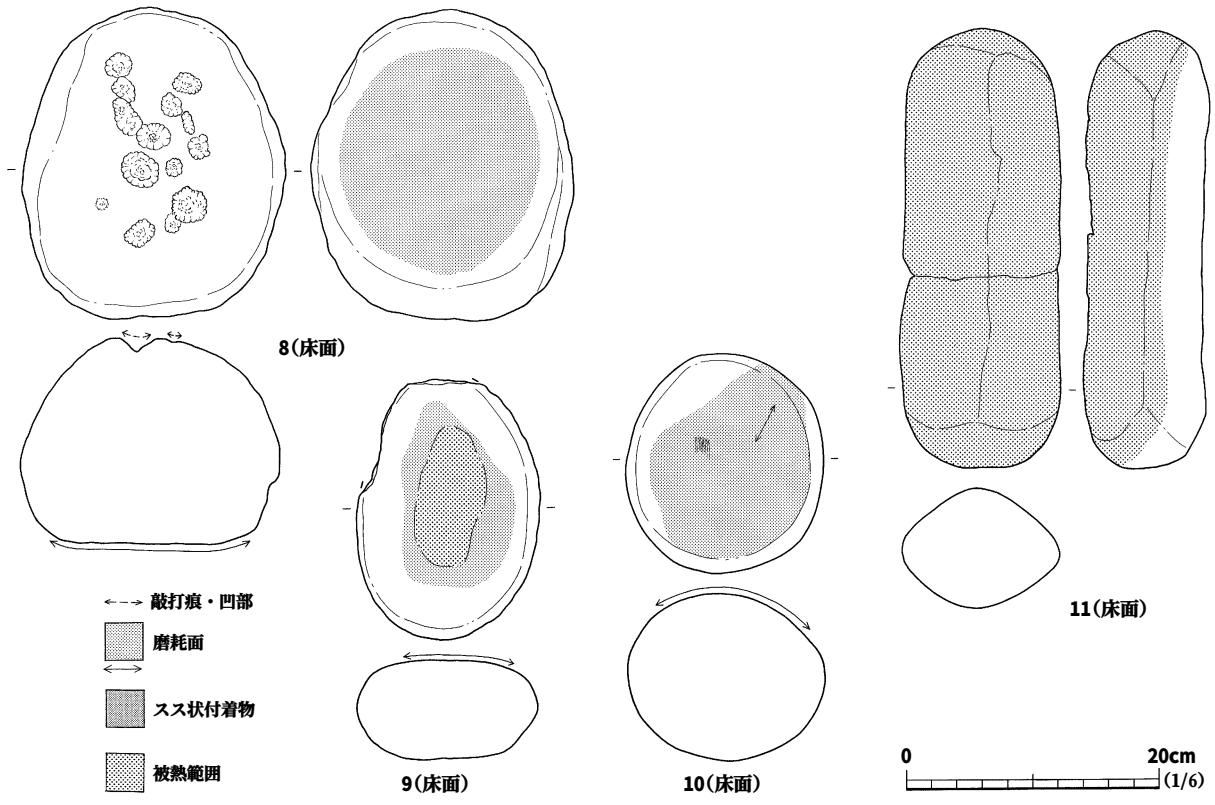


図85　86号住居跡出土遺物(6)

(84図21)である。同じ石質のなかで母岩分類を試みたが，接合資料や同一母岩を見いだすことはできなかった。石製遺物の組成別では，石鏃未製品１点(83図１)，二次加工のある剝片６点(83図２～７)，微細剝離のある剝片５点(83図８～12)，剝片18点(83図13～30)，楔形石核もしくは楔形石器４点(84図１～４)となり，ほとんどが剝片類であることがわかる。これらは最大長・幅が５～10㎝程度の大きさのものが大半である。剝片類の縁辺部は折断面であることが多く，これらを素材として石鏃など薄身の石器に仕上げることは難しいものと推察される。

84図５は珪質頁岩製の縦形石匙である。縦長剝片を素材とし，剝片末端部に基部加工を施し，つまみ部を作り出している。側面観が弓形に湾曲している。背面側の両側縁には微細剝離痕が観察され，先端部とつまみ部にスス状の付着物が観察された。この付着物は，腹面上端部の折れ面や腹面左側縁末端の剝離痕には認められない。このことから付着物は，石匙が機能していた段階もしくは製作段階で熱を受けて付着したものと推察される。84図６・７は粘板岩製の打製石斧である。板状剝片を素材とし，中央部にえぐりを作り出している。刃部にあたる下側縁は，未加工のまま残されている。６の背面右側縁下端部・背面左側縁上端部・腹面右側縁上端部には，光沢を帯びた磨耗痕が認められ，縁辺は角がとれて丸みを帯びる。84図８～10は小形の磨製石斧である。８は黒色頁岩製で，裏面側は大半が欠損している。器面にはやや粗い研磨痕が観察される。９・10は蛇紋岩製で刃縁には線状痕や刃こぼれが観察された。９の裏面側の刃縁右端部は，光沢を帯びた磨耗痕が観察された。84図11はＰ５から出土した流紋岩製の剝片である。末端部は折損している。84図12は流紋岩製の石鏃である。器体が厚く，調整加工が粗雑であることから未製品であると考えられる。84図13は流紋岩製の微細剝離のある剝片である。84図15は鉄石英製の二次加工のある剝片で，縁辺部のほぼ全周に刃潰し状の加工が認められた。背面左側縁には微細剝離が観察された。84図14・16は鉄石英製の楔形の石核である。両極打法によって生じたものと推察される。

84図17～20，85図１～２は土器埋設部の縁石や石組部構築材として再利用されていた磨石類である。器面には磨耗痕や敲打痕が認められた。84図21は石製遺物集中部出土の磨石類で，下端部に敲打痕が認められた。85図３～７は床面出土の磨石類である。すべて表裏両面に使用の痕跡が認められた。85図８は花崗岩製の多孔石である。表面側には大小14カ所の凹部が，裏面側は平滑な磨耗面が認められた。85図９は斑状の流紋岩製の石皿である。表面中央には光沢を帯びた磨耗面が認められ，部分的に被熱の痕跡が観察された。85図10は花崗岩の円礫を素材とした大形の磨石類である。球状を呈しているため，石皿のように据え置くことはできない。表面には部分的に光沢を帯びた磨耗痕が観察された。85図11は本住居跡北壁に立て掛けられていた石棒である。ひん岩製棒状礫を素材としている。敲打痕などの加工痕跡は認められないことから，自然礫のまま利用したものと考えられる。表面側は部分的に剝落し，放射状のひび割れが認められることから，強い熱を受けたものと推察される。

まとめ　定型化した複式炉と５本の主柱穴を有する竪穴住居跡である。複式炉の軸線はほぼ真北方向で，延長線上の北壁際には祭壇状の微高域がある。遺構内堆積土からは，炭化材や焼土粒が多量

に出土することから焼失住居であると判断した。堆積状況より本遺構の埋没過程を推測し，本住居跡は土屋根が葺かれていたこと，住居の廃絶に関して何らかの祭式を行ったことなどが考えられた。土屋根崩落土と判断したℓ５及びℓ４ａ～４ｃの互層は土屋根ふきの根拠となろう。Ｐ12～22は，住居廃絶にともなうと推察される祭式時の打杭の痕跡である。

本住居跡の埋没過程は，焼失住居の検討や住居廃絶に際しての祭式を考える上で一つの示唆を与えるものである。本遺跡では本住居跡の他に69号住居跡でも同様の行為が行われていた可能性が推定され，多くの住居跡の最終埋没土が，人為的な投棄土である可能性も指摘されている。

この他，複式炉は丁寧に敷石され，前庭部の底面には踏み締まりによる硬化範囲が確認できる。また，主柱穴と判断した５個のピットは規則的に配置され，強い規格性がうかがえる。床面の主柱穴の周辺から土器・石器が出土しているが，本住居跡使用時に用いられていた遺物ではなく，本住居廃棄にともなって置かれた遺物であろう。本遺構が廃絶した時期は埋設土器及び床面出土遺物より縄文時代中期末葉である。　（三　浦）

89 号 住 居 跡　ＳＩ89 （図86，写真45・46・353）

位置・検出面　北区北部の平坦面，Ｓ・Ｔ25・26グリッドに位置する竪穴住居跡である。本遺構は，撹乱により住居跡の北側と東側の一部が壊されている。また，住居跡は堆積土が薄く，周壁がわずかに確認されたに過ぎず，遺存状態が悪い。本遺構の東側には，本遺構と同様の平面形を示す84・85号住居跡が近接する。また，周辺には多くの土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面である。

重複　４号建物跡Ｐ５，570・863・864・1298・1299号土坑，Ｓ26グリッドＰ９，Ｔ26グリッドＰ１・２・５～７と重複し，５基の土坑よりは新しく，他の遺構よりは古い。

堆積土　ℓ１は，住居跡全体に認められる堆積土であり，炭化物粒や焼土粒が含まれるものの，層厚が10㎝前後と薄いことから，自然堆積土か人為堆積土の判断はできなかった。ℓ２は床面下に部分的に認められることから貼床土と考えている。

平面形・規模　正方形を呈するものと推測され，長軸方向はＮ５゜Ｗである。規模は長辺4.5m，短辺4.43mを測る。

床面　基本土層ＬⅣと貼床に形成され，小さな凹凸が認められるもののおおむね平坦である。また，床面の周壁付近を除く範囲には踏み締まりが認められる。

周壁　床面から47～60゜の急な角度で立ち上がり，遺存壁高は７～９㎝を測る。撹乱により住居跡の北側と東側の一部が壊されている。

カマド　東壁中央部は撹乱により壊され，ここからは多量の焼土粒が認められる。このため，カマドは本来この位置に取り付いていたものと推察される。

主柱穴　主柱穴は，南壁と南西壁際に位置するＰ２・３と考えている。規模は，Ｐ２が長径67㎝，短径58㎝，Ｐ３が長径37㎝，短径33㎝を測る。この配列から柱穴を推定すると，北西端の黒褐色土を呈する570号土坑内と北側撹乱内に，柱穴が存在した可能性が高い。

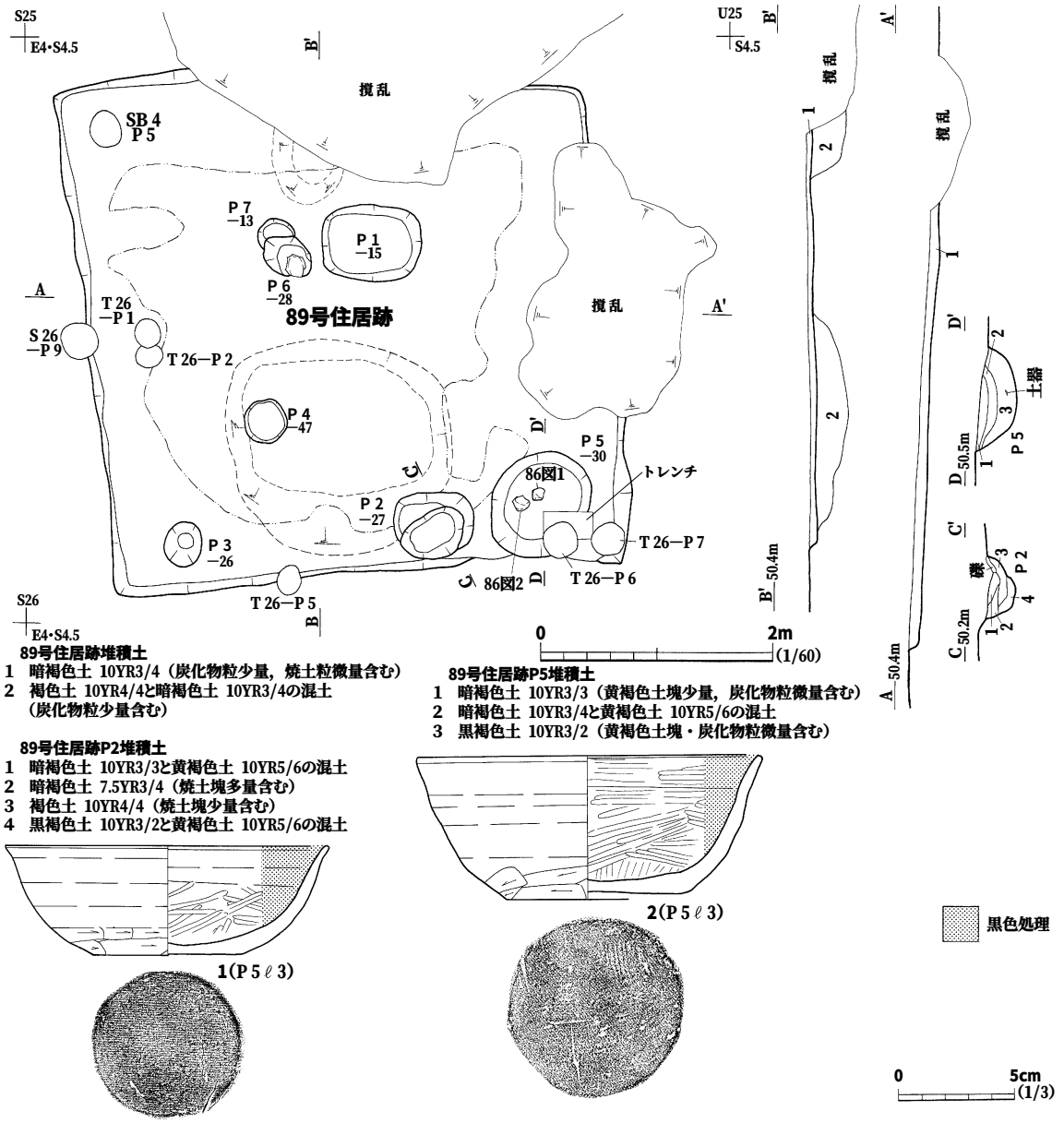


図86　89号住居跡と出土遺物

ピット　Ｐ１・４～７の５個を確認した。いずれも平面形が円形あるいは楕円形を呈する。Ｐ５は南壁際，Ｐ１・４・６・７は住居跡中央部付近に位置する。規模は，Ｐ１が長径84㎝，短径68㎝，Ｐ４・６・７が径30～46㎝を測り，性格は不明である。Ｐ６の底面からは根石と推察される平石が出土している。Ｐ５は他のものに比べて規模が大きく，カマド際に位置することから貯蔵穴と考えられ，規模は長径94㎝，短径80㎝を測る。

遺物出土状況　堆積土中から縄文土器片15点，土師器片127点，石器２点出土した。土師器の多くはℓ１から出土している。Ｐ５のℓ３内からは土師器杯２点が正位の状態で出土している。この２点を図示した。

遺物　86図１・２に示した。１・２は土師器杯で，底面から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる器形を呈するが，１の口端付近は外反する。器面調整は，内面にヘラミガキ後に黒色処理，外面に

は底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリが施されている。このため，１の底部切り離しは不明であるが，２では静止糸切り痕がわずかに観察される。

まとめ　本遺構は，本遺跡で確認された平安時代の住居跡の中では比較的大きめのものである。カマドや周壁の一部が撹乱により壊されているため，遺存状態が悪い。出土遺物が少なく時期を決定できる資料が乏しいため，正確な時期は不明であるが，出土遺物の特徴から判断した所属時期は９世紀後半と考えている。　（国　井）

90 号 住 居 跡　ＳＩ90 （図87・88，写真47・48・353）

位置・検出面　北区北西部の平坦面に存在し，Ｊ・K27・28グリッドに位置する。LIV上面において，南北主軸の複式炉の落ち込みと，ピット・周溝を検出した。遺構西部の一部は調査区外に存在する。

重複　623・625・626・801号土坑より新しく，803号土坑より古い。

堆積土　確認できなかった。

平面形・規模　検出した部分の周溝から，径5.4mの円形と推測される。

床面　緩く東へ下降している。踏み締まりは確認できない。周溝の内側で径5.2mを測る。

周壁　確認できなかった。

周溝　遺構北西部及び前庭部南西付近に残存する。最大幅は27㎝を測り，床面からの深さは最大18㎝を測る。壁は直立し，底面は起伏があり不整である。

複式炉　遺構南部に存在し，土器埋設部の状況から新旧２時期ある。新期の炉をａ炉，旧期の炉をｂ炉とした。

ａ炉　北から土器埋設部・石組部・前庭部の順に配されている。

(規模)全長2.2m，最大幅94㎝を測り，主軸方位はほぼ南北である。

(堆積土)６層に分かれ，ℓ１・４は炉廃絶時の人為堆積土，ℓ２・５は炉使用時の黒色系の土，ℓ６は掘形堆積土である。

(土器埋設部)径45㎝，深さ約20㎝の掘形内に深鉢形土器を正位に埋設している。土器の周囲は焼土化しているが，縁石はみられない。

(石組部)平面形は東西主軸の長方形基調で，全体の形状は擂鉢状を呈する。壁には，平坦面が内側になるように礫を斜めに立て掛け，底面には小型の礫を平坦面を上向きに敷き詰めている。これらの礫には被熱してもろくなっているものが多く見受けられる。壁に立て掛けられた礫は，土器埋設部に近くになるにつれて大型になり，土器埋設部側の礫は43×40×20㎝と大型である。また，東西には縁辺に配された小型礫が部分的に残存している。

(前庭部)平面形は南に広がる台形を呈し，規模は南北長1.2m，東西長80～94㎝，深さ18㎝を測る。底面はほぼ平坦で，中央部から25×12×10㎝の礫が出土した。

ｂ炉　北から土器埋設部・石組部・前庭部の順に配され，石組部と前庭部はａ炉と共通するか，ａ

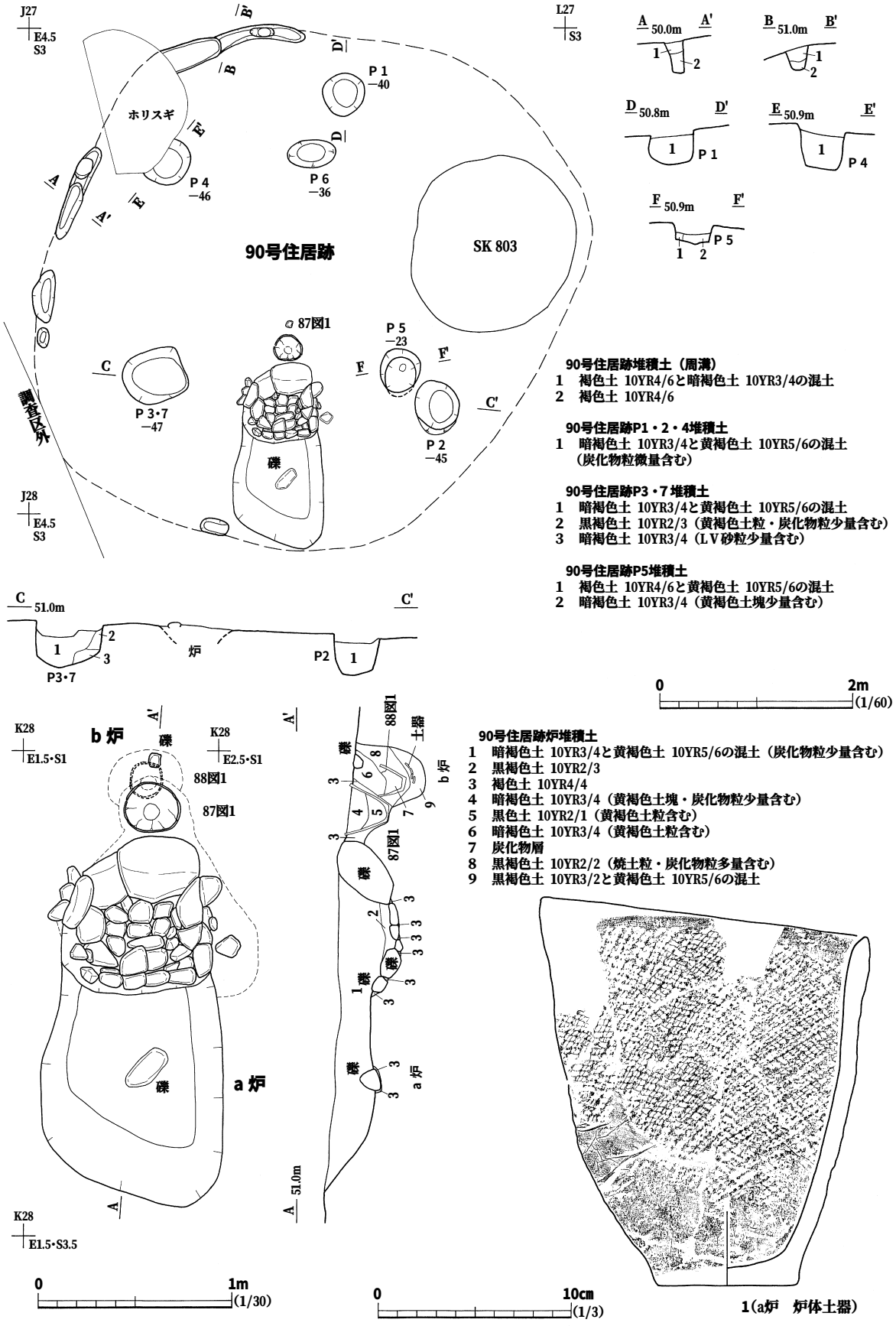


図87　90号住居跡と出土遺物

炉構築時に破壊されたものと思われる。

（規模）主軸方位はａ炉と同じく，全長はａ炉より若干長いものと推測される。

（堆積土）３層に分かれ，土器内のℓ７は炭化物層，ℓ８・９は掘形堆積土である。

（土器埋設部）深さ30㎝の掘形内に深鉢形土器を正位に埋設していたと推測されるが，土器の上部はａ炉の土器埋設の際に壊されている。

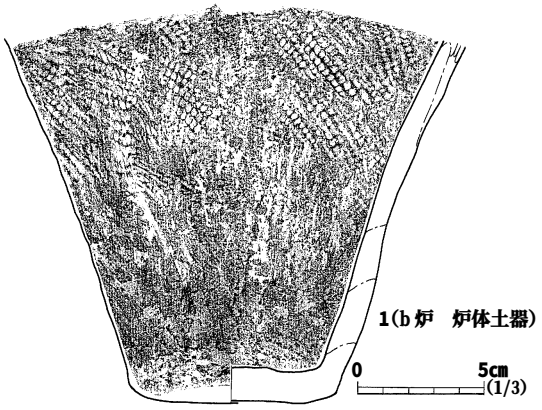


図88　90号住居跡ｂ炉出土遺物

主柱穴　複式炉土器埋設部の土器との位置関係や柱穴内堆積土を検討した結果，ａ炉に対応するのはＰ１・３～５，ｂ炉に対応するのはＰ２・６・７と判断した。Ｐ１・３～５は長径44～48㎝，深さ23～49㎝の円筒形で，堆積土は暗褐色を基調とし，４基とも柱は抜き取られ，埋め戻されている。Ｐ２・６・７は平面形が長径(軸)55～66㎝の楕円形ないしは隅丸長方形を呈し，深さは38～44㎝を測る。堆積土は４層に分かれるが，暗褐色を基調とし，人為堆積と推測する。

遺物出土状況　炉土器埋設部から新旧２個体の深鉢形土器が正立して出土し，炉内堆積土から縄文土器片が52点出土している。

遺物　87図１はａ炉に埋設されていた深鉢形土器である。胴部下半は内湾気味に立ち上がり，胴部上半は直線的に外傾して立ち上がっている。ほぼ全面にＲＬＲ原体を縦位回転した縄文が施されている。88図１はｂ炉に埋設されていた深鉢形土器の下半部である。底部から直線的に立ち上がり，外面には底部付近を除いてＬＲ原体を縦位回転した縄文が施されている。

まとめ　周壁の残りが悪いが，複式炉をもつ竪穴住居跡と推測される。住居建て替えに当たり，土器埋設部を造り替え，柱配置を３本主柱から４本主柱に変化させている。遺構の時期は，炉体土器及び複式炉の形態等から，縄文時代中期末葉の大木10式期と推測される。　（能登谷）

91 号 住 居 跡　ＳＩ91 （図89・90，写真49・50・353）

位置・検出面　北区北東部の平坦面，Ｖ・W28・29グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北西側には154号住居跡，1365・1380・1494・1495号土坑があり，西側には1379号土坑が隣接している。検出面は基本土層ＬⅣ上面であり，暗褐色系の土で埋まった直径５ｍ程の不整円形の範囲を検出した。

重複　本住居跡は，29ａ・30号柱列跡，1543・1544号土坑と重複している。29ａ・30号柱列跡よりも古いが，1543・1544号土坑は，床面より検出されたため，本住居跡の方が新しい。

堆積土　遺構内堆積土は７層に分かれる。このうちℓ６は壁体と推察される周溝内の堆積土であり，その他は，基本土層のＬⅢに類似した褐色系の土を基調とした流入土と判断されるため，自然堆積土と考えられる。

平面形・規模　平面形は，円形に近い不整な隅丸方形を呈する。長軸はN25 ℃Wであり，その規模は，現状の壁上端で長軸の南北長約4.5m，短軸の東西長約4.3mである。

床面　基本土層のＬⅣ及び，部分的に下位の遺構内堆積土上面に形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。複式炉の周辺から北壁にかけての広い範囲が硬く締まっていた。

周壁　床面から75～85 ℃の急な角度で立ち上がり，遺存壁高は10～28㎝を測る。

周溝　周壁に沿ってほぼ一巡しているが，北西側の周溝は一部途切れ，溝末端部がずれている。また，この部分のみ北壁から最大20㎝程内側を巡っている。溝の上端幅は12～32㎝，床面からの深さは14～26㎝を計測する。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ２とＰ３のほぼ中間に構築されている。遺存状態は，石組部の東側が，29ａ号柱列跡のＰ６に壊されている。北側から，円形状の土器埋設部に楕円形の石組部が続く形態を呈している。前庭部に相当する部分は，構築されておらず，確認できなかった。

(規模)遺存する規模は土器埋設部の北側先端部分から石組部の末端まで長さ約130㎝，最大幅が石組部において85㎝を測り，炉中軸線はN10 ℃Wである。

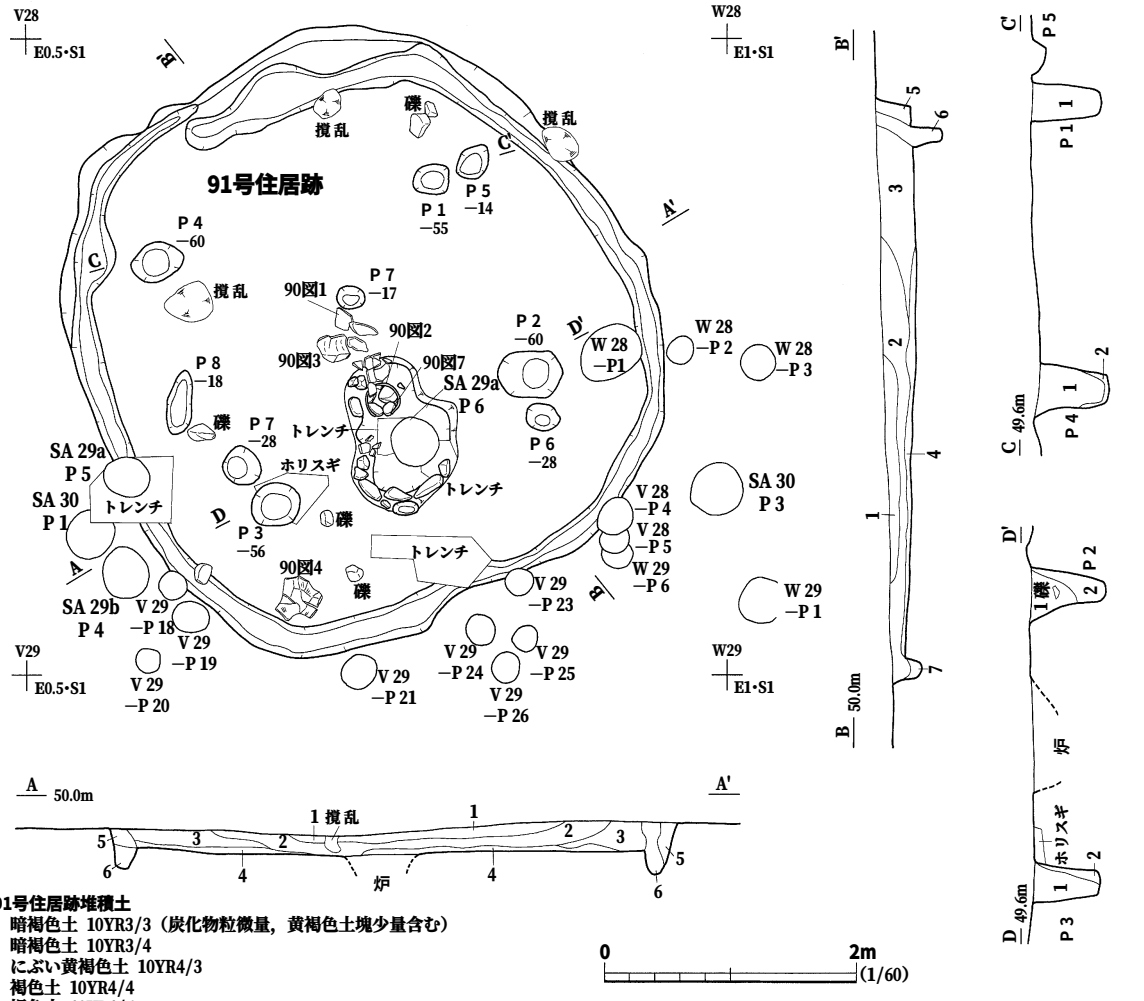
(堆積土)堆積土は９層に分けられ，層中に土器片や小礫，炭化物粒，焼土粒が撹乱された状態で含まれていることから，全て人為堆積土と考えられる。また，ℓ９は掘形堆積土である。

(土器埋設部)口径25㎝の炉体土器の周囲に，長さ10～20㎝の直方体状の礫や角礫を敷き並べて縁石としているが，これが確認できたのは，西側の一部のみであり，東側は，浅いくぼみとして確認できた。底面は偏平な礫を敷き並べており，その上位に底部のない炉体土器を設置している。掘形の東西方向の長さは約60㎝であり，底面からの深さは25㎝を測る。炉体土器の周囲２㎝程がやや焼土化している。

(石組部)石組部の最大幅は85㎝，南北方向の長さは75㎝を測る。石組部の底面から東壁にかけては礫は確認できず，西壁にのみ長さ10～30㎝の直方体状の礫で外傾する側壁が認められた。これは，廃棄後に抜き取られた可能性が高いと判断している。遺存していた礫は花崗岩質のものが多く，表面に強い火熱を受けてもろくなったものが多少確認された。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。Ｐ１は北壁際，Ｐ２・３は複式炉を挟んで東西に位置し，Ｐ４は北西壁際に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.7m，Ｐ２－Ｐ３間が2.3m，Ｐ３－Ｐ４間が2.2m，Ｐ４－Ｐ１間が2.3mの台形の配置となっている。現状の平面形は不整な楕円形もしくは円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が南北24㎝，東西28㎝，深さ55㎝，Ｐ２が南北36㎝，東西50㎝，深さ60㎝，Ｐ３が南北36㎝，東西38㎝，深さ56㎝，Ｐ４が南北34㎝，東西42㎝，深さ57㎝を計測した。柱穴内堆積土は，暗褐色系の土に炭化物粒や黄褐色土粒が流入した自然堆積土である。Ｐ４は，1543号土坑の暗褐色系の堆積土内に掘られており，底部には厚さ３～４㎝の明黄褐色の粘土が硬く貼られていた。

ピット　主柱穴の他に，やや小さいピットが５個確認できた。Ｐ５はＰ１の東側に，Ｐ６はＰ２の南側，Ｐ７はＰ３の北西側に位置している。いずれも支柱穴と推測している。Ｐ８は長軸50㎝，短



91号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量，黄褐色土塊少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3
4　褐色土 10YR4/4
5　褐色土 10YR4/6
6　暗褐色土 10YR3/3（壁体）
7　暗褐色土 10YR3/3（黒褐色土塊少量含む）

91号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）

91号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6

91号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6

91号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6

91号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
2　黒褐色土 10YR3/2（黄褐色土塊・炭化物粒少量，焼土粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（炭化物少量，黄褐色土塊少量含む）
4　黒褐色土 10YR2/2（炭化物粒少量，焼土粒微量，黄褐色土塊少量含む）
5　暗褐色土 10YR3/4（焼土粒少量含む）
6　褐色土 10YR4/4（黄褐色土塊多量含む）
7　にぶい黄褐色土 10YR4/3（炭化物粒少量含む）
8　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒少量含む）
9　褐色土 10YR4/4

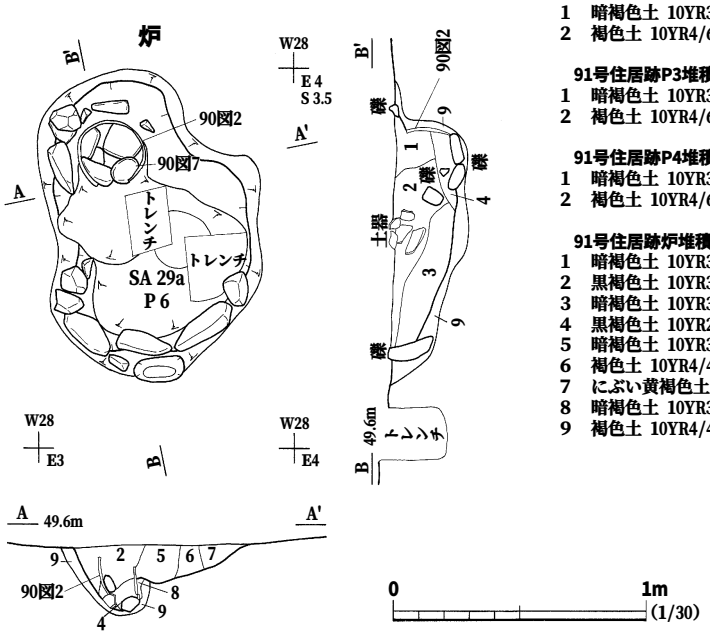


図89　91号住居跡

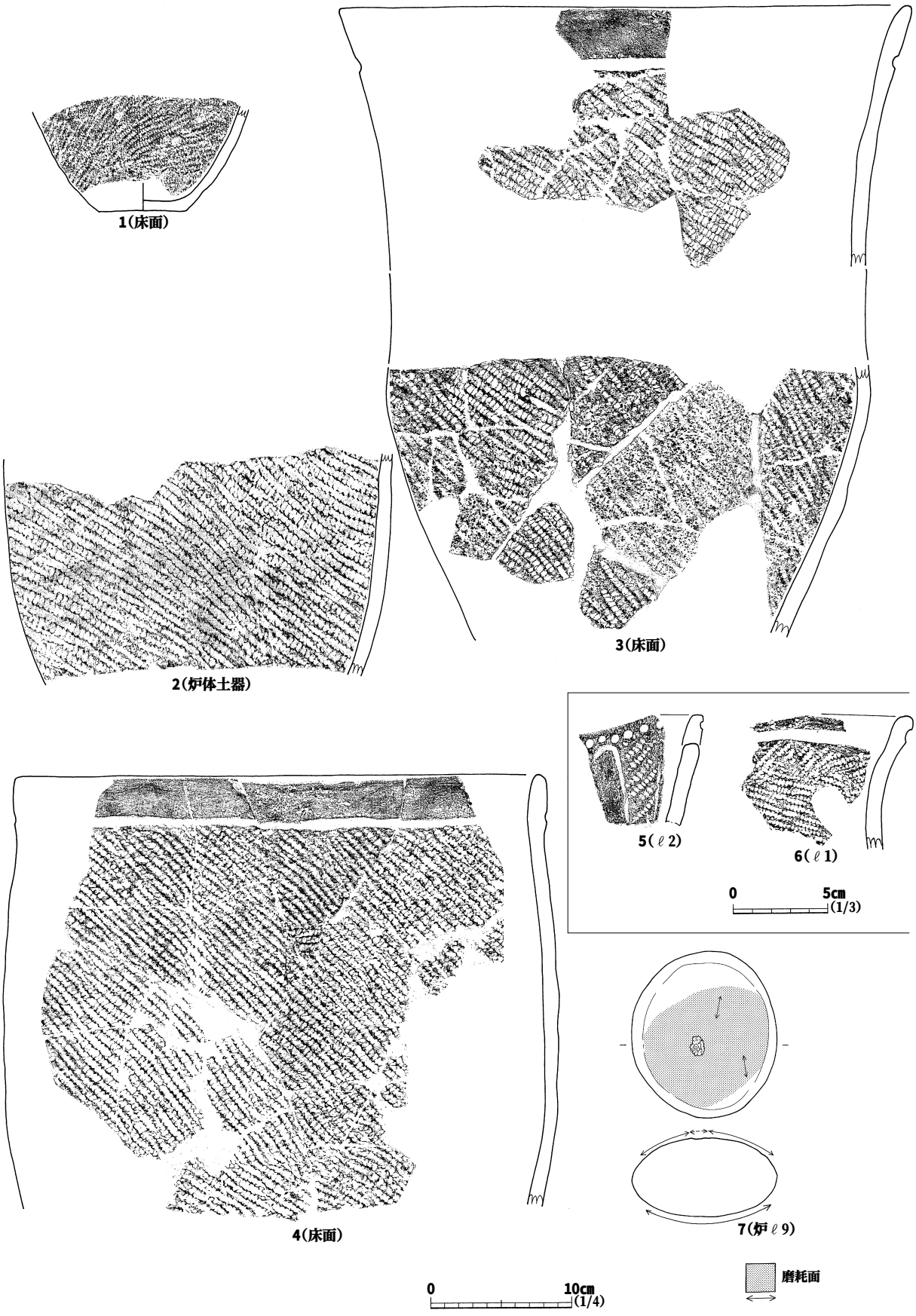


図90　91号住居跡出土遺物

軸20㎝の楕円形を呈し，Ｐ３とＰ４のほぼ中央，Ｐ９は床面のほぼ中央に位置している。Ｐ１～７，Ｐ９は不整な円形を呈し、規模は径20～30㎝，深さ14～28㎝を測る。

遺物出土状況　床面から出土したのは，縄文土器片43点である。この中で，90図１・３は複式炉土器埋設部のすぐ北側，90図４は南西コーナー部の床面で出土している。また，本住居跡の南壁際の周溝からは，石器22点がまとまって出土した。この他に堆積土中から，縄文土器片97点，石器５点が出土している。

遺物　90図１～６に縄文土器を示した。１は底部資料で，文様は地文の単節縄文のみ観察される。胎土には砂粒を多く含む。器面は被熱して脆弱になっている。２は深鉢形土器の胴下部で，炉体土器である。地文はＬＲの原体を使用した単節斜縄文である。３は胴下部が膨らむ器形の粗製深鉢である。口縁直下には，沈線区画の無文帯が一巡している。地文はＬＲ原体を使用した単節斜縄文である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。４は胴上部が直立する器形の粗製深鉢である。口縁直下には，沈線区画の無文帯が巡る。地文はＬＲの原体を使用した単節斜縄文である。５は深鉢形土器の口縁部資料である。波状口縁を呈するものと推察される。口縁直下には円形刺突が巡り，胴上部には磨消帯による逆Ｕ字状の文様が描かれている。地文は，ＲＬの原体を使用した単節斜縄文である。６は口縁部が外反する器形の深鉢形土器で，口縁直下には１条の凹線が巡っている。地文は単節斜縄文である。

90図７は土器埋設部の底面から出土したアプライト製の磨石類である。表面中央部に浅い凹部が認められ，両面に光沢のある磨耗面が観察された。

まとめ　本遺構は，台形に配置された４本の主柱穴と複式炉を有する竪穴住居跡である。複式炉は，廃絶時に土器埋設部や石組部の一部を構成する礫が抜かれ，使用時の状態をとどめていない。本住居跡の帰属時期は，炉体土器や床面出土土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期と推定される。　（阿　部）

92 号 住 居 跡　ＳＩ92 （図91，写真51・52・353）

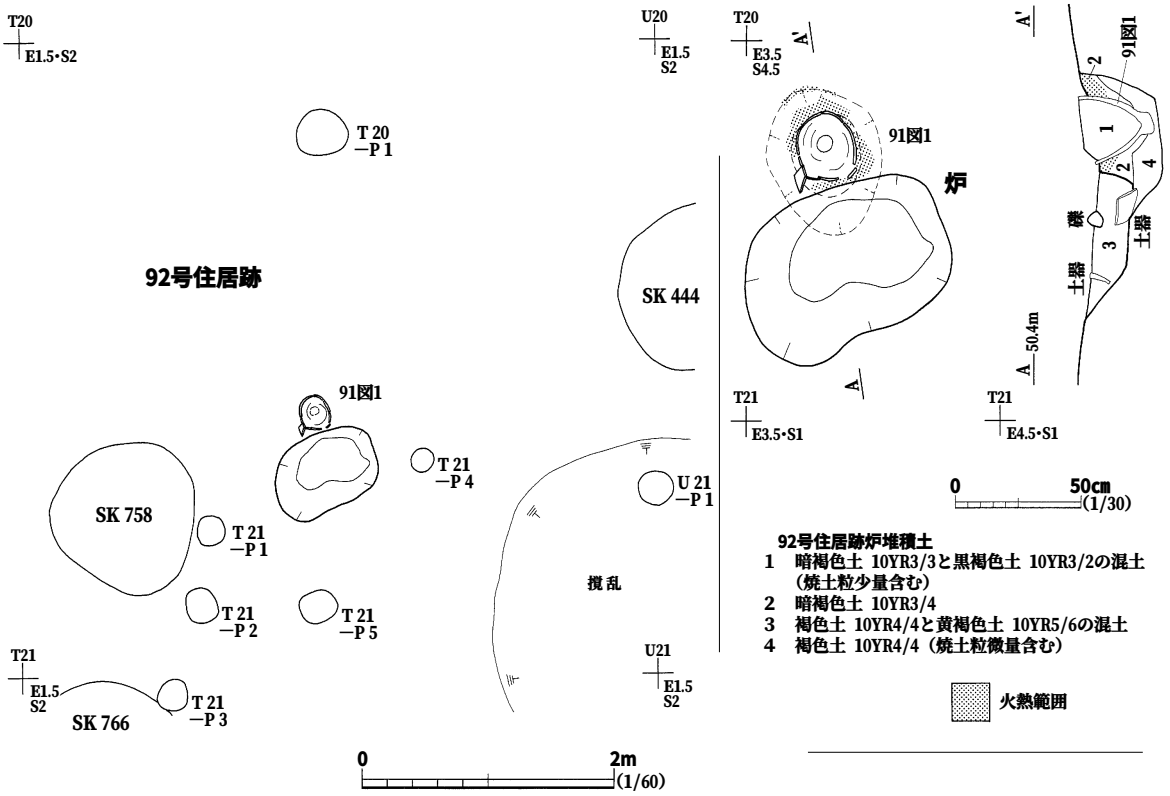
位置・検出面　北区北東部の平坦面Ｔ20・21グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。検出作業時に，炉体土器の口縁部及び石組部と推察される褐色土の落ち込みが確認でき，複式炉と判断した。すでに床面が露出している状態である住居跡と考え調査を進めた。

重複　758号土坑が隣接し，おそらく本住居跡と重複していたと推測されるが，本住居跡の堆積土が確認されず，重複関係は判断できなかった。

平面形・規模　本遺構は複式炉１基が確認されるのみで，平面形は不明である。周壁及び周溝なども確認できなかった。

床面　遺存していない。遺構検出作業時に床面が削り取られていることも考えられ，複式炉周辺の床面硬化状況も確認できなかった。

複式炉　炉は１個体の深鉢形土器を埋設した土器埋設部と，石組部から構成される。遺存状況は悪



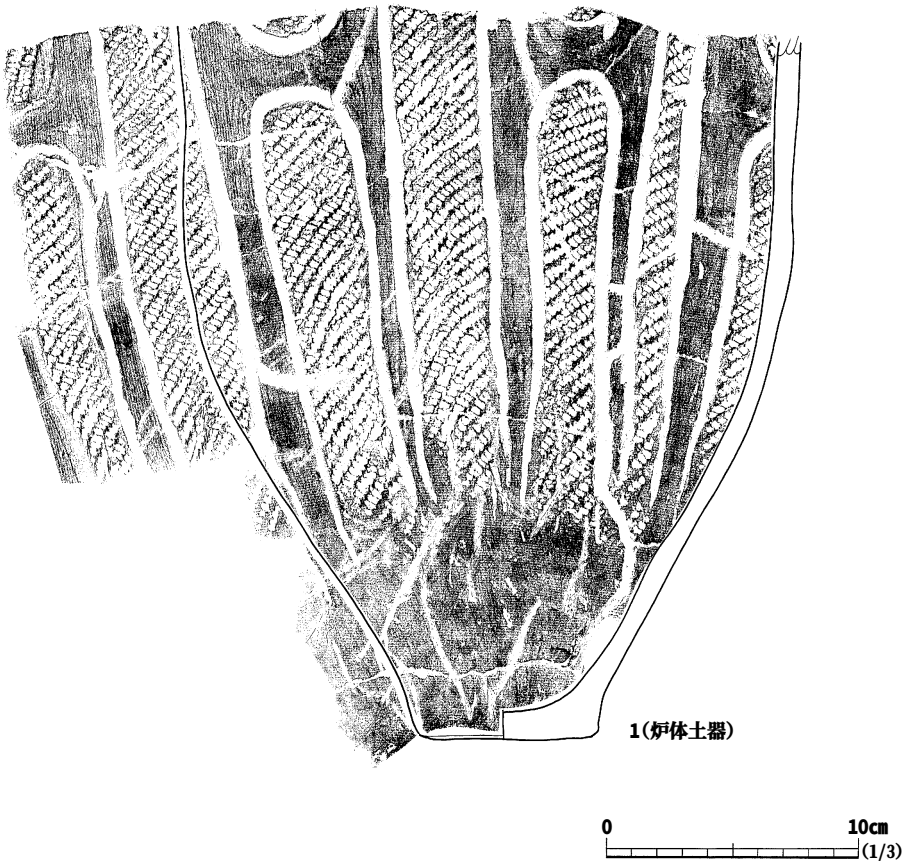


図91　92号住居跡と出土遺物

く，炉体土器のみ存在し，石組部は全ての敷石が抜き取られている状況であった。ただ，後述するように本炉では造り替えが認められ，古い段階の炉は破壊され，遺存していない。

(規模)長軸0.9m，短軸0.8mを測る小型の複式炉である。北から土器埋設部・石組部と配されている。主軸方位は南北方向で，Ｎ５ ℃Wである。

(堆積土)複式炉内堆積土は４つに分層した。ℓ１・３は住居廃絶時に投棄された層である。ℓ１は炉体土器内に認められ，黒褐色土を多量に含んだ暗褐色土である。ℓ３は石組部内に認められる層で，土器片や小礫ともに埋められた人為堆積土である。本遺構複式炉の炉体土器は，位置を若干南側に造り替えていることがわかった。造り替えられた新しい複式炉をａ炉，古い複式炉をｂ炉と呼称する。ａ炉の炉体土器周辺の焼土化範囲よりも約８㎝北側に寄った位置にも，焼土化範囲が認められた。この焼土化範囲が，ｂ炉の炉体土器が位置し，火熱を受け赤変した範囲であると考えられる。ａ炉の掘形堆積土はℓ２であり，ℓ２下位にはℓ４が認められる。このℓ４は土坑状に大きく掘り込まれた掘形内に堆積し，ｂ炉の掘形堆積土と考えられる。

(土器埋設部)土器埋設部には深鉢形土器が埋設されている。炉体土器と炉体土器周囲の口縁部付近は赤変し，強く熱を受けていたことがわかる。

(石組部)石組部は敷石がすべて抜き取られた状態で検出された。本住居の廃棄時に礫をすべて抜き取っていたと考えられる。複式炉の掘形は東西に長いゆがんだ楕円形である。前庭部は確認できなかった。

主柱穴　本遺構にともなう主柱穴及びピットは一つも認められなかった。複式炉の周辺や３～５本主柱穴を想定し精査を行ったが確認できなかった。

遺物出土状況　本遺構からの出土遺物は，炉体土器及び石組部内堆積土出土土器片のみである。

遺物　本遺構からは縄文土器片12点，石器３点が出土した。図示した遺物は炉体土器である。深鉢形土器で底部から口縁部にかけて大きく広がる器形である。文様は斜縄文を地文とし，沈線で区画した部分をH字状に磨り消している。

まとめ　本遺構は複式炉のみであり，他の施設や床面等は遺存していない。検出時ですでに炉体土器が露出している状態であった。本遺構にともなう柱穴や周溝が無いことから，埋甕である可能性も考慮したが，炉体土器及び土器周辺が被熱していることから住居にともなう複式炉と判断した。本住居の廃棄時に複式炉石組部の礫はすべて取り除かれたと考えられる。本遺構の機能していた時期は複式炉炉体土器から縄文時代中期後葉頃と推察される。　（三　浦）

93 号 住 居 跡　ＳＩ93 （図92・93，写真53・54・354）

位置・検出面　北区北西部の平坦面に存在し，Ｎ・O27・28グリッドに位置する。LIV上面において，南北主軸の不整長楕円形の落ち込みと，その北方に広がる硬化面，さらに，落ち込みの東西にピットを12個検出した。

堆積土　遺構北部の硬化面上に暗褐色土が薄く，部分的に堆積していた。

平面形・規模　周壁，周溝及び床面の範囲が確認できないことから，本来の平面形・規模は不明であるが，Ｐ１・７を結んだラインの中間点を中心とし，検出したピット・硬化範囲・炉を取り込むような円を想定した場合，径4.8mを測る。

床面　LIVに構築されているが，明確な範囲は不明である。Ｐ12付近がくぼんでいる以外は若干の起伏はあるものの，ほぼ平坦である。遺構北部の硬化面は踏み締まり範囲と推測され，複式炉前庭部の東脇にも，踏み締まりと推測される硬化面が認められる。遺構北部の踏み締まり範囲は不整形で，規模は東西約2.5m，南北約2.3mを測る。

複式炉　遺構南部に存在し，土器埋設部の状況から新旧２時期ある。新期の炉をａ炉，旧期の炉をｂ炉とした。

ａ炉　北から土器埋設部・石組部・前庭部の順に配されている。

(規模)全長195㎝，最大幅74㎝を測り，主軸方位はほぼ南北である。

(堆積土)９層に分かれ，ℓ１～６は炉廃絶時の人為堆積土で，ℓ４・６には炉使用時の炭化物や焼土粒が多量に混入している。ℓ７～９は掘形堆積土である。

(土器埋設部)擂鉢状の掘形内に深鉢形土器をやや石組部側に傾けて正位に埋設している。土器の周囲は焼土化し，偏平な礫が散在する。

(石組部)東西長64㎝，南北長65㎝，深さ15㎝の不整隅丸方形の掘形底面に偏平な礫と土器片を敷き詰め，東壁には偏平な礫を斜めに立て掛け，南辺に角礫を東西方向に配している。石組の規模は南北長43㎝，床面から底面礫の上面までの深さ約10㎝を測る。

(前庭部)南北長98㎝，東西長60㎝の不整長楕円形を呈し，深さ９㎝を測る。底面は不整で，南端には深さ12㎝のピットが存在する。

ｂ炉　ａ炉にほとんど壊されており，石組部と前庭部は不明である。

(規模)規模・主軸方位ともａ炉と大差ないものと推測される。

(土器埋設部)埋設する土器より一回り大きい掘形内に，深鉢形土器をほぼ正位に埋設している。土器の周囲は焼土化し，土器の西側半分の上部はａ炉の土器を埋設する際に壊されている。

(堆積土)５層に分かれ，ℓ１～４は人為堆積と推測され，ℓ３・４は炭化物・焼土塊を多量に含む。ℓ５は掘形堆積土である。

主柱穴　複式炉土器埋設部の土器との位置関係や柱穴の形態を検討した結果，ａ炉に対応するのはＰ３・６・８，ｂ炉に対応するのはＰ２・４・９・11と判断した。ａ炉の柱穴は長径25～30㎝，深さ30～61㎝の円筒形を呈し，ｂ炉の柱穴は長径28～34㎝，深さ42～72㎝の円筒形ないしは円筒形に近い形状で，Ｐ２・４の周壁上部は外側に張り出して立ち上がっている。この周壁上部の状況は柱抜き取りの際の痕跡と推測される。堆積土は１～２層で，Ｐ９のℓ２が黒褐色土である以外は暗褐色土である。

ピット　Ｐ１・７は壁際に位置したと推察される，長径26～30㎝，深さ32～40㎝の円筒形のピットである。Ｐ５・10・12は長径16～22㎝，深さ26～48㎝の円筒形のピットで，規模が小さく，隣接す

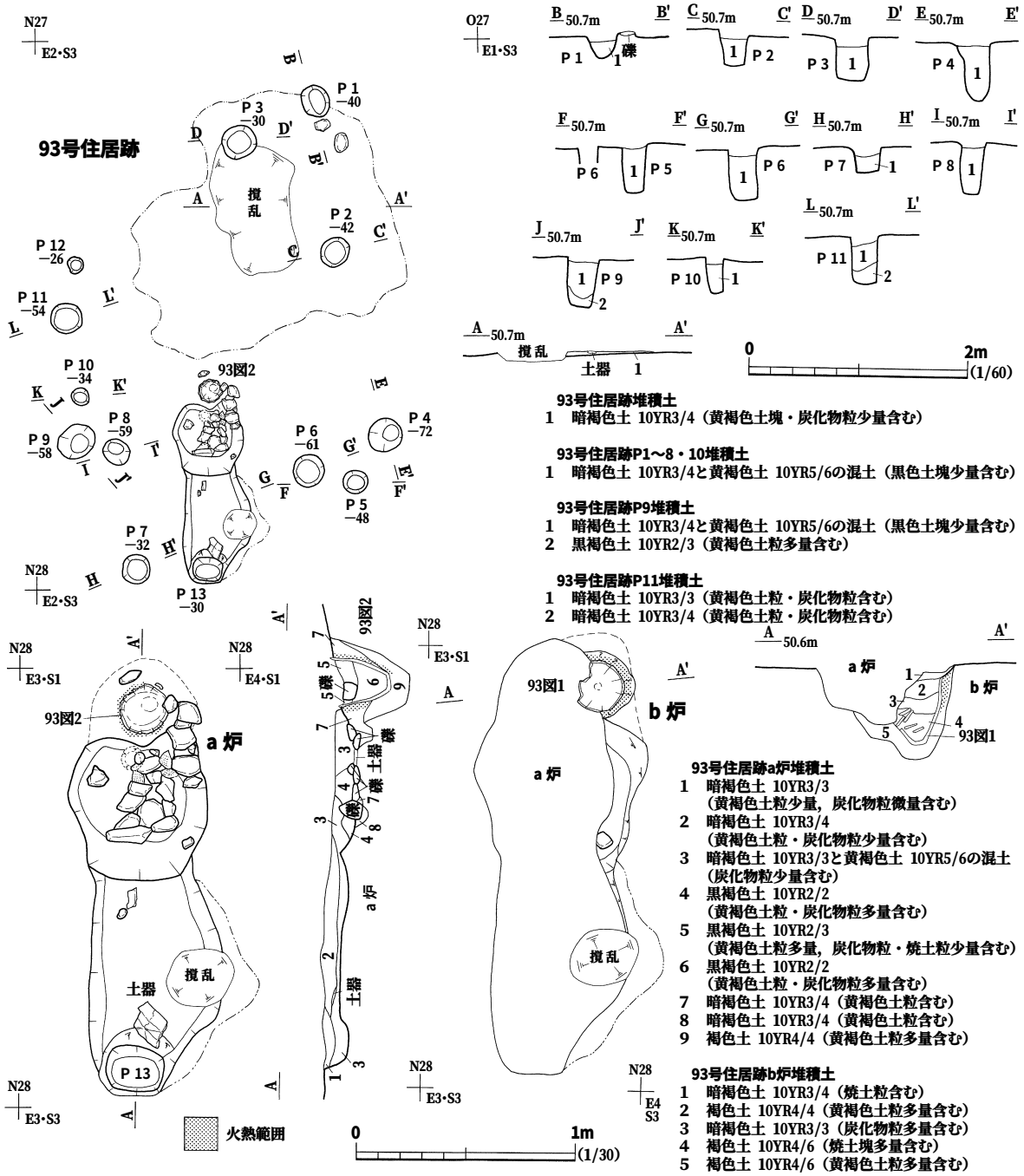


図92　93号住居跡

る主柱穴に伴うピットであろう。堆積土はいずれも暗褐色土１層のみである。

遺物出土状況　ａ炉の土器埋設部とｂ炉の土器埋設部より，深鉢形の縄文土器がそれぞれ正立して出土し，硬化面上及び堆積土から縄文土器片１点，石器類３点，石組部底面から縄文土器片10点，石器１点，前庭部北部と南部の底面付近から縄文土器片２点，炉内堆積土から縄文土器片31点，石器１点が出土している。

遺物　93図１はｂ炉に埋設されていた深鉢形土器で，上半部を欠失している。底部が小さく，胴部下半は内湾気味に立ち上がっている。外面には全面にＲＬ原体を縦位回転施文した縄文がみられる

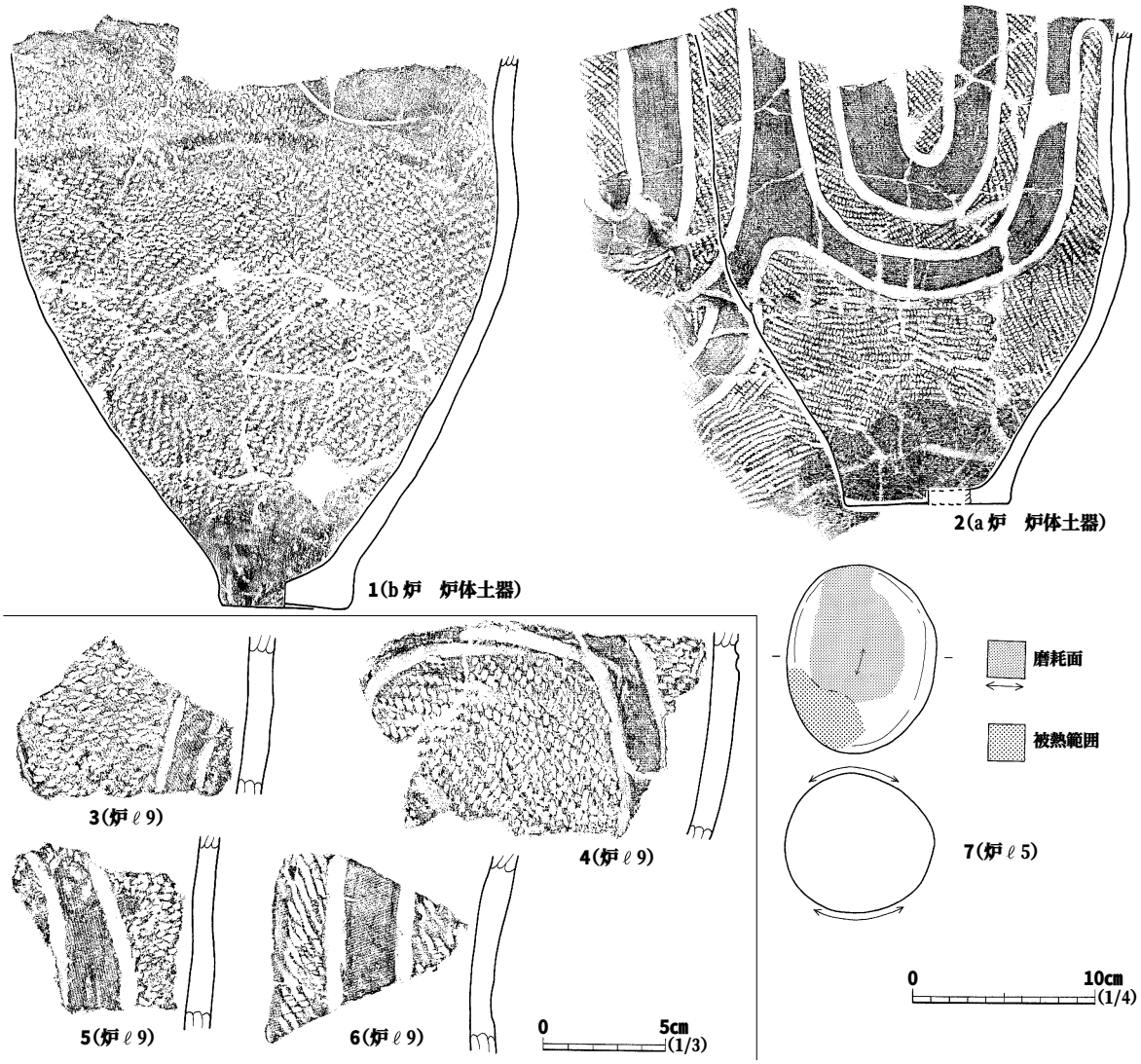


図93　93号住居跡出土遺物

が，上端には内部が無文の沈線区画文が若干認められる。内面の底部付近は黒みがかっている。同図２はａ炉に埋設されていた深鉢形土器で，上部を欠失している。胴部下半は底部から外反気味に立ち上がった後，内湾し，胴部上半は外反気味に立ち上がっている。胴部上半と下半を区切る波状沈線文が巡り，胴部上半には横位のｅ字状と推定される区画文を４単位配している。区画文内及び波状沈線文より下位には，ＬＲ原体を縦位回転した縄文が施され，区画外及び底部付近は無文としている。なお，波状沈線文は波頭が４単位あり，その内の１つは胴部上半の上部まで延びている。同図３～６は深鉢形土器の胴部破片で，沈線区画文が描かれ，区画文内には縄文が施され，区画外は無文としている。同図７は横断面形が円形の磨石類である。比較的平坦な部分に磨耗範囲が認められる。

まとめ　周壁が残存していないが，複式炉をもつ竪穴住居跡と推測される。炉をほぼ同じ位置で造り替え，柱配置も４本主柱から３本主柱に変化させて住居を建て替えている。遺構の時期は，炉体土器及び複式炉の形態等から，縄文時代中期末葉の大木10式期と推測される。　（能登谷）

94ａ・ｂ号住居跡　ＳＩ94ａ・ｂ（図94～96，写真55・56・354）

位置・検出面　北区北西部の平坦面に存在し，Ｊ・Ｋ24・25グリッドに位置する。ＬⅣ上面において，９号溝跡に切られる暗褐色土の大型円形の落ち込みを検出した。

重複　９号溝跡より古く，1485号土坑より新しい。また，後述するように，新旧２時期の柱穴と複式炉が認められた。新しい方を94ａ号住居跡，古い方を94ｂ号住居跡として報告する。

堆積土　堆積土が残っていた94ａ号住居跡は８層に分層した。９号溝跡より東では10㎝前後の厚さで堆積しており，最大でも15㎝の堆積である。全て褐色土を主体とし，人為堆積と推測される。中央部には炭化物粒・焼土粒を多量に含む土が堆積している。

平面形・規模　東辺及び南西部のプランが不明であるが，径６ｍの円形を呈する。

床面　炉周囲が炉に向かって緩く下降している以外は，多少の起伏があるがほぼ平坦で，水平に近い。踏み締まり範囲は認められない。

周壁　北部，北西部及び南部の一部で残存する。いずれも，直立気味に立ち上がる。北壁の高さは15㎝を測り，北西壁では最大44㎝，南壁では最大９㎝を測る。

周溝　北部から北東部にかけて残存し，一部途切れるものの，周壁際に存在する。側壁は直立気味ないしは急に外傾して立ち上がり，底面には起伏がある。幅10～37㎝，床面からの深さ８～13㎝を測る。

94ａ号住居跡の複式炉　北から土器埋設部・石組部・前庭部の順に配されている。

（規模）全長2.0ｍ，最大幅1.1ｍを測り，主軸方位はＮ19 Ｗである。

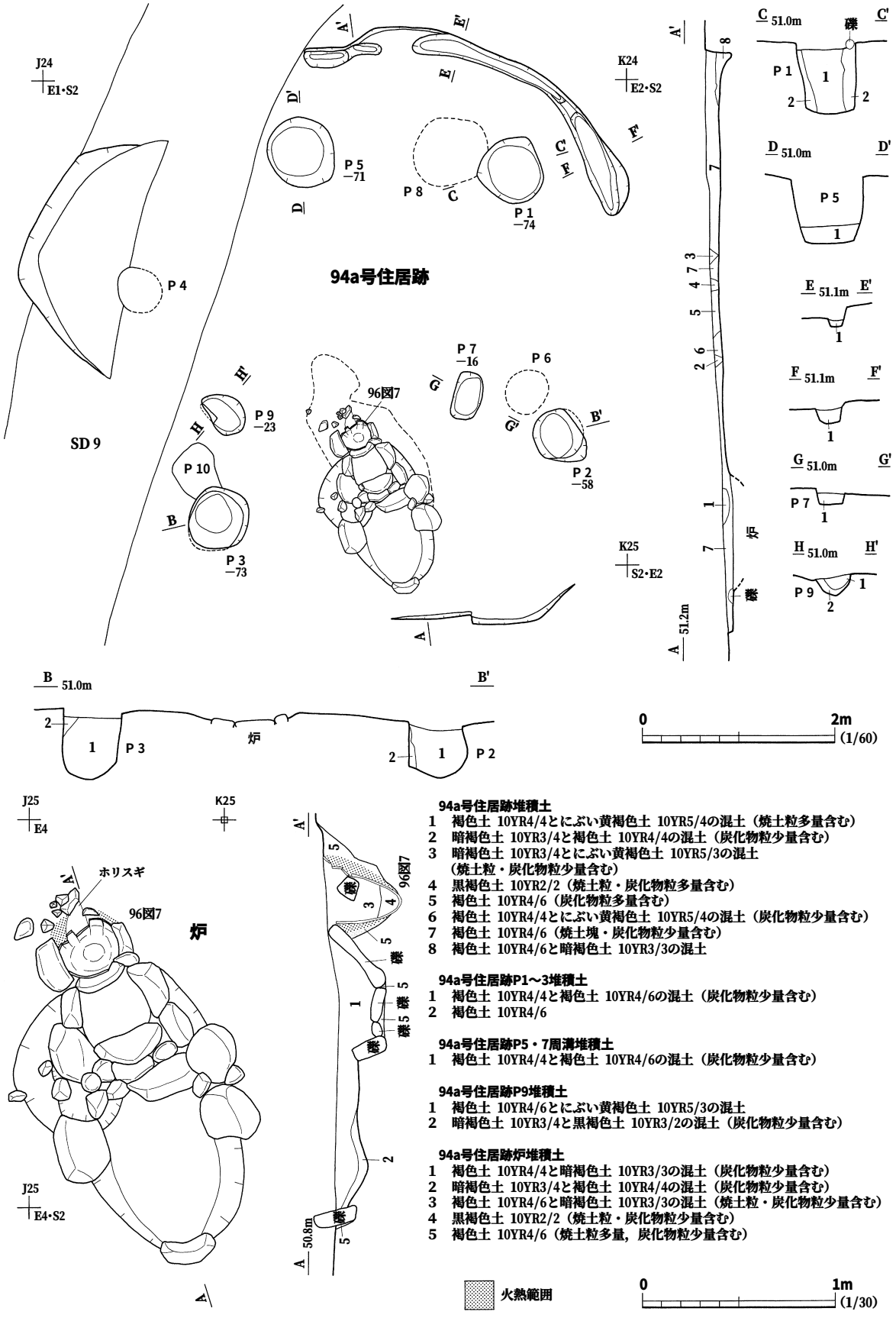
（堆積土）５層に分かれ，ℓ１～３は住居廃絶時の人為堆積土，ℓ４は炉使用時の炭化物を含む黒褐色土，ℓ５は掘形堆積土である。

（土器埋設部）大きめの掘形内に口縁部を欠失した深鉢形土器を正位に埋設している。土器の東西には長さ18×27㎝の角礫，北方には小型の礫が配され，土器の周囲は焼成化している。

（石組部）平面形は南に広がる台形を呈し，全体の形状は擂鉢状を呈する。規模は東西長１ｍ，南北長70㎝を測り，床面から底面礫の上面までの深さは，28㎝を測る。壁には長さ20㎝を超える大型の偏平礫を平坦面が内側になるように斜めに立て掛け，底面には長さ20㎝を超える大型の礫と15㎝未満の小型の偏平礫を組み合わせて平坦面が上向きになるように敷き詰めている。壁に立て掛けられた礫の内，土器埋設部側の礫は43×35×８㎝である。

（前庭部）平面形は楕円形を基調とし，石組部との境付近の両壁には，石組部から連続して30×30×７㎝，33×30×12㎝の偏平礫がそれぞれ斜めに立て掛けられ，南端部には30×23×８㎝の偏平礫が平坦面を内側にしてほぼ直立している。壁は内湾気味に立ち上がり，底面は北半ではほぼ水平，南半では緩くくぼんでいる。規模は東西長1.1ｍ，南北長88㎝，深さ10～16㎝を測る。

94ｂ号住居跡の複式炉　石組部と前庭部が94ａ号住居跡の炉に壊されていることから，全容は不明である。



94a号住居跡堆積土
1　褐色土 10YR4/4とにぶい黄褐色土 10YR5/4の混土（焼土粒多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/4の混土（炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4とにぶい黄褐色土 10YR5/3の混土
（焼土粒・炭化物粒少量含む）
4　黒褐色土 10YR2/2（焼土粒・炭化物粒多量含む）
5　褐色土 10YR4/6（炭化物粒多量含む）
6　褐色土 10YR4/4とにぶい黄褐色土 10YR5/4の混土（炭化物粒少量含む）
7　褐色土 10YR4/6（焼土塊・炭化物粒少量含む）
8　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/3の混土

94a号住居跡P1～3堆積土
1　褐色土 10YR4/4と褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6

94a号住居跡P5・7周溝堆積土
1　褐色土 10YR4/4と褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒少量含む）

94a号住居跡P9堆積土
1　褐色土 10YR4/6とにぶい黄褐色土 10YR5/3の混土
2　暗褐色土 10YR3/4と黒褐色土 10YR3/2の混土（炭化物粒少量含む）

94a号住居跡炉堆積土
1　褐色土 10YR4/4と暗褐色土 10YR3/3の混土（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/4の混土（炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/3の混土（焼土粒・炭化物粒少量含む）
4　黒褐色土 10YR2/2（焼土粒・炭化物粒少量含む）
5　褐色土 10YR4/6（焼土粒多量，炭化物粒少量含む）

図94　94ａ号住居跡

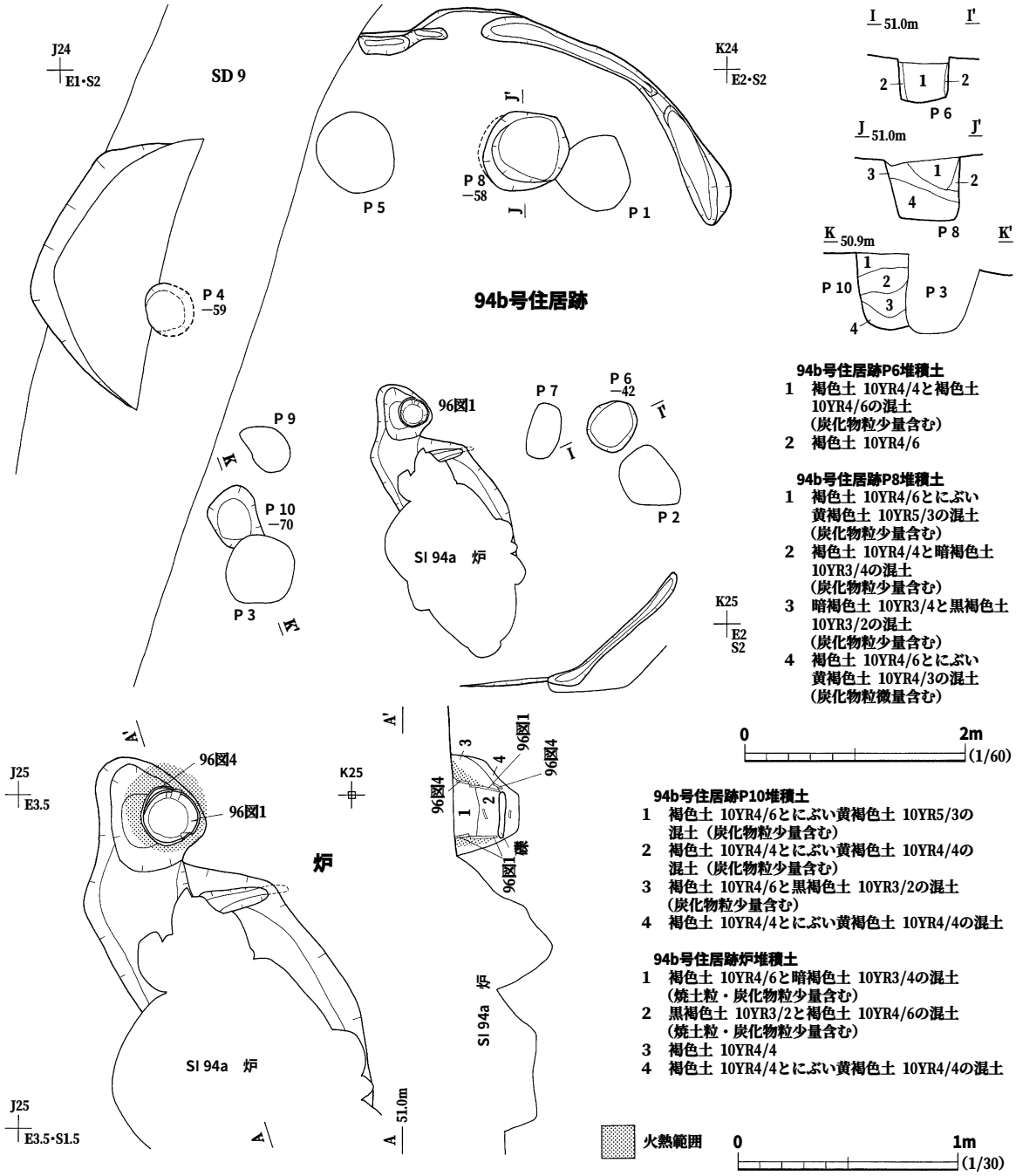


図95　94ｂ号住居跡

(規模)規模は不明であるが，主軸方位は94ａ号住居跡の炉とほぼ同じものと推測される。

(土器埋設部)擂鉢状の掘形内に胴部を輪切りにした土器を正位に埋設し，底面には長径21㎝，厚さ３㎝の偏平な礫を敷いている。土器の周囲は焼成化しているが，礫の残存はみられない。

(堆積土)４層に分かれ，ℓ１・２は炉廃絶時の人為堆積土，ℓ３・４は掘形堆積土で，ℓ２は炉使用時の炭化物粒を少量含む。

主柱穴　複式炉土器埋設部の土器との位置関係や柱穴の新旧関係を検討した結果，94ａ号住居跡の炉に対応するのはＰ１～３・５，94ｂ号住居跡の炉に対応するのはＰ４・６・８・10と判断した。

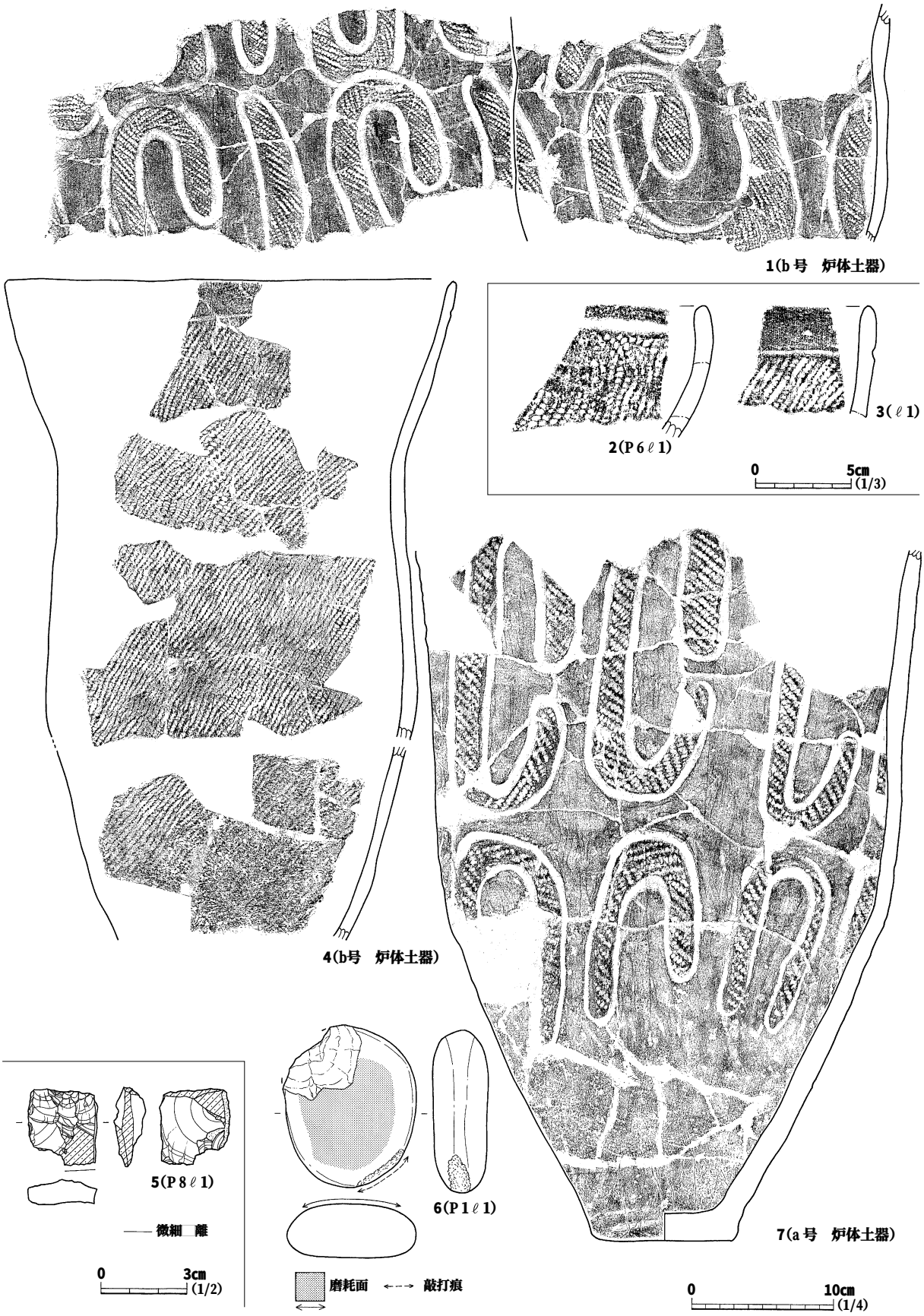


図96　94ａ・ｂ号住居跡出土遺物

Ｐ１～３・５は長径46～75㎝，深さ58～74㎝の円筒形を呈し，Ｐ４・６・８・10は長径48～78㎝，深さは42～70㎝の円筒形を呈する。これら８個の柱穴の堆積土は褐色土を主体とし，柱抜き取り後に埋め戻されているものと推測する。

ピット　床面にＰ７・９が存在する。いずれも長径(軸)50㎝を測り，深さは20㎝前後で，堆積土はＰ６・８・10に近い色調の褐色土である。

遺物出土状況　94ａ号住居跡の炉土器埋設部から，深鉢形土器が正立して出土している。94ｂ号住居跡の炉土器埋設部から胴部を輪切りにした深鉢形土器が正立して出土し，他に別個体の大型破片が出土している。炉内堆積土から縄文土器片４点，遺構内堆積土から縄文土器片10点，石器類６点，Ｐ１・８内堆積土から石器類が合計４点，Ｐ10脇から27×21×７㎝の偏平礫が出土している。

遺物　96図１は94ｂ号住居跡の炉に埋設されていた深鉢形土器の胴部中央付近で，口縁部付近と底部付近を欠失している。胴部上半は外反し，胴部下半は内湾している。外面には沈線による区画文が上下２段に描画されているが，モチーフは不明である。区画内にＬＲ原体を回転施文した縄文を充填し，区画外は無文としている。同図４も94ｂ号住居跡炉に埋設されていた深鉢形土器であるが，破片をもとに図上復元した。上半は外反気味に立ち上がり，下半は内湾している。口縁部には口唇に沿って１条の沈線が巡り，沈線より下位にはＬＲ原体を縦位回転施文した縄文がみられ，口縁部は無文である。同図７は94ａ号住居跡の炉に埋設されていた深鉢形土器で，口縁部付近を欠失している。胴部は底部から直線的に立ち上がった後，中央部で内湾し，上半では直立している。外面には沈線による区画文が上下２段に描画され，区画内にＬＲ原体を回転施文した縄文を充填し，区画外は無文としている。描画される区画文は上半部ではＣ字状区画文，下半部では逆Ｕ字状区画文である。同図２・３は深鉢形土器の口縁部付近の資料で，口唇に沿って１条の沈線が引かれ，口縁部を無文とし，胴部には縄文が施文されている。

96図５は鉄石英製の剝片である。背面末端に微細剝離痕が観察された。同図６は斑状の流紋岩製の偏平な楕円礫を利用した磨石類である。平坦面に磨耗範囲，側面部に敲打痕が認められる。

まとめ　遺存状態が悪いが，複式炉をもつ竪穴住居跡と推測される。住居建て替えにあたって，炉を南へ約60㎝移動し，柱配置を４本主柱から５本主柱に変化させている。遺構の時期は，炉体土器及び複式炉の形態等から，縄文時代中期末葉の大木10式期と推測される。　（能登谷）

104 号 住 居 跡　ＳＩ104 （図97，写真354）

位置・検出面　北区南部のＳ・Ｔ39・40グリッドに所在する。西側には79号住居跡と1302号土坑，北側に1446号土坑，南東側に1107号土坑，南側に1303号土坑が隣接している。ＬⅣ上面において検出したが，すでに石囲炉が露出しており，住居内堆積土はほとんど残存していなかった。

重複　多数の中世以降のピットが本住居跡を掘り込んでいる。本住居跡の西側に隣接する79号住居跡は，規模的に本住居跡と重複関係にあると考えられるが，前後関係を判断できるような堆積土や周溝の切り合いがなかったことから断言できない。ただ炉の形態の比較から，本住居跡の方が新し

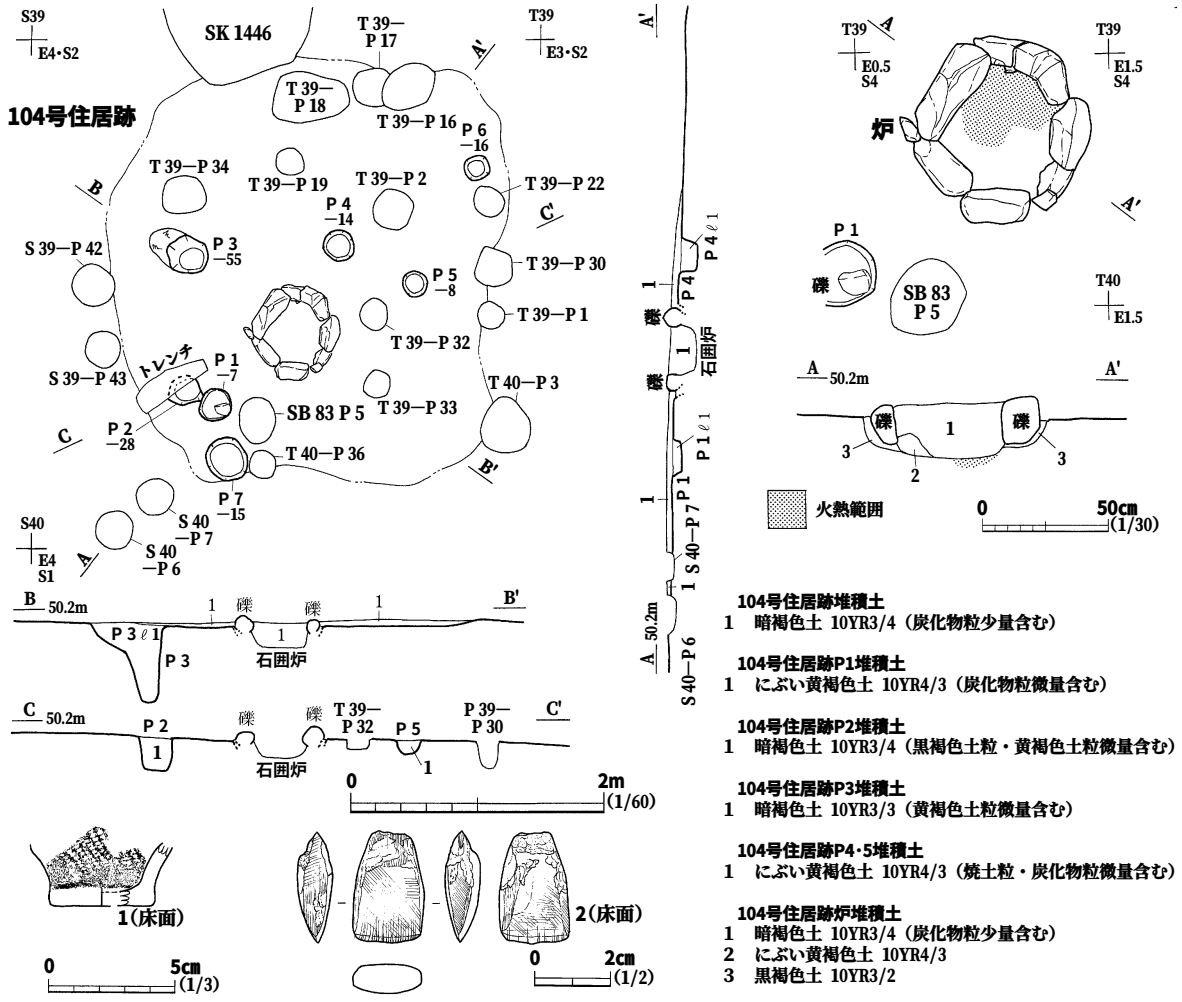


図97　104号住居跡と出土遺物

いと考えられる。

堆積土　堆積土はほとんど残存せず，確認できたのは暗褐色土１層のみである。床面上で最も厚く残存している部分でも６cmのみのため，堆積過程は不明である。

平面形・規模　周壁が残存していないことから，平面形及び規模は不明である。

床面　部分的に削平されてはいるが踏み締まりが確認されたので，図中に２点鎖線で示した。この範囲を床面として認定した。

石囲炉　踏み締まり範囲の中央よりやや南側で検出した。規模は南北75cm×東西76cmを測り，25～40cmの細長い石を円形に並べている。焼土化範囲は，石囲炉中央より北側に寄った部分に偏在しており，最も厚い部分で４cmを測る。掘形は，石の配列より一回り大きく掘り込んであり，断面形では鍋底状になる。最深部で床面から15cmを測る。

主柱穴　Ｐ２～５・７が該当する。石囲炉を囲むように弧状に配置されている。規模はＰ２が南北長24cm，東西長28cm，深さ28cm，Ｐ３が南北長32cm，東西長50cm，深さ55cm，Ｐ４が南北長25cm，東西長23cm，深さ14cm，Ｐ５が南北長20cm，東西長19cm，深さ８cm，Ｐ７が南北長34cm，東西長32cm，深さ15cmを測る。柱穴断面形は，Ｐ３のみ抜き取り穴によりゆがんでいるが，その他は直立的

なＵ字形を呈する。本来の柱配置は，床面に多数の中世以降の小穴が掘り込まれ，消滅したものがあることが予測されることから不明である。

ピット　踏み締まりのある範囲から２個検出された。Ｐ１はＰ２のすぐ南側にあり，南北長25㎝，東西長24㎝，深さ７㎝を測る。Ｐ６は踏み締まりのある範囲の北東隅に位置し，南北長18㎝，東西長20㎝，深さ16㎝を測る。これらは配置から主柱とは考えにくく省いたが，規模や断面形で比較すると主柱穴と遜色がないことから，支柱穴の可能性も考えられる。

遺物出土状況　床面から出土したのは縄文土器７点と，石器１点である。また堆積土がわずかしか残存していなかったことから，堆積土中から出土した遺物はない。

遺物　図97に縄文土器と石器を示した。１はミニチュア土器の底部で，地文はＲＬ原体の横回転である。内面は縦方向に丁寧に磨いている。２は蛇紋岩製の小形磨製石斧である。基部は欠損しているが，その欠損面に対して研磨による再調整を加え，上部にも刃縁を作出している。再調整後の縦断面形が凸レンズ状を呈することから，くさびとして機能した可能性が考えられる。

まとめ　本住居跡ははっきりした平面形はわからないものの，石囲炉をもち，その周囲に柱を数本巡らす構造が判明している。住居構造から判断すると，縄文時代後期初頭から前葉にかけての時期に所属すると考えられる。　（新　海）

105 号 住 居 跡　ＳＩ105 （図98・99，写真57・58・354）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，ＡＣ38グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の南東側には３号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色土で埋まった一辺3.6m程の不整な隅丸方形の輪郭を検出した。

重複　63号建物跡，926・1203号土坑と重複し，本住居跡の方が63号建物跡，926号土坑より古く，1203号土坑より新しい。

堆積土　７層に分層した。ℓ１・２は周壁からの流れ込みが確認できたので自然堆積土と判断した。ℓ３～５はカマド内堆積土で，いずれも黄褐色土との混土であるため人為堆積土と考えられ，かつ層中に焼土粒を多量に含むことから，カマドを破壊した可能性が高いと推定している。ℓ６・７は貼床堆積土である。

平面形・規模　南北方向に長軸をもつ不整な隅丸方形である。長軸方向はほぼ南北で，その規模は現状の壁上端で北壁長3.2m，南・東・西壁長3.6mを測る。

床面　カマド燃焼部を除いた全面が貼床されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。カマドの周辺から南西部にかけての広い範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　床面から55～65°の角度で立ち上がり，遺存壁高は５～19㎝を測る。西壁の一部は926号土坑によって壊され，遺存していない。

カマド　カマドは東壁中央部よりやや南側に構築されている。削平により遺存状態は悪く，燃焼部底面と両袖の基底部のみが遺存する。

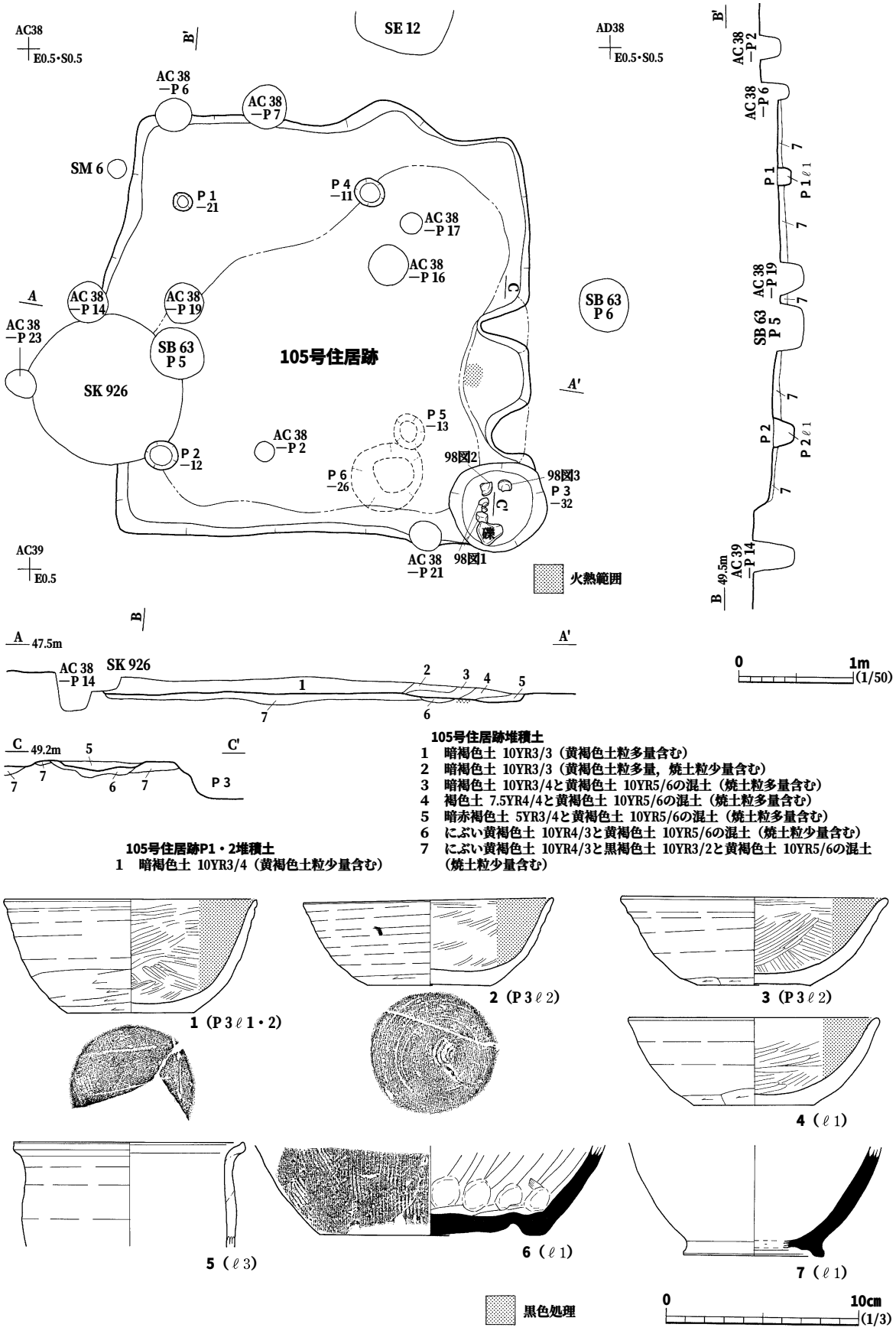


図98　105号住居跡と出土遺物(1)

(規模)カマド中軸線はほぼ東西を示し，袖の最大幅73㎝，奥壁までの長さ52㎝を測る。

(燃焼部)袖は基本土層のＬⅣに類似したにぶい黄褐色土で造られている。燃焼部の底面は径17㎝程の範囲が薄く赤色に変化し，熱変化を受けた部分は床面から２㎝の深さに及んでいた。

主柱穴　主柱穴はＰ１・２・４の３個である。Ｐ１は北西コーナー部，Ｐ２は南西コーナー部，Ｐ４は北壁際中央部付近に位置する。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.2m，Ｐ１－Ｐ４間が1.6mを測る。現状の平面形は不整な円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が径15㎝，深さ21㎝，Ｐ２が径28㎝，深さ12㎝，Ｐ４が径26㎝，深さ11㎝を計測する。柱穴内の堆積土はいずれも自然堆積土と考えられる。

ピット　主柱穴の他に小さいピットが２個，土坑状のくぼみが１個ある。Ｐ３は南東隅に位置し，規模や配置から貯蔵穴と考えられる。規模は南北76㎝，東西84㎝，深さ32㎝を測る。Ｐ５・６は南東部に位置する床下ピットで，いずれも用途は不明である。ただ，Ｐ５中からは後述する打製石斧と剝片が出土し，住居構築時に埋められた可能性が高い。規模はＰ５が南北30㎝，東西26㎝，深さ13㎝，Ｐ６が径60㎝，深さ26㎝を計測する。

遺物出土状況　貯蔵穴と推察されるＰ３からは98図１～３に示した３点の土師器が出土している。他に，堆積土中から土師器片99点，須恵器片２点，縄文土器片88点，石器32点が出土した。

遺物　図98に土師器と須恵器を示した。98図１はロクロ成形の土師器椀である。体部から内湾気味に立ち上がり，口縁部がやや外傾する。底部は回転糸切りで切り離された後にヘラケズリ再調整され，体部下半から底部にかけては回転ヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ後，黒色処理されている。98図２～４はロクロ成形の土師器杯である。いずれも体部から内湾気味に立ち上がり，口縁部端が緩く外反している。内面は黒色処理されている。２は回転糸切りで底部を切り離した後，体部下半から底面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。墨書があるが，遺存部位がわずかで解読不明である。３・４の体部下半から底面にかけては，手持ちヘラケズリ再調整が施されて

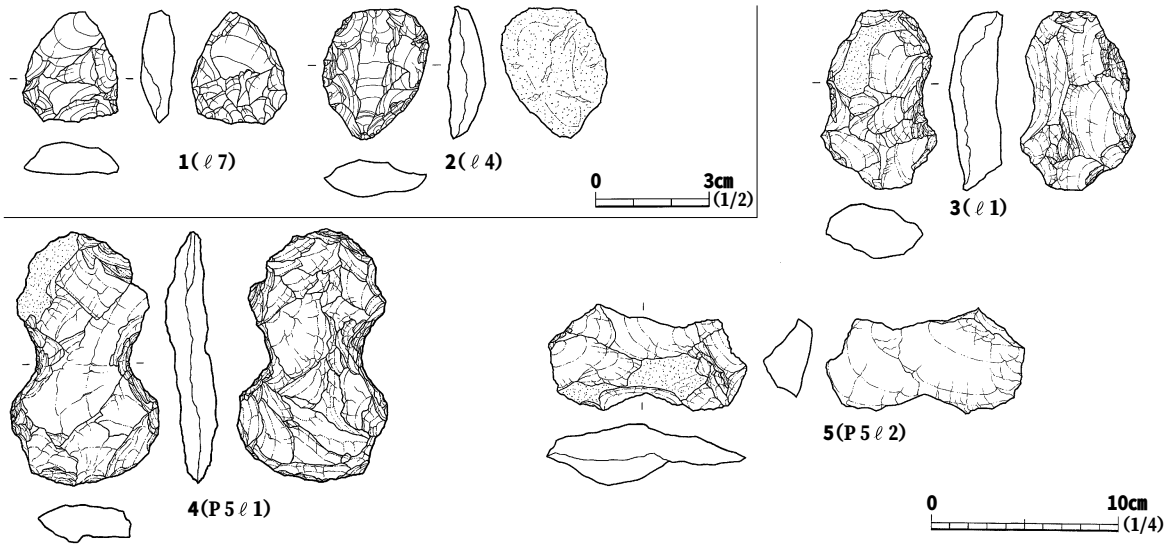


図99　105号住居跡出土遺物(2)

いる。98図５はロクロ成形の土師器甕で，体部から直線的に立ち上がり，口縁部が強く外反する。内面の調整は磨耗しているため不明である。98図６は須恵器甕で，外面は平行タタキ痕が認められ，内面はヘラナデと指頭圧痕がみられる。98図７は須恵器長頸瓶の底部から体部にかけての資料である。

99図に石器を示した。99図１はチャート製の石鏃未製品である。基部側にのみ調整剝離が認められることから，製作途中で廃棄したものと推察される。99図２は鉄石英製の楔形の石核もしくは楔形石器である。背面中央の剝離痕は両極打法によって生じたものと推察され，縁辺部に階段状剝離痕が連接して認められる。99図４は粘板岩製の分銅形打製石斧である。えぐりの加工は入念に行われているのに対し，刃部の加工はやや粗い剝離で整える程度である。99図３はガラス質黒色安山岩製の打製石斧未製品である。刃部側は欠損している。99図５はガラス質黒色安山岩製の横長剝片である。

まとめ　本住居跡は比較的小型で，南東隅を除く各コーナーに主柱穴が配置される。東壁中央南寄りにカマドが設けられ，カマドの中軸線はほぼ東西方向を示している。カマドの南脇には貯蔵穴がある。本住居跡の帰属時期は９世紀前半頃と考えられる。　（坂　田）

106 号 住 居 跡　ＳＩ106 （図100・101，写真59・60・354）

位置・検出面　北区南東部の平坦面，ＡＢ・ＡＣ39・40グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の東側は５号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，黒色土と暗褐色土で埋まった径4.7m程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　63号建物跡，988号土坑と重複し，いずれよりも本住居跡が古い。

堆積土　11層に分層した。ℓ１は炉体土器底部にたまった黒色土に近似する土で，黄褐色土の小塊を数多く含むので，人為堆積土と判断した。ℓ２～５・７・10は黄褐色土の小塊を，ℓ６は暗褐色土の小塊を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積土と考えられる。ℓ８・９・11は周壁からの流れ込みを確認できたため，自然堆積土と考えられる。

平面形・規模　円形に近い不整な隅丸方形で，長軸方向はＮ70 °Ｅであり，その規模は，現状の壁上端で長軸の東西長4.8m，短軸の南北長4.7mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。複式炉の周辺から北壁にかけての広い範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　床面から75～80 °の急な角度で立ち上がり，遺存壁高は16～29㎝を測る。

周溝　溝が途切れながらもほぼ全周している。その上端幅は16～31㎝，床面からの深さは６～37㎝を計測する。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。廃棄後に炉体土器の中に土を投棄し，土器埋設部と石組部の縁石を抜き取っている。

（規模）炉中軸線はほぼ南北を示し，全長約165㎝，最大幅約90㎝を測る。

（堆積土）６層に分層した。ℓ１～５は黄褐色土の小塊を数多く含むので，人為堆積土と判断した。

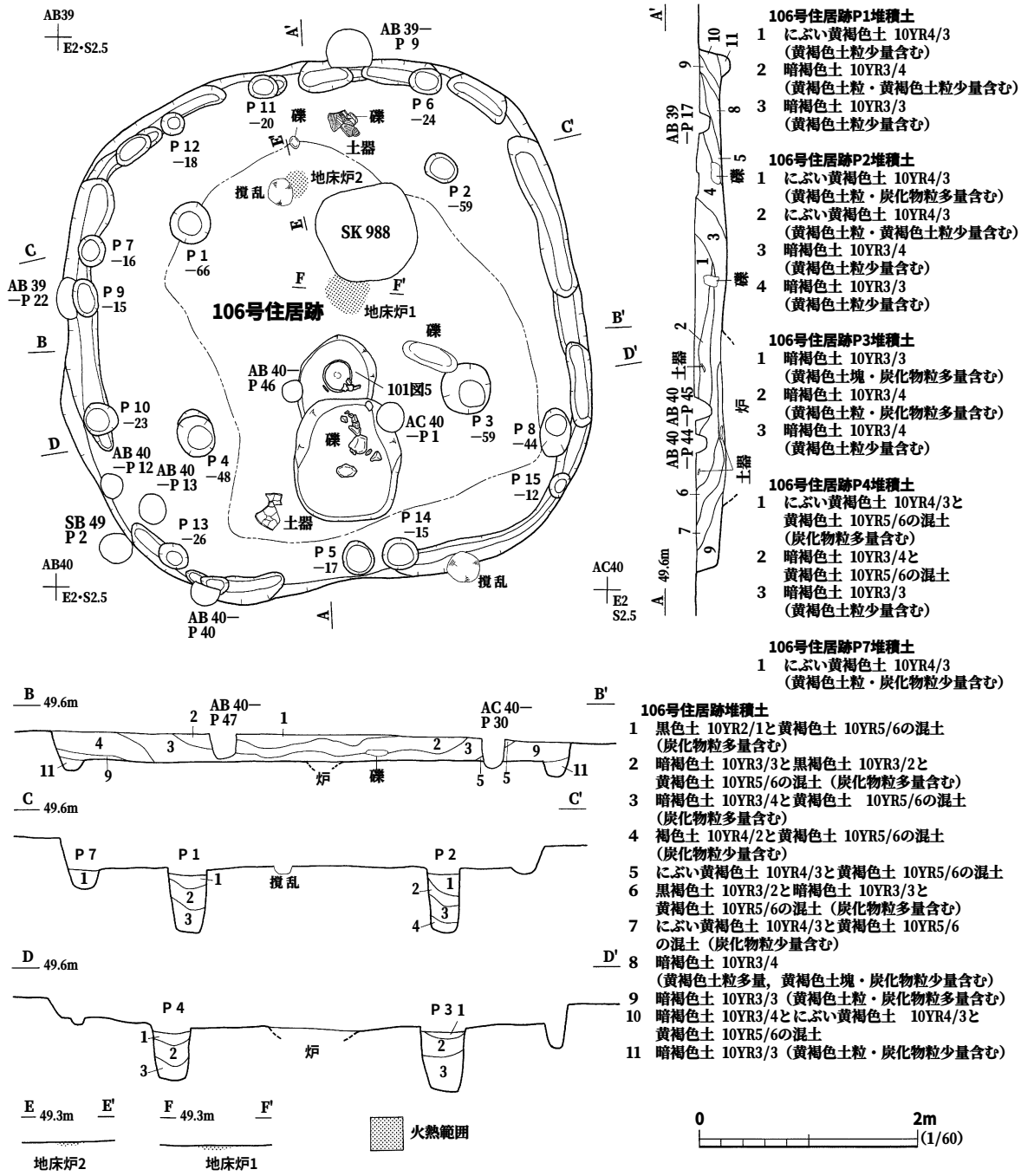
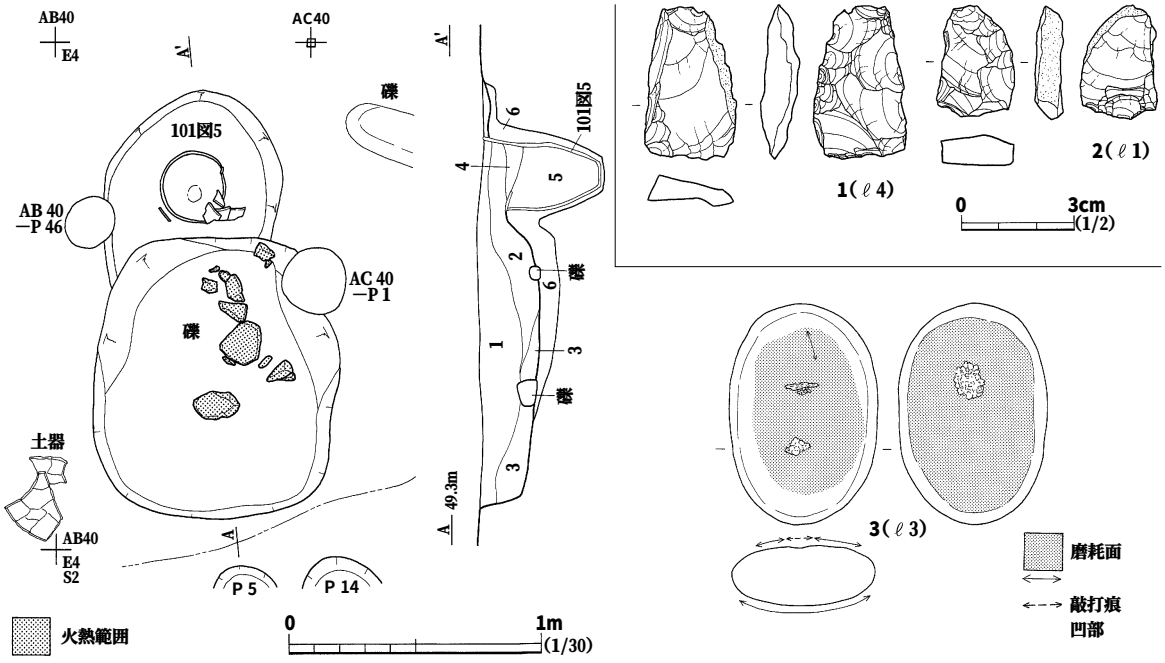


図100　106号住居跡

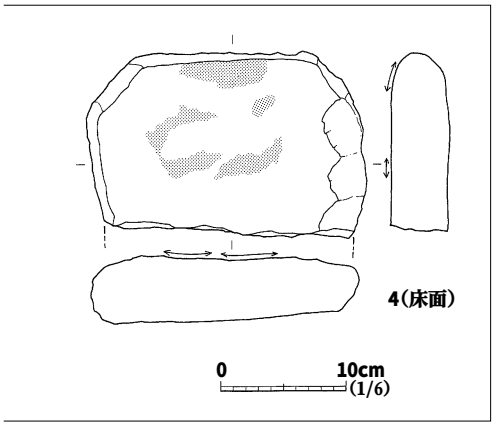
ℓ６は掘形堆積土である。ℓ５上面に炉体土器の一部が壊れて倒れ込んでいるので，廃棄後ℓ５が炉体土器内に投棄されてから，土器埋設部と石組部の縁石が抜き取られたと推定される。また，縁石が抜き取られた後，複式炉全体は人為的に埋められたと考えられる。

(土器埋設部)確認できた形状は不整な円形で，浅い円形状のほぼ中央に炉体土器が遺存している。石組部の上端北端から掘形北端までの長さは約70㎝を測る。

(石組部)廃棄後に大半が壊され，底面に敷石のみがわずかに遺存する。掘形内に扁平な礫を敷き並べて底面としている。石組部の最大幅は推定85㎝を測る。礫の表面は強い火熱を受けて赤色変化し



106号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒多量含む）
6　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒少量含む）



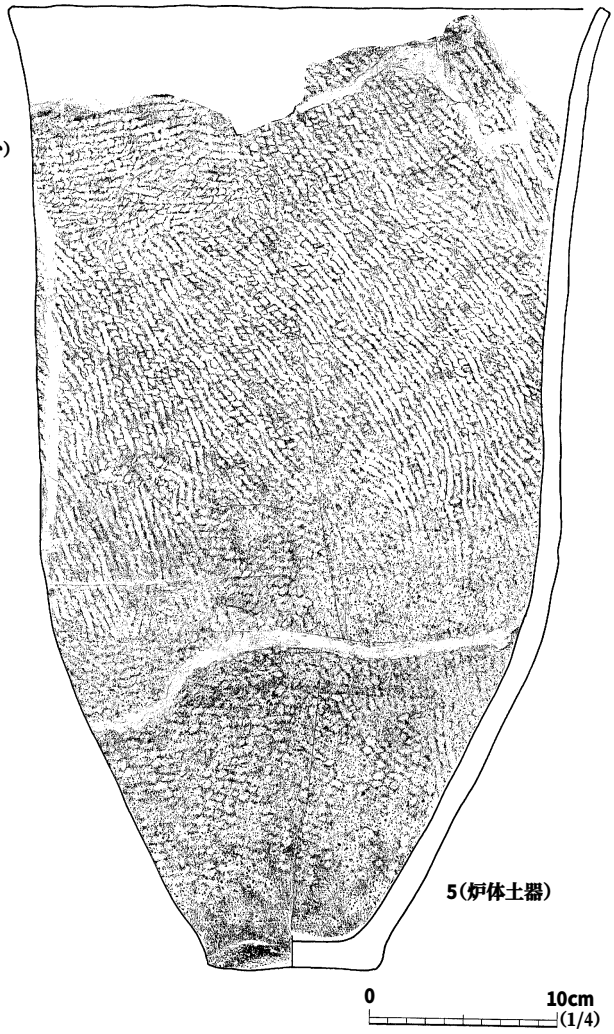


図101　106号住居跡炉と出土遺物

ている。

(前庭部)石組部が壊されているので，前庭部と石組部の区別ができず，全容は不明である。壁は底面から80 °の急な角度で立ち上がり，最大幅92㎝を測る。

地床炉　２基確認され，１基は複式炉土器埋設部から北に約0.2m離れた床面上に位置し(地床炉１)，もう１基は土器埋設部から北に約1.3m離れて位置する(地床炉２)。地床炉２がやや西寄りではあるが，２基とも複式炉の中軸線を意識した位置に設けられている。共に床面が直接熱を受け，地床炉１は径42㎝程，地床炉２は径23㎝程の範囲が薄く赤色変化していた。熱変化を受けた部分は，いずれも床面から２㎝の深さに及んでいた。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。Ｐ１・２，Ｐ３・４は複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.3m，Ｐ２－Ｐ３間が2.1m，Ｐ３－Ｐ４間が2.5m，Ｐ１－Ｐ４間が2.0mと，全体的に長方形の配置となっている。現状の平面形は不整な円形または楕円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が径37㎝，深さ66㎝，Ｐ２が径28㎝，深さ59㎝，Ｐ３が長径50㎝，短径45㎝，深さ59㎝，Ｐ４が長径46㎝，短径33㎝，深さ48㎝を計測する。いずれも廃棄後に柱を抜き取り，柱穴掘形を人為的に埋めたものと推測される。

ピット　主柱穴の他に小さいピットが11個，周壁近くに配置されており，壁柱穴と考えられる。規模は径21～45㎝，深さ12～44㎝を測る。

遺物出土状況　床面から出土したのは石器３点である。この他，堆積土中から縄文土器片187点，石器12点が出土した。

遺物　101図５に炉体土器を示した。体部下半は外傾しながら立ち上がり，体部上位は緩やかに外反しながら口縁部に至る深鉢である。無文口縁で，体部に縄文が施される。

101図１～４に石器を示した。101図１はチャート製の剝片素材石核である。小形の板状剝片を素材とし，主要剝離面を作業面として数回の剝離を行っている。裏面の末端に主要剝離面をとどめる。同図２はチャート製の剝片で，腹面下端部に面的な調整剝離が施されている。同図３はアプライト製の磨石類である。両面に磨耗面が観察され，中央部に浅い凹部が認められた。同図４は閃緑岩製の石皿で，片面に部分的な磨耗痕が観察された。

まとめ　複式炉と，ほぼ長方形に配置された４本の主柱穴を有している。複式炉の中軸線はほぼ南北方向を示しており，その延長線を意識したような位置に地床炉が２基配置されている。また，廃棄後は柱を抜き取り，複式炉を壊した上で，竪穴住居跡全体を人為的に埋めていると考えられる。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期後葉から末葉と考えられる。　（坂　田）

107 号 住 居 跡　ＳＩ107 （図102～104，写真61・62・354）

位置・検出面　北区北端の平坦面のＳ・Ｔ20・21グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の位置は遺構が密集する区域であり，周囲から土坑が多数検出されている。北区北端は竹の根が細かく入り組み，明確に本遺構の平面形をとらえることは困難であった。遺構検出面はＬⅣ上面である。

堆積土　４層に分層した。ℓ１は南西部にのみ確認できる炭化物粒を多量に含んだ黒褐色土層である。ℓ２は住居内堆積土の大半を占める暗褐色土層である。ℓ３は壁際及び床面直上に見られる層である。ℓ４は西壁際にのみ確認できる層である。堆積状況よりℓ１～３は人為堆積，ℓ４は自然堆積と考えられる。

重複　S20グリッドＰ１，T21グリッドＰ６及び743号土坑と重複している。どちらの小穴も本遺構よりも新しい。743号土坑は床面上での検出であり，本住居跡よりも古い遺構である。

平面形・規模　本住居跡は住居の拡張の可能性を考えている。南西壁際の床面がわずかに高く，床面上での複式炉の配置や柱穴位置から考慮すると，一段高い南西床面は本住居拡張時に建て増した部分であると考えられる。新しい段階での平面形は不整な円形で，規模は直径約５ｍである。一段低い床面を拡張以前の平面形と推測すると，北西－南東を主軸にする楕円形であり複式炉の長軸線とも一致する。

床面　底面はＬⅣ上に造られている。床面は若干起伏が認められる。明確な踏み締まり等の痕跡は確認できなかった。前述した拡張範囲である南西壁際床面は，複式炉周辺の床面と比べて一段高く造られていた。

周壁　周壁の立ち上がりは50～60 °の傾斜をもつ。遺存壁高は14～33㎝を測る。周溝は確認できなかった。

複式炉　複式炉は床面中央よりわずかに南東よりに構築されている。主軸方位はN70 °Wである。遺存状況は良好で，複式炉は北から土器埋設部，石組部，前庭部で構成されている。複式炉長軸線上には土器埋設部に接して人頭大の礫を配し，立石としている。この立石は複式炉の掘形内に埋設され，複式炉構築当初より配石を意識して構築していたことが推定できる。なお，確認できた複式炉の下位に，古い段階の土器埋設部が認められたため，本炉は住居拡張に伴い造り替えられたものと判断している。新しい段階をａ炉，古い段階をｂ炉とする。

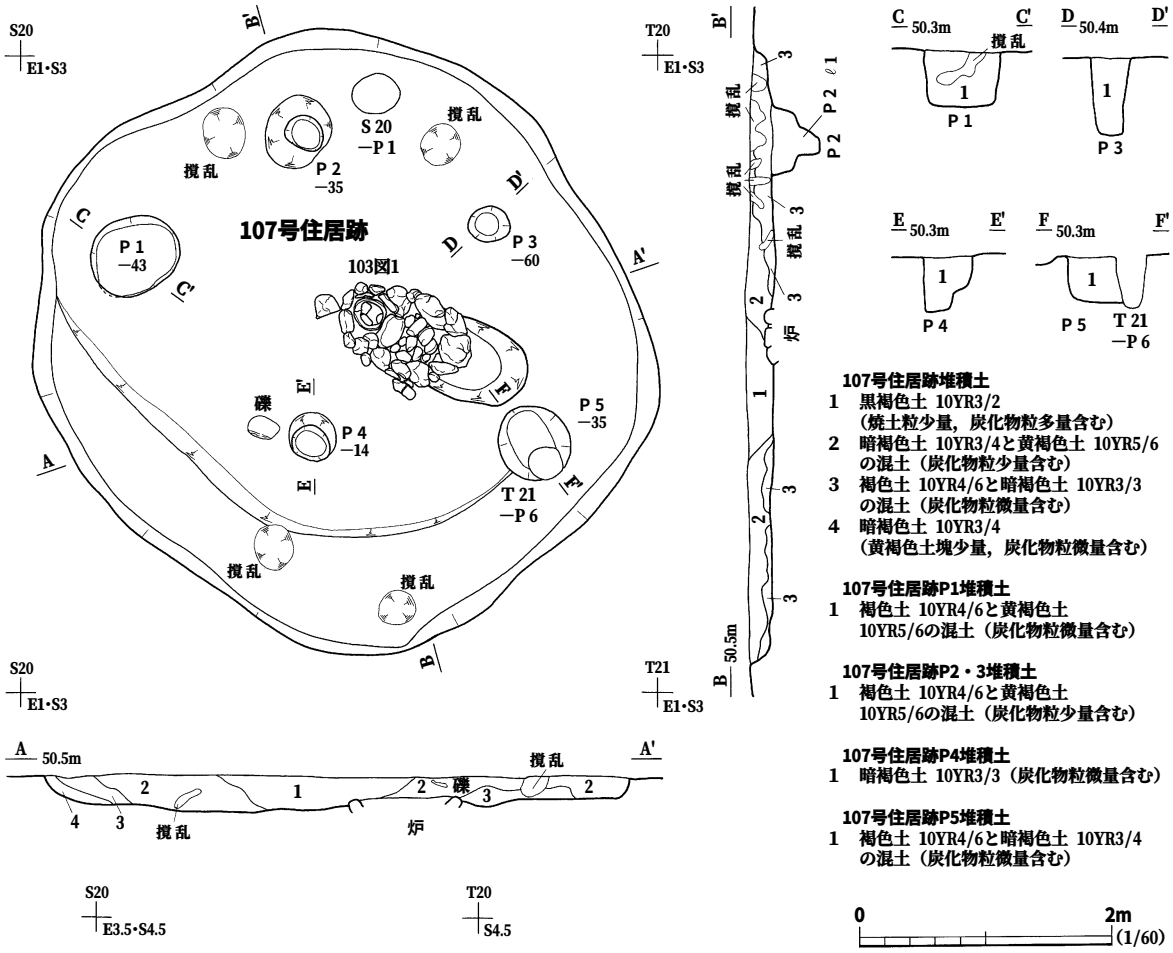
ａ炉　土器埋設部・石組部・前庭部からなる。

(規模)全長1.6m，最大幅は0.9mである。立石を含めると全長1.8mとなる。

(堆積土)堆積土は４層に分層した。ℓ１・２は本住居廃絶後に堆積した層である。ℓ１とした炉体土器内の堆積土は炭化物を含んだ暗褐色土であり，遺構内堆積土ℓ２と同層である。ℓ２は遺構内堆積土ℓ２とほぼ同層である。ℓ３・４は掘形堆積土である。ℓ３は土器埋設部・石組部下に認められ，ａ炉の掘形層である。ℓ４はℓ３下位に見られる層である。石組部下の掘形内で一段深く掘り込まれた部分には黒く焼けた土器が埋設され，拳大の礫も混入していた。この状況より，ａ炉は造り替えられた炉と判断した。この土器と礫はｂ炉に用いられ，複式炉を造り替える際に廃棄し埋めたものであると推測している。ａ炉はｂ炉よりも10㎝程南東に移動して構築されている。

(土器埋設部)土器埋設部には胴部上半のみの深鉢形土器が埋設されている。炉体土器の周囲には15～20㎝前後の楕円礫や角礫を巡らしている。炉体土器の外側には被熱の痕跡が認められた。

(石組部)30～50㎝大の大型の亜角礫で壁面を固め，10～15㎝程度の小型の円礫で石組部底面を敷き



107号住居跡堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2
（焼土粒少量，炭化物粒多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6
の混土（炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/3
の混土（炭化物粒微量含む）
4　暗褐色土 10YR3/4
（黄褐色土塊少量，炭化物粒微量含む）

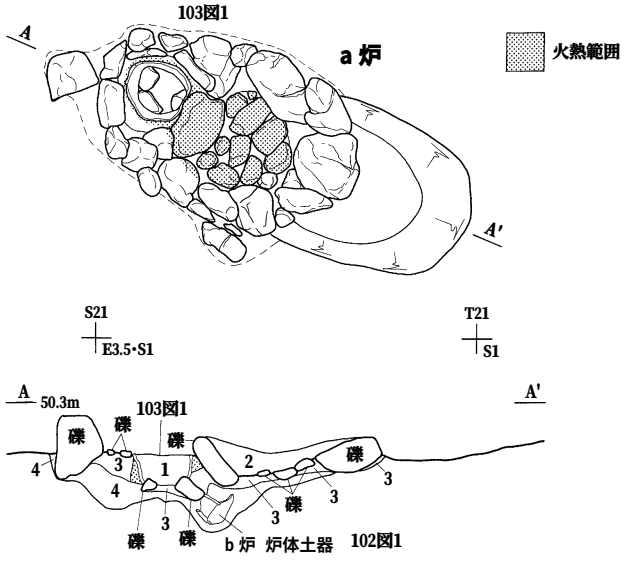
107号住居跡P1堆積土
1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土
10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）

107号住居跡P2・3堆積土
1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土
10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）

107号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）

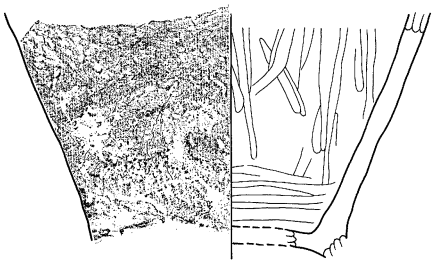
107号住居跡P5堆積土
1　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/4
の混土（炭化物粒微量含む）

0　2m
(1/60)



107号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）

0　1m
(1/30)



1(炉 ℓ 4)

1　10cm
(1/3)

図102　107号住居跡と出土遺物(1)

詰めている。床面から石組部底面までの深さは20㎝と浅いが，土器埋設部に接する北西壁の石組部の礫が床面から15㎝程度高くしていることで，結果として深い石組部を造り出して火床のバランスをとっている。石組部底面礫は強い火熱を受けてもろくなったものが多い。

(前庭部)床面よりわずかに緩くくぼんでいる程度である。長さが84㎝，最大幅が62㎝である。

ｂ炉　大半がａ炉構築時に破壊され，遺存していない。確認できたのは，炉体土器と思われる土器と，石組部を構成したと思われる礫であり，これらはいずれもａ炉掘形堆積土のℓ４から出土している。

主柱穴　主柱穴はＰ１～５の５本である。普遍的に５本主柱穴をもつ場合，特徴として柱穴の１本が複式炉中央長軸線上に位置するが，本住居跡の配置は不規則となっている。この不規則性は住居の拡張を行った所以であると考えられる。柱穴の配置から拡張以前の柱穴はＰ１～４までの４本の主柱穴をもつ住居跡であったと考えられる。拡張する時に複式炉前庭部南にＰ５を新たに配し，５本の主柱穴を有する住居として建て替えられたと推測している。規模はＰ１が長径72㎝，短径64㎝，深さ43㎝である。Ｐ２は長径58㎝，短径52㎝，深さ35㎝である。Ｐ３は長径34㎝，短径27㎝，深さ60㎝である。Ｐ４は長径38㎝，短径37㎝，深さ14㎝である。Ｐ５の長径はＴ21グリッドＰ６により破壊され明確ではないが，平面形より57㎝程であろうと推測できる。短径は56㎝，深さ36㎝である。各主柱穴間はＰ１－Ｐ２間は1.7m，Ｐ２－Ｐ３間は1.6m，Ｐ３－Ｐ５間は1.8m，Ｐ５－Ｐ４間は1.7m，Ｐ４－Ｐ１間は2.0mとおおむね揃っている。本住居跡は拡張により居住域を増やし，柱を４本から５本としている。本遺構にともなう他のピットは確認できなかった。

遺物出土状況　出土遺物の多くは堆積土内からの出土であり，縄文土器片74点，石器15点が出土している。

遺物　102図１はａ炉掘形堆積土のℓ４から出土した小型の深鉢形土器である。内外面ともに黒褐色であり，内面をミガキで仕上げ，外面には粗い縄文を施文している。この土器はｂ炉の埋設土器である可能性を考えている。103図１はａ炉の炉体土器である。大型の深鉢形土器の体部の一部分のみを埋設土器として使用している。体部に縄文を施文し，磨り消してH字状の文様を描出している。内外面ともに赤色に変色し，火熱を受けていたことがわかる。この埋設土器の底部には３つの礫が置かれ，３点で支持していた。103図２～５，104図１～４は深鉢形土器である。すべて堆積土中からの出土である。本遺構上層は人為堆積であり，本遺構に投棄された遺物である。103図２は体部上半から口縁部にかけての資料で，体部の上位でわずかにくびれ口縁部に至る。口縁部に一条の横線を引いて口縁部と体部とを分帯し，口唇部は無文，体部には縄文を施文している。同図３は体部から口縁部にかけての資料で，体部から口縁部にかけて大きく外反するラッパ形の器形である。体部全面に縄文を施文後，口縁部直下に沈線を引いて口縁部と体部とを区画している。同図４は曲線的な沈線による区画内に縄文を充填している。同図５は縄文施文後，隆沈線により曲線的な文様を描く。104図１～３は曲線的な沈線により区画を描出し，区画内を斜縄文で充填している。同図５はスタンプ形土製品である。つまみ部は遺存していない。底面には幾重にも円が描出されている。側面に２個の刺突が確認できる。同図６はアプライト製の磨石類である。器面の一部に磨耗面と敲

図103　107号住居跡出土遺物(2)

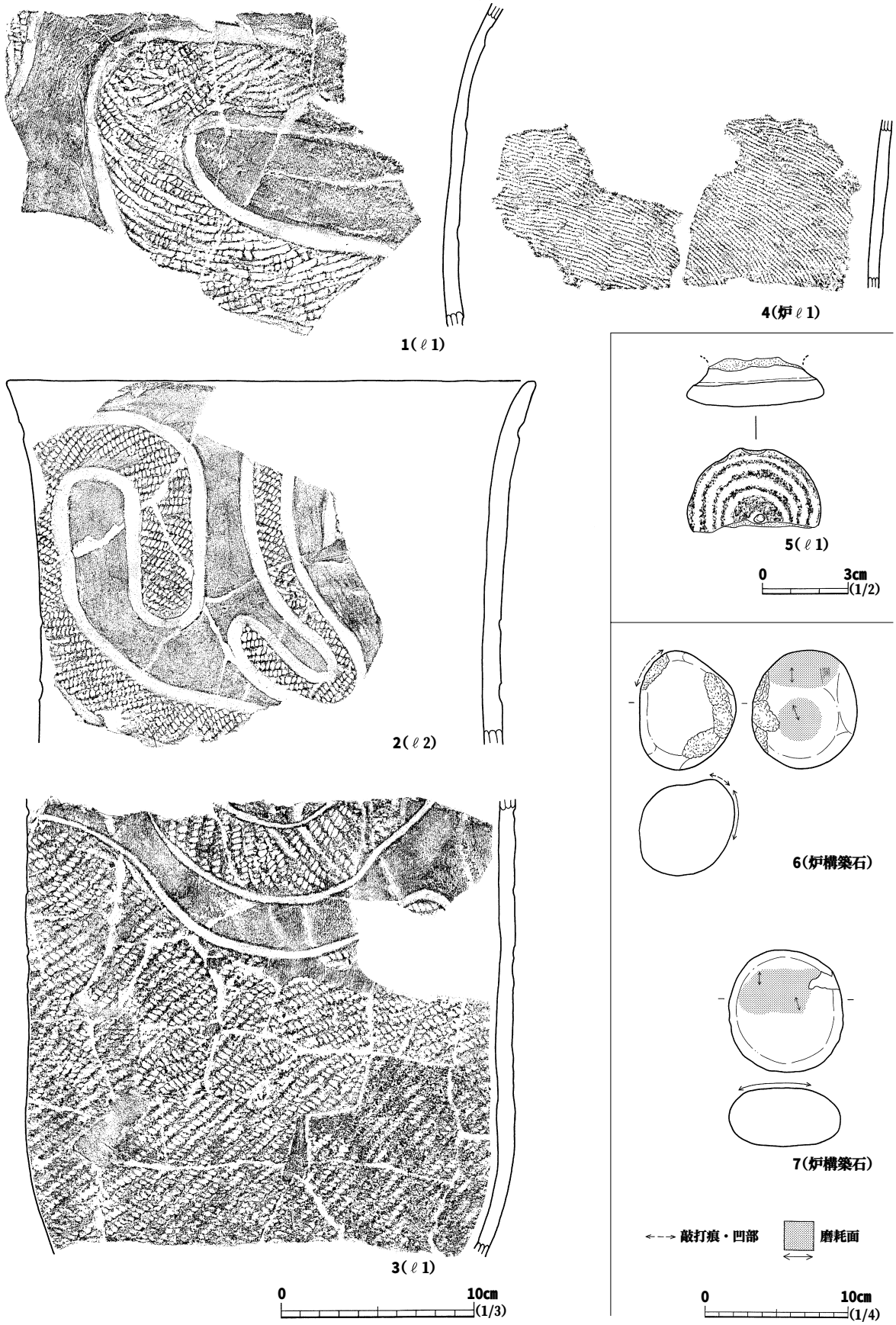


図104　107号住居跡出土遺物(3)

打痕が観察された。同図７は複式炉の構築石として用いられていた磨石である。ひん岩の扁平礫を素材とし，器面の一部に磨耗面が観察された。

まとめ　複式炉をもつ不整円形の竪穴住居跡である。床面の形状より住居の拡張が考えられる。また，確認できた複式炉掘形の下層から出土した土器及びその掘形の形状を考慮すると，炉の造り替えの痕跡も認められる。これらは個々に行ったのではないと推測している。南西の住居域を拡張するにあたり南壁寄りであった複式炉を確認できた位置に造り替えを行っている。さらに，造り替えた複式炉の南にＰ５を主柱穴の一つとして配し，拡張した南西壁や上屋を強化する役割を担わせたと推測できる。複式炉の形態は縁石が土器埋設部と石組部を巡り，前庭部は退化し痕跡のみをとどめている。土器埋設部北西の複式炉長軸線上には立石が配され，中央を意識して複式炉を構築している。また，住居廃絶時にはいずれの柱も抜き取られ竪穴を埋めている。本遺構が機能していた時期は複式炉の形態及び炉体土器の特徴から，縄文時代中期末葉と考えられる。　（三　浦）

108 号 住 居 跡　ＳＩ108 （図105，写真63・64）

位置・検出面　北区東端平坦面のＶ・W22・23グリッドに位置する。東壁にカマドを敷設する竪穴住居跡である。ＬⅣより上位の層でぼやけた黒褐色の方形の平面形として本遺構を確認したが，調査以前の現況が竹林であったことによる竹の根の多数の撹乱により，本住居跡の平面形を確実にとらえることに難航した。そのため，ＬⅣ上面まで下げて平面形の検出を行った。

重複　数多くの遺構が密集する地域に位置し，本遺構も例外なく多くの遺構と重複している。いずれも本遺構の方が新しい。しかし，1263号土坑との重複関係を見誤り，本遺構の北東隅を破壊してしまった。

堆積土　３層に分層できた。ℓ１は黒褐色土層であり，ℓ２は暗褐色土を主体とした層である。いずれも自然堆積の可能性を考えている。ℓ３は黒褐色土と暗褐色土の混土であり，貼床土である。

平面形・規模　方形であるが，南壁と西壁の一部に若干の膨らみをもっている。長軸方向はN90°Wである。規模は南北軸3.8m，東西軸4.0mである。ほぼ正方形であるが，東西軸の方が若干長い。

周壁　検出面から床面までの深さは，遺存の良い西壁で21㎝，遺存の悪い南壁では11㎝を測る。周壁は75～85°の角度で立ち上がる。周溝は確認されていない。

床面　わずかに凹凸があるものの，おおむね平坦である。全面貼床で形成されているが，明確な硬化状況は確認できなかった。

カマド　東壁の中央で１基確認した。東壁から長さ80㎝，幅60㎝程掘り込んで造られていた。カマドの遺存状態は悪く，南袖のみと煙道部を確認した。カマド燃焼部の南寄りには25㎝×15㎝の焼土化範囲が確認できた。カマド壁には明瞭な火熱の痕跡は見受けられなかった。

(堆積土)カマド内の堆積土は４層に分層した。ℓ１は赤褐色土を主体とする灰黄褐色土を含んだ層で，カマドの燃焼部崩落土，ℓ２～４は黒褐色土を主体とした褐色土を含む混土である。

ピット　床面上から５個確認した。Ｐ１・４は本住居跡の主柱穴と想定できる位置にあり，その規

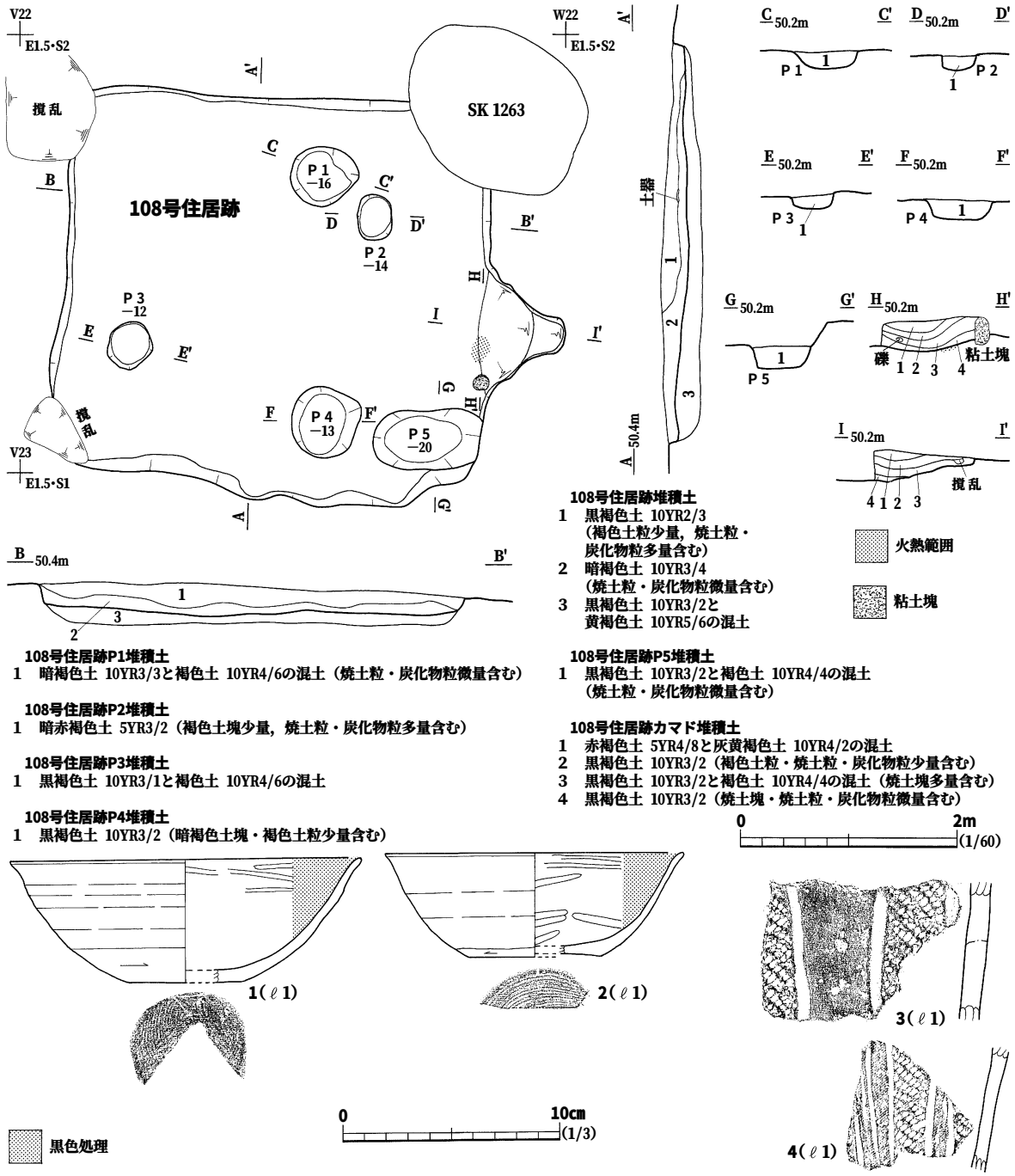


図105　108号住居跡と出土遺物

模は長径64㎝，短径55～60㎝である。床面からの深さは13～16㎝である。Ｐ１の遺構内堆積土は褐色土を多量に含んだ暗褐色土，Ｐ４は黒褐色土主体の層である。Ｐ２はＰ１のすぐ南東側に位置する。長径42㎝，短径32㎝，床面からの深さ14㎝である。Ｐ３は本住居跡南西に位置し，長径45㎝，短径40㎝，床面からの深さ12㎝である。Ｐ２・３は小型のピットであり，規模も同程度である。堆積土はそれぞれ異なり，Ｐ２は暗赤褐色土，Ｐ３は黒褐色土と褐色土の混土である。Ｐ５は本遺構南東隅のカマドが敷設されている南側に位置することから，貯蔵穴の機能を果たしていたピットであると考えられる。Ｐ５内からの遺物などの出土はなく，堆積土は褐色土を多量に含んだ黒褐色土

層である。

遺物出土状況　本住居内堆積土からの出土が多い。床面上からの遺物の出土は極わずかである。また，堆積土中から縄文土器片もわずかに出土している。

遺物　本住居跡出土の土師器片は210点である。土師器２点と縄文土器片２点を図示した。105図１・２ともに底部に糸切り痕が確認できるロクロ成形の杯である。外面底部には回転ヘラケズリが施され，内面は黒色処理され磨かれている。105図３・４は縄文土器片の体部資料である。沈線により縦位に区画し，区画内に縄文を施している。本住居跡の堆積土中に紛れ込んだものと考えている。

まとめ　本遺構はほぼ正方形の竪穴住居跡である。東壁にカマドを敷設するが，カマドの遺存状況が悪く南袖のみが残存していた。床面上からピット５個を検出している。Ｐ１・４は本住居内での位置から主柱穴の可能性を考えられるが，床面からの深さが浅いため断定はできない。確認できた本住居跡の柱穴配置では，上屋構造の復元に苦慮するところである。Ｐ５は検出した位置や規模から貯蔵穴的な性格をもったピットであると考えている。本遺構の出土遺物はわずかであるが，カマドを有する他の住居跡との関連から，平安時代の住居跡であることが推測できる。　（三　浦）

109 号 住 居 跡　ＳＩ109 （図106～109，写真65・66・355）

位置・検出面　北区北東部の平坦面，Ｕ・Ｖ21～23グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の西側には792号土坑，南東側には1535・1542号土坑，南西側には727号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，黒色土とにぶい黄褐色土で埋まった径5.5m程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　108号住居跡，960・1227号土坑と重複し，いずれよりも本住居跡が古い。

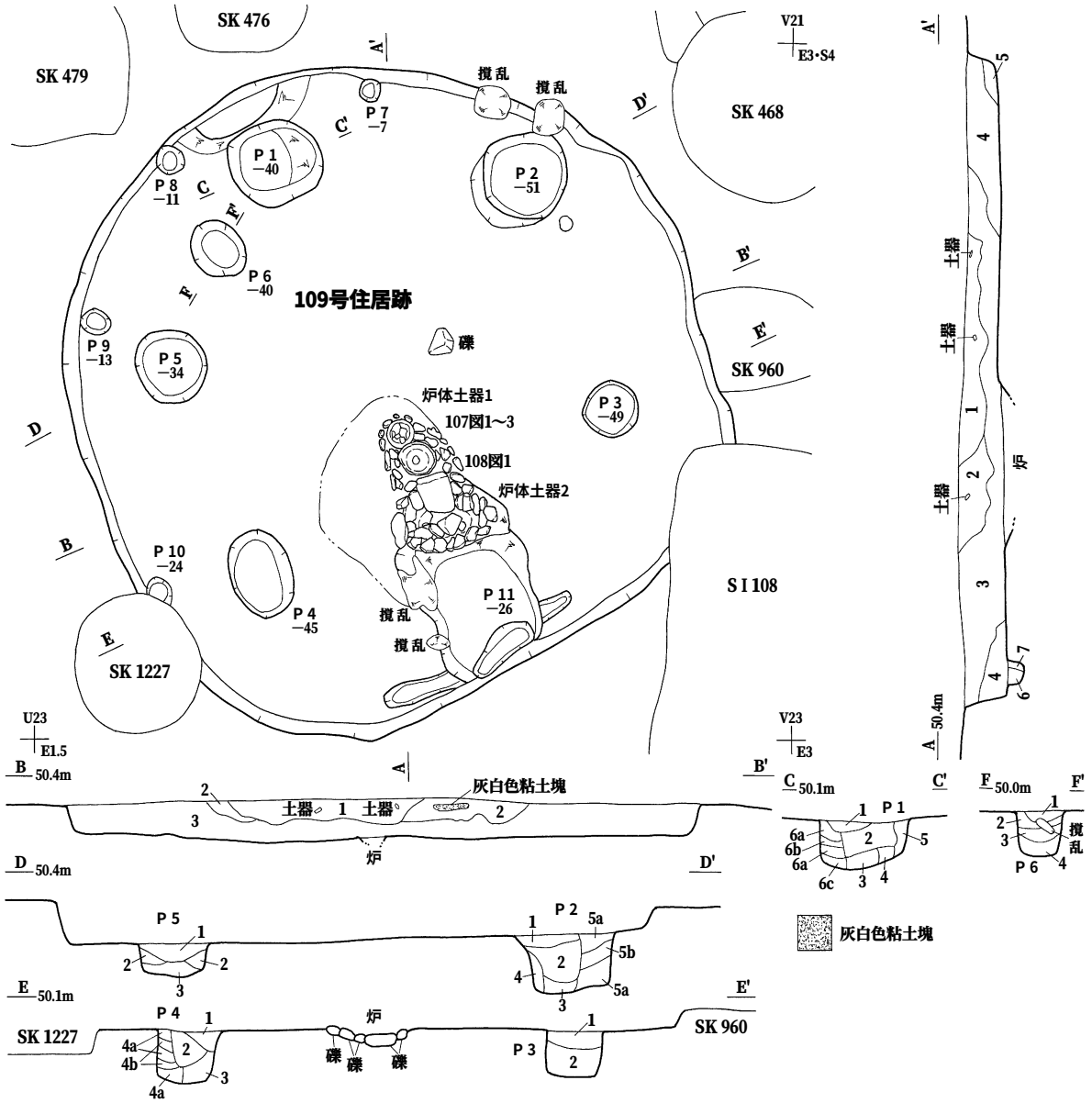
堆積土　７層に分層した。ℓ１・２は炉体土器の底部にたまった黒色土に近似する土である。ℓ３・７は褐色系の土を基調とし，ℓ４～６は暗褐色系の土を基調としている。いずれの層も黄褐色土との混土であることから，人為堆積土と考えられる。したがって，本住居跡は廃棄後に人為的な投棄土により埋没したものと推察される。

平面形・規模　円形に近い不整な隅丸方形である。長軸方向はＮ30 ℃Ｗで，その規模は現状の壁上端で長軸の南北長5.7m，東西長5.5mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成される。ほぼ平坦だが，南西部に向かって緩やかに傾斜している。北西壁際には床面から６～９㎝程の高まりが認められた。床面の硬化が認められないので，86号住居跡に確認されたような棚状の遺構と考えられる。複式炉の北西側は硬く締まっていた。

周壁　床面から70～75 ℃の急な角度で立ち上がり，遺存壁高は16～36㎝を計測する。南東壁と南西壁の一部は108号住居跡と1227号土坑により壊され，遺存していない。

周溝　複式炉前庭部が周壁に接する南東部にのみ確認された。前庭部の両脇にある溝は壁際からやや内側にあり，壁際からの距離は最大で28㎝程である。溝の上端幅は12～25㎝，床面からの深さは５～24㎝を計測する。また，前庭部底面の壁際が溝状に掘削されているが，これは前庭部に伴う溝



109号住居跡堆積土
1　黒色土 10YR2/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
　（焼土粒少量，炭化物粒多量含む）
2　黒褐色土 10YR3/2と灰黄褐色土 10YR4/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
　（炭化物粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　暗褐色土 10YR3/4と黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　暗褐色土 10YR3/3と暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
6　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
7　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土

109号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黒褐色土塊・黄褐色土塊多量，炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊多量，炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（黒褐色土粒少量・黄褐色土塊多量含む）
4　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/4と黒褐色土 10YR3/2の混土
5　暗褐色土 10YR3/3と黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
6a　黒褐色土 10YR3/2と暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
6b　暗褐色土 10YR3/4と黒褐色土 10YR3/2の混土
6c　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/4の混土

109号住居跡P6堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/6とにぶい黄褐色土 10YR4/3と黒褐色土 10YR3/2と
　黄褐色土 10YR5/6の混土
4　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

109号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・黄褐色土塊多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊・黄褐色土粒多量，黒褐色土塊少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・黄褐色土塊多量含む）
4　黒褐色土 10YR3/2と暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
5a　黒褐色土 10YR3/2と暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
5b　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）

109号住居跡P3堆積土
1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

109号住居跡P4堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒・黄褐色土塊多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黒褐色土塊少量，黄褐色土粒・黄褐色土塊多量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・黄褐色土塊少量含む）
4a　黒褐色土 10YR3/2とにぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
4b　褐色土 10YR4/6とにぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

109号住居跡P5堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/6と黒褐色土 10YR3/2の混土

図106　109号住居跡

状のピットと判断した。

複式炉　複式炉は床面の南東側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されており，前庭部は南東壁に接する。遺存状態は良好で，楕円形状の土器埋設部に２個の炉体土器を設置し，台形状の石組部と不整な隅丸長方形状の前庭部により構成されている。

（規模）炉中軸線はN30 ℃Wであり，全長230㎝，最大幅105㎝を測る。

（堆積土）８層に分層した。ℓ１～３は黄褐色土の小塊を数多く含むことから，人為堆積土と考えられる。ℓ４・５は炉体土器の底部付近にたまった黒色土であり，使用時の堆積土と推察される。この黒色土が堆積していた痕跡は，炉体土器１では底部から高さ10㎝まで，炉体土器２では底部から高さ24㎝まで認められ，後述する炉体土器内面は，図107右側の断面に矢印で示した部分が黒色を呈していた。ℓ６・７はＰ11堆積土，ℓ８は掘形堆積土である。

（土器埋設部）２個体の炉体土器が中軸線上に南北に埋設されている。南側の炉体土器２に接して長さ５～13㎝の不整な角礫を敷き，さらに，その外側と北側の炉体土器１を囲むように，長さ５～14㎝の直方体状や不整な角礫などを並べ縁石としている。炉体土器１は胴下半部を切断した深鉢で，口縁部を上にして埋設され，底部には土器片が敷かれている。炉体土器２は底部から胴上半部にかけての深鉢で，正立状態で設置されている。東西方向の長さは50㎝で，炉体土器間の土は強く焼土化している。

（石組部）掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面とし，その上に板状の礫と掌大の礫を積み上げて外傾する側壁を造っている。土器埋設部との間には，特に大型の板状の礫が用いられている。石組部の最大幅は92㎝，南北方向の長さは68㎝を測る。礫は表面に強い火熱を受けてもろくなったり，赤色変化している。

（前庭部）南北方向に長い隅丸長方形であり，壁は底面から65～70 ℃の角度で立ち上がる。規模は最大幅105㎝，南北方向の長さ102㎝を測る。南東隅の底面に溝状のピットが検出されている。

主柱穴　主柱穴はＰ１～５の５個である。Ｐ１は北西壁際，Ｐ２・５，Ｐ３・４は複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.3m，Ｐ２－Ｐ３間が2.1m，Ｐ３－Ｐ４間が3.3m，Ｐ４－Ｐ５間が2.0m，Ｐ１－Ｐ５間が1.9mで，全体的に五角形の配置となっている。現状の平面形は不整な円形もしくは楕円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が径78㎝，深さ40㎝，Ｐ２が径72㎝，深さ51㎝，Ｐ３が径48㎝，深さ49㎝，Ｐ４が長径76㎝，短径52㎝，深さ45㎝，Ｐ５が径62㎝，深さ34㎝を計測する。Ｐ１・２・４は柱の抜き取り痕が認められ，抜き取り痕の周囲には柱を立てた際の版築状の堆積土が認められた。この版築状堆積土は，黒褐色土や暗褐色土もしくは黄褐色土の交互層であり，非常に丁寧な構築状況を示している。Ｐ３・５内堆積土では，このような版築状堆積土は認められなかったが，柱を抜き取った後，人為的に埋めたものと推察される。

ピット　主柱穴の他に，小さいピットが５個，溝状のピットが１個ある。Ｐ６は複式炉の中軸線からやや西側にずれた位置にある。規模は長径52㎝，短径44㎝，深さ40㎝を計測する。Ｐ７・８は棚

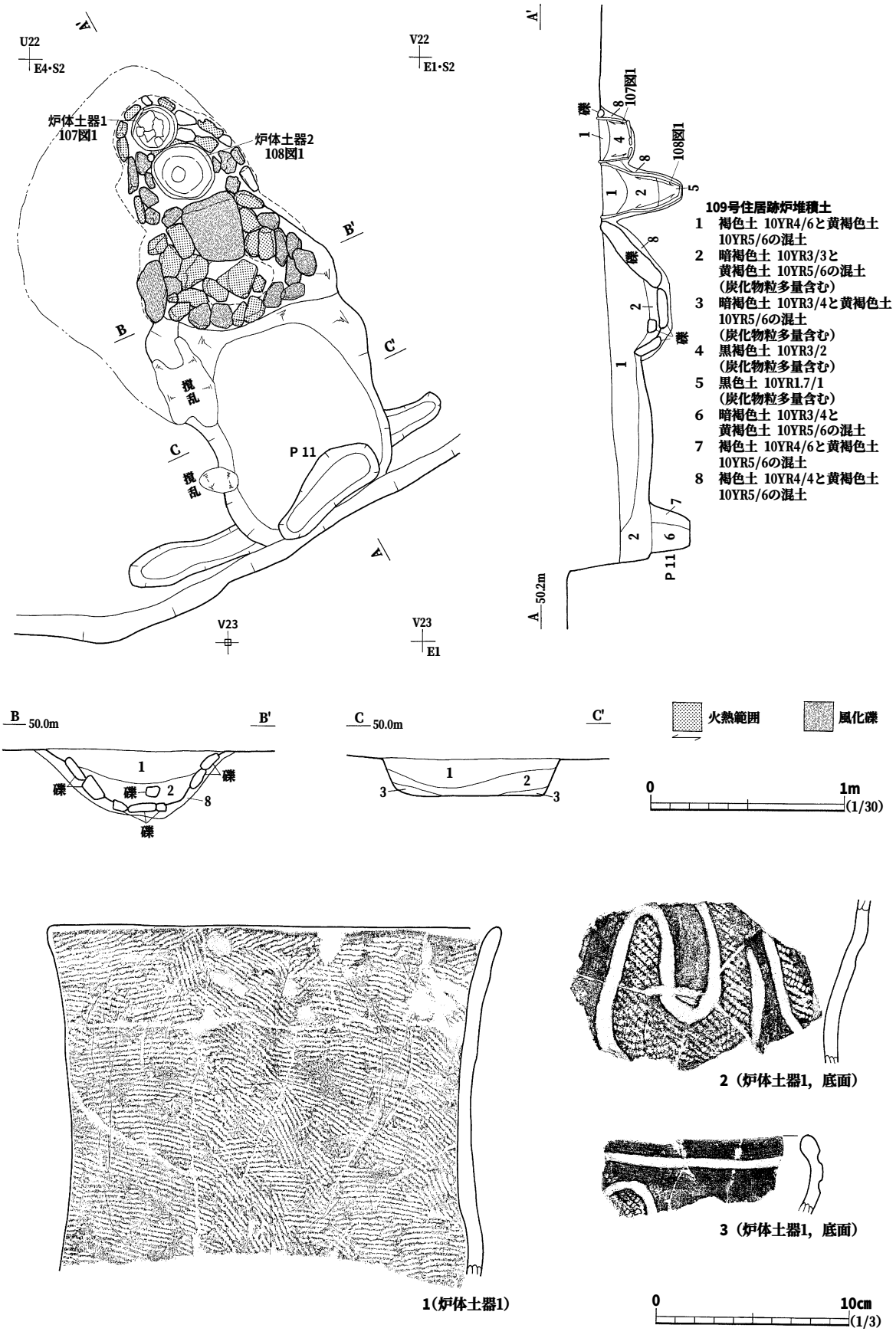


図107　109号住居跡炉と出土遺物(1)

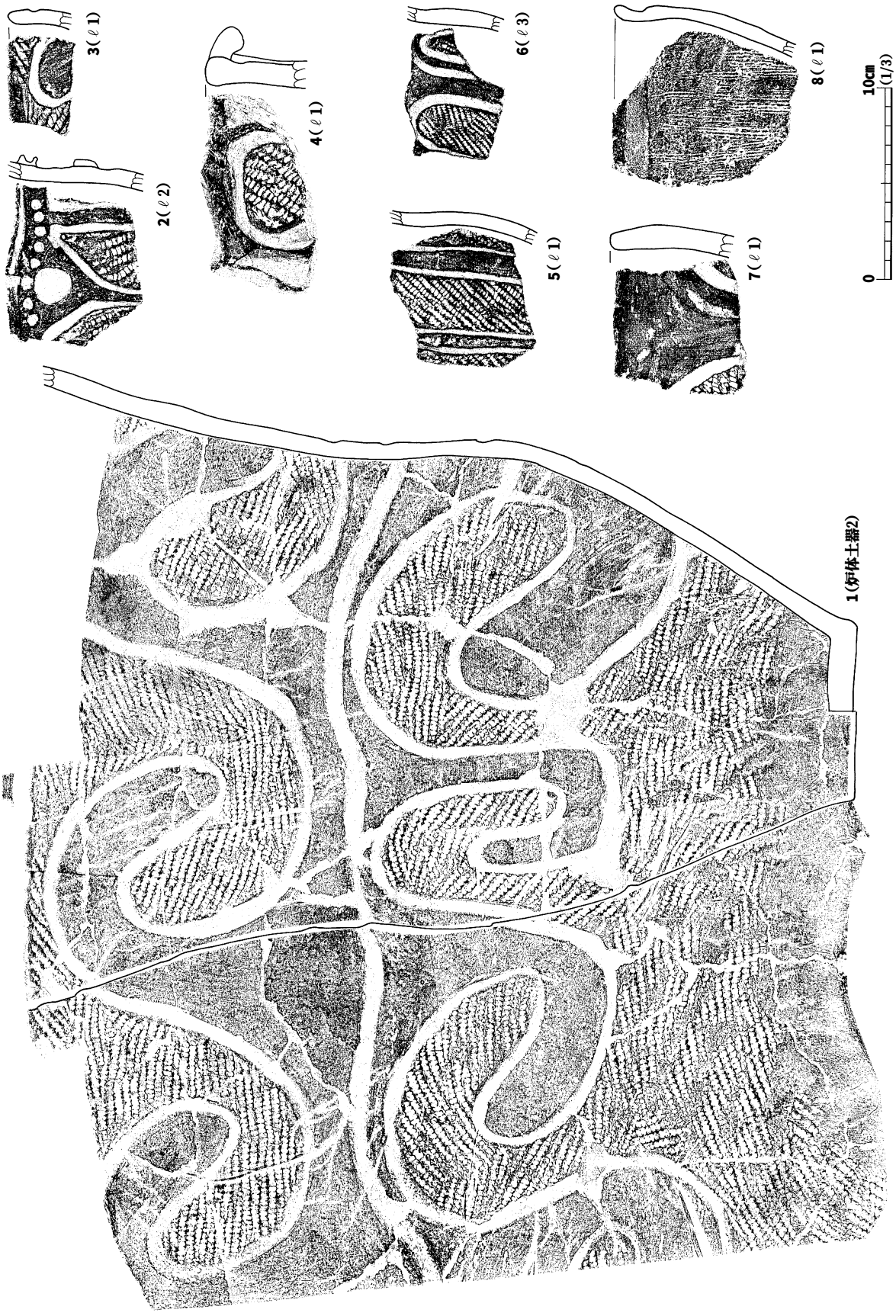


図108　109号住居跡出土遺物(2)

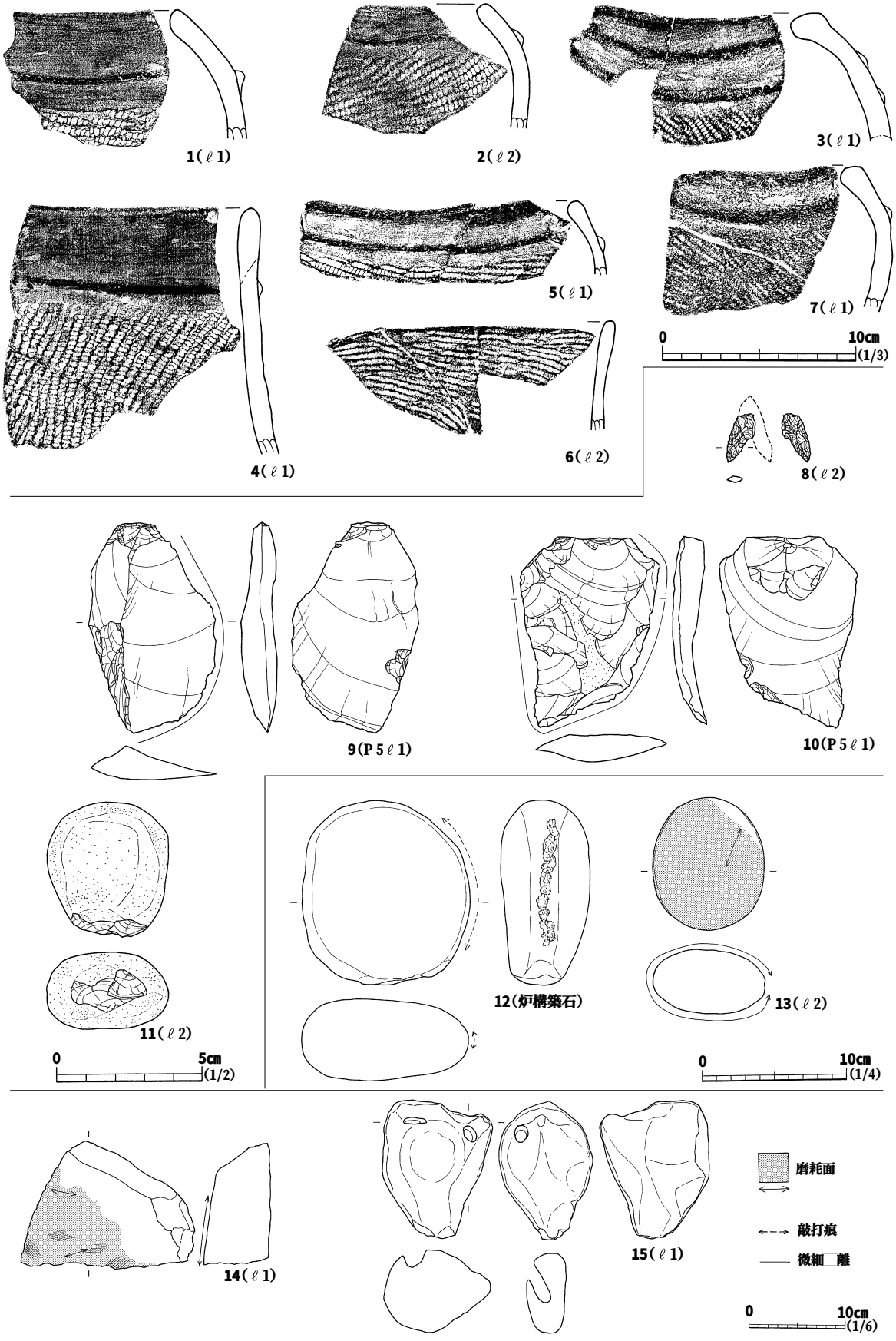


図109　109号住居跡出土遺物(3)

状の遺構の両脇に位置し，これに伴う柱穴と考えられる。規模は径18～22㎝，深さ７～11㎝を測る。Ｐ９・10は周壁近くに配置されていることから，壁柱穴と推察される。規模は径20～26㎝，深さ13～24㎝を測る。Ｐ11は複式炉前庭部の南端に位置し，前庭部に伴うピットと考えられる。溝状で，規模は東西93㎝，南北15～25㎝，前庭部底面からの深さは最大26㎝を測る。

遺物出土状況　床面から出土したのは，石器１点である。107図２・３に示した縄文土器は，炉体土器１の底部に敷かれていた土器片で，109図13は複式炉の縁石に用いられた敲石である。この他，堆積土中から縄文土器片422点，石器79点が出土した。

遺物　107・108図，109図１～８に縄文土器を示した。107図１は炉体土器１で，胴部下半が切断された深鉢形土器である。胴部上位でわずかにくびれ，外反しながら口縁部に至る器形で，外面にＬ無節の原体で縄文が施文されている。108図１は炉体土器２である。胴部中位でわずかにくびれ，外反しながら口縁部に至る。胴部中央の波状沈線により文様帯を区画し，上位にはＪ字状文，下位には逆Ｊ字状文が磨消縄文で構成されている。108図２は，口縁部に隆帯が巡り，隆帯上には円形の刺突が施されている。胴部には隆帯と沈線で区画文が施され，区画文の中央には盲孔がうがたれている。107図２・３，108図３～７は，いずれも沈線や隆沈線でＪ字文や楕円形文が施された深鉢の破片である。108図８は口縁部が無文で，胴部にハケメ状の条線が施された粗製土器である。109図１～５・７は口縁部と胴部の境に隆帯が巡る深鉢形土器の破片である。109図６は器面全面に無節のＬ縄文が施されている。

109図８～15に石器を示した。109図８はチャート製の凹基無茎石鏃である。先端部と基部の片側を欠損しているが，表裏面とも比較的丁寧な調整剝離が施されている。109図９・10は珪質頁岩製の縦長剝片である。両者とも縁辺部には微細剝離痕が観察された。９の背面左側縁の剝離痕は石核調整痕で，主要剝離面より古い。109図11は鉄石英製の初期石核である。円礫の一端に２回の打撃を加えている。109図12は斑状の流紋岩製の敲石で，側面に敲打痕が観察できる。109図13はアプライト製の磨石で，両面に光沢を帯びた磨耗痕が観察される。109図14は粗質の流紋岩製の石皿で，使用により磨耗面が光沢を帯びている。109図15は砂岩製の石製品である。礫の一端を扁平湾曲させ，２カ所に盲孔をうがいている。

まとめ　定型化したやや大型の複式炉と，五角形に配置された５本の主柱穴を有している。複式炉の中軸線の延長線を意識したような北西壁際に，棚状の遺構が認められた。この棚状の遺構は，86号住居跡で確認されたものと同様に，祭壇のような役割を果たしていたと推察される。また，廃棄後は柱を抜き取った上で，竪穴全体を人為的に埋めていると考えられる。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階である。　（坂　田）

111号住居跡　ＳＩ111　（図110～112，写真67・68・355）

位置・検出面　北区中央部の平坦面，Ｕ・Ｖ33・34グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の西側には113・114号住居跡，北西側には115号住居跡，北東側には116号住居跡が隣接している。

検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色土で埋まった径5.0m程の円形の輪郭を検出した。しかし東壁側はすでに削平を受け，輪郭は確定できなかった。

重複　17号建物跡とU33グリッドの小穴が重複し，本遺構はそれより古い。1346号土坑と本遺構北側も重複し，本遺構はそれより新しい。

堆積土　ℓ１～３は，基本土層のＬⅢに類似した褐色土や暗褐色土を主体として，黄褐色土であるＬⅣを微量含んでいる。ℓ４・６はＬⅣである黄褐色土を粒状に多く含むことから，壁の崩落土とみられる。ℓ５は複式炉直上に堆積し，炉内堆積土ℓ１・３と同一の土である。これらの住居内堆積土は壁際から流れ込んだような堆積状況が観察されることから，自然堆積土と判断した。

平面形・規模　平面形は全体的に丸みを帯びた隅丸方形である。複式炉を通る南北の中央軸線はほぼ真北を示している。規模は現存する上端幅で南北長4.8m，東西長5.0mを測る。

床面　基本土層のＬⅣにより形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。また複式炉の周辺やＰ１～４で囲まれた床面中央は，硬く締まっていた。

周壁　床面から60～70°のやや急角度で立ち上がり，遺存壁高は10～15cmと浅い。東壁は撹乱によって壊されていた。

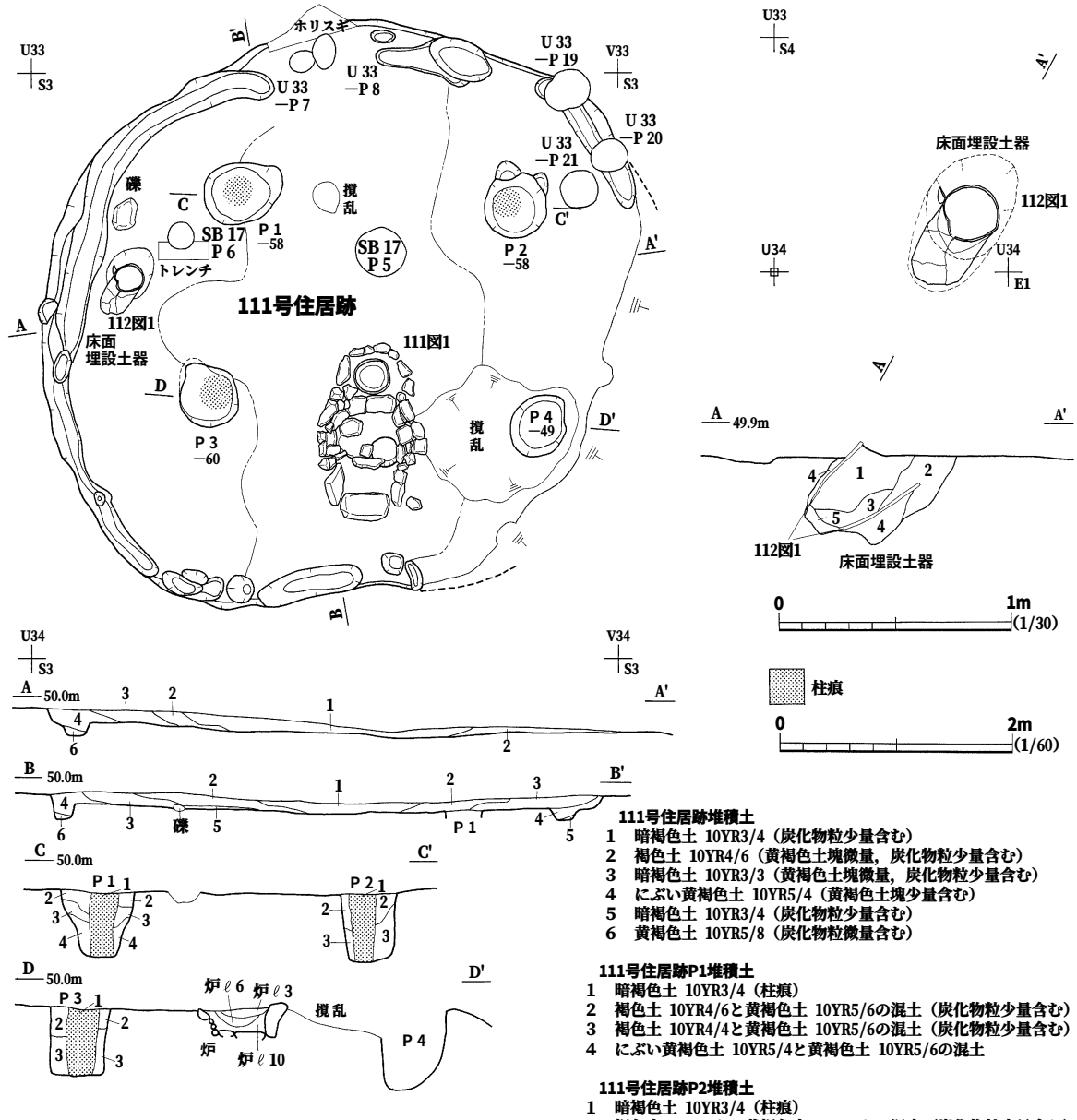
周溝　遺存する周壁に沿って，不連続な周溝が確認された。幅は15～20cm，床面からの深さは12～18cmを計測した。東壁部では周溝は確認できなかった。堆積土(ℓ６)は住居内堆積土と同様，壁際からの流れ込みが観察された。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。遺存状態は良好で，円形状の土器埋設部に楕円形状の石組部，さらに方形状の前庭部が続く形態を呈している。前庭部と周溝は離れている。

(規模)全長150cm，最大幅が93cmを測り，炉の中軸線は真北を示している。

(堆積土)炉跡堆積土ℓ１・３～10は褐色土や暗褐色土を主体として，黄褐色土であるＬⅣを微量含んでいる。住居内堆積土と同じ状況を見せることから自然堆積と判断した。ℓ２は，炭化物粒を含む暗褐色土で，炉の使用に伴う堆積土と考えられる。ℓ11は炉体土器周囲の土で強く焼土化していた。ℓ11～17は掘形堆積土である。

(土器埋設部)口径30.4cmの炉体土器に接して，長さ15cm前後の亜円礫を並べ縁石としている。炉体土器には，深鉢形土器の口縁部から胴部上半部が利用され，土器の底部は欠損している。土器埋設部の上端から14cm程下位には，炉体土器の内面に接するように比較的大きな胴部の破片２点(以下，破片ａとする)が敷かれていた。破片ａは土器埋設部の底面として利用されていたとみられる。しかしながら炉体土器の下端は，破片ａからさらに５cm程下位にあり，その間には炭化物を多く含む黒褐色土が堆積している。これは破片ａ直上に堆積していた土と同質で，炉の使用に伴う堆積土と考えている。このことは，炉を構築した初期段階の底面を，ある段階でかさ上げしたものと推察される。また破片ａと土器埋設部の掘形内堆積土(ℓ11)から出土した破片５点(以下，破片ｂとする)が接合関係にある(111図２)。破片ｂは炉体土器と掘形の間を埋めるように出土したことから，炉



111号住居跡埋設土器内堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土

111号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（黄褐色土塊微量，炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊微量，炭化物粒少量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR5/4（黄褐色土塊少量含む）
5　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）
6　黄褐色土 10YR5/8（炭化物粒微量含む）

111号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（柱痕）
2　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

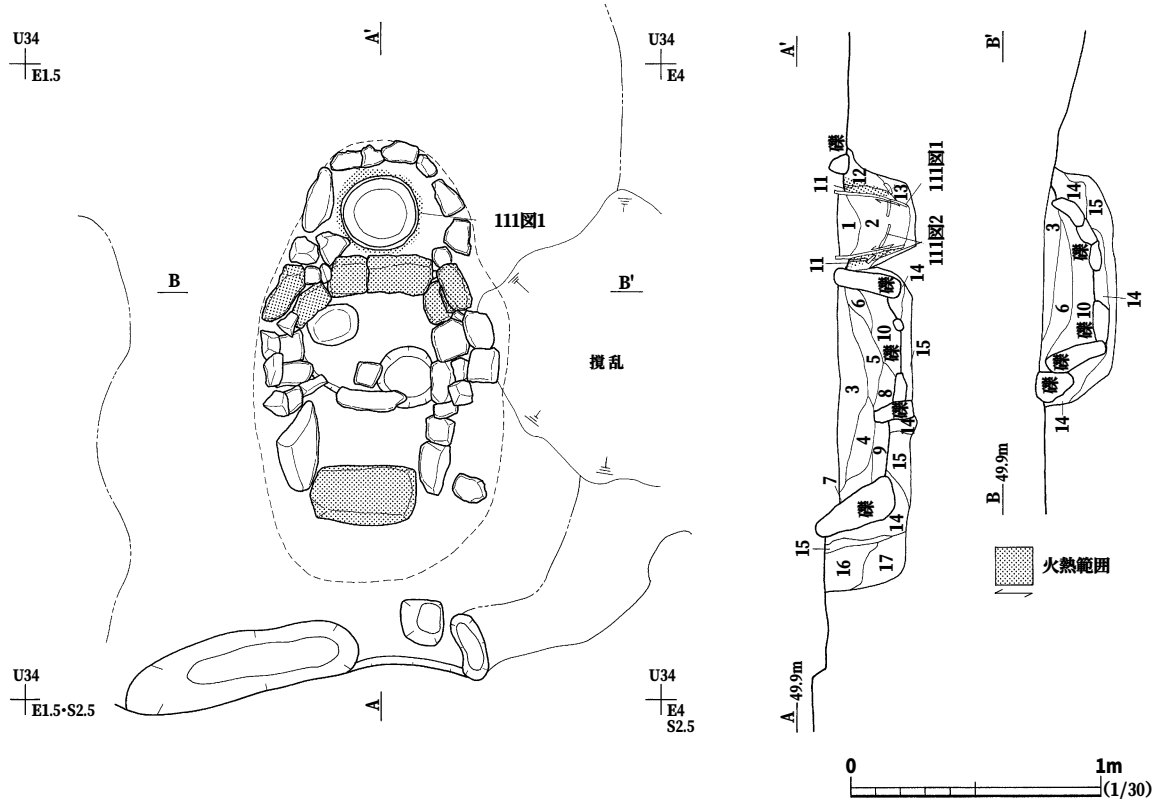
111号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（柱痕）
2　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

111号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（柱痕）
2　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒多量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）

図110　111号住居跡

体土器を設置する際の裏込めであった可能性が高い。このことから土器埋設部を構築する際に炉体土器とは別個体の土器片を分割し，一方を底面に，一方を裏込めとして利用したものとみられる。

（石組部）石組部は，掘形内に板状礫や拳大の亜角礫を組み上げて，外傾する側壁を造っている。特に，土器埋設部と石組部が接する箇所には，大形の板状礫が用いられている。石組部の最大幅は93㎝，南北方向の長さは62㎝，床面から底面までの深さは28㎝を測る。底面の南東隅には抜き取りと考えられる小穴が存在することから，底面の大部分の礫は取り外されたと推察される。また被熱した礫は，石組部北半部に分布している。



111号住居跡炉堆積土

1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む，住居内堆積土ℓ5と同じ）
2　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む，住居内堆積土ℓ5と同じ）
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
5　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
6　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒少量含む）
7　褐色土 10YR4/4（炭化物粒少量含む）
8　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）
9　褐色土 10YR4/4（黄褐色土塊・炭化物粒少量含む）
10　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
11　にぶい赤褐色土 5YR4/4（焼土粒・塊多量含む）
12　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（掘形内堆積土）
13　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土（掘形内堆積土）
14　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（掘形内堆積土）
15　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（掘形内堆積土）
16　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土（掘形内堆積土）
17　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土10YR5/6の混土（掘形内堆積土）

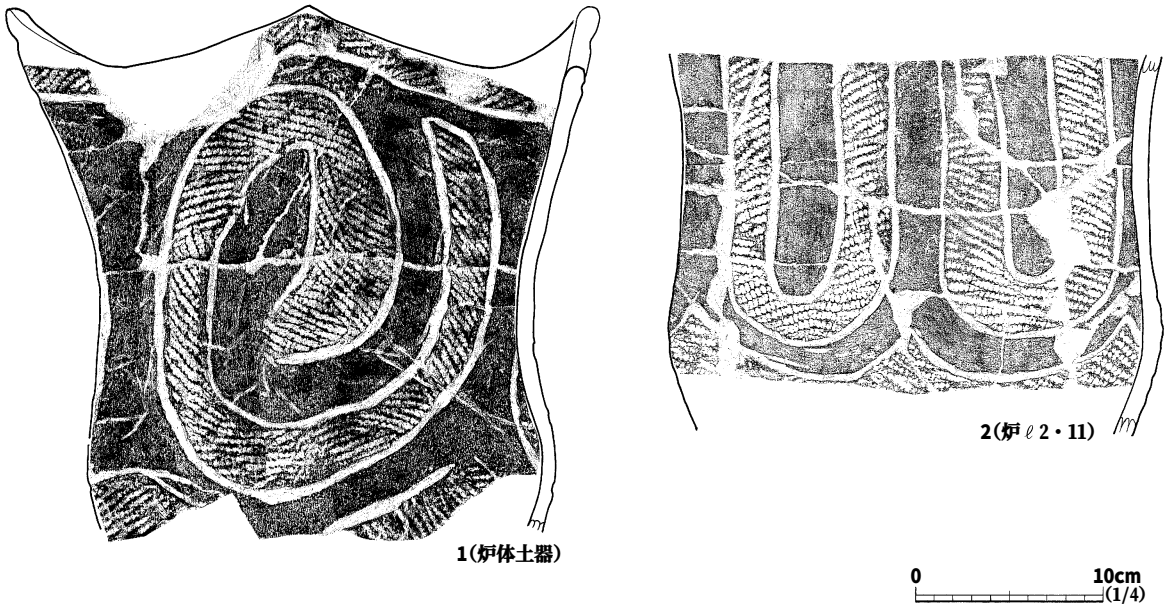


図111　111号住居跡炉と出土遺物(1)

(前庭部)平面形は方形状を呈し，側壁には大形の板状礫をコの字状に組んで縁石としている。この内，前庭部南壁の縁石は，被熱のために表面の風化が著しい。規模は最大幅70㎝，南北方向の長さ46㎝を測る。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。これらの平面形は，不整円形・不整方形を呈する。その規模は，長径50～70㎝，床面からの深さ49～60㎝を測る。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.3m，Ｐ１－Ｐ３間が1.75m，Ｐ２－Ｐ４間が1.9m，Ｐ３－Ｐ４間が2.8mで，ややゆがんだ台形の配置となっている。Ｐ１～３には直径20㎝前後の柱痕が認められた。Ｐ４は平成12年度調査においてU34グリッドの小穴の一つとして認識され，掘削されていたために，本住居跡調査時には堆積土を確認することができなかった。

床面埋設土器　床面西部，周溝際に深鉢形土器が斜位に埋設されていた。検出面は本住居跡の床面で，土器の周囲に楕円形の掘形上端を確認した。土器の口縁部を上位にして，高さ８㎝程が床面から露出し，土器の底部は欠損している。土器内堆積土及び掘形堆積土は，いずれも人為堆積である。

遺物出土状況　床面から出土したのは，縄文土器の胴部片５点，石器５点である。この他に上述の床面埋設土器１個体(112図１)がある。複式炉からは炉体土器(111図１)の他，先に述べたℓ２＋ℓ11の接合個体土器１点(111図２)，石組部底面(ℓ８)から土器片３点，土器埋設部

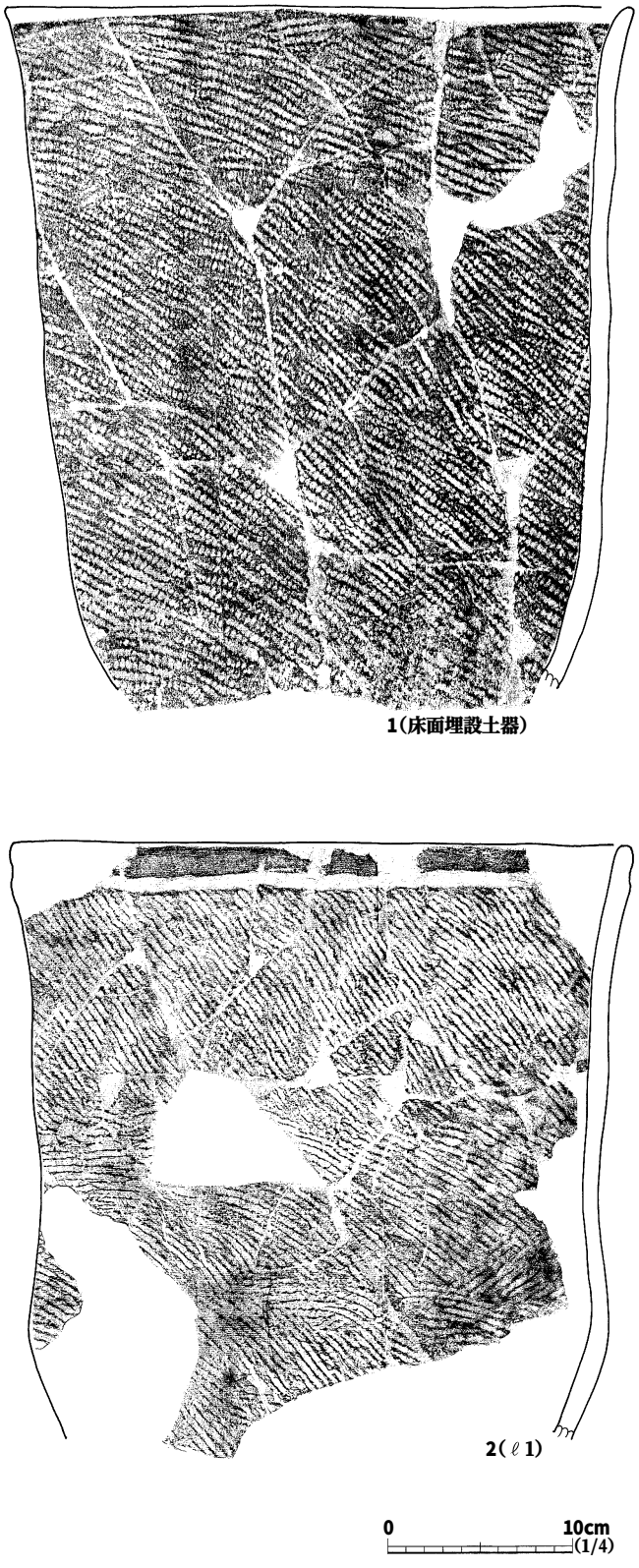


図112　111号住居跡出土遺物(2)

の掘形内堆積土から縄文土器片５点が出土した。Ｐ３ℓ２から石器２点，周溝内(ℓ４)から縄文土器片12点が出土した。この他，堆積土中から縄文土器片41点，石器４点が出土し，その内１点を図示した(112図２)。

遺物　111図１は，口縁部が４単位の波状口縁をなし，胴下部に膨らみをもつ深鉢形土器である。文様は口縁部から胴上部にかけて描かれている。口縁部直下に１条の沈線によって区画された縄文帯がめぐる。胴上部にミガキ調整された沈線により逆「の」字状の文様が４単位描かれている。胴下部の膨らんだ部分には波状沈線が描かれ，それ以下の地文部と明確に区別されている。111図２は口縁部と胴下部が欠損した深鉢形土器である。器形は，胴下部に膨らみをもつ深鉢形土器である。胴上部には細めの沈線により描かれた縄文帯でＵ字状の文様を描いている。その下には波状沈線が描かれ，底部付近の地文部と区別される。

112図１は，胴部が円筒状を呈し，口縁部がわずかに外反する粗製の深鉢形土器である。文様はＬＲの単節斜縄文のみが観察される。112図２は胴下部が膨らみ，口縁部がわずかに外反する深鉢形土器である。口縁直下には１条の沈線によって区画された無文部が巡る。胴部にはＬＲの原体で施文された単節斜縄文が観察される。

まとめ　本遺構は，複式炉を有する竪穴住居跡である。上屋構造は４本主柱により支えられていたものと推察される。所属時期は炉体土器や床面埋設土器から縄文時代中期後半の大木10式期古段階に比定される。　（門　脇）

112 号 住 居 跡　ＳＩ112 （図113，写真69・70・354）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｓ・Ｔ35・36グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北側には1009号土坑，北西側には1006号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，黒色土と暗褐色土で埋まった径4.7m程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　12号溝跡と重複し，それよりも本住居跡が古い。

堆積土　４層に分層した。ℓ１は炉体土器底部にたまった黒色土に近似し，暗褐色土と黄褐色土の小塊を数多く含んでいることから，人為堆積土と判断した。ℓ２～４は壁からの流入が認められるので自然堆積土と考えられる。

平面形・規模　南半部は12号溝跡と撹乱によって壊され，遺存していない。円形に近い隅丸方形を呈すると推定され，現状での長軸方向はＮ５゜Ｗである。その規模は，現状の壁上端で東西長4.7m，南北遺存長3.0mである。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。中央部から北壁にかけての広い範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　床面から55～75゜のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は16～21㎝を測る。南半部は12号溝跡と撹乱によって壊され，遺存していない。

周溝　12号溝跡と撹乱で壊された南半部を除き，溝が全周している。その上端幅は18～30㎝，床面

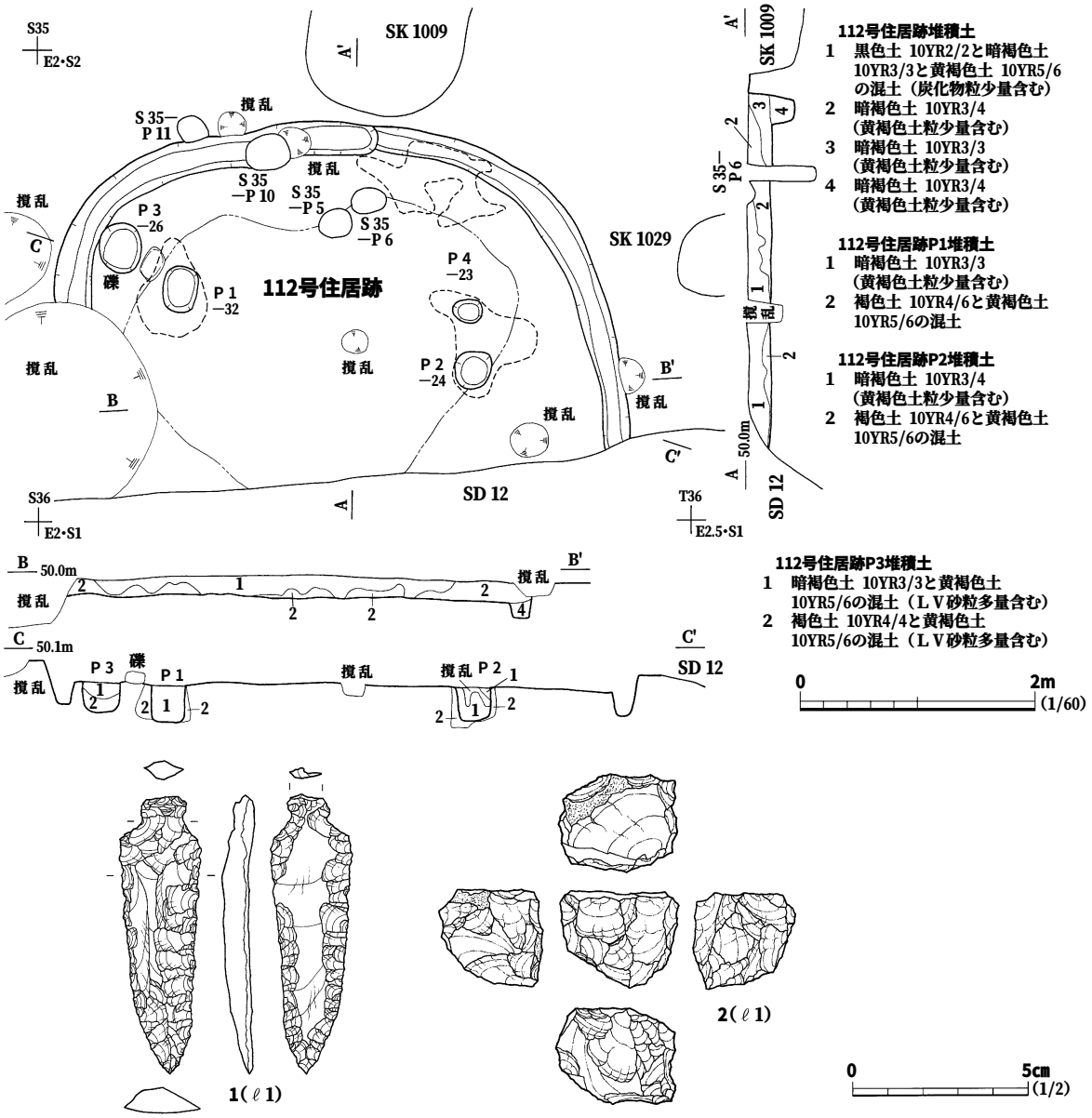


図113　112号住居跡と出土遺物

からの深さは６～24㎝を計測する。

主柱穴　主柱穴はＰ１・２である。Ｐ１は北西コーナー部，Ｐ２は東壁際に位置し，Ｐ１－Ｐ２間の距離は2.6ｍを測る。南半部を12号溝跡と撹乱で壊され，配置の全容は不明であるが，Ｐ１・２に対応する位置にもう２個の主柱穴があったものと推察される。現状の平面形は不整な円形あるいは楕円形で，断面形は共にＵ字状を呈している。規模は，Ｐ１が長径41㎝，短径28㎝，深さ32㎝，Ｐ２が直径32㎝，深さ24㎝を測る。いずれの柱穴の周囲にも，柱穴底面からトンネル状に掘り込まれた不規則な形状のピットを有する。このピット状の穴については，横に深く掘り込まれて粘性の強い土に達するので，主柱穴を掘る際に粘質土を採取した粘土採掘坑の一種と考えられる。また，柱穴内堆積土のℓ２は基本土層のＬⅣに類似した黄褐色土を基調とすることから，粘質土を採取した後に掘った土を埋め戻したと考えられる。また，廃棄後に柱が抜き取られていると推察される。

ピット　主柱穴の他に小さいピットが２個ある。Ｐ４はＰ２の北側に位置し，これも横に深く掘り込まれていることから，粘土採掘坑と推察される。規模は長径26㎝，短径20㎝，深さ23㎝を計測する。Ｐ３は北東壁際に位置し，用途は不明である。規模は径44㎝，深さ26㎝を測る。また，北東壁際の床面が不整形に掘り込まれており，これも周溝底面から掘られた粘土採掘坑の類と考えられる。

遺物出土状況　堆積土中から縄文土器片92点，石器７点が出土した。

遺物　復元可能な縄文土器は認められないが，出土土器はおおむね大木10式古段階に属する。

113図に石器を示した。113図１は珪質頁岩製の縦形石匙である。石質は緻密で，夾雑物を含まない。風化した器面は茶褐色を呈し，光沢を帯びる。縦長剝片を素材とし，腹面の上端に打面部を残置している。腹面側の打瘤部はあまり発達しないことから，間接打撃によって剝離されたものと推察される。背腹両面の両側縁は，並列する平坦な調整剝離によって丁寧に加工している。先端部は側縁よりも細かな調整加工で，尖鋭に仕上げている。つまみは長方形状を呈する。113図２は流紋岩製のサイコロ状石核で，打面を90 °方向に転位しながら，剝片剝離を進行させたものと考えられる。打面縁調整などは行われず，直接打撃で剝離されたものと推察される。

まとめ　南半部が12号溝跡と撹乱で壊されて遺存しないため，主柱穴の配置と炉は確認できなかった。ただ，主柱穴は北半部に２個確認されているので，遺存していない南半部にもこれらの柱穴に対応する位置にもう２個の主柱穴があったと推測される。主柱穴やピットは横に深く掘り込まれ，その底面は黄褐色の粘質土に達していたことから，住居を構築する際にわずかではあろうが粘土を採掘したのではないかと推察される。また，廃棄後は柱を抜き取り，自然埋没でくぼ地化した竪穴に黒色土を投棄して最終的に埋めたと考えられる。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期後葉から末葉と考えられる。　（坂　田）

113 号 住 居 跡　ＳＩ113 （図114～117，写真71・72・355）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｓ・Ｔ33・34グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の東側には1012号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，黒色土と暗褐色土で埋まった径５ｍ程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　114号住居跡，18号建物跡と重複し，本住居跡の方が114号住居跡より新しく，18号建物跡より古い。

堆積土　３層に分層した。ℓ１は炉体土器底部にたまった黒色土に近似し，黄褐色土と暗褐色土の小塊を数多く含むので人為堆積土と判断した。ℓ２・３は壁からの流れ込みを確認できたので自然堆積土と考えられる。

平面形・規模　円形に近い不整な隅丸長方形である。長軸方向はＮ５ °Ｗであり，その規模は現状の壁上端で長軸の南北長5.4m，短軸の東西長4.8mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。複式炉の周辺から北壁にかけての広い範囲が非常に硬く締まっていた。

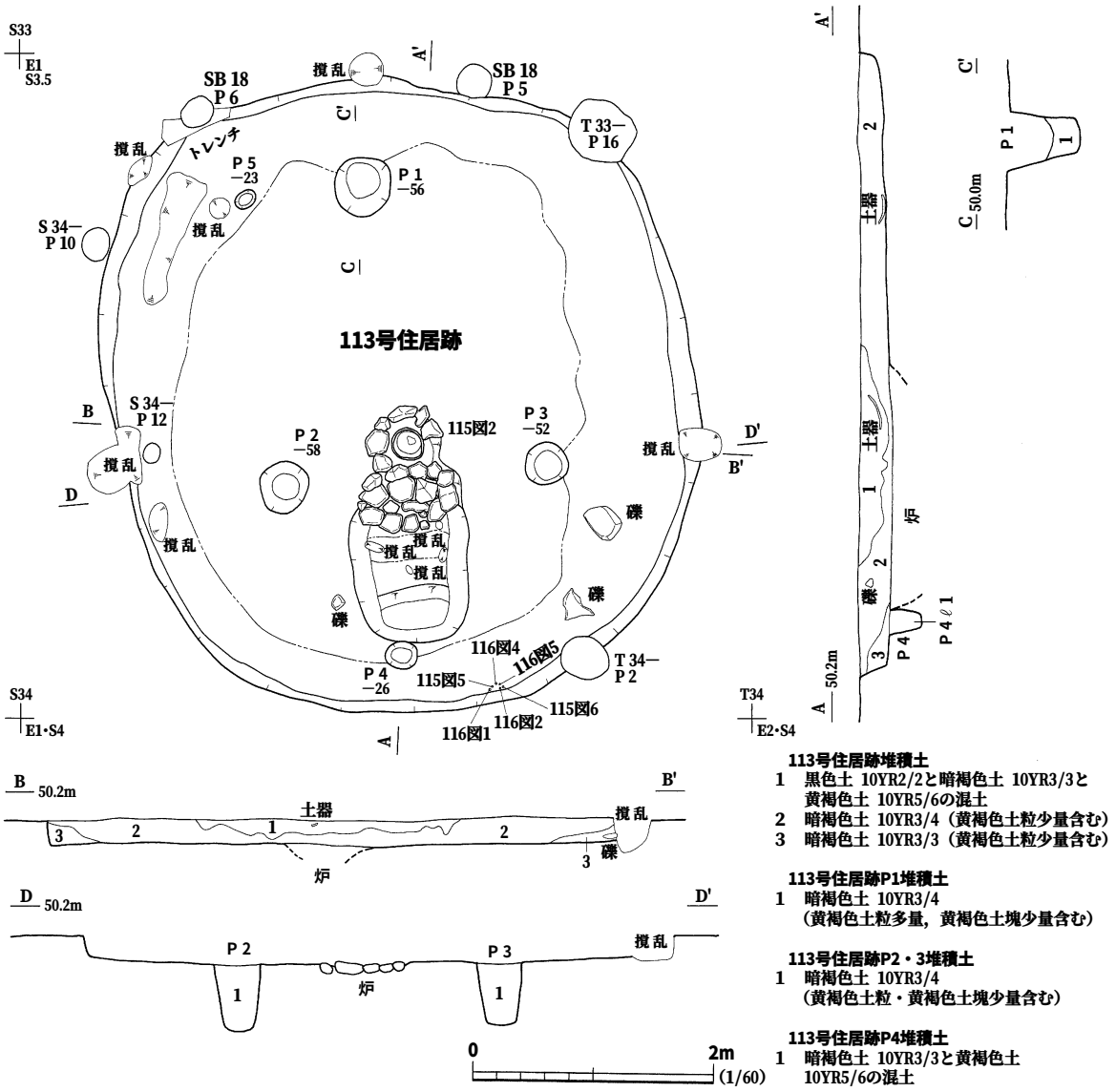


図114　113号住居跡

周壁　床面から45～80 °の角度で立ち上がり，遺存壁高は16～25㎝を測る。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ２とＰ３のほぼ中間に構築されている。遺存状態は良好で，円形状の土器埋設部に台形状の石組部，さらに隅丸長方形状の前庭部が続く形態を呈している。

(規模)炉中軸線はほぼ南北方向を示し，全長194㎝，最大幅83㎝を測る。

(堆積土)６層に分層した。ℓ１・２は暗褐色土中に黄褐色土の小塊を撹はんしたように含むので人為堆積土，ℓ３は壁からの流れ込みが確認できるので自然堆積土と考えられる。ℓ４は炉体土器底部にたまった黒色土で，使用時の堆積土と推察される。炉体土器内面は，底部から10㎝の高さまで黒褐色を呈していた。ℓ５・６は掘形堆積土である。したがって，廃棄後に複式炉は人為的な投棄土で埋められたものと推察される。

(土器埋設部)炉体土器の周囲に長さ10～25㎝の角礫を並べ縁石としている。東西方向の長さは約47㎝で，炉体土器周辺の土は強く焼土化している。

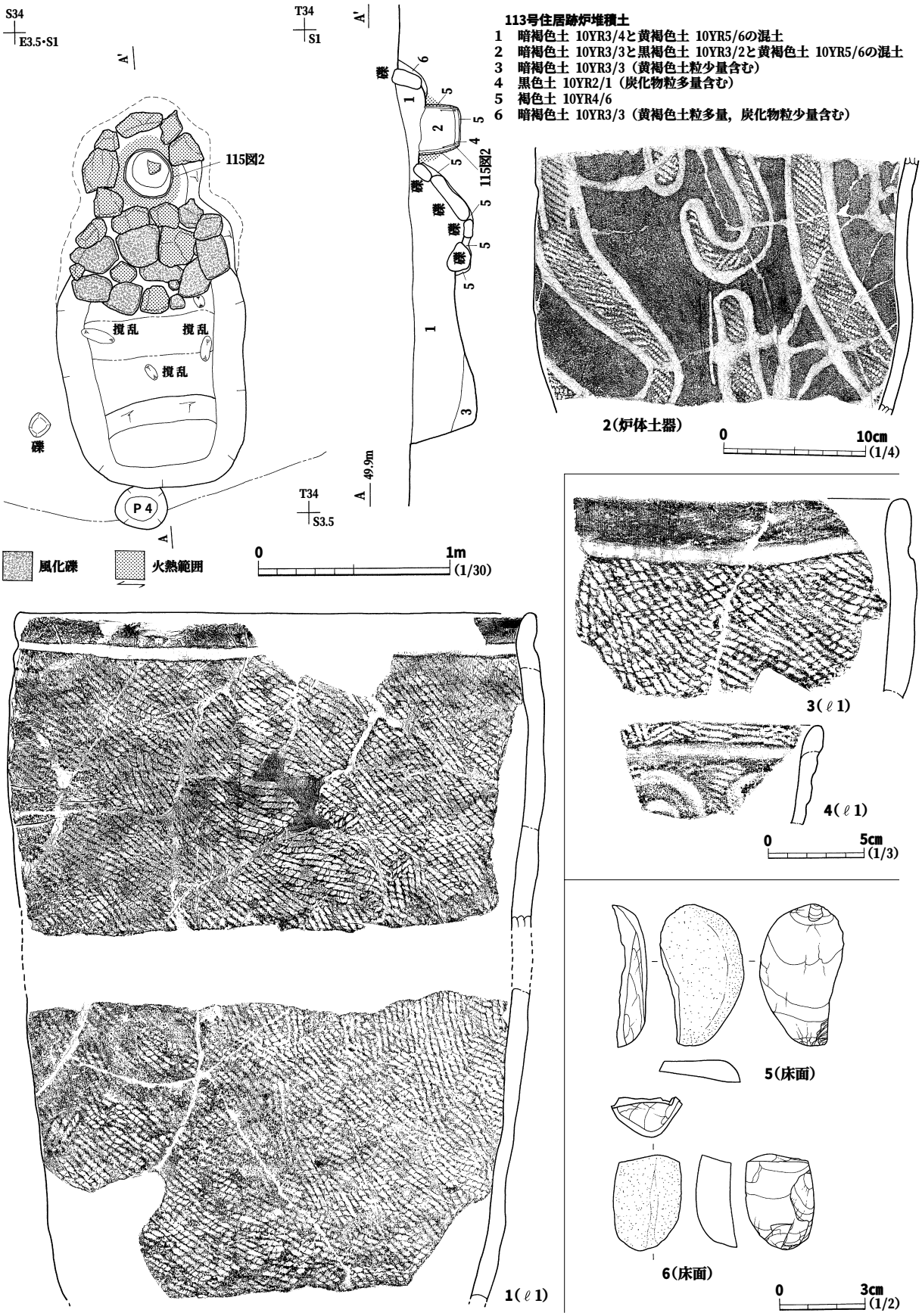


図115　113号住居跡炉と出土遺物(1)

(石組部)掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面とし，その上に板状の礫と拳大や掌大の礫を積み上げて外傾する側壁を造っている。土器埋設部との間には特に大型の板状の礫が用いられている。石組部の最大幅83㎝，東西方向の長さ57㎝を測る。礫は，表面に強い火熱を受けてもろくなったものや赤色変化したものが多い。

(前庭部)隅丸長方形状を呈し，側壁は底面から50～55°の角度で立ち上がる。規模は最大幅99㎝，東西方向の長さ90㎝を測り，底面の南側は10㎝程低くなっている。石組部から南に向かって40㎝程の範囲が踏み締められたように硬化していた。

主柱穴　主柱穴はＰ１～３の３個である。Ｐ１は北壁際，Ｐ２・３は複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.6m，Ｐ２－Ｐ３間が2.2m，Ｐ１－Ｐ３間が2.8mで，ほぼ二等辺三角形の配置となっている。現状の平面形は不整な円形で，断面形はＵ字状を呈している。規模は，Ｐ１が径47㎝，深さ56㎝，Ｐ２が径41㎝，深さ58㎝，Ｐ３が径36㎝，深さ52㎝を計測する。いずれも柱を抜き取った後，人為的に埋めたものと推察される。

ピット　主柱穴の他に，小さいピットが２個ある。Ｐ４は前庭部の南端に接し，炉の中軸線上にあることから複式炉前庭部に伴うピットと推察される。規模は径25㎝，深さ26㎝を測る。Ｐ５は北西コーナー部に位置し，用途は不明である。規模は長径18㎝，短径12㎝，深さ23㎝を計測する。

遺物出土状況　床面から出土したのは，縄文土器片１点，石器32点である。115図５・６，116・117図に示した剝片や石核は，南東壁際，南西壁際，西壁際の３カ所から数点ずつまとまって出土したものである。調査の不手際で南西壁際と西壁際の出土地点は図示できなかったが，南東壁際からまとまって出土した剝片や石核は，115図５・６，116図１・２・４・５の６点である。この他，堆積土中から縄文土器片191点，石器18点が出土した。

遺物　115図１～４に縄文土器を示した。115図１は深鉢で，胴部下半から緩やかに内湾しながら立ち上がり，口縁部が短く外反している。口縁部には，下端を太い沈線により画された無文帯が巡る。胴部にはＬＲ縄文が施される。原体の回転方向はタテとナナメ方向であるが，一定していない。115図２は炉体土器である。口縁部と胴部下半を切断された深鉢で，胴部中位でややくびれ，口縁部に向かって外傾する。胴部の上位から下位にかけて磨消縄文手法で構成されたＳ字状文が配置されて文様帯が構成されている。このＳ字文は基本的に縄文帯により描かれ，太い沈線で縁取りされた中に，単節斜縄文をＳ字方向に回転施文させている。また，Ｓ字状文の隙間を埋めるように小さなＳ字文や逆Ｃ字文が充填されている。115図３は無文部の口縁部直下に一条の横走沈線が，胴部には無節のＬ縄文が施される。115図４は口縁部直下に一条の横走沈線が巡り，以下に沈線区画の曲線文が磨消縄文手法によって施されている。

115図５・６，116・117図に石器を示した。115図５・６，116図１・２は鉄石英製の剝片である。いずれも腹面末端部には打瘤状の高まりが認められ，下方向からの加撃で形成されたフィッシャーが観察された。両極打法によって生産された剝片である可能性が高い。116図３～７は鉄石英製の楔形の石核もしくは楔形石器である。いずれも上下両端が階段状に潰れている。前述の４点の剝片

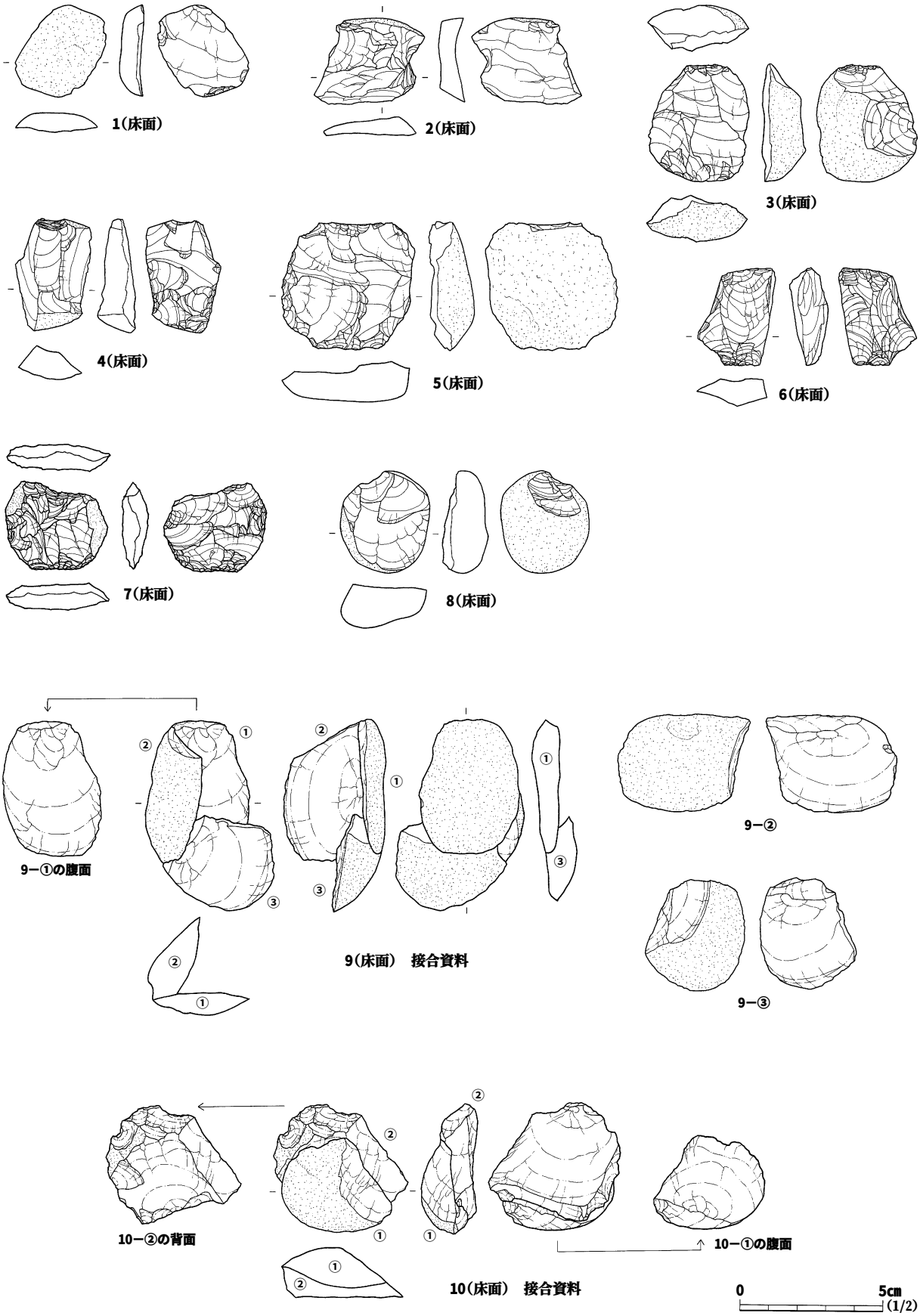


図116　113号住居跡出土遺物(2)

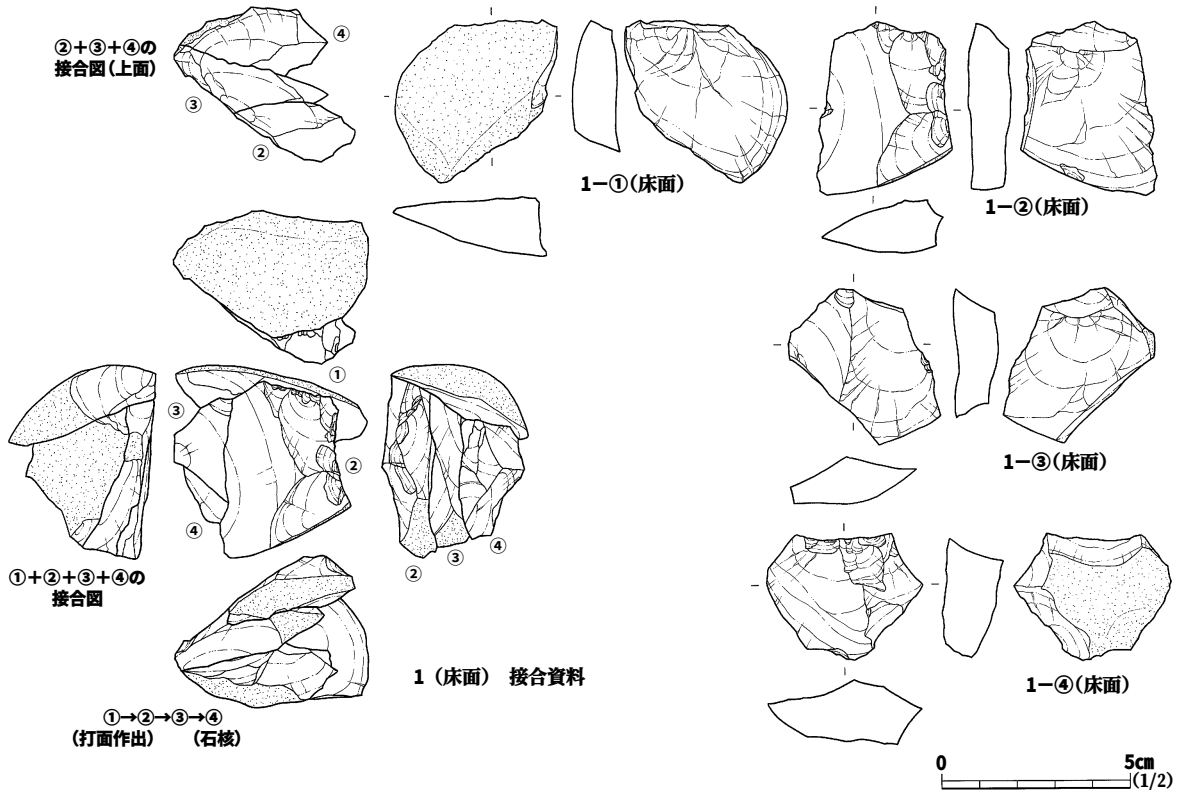


図117　113号住居跡出土遺物(3)

同様，両極打法によるものと考えられる。116図８は鉄石英製の石核である。小円礫を分割し，その面に対し剝離を行っている。

116図９・10，117図１に３例の接合資料を示した。いずれも石質は微斑晶質の流紋岩である。３例とも同質の石材を利用しているが，それぞれ別の母岩であると推察される。

116図９の接合資料は，剝片３点(①・②・③)からなる。剝離順序は，①→②→③である。第一に接合図の上側面に設けた打面から，剝片①を剝離している。第二に打面を90度転位して，剝片①によって作出された打面から，剝片②を剝離している。第三に剝片②を剝離した後，同一打面から数回の加撃を行ったと推察される。第四にさらに打面を90度転位して，剝片③を剝離している。

116図10の接合資料は，剝片１点(①)と二次加工のある剝片(②)からなる。剝離順序は，①→②である。第一に接合図の下側面に設けた打面から，剝片①を剝離している。第二に打面を180度転位して，接合図の上側面に設けた打面から，剝片②を剝離している。２点の剝片の剝離角は，剝片①が123度，剝片②が125度で，ほぼ一定している。さらに剝片②には，打面部には腹面側から，腹面右側面には背面側から急斜な二次加工が施されている。３点の剝片の剝離角は，剝片①が120度，剝片②が124度，剝片③が130度である。

117図１の接合資料は，剝片３点(①・②・③)と石核１点(④)からなる。剝離順序は，①→②→③→④である。第一に，素材礫を分割後，その分割面から剝片①を剝離している。第二に，剝片②の背面右側縁に右の作業面側からの側面観が山形状を呈する石核調整を施し，接合図の右側面を作業面として剝片剝離を行っている。第三に剝片①によって作出された剝離痕を打面として，剝片②と

剝片③を剝離している。第四に剝片③を剝離した後，数回の加撃を行っているが有効な剝片剝離には至らず，最終的に石核①が残されている。３点の剝片の剝離角は，剝片①が120度，剝片②が124度，剝片③が122度で，ほぼ一定している。このように本接合資料は，山形調整にも似た細かな石核調整が見られる点，生産された剝片の剝離角が120度程度で一定している点，連続した打点移動を行っている点から，卓越した剝片剝離技術の存在が確認できる資料であるといえよう。

以上のように，流紋岩製の３例の接合資料からは，打面を90度もしくは180度方向に転位しながら，貝殻状の剝片を剝離していることが看取された。剝離された剝片は打瘤部の発達が著しく，剝離角が125度前後であることから，直接打法により剝離されたものと推察される。一方，先に述べた鉄石英製の資料(115図５・６，116図１～８)では両極打法を多用した剝離技術が看取され，石質により剝片剝離技術が異なっている。

まとめ　定型化した複式炉と，ほぼ二等辺三角形に配置された３本の主柱穴を有している。南東壁際・南西壁際・西壁際の床面から，同一石材の剝片や石核がまとまって出土している。また，廃棄後は柱を抜き取り，柱穴掘形と複式炉を埋めている。竪穴自体はその後自然埋没でくぼ地化し，黒色土の人為的な投棄によって最終的には埋められたと考えられる。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階である。　（坂　田）

114号住居跡　ＳＩ114　（図118・119，写真73・74・355）

位置・検出面　北区中央部の平坦面，Ｓ・Ｔ33・34グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の南西側には113号住居跡，北東側には115号住居跡，東側には111号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であるが，堆積土の大部分は削平され，炉跡や床面南半部が露出した状態であった。

重複　113号住居跡と1041・1539・1546号土坑が重複し，本遺構はそれより古い。また17・18・20・25・97号建物跡とＳ・Ｔ33グリッドの小穴が重複し，いずれも本遺構はそれより古い。

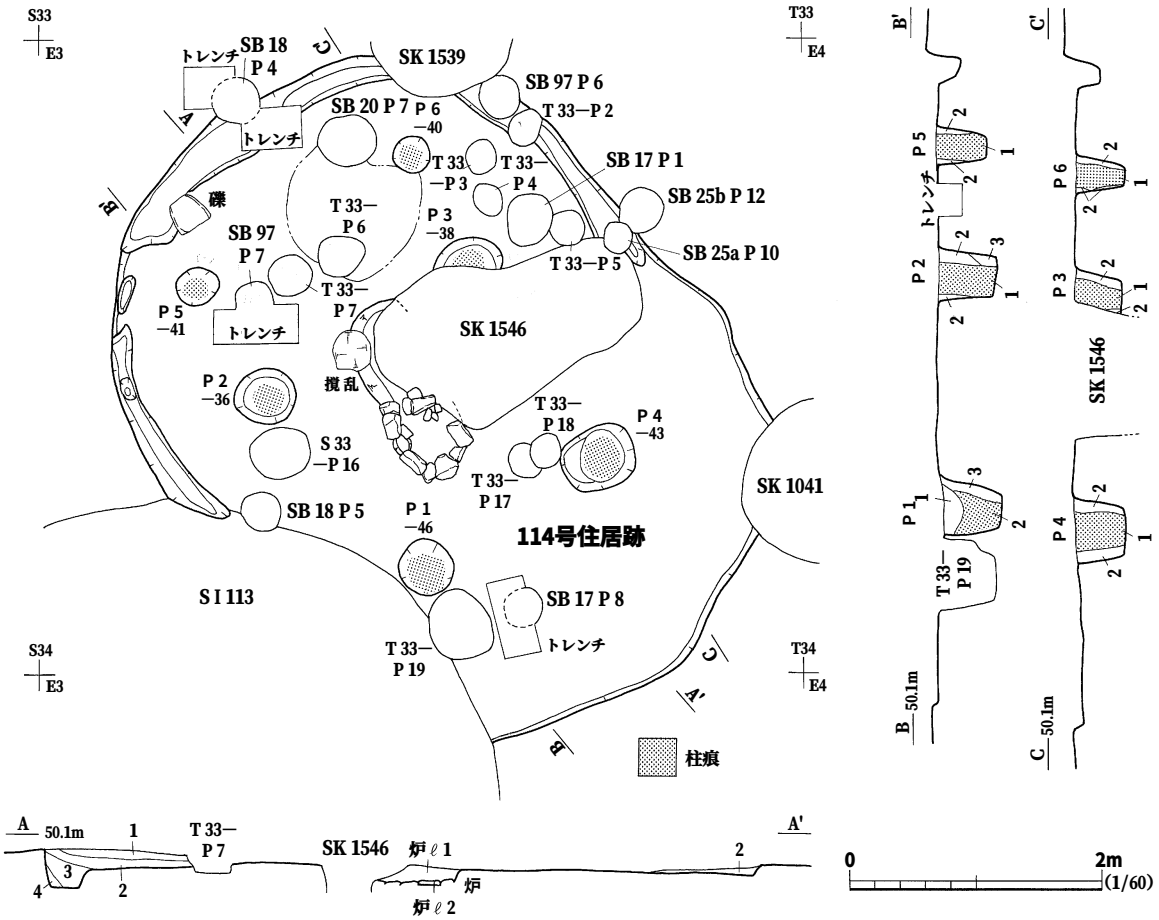
堆積土　住居跡西半部に部分的にしか残っていなかったが，土色・包含物の違いから層に分けた。ℓ１～３は，基本土層のＬⅢに類似した褐色土や暗褐色土を主体として，ＬⅣである黄褐色土を微量含んでいる。ℓ４は黄褐色土粒を多く含むことから，壁の崩落土と見られる。ℓ１・２と炉跡堆積土ℓ１・２は，それぞれ同一の土である。これらの住居内堆積土は壁際から流れ込んだような堆積状況が観察されることから，自然堆積土と判断した。

平面形・規模　楕円形を呈し，その長軸線はＮ42゜Ｗである。規模は現存する上端で長軸長5.7m，短軸長4.2mを測る。

床面　基本土層のＬⅣにより形成され，ほぼ平坦である。床面中央に炉を構築し，そのほぼ長軸線上の北西部周溝際に板状の大型礫を配置している。また炉の北側の径１m程の範囲は，硬く締まっていた。

周壁　床面から70～80゜の急角度で立ち上がり，遺存壁高は５～10㎝と極めて浅い。

周溝　遺存する周壁に沿って不連続な溝が確認された。幅は20～42㎝，床面からの深さは15～20㎝



114号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3（暗褐色土塊少量含む）

114号住居跡P1堆積土
1　褐色土 10YR4/4
2　暗褐色土 10YR3/4（柱痕）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）

114号住居跡P2堆積土
1　褐色土 10YR4/4（炭化物粒少量含む。柱痕）
2　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

114号住居跡P3堆積土
1　褐色土 10YR4/4（炭化物粒少量含む。柱痕）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

114号住居跡P4堆積土
1　褐色土 10YR4/4（柱痕）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

114号住居跡P5堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（柱痕）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

114号住居跡P6堆積土
1　褐色土 10YR4/4（炭化物粒少量含む。柱痕）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

114号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（住居内堆積土 ℓ 1と同じ）
2　褐色土 10YR4/6（住居内堆積土 ℓ 2と同じ）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（掘形内堆積土）

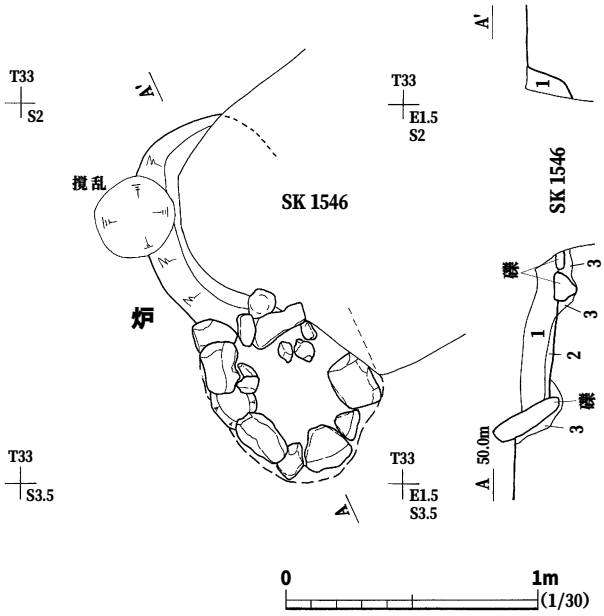


図118　114号住居跡

を計測する。周壁南半部では周溝は確認できなかった。周溝内には住居内堆積土ℓ３・４が堆積し，いずれも自然堆積土である。

炉跡　床面中央に構築されている。1546号土坑により東半部は壊されている。炉跡南半部に円形状の石組部を構築し，さらに長方形状の前庭部が続く形態を呈している。なお土器埋設部は附属しない。

(規模)全長147㎝，最大幅が60㎝を測り，炉中軸線はN25 Wである。

(堆積土)ℓ１・２は褐色土や暗褐色土を主体として，LIVである黄褐色土を微量含んでいる。住居内堆積土ℓ１・２とそれぞれ対応することから自然堆積と判断した。ℓ３は石組部の掘形堆積土である。

(石組部)石組部は掘形内に板状礫や拳大の亜角礫を組み上げて，南・東・西の三方の側壁を造っている。石組部北側の前庭部と接する箇所には，前庭部底面とほぼ同じ高さに扁平礫を平坦に並べている。石組部の最大幅は60㎝，南北方向の長さは77㎝，深さ15㎝を測る。底面は基本土層のLIVが露出していた。石組部底面及び構築礫には被熱痕跡は認められず，堆積土にも焼土粒は見られなかった。石組部北半部に分布している。

(前庭部)大部分が1546号土坑に壊されているが，平面形はおおよそ長方形状を呈するとみられる。遺存する側壁は約60 °とやや緩傾斜で立ち上がり，規模は南北方向の長さ75㎝，深さ15㎝を測る。

主柱穴　主柱穴はＰ１～６の６個である。これらの掘形平面形は，不整円形を呈する。Ｐ１～４の規模は長径45～55㎝であるのに対し，Ｐ５・６では長径30～35㎝とやや小さい。床面からの深さ36～46㎝である。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間，Ｐ２－Ｐ３間，Ｐ３－Ｐ４間，Ｐ１－Ｐ４間で約1.8ｍで，炉の石組部を中心とした方形の配置となっている。Ｐ２－Ｐ５間，Ｐ３－Ｐ６間は約1.0ｍを測り，Ｐ５・６はＰ１～４の方形配置から北側に張り出している。Ｐ１～４には直径25㎝，Ｐ５・６には直径20㎝の柱痕が確認された。これら柱穴の掘形堆積土は，にぶい黄褐色土と黄褐色土の混土である。

遺物出土状況　堆積土(ℓ１)中から縄文土器片５点，石器５点が出土したが，いずれも本遺構の所属時期を示すものではない。

遺物　119図１は，深鉢形土器の胴下部の破片である。沈線区画の縄文帯によって文様が描かれている。同図２は粗製土器の口縁部片で，ＲＬ単節斜縄文が観察される。同図３は，砂岩製の磨石類

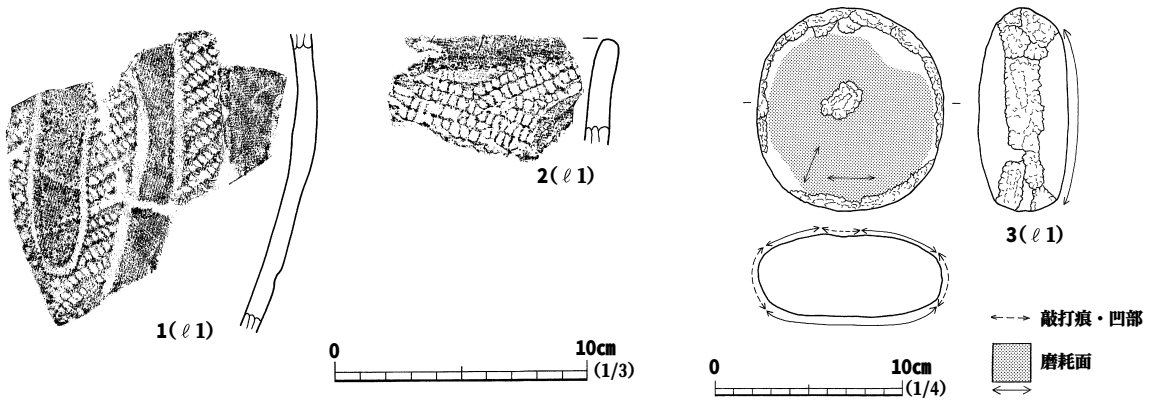


図119　114号住居跡出土遺物

である。側面部には全周にわたって顕著な敲打痕が観察される。敲打痕によって円礫面が失われ，面的に潰れた側面は多面体状を呈する。器面中央には１カ所の凹部があり，その周囲には磨耗痕が観察される。

まとめ　本遺構は，石組部と前庭部で構成される炉を有する竪穴住居跡である。上屋構造は６本主柱により支えられていたものと推察される。所属時期は，本住居跡の平面形・柱穴配置・炉跡から判断すると縄文時代中期中葉の大木８ｂ～９式期に比定される可能性が高い。　（門　脇）

115ａ号住居跡　ＳＩ115ａ（図120～124，写真75・76・356）

位置・検出面　北区中央部の平坦面，Ｔ・U32・33グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の南側には111・113・114号住居跡，東側には116号住居跡がある。検出面はＬⅣ上面であり，褐色土で埋まった径5.0m程の隅丸方形の輪郭を検出した。

重複　19・20・25号建物跡，1081号土坑，U32グリッドの小穴が重複し，本遺構はそれより古い。1540号土坑は本遺構南東側で，1541号土坑は床面中央部で重複，いずれも本遺構はそれより新しい。また115ｂ号住居跡は本遺構床面で重複し，本遺構はそれより新しい。

堆積土　ℓ１・２は，黒褐色土を主体として，暗褐色土や褐色土を塊状に含んでいる。また土器片・石器・炭化物粒も多く出土していることから，ℓ１・２は人為堆積と判断した。ℓ３は褐色土を主体とし，ＬⅣである黄褐色土の小粒を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積土と考えられる。ℓ４は壁の崩落土とみられ，周壁際や周溝内に堆積していた。

平面形・規模　円形を基調とした隅丸方形である。複式炉を通る南北の中央軸線はＮ14°Ｅである。規模は現存する上端で南北長6.0m，東西長5.2mを測る。

床面　大部分は基本土層のＬⅣに形成されている。床面中央北側の1541号土坑と複式炉掘形の西側部分は，黄褐色土によって人為的に埋められ，貼床状に構築されていた。床面は凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。また周壁際を除いた床面の大部分は，硬く締まっていた。

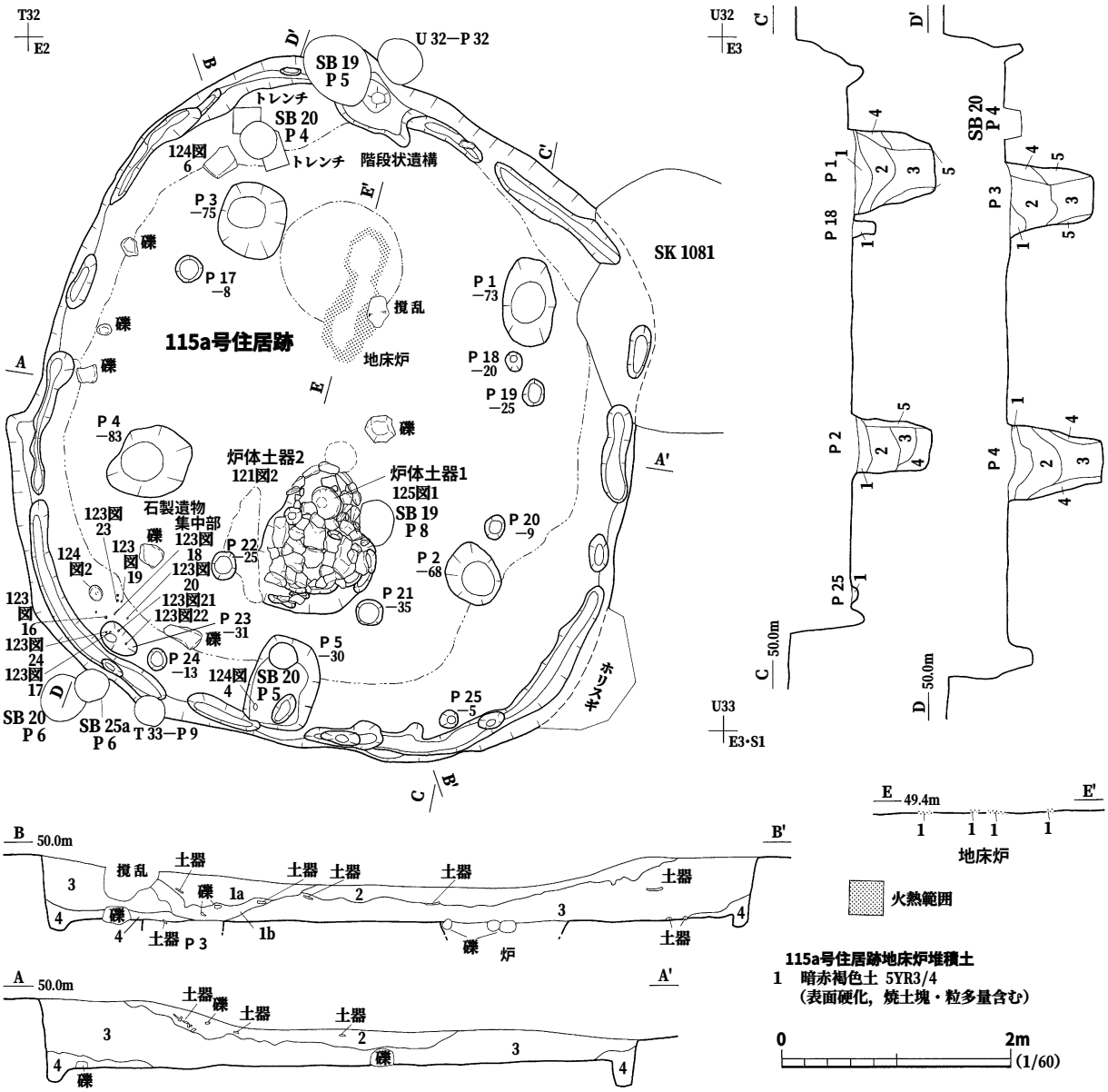
周壁　床面から70～80°の急角度で立ち上がり，遺存壁高は50～60㎝と深い。東壁の一部は1081号土坑によって壊されていた。

周溝　遺存する周壁に沿って不連続な溝が確認された。幅は15～20㎝，床面からの深さは12～25㎝を計測した。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ２とＰ４のほぼ中間に構築されている。遺存状態は良好で，円形状の土器埋設部に方形状の石組部が続く形態を呈している。前庭部のない，いわゆるダルマ形の複式炉である。

（規模）全長132㎝，最大幅が102㎝を測り，炉中軸線はＮ14°Ｅである。

（堆積土）炉跡堆積土ℓ１～４・６は褐色土や暗褐色土を主体として，黄褐色土粒の小粒を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積土と考えられる。このことから炉廃棄時に段階的に埋められたと推察される。ℓ５・７は，炭化物粒を多く含む黒褐色土で，炉の使用に伴う堆積土と考えら



115a号住居跡地床炉堆積土
1　暗赤褐色土 5YR3/4
（表面硬化，焼土塊・粒多量含む）

115a号住居跡堆積土
1a　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/3の混土
（炭化物粒少量含む）
1b　黒褐色土 10YR3/1と褐色土 10YR4/4の混土
（炭化物粒少量含む）
2　黒褐色土 10YR2/2
（焼土粒・炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3

115a号住居跡P1堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（炭化物粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

115a号住居跡P2堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR5/4（炭化物粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

115a号住居跡P3堆積土
1　黒褐色土 10YR3/1と褐色土 10YR4/4の混土
（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）

115a号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

115a号住居跡P17～20・24・25堆積土
1　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒微量含む）

115a号住居跡P21・22堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・焼土粒微量含む）

115a号住居跡P23堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/4（炭化物粒微量含む）

図120　115ａ号住居跡(1)

れる。ℓ８は，115ｂ号住居跡に伴う炉体土器２を被覆する堆積土で，この上に本遺構の土器埋設部縁石を構築している。ℓ９は炉の掘形西側に分布する貼床構築土で，その厚さは約５㎝を測る。ℓ10～17は掘形堆積土である。

(土器埋設部)遺存径26.8㎝，深さ30.7㎝の炉体土器１に接して，長さ15㎝前後の亜円礫や亜角礫を並べ縁石としている。炉体土器には，深鉢形土器の胴部上半部から底部が利用されている。炉体土器の周囲の土は強く焼土化している(ℓ15)。また炉体土器の内面は，火熱によって部分的に剝落していた。土器埋設部の掘形内堆積土(ℓ16・17)から縄文土器片が計14点出土しているが，これらは炉体土器を安定させるための裏込めとして利用されたと推察される。

(石組部)石組部は掘形内に花崗岩製の板状礫や拳大の亜円礫を組み上げて，外傾する側壁を造っている。特に土器埋設部と石組部が接する箇所には，大形の板状礫が用いられている。石組部の最大幅は102㎝，南北方向の長さは88㎝，床面から底面までの深さは25㎝を測る。石組部の南半部では部分的に礫が欠落し，LIVが露出している。また抜き取り痕と考えられる小穴も存在することから，炉の廃絶に伴って礫を取り外したとみられる。被熱した礫は，石組部北半部に分布している。

地床炉　複式炉の北側，Ｐ１とＰ３のほぼ中間に，南北長120㎝，東西幅45㎝の地床炉が確認された。炉床である暗赤褐色の硬化面は，炉の周辺にドーナツ状に分布している。炉床の厚さは１㎝であった。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。これらの掘形平面形は，不整隅丸方形を呈する。その規模は，長径54～74㎝，床面からの深さ68～83㎝を測る。各主柱穴間の芯々間距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.5m，Ｐ２－Ｐ４間が3.0m，Ｐ３－Ｐ４間が2.4m，Ｐ１－Ｐ３間が2.6mで，ややゆがんだ方形の配置となっている。Ｐ１～４の堆積土は，褐色土やにぶい黄褐色土を主とし，LIVである黄褐色土を塊状に含むものが多い。また堆積土中に柱痕が認められないことから，住居廃絶時に柱材は抜き取られ，柱穴は人為的に埋められたと考えられる。

ピット　床面には主柱穴の他に１個の土坑状のくぼみと９個の小穴がある。Ｐ５は複式炉の南側に位置する隅丸方形の土坑状のくぼみである。その底面には２カ所の小穴が確認された。複式炉と同じように住居廃絶後に埋められている。複式炉との配置から判断すれば，Ｐ５は前庭部のような機能を担っていた可能性がある。Ｐ17～20・24・25は周溝や主柱穴の周辺で確認された径15～20㎝程の小穴である。これらは，主柱穴などの補助柱穴の可能性がある。

階段状遺構　住居の北壁の中央には，周壁から連なる階段状の高まりが確認された。階段は２段からなり，床面から１段目までが13㎝，１段目から２段目までが10㎝，２段目から住居跡の上端までが20㎝を測る。１段目は北壁より舌状に張り出し，規模は長軸長72㎝，短軸長38㎝を測る。２段目は長軸長27㎝，短軸長23㎝の楕円形の高まりが，１段目の上面に造り出されている。各段の上面は，硬く踏み締まっていた。堆積土は褐色土主体のものと黄褐色土主体のものとが交互に積み上げられている。またこの遺構周辺の周溝は，階段状遺構の構築に際して埋めている。

石製遺物集中部　床面南西隅の周溝の際から，削器や剝片類が10点，磨石類が１点出土した。これ

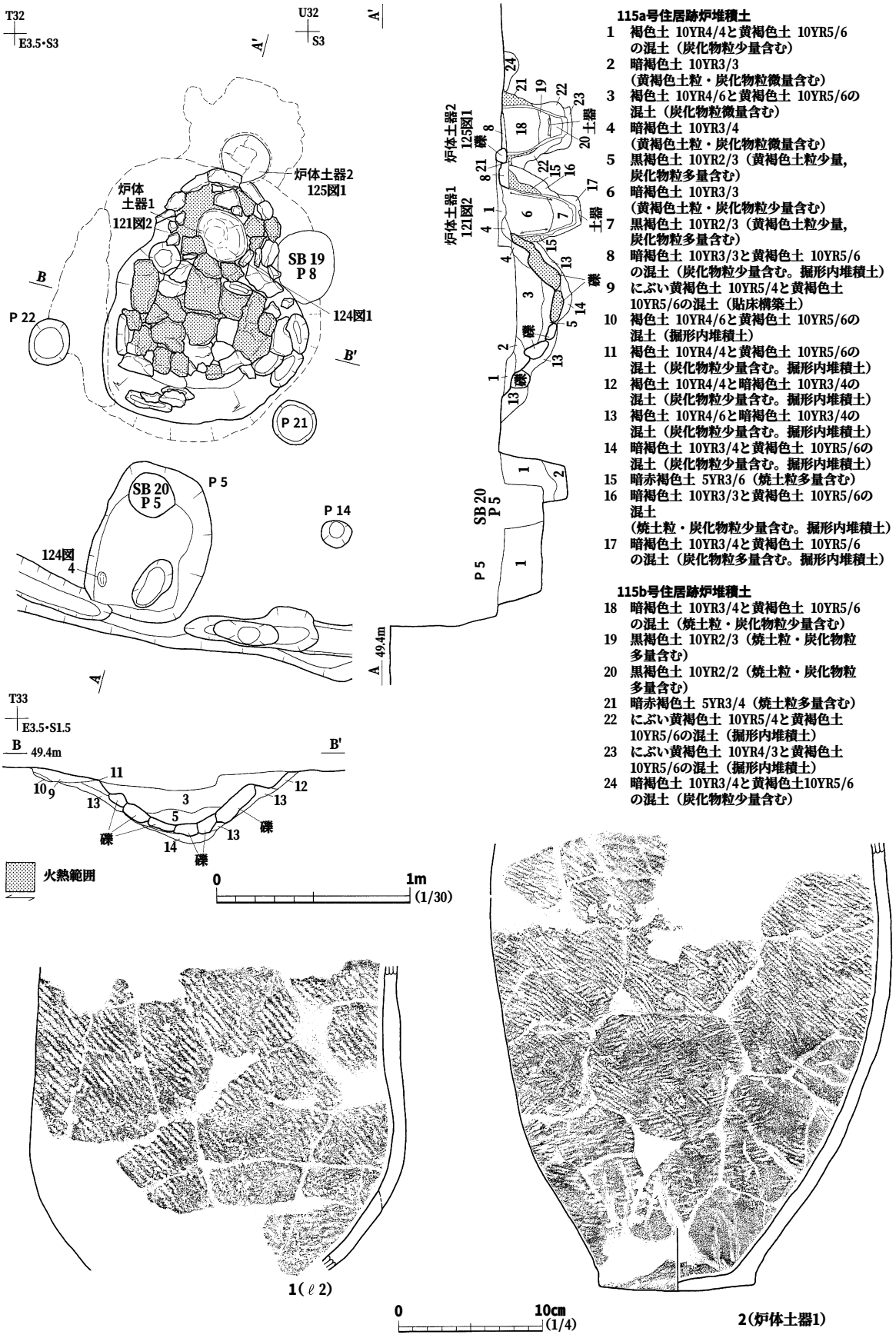


図121　115ａ号住居跡炉と出土遺物(1)

らは径50㎝の範囲に集中して分布している。これらの出土層位は住居内堆積土ℓ４で，床面から１～３㎝程遊離している。Ｐ23は石製遺物取り上げ後に検出した遺構で，堆積土の中から遺物は出土していない。

遺物出土状況　床面から石皿・台石類が６点，磨石類が１点出土している。床面出土の土器片はなかった。複式炉からは炉体土器(121図２)の他に，石組部の堆積土中から縄文土器片11点，石器４点が出土した。さらに土器埋設部の掘形内堆積土から縄文土器片が14点出土している。Ｐ１ℓ１から土器片２点，Ｐ２ℓ１から土器片１点と石器４点，Ｐ３ℓ１から土器片７点，Ｐ４ℓ２から土器片１点が出土している。Ｐ５ℓ１からは磨石類が１点出土している。この他，堆積土中から縄文土器片640点，石器170点が出土している。

遺物　121図１は胴下部に膨らみをもつ深鉢形土器で，口縁部と底部付近は欠損している。地文はＬＲの単節斜縄文である。原体は非常に硬い繊維で作られていたと推察され，節が明瞭でない。２は口縁部が欠損する深鉢形土器である。地文は１段撚りＲＬの無節斜縄文である。

122図１は胴下部に膨らみをもち，胴上部が外反する深鉢形土器である。口縁部と底部は欠損する。文様は胴上部から下部にかけて認められる。調整沈線によって区画された縄文帯によって横Ｓ字状の文様が描かれ，横方向に連続している。地文はＬＲの単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。２は深鉢形土器の口縁部破片である。口縁直下には沈線で区画された幅の狭い無文部が巡る。胴上部には調整沈線によって描出された文様が認められるが，具体的な図形は不明である。地文にはＲＬの単節斜縄文が観察される。３は加曾利Ｂ２式に比定される口縁部片である。器種及び器形は不明である。口唇部は平らに面取りされ，口縁直下には連続刺突と沈線文が観察される。一部に赤色顔料の付着が見られる。４は内湾する口縁部の破片である。口縁直下には稜線状の隆帯が１条巡り，その下にはＬＲの単節斜縄文が観察される。５は深鉢形土器の口縁部破片である。口縁直下にはＲＬ単節斜縄文による縄文帯が見られる。文様は幅広い調整沈線で施されるが，図形は不明である。７は深鉢形土器の胴下部破片である。文様は沈線区画による縄文帯で描出されているが，具体的な図形は不明である。地文はＲＬ単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。６及び123図１は同一個体の深鉢形土器の口縁部資料である。口縁部の断面形はやや外反する。文様は稜線区画による無文帯で描かれるが，具体的な図形は不明である。地文はＲＬ単節斜縄文である。123図２は底部資料である。地文のＬＲ単節斜縄文が観察される。

123図３～14は堆積土(ℓ２・３)から出土した石鏃である。その形態は，３～７が平基式もしくは円基式，８・９は凹基式である。３・４は表面右側縁下端部が若干張り出している。10～14は石鏃未製品である。11の先端は未加工のまま残され，尖鋭でない。15はチャート製の削器で，背面下側縁に急斜度調整により弧状の刃部を作出している。16～24は石製遺物集中部から出土した遺物である。16は珪質頁岩製の削器である。背面左側縁と腹面右側縁に調整を加えて，外湾する両刃の刃部を作出している。腹面左側縁にも平坦調整を加えている。17は珪質頁岩製の二次加工のある剝片で，背腹両面に面的な加工が施されている。18～20・25は微細剝離のある剝片である。18・19の腹

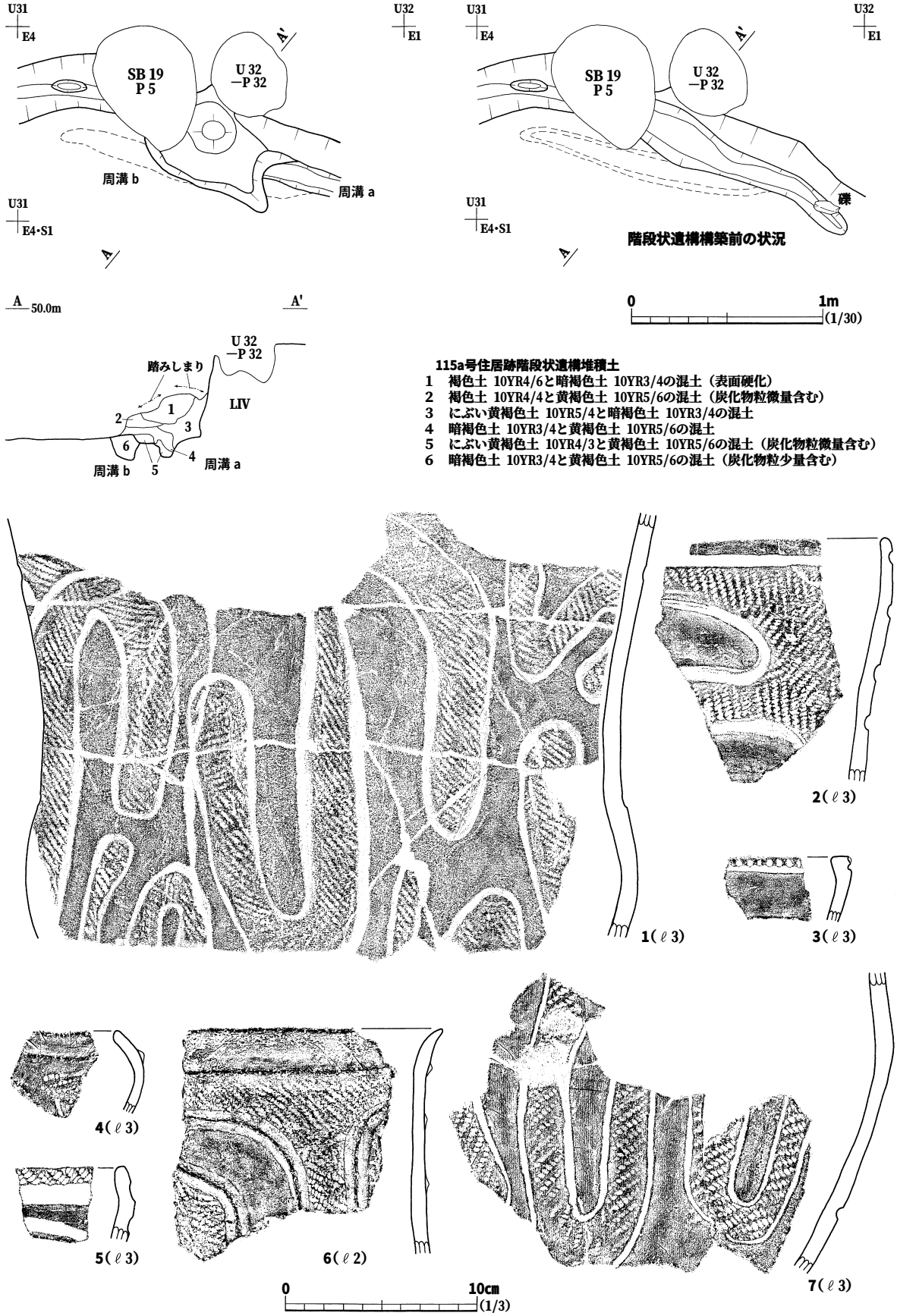


図122　115ａ号住居跡と出土遺物(2)

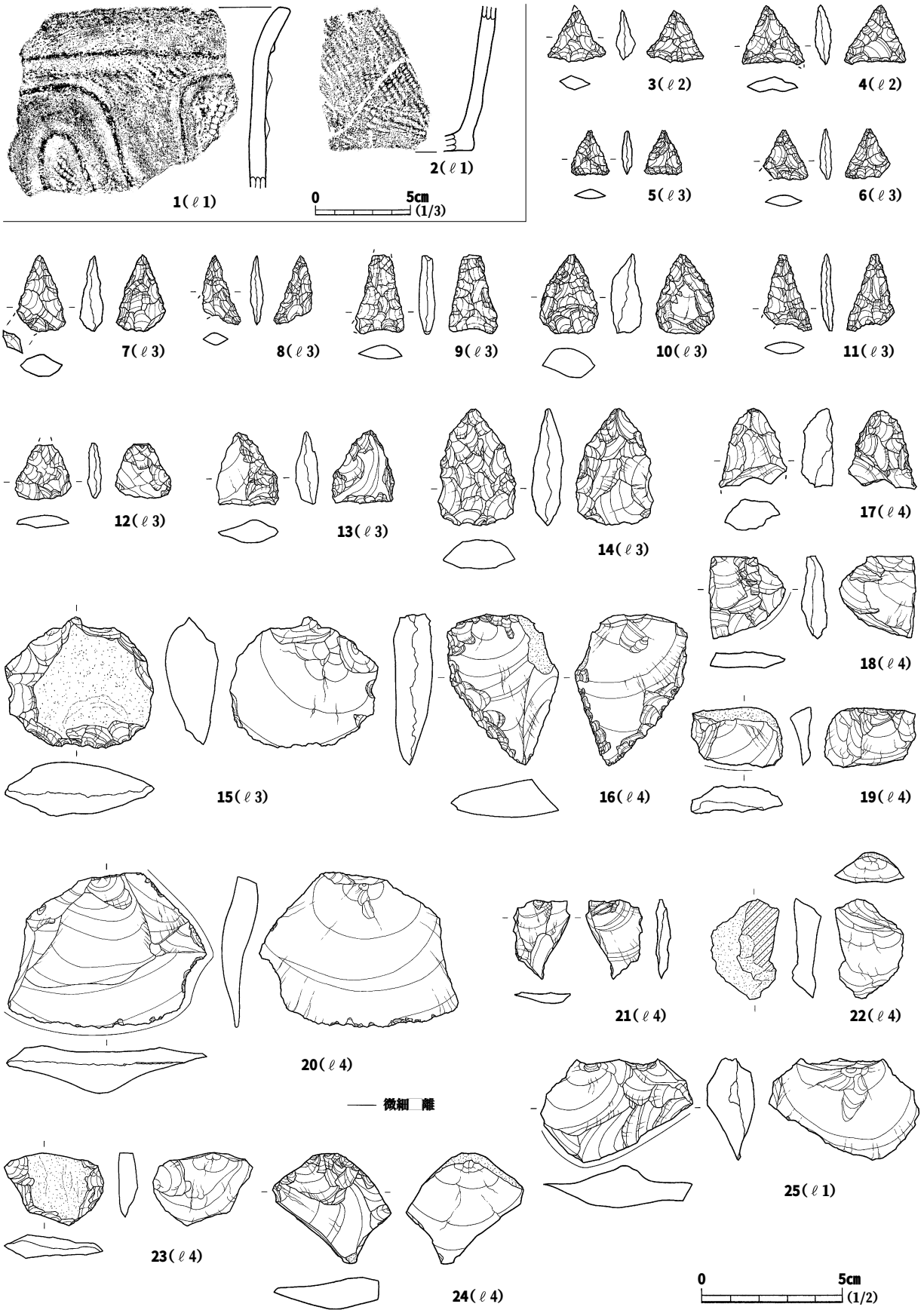


図123　115ａ号住居跡出土遺物(3)

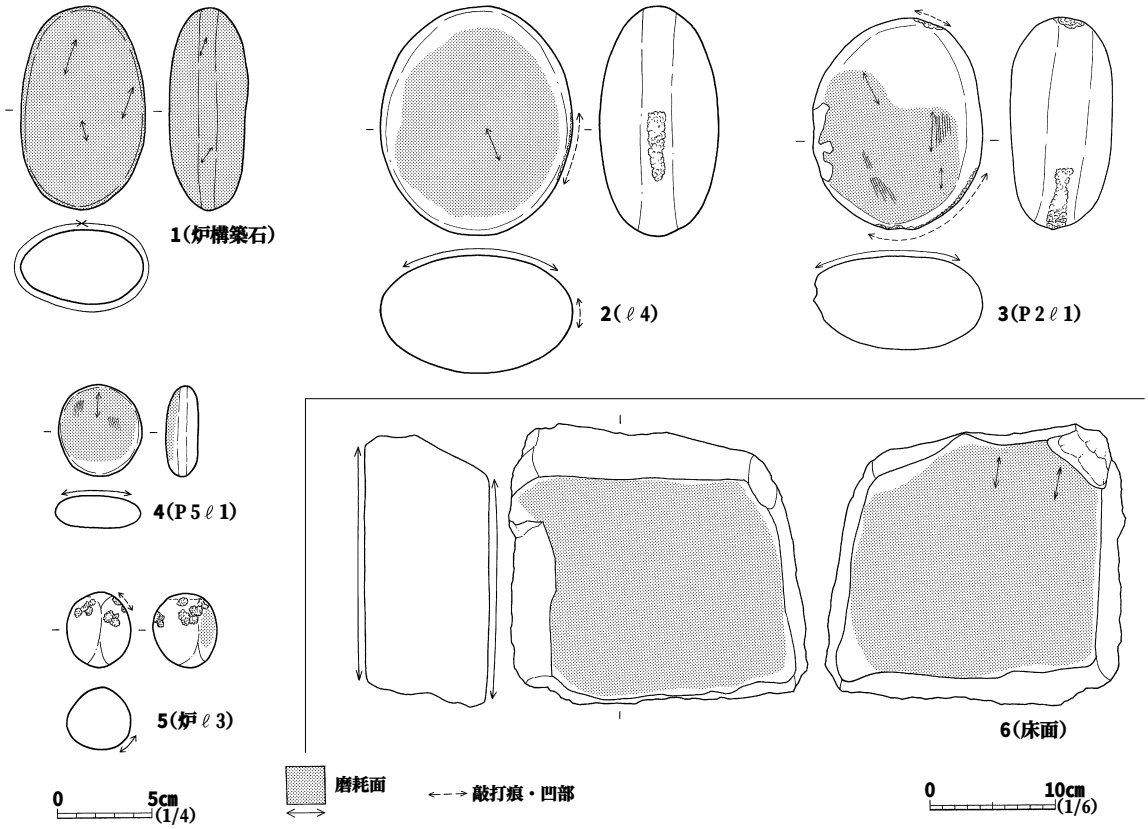


図124　115ａ号住居跡出土遺物(4)

面には部分的に二次加工が施されている。20は珪質頁岩製の大形剝片で，主要剝離面の打瘤の発達が著しい。背面右側縁から下側縁にかけて微細剝離痕が観察される。21・22は鉄石英製，23・24はチャート製の剝片である。

124図１～５は磨石類である。１は器面全面が磨耗し，２・３は磨耗面と敲打痕が観察された。４・５は小形磨石類である。６はアプライト製の石皿で，表裏両面の平滑面に磨耗痕が認められた。

まとめ　本遺構は，いわゆるダルマ形の複式炉を有する竪穴住居跡である。本遺構は，115ｂ号住居跡を拡幅して構築されている。上屋構造は４本主柱により支えられていたものと推察される。所属時期は炉体土器から判断して縄文時代中期後半の大木10式期に比定される。　（門　脇）

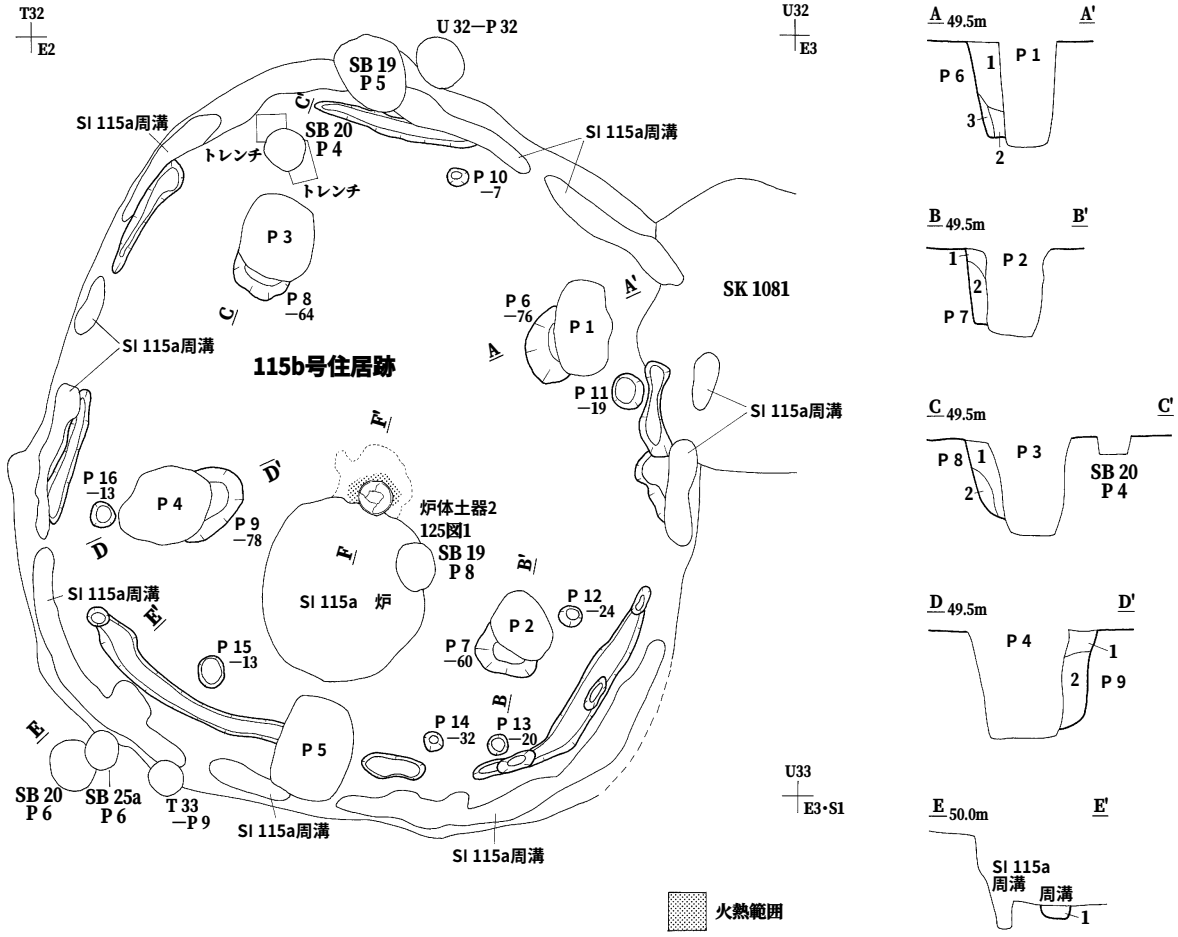
115ｂ号住居跡　ＳＩ115ｂ　（図121・125，写真356）

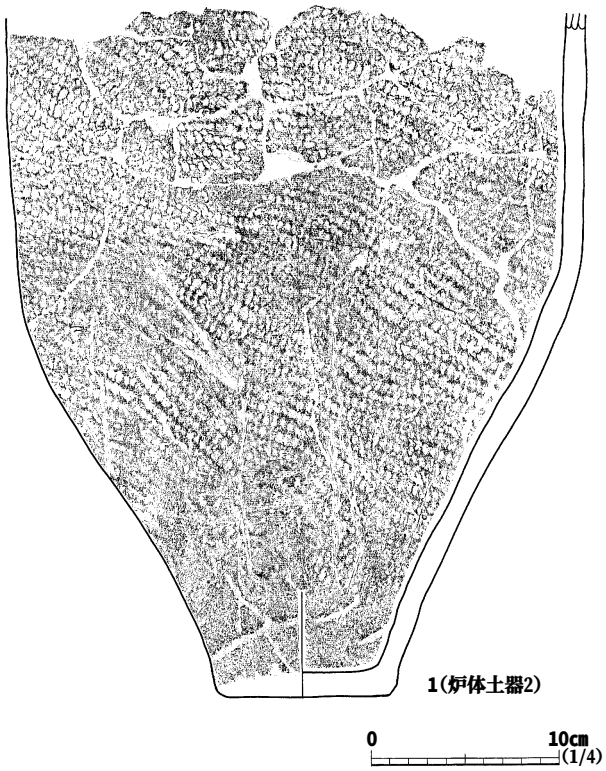
位置・検出面　115ａ号住居跡の床面から検出された竪穴住居跡である。115ａ号住居跡の周溝の輪郭に沿って，その内側約５～20㎝に，本遺構に伴う周溝が確認された。

重複　115ａ号住居跡と重複し，本遺構はそれより古い。本遺構南東側で1540号土坑と，床面中央部で1541号土坑と重複し，いずれも本遺構はそれより新しい。

堆積土　本住居跡に伴う堆積土は，周溝と土器埋設部の堆積土のみである。

平面形・規模　周壁は失われているので周溝の輪郭から判断すると，本住居跡の平面形は円形を基調とした隅丸方形であると推察される。長軸線の方向はＮ14 °Ｅである。規模は現存する周溝の上





115b号住居跡堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（周溝ｂ堆積土）

115b号住居跡P6堆積土
1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒微量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

115b号住居跡P7堆積土
1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒微量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

115b号住居跡P8堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

115b号住居跡P9堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

115b号住居跡P10～16堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

図125　115ｂ号住居跡と出土遺物

端で南北長5.0m，東西長4.8mを測る。

床面　本遺構の周溝の外側を除いて，115ａ号住居跡の床面と基本的に同一面であったと推察される。

周壁　115ａ号住居跡の構築時にすべて失われている。

周溝　115ａ号住居跡の周溝の内側約５～20㎝には，不連続な溝が確認された。幅は15～20㎝，床面からの深さは５～10㎝を計測した。堆積土は，にぶい黄褐色土を主体とした人為堆積土である。115ａ号住居跡の構築に際して，本周溝を埋めたと推察される。

複式炉　床面のほぼ中央に位置する。本遺構は土器埋設部のみが遺存し，南側に隣接する115ａ号住居跡の炉跡によって石組部は壊されている。

(土器埋設部)115ａ号住居跡の炉跡の北側に，遺存径30.5㎝，深さ35.9㎝の炉体土器２が埋設されていた。炉体土器の周囲の掘形底面には凹凸が認められたことから，縁石が巡っていた可能性が高い。炉体土器には，深鉢形土器の胴部上半部から底部が利用されている。

(堆積土)炉体土器２の上には，115ａ号住居跡炉跡の土器埋設部の縁石や掘形内堆積土(ℓ８)が堆積していた。このことから115ａ号住居跡炉跡の構築に際して，115ｂ号住居跡の土器埋設部は埋められていたと判断される。炉体土器２の内部にはℓ18～20が堆積していた。ℓ19・20は炭化物粒を多く含む黒褐色土で，炉の使用に伴う堆積土と考えられる。またℓ20上面からは約８㎝大の土器片がほぼ水平な状態で，内面側を上にして出土している。この土器片は炉体土器の内面に周囲が密接している。このことから土器埋設部の底面をかさ上げする際に，利用された土器片の可能性が高い。ℓ18は黄褐色土の小粒を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積と考えられる。ℓ21～24は掘形堆積土である。炉体土器の周囲の土は強く焼土化している(ℓ21)。

主柱穴　主柱穴はＰ６～９の４個である。これらは115ａ号住居跡の主柱穴Ｐ１～４によって大部分が壊されている。その規模は，遺存する長径で45～65㎝，床面からの深さ60～78㎝を測る。各主柱穴間の距離は，Ｐ６－Ｐ７間が2.4m，Ｐ７－Ｐ９間が2.8m，Ｐ８－Ｐ９間が2.1m，Ｐ６－Ｐ８間が2.5mで，ややゆがんだ方形の配置となっている。Ｐ６～９の堆積土は，褐色土やにぶい黄褐色土を主とし，ＬⅣである黄褐色土を塊状に含む人為堆積土である。115ａ号住居跡に建て替えられる際に柱材は抜き取られ，柱穴は人為的に埋められたと考えられる。

ピット　床面には主柱穴の他に７個の小穴が，周溝の内側に沿って確認された。規模は径15～25㎝，深さ７～32㎝である。周溝に沿った配置から判断すると，壁柱穴の可能性がある。

遺物出土状況　周溝や主柱穴から出土した遺物はなかった。複式炉からは炉体土器(125図１)の他に，前述のℓ20上面出土の縄文土器片１点，さらに土器埋設部の掘形内堆積土から縄文土器片が１点出土している。

遺物　125図１は，胴下部に膨らみをもつ深鉢形土器である。口縁部は欠損している。地文はＬＲの単節斜縄文である。

まとめ　本遺構は，複式炉を有する竪穴住居跡である。上屋構造は４本主柱により支えられていたものと推察される。複式炉や主柱穴の重複関係から，115ｂ号住居跡は115ａ号住居跡に建て替えら

れたものとみられる。所属時期は炉体土器の年代観から，縄文時代中期後半の大木10式期に比定される。（門　脇）

116号住居跡　ＳＩ116（図126～130，写真77・78・356）

位置・検出面　北区中央部東寄りの平坦面，Ｖ・W32・33グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の周囲には，1042・1054～1057・1059号土坑があり，北東側は120号住居跡，南西側は111号住居跡が隣接している。検出面はＬIV上面であり，暗褐色土で埋まった径5.0m程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　15・17号柱列・51号建物跡とV32・33グリッドの小穴と重複し，いずれよりも古い。

堆積土　８層に分層した。ℓ１・２は，黒褐色土で炭化物粒を多量に含み，黄褐色土が撹はん状に混じっていることから人為堆積土と判断した。ℓ３～５は，暗褐色もしくは褐色系の堆積土と黄褐色土の混土であり，これらも人為堆積土と判断した。ℓ６～８は，壁際や周溝内に認められた流入土であり，自然堆積土と推察される。

平面形・規模　東西方向が若干長い隅丸方形であり，長軸方向はN87°Eである。長軸の東西長5.0m，短軸の南北長4.8mを測る。

床面　基本土層のＬIVに形成され，ほぼ平坦である。複式炉の周辺から北壁にかけての広い範囲が硬く締まっていた。

周壁　床面から垂直に近い急な角度で立ち上がり，遺存壁高は，南西部30cm前後と高く，北西部が10cm前後と低い。

周溝　周壁に沿い，ほぼ全周にわたり周溝が確認された。その上端幅は平均20cm前後，床面からの深さは，５～15cmを測る。溝の底面及び壁には，径15～20cm程の小穴が不規則に確認され，小穴の深さは，20cmを超えるものが多い。

複式炉　複式炉は住居跡の中央南側に構築され，土器埋設部，石組部，さらに楕円形状の前庭部が確認された。

（規模）全長は約200cm，最大幅が120cmを測り，炉中軸線は南北方向を示している。

（堆積土）複式炉内堆積土は４層に分層した。ℓ１は，複式炉全体で確認された混土であり，後述する石組部・前庭部のほか，埋設部上面にも認められた。状況から，炉廃絶後に，人為的に埋めた堆積土と判断している。ℓ２・３は，土器埋設部の堆積土であり，ℓ３上面には，比較的まとまった状態で土器が出土した。この土器については，投棄されたものと推測している。ℓ４は，石組部の掘形堆積土である。本複式炉は，廃棄後，埋設部や石組部を部分的に埋められたものと判断している。

（土器埋設部）口径約30cmの炉体土器の南西側からは，敷き巡らせていたと考えられる小礫がわずかに確認された。炉体土器は検出面より約10cmの深さまで残存し，それ以下は遺存していない。埋設部の深さは25cmを測り，底部には土器片が平面状に敷かれていた。炉体土器の外側は焼土化し，その厚さは２cmを測る。

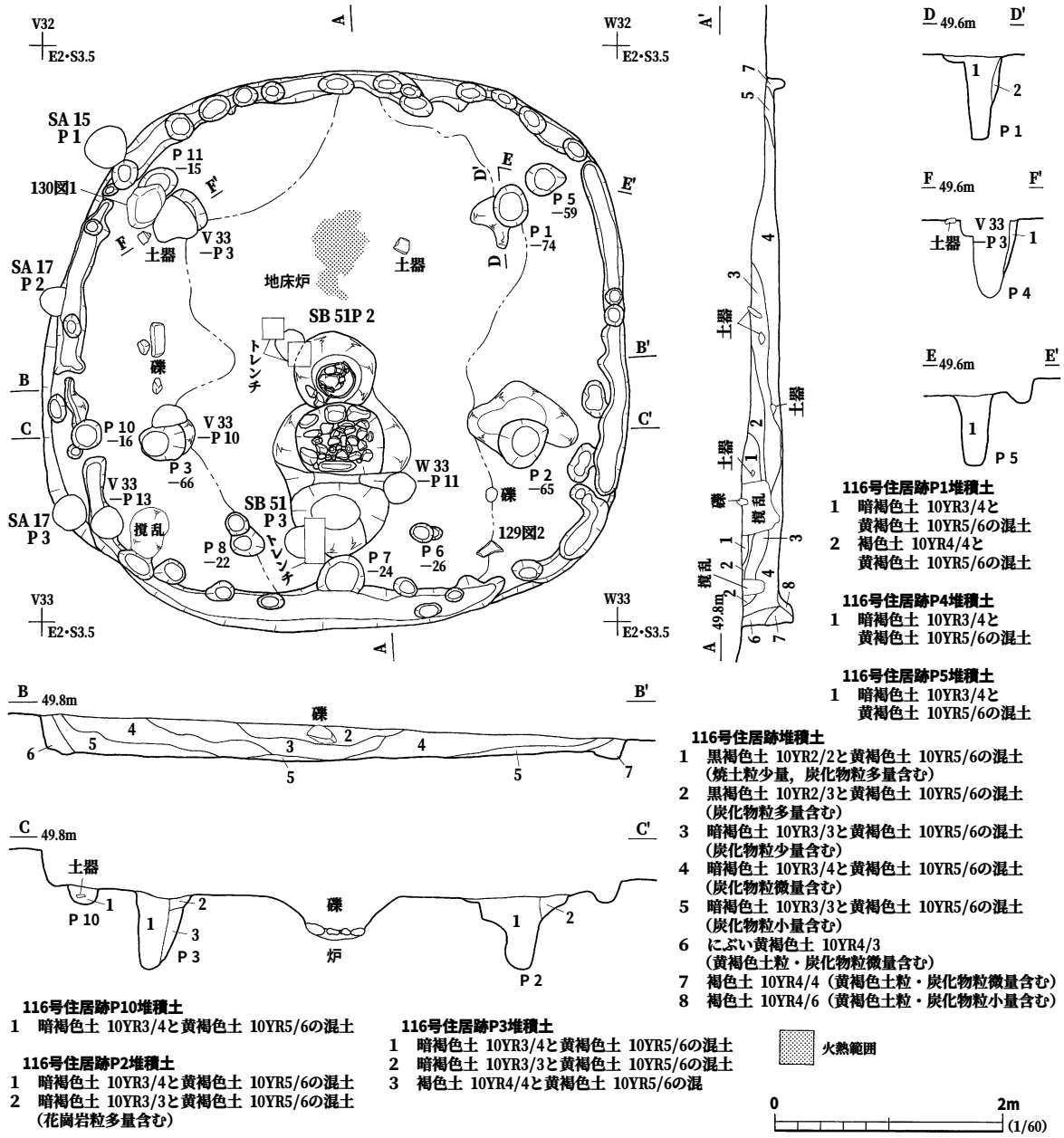


図126　116号住居跡

(石組部)平面形は，楕円形状をなし，その断面形は，段を有する擂鉢状を呈する。礫が遺存しているのは底面付近のみであり，壁際の礫は，廃絶後に抜き取られたと考えられる。なお，底面を構成する一部の礫の直下から加熱で崩れかかった礫や，砂粒が確認されたことから，本石組部は，部分的に修復が行われた可能性が高いと推測している。

(前庭部)平面形は不整楕円形であり，断面の形状は，擂鉢状をなしている。東西の幅85㎝，南北の長さ63㎝，床面よりの深さ26㎝を測る。

地床炉　複式炉の土器埋設部から，北に約1.0m離れた床面上で確認され，複式炉の中軸線の延長上にあたる。床面が直接熱を受け，東西の幅約45㎝，南北方向の長さ約75㎝の範囲が薄く赤変していた。熱変化を受けた部分の深さは浅く，床面から１㎝までは及んでいなかった。

主柱穴　Ｐ１～４の４個を確認した。北側のＰ４－Ｐ１間の距離は約3.0m，西側のＰ４－Ｐ３間の距離は約2.0mで，柱穴の径は35～50㎝，床面からの深さは，65～74㎝を測る。Ｐ１・２・４の柱穴上端周辺に認められたくぼみは抜き取り痕と思われ，本住居跡の柱は全て抜き取られ，柱穴は埋められたものと判断している。

ピット　主柱穴の他に，ピットを６個(Ｐ５～８・10・11)確認した。Ｐ５・10・11はそれぞれ主柱穴Ｐ１・３・４と周壁との間に位置し，規模は径25～40㎝，深さはＰ10・11が約15㎝弱で，Ｐ５は59㎝と主柱穴の深さに近い。Ｐ６～８は炉前庭部を囲むように，東側にＰ６，西側にＰ８，南側にＰ７が位置している。規模は径20～40㎝，深さは22～26㎝を測り，Ｐ７は東西ピットより一回り大きい。

遺物出土状況　床面から縄文土器片46点，石器が21点出土している。複式炉からは炉体土器(128図２)の他に，炉体土器内から深鉢形土器２個体分の破片(127図１・128図１)が出土している。複式炉の堆積土ℓ１から縄文土器片７点，石器12点が出土した。ピットの堆積土からは，縄文土器片11点，石器類24点が出土している。この他，住居跡の堆積土(ℓ１～４)から縄文土器片369点，石器類117点が出土している。

遺物　127図１，128図，129図１～５に縄文土器を示した。127図１は炉体土器として使用されていた深鉢で，胴上部から口縁部にかけてを欠損している。文様は地文の縄文のみ認められる。内外面ともにアバタ状の二次焼成痕が顕著に観察される。

128図１は胴上部が外反気味に立ち上がる器形の深鉢形土器である。沈線区画の縄文帯によって文様が描出される。胴下部には波状沈線が引かれ，底部付近の地文域を明瞭に区分する。同図２は口縁部に４単位の小突起を有する深鉢形土器である。炉体土器に転用されていた。口縁部は，緩やかに内湾している。口縁直下には沈線区画の無文部が巡り，胴上部には磨消帯による文様が描出されている。地文はＲＬの原体を使用した単節斜縄文である。同図３は稜線区画の無文帯によって文様が描出されている。同図４は胴下部が膨らむ器形の深鉢形土器で，稜線区画の無文帯によって渦巻状の文様が施文されている。

129図１は胴下部が膨らみ，胴上部が外反して立ち上がる器形の深鉢形土器である。文様は稜線区画の縄文帯によって描かれているが，具体的な図形は不明である。地文はＬＲの原体を使用した単節斜縄文である。同図２は口縁部が外反する器形の深鉢形土器である。沈線区画の縄文帯で楕円形の文様が描かれている。同図３は沈線区画の縄文帯によって「の」字状の文様を描いている。同図４は稜線区画の無文帯によって文様を施文している。無文部は口縁部からＳ字状に展開するようである。同図５は中空の突起で，円形の穴が３個開けられている。沈線によるＳ字状の文様が施される。

129図６は珪質頁岩製の凹基式石鏃である。両面は整った調整剝離痕が並列している。130図１は花崗岩製の多孔石である。表面の左下部に７カ所の凹部が認められた。凹部は大きいもので長径22㎜，深さ12㎜を測り，その形状は円錐形を呈する。同図２は安山岩製の石皿である。素材の板状礫を打撃によって折断した後，その折断面に対し敲打による加工を施し，直方体を呈するように整形

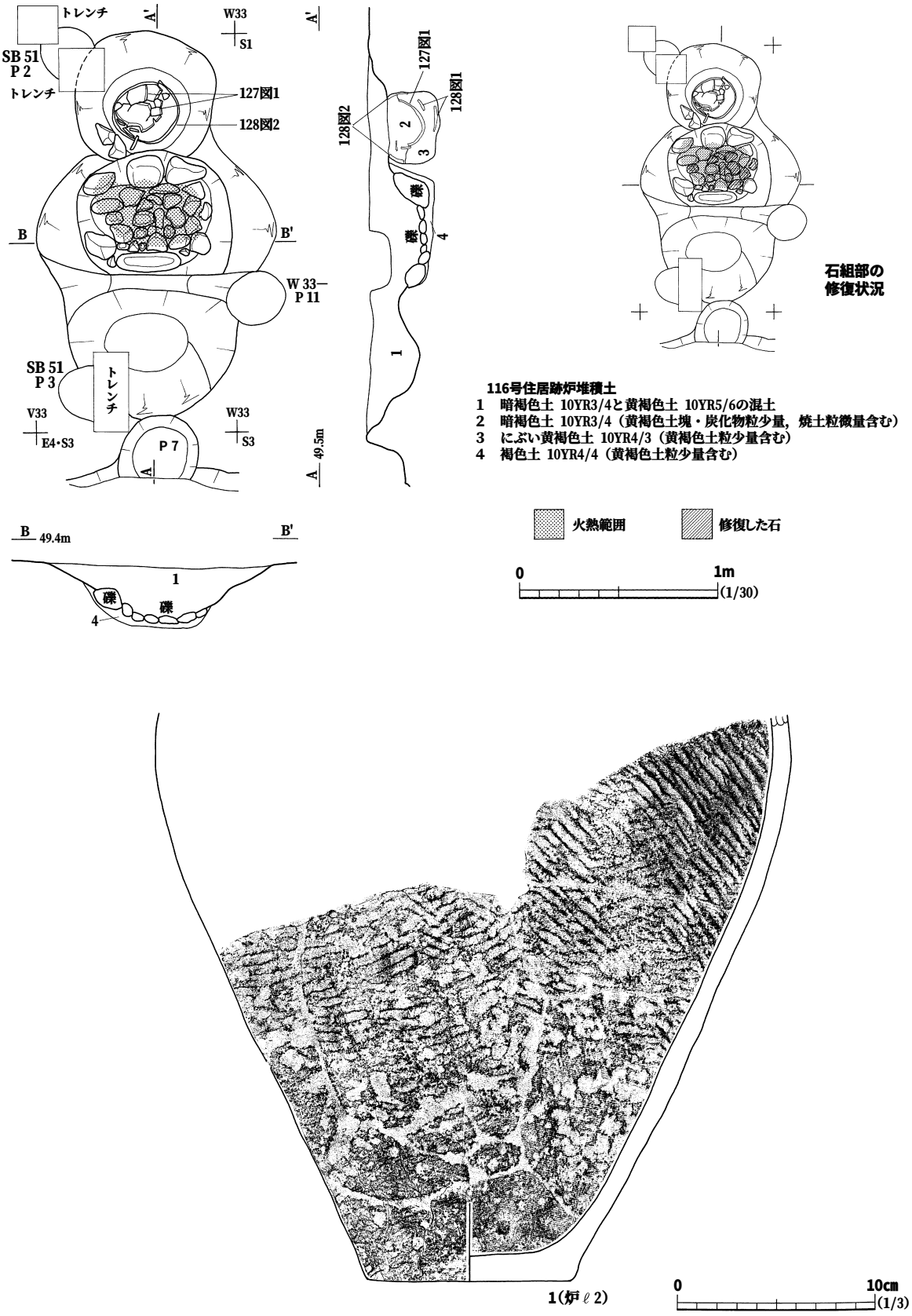


図127　116号住居跡炉と出土遺物(1)

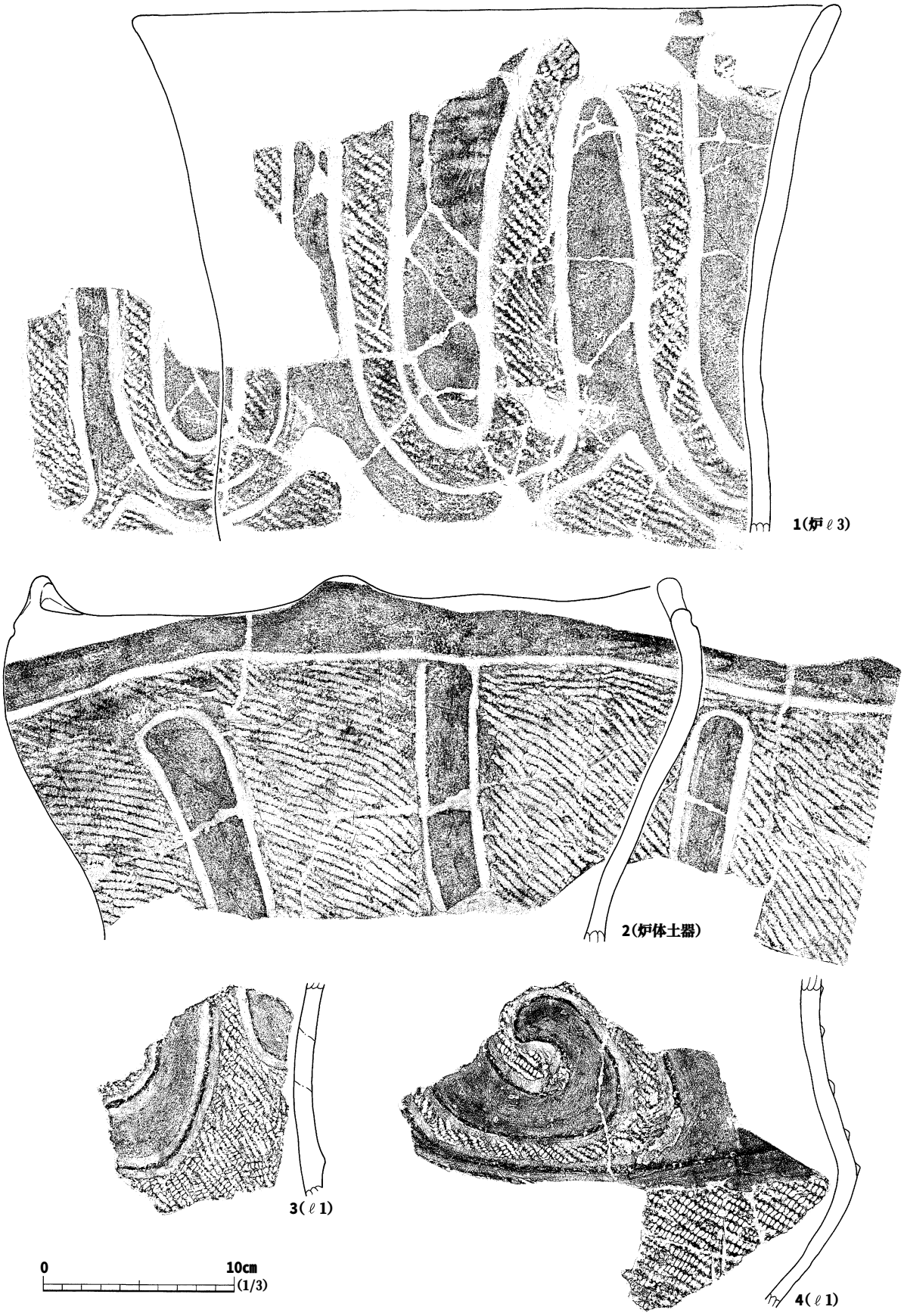


図128　116号住居跡出土遺物(2)

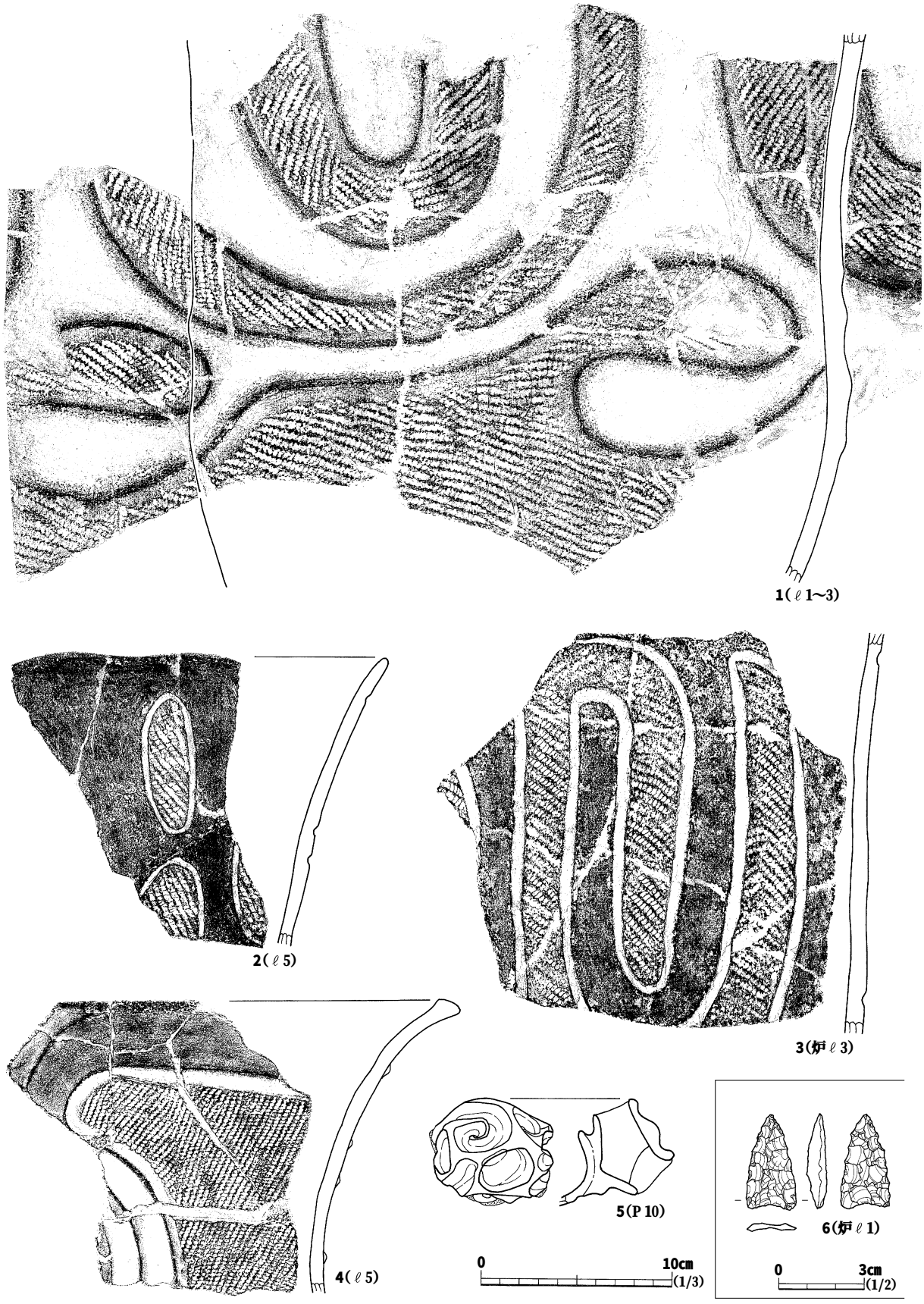


図129　116号住居跡出土遺物(3)

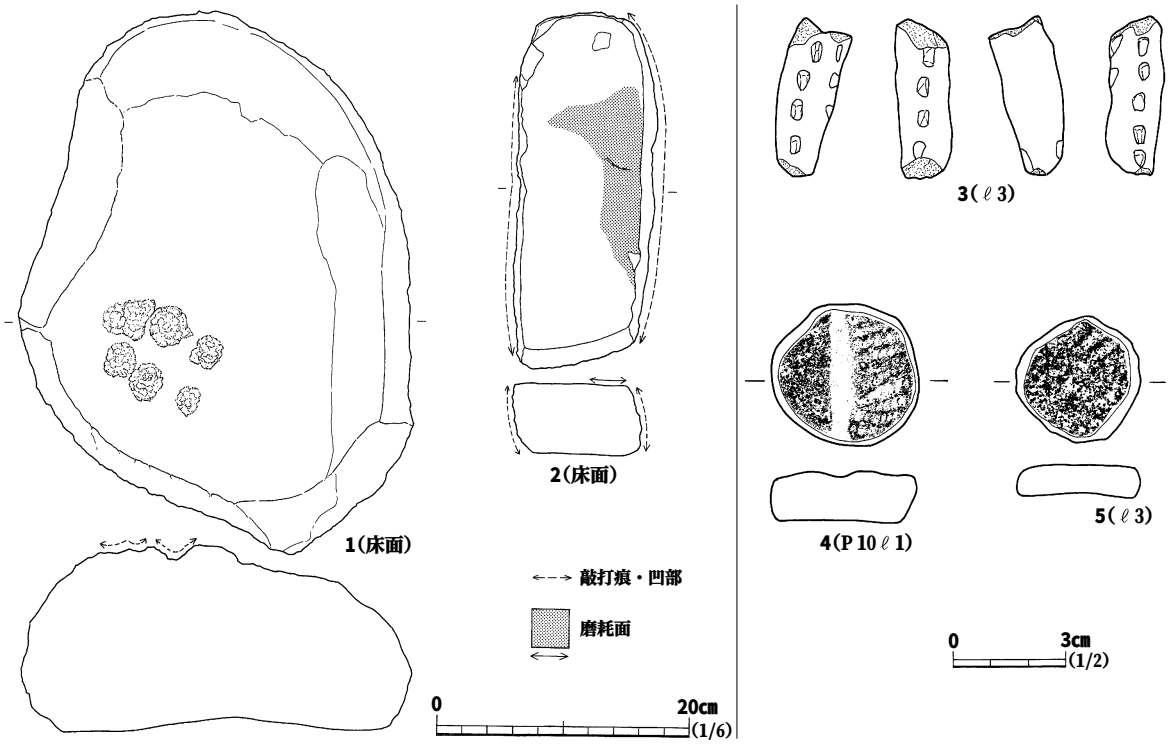


図130　116号住居跡出土遺物(4)

している。表面には部分的に磨耗痕が観察された。

130図３に示した土製品は，土偶の四肢と推察される。細い棒状工具によって施された刺突が連続している。同図４・５には土器片製の円盤を示した。

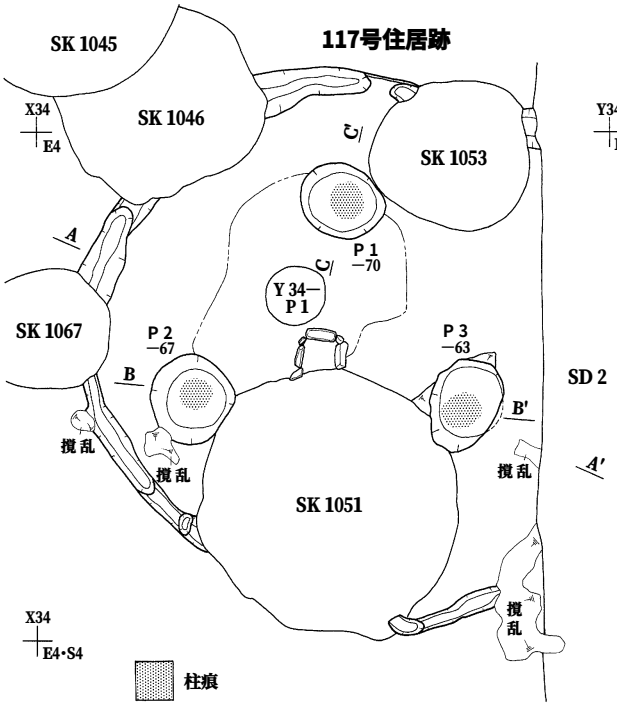
まとめ　本遺構は，複式炉と方形に配置された４本の主柱穴を配した竪穴住居跡である。複式炉の中軸線は南北方向を示しており，その延長線上の北側に地床炉があり，踏み締まりが複式炉から北側周壁付近まで確認できた。複式炉は修復が行われ，廃棄後に一部分を破壊し，埋めている。また，柱穴や住居跡全体が人為堆積土により埋められている。本住居跡の帰属時期は，出土土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と推定される。　（茂　木）

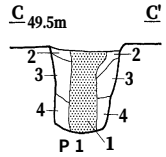
117 号 住 居 跡　ＳＩ117 （図131・132，写真79・80・356）

位置・検出面　北区中央部の平坦面，Ｘ・Ｙ33・34グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北東側には118号住居跡，南側には150号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であるが，その堆積土の大部分は削平され，炉跡が露出した状態であった。暗褐色土で埋まった径4.5m程の円形の輪郭を検出した。しかし東壁側は12号溝跡に，南半部は1051号土坑によって壊されていた。

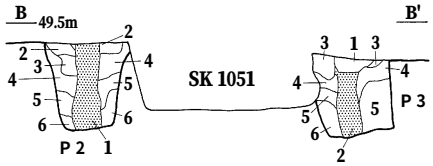
重複　1046・1051・1053・1067号土坑が重複し，本遺構はそれより古い。また12号溝跡とＹ34グリッドの小穴が重複し，いずれも本遺構はそれより古い。

堆積土　住居跡西半部に部分的にしか残っていなかったが，土色の違いから２層に分けた。ℓ１・２は基本土層のＬⅢに類似した暗褐色土を主体する。壁際から流れ込んだような堆積状況が観察されることから，自然堆積土と判断した。

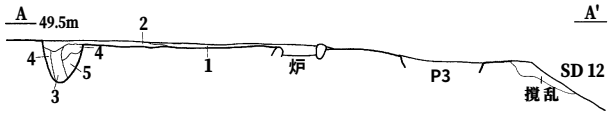




117号住居跡P1堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒多量含む。柱痕）
2　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土

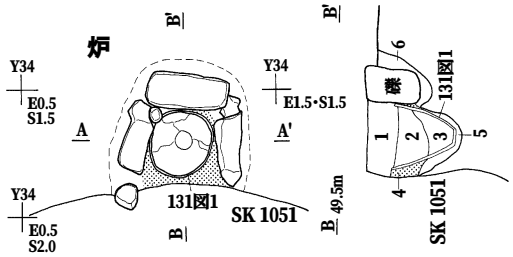


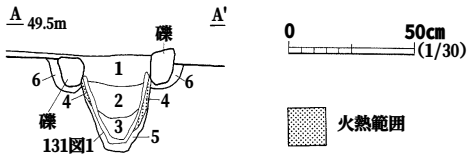
117号住居跡P2堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒多量含む。柱痕）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒多量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒多量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　黄褐色土 10YR5/6と褐色土 10YR4/6の混土
6　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土



117号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒少量含む。柱痕）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　黄褐色土 10YR5/6と褐色土 10YR4/6の混土
6　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

117号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（焼土粒・炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4
（炭化物粒・炭化物塊少量含む。周溝堆積土）
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（周溝堆積土）
5　にぶい黄褐色土 10YR5/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（周溝堆積土）





117号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒・焼土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒少量含む）
3　黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒・塊多量，焼土粒少量含む）
4　褐色土 10YR4/4（焼土粒・塊多量含む）
5　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
6　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土

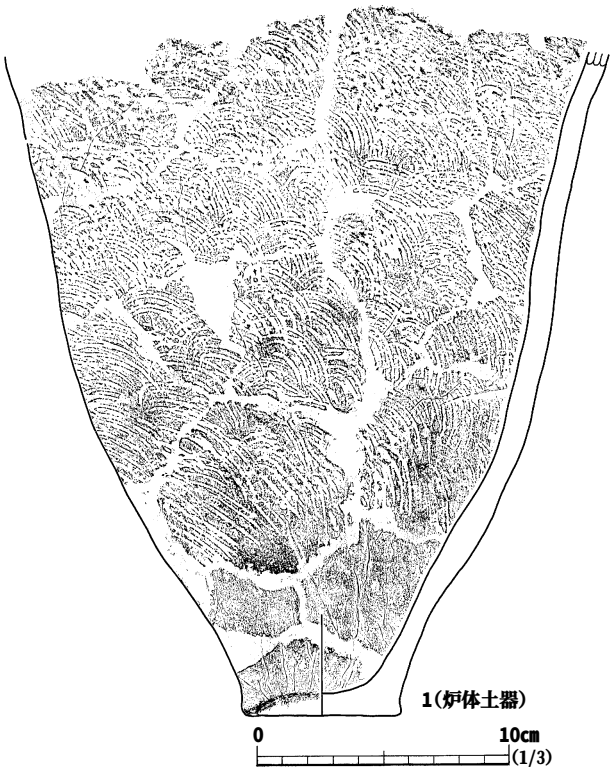


図131　117号住居跡と出土遺物(1)

平面形・規模　12号溝跡と４基の土坑に周壁を壊されているが，平面形は炉跡を中心とした円形を呈している。規模は現存する上端で南北長4.6ｍを測る。

床面　基本土層のＬⅣにより形成され，ほぼ平坦である。床面中央に土器埋設石囲炉を配置している。またＰ１・Ｐ２・炉跡に囲まれた範囲は，硬く締まっていた。

周壁　床面から70～80°の急角度で立ち上がり，遺存壁高は２～５㎝と極めて浅い。

周溝　遺存する周壁に沿って連続する小溝が確認された。幅は15～32㎝，床面からの深さは20～31㎝を計測した。堆積土ℓ３は炭化物片を含む締まりの弱い褐色土で，壁材の痕跡の可能性がある。ℓ４・５はＬⅣである黄褐色土を塊状に含む堆積土で，人為的に周溝を埋めていると判断した。

炉跡　床面中央に土器埋設石囲炉が構築されている。1051号土坑により南側は壊されている。

(規模)東西幅は47㎝，南北幅は遺存値で44㎝を測る。

(堆積土)ℓ１・２は暗褐色土を主体として，ＬⅣである黄褐色土を微量含んでいる。これは住居内堆積土と対応することから自然堆積と判断した。ℓ３は，炭化物粒・塊を多量に含む黒褐色土で，炉の使用に伴う堆積土と考えられる。ℓ４～６は掘形堆積土である。

(構造)遺存径24㎝，器高26㎝の炉体土器に接する形で，方形の石組部を構築している。縁石は３点の箱形の扁平礫を組み上げて，直立する三方の側壁を造っている。３点の花崗閃緑岩製の縁石の上面は平滑で，床面から５㎝の高さにそろえられている。埋設土器の上端は縁石の上面から12㎝，床面からは７㎝下位に設置されている。埋設土器の周囲には焼土粒・塊が堆積し(ℓ４)，被熱の痕跡とみられる。

主柱穴　主柱穴はＰ１～３の３個である。これらの掘形平面形は，不整円形を呈する。規模は長径68～74㎝と大きく，床面からの深さも63～70㎝と深い。各主柱穴の芯々間距離は，Ｐ１－Ｐ２間，Ｐ１－Ｐ３間が約1.8ｍ，Ｐ２－Ｐ３間が約2.1ｍであり，炉跡を中心とした三角形の配置となっている。また各主柱穴の中央には直径25㎝の柱痕が確認された。これら柱穴の掘形内堆積土は，褐色土と暗褐色土が交互に堆積していた。

遺物出土状況　炉跡からは炉体土器(131図１)が１個体出土している。この他，堆積土(ℓ１)中から縄文土器片16点，石器６点が出土し，その内２点を図示した。

遺物　131図１は，口縁部が欠損した粗製の深鉢形土器である。地文には，条間が不揃いの櫛歯状工具によって，波状の条線が全面に描かれている。132図１は，口縁部の破片で，口縁直下には１条の沈線によって区画された無文部が巡る。胴部にはＬＲの単節斜縄文が観察される。132図２は精製の深鉢形土器の口縁部片である。円孔を伴う突起が付けられている。文様は不明だが，内外面とも丁寧にミガキ調整されている。口唇部と外面に赤彩された痕跡が認められる。

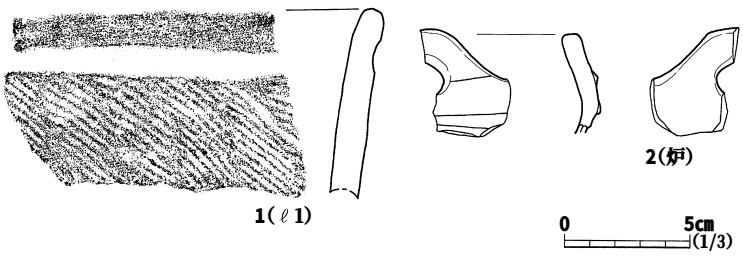


図132　117号住居跡出土遺物(2)

まとめ　本遺構は，土器埋設石囲炉を有する竪穴住居跡である。上屋構造は３本主柱により支えられていたものと推察される。所属時期は，本遺構より新しい1053号土坑から大木10式古段階の土器片が出土していること，炉体土器が南関東の編年観から加曽利ＥⅢ式～掘之内式に比定されることから判断すると縄文時代中期後葉の大木９～10式期古段階に比定される。　（門　脇）

118号住居跡　ＳＩ118（図133～136，写真81・82・357）

位置・検出面　北区南東部の平坦面，Ｙ・Ｚ32・33グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北西側には119号住居跡，南西側には117号住居跡が近接している。検出面はＬⅣ上面であり，黒褐色土で埋没した直径4.5m程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　12号溝跡よりも古く，1398号土坑よりも新しい。また，後述するように，新旧２時期の主柱穴と複式炉及び壁面の一部が認められたため，本住居跡は建て替えられた可能性が高い。

堆積土　本住居跡の堆積土は12層に細分された。ℓ１～７・９・10・12は基本土層のＬⅢ・Ⅳに類似した褐色系の土を基調としている。いずれも黒褐色土や暗褐色土を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積土と判断した。ℓ８は北東壁の修築土である。ℓ11は混入物を含まないが，層の上面が波打っており，人為堆積土の可能性が高い。本住居跡の最終埋没時に堆積したℓ１は，炭化物粒や焼土粒，土器片・石器を含んだ黒味の強い土で，意図的に投棄されたものと推察される。したがって，本住居跡は全て人為堆積土により埋没したものと考えられる。

平面形・規模　不整な楕円形である。竪穴の規模は，現状の壁上端で長径6.1m，短径5.8mを測る。竪穴の中軸線は，Ｎ19 ℃Ｗである。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦で，全面が非常に硬く締まっていた。遺構の中央が12号溝跡によって切られているため，床面も溝状に壊されている。

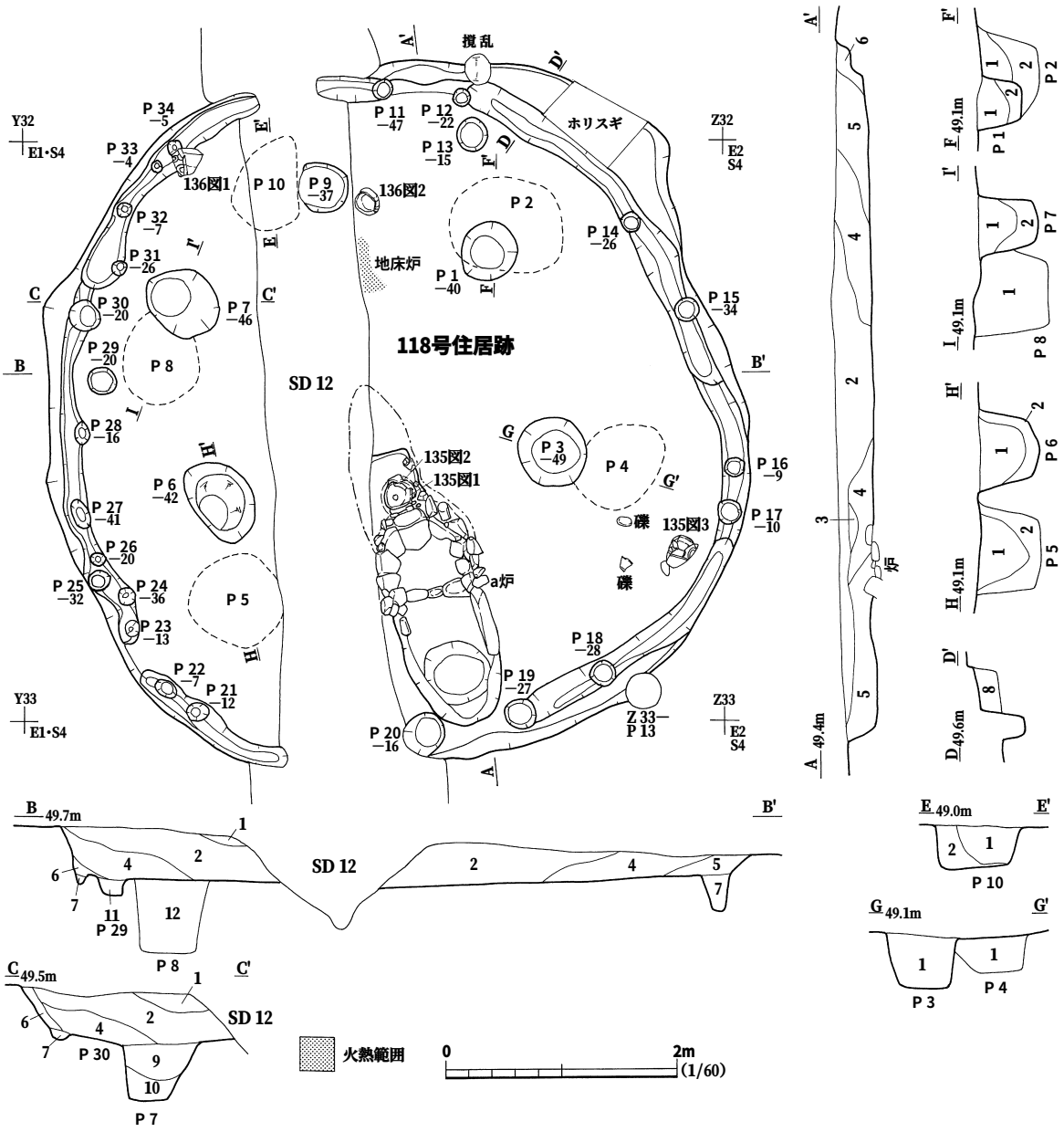
周壁　床面から46～72 ℃のやや急な角度で立ち上がる。遺存壁高は北西側で46㎝と高く，東に向かって低くなり，南東側では15㎝になる。北東側は１回改修されており，古い壁の内側に明黄褐色系の土を盛って整え，新しい壁を造っていた。また，南側と北側の一部は12号溝跡によって破壊されている。

周溝　３カ所で途切れるものの，周壁に沿ってほぼ全周する。周溝の上端幅は14～32㎝，床面からの深さは７～29㎝を計測する。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ３とＰ６のほぼ中間に構築されており，新旧の２時期がある。新しい方をａ炉，古い方をｂ炉と呼称する。

ａ炉　ａ炉は一部12号溝跡によって壊されているが，おおむね良好な遺存状態であった。円形状の土器埋設部に長方形状の石組部，さらに楕円形状の前庭部が続く形態を呈している。構築順序は「炉体土器埋設→土器埋設部縁石設置・石組部側壁構築」である。

（規模）ａ炉は全長245㎝，最大幅95㎝を測る。炉の長軸は南北方向であり炉中軸線はＮ18 ℃Ｗで，真北から若干西に振れている。



118号住居跡堆積土
1　黒色土 10YR2/1と明黄褐色土 10YR6/6の混土
（炭化物粒・焼土粒少量含む）
2　黒褐色土 10YR3/2とにぶい黄褐色土 10YR5/4の混土
（炭化物粒少量含む）
3　明黄褐色土 10YR7/6と暗褐色土 10YR3/3の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3と暗褐色土 10YR3/3の混土
5　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）
6　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/8の混土
7　にぶい黄橙色土 10YR6/3と黄褐色土 10YR5/8の混土
（周溝堆積土）
8　明黄褐色土 10YR7/6と暗褐色土 10YR3/3の混土
（周壁修築土）
9　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/8の混土
（P7堆積土）
10　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/8の混土
（P7堆積土）
11　にぶい黄褐色土 10YR4/3（P29堆積土）
12　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/8の混土
（P8堆積土）

118号住居跡P1堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2と明黄褐色土 10YR7/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と明黄褐色土 10YR7/6の混土

118号住居跡P2堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と明黄褐色土 10YR7/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3

118号住居跡P3・4・8堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と明黄褐色土 10YR7/6の混土

118号住居跡P5・6堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と明黄褐色土 10YR7/6の混土
2　明黄褐色土 10YR7/6と暗褐色土 10YR3/3の混土

118号住居跡P7・10堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR5/4と明黄褐色土 10YR7/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と明黄褐色土 10YR7/6の混土

図133　118号住居跡(1)

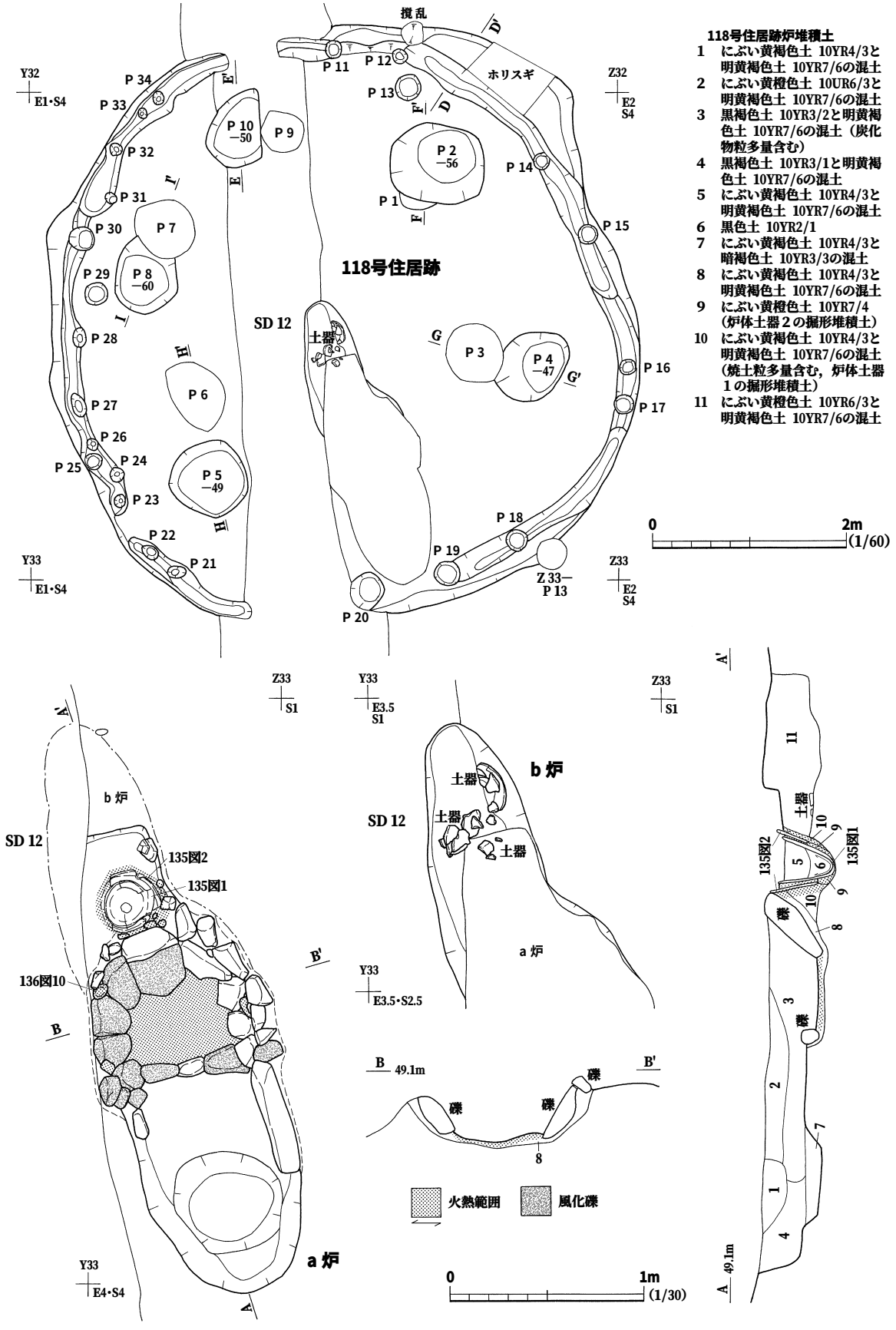


図134　118号住居跡(2)

（堆積土）ℓ１～５・７は，２種類以上の土が混じり合う混土であるため，人為的に埋められたものと推察される。ℓ６は炉体土器の底部にたまった漆黒色の粘質土で，使用時に堆積したものと考えられる。炉体土器の内面底部には，この粘質土が付着し，内面が黒褐色を呈していた。ℓ８～11は，土器埋設部や石組部の掘形内に認められた構築土で，ℓ11は古い複式炉の土器埋設部の大部分を埋めている。

（土器埋設部）ａ炉には炉体土器に接して縁石が存在したらしく，小振りな礫が一部残っているが，住居廃絶時にほとんど抜き取られている。南北方向の長さは推定35㎝で，縁石を抜き取った際の凹みまで含めると53㎝になる。炉体土器周辺の土は強く焼土化している。炉体土器は２個体の深鉢形土器を入れ子状態にして埋設していた。外側の土器は内側の土器を埋設した際に胴下半部を壊されているため，土器埋設部の改修が少なくとも１回は行われたものと推察される。

（石組部）底面に礫は敷かれていない。長方形の掘形の壁に沿って偏平な礫を立て並べて外傾する側壁を造っており，土器埋設部との間には特に大型の板状の礫が用いられている。側壁の外側には長さ20㎝前後の直方体状の礫を並べて縁石としている。石組部の最大幅は95㎝，南北方向の長さは78㎝を測る。礫は表面に強い火熱を受けて，もろくなったものが多い。敲石１点が構築礫として転用されていた。底面の土は強く焼土化している。

（前庭部）不整な楕円形を呈する土坑状の掘り込みで，側壁はほぼ直立している。石組部に接する東側壁には板状の大型礫を設置している。規模は最大幅84㎝，南北方向の長さ114㎝を測る。底面はほぼ平坦で，中央やや南寄りに円形のピットがある。ピットの規模は直径54㎝，深さ15㎝を測る。

ｂ炉　ｂ炉は新しい炉を構築する際に大部分が壊され，土器埋設部の炉体土器が若干残る程度であった。土器埋設部掘形の規模は，南北の遺存長136㎝，最大幅56㎝を測る。

地床炉　新しい複式炉の土器埋設部から北に約1.6m離れた床面上で確認された。複式炉の中軸線上からは，やや東にずれた位置にあたる。西側は12号溝跡によって壊されており，調査できたのは東側の一部であった。床面が直接熱を受け，東西20㎝，南北46㎝の狭い範囲が薄く赤変していた。熱変化を受けた部分は，床面から２㎝の深さに及んでいる。

新しい主柱穴　主柱穴も新旧の２時期がある。新しい主柱穴はＰ１・３・６・７・９の５個で，Ｐ９を軸頂部にした五角形の配置となっている。各主柱穴間の距離は，Ｐ９－Ｐ１間が1.5m，Ｐ１－Ｐ３間が1.8m，Ｐ３－Ｐ６間が3.0m，Ｐ６－Ｐ７間が1.9m，Ｐ７－Ｐ９間が1.6mを計測する。現状の平面形は不整な円形もしくは楕円形で，断面形はＵ字状を呈している。規模はＰ１が直径48㎝，深さ40㎝，Ｐ３が直径60㎝，深さ49㎝，Ｐ６が長径74㎝，短径52㎝，深さ42㎝，Ｐ７が長径68㎝，短径56㎝，深さ46㎝，Ｐ９が直径44㎝，深さ37㎝を計測する。複式炉の両脇に配置されたＰ３・６は，特に深くしっかり造られている。なお，堆積土は混土であり，柱痕も認められなかったため，柱を抜き取り，人為的に埋められたものと考えられる。

古い主柱穴　古い主柱穴はＰ２・４・５・８・10の５個で，Ｐ10を軸頂部にした五角形の配置となっている。各主柱穴間の距離は，Ｐ10－Ｐ２間が2.1m，Ｐ２－Ｐ４間が2.3m，Ｐ４－Ｐ５間が

3.6m，Ｐ５－Ｐ８間が2.2m，Ｐ８－Ｐ10間が1.8mを計測する。現状の平面形は不整な円形もしくは楕円形で，断面形はU字状を呈している。規模はＰ２が長径97㎝，短径80㎝，深さ56㎝，Ｐ４が長径80㎝，短径64㎝，深さ47㎝，Ｐ５が直径80㎝，深さ49㎝，Ｐ８が長径推定80㎝，短径66㎝，深さ60㎝，Ｐ10が長径82㎝，短径推定60㎝，深さ50㎝を計測する。堆積土は混土であるため，人為的に埋められたものと推察される。

ピット　主柱穴の他に小さいピットが24個ある。Ｐ11・12は北壁際の周溝が途切れた部分に位置している。この両ピットに接する周壁は床面から緩やかに立ち上がり，10㎝の高さで狭い平坦面をもっている。壁がステップ状になっていることから，出入口の可能性が高い。したがって，Ｐ11・12は出入口部分の屋根や戸を取り付けるための柱であったと推察される。両ピットの距離は66㎝，規模はＰ11が直径16㎝，深さ47㎝，Ｐ12が直径13㎝，深さ22㎝を測る。Ｐ13～34は周壁近くに配置されていることから，壁柱穴と推察される。規模は直径10～40㎝，深さ４～41㎝を計測する。

遺物出土状況　床面及び複式炉の底面から出土したのは，縄文土器片14点，石器１点である。この中で，135図３，136図１・２に示した縄文土器は床面上に横倒しの状態で出土した。この他，堆積土中から縄文土器片352点，石器55点，鉄滓５点が出土した。特に最上層のℓ１からは，縄文土器片163点，石器50点がまとまって出土している。５点の鉄滓は遺構の検出面付近から出土していることから，本住居跡に伴うものではないと考えられる。

遺物　135図１～３，136図１～６に縄文土器を示した。135図１・２はａ炉の炉体土器である。１が内側，２が外側に埋設されていた。１は胴下部が膨らみ，口縁部が外反する深鉢形土器である。文様は口縁部から胴下部にかけて施され，横に連続するＳ字状のアルファベット文を主文様とし，その間の所々に小さなU字状，逆U字状の文様を配置している。文様はミガキ調整が加えられた幅広い沈線で描かれる。地文はＲＬの単節斜縄文で，文様間は丁寧に磨り消されている。２は口縁部と胴下部が欠損する深鉢形土器である。主文様は，胴上部と胴下部のそれぞれに描かれているが，具体的な図形は不明である。この両者の間に挟まれた胴中位には，小さなU字状，逆U字状，渦巻き状の文様が見られる。文様の施文技法，地文の種類は１と同じである。

135図３は胴下部が膨らみ，口縁部が外反する深鉢形土器である。文様は口縁部から胴中位にかけて施され，稜線区画による無文帯でクランク状の主文様が描かれている。地文はＬＲの単節斜縄文である。口縁部には補修孔が１個ある。

136図１は深鉢形土器の破片資料である。胴上部はやや内湾気味で，口縁部は波状口縁になる。主文様は口縁部から胴下部にかけて描かれている。口縁直下には稜線区画による無文帯が巡り，その下には丸味を帯びたU字状の文様と小さな円文が描かれている。胴下部にはアルファベット文が施されているようだが，具体的な図形は不明である。文様はミガキ調整された沈線で描かれている。地文は節の大きなＬＲの単節斜縄文で，口唇部にも施文される。文様間の地文は磨り消されている。

136図２は球形の胴部に短く外反する口縁部が付けられた把手付土器である。口縁部は無文で，胴部には逆Ｖ字状の主文様が施されている。主文様はミガキ調整された沈線で描かれる。地文は節

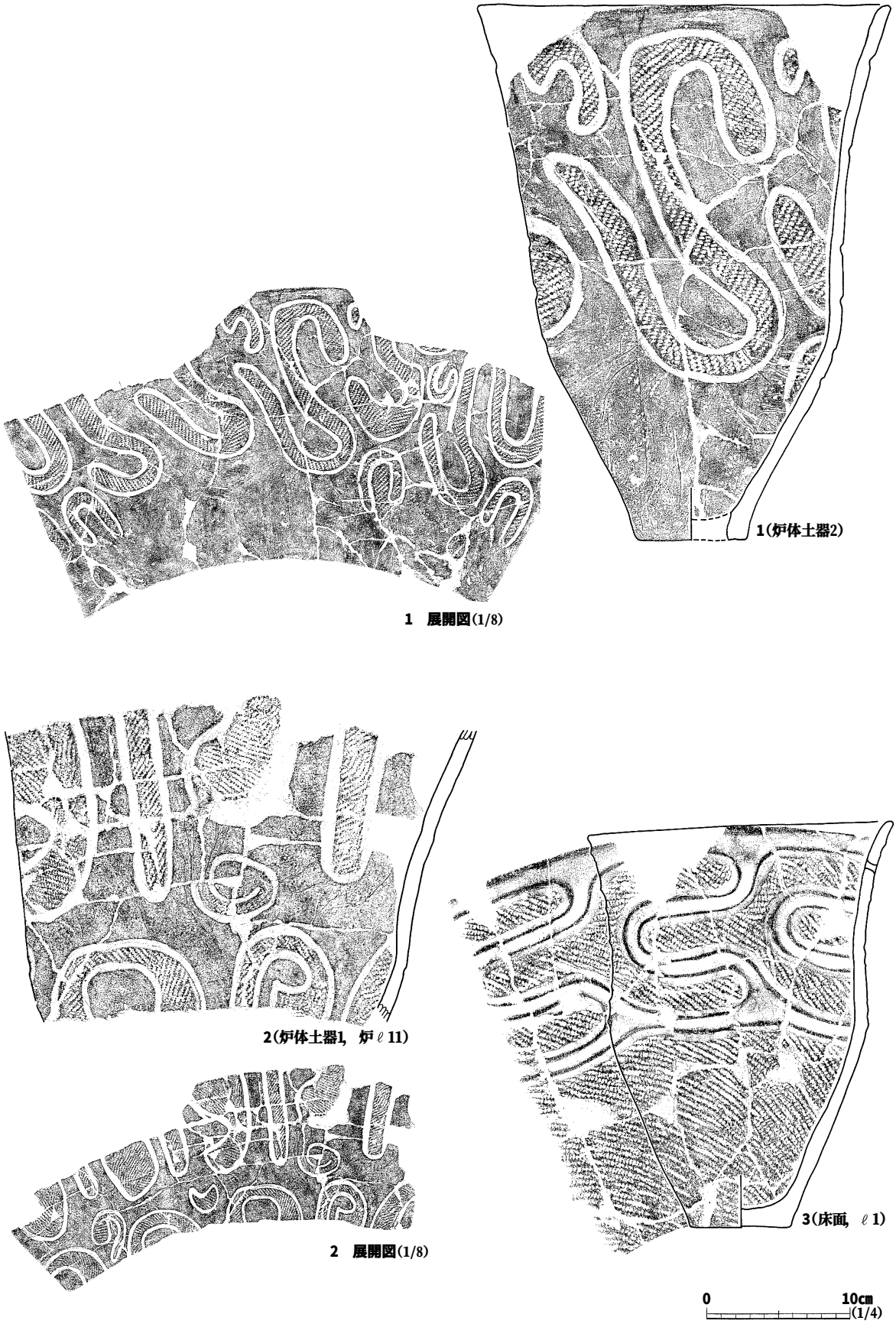


図135　118号住居跡出土遺物(1)

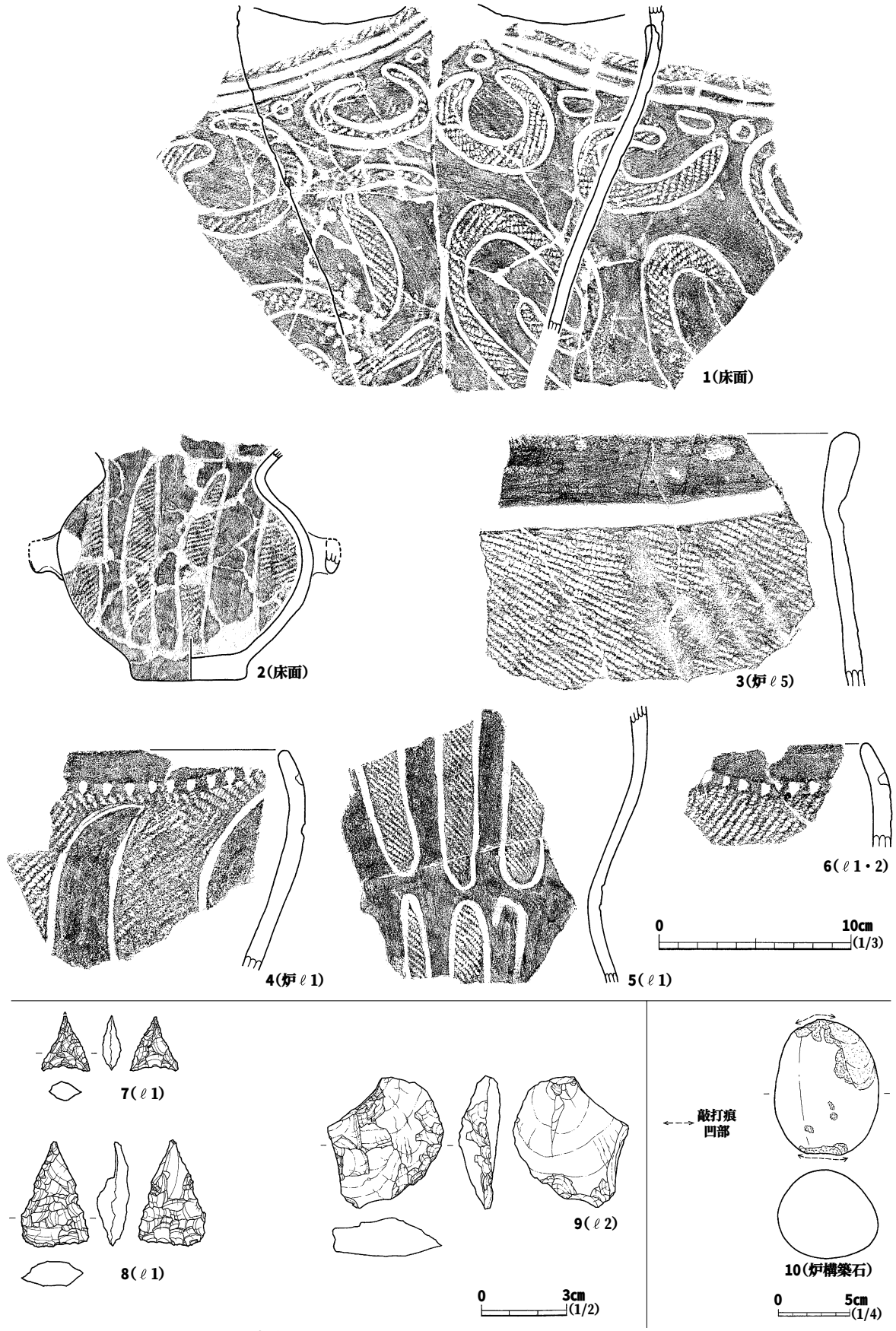


図136　118号住居跡出土遺物(2)

の細かいＲＬの単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。

136図３～６には文様が描かれた破片資料を示した。３は口縁直下に沈線で区画された無文帯が巡る粗製土器である。４・６は同一個体と推察される破片資料である。口縁直下には，先端の尖った棒状の工具による連続刺突文で区画された無文帯が巡る。その下には沈線区画による無文帯で施された文様が観察されるが，具体的な図形は不明である。５は深鉢形土器の胴中部の破片である。主文様は沈線によるU字状，逆U字状，蕨状を呈する図形で，上下から対向するように描かれている。

136図７～10に石器を示した。７は，チャート製の石鏃である。両側縁は非対称で，表面右側縁は外湾，左側縁は内湾する。先端は尖鋭に仕上げられている。８はチャート製の石鏃未製品である。表面中央部に階段状剝離痕が残っていることから，製作途中で廃棄したものと推察される。９は流紋岩製の削器である。背面右側縁に外湾する弧状の刃部を作出している。10は砂岩製の敲石である。上下両端に敲打痕をとどめる。

まとめ　定型化した複式炉と，五角形に配置された５個の主柱穴を有している。複式炉，主柱穴，周壁の一部は１回ずつ改修されていることから，大がかりな建て替えが行われたものと推察される。建て替えは主柱穴の配置から，上屋の主軸を若干西側にずらした状態で行われている。複式炉の中軸線は，ほぼ南北方向を示しており，その延長線を意識したような位置に地床炉が配置されていた。出入口は北壁に設けられていたと推察される。廃絶時には，深鉢形土器や把手付土器を床面に置き，柱を抜き取った上で，住居跡全体を埋めている。また，埋没の最終段階には土器・石器を多量に含んだ黒色土が意図的に投棄されていた。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階～中段階と考えられる。　（小　暮）

119 号 住 居 跡　ＳＩ119 （図137～139，写真83・84・357）

位置・検出面　北区南東部の平坦面，Ｘ・Ｙ32・33グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の南東側には118号住居跡，北西側には120号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，黒褐色土で埋まった直径2.7m程の不整円形の輪郭を検出した。

重複　1092・1093号土坑より古く，1491・1499号土坑より新しい。

堆積土　ℓ１・２・４は，いずれも２種類以上の土が撹はんされたように混じり合う混土である。特にℓ２は，層の上面が波打ったり，床面上に盛り上がるように堆積している状況が認められた。したがって，本住居跡は全て人為堆積土により埋没したものと推察される。ℓ３は後述する柱穴や周溝内に堆積した土である。

平面形・規模　平面形は丸味のある六角形に近い。北東コーナー部は1093号土坑，南西コーナー部は1092号土坑によって壊されていた。竪穴の規模は，現状の壁上端で南北長5.2m，東西長5.0mを測る。竪穴の中軸線はN98 ℃Wである。

床面　大半が基本土層のＬⅣに形成されている。しかし，複式炉の土器埋設部南側に接する位置には，本住居跡よりも古い1499号土坑が存在し，その部分にだけ黄褐色粘土が貼られていた。これは

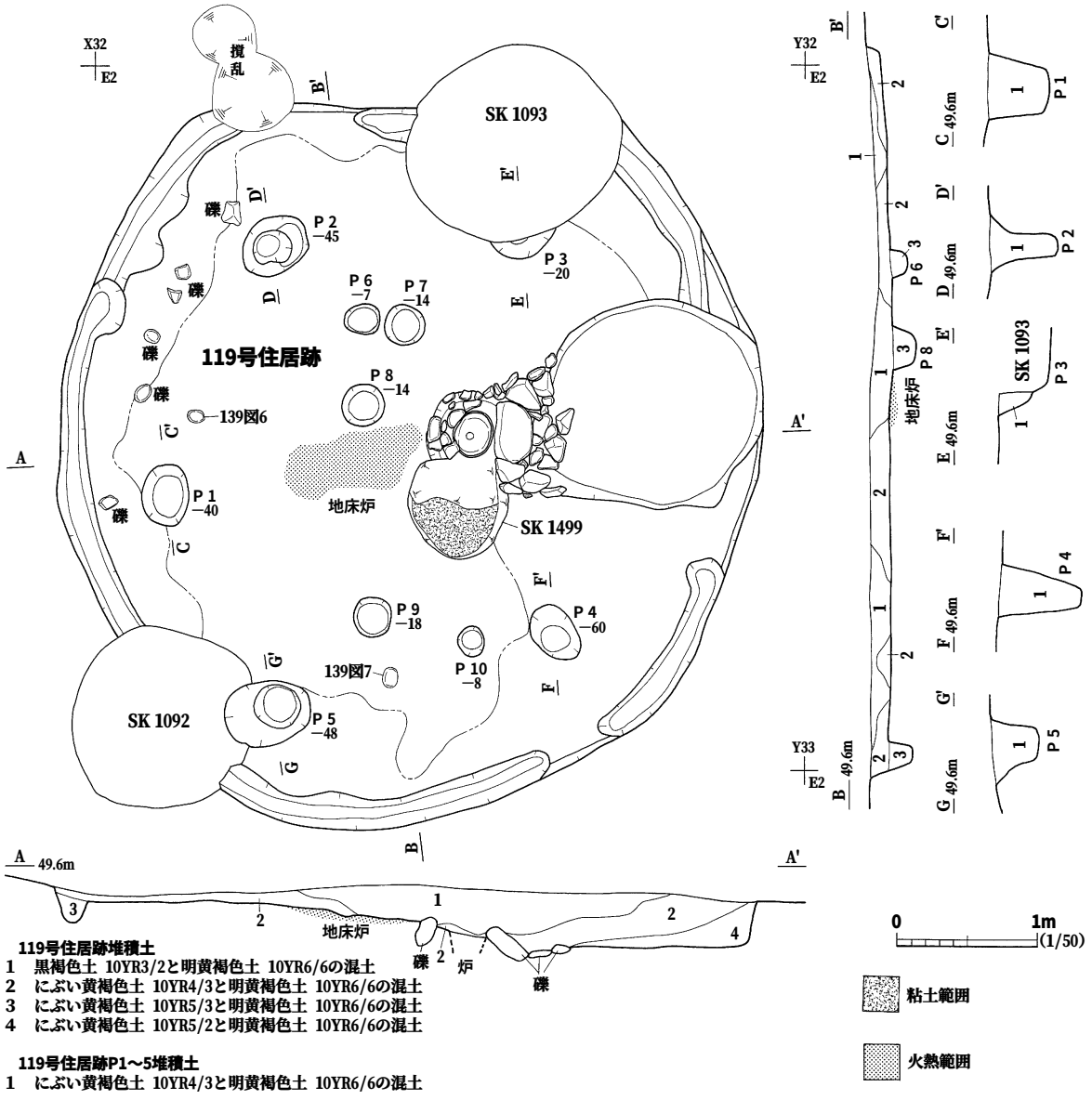


図137　119号住居跡

1499号土坑に堆積した土が住居の構築時には，まだ軟らかかったため，その堆積土上面をそのまま床面として使用することができず，それを補強する目的で貼床されたものと推察される。それでも，その後に若干陥没しており，現状では浅い皿状の凹みになっていた。他の床面の現状は，凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦な状態である。また，主柱穴の内側は，広い範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　床面から66〜78°のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は７〜27㎝を測る。南西部と北東部は，それぞれ1092・1093号土坑によって壊されていた。

周溝　３箇所で途切れるものの，周壁際をほぼ全周する。周溝の上端幅は18〜36㎝，床面からの深さは５〜22㎝を計測する。周溝内の所々に段差がある。堆積土は混土であるため，人為的に埋められたものと判断している。

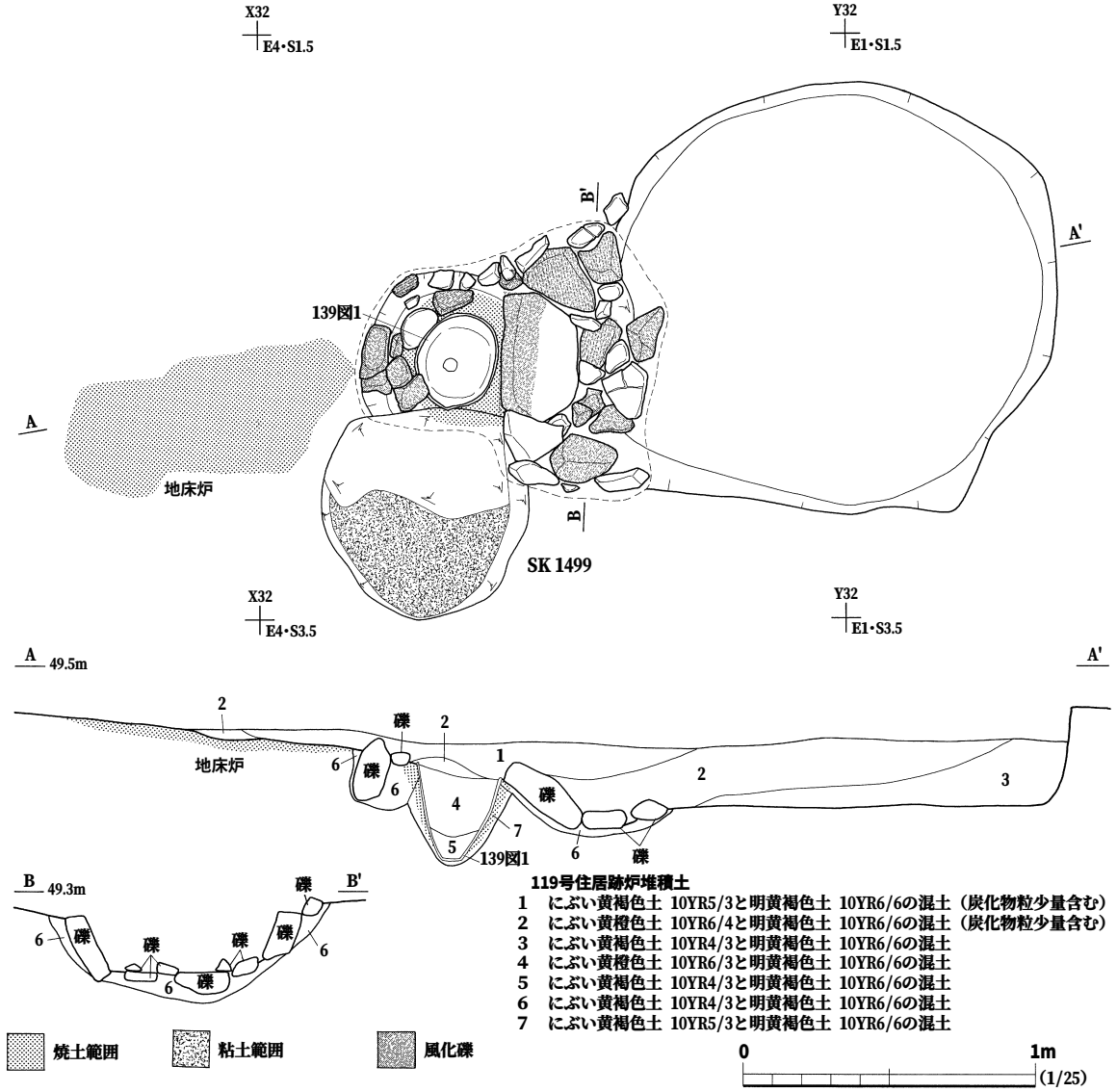


図138　119号住居跡炉

複式炉　複式炉は床面の東側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。円形状の土器埋設部に不整な長方形状の石組部，さらに楕円形を呈する前庭部が続いている。複式炉の構築順序は「炉体土器埋設・石組部底石設置→土器埋設部縁石設置・石組部側壁構築」である。

（規模）全長は251㎝，最大幅が147㎝を計測する。炉の中軸線はＮ89°Ｗで，ほぼ東西方向を示している。

（堆積土）ℓ１～３は石組部と前庭部，ℓ４・５は炉体土器の中に堆積した土である。いずれも混土であることから，人為的に埋められたものと推察される。ℓ６・７は土器埋設部と石組部の掘形内に堆積した炉の構築土である。

（土器埋設部）開口部の直径31㎝の炉体土器に接して長さ15㎝前後の楕円礫や角礫を敷き，その外側に長さ10～20㎝の直方体状の礫を並べ縁石としている。縁石はいくつか抜き取られていた。東西方向の長さは48㎝で，炉体土器周辺の土は強く焼土化している。

（石組部）長方形状の掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面とし，その上に板状の礫と拳大の礫を積み上げて外傾する側壁を造っている。土器埋設部との間には，特に大型の板状の礫が用いられている。礫は表面に強い火熱を受けて，もろくなったものが多い。この石組部は，他の遺存状態良好な複式炉に比べて，底面が狭く，前庭部側の側壁が遺存していない点で少し異なった様相を呈している。後述のように廃絶に際して壊されたものと判断している。現状の石組部の最大幅は92㎝，東西方向の長さは56㎝を測る。

（前庭部）現状での平面形は不整な楕円形を呈し，側壁はほぼ直立する。規模は直径147㎝で，底面から住居跡床面までの高さは15～32㎝を測る。底面はほぼ平坦な状態である。

この前庭部は，他の複式炉に比べて，幅が広く，底面が石組部の底面より一段低い位置にある点で違いが見られる。先に述べた石組部の現状を考え合わせると，この前庭部は廃絶時に，石組部の東側を壊しながら，一回り大きく掘り拡げられた可能性が高いと推察される。

地床炉　複式炉の土器埋設部の西側に，舌状に細長く延びる焼土化範囲が確認された。複式炉の中軸線に沿うように，東西100㎝，南北40㎝の範囲が火熱を受けて，薄く赤変していた。熱変化を受けた部分は，床面から４㎝の深さに及んでいる。

主柱穴　主柱穴はＰ１～５の５個である。Ｐ１を軸頂部にした五角形の配置になっている。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.9m，Ｐ２－Ｐ３間が1.8m，Ｐ３－Ｐ４間が2.9m，Ｐ４－Ｐ５間が2.0m，Ｐ５－Ｐ１間が1.7mを計測する。現状の平面形は不整な円形もしくは楕円形で，断面形はＵ字状を呈している。

規模はＰ１が長径44㎝，短径32㎝，深さ40㎝，Ｐ２が長径50㎝，短径38㎝，深さ45㎝，Ｐ４が長径43㎝，短径29㎝，深さ60㎝，Ｐ５が長径60㎝，短径46㎝，深さ48㎝を測る。Ｐ３は遺存状態が悪いため，計測不能である。複式炉の南側に配置されたＰ４は，特に深くしっかり造られている。なお，堆積土は混土であり，柱痕も認められなかったため，柱は抜き取り，人為的に埋められたものと考えられる。

ピット　主柱穴の他に，小さいピットが５個ある。これらは床面のほぼ中央に位置し，複式炉の土器埋設部を取り囲むように並んでいることから，上屋の煙出しに関係する補助柱穴と推測している。規模は直径20～30㎝，深さ７～18㎝である。

遺物出土状況　床面及び複式炉やピットの底面から出土したのは，縄文土器１点，石器２点，礫６点である。このうち石器（凹石）１点，礫６点は，西壁際で意識的にＴ字状に並べられた状態で出土した。堆積土中からは，縄文土器86点，石器31点，陶磁器１点が出土している。陶磁器は検出面付近から出土しているため，本住居跡に伴うものではないと考えている。

遺物　139図１～３に縄文土器を示した。１は炉体土器である。底部から胴上部まで内湾して立ち上がる深鉢形土器で，口縁部は欠損している。文様は幅広の調整沈線で区画された縄文帯で描かれ，横に連続するＳ字状のアルファベット文を胴上部，逆Ｕ字状の懸垂文を胴下部に配置している。地文はＲＬの単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。２・３は粗製土器の口縁部資料である。口縁直下に隆線で区画された無文帯が巡り，それ以下はＲＬの単節斜縄文が施されている。

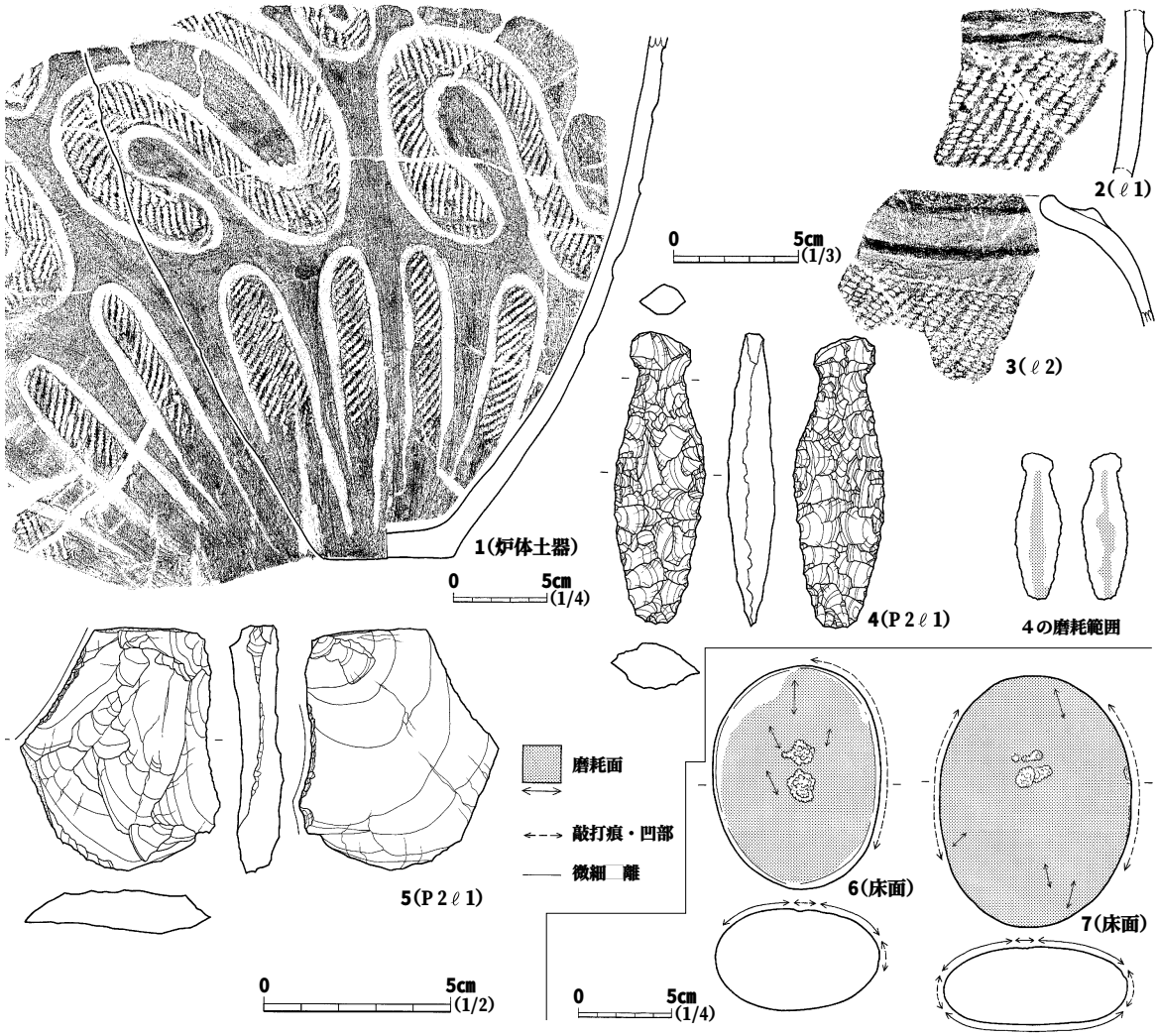


図139　119号住居跡出土遺物

139図４～７に石器を示した。４は，えぐり部を有する縦形石匙である。比較的厚身のある珪質頁岩製の剝片を素材としている。基部側は一部が欠損しているが，円頭状のつまみ部が作出されていたと推察される。両側縁は外湾し，先端部は円弧状に仕上げられている。器面は全体を並列する押圧剝離痕で覆われている。表裏の器面中央は剝離痕の稜線が磨耗し，使用光沢を帯びている。５はチャート製の大形剝片である。背面左側縁と腹面左側縁に微細剝離痕が観察される。６・７はアプライト製の磨石類である。側面部には敲打痕が，器面には磨耗面が観察された。器面中央には浅い凹部が認められた。

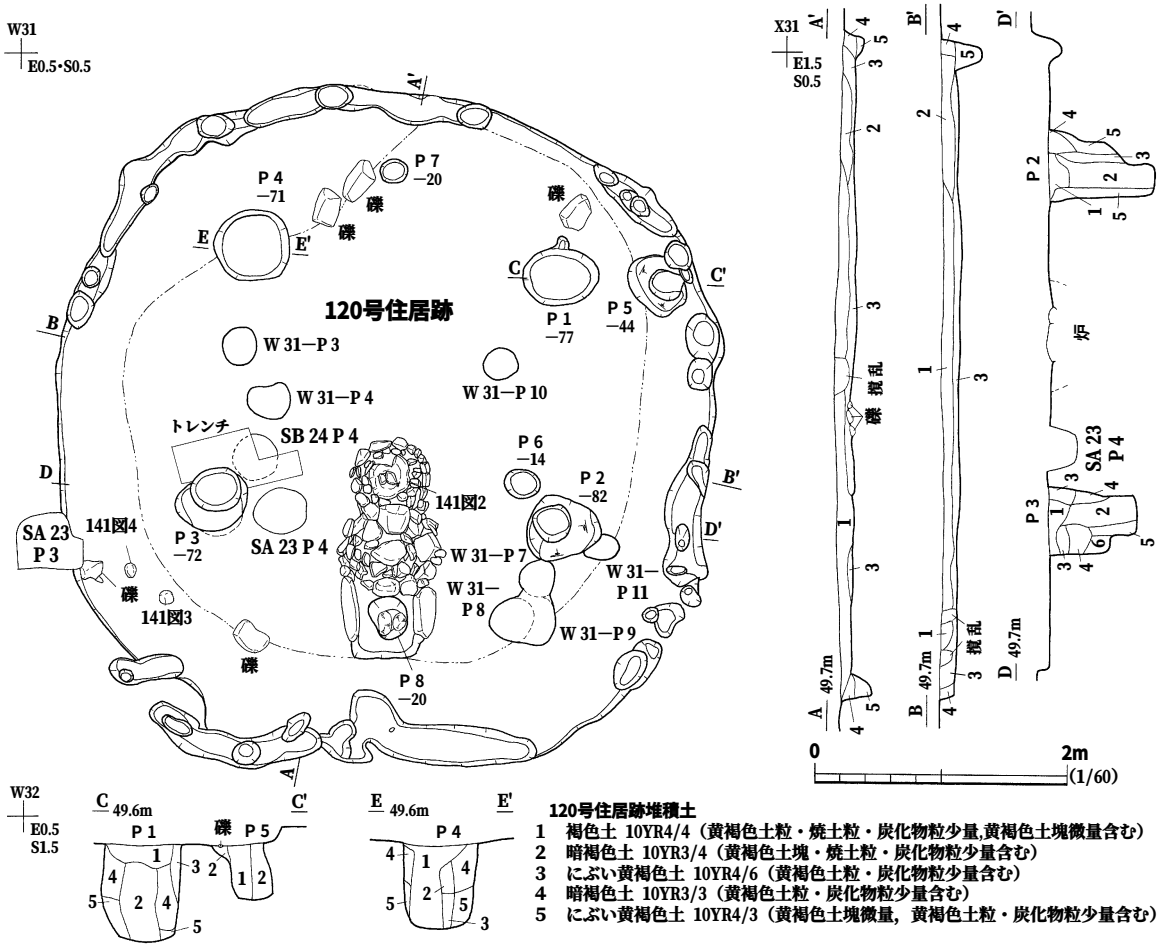
まとめ　複式炉と五角形に配置された５個の主柱穴を有している。複式炉の中軸線は，ほぼ東西方向を示す。この複式炉は，前庭部を掘り拡げて廃絶されている点で特徴的である。また，住居内では，西壁際の床面に自然礫や凹石をＴ字状に置き並べ，柱を抜き取った後で全体を埋めて廃絶している。

したがって，本住居跡の廃絶に際しては，遺構の部分的な破壊を伴う何らかの祭祀的な行為が行われた可能性が高い。帰属時期は，炉体土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と考えられる。　（小　暮）

120 号 住 居 跡　ＳＩ120 （図140・141，写真85・86・357）

位置・検出面　北区中央部東寄りの平坦面，W・X31・32グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の周囲には1055・1071・1088・1089・1392・1463・1491・1496号土坑があり，南東側には119号住居跡，南西側には116号住居跡が隣接している。検出面はＬIV上面であり，褐色土で埋まった径5.0m程の円形の輪郭を検出した。

重複　23号柱列跡，24号建物跡，W31グリッドの小穴と重複し，それよりも古い。また，1537号土坑と重複し，それよりは新しい。



120号住居跡堆積土
1　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒少量,黄褐色土塊微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊・焼土粒・炭化物粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土塊微量，黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）

120号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4
（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/6
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3
5　にぶい黄褐色土 10YR5/4

120号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（黒褐色土塊少量含む）
3　にぶい黄褐色土と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　褐色土 10YR4/4
5　にぶい黄褐色土 10YR5/4

120号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4
（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3
4　褐色土 10YR4/6
5　褐色土 10YR4/6
6　にぶい黄褐色土 10YR5/4

120号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR4/4
5　にぶい黄褐色土 10YR5/4

120号住居跡P5堆積土
1　褐色土 10YR4/4と暗褐色土 10YR3/4の混土
2　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/4の混土

図140　120号住居跡

堆積土　５層に分層した。いずれも周壁から流入し，レンズ状に堆積しているのが確認できることから，自然堆積と判断した。

平面形・規模　ほぼ円形を呈している。長軸方向は，Ｎ７°Ｅである。その規模は，壁上端で長軸である南北長5.4m，東西長5.2mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成され，ほぼ平坦である。複式炉北側の床面中央部付近に焼土粒が少量，散布状に点在していたが，明確な焼土化範囲は認められなかった。また，複式炉の周辺を含む東・西・南周壁より40～50㎝内側の床面から北周壁にかけての広い範囲が硬く締まっていた。

周壁　床面からほぼ垂直に近い急角度で立ち上がり，遺存壁高は７～14㎝を測る。

周溝　周壁に沿いながら，北部より北西部にかけて長さ約４m，南部において長さ約３mの範囲で認められ，北東部から南東部にかけては，不連続な状態の小溝や小穴が確認された。幅は20㎝前後，床面からの深さは８～14㎝，小穴においては20㎝程の深さを測る。

複式炉　複式炉は床面南側に構築されている。遺存状態は良好で，土器埋設部，石組部，さらに長方形状の前庭部からなる。

(規模)全長は約180㎝，最大幅が85㎝を測り，炉中軸線は南北方向を示している。

(堆積土)炉体土器内の堆積土は，中程から底部まで黒褐色土が詰まっていた。

(土器埋設部)口径32㎝，深さ約40㎝の炉体土器の口縁部に接する形で，７㎝大前後の小礫が円形状に敷き詰められ，さらにその外側に，一回り大きい拳大の方形状の礫を敷き並べ，縁石としている。内側礫の周径は約45㎝を測り，礫表面及び炉体土器周辺の土は赤く焼けている。外側の縁石周径は約60㎝を測る。

(石組部)平面形は楕円形状をなし，その断面形は，擂鉢状を呈する。側壁，底面には大きめな礫を詰め，その空いた周辺に中小の礫を詰めて構築し，特に土器埋設部との間には大型の板状礫が用いられている。また，礫表面は火熱を受け，赤変とともにもろくなったものが多い。規模は，炉中軸方向の長さ約70㎝，最大幅約85㎝を測る。

(前庭部)長方形状を呈し，東西側壁では大型の板状礫を横長に直立させている。東西の幅は約75㎝，南北の長さ約60㎝を測り，底面中央に径32㎝，深さ20㎝の不整楕円形のピットが確認された。

主柱穴　Ｐ１～４の４個が方形状に位置するのを確認した。北側のＰ４－Ｐ１間の柱間は約2.4m，西側のＰ４－Ｐ３間の柱間は約1.9mで，規模は，柱穴径53～58㎝，床面からの深さ71～82㎝を測る。いずれの柱穴の堆積土も，中心に褐色土と黄褐色土の混土の層が見られ，その外側に締まりのあるにぶい黄褐色系の土が囲むように堆積している。このことから，混土層は柱痕で，その回りが掘形内の版築による土と推察される。

ピット　床面から主柱穴の他に４個のピットを確認した。Ｐ６はＰ２の北東側約30㎝に位置する。径26㎝，深さ14㎝を測る。Ｐ７は複式炉の中軸線上の北周壁近くに位置し，径20㎝，深さ20㎝である。Ｐ５はＰ１の東側で，北東周壁に隣接し，長径50㎝，深さ44㎝を側り，Ｐ６・７より一回り大きく深い。Ｐ８は複式炉前庭部にあり，深さ20㎝を測る。

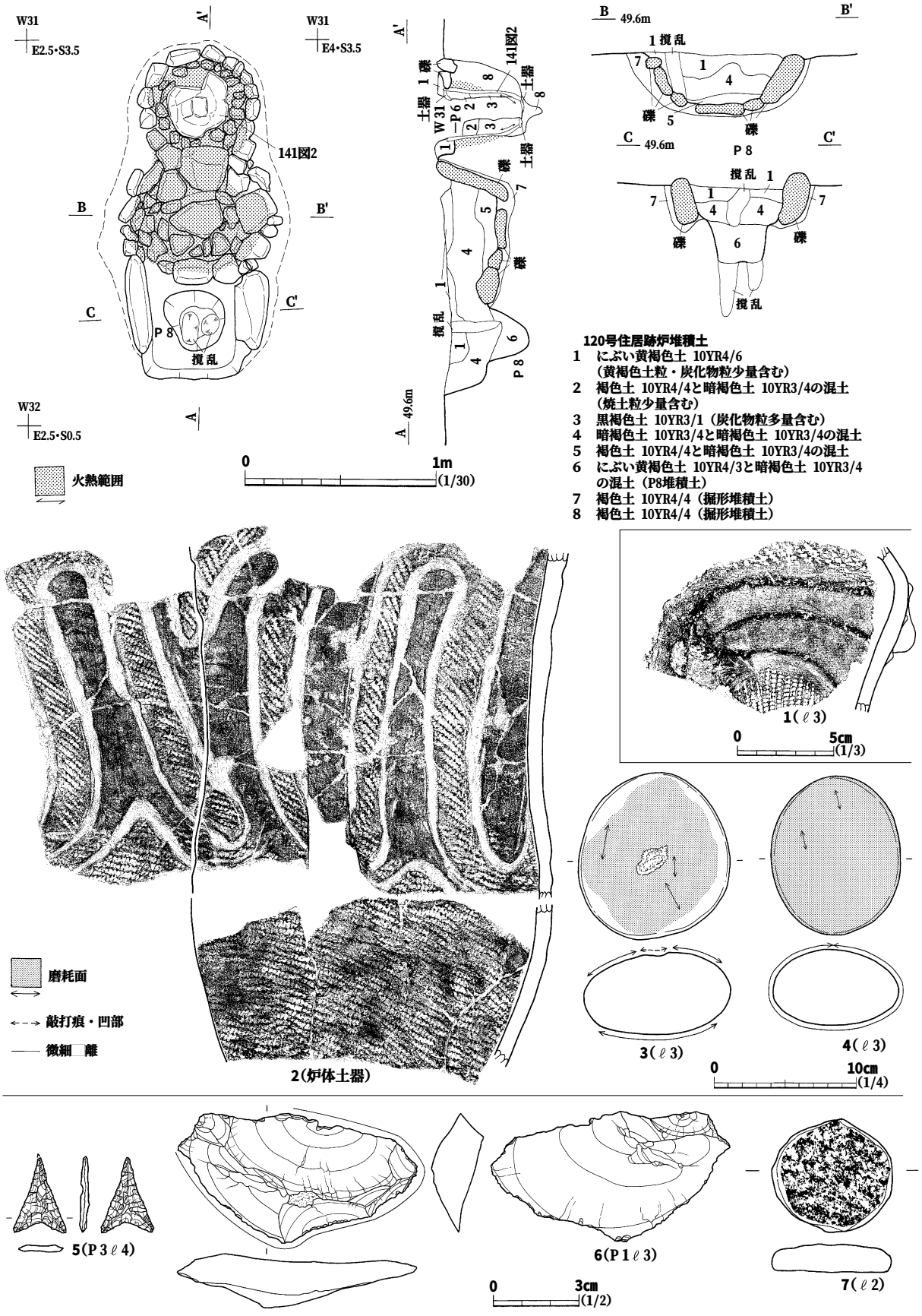


図141　120号住居跡炉と出土遺物

遺物出土状況　床面から縄文土器片35点，石皿・磨石類５点，剝片類８点が出土している。複式炉からは炉体土器(141図２)の他に，炉内の堆積土から縄文土器片12点，石器１点が出土した。ピットの堆積土からは，縄文土器片１点，石器類４点が出土している。この他，住居跡の堆積土(ℓ１・２)から縄文土器片93点，石器類６点が出土している。

遺物　141図１・２に縄文土器を示した。１は内湾する口縁部付近の破片である。稜線区画の無文帯によって，弧状の文様が描かれているが，具体的な図形は不明である。地文は単節斜縄文である。２は胴下部に膨らみをもち，胴上部が外反する器形の深鉢形土器である。炉体土器に転用されていた。文様は，胴上部の幅広い施文域に沈線区画の縄文帯によって描かれている。胴下部には波状沈線が引かれ，底部付近の地文域を明瞭に区分している。

141図５はチャート製の凹基式石鏃である。両側縁は丁寧な調整加工によって内湾ぎみに，先端部は微細な調整により尖鋭に仕上げられている。基部のえぐりは直線的で，左右の基端部は尖鋭である。同図６は珪質頁岩製の微細剝離のある剝片である。腹面の打瘤部が発達した横長剝片を素材とする。背面の縁辺部にはほぼ全周にわたって連続した微細剝離痕が観察された。同図３・４は，両面に磨耗面が観察されたアプライト製の磨石類である。３の表面中央部には浅い凹部が１カ所認められた。

141図７は土器片製の円盤である。器面が磨耗しているため，文様は残されていなかった。側面には擦痕が観察される。

まとめ　本遺構は，複式炉と方形に配置された４本の主柱穴を有する竪穴住居跡である。複式炉の中軸線は，南北方向を示している。その延長線上を意識した位置に焼土粒が点在していた。周溝は不連続である。床面硬化範囲は，主柱穴の内側を中心に確認された。本住居跡の帰属時期は，炉体土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と推定される。　（茂　木）

121 号 住 居 跡　ＳＩ121 （図142，写真87・88）

位置・検出面　北区西部の平坦面，M32・33グリッドにあり，調査区外との境界に位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北側には753・754号土坑，北東側は650・1416・1417号土坑，東側には755・756号土坑が隣接している。表土除去の際，住居内堆積土の大半は誤って掘り過ぎてしまったため，検出できたのは柱穴２個と弧状を描く周溝のみである。

重複　遺構の西側の大半が調査区外に位置するため明確ではないが，確認できた範囲では重複する遺構はない。また，撹乱により周溝の一部が住居の北東部で破壊されている。

堆積土　遺構内堆積土を除去してしまったため，堆積土の把握は調査区境界の西壁で観察した。堆積土は８層に分層した。この内，ℓ１～６は住居内堆積土であり，ℓ７・８は周溝内堆積土である。いずれの層も黄褐色土粒を含んでいる。このうちℓ２～４・８の各層は黄褐色土の粒または小塊を多量に含むことから，人為堆積土と考えられる。他のℓ１・５・７は自然堆積土と判断した。

平面形・規模　確認できたのは遺構の東半部であるため全体形は不明であるが，ほぼ南北方向に長

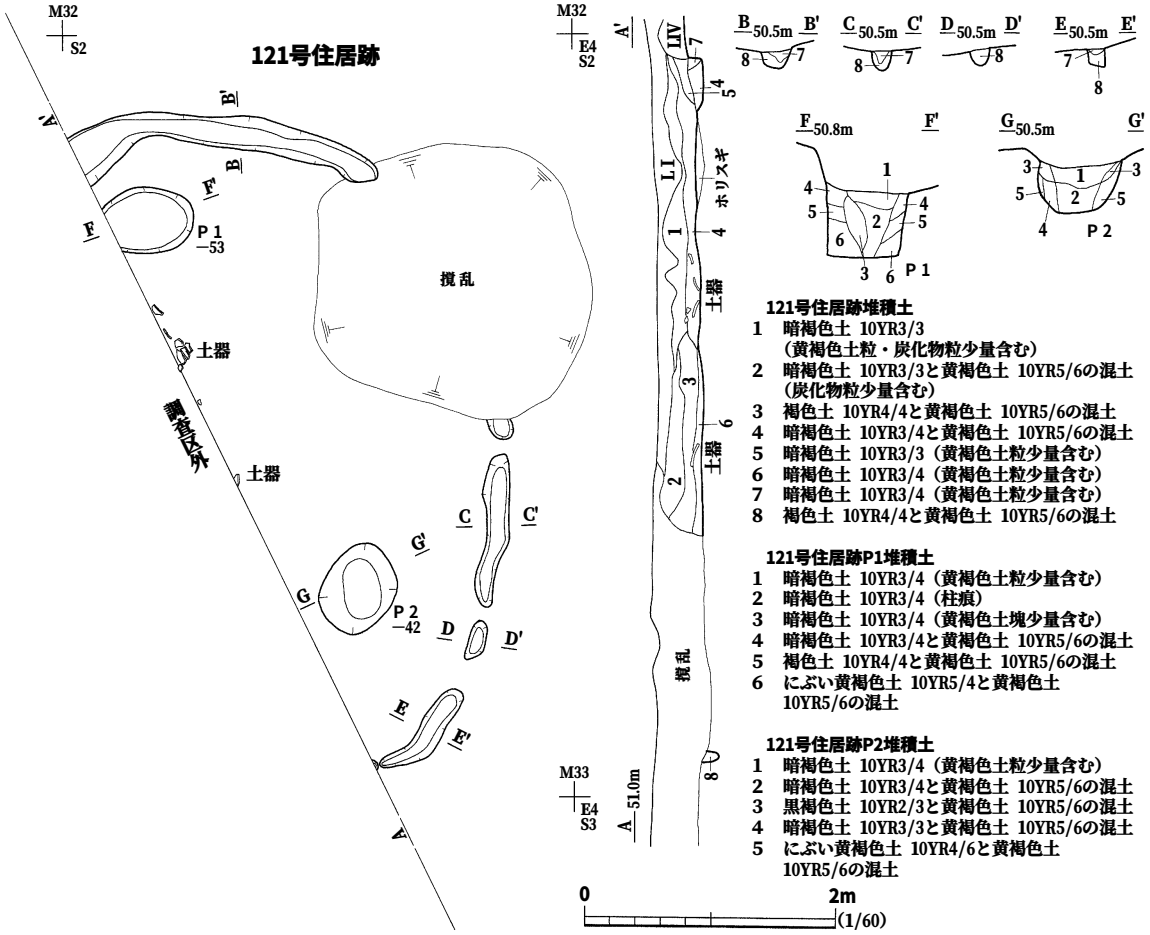


図142　121号住居跡

軸をもつ不整円形の平面形をもつと推察される。その規模は，長軸方向の南北長5.6mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。ほぼ平坦であるが，住居の北西部から南東部にかけて緩やかに傾斜している。

周壁　調査区西壁に唯一残存する北側部分では，床面からほぼ垂直に立ち上がり，遺存壁高はおよそ16㎝を測る。

周溝　部分的に途切れるものの，１条確認した。周壁が残存していないため，壁との距離は不明である。唯一壁の残存する北側ではほぼ壁に沿っている。溝の上端幅は８～42㎝，床面からの深さは10～18㎝を測る。堆積土は２層に分層され，堆積状況から一部埋め戻されていたと推察される。

複式炉　遺構の東半部には存在しない。おそらく調査区外のため確認できなかった西半部に存在すると推察される。

主柱穴　Ｐ１・２の２個のみ確認した。Ｐ１は住居跡の北方，Ｐ２は南東部に位置している。各主柱穴間の距離はおよそ3.4mを測る。いずれも現状の平面形はほぼ楕円形で，断面形はＵ字状を呈している。規模は，Ｐ１が長径70㎝，短径52㎝，深さ53㎝，Ｐ２が長径74㎝，短径46㎝，深さ42㎝を測る。Ｐ１・２いずれも，掘形中央にℓ２とした締まりの弱い堆積土が認められ，その周囲に版築状をなす構築土を確認した。また，ℓ１はいずれも遺構内堆積土のℓ６と同質の堆積土である。

遺物出土状況　床面から遺物は出土していない。調査区の西壁で確認した住居跡堆積土覆土から，縄文土器片と石器を数点抜き取った。ℓ１からは縄文土器片１点，ℓ４からは縄文土器片42点，石器１点，ℓ６からは縄文土器片７点が出土した。この他，Ｐ１・２の堆積土中から縄文土器４点が出土している。図示できるものはなかった。

まとめ　本住居跡は床面近くまで削平を受けているため，堆積土と周壁は遺存していなかった。確認できたのは，主柱穴２個と周溝１条のみである。遺構の明確な帰属時期は不明である。

（千　葉）

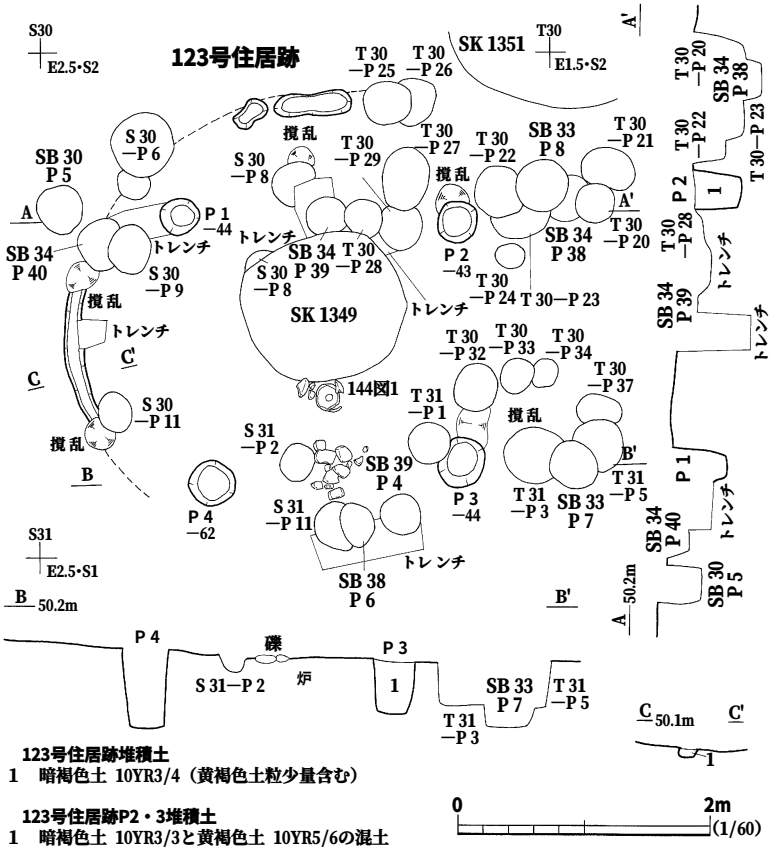
123号住居跡　ＳＩ123

（図143・144，写真89・90）

位置・検出面　北区中央部の平坦面，Ｓ・Ｔ30・31グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北東側には1351号土坑，北西側には1396号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，削平によって調査当初より床面と複式炉が露出していた。

重複　34・38・39号建物跡，1349号土坑と重複し，いずれよりも本住居跡が古い。

堆積土　本住居跡に伴う周溝部にのみ確認できた。ℓ１は暗褐



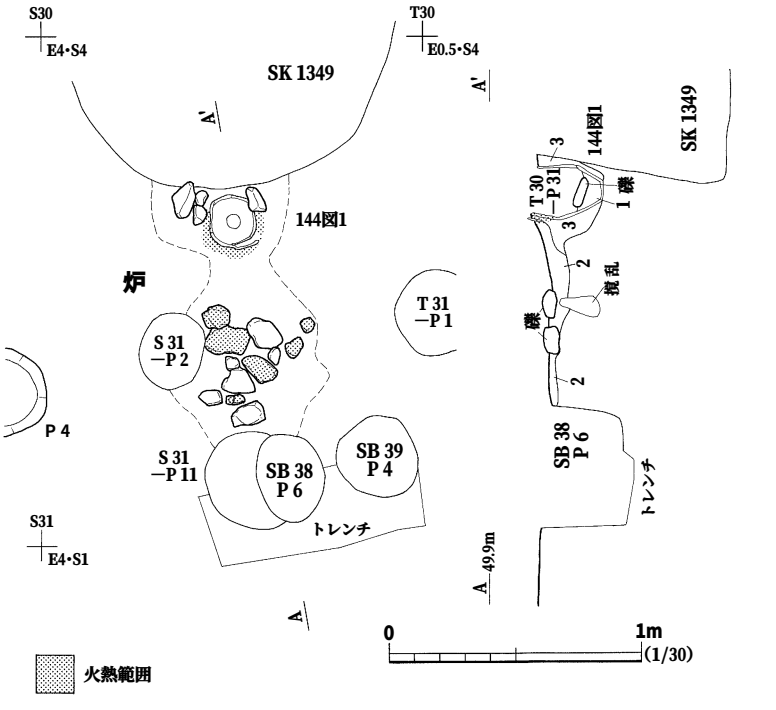


図143　123号住居跡

色系の土で，自然堆積土と考えられる。

平面形・規模　遺存する周溝と主柱穴の配置から，径４m程の円形を呈すると推察される。推定される長軸方向はＮ５゜Ｗである。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。複式炉の検出状況から，床面南部は削平により壊され，遺存していない。

周溝　北部と西部に溝が確認された。現状の上端幅は12～16㎝，検出面からの深さは３～10㎝を計測する。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。重複する遺構に壊され，さらに削平を受けているため遺存状態は悪い。円形状の土器埋設部に石組部が続く。土器埋設部より南側は削平され，石組部は底面のみ遺存する。前庭部は検出できなかった。

(規模)炉中軸線はほぼ南北方向を示し，全長は推定120㎝，最大幅が73㎝を測る。

(堆積土)炉体土器の内側にグリッドピットが位置するため，底部付近にのみ堆積土が遺存している。ℓ１は炉体土器底部にたまった黒褐色土で，ℓ２・３は掘形堆積土である。

(土器埋設部)径31㎝の炉体土器に接して長さ６～15㎝の不整な角礫を並べ，縁石としている。東西方向の長さは推定50㎝で，炉体土器周辺の土は焼土化している。

(石組部)削平により側壁は壊され，底面の敷石のみ一部遺存する。底面には扁平な礫が敷き並べられている。礫は表面に強い火熱を受けて赤色変化したものが多い。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。Ｐ１・２，Ｐ３・４は複式炉を挟んだ東西に位置している。

各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.2m，Ｐ２－Ｐ３間が1.9m，Ｐ３－Ｐ４間が2.0m，Ｐ１－Ｐ４間が2.1mで，全体的に長方形の配置となっている。

現状の平面形は不整な円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が径30㎝，深さ44㎝，Ｐ２が径32㎝，深さ43㎝，Ｐ３が径40㎝，深さ44㎝，Ｐ４が径37㎝，深さ62㎝を計測する。Ｐ１・４は昨年度の調査でいずれもグリッドピットとして既に完掘されていたが調査の不備で堆積土は不明である。Ｐ２・３はいずれも黄褐色土の小塊を数多く含むことから，人為堆積土と考えられる。

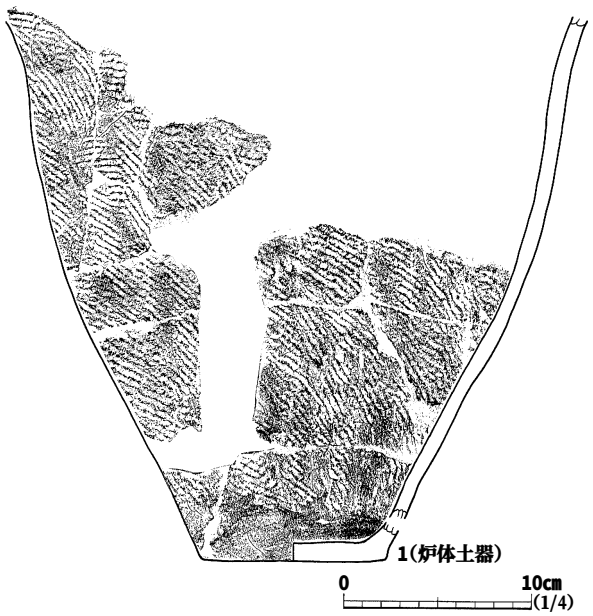


図144　123号住居跡出土遺物

遺物出土状況　炉体土器が出土したのみで，他に遺構内から遺物の出土は認められなかった。

遺物　144図に炉体土器を示した。深鉢の胴部下半から底部にかけての資料で，口縁部は欠損している。ＬＲ原体で，主として縦位に回転施文した単節縄文が認められる。

まとめ　複式炉と，ほぼ長方形に配置された４本の主柱穴を有している。削平により床面南部が壊されて遺存しないため，複式炉前庭部の有無は確認できなかった。本住居跡の帰属時期は炉体土器が地文のみであるので明確ではないが，複式炉を有するので縄文時代中期後葉から末葉と考えられる。（坂　田）

124 号 住 居 跡　ＳＩ124 （図145・146，写真91・92・357）

位置・検出面　北区中央東側の平坦面，Ｘ・Ｙ29・30グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北側には1498号土坑，南側には1394・1474号土坑が隣接している。検出面は北・西側がＬⅣ上面，南・東側が158号住居跡の堆積土上面である。本住居跡は削平を受けた状態で検出され，東壁付近と西壁付近の堆積土はすでになく，床面と周溝が露出していた。

重複　158号住居跡より新しく，1393・1399号土坑より古い。

堆積土　ℓ１は混土であり，ℓ２・３は基本土層にない暗黄褐色系の土を基調としている。したがって，いずれも人為堆積土と考えられる。ℓ４～７は後述する柱穴や周溝の堆積土である。

平面形・規模　南東側の周壁と周溝が確認されなかったため，本来の平面形は不明である。しかし，遺存する周溝から推測すると南北方向に長軸をもつ不整な楕円形か，五角形を呈するものと推察される。竪穴の規模は，現状の壁上端で南北長4.4m，東西長4.2mを測る。竪穴の中軸線はＮ20 ℃Ｗである。

床面　遺構の西側は基本土層のＬⅣ，東側は158号住居跡の堆積土上面に形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦な状態である。主柱穴の内側を中心に，広い範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　北壁と南壁の一部が遺存している。床面から77°のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は北壁で９㎝，南壁で６㎝を測る。

周溝　遺構の北東側で２カ所途切れ，南東側では削平され，確認できなかった。本来，周壁に沿って全周していたものと考えられる。周溝の上端幅は，10～20㎝，床面からの深さは４～13㎝を計測する。堆積土は混土と基本土層には見られない暗黄褐色系の土であるため，人為的に埋められたものと判断している。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ２とＰ３のほぼ中間に構築されている。炉は人為堆積土によって埋没しており，遺存状態は良好であった。長方形状の土器埋設部に楕円形状の石組部，さらに不整な半円形状の前庭部が続く形態を呈している。複式炉の構築順序は「炉体土器埋設・石組部底石設置→土器埋設部縁石設置・石組部側壁構築」である。

（規模）全長が147㎝，最大幅が78㎝を測る。炉の長軸は南北方向にあり炉の中軸線はＮ13 ℃Ｗで，真北から若干西に振れている。

（堆積土）ℓ１～３は石組部と前庭部，ℓ４は土器埋設部の上部を埋める堆積土である。いずれも２種類の土が撹はんされたように混じり合う混土であるため，人為堆積土と考えられる。ℓ５は炉体

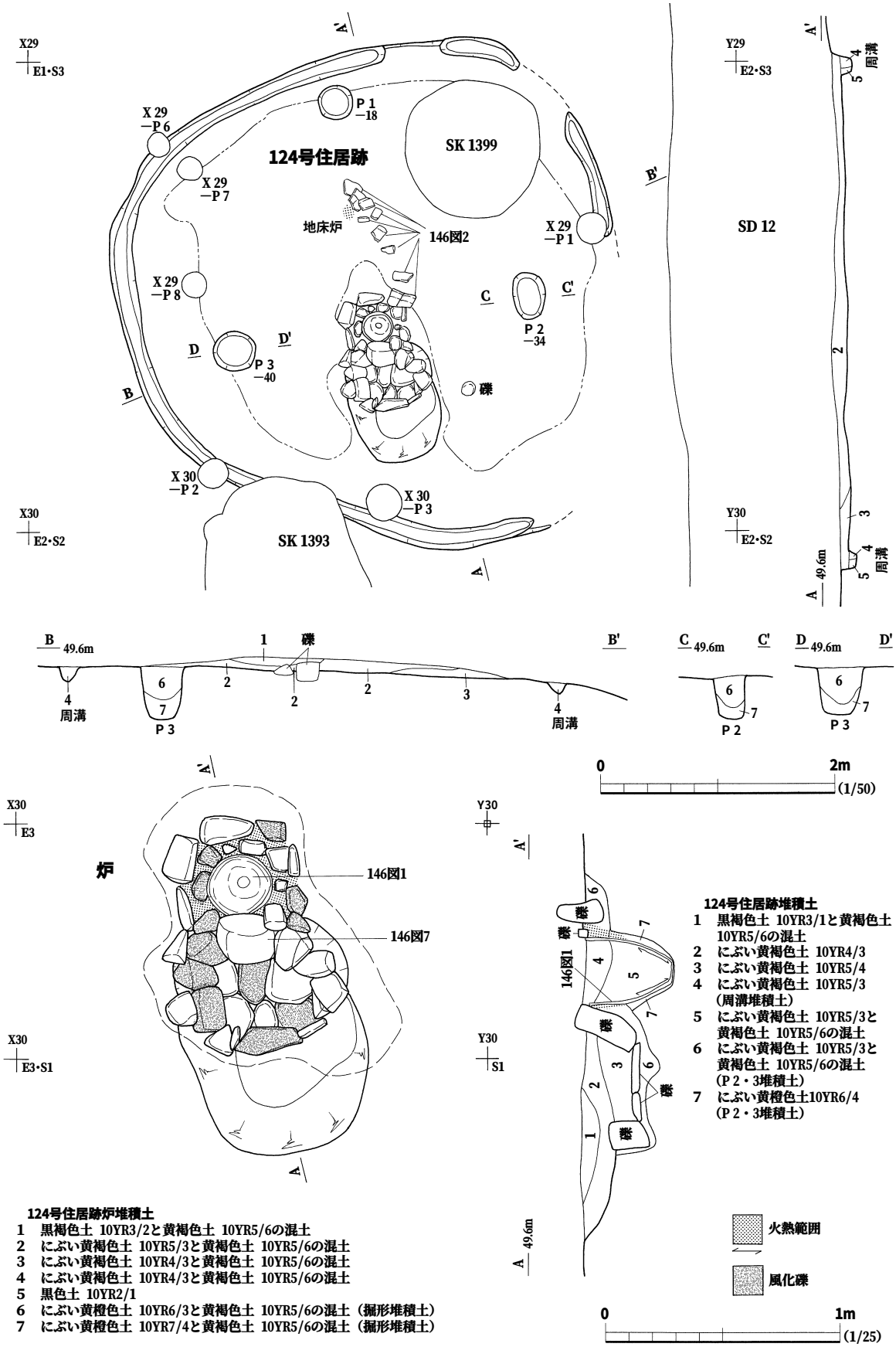


図145　124号住居跡

土器の底部に溜まった黒色土である。炉体土器の内面底部には，この黒色土が付着し，内面が黒褐色を呈していた。ℓ６は石組部掘形，ℓ７は土器埋設部掘形に堆積した埋土である。

（土器埋設部）開口部の直径29㎝の炉体土器に接して長さ20㎝前後の偏平な角礫を敷き，その外側に長さ25～45㎝の直方体状の礫を並べ縁石としている。土器埋設部の南北方向の長さは42㎝で，炉体土器周辺の土は強く焼土化している。

（石組部）掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面とし，その上に板状の礫を楕円形の掘形に沿って立て並べ，外傾する側壁を造っている。土器埋設部との間には大型の凹石が構築礫として転用されていた。石組部の最大幅は78㎝，南北方向の長さは60㎝を測る。西側壁の礫は，表面に強い火熱を受けてもろくなったものが多い。

（前庭部）側壁が緩やかに立ち上がる皿形状を呈している。規模は最大幅74㎝，南北方向の長さ45㎝を測る。

地床炉　複式炉の土器埋設部から北に約0.7ｍ離れた床面上で確認された。位置的には複式炉の中軸線上にある。床面が直接熱を受け，南北12㎝，東西９㎝の狭い楕円形の範囲が薄く赤変していた。熱変化を受けた部分は，床面から３㎝の深さに及んでいる。

主柱穴　主柱穴はＰ１～３の３個である。Ｐ１は北壁際，Ｐ２・３は複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.3ｍ，Ｐ２－Ｐ３間が2.5ｍ，Ｐ３－Ｐ１間が2.3ｍとほぼ等しく，正三角形の配置となっている。各柱穴の現状の平面形は不整な円形もしくは楕円形で，断面形はＵ字状を呈している。規模は，Ｐ１が直径28㎝，深さ18㎝，Ｐ２が長径40㎝，短径26㎝，深さ34㎝，Ｐ３が長径36㎝，短径32㎝，深さ40㎝を計測する。複式炉の両脇に配置されたＰ２・３は，特に深くしっかり造られている。堆積土は混土もしくは基本土層に見られない黄橙色系の土であり，柱痕も認められないため，柱を抜き取った後，人為的に埋められたものと推察される。

遺物出土状況　床面及び複式炉の底面から出土したのは，縄文土器片10点，石器２点である。この中で，146図２に示した資料は，複式炉の土器埋設部から地床炉にかけて直線的に並んだ状態で出土した。この他，堆積土中から縄文土器片36点，石器10点，陶磁器片１点が出土した。陶磁器は検出面付近から出土しているため，本住居跡に伴うものではないと考えている。

遺物　146図１～４に縄文土器を示した。１・３は同一個体の炉体土器である。胴下部が膨らみ，胴上部が外反する器形の深鉢形土器で，口縁部は欠損している。文様は胴上部に見られ，沈線区画の縄文帯で描かれた逆「の」字状の文様，沈線で描かれた渦巻文を横方向に連続して配置している。これらの文様を描く沈線には，丁寧なミガキ調整が加えられている。地文はＬＲの単節斜縄文で，文様間は丁寧に磨り消されている。

２は粗製の深鉢形土器である。口縁部は若干外側に開き，胴上部は円筒形を呈する。文様は，口縁直下に隆線区画による無文部を巡らし，それ以下にＬＲの単節斜縄文を施している。胎土には，白色細砂を多量に含んでいるため，器表面はザラついている。

４は粗製土器の胴部破片である。地文にはＬＲの単節斜縄文が施されている。

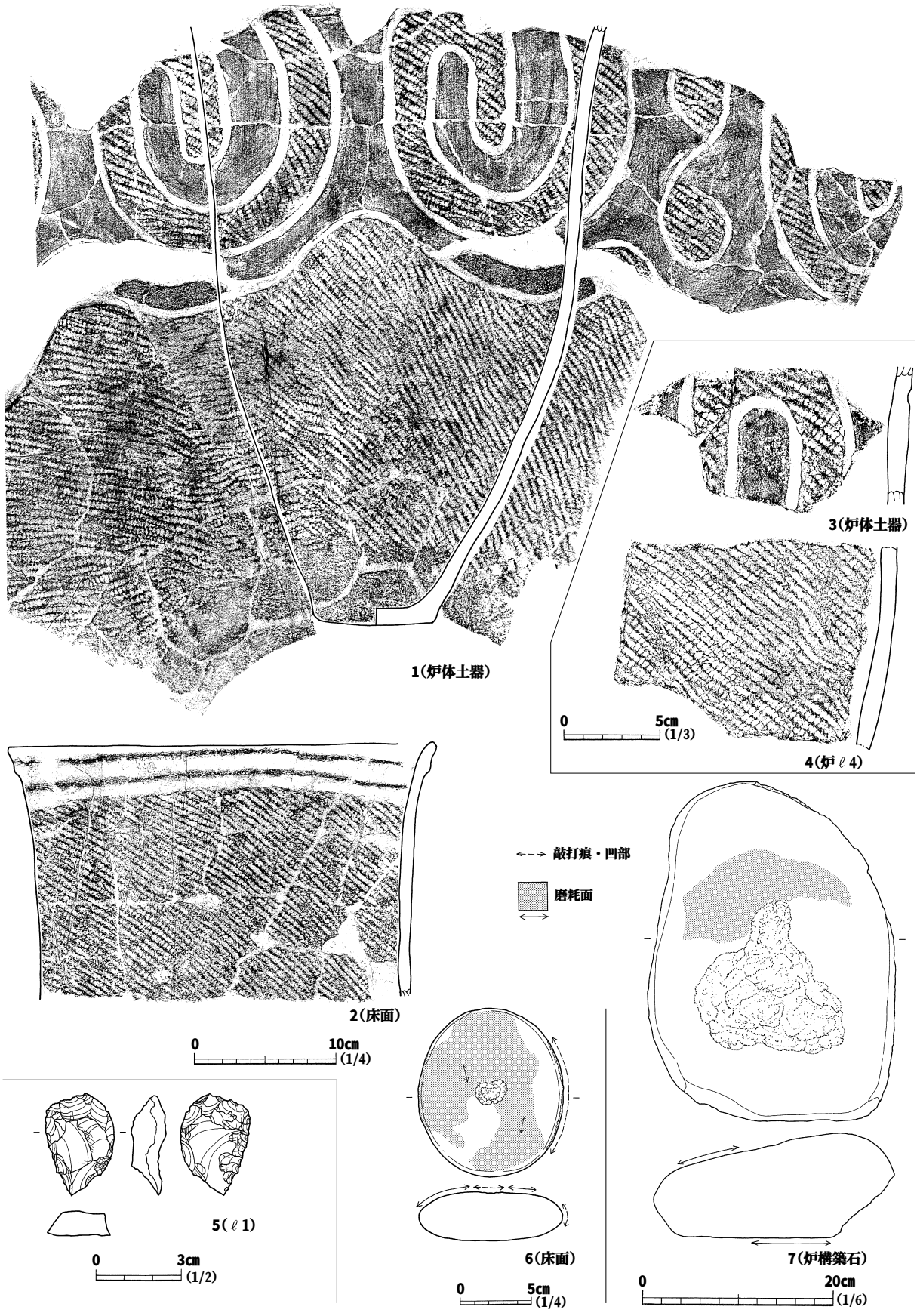


図146　124号住居跡出土遺物

146図５～７に石器を示した。５は珪質頁岩製の削器である。腹面右側縁に面的な調整加工を施し，直線的な刃部を作出している。６は斑状の流紋岩製の磨石類である。側面部には敲打痕が，器面には磨耗面が観察された。器面中央には浅い凹部が認められた。７は斑状の流紋岩製の石皿類である。扁平礫の平滑面を未加工のまま利用している。表裏両面には，部分的に磨耗痕が観察された。表面中央は広い範囲にわたって，敲打により浅く凹んでいる。器面全体は熱を受けたような赤色変化が認められた。

まとめ　定型化した複式炉と，正三角形に配置された３個の主柱穴を有している。複式炉の中軸線は，ほぼ南北方向を示しており，その延長線を意識したような位置に地床炉が形成されていた。また，廃絶に際しては，土器片を複式炉から地床炉にかけてほぼ直線状に並べ，柱を抜き取った上で，複式炉及び住居跡全体を埋めている。したがって，廃絶に際しては，何らかの祭祀的な行為が行われた可能性が高いと推察している。本住居跡の帰属時期は，炉体土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と考えられる。　（小　暮）

132 号 住 居 跡　ＳＩ132 （図147，写真93・94・357）

位置・検出面　北区北部の平坦面，Ｔ26・27グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面であり，前庭部がない複式炉と柱穴の配置等から住居跡と判断した。住居壁と床面が失われているため，遺存状態はかなり悪い。西側には，本遺構と同様の平面形を示すと推察される133号住居跡が近接する。また，東側には567号土坑，南側には858～860号土坑，西側には523号土坑が隣接している。

重複　89号住居跡，862・864号土坑，Ｔ26グリッドＰ５と重複し，862号土坑よりは新しいが，他はいずれよりも本遺構が古い。

平面形・規模　平面形は複式炉東側の周溝から推測して円形状を呈するものと考えられる。規模は不明である。遺存する周溝から柱穴Ｐ３までの長さは，約3.4ｍを測る。

周溝　複式炉の東側に小溝が確認されているが，北側は重複する864号土坑に壊されている。周溝上端の幅は14～23㎝，検出面から深さは20㎝前後である。

複式炉　複式炉はＰ２とＰ３のほぼ中間に構築され，土器埋設部と石組部のみが確認された。

(規模)全長は約100㎝，最大幅80㎝を測り，複式炉の長軸方向はＮ22 °Ｅである。

(堆積土)石組部底面と炉体土器底部にはℓ２が薄く堆積し，その上面はℓ１で覆われていた。ℓ３は石や土器を設置するための掘形堆積土である。

(土器埋設部)口径22㎝の炉体土器に接して長さ９～17㎝の円礫や角礫を２重に敷いているが，南東側では石が失われている。掘形は土器よりやや大きめに掘られている。東西方向の長さは約45㎝で，炉体土器周辺の土は赤褐色に焼土化している。

(石組部)掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面と側壁を造り，特に土器埋設部に接する側壁には，長さ23㎝の板状礫を65 °前後の急角度に立てている。石組部の最大幅は80㎝，東西方向の長さは73㎝

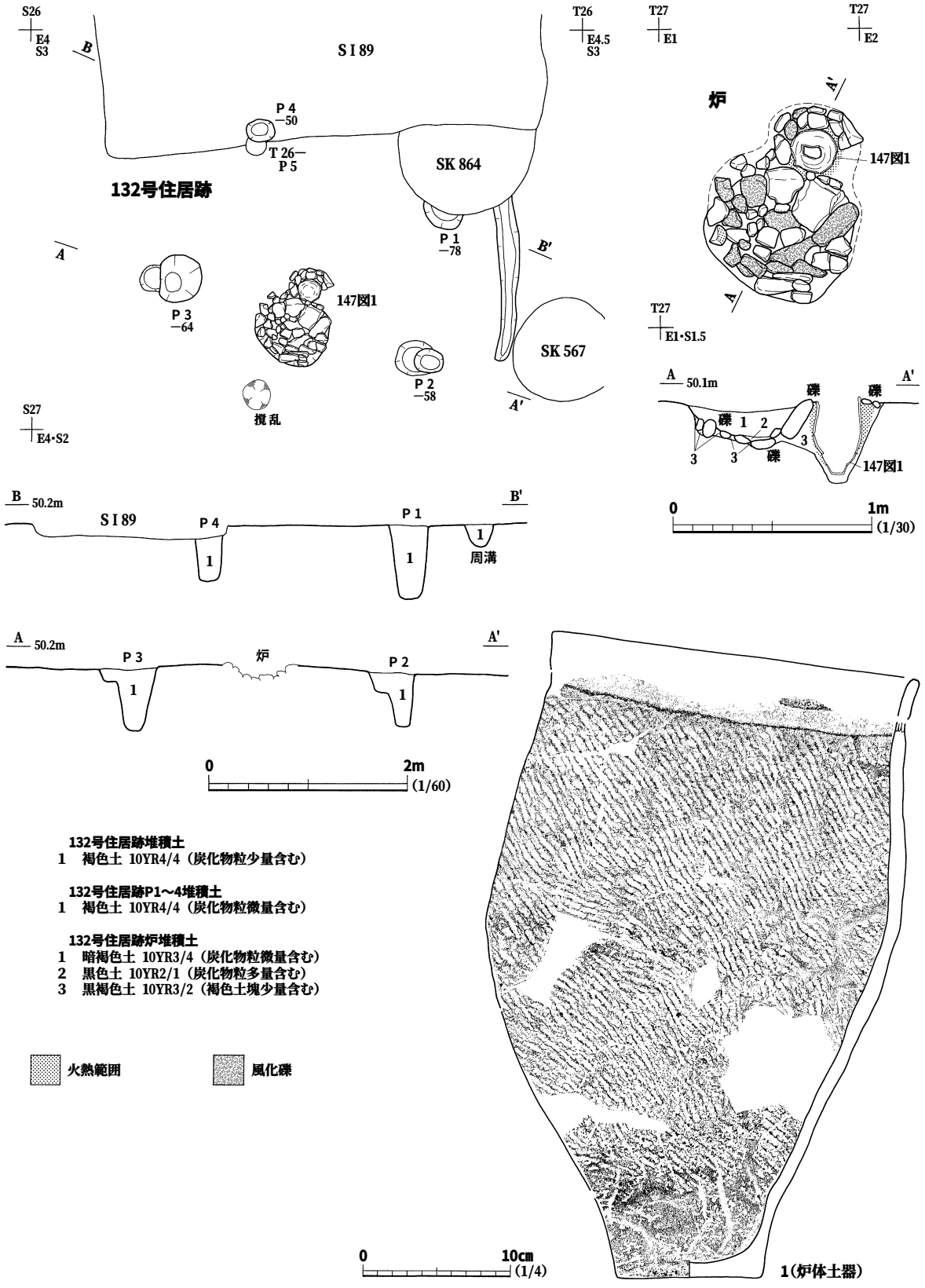


図147　132号住居跡と出土遺物

前後を測る。礫は表面に強い火熱を受けてもろくなったものが多く，これらの礫には花崗岩が多用されている。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個で，複式炉の東・西・北東・北西側に位置している。柱穴は，円形または楕円形を呈し，規模は径29～48㎝，深さ50～78㎝を測る。各柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.5m，Ｐ２－Ｐ３間が2.7m，Ｐ３－Ｐ４間が1.8m，Ｐ４－Ｐ１間が2.0mとほぼ長方形の配置となっている。Ｐ２とＰ３には浅い掘形が見られ，この中に柱穴と同様の堆積土が入ることから，この掘形は柱穴の抜き取り痕と考えている。

遺物出土状況　複式炉の炉体土器である縄文土器１点，この他に，堆積土中から縄文土器片２点，石器１点が出土した。このうち，炉体土器１点を図示した。

遺物　147図１は深鉢形の縄文土器であり，口縁部を欠いた約６割が遺存する。器形は，平底の底部から胴部がわずかに膨らみをもつ長胴を呈するが，胴部上半がややゆがんでいる。胴部全面には，縦位回転を基調とする無節Ｌの縄文が施文され，胴部と無文帯を形成する口縁部を沈線で区画している。この沈線は，縄文施文後に加えられている。

まとめ　本遺構は，４本主柱穴構造の住居跡である。複式炉から住居跡と確認され，周壁や床面が失われているため，遺存状態が悪い。年代は，複式炉や炉体土器の特徴から縄文時代中期末葉の大木10式期と考えている。　（国　井）

133 号 住 居 跡　ＳＩ133 （図148・149，写真95・96・358）

位置・検出面　北区北部の平坦面，Ｒ・Ｓ26・27グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面である。住居跡の東半分は撹乱により壊されているため，本遺構は遺存状態が悪い。本遺構の西側には，複式炉を伴う132号住居跡が近接する。

重複　523・850・1248・1249号土坑，42号建物跡，Ｒ26・27・Ｓ27グリッドの小穴と重複し，本遺構より古いものは850・1248・1249号土坑，新しいものは523号土坑，42号建物跡，小穴５基である。この他に，住居跡の推定範囲からＳ26グリッドＰ８・10，Ｓ27グリッドＰ２も重複するとみられるが，新旧関係は不明である。

堆積土　ℓ１は床面全体を覆い，ℓ２は周溝内にのみ堆積する。ℓ１は自然堆積土と考えられるが，ℓ２については不明である。

平面形・規模　平面形は現存する形状と柱穴の配置から推測して円形状を呈するものと考えられる。規模は南北4.5m，遺存する東西3.9mを測る。

床面　基本層序のＬⅣに形成されているが，撹乱により複式炉の北側から東側の一部が失われている。床面は若干の凹凸が認められるが平坦である。図中には示していないが，複式炉とＰ３の間にはわずかな踏み締まりが確認された。北西側床面上からは人頭大の平石１個が確認された。

周壁　東半分の周壁は失われているが，西側壁は床面から56～87°の角度で立ち上がり，遺存壁高は10～14㎝を測る。

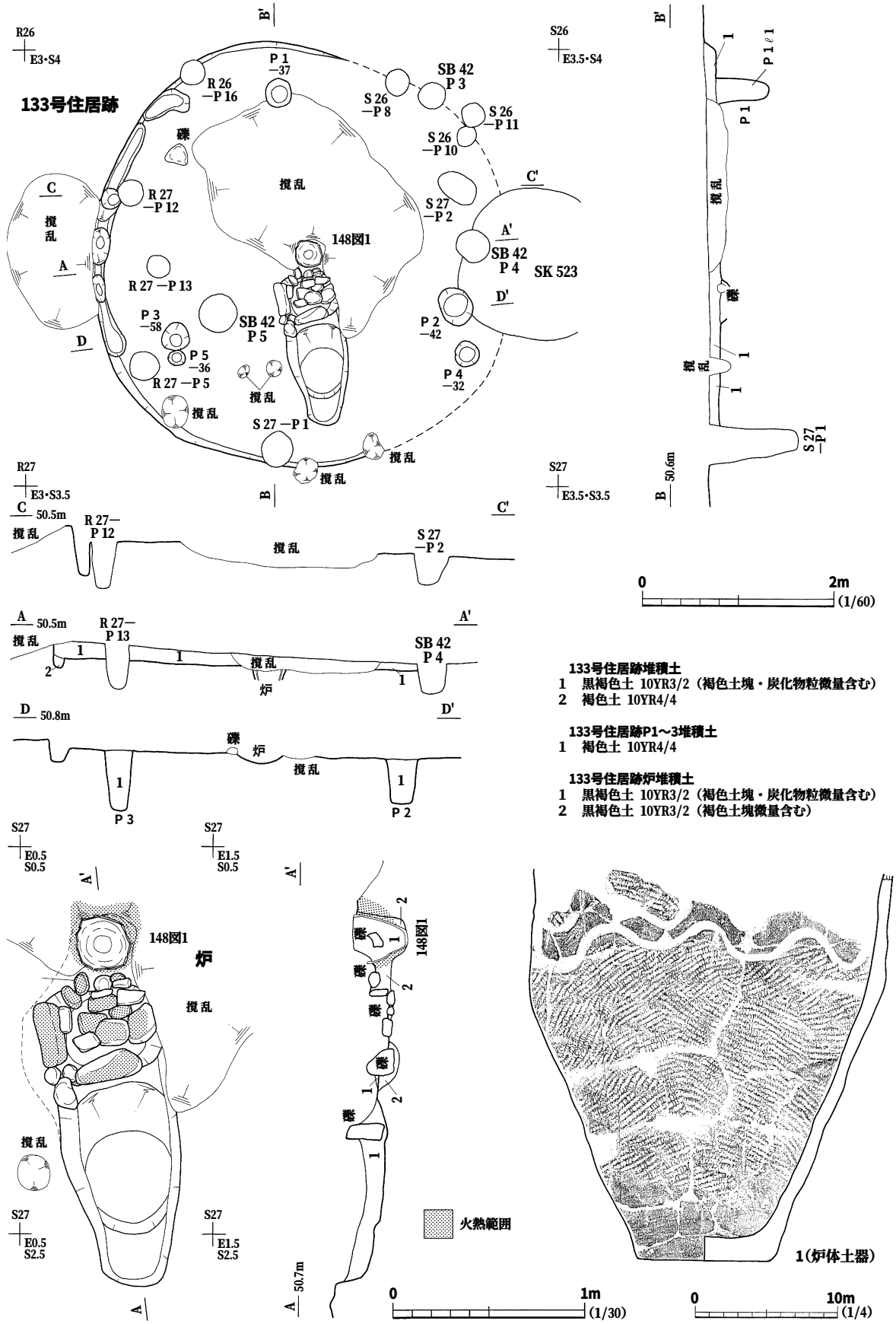


図148　133号住居跡と出土遺物(1)

周溝　西壁に沿って断続する小溝が確認されている。溝上端の幅は11～32㎝，検出面から溝底の深さは11～17㎝である。また，溝底には円形や楕円形を呈する小穴状のくぼみが３カ所認められ，溝底からの深さは７～20㎝を測る。

複式炉　複式炉はＰ２とＰ３のほぼ中間の床面中央から南壁にかけて構築されている。土器埋設部と石組部の東側の範囲が撹乱により壊されているため遺存状態が悪い。

(規模)全長は194㎝，最大幅61㎝を測り，複式炉の長軸方向はＮ６゜Ｗである。

(堆積土)複式炉内には全てℓ１が堆積し，この土は遺構内堆積土のℓ１に相当するものと考えられる。ℓ２は土器埋設部と石組部の掘形堆積土である。

(土器埋設部)土器埋設部では上端を欠いた遺存径25㎝の土器が，やや大きめの掘形内に埋設されている。その周辺が撹乱を受けていたためか，土器上端の周縁に敷石は認められなかった。また，炉体土器の周辺は，火熱により４～10㎝の範囲で焼土化している。

(石組部)石組部は，掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面と側壁を造っている。石組部南側と西側の側壁には，35㎝前後の棒状の石が使用されているが，このような石が東側では認められないことから欠落したものと考えられる。礫は表面に強い火熱を受けてもろくなったものが多く，これらの礫には花崗岩が多用されている。

(前庭部)前庭部は長方形状に掘り込まれ，底面からの壁高は12～22㎝を測る。底面の高さは石組部の底面とほぼ同じである。また，前庭部底面はＬⅣを使用し，若干の凹凸が認められる。

主柱穴　主柱穴はＰ１～３の３個で，複式炉の東・西・北側に位置している。柱穴は，円形または楕円形を呈し，規模は径28～33㎝前後を測り，深さは37～58㎝である。各柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.8m，Ｐ２－Ｐ３間が2.9m，Ｐ１－Ｐ３間が2.8mとほぼ正三角形の配置となっている。

ピット　柱穴の他に，Ｐ４・５の２個を確認した。Ｐ４はＰ２の南側，Ｐ５はＰ３の南側に位置する。Ｐ４・５は円形を呈し，規模は径18～28㎝を測り，深さは32～36㎝である。いずれも，性格は不明である。

遺物出土状況　複式炉の炉体土器である縄文土器１点と，この他に，堆積土中から縄文土器片99点，石器28点が出土した。縄文土器の多くは，住居跡東側のℓ１から出土している。このうち，炉体土器１点，縄文土器片６点，石器２点を図示した。

遺物　148図１・149図１～８に示した。148図１は胴部上半を欠損する深鉢形土器である。胴部では，波状沈線により縄文地文と文様が区画され，胴部上半には波状の文様モチーフが展開するものと推察される。縄文地文は，胴部中位に横位や斜位回転，胴部下半では縦位回転の複節ＬＲの縄文が施文されている。縄文は区画する沈線の後に施されている。149図１は縄文地文の破片で，複節ＲＬの縄文が施文されている。149図２～６は胴部文様帯をもち，沈線を用いて文様を描くものである。４以外は縄文施文後に沈線を加えている。

149図７・８は鉄石英製の石鏃である。７は素材の厚みが残り，器体整形が不充分であるため，石鏃の未製品と判断した。８は平基無茎石鏃である。断面形は凸レンズ状を呈する。器面調整を丁

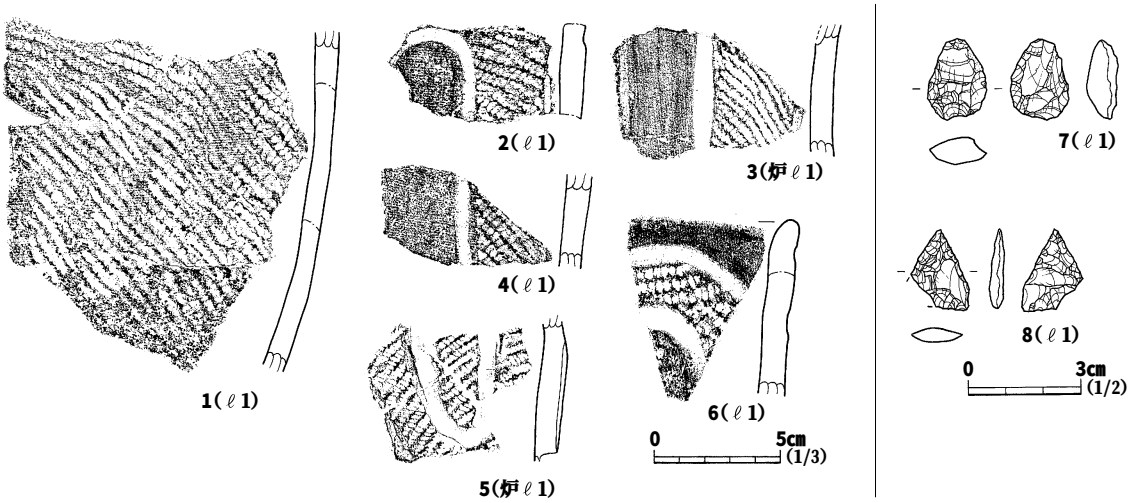


図149　133号住居跡出土遺物(2)

寧に行ない，両面から側縁部に細かい調整剝離を連続的に加えて器体を整えている。

まとめ　本遺構は複式炉を伴い，３本主柱穴構造の住居跡である。複式炉の特徴として，前庭部底面に浅いくぼみが認められる。年代は，縄文時代中期末葉の大木10式期と考えている。　（国　井）

134 号 住 居 跡　ＳＩ134 （図150，写真97・98）

位置・検出面　調査区北東部のＴ22グリッドに位置している。LIV上面で暗褐色土の方形範囲として確認された。南西5.3mに85号住居跡、東方7.9mに108号住居跡が存在する。

重複　782・1447・1448号土坑より新しい。

堆積土　４層に分けられる。ℓ１～３は人為堆積土、ℓ４は貼床土と考えている。

平面形・規模　平面形はほぼ隅丸方形で，規模は南北長1.5m，東西長1.6mである。西壁を主軸とした場合，主軸方位はＮ５ ℃Wで，ほぼ北を指している。

床面　北側半分にのみ貼床が認められた。

周壁　立ち上がりは急しゅんで，残存高33～39㎝を測る。

カマド　北西隅に燃焼部が設けられていて，そこから北西方向に煙道が約70㎝延びている。煙道底面は住居床面から地表面に向かって緩やかに立ち上がっている。両袖部・酸化面等は検出されなかったものの，燃焼部と煙道部との境界上に凝灰岩の天井材が検出された。これも被熱による酸化の形跡は認められなかった。堆積土は４層に大別したが，住居内堆積土と同様の堆積状況である。

遺物出土状況　本遺構からは縄文土器片９点，土師器片29点が出土した。土師器片の大部分はカマド内からの出土である。

遺物　図示したのは，150図１の１点のみである。同図１は土師器甕である。ロクロは未使用で，外面には横位あるいは斜位のヘラナデが施される。

まとめ　本遺構は北西隅にカマドを有する竪穴住居跡で，本調査区検出の同様な竪穴住居跡の中で最も小型である。調査区内の他の住居跡とは、規模やカマドの向きが異なり，柱穴が認められない

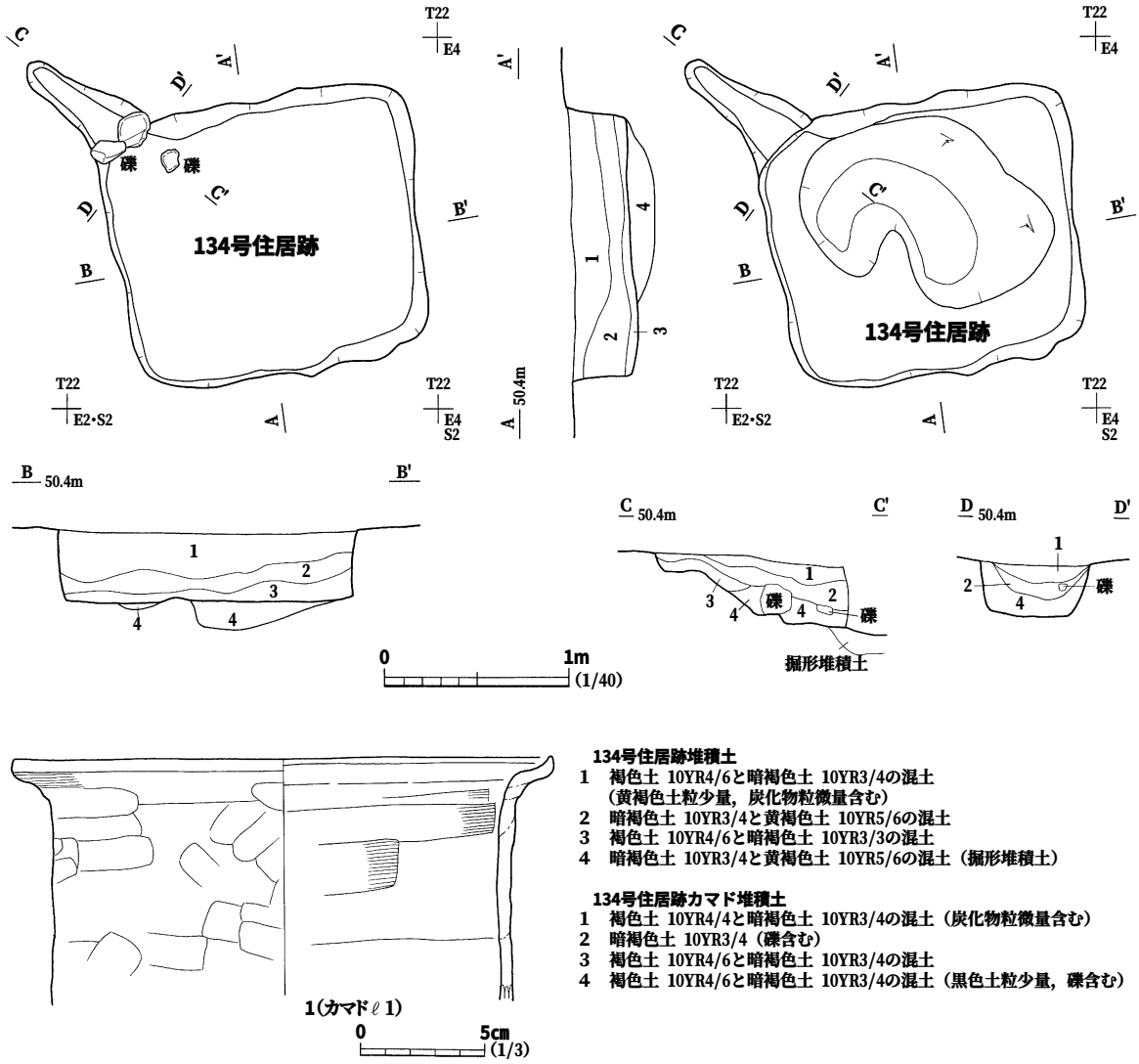


図150　134号住居跡と出土遺物

など構造的にも異なることから，他の住居跡と異なる機能が推定される。また，カマド燃焼部の被熱が確認できず，カマド内堆積土も焼土粒を含まないことから，住居の使用期間は短かった可能性が高い。所属時期は出土した遺物から10世紀前半と考えられる。　（高　田）

135 号 住 居 跡　ＳＩ135 （図151，写真99・100）

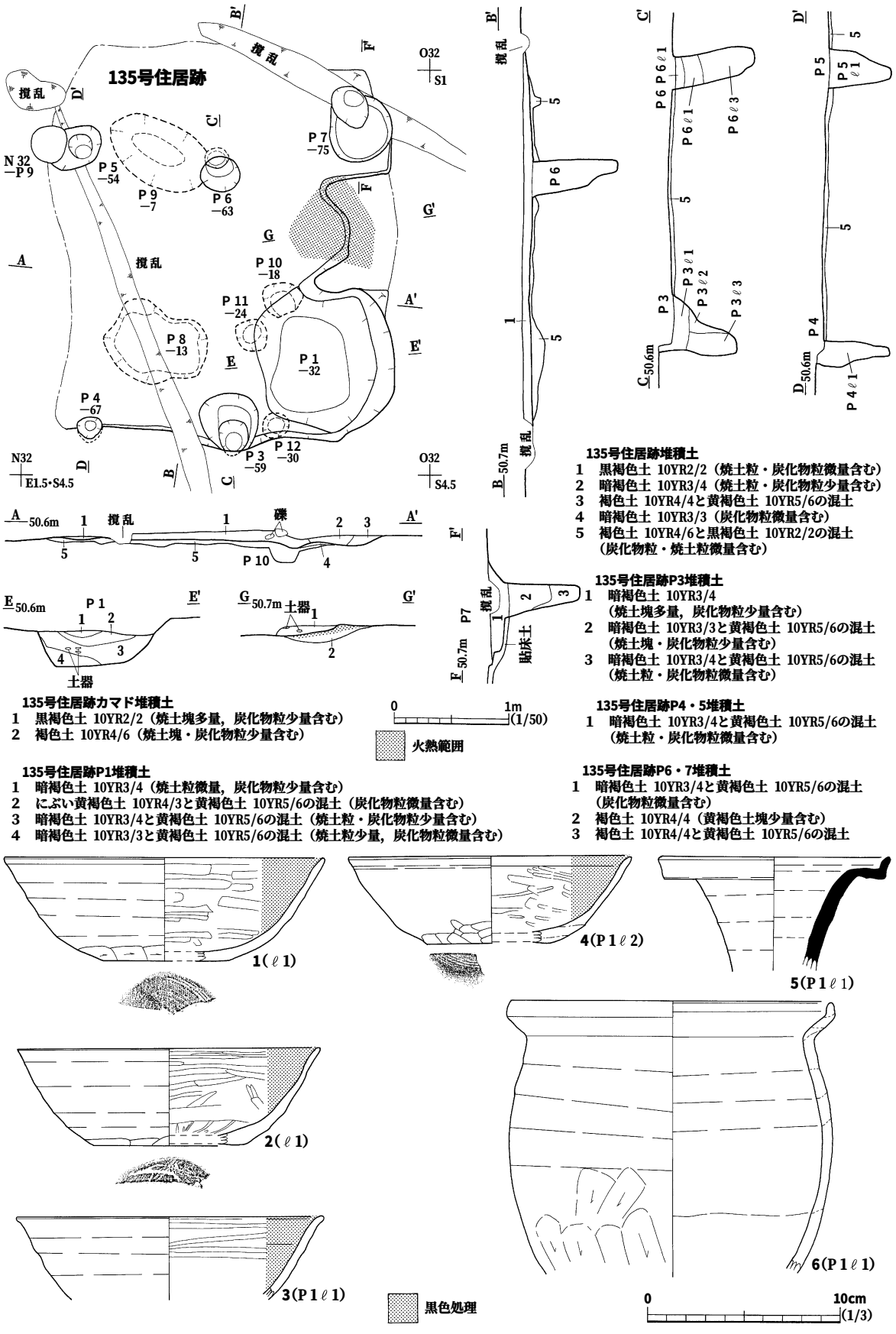
位置・検出面　北区西側中央部の平坦面に存在し，N32グリッドに位置している。LIV上面で暗褐色を呈する南北主軸の長方形の落ち込みを検出した。後世の２本の撹乱溝に切られている。

堆積土　５層に分かれ，ℓ５は貼床土である。

平面形・規模　北壁・西壁が残存していないことから，全容は不明であるが，主軸方位が南北方向の長方形を呈し，検出した部分の規模は南北長3.3m，東西長2.9mを測る。

床面　若干の起伏があるが，ほぼ平坦で，水平である。ほぼ全面にわたって貼床が形成されている。

周壁　東壁及び南壁が残存するが，残存高は全体的に低く，南壁東部で最大８㎝を測る。直線的に



135号住居跡堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（焼土粒・炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（焼土粒・炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）
5　褐色土 10YR4/6と黒褐色土 10YR2/2の混土
（炭化物粒・焼土粒微量含む）

135号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4
（焼土塊多量，炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土塊・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土粒・炭化物粒微量含む）

135号住居跡カマド堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（焼土塊多量，炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（焼土塊・炭化物粒少量含む）

135号住居跡P4・5堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土粒・炭化物粒微量含む）

135号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（焼土粒微量，炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（焼土粒・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（焼土粒少量，炭化物粒微量含む）

135号住居跡P6・7堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土塊少量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

図151　135号住居跡と出土遺物

強く外傾している。

カマド　東壁中央部に存在する。燃焼部は住居内に設置され，住居構築時に貼床土と一連の土で造られている。両袖は東壁から住居内へ直線的に張り出している。煙道は確認されなかった。燃焼部の規模は南北長1.1m，左袖の長さ60㎝，幅30㎝，右袖の長さ80㎝，幅40㎝を測る。底面は緩く東方へ上昇している。左袖から底面にかけて，東西80㎝，南北70㎝の不整形の焼成化範囲が認められ，底面から最大５㎝のところまで焼成化が及んでいる。堆積土は住居内堆積土のℓ１に対応する土であり，焼土粒を多く含んでいる。

主柱穴　Ｐ３～６の４個である。Ｐ３・４は南壁から住居外へ張り出して存在し，Ｐ５・６は床面北部に存在する。長径22～50㎝，深さ54～67㎝の円筒形であるが，Ｐ３・６は住居内側に若干傾いて構築されている。堆積土は暗褐色土ないしは褐色土で，柱を抜いた後に人為的に埋められたものと推測される。

ピット　Ｐ１は床面南東隅に存在し，貯蔵穴と推測される。長径1.1m，短径1.0m，深さ32㎝を測る。Ｐ２は欠番である。Ｐ７は北東隅に存在し，壁際の柱穴と推測される。Ｐ８～12は掘形内ピットである。

遺物出土状況　Ｐ１内堆積土より土師器片129点，須恵器片１点，縄文土器片24点，Ｐ３～７内堆積土より土師器片36点，縄文土器片１点，遺構内堆積土より土師器片121点，須恵器片１点，縄文土器片31点，石器類９点，掘形堆積土より土師器片５点が出土した。

遺物　151図１～４はロクロ整形の土師器杯で，底部から内湾気味に立ち上がり，上半は直線的に外傾している。底部付近を欠失している３以外では，底面切り離しは回転糸切りで，体部下端は手持ちヘラケズリ調整されている。２では底面にもヘラケズリ調整が及んでいる。内面はヘラミガキ後，黒色処理されているが，３は火熱を受けて，黒色処理がとんでいる。なお，３の口縁部は若干外反している。同図５は須恵器長頸瓶の口縁部から頸部にかけての資料である。頸部は外反気味に立ち上がった後，口縁部で大きく水平方向に広がっている。口縁部は断面Ｌ字型を呈する。同図６はロクロ整形の土師器球胴甕である。頸部でくびれ，口縁部上端は短く直立している。体部下半には縦方向のヘラケズリが施されている。

まとめ　本遺構はカマドをもつ竪穴住居跡で，主柱穴の内，南の２個が壁から張り出して存在するのが特徴である。遺構の時期は，出土遺物から９世紀後半と推測される。　（能登谷）

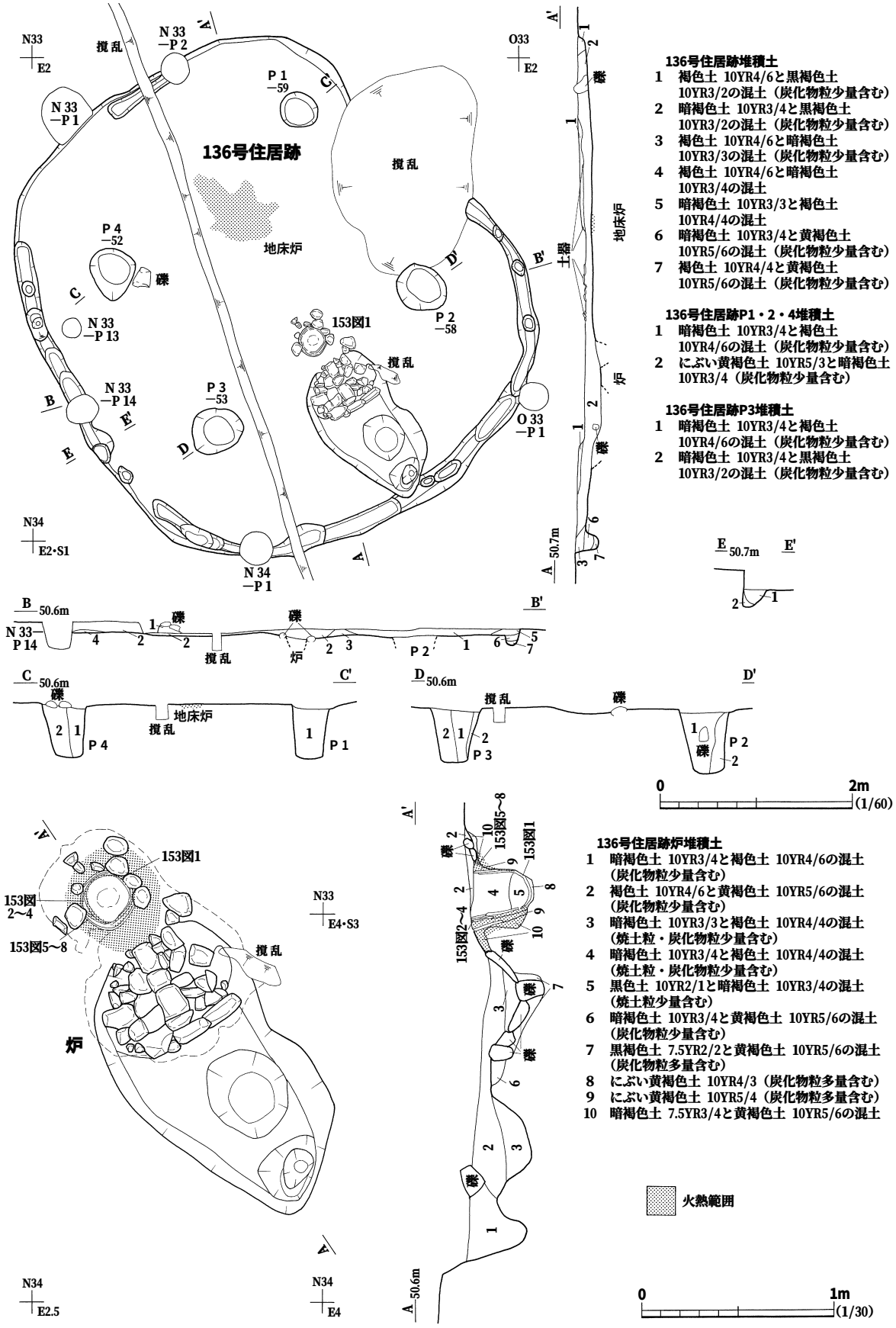
136 号 住 居 跡　ＳＩ136 （図152～155，写真101・102・358）

位置・検出面　北区西側中央部の平坦面に存在し，Ｎ・Ｏ32・33・34グリッドに位置している。ＬⅣ上面で暗褐色土の円形の落ち込みを検出した。北東部は後世の撹乱を受けている。

堆積土　７層に分かれ，いずれも人為堆積と推測される。ℓ６・７は周溝内堆積土である。

平面形・規模　長軸方向が北西から南東方向の隅丸長方形を呈し，長軸5.2m，短軸4.7mを測る。

床面　ＬⅣに形成されており，ほぼ全面が堅い。若干の起伏があるが，ほぼ平坦で，緩く北西から



136号住居跡堆積土

1　褐色土 10YR4/6と黒褐色土 10YR3/2の混土（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黒褐色土 10YR3/2の混土（炭化物粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/3の混土（炭化物粒少量含む）
4　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/4の混土
5　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/4の混土
6　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
7　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）

136号住居跡P1・2・4堆積土

1　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/3と暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒少量含む）

136号住居跡P3堆積土

1　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黒褐色土 10YR3/2の混土（炭化物粒少量含む）

136号住居跡炉堆積土

1　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/4の混土（焼土粒・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/4の混土（焼土粒・炭化物粒少量含む）
5　黒色土 10YR2/1と暗褐色土 10YR3/4の混土（焼土粒少量含む）
6　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒少量含む）
7　黒褐色土 7.5YR2/2と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒多量含む）
8　にぶい黄褐色土 10YR4/3（炭化物粒多量含む）
9　にぶい黄褐色土 10YR5/4（炭化物粒多量含む）
10　暗褐色土 7.5YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

火熱範囲

図152　136号住居跡

南東へ下降している。

周壁　直立気味ないしは急に外傾して立ち上がっている。床面からの高さは北西壁で６㎝，南西壁で16㎝を測る。

周溝　北西部・北部・南西部で途切れるが，周壁際に巡っている。幅10～20㎝，床面からの深さ10～36㎝を測る。壁は直立気味ないしは急に外傾する。底面は不整で，所々にくぼみがある。

複式炉　遺構南東部に存在し，北から土器埋設部・石組部・前庭部の順に配されている。

(規模)全長2.18m，最大幅87㎝を測る。主軸方位はN31 Wである。

(堆積土)10層に分かれ，ℓ１～４は人為堆積土，ℓ５は炉使用時の黒色土，ℓ６～10は掘形堆積土である。

(土器埋設部)埋設する土器より一回り大きい円筒形の掘形内に，上部を欠失した深鉢形土器をやや石組部側に傾けて正位に埋設している。さらに，その外側に同じ土器の上部を輪切りにしたものを埋設し，その南側にはさらに一回り大きい土器片が埋設されている。つまり，平面的にみると，北側は土器が二重になり，南側は三重となっている。土器の周囲は焼土化し，偏平なものを含む小型礫が配されている。

(石組部)平面形は楕円形を基調とし，断面の形状は擂鉢状を呈している。規模は，北東から南西方向の長さ87㎝，北西から南東方向の長さ56㎝，床面から底面の礫の上面までの深さ25㎝を測る。石組は土器埋設部側では上端まで達しているが，両側壁では達していない。前庭部との境には，礫を炉主軸と直交するように東西方向に立て，それ以外の礫は平坦面を上向きあるいは斜めに敷き詰めている。石組部中央にある４個の礫は幅がそろい，炉主軸にのるように一直線に配され，その両側の礫は規模・配置とも不規則である。なお，炉主軸上にのる礫の内，土器埋設部側から２番目の礫は偏平でない12×10×14㎝の亜角礫で，小さな平坦面を上向きにして据えられている。

(前庭部)平面形は南端に向かって収束する不整三角形を呈する。規模は，北西から南東方向の長さ1.04m，北東から南西方向の長さ85㎝，深さ14㎝を測る。底面は起伏があり，中央部に長径46㎝，短径40㎝，深さ30㎝のピット，南端部に長径37㎝，短径27㎝，深さ30㎝のピットが存在する。

主柱穴　Ｐ１～４の４個である。長径40～54㎝，深さ52～59㎝の円筒形を呈する。堆積土は２層で，ℓ１は柱抜き取り後の埋土，ℓ２は柱据え付けの際の埋土と推測される。

地床炉　複式炉土器埋設部の北西1.1mに存在する。長軸97㎝，短軸62㎝の不定形を呈し，床面から約１㎝のところまで焼土化している。主軸方位はN50 Wである。

遺物出土状況　炉土器埋設部より深鉢形土器が正立して出土したが，取り上げの際に82点の破片になった。地床炉と土器埋設部の間の床面及び床面近くの堆積土から深鉢形土器の大型破片を含む縄文土器片が100点，石器類が２点出土し，炉内堆積土から縄文土器片３点，石器類２点，Ｐ３・４及び周溝内堆積土から縄文土器片５点，石器類10点が出土した。

遺物　153図１は炉に埋設されていた深鉢形土器の胴部中央付近の資料で，口縁部付近と底部付近を欠失している。胴部は外反している。横位のｅ字状区画文と推測される沈線による区画文が描画

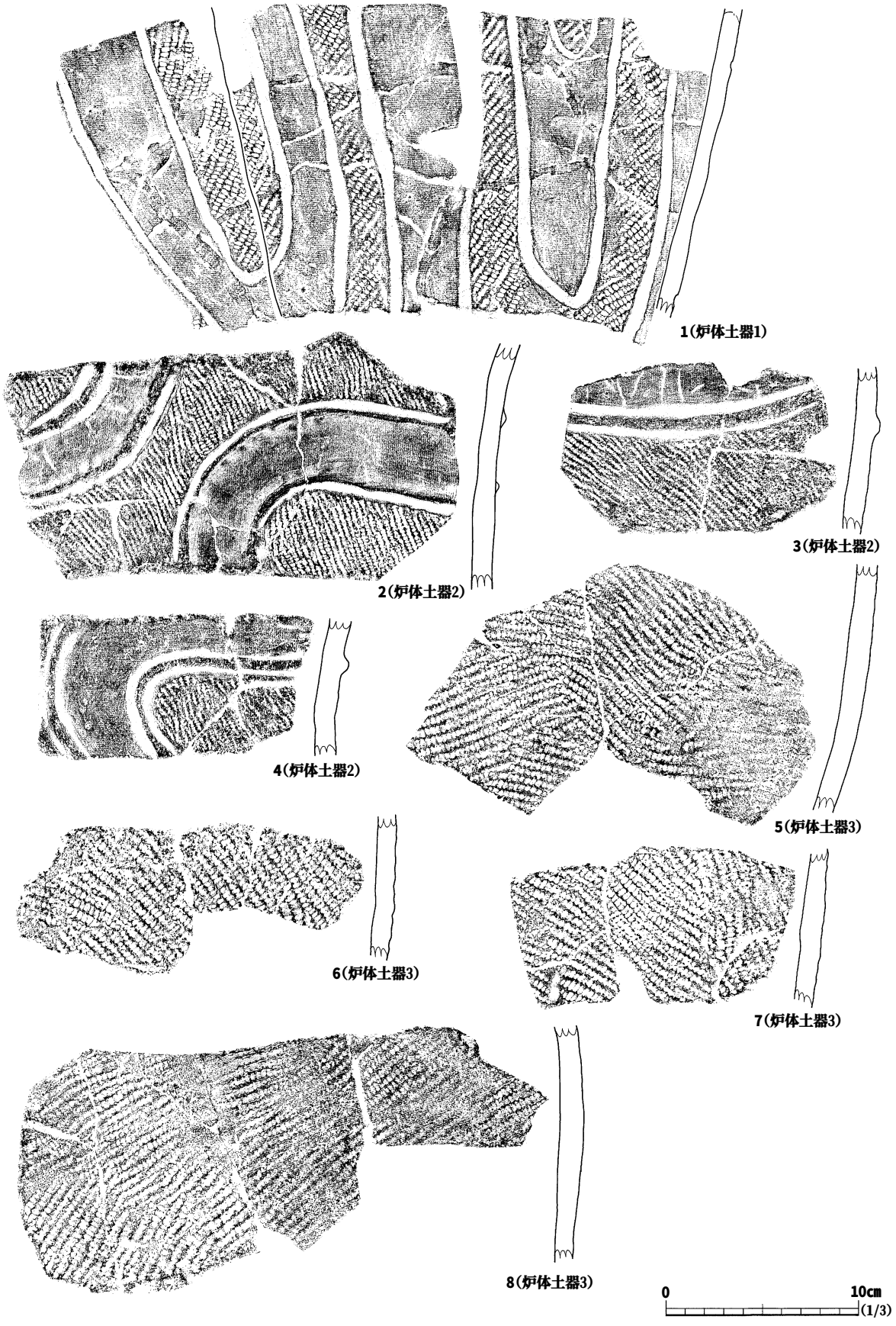


図153　136号住居跡出土遺物(1)

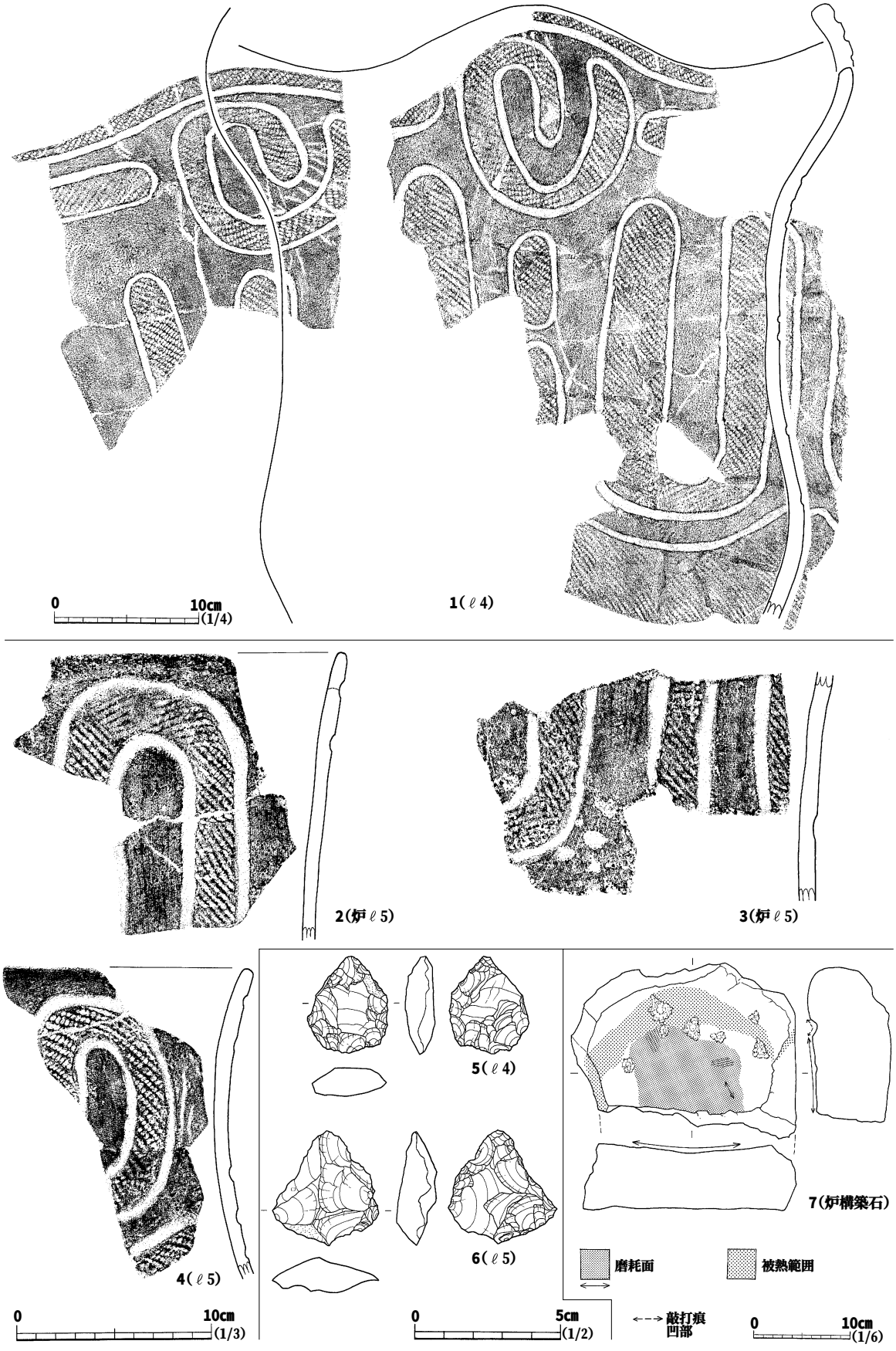


図154　136号住居跡出土遺物(2)

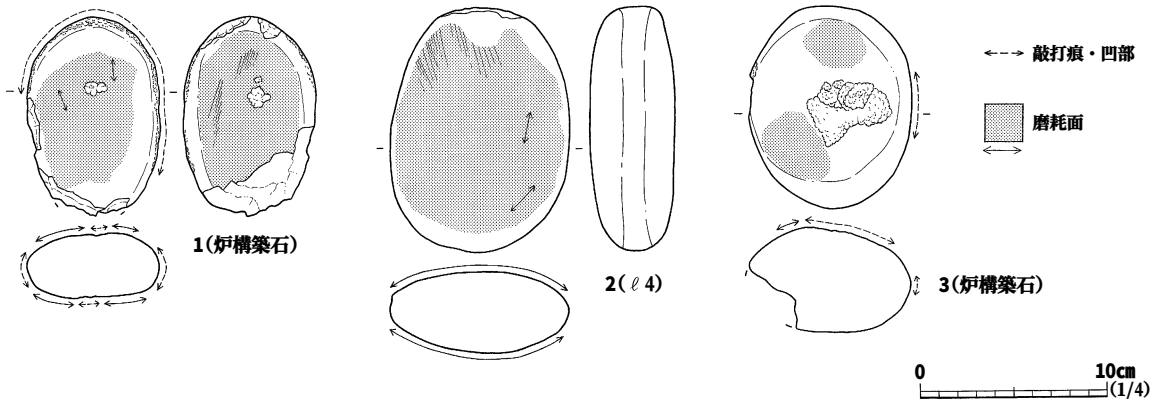


図155　136号住居跡出土遺物(3)

され，区画内にＲＬ原体を回転施文した縄文を充填し，区画外は無文としている。

154図１は床面及び床面付近の堆積土から出土した深鉢形土器の大型破片で，口縁部は４単位の波状口縁を呈する。口縁部付近と胴下半部は内湾し，その間は外反気味である。口縁部に沿って１条の沈線が巡り，胴部中央部にも波状の沈線１条が巡っている。口縁部の沈線より上位及び胴部中央部の沈線より下位にはＬＲ原体を回転施文した縄文がみられる。胴部上半には沈線による区画文が描画され，区画内にＬＲ原体を回転施文した縄文を充填し，区画外は無文としている。描画される区画文は，口縁部付近の内湾する部分とその下方の外反する部分の上下２段に配され，上段の文様帯は波頂部直下にｅ字状文を置き，その両脇に横位の楕円文を配している。下段の文様帯は上段のｅ字状文の下方に縦位の楕円文を２個縦に並べ，その両脇(上段の横位楕円文の下方)にはU字状文を配している。

153図２～８及び154図２～４は153図１の外側ないしは底面に埋設されていた深鉢形土器の口縁部・胴部破片である。153図２～４は稜線により区画文を描き，区画内の無文部と区画外の縄文部を対置しているのに対して，154図２～４では沈線による区画文の中に縄文を充填し，区画外は無文としている。153図５～８には全面に縄文がみられる。

154図５・６はチャート製の石鏃の未製品と推測される。両者とも細かい調整剝離は全面に及んでいない。５の表面左側縁部はポジティヴな剝離面が残り，その面の下部には径２㎜程の打撃痕が観察される。同図７は斑状の流紋岩製の扁平な大型礫を利用した石皿である。表面中央に平滑で緩く湾曲する磨耗範囲が認められる。この面では，磨耗面の外周に径10～20㎜の擂鉢状の凹部が５カ所認められた。裏面にはアバタ状の浅い凹部が４カ所ある。

155図１～３は扁平な楕円礫を利用した磨石類である。平坦面には磨耗範囲が認められ，１の周縁，２の端部，３の端部及び側縁の一部には敲打痕が認められる。また１・３では器面中央に浅い凹部が認められる。

まとめ　本遺構は複式炉をもつ４本主柱の竪穴住居跡で，壁際には周溝が巡っている。また，複式炉の主軸延長線上の北側床面には地床炉が存在する。遺構の時期は，炉体土器及び複式炉の形態等から，縄文時代中期末葉の大木10式期と推測される。　（能登谷）

137 号 住 居 跡　ＳＩ137 （図156，写真103・104・358）

位置・検出面　北区東端よりのＸ25グリッドに位置する複式炉をもつ住居跡である。検出面はＬⅣ上面で，近代の撹乱・削平により複式炉の炉体土器と石組部がすでに露出している状態での検出であった。

重複　16号溝跡及び1414号土坑との重複が認められた。完全に埋まった1414号土坑上に複式炉を構築していることから，1414号土坑よりも新しい。また，16号溝跡が住居跡の床面西半分を大きく破壊していることより，本住居跡の方が古い遺構であることがわかる。

平面形・規模　複式炉の周囲を精査し，周溝や柱穴等の検出に努め，柱穴３個を検出した。本遺構には堆積土がなく，複式炉と３個の主柱穴の配置から平面形を推測するしかない。馬場前遺跡の複式炉をもつ他の竪穴式住居跡の例から推測すると，その平面形はおおよそ円形であったと推測される。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。若干の凹凸が認められるが，ほぼ平坦である。踏み締まり等の痕跡は確認できなかった。周溝は確認できなかった。

複式炉　炉は北側から土器埋設部・石組部で構成された複式炉である。複式炉自体の遺存状況は良い。石組部の南28㎝に土坑状のくぼみをもつ。複式炉長軸線上の土器埋設部の北には長径30㎝，短径24㎝，床面よりの高さ21㎝の礫を配し，立石としている。

(規模)長軸1.4m，短軸0.6mである。主軸方向はほぼ南北方向で，Ｎ14 ℃Ｗに振れている。

(堆積土)炉体土器内の堆積土はℓ５・６の２層に分層できる。複式炉内堆積土ℓ５は土器埋設部及び石組部の上層にみられることから，遺構内堆積土であった層であることがわかる。下位のℓ６は褐色土塊を含み本住居廃棄時に投げ入れたものと考えられる。石組部下位にあるℓ７は石組部掘形内埋土であり，土器埋設部内の掘形堆積土でもある。

(土器埋設部)土器埋設部には，口縁部から胴部上半までの深鉢形土器を炉体土器としている。また，炉体土器の周囲には15～35㎝の礫を巡らしている。土器及び土器周辺の土は赤褐色に変色し強い熱を受けていたことがうかがえる。

(石組部)石組部の南壁の礫のみが欠失した状態であった。残存部から石組部平面形は楕円形，断面形は船底状を呈していたと推測できる。床面から石組部底面までの深さは18㎝を測る。石組部の北壁の礫は約40 ℃の角度で傾斜し立ち上がる。石組部南側の掘形底面が10㎝程度低く下げられているのが認められたが，当初，このくぼみは石組部南壁の礫が欠損していることより礫の抜き取り痕と判断していた。しかし，複式炉の南側に位置する土坑状のくぼみとの関係を考慮に入れると，現況の複式炉が構築される以前の炉体土器の掘形であると考えられ，土坑状のくぼみは石組部の石器を除去した痕跡と判断した。古い段階での石組部の痕跡は長軸70㎝，短軸50㎝である。床面からの深さは約20㎝を測る。土坑状のくぼみは４層に分層される。堆積土はℓ２～４は暗褐色土及び褐色土であり，現況の複式炉使用時にはすでに埋められていた可能性が高い。

主柱穴　主柱穴はＰ１～３の３個である。Ｐ１は複式炉の北，Ｐ２・３は複式炉を挟んだ東西にある。

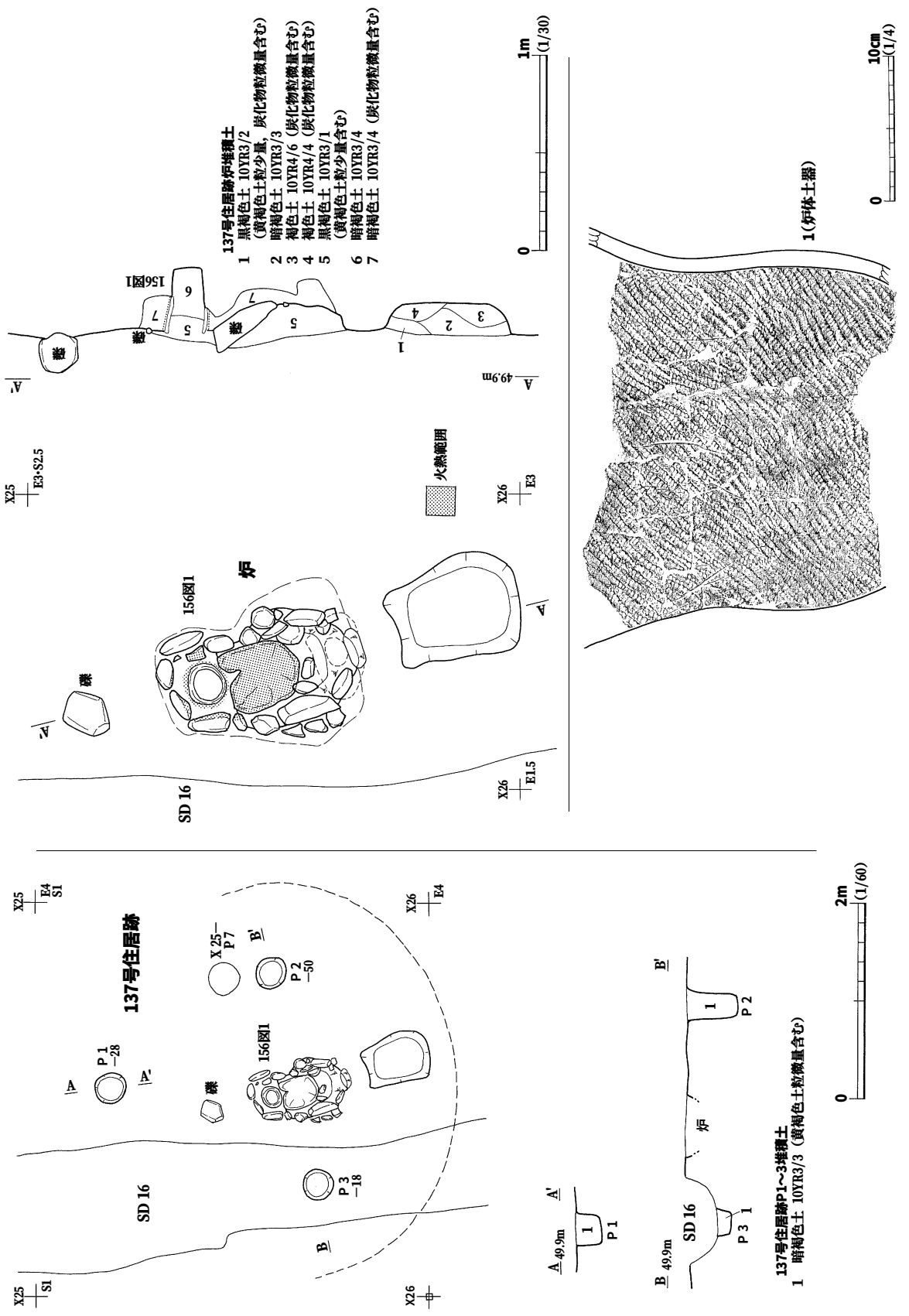


図156　137号住居跡と出土遺物

Ｐ１は複式炉の長軸線上より15°Eに位置する。平面形は直径34㎝の円形で，床面からの深さは28㎝である。Ｐ２は複式炉東に位置し，直径33㎝の円形で，床面からの深さは50㎝を測る。Ｐ３は複式炉の西側に位置しているが，16号溝跡により大きく破壊されている。残存状況での平面形規模は直径33㎝，深さ18㎝である。Ｐ１－Ｐ２間は2.1m，Ｐ２－Ｐ３間は2.3m，Ｐ３－Ｐ１間は2.4mを測る。いずれの主柱穴内堆積土も暗褐色土１層のみである。その他のピットは検出できなかった。

遺物出土状況　検出時にすでに床面が露出している状況であり，床面上からの遺物の出土は認められなかった。

遺物　炉体土器の他に土器は出土しなかった。炉体土器を156図１に示した。口縁部と底部が欠損した深鉢形土器で，体部中位でくびれる器形である。外面には全面に斜縄文が施文されている。

まとめ　本遺構は複式炉１基，３個の主柱穴が確認された住居跡である。堆積土はすでになく，床面及び複式炉が露出している状態であった。16号溝跡により本住居跡の西側床面は大きく破壊されている。３本の主柱穴をもつ住居跡であったと推測される。複式炉北側には立石が置かれ，長軸線を意識している。石組部の南壁は欠損しており，本住居廃棄時に抜き取っていると推測される。現況の炉の南側には土坑状の落ち込みがあり，複式炉の前庭部や複式炉の造り替え以前の炉跡の可能性が高い。本遺構の機能していた時期は，炉体土器及び複式炉の形態などから縄文時代中期末葉と推測される。　（三　浦）

138ａ・ｂ号住居跡　ＳＩ138ａ・ｂ（図157～159，写真105・106）

位置・検出面　北区南東部の平坦面，ＡＡ・ＡＢ35・36グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北東側には1201・1206号土坑，南東側には1204号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，暗褐色土で埋まった径7.5m程の不整な円形の輪郭を検出した。北東部は削平により床面が一部露出していた。調査の結果，建て替えの際に住居跡を拡張し，主柱穴が造り替えられていることが確認された。以下では，建て替え以後の新しい住居跡を138ａ号住居跡，建て替え以前の古い住居跡を138ｂ号住居跡として報告する。

重複　18号溝跡，1128号土坑と重複し，いずれよりも138ａ号住居跡が古い。

138ａ号住居跡　ＳＩ138ａ（図157・158，写真105・106）

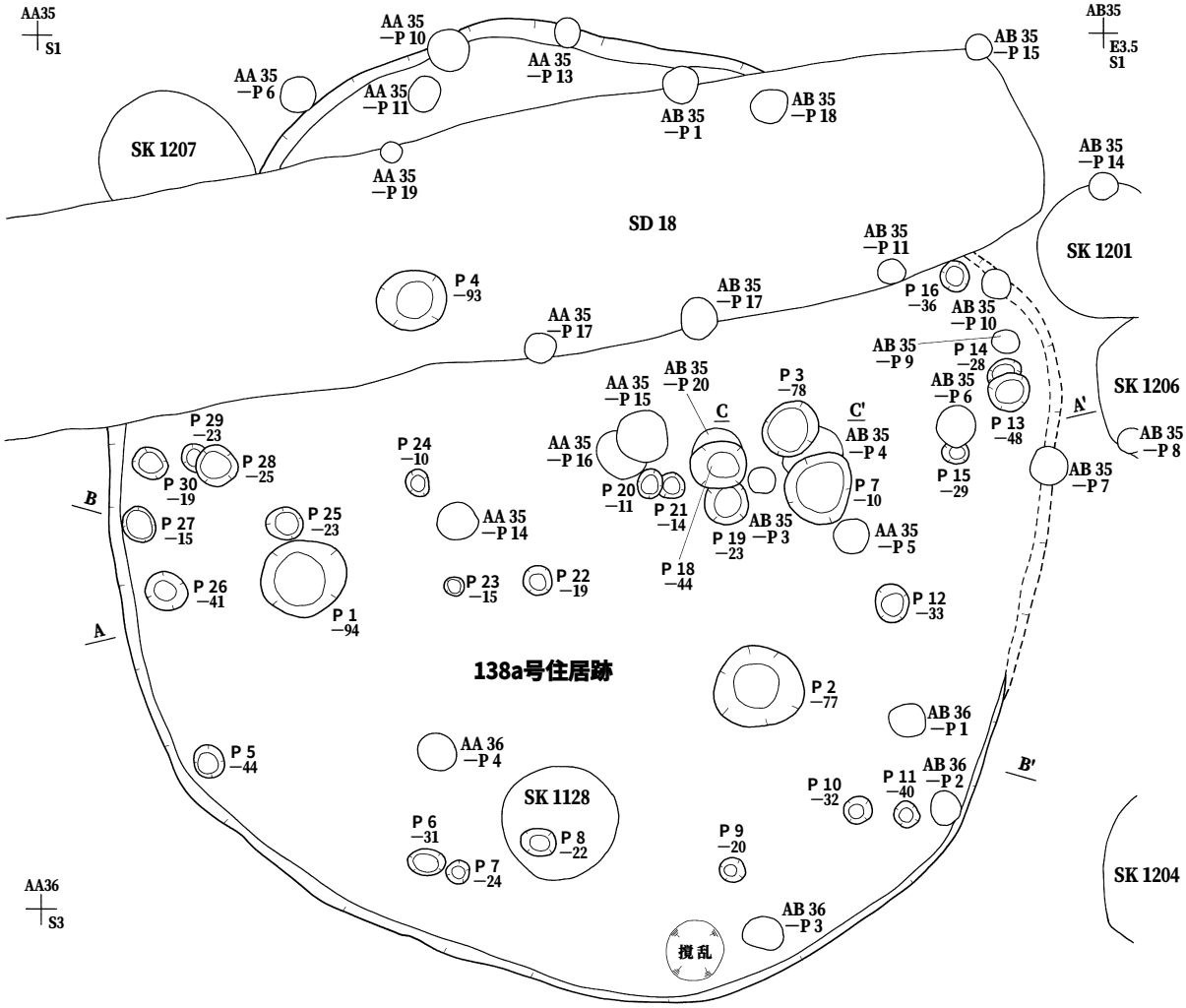
堆積土　２層に分層した。両層とも周壁からの流れ込みの堆積状況が確認できたため，自然堆積土と考えられる。

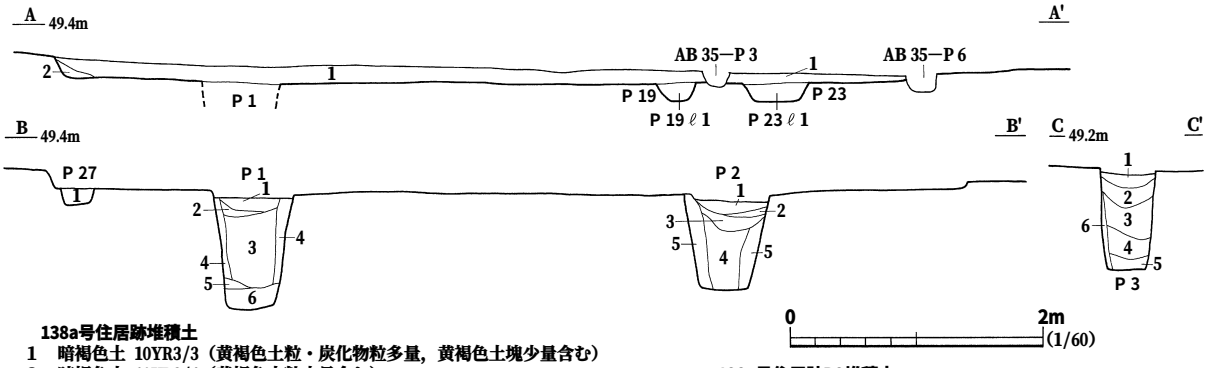
平面形・規模　北西・南東方向に長い不整な隅丸長方形である。長軸方向はＮ73°Ｗであり，その規模は現状の壁上端で長軸の北西・南東長7.4m，短軸の北東・南西長7.3mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。

周壁　床面から50～65°のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は３～19㎝を測る。北東壁・北西壁・南東壁の一部は18号溝跡と削平によって壊され，遺存していない。

主柱穴　主柱穴はＰ１～４の４個である。Ｐ１・４，Ｐ２・３は長軸方向の中軸線を挟んだ北東・





138a号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒多量，黄褐色土塊少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）

138a号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黒褐色土粒・黄褐色土粒・黄褐色土塊少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
4　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・塊多量含む）
5　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量，炭化物粒多量含む）
6　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）

138a号住居跡P2堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒多量，炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
5　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

138a号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・塊・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒多量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
5　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
6　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

138号住居跡P19堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒多量，炭化物粒少量含む）

138号住居跡P23堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

138号住居跡P27堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）

図157　138ａ号住居跡

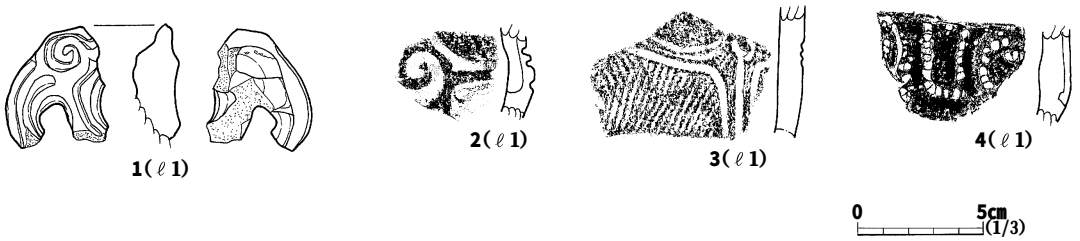


図158　138ａ号住居跡出土遺物

南西に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が3.7m，Ｐ２－Ｐ３間が2.1m，Ｐ３－Ｐ４間が3.1m，Ｐ１－Ｐ４間が2.4mと，全体的に北西・南東方向に長い長方形の配置となっている。現状の平面形は不整な円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が径68㎝，深さ94㎝，Ｐ２が径72㎝，深さ77㎝，Ｐ３が長径47㎝，深さ78㎝，Ｐ４が径56㎝，深さ93㎝を計測する。調査の不備で堆積土が不明なＰ４を除き，Ｐ１～３には版築が認められる。Ｐ１は版築の状態から，柱が柱穴底面に接地せず，底面から約20㎝上位に据えられていたと判断できる。よってＰ１は，底面がＰ２・３に比べ約20㎝深いが，ほぼ同規模の深さを呈した柱穴といえる。Ｐ２は東側に抜き取り痕が認められる。柱穴内の堆積土は流れ込みの様相を呈していたので，柱が抜き取られた後に自然埋没したと考えられる。Ｐ１・３の抜き取り痕は判然としなかったが，堆積土から柱を抜き取った後で自然埋没したと推定される。

ピット　主柱穴の他に小さいピットが26個(Ｐ５～30)ある。建て替えが行われ，これらのピットが新旧いずれの住居跡に伴うものか判然としないため，合わせてここに報告する。Ｐ５～７・11・13・14・16・26・27・30は周壁近くに配置されていることから，壁柱穴と考えられる。規模は径18～34㎝，深さ15～48㎝を測る。他のピットの用途は不明である。

遺物出土状況　堆積土中から縄文土器59点，土師器１点，石器２点，鉄滓１点が出土した。

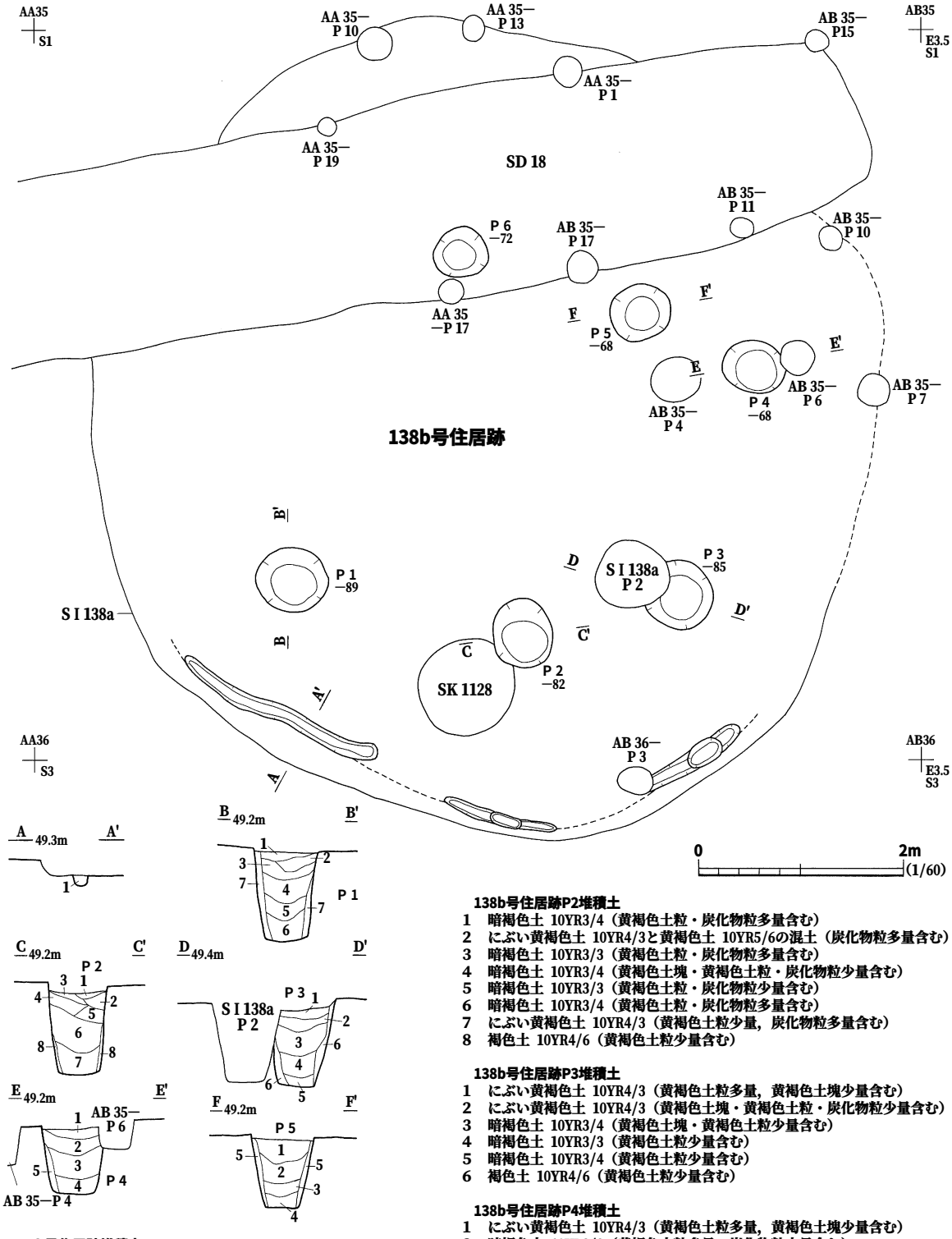
遺物　158図に縄文土器を示した。158図１は深鉢の口縁部破片で，橋状突起上に渦巻文が施文されている。同図２は深鉢の口縁部破片で，３・４は深鉢の胴部破片である。２・３には沈線で渦巻文が，４には隆帯と押し引き沈線で楕円区画文が施されている。

まとめ　本住居跡は建て替え以後の住居跡である。北西・南東方向に長い長方形に４本の主柱穴が配置され，掘形内を版築して柱が建てられている。炉は検出されなかった。本住居跡は建て替えの際に南・北西方向に向けて拡張され，主柱穴が６本から４本に造り替えられている。また，廃絶の際に柱が抜き取られ，竪穴は自然埋没したと考えられる。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期中葉の大木８ｂ式期と考えられる。

138ｂ号住居跡　ＳＩ138ｂ（図159，写真105・106）

堆積土　本住居跡に伴う周溝部にのみ確認できた。ℓ１は暗褐色土で，自然堆積土と考えられる。

平面形・規模　南東コーナー部から南西コーナー部にかけての周壁の内側を巡る周溝から，前述した138ａ号住居跡は，建て替えの際に南に向けて８～34㎝程拡張されたと推定される。また，主柱穴の配置から北西部も拡張が行われたと推察される。よって，本住居跡の平面形は不明だが，規模



138b号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）

138b号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒多量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
5　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
6　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
7　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

138b号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒多量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
4　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊・黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
5　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
6　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
7　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒少量，炭化物粒多量含む）
8　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

138b号住居跡P3堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒多量，黄褐色土塊少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土塊・黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊・黄褐色土粒少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
5　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）
6　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

138b号住居跡P4堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒多量，黄褐色土塊少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒多量，炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
4　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
5　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

138b号住居跡P5堆積土
1　にぶい黄褐色土（黄褐色土粒多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒多量，炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒・炭化物粒多量含む）
5　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

図159　138ｂ号住居跡

は138ａ号住居跡より小さいと考えられる。

床面　138ａ号住居跡と同一床面と判断している。

周壁　建て替えに伴う拡張で南壁と北西壁は壊され，遺存していない。それ以外の周壁については138ａ号住居跡と同一であるのかは不明である。

周溝　南東コーナー部から南西コーナー部にかけての周壁の内側に，途切れながらも溝が巡るのが確認された。上端幅は10～22㎝，床面からの深さは３～20㎝を計測する。

主柱穴　主柱穴はＰ１～６の６個である。Ｐ１・６，Ｐ２・５，Ｐ３・４は138ａ号住居跡の長軸線を挟んで北東側と南西側に位置している。北西・南東方向の各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.3m，Ｐ２－Ｐ３間が1.6m，Ｐ４－Ｐ５間が1.2m，Ｐ５－Ｐ６間が1.9mで，北東・南西方向の各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ６間が3.5m，Ｐ２－Ｐ５間が3.3m，Ｐ３－Ｐ４間が2.3mを測る。Ｐ３がやや北東寄りではあるが，全体的に北西・南東方向に長い長方形を意識して主柱穴を配置しているものと推察される。現状の平面形は不整な円形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ１が径70㎝，深さ89㎝，Ｐ２が長径66㎝，深さ82㎝，Ｐ３が径66㎝，深さ85㎝，Ｐ４が長径60㎝，深さ68㎝，Ｐ５が径60㎝，深さ68㎝，Ｐ６が径53㎝，深さ72㎝を計測する。長軸線を挟んで南西側に位置するＰ１～３の方が，北東側に位置するＰ４～６より17～29㎝深く造られている。調査の不備で堆積土が不明なＰ６を除き，いずれも版築が認められる。また，建て替えの際には柱を抜き取り，柱穴を埋めたと推察される。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

まとめ　北西・南東方向に長い長方形に近い配置で，６本の主柱穴が認められる。炉は検出されていない。建て替えの際には柱を抜き取り，柱穴を埋めたと推察される。本住居跡の帰属時期は遺物が出土しておらず判然としないが，さほど時間をおかずに建て替えられたものと考え，138ａ号住居跡と同じ縄文時代中期中葉としたい。　（坂　田）

140 号 住 居 跡　ＳＩ140 （図160，写真107・108）

位置・検出面　北区北側寄りのＴ・U23グリッドに位置する。遺構検出時に土師器片が出土する焼土面が確認され，焼土面の南側からは黒褐色土や暗褐色土が堆積したピット４個を検出した。検出した位置や土色から焼土面と同一の施設と判断した。焼土面は住居内に設けられた焼土集積層である。本遺構の検出面はＬⅣ上面である。

重複　周囲には多数の土坑が検出されているが，本住居内施設の遺存状況では各土坑との重複関係は不明である。

平面形・規模　遺存状況が悪く，平面形・規模ともに不明である。焼土集積範囲が確認できたピットよりも南に位置する。カマド燃焼面の北端からＰ２の南端まで2.7m，Ｐ３の東端からＰ２の西端まで1.3mを測る。

床面　おそらく基本土層のＬⅣに形成されていたものと考えられる。住居跡の床面はすでに削平さ

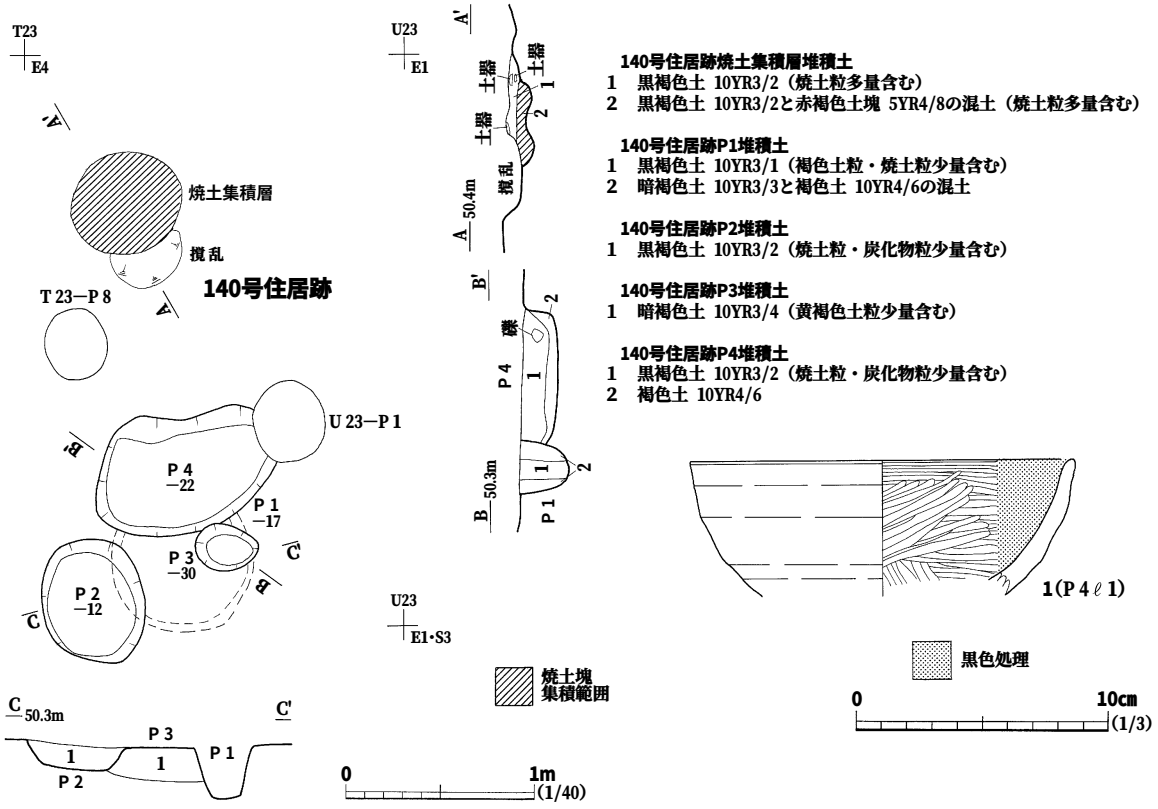


図160　140号住居跡と出土遺物

れていた状態であった。周溝は確認できなかった。

焼土集積層　焼土面のみの検出である。焼土面は長径60cm，短径52cm程遺存しており、円形を呈する。焼土面上からは土師器片が出土している。焼土面内堆積土は２層確認できた。ℓ１は焼土粒を多量に含んだ黒褐色土である。ℓ２は黒褐色土を主体とし，赤褐色土や焼土粒を多量に含んだ混土である。

ピット　４個確認できたが，検出時点ですでに床面下は失われており，いずれも床面下に構築されていた可能性がある。検出された４個のピットは不揃いである。Ｐ３は長径34cm，短径23cm，深さ30cmを測る。各ピットは重複し，Ｐ３よりもＰ１・２・４は新しい。Ｐ１は径75cm，深さ17cmを測る。Ｐ２は長径68cm，短径55cm，深さ12cmを測る。Ｐ４は不整長方形状で東側の一部はU23グリッドＰ１により壊されている。長径98cm，短径70cm，深さ22cmを測る。

遺物出土状況　焼土集積層及びＰ４ℓ１から出土している。

遺物　Ｐ４より出土した土師器杯を160図１に示した。ロクロ成形で作られ，内面には黒色処理を施し丁寧なミガキ調整がされている。

まとめ　本遺構は後世の撹乱・削平を受け，極めて遺存状況が悪い。検出時にすでに住居跡としての大半の施設は破壊され，主な住居内施設は検出されず，焼土集積層とピット４個を確認したのみである。残存部位が非常に少なく，住居の機能や性格を判断することができなかった。本遺構が機能していた時期は，出土遺物の土師器杯から平安時代であろう。　（三　浦）

142 号 住 居 跡　ＳＩ142 （図161～165，写真109・110・358）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｐ・Q40・41グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北東側には1234・1254号土坑，南側には1178号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，暗黄橙色土で埋まった直径3.0m程の不整円形の輪郭を検出した。検出時はすでに，床面上に遺棄された土器の一部が露出した状態であった。

重複　66号住居跡，1179号土坑と重複し，それよりも古い。また，後述するように新旧２時期の柱穴と壁面の一部及び複式炉の改修が認められたため，本住居跡は建て替えられた可能性が高い。

堆積土　ℓ１・２は，基本土層のＬⅢ・Ⅳに類似した褐色系の土を基調としている。両層とも黄褐色土の小塊を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積土と考えられる。したがって，本住居跡は住居廃絶後，人為的な投棄土により埋没したものと考えられる。

平面形・規模　円形に近い不整な隅丸方形である。南東側の一部は，66号住居跡によって壊されていた。竪穴の規模は，現状の壁上端で一辺5.6mを測る。竪穴の中軸線はN96 ℃Wで，ほぼ東西方向を指している。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。複式炉の周辺から北壁にかけての広い範囲が非常に硬く締まっていた。

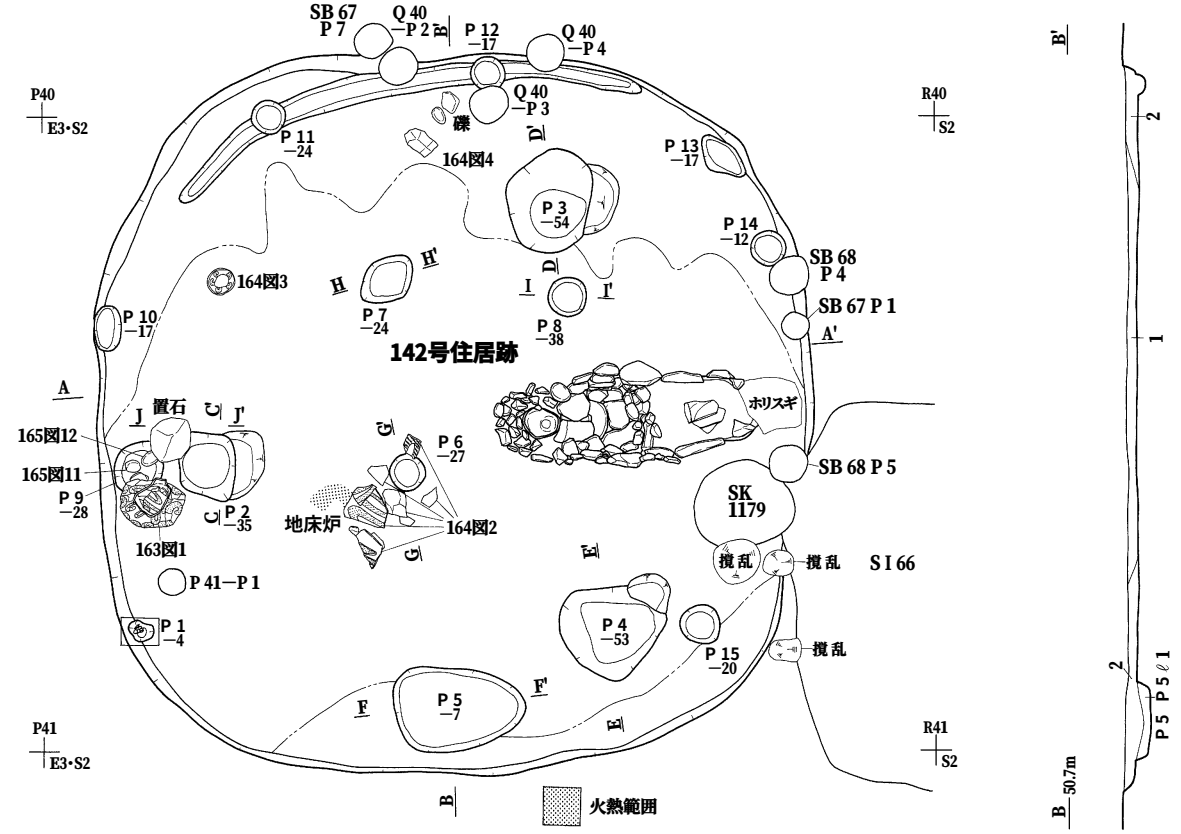
周壁　床面から51～69 ℃のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は９～16㎝を測る。東壁の一部は66号住居跡によって壊されていた。

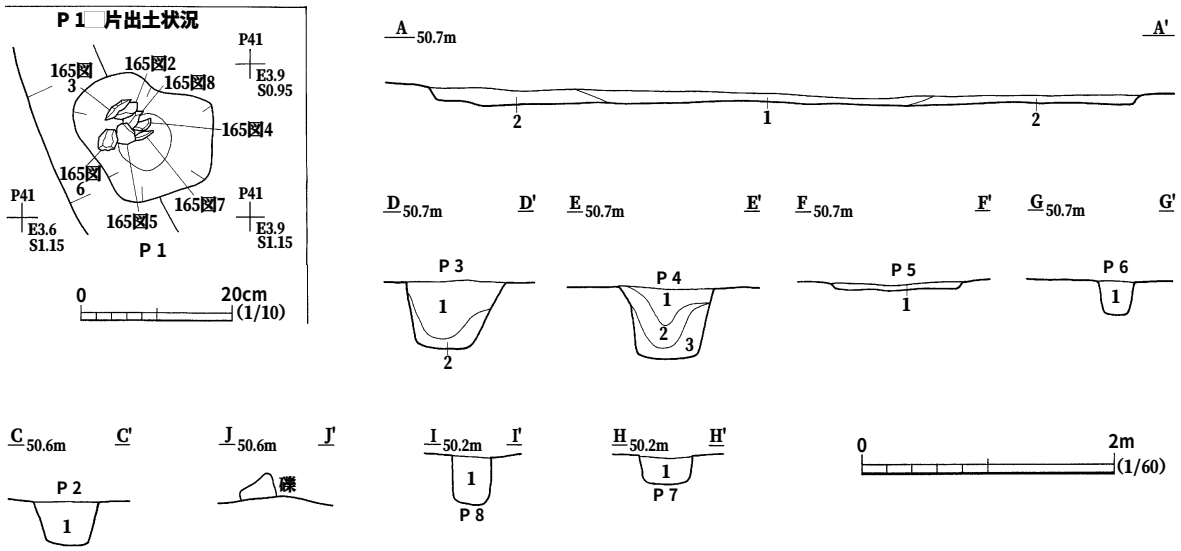
周溝　北東コーナー部から北西コーナー部にかけて小溝が確認された。東半分は北壁に沿っているが，西半分は北壁から最大20㎝程離れている。したがって，本住居跡の北西コーナー部は改修された可能性がある。周溝の上端幅は12～22㎝，床面からの深さは３～13㎝を計測する。堆積土は混土であるため，人為的に埋められたものと判断している。

複式炉　複式炉は床面の東側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。炉は人為堆積土によって埋没しており，遺存状態は良好であった。円形状の土器埋設部に台形状の石組部，さらに長方形状の前庭部が続く形態を呈している。前庭部の東側は誤って掘り過ぎてしまった。複式炉の構築順序は「炉体土器埋設・石組部底石設置→土器埋設部縁石設置・石組部側壁構築」である。

（規模）全長が推定約210㎝，最大幅が83㎝を測る。炉の長軸は東西方向であり，炉の中軸線はN93 ° Wで，ほぼ東西を示している。

（堆積土）ℓ１・２は石組部と前庭部を埋める堆積土である。ℓ１は混土，ℓ２は基本土層に見られない黄橙色土を基調としているため，いずれも人為堆積土と考えられる。炉体土器の中にはℓ３・４の２層が認められた。ℓ３は炭化物を撹はんしたような状態で含み，ℓ４は炉体土器の底部に溜まった漆黒色の粘質土である。両層とも使用時に堆積したものと推察される。ℓ４は炉体土器の内面底部に付着し，土器内面が黒褐色を呈していた。ℓ５は後述する石組部の改修に伴い，古い石組部の中に投入された修築土である。ℓ６～９は土器埋設部と新しい石組部の掘形堆積土，ℓ10は古





142号住居跡堆積土
1　にぶい黄橙色土 10YR7/4と明黄褐色土 10YR6/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR5/3と明黄褐色土 10YR6/6の混土

142号住居跡P2堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

142号住居跡P3堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

142号住居跡P4・5堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と明黄褐色土 10YR6/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と明黄褐色土 10YR6/6の混土
3　明黄褐色土 10YR6/6と明黄褐色土 10YR6/6の混土

142号住居跡P6・7堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2と明黄褐色土 10YR6/6の混土

142号住居跡P8堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と暗褐色土 10YR3/4の混土

図161　142号住居跡

い石組部の掘形堆積土である。

(土器埋設部)開口部の直径37㎝の炉体土器に接して長さ15㎝前後の楕円礫や角礫を敷き，その外側に長さ20㎝前後の直方体状の礫を並べ縁石としている。東西方向の長さは約50㎝で，炉体土器周辺の土は強く焼土化している。

(石組部)掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面とし，その上に板状の礫と拳大の礫を積み上げて外傾する側壁を造っている。前庭部側の壁は１回改修されたらしく，新しい石組みの下から古い石組み部の礫が確認された。土器埋設部との間には特に大型の板状の礫が用いられている。石組部の最大幅は83㎝，東西方向の長さは75㎝を測る。礫は表面に強い火熱を受けてもろくなったものが多い。なお，凹石３点と石皿１点が構築礫として転用されていた。

(前庭部)側壁が直立する箱形状を呈し，石組部に接する両側縁に偏平な礫を立て並べて縁石としている。北側の側壁には，礫の代わりに明黄褐色の粘土塊を設置した部分もある。規模は最大幅65㎝，東西方向の長さ85㎝を測る。底面は踏み締められたように硬化していた。

地床炉　複式炉の土器埋設部から西に約1.4m離れた床面上で確認された。複式炉の中軸線上からは，やや南にずれた位置にあたる。床面が直接熱を受け，東西30㎝，南北20㎝の狭い範囲が薄く赤変していた。熱変化を受けた部分は，床面から２㎝の深さに及んでいる。

主柱穴　主柱穴はＰ２～４の３個である。Ｐ２は西壁際，Ｐ３・４は複式炉を挟んだ南北に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ２－Ｐ３間が3.4m，Ｐ３－Ｐ４間が3.3m，Ｐ４－Ｐ２間が3.5mとほぼ等しく，正三角形の配置となっている。各柱穴の現状の平面形は不整な方形もしくは台形で，断面形はU字状を呈している。規模は，Ｐ２が南北52㎝，東西44㎝，深さ35㎝，Ｐ３が南北80㎝，東西68㎝，深さ54㎝，Ｐ４が南北74㎝，東西82㎝，深さ53㎝を計測する。複式炉の両脇に配置されたＰ３・４は，特に深くしっかり造られている。なお，いずれも東側に抜き取り痕が認められ，内部の堆積土には基本土層のLIVに近い黄褐色土の小塊が数多く含まれていることから，柱を抜き取った際に柱穴掘形の上端を掘り広げたか，もしくは，掘形上端が崩落したものと考えている。

ピット　主柱穴の他に，小さいピットが11個，土坑状の浅いくぼみが１個ある。Ｐ６～８は床面のほぼ中央に位置し，複式炉の土器埋設部を取り囲むように並んでいることから，上屋の煙出しに関係する補助柱穴と推測している。規模は径28～46㎝，深さ24～38㎝である。Ｐ10～15は周壁近くに配置されていることから，壁柱穴と推察される。規模は径20～44㎝，深さ12～24㎝を測る。Ｐ１は径30㎝，深さ４㎝の不整な円形を呈した小ピットで南西コーナー部の壁際で検出された。その底面からは，図161の左下に示したように７点の剝片がまとまって出土し，そのうち５点は，丁寧に重ねられた状態であった。したがって，Ｐ１は剝片の貯蔵用に設けられたピットと考えられる。Ｐ９はＰ２と西壁の間に造られ，ちょうど複式炉の中軸線の延長上に位置している。底面には角礫１個と凹石２個が置かれており，人為的に埋められていた。また，周囲には置石や床面に伏せた状態で遺棄された深鉢形土器も認められたため，Ｐ９は何らかの祭祀的な役割を担っていたものと推察される。Ｐ５は南壁付近で確認された不整楕円形を呈する浅い土坑で，長径100㎝，短径66㎝，深さ

７㎝を計測する。用途は不明である。

遺物出土状況　床面及び複式炉やピットの底面から出土したのは，縄文土器片35点，石器18点である。163図１，164図３に示した２点の縄文土器は，口縁部を床面に密着させて，伏せた状態で出土した。複式炉の前庭部底面からは164図１が出土した。この他，堆積土中から縄文土器片132点，石器８点，鉄滓１点が出土した。鉄滓は検出面付近から出土しているため，本住居跡に伴うものではないと考えている。

遺物　162～164図に縄文土器を示した。162図１は炉体土器である。胴下部が膨らむ深鉢形土器で，胴上部から口縁部にかけては欠損している。文様は胴上部に縄文帯で施文されているが，具体的な図形は不明である。文様を描出する沈線には，ミガキ調整が加えられている。地文はＬＲの単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。

163図１は，ほぼ完形に復元された大型の深鉢形土器で，口縁部が４単位の波状口縁をなし，胴下部が若干膨む器形である。口縁部の断面形は，やや内湾している。文様は，口縁直下に形成された幅の狭い口縁部文様帯と，胴上部から下部にかけて形成された幅広い胴部文様帯からなる。口縁部文様帯には，逆「の」字状の文様と楕円形区画が沈線で描かれる。波状口縁の波頂部下には逆「の」字状の文様が位置し，その間に楕円形区画が配置されている。胴部文様帯には，沈線区画の縄文帯でＳ字状のアルファベット文が描かれている。このＳ字状の文様は，隣接するものが背中合わせになるように描かれ，さらに互いの文様下部が連結している。地文はＲＬの単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。

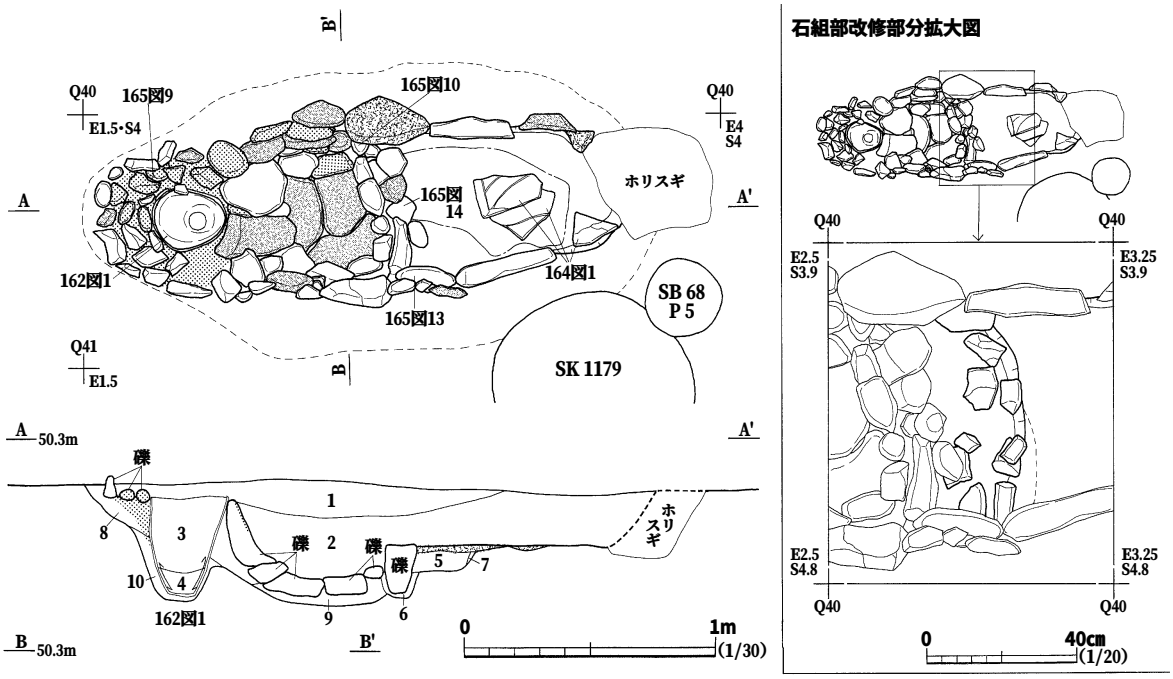
163図２～10は炉内出土の破片資料で，７と10は同一個体である。２～８・10には沈線区画による縄文帯で，９には稜線区画による無文帯で文様が描かれている。具体的な図形は不明である。地文は２・３・６がＲＬの原体，４・８・９がＬＲの原体で単節斜縄文が施され，７・10には１段撚りＲＬの原体による無節斜縄文が施されている。

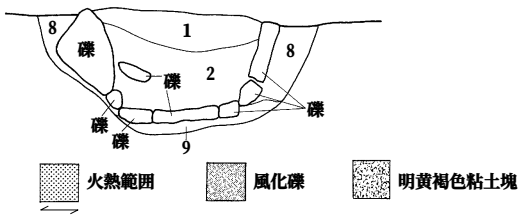
164図１はキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁直下には稜線で区画された無文部が巡り，胴上部には稜線で大きな渦巻文が描かれている。この両者の接する部分には，縦長の粘土瘤が認められる。地文はＬＲの原体を使用した単節斜縄文である。

164図２は胴上部が外反する器形の深鉢形土器である。口縁部と胴下部は欠損している。文様は沈線区画の縄文帯による逆Ｕ字状のアルファベット文と，沈線による楕円形区画及びＳ字状の文様である。地文はＬＲの原体を使用した単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。

164図３は胴上部から口縁部にかけて外反気味に開く器形の深鉢形土器で，胴下部が欠損している。文様は口縁直下に沈線が１条巡り，胴上部には沈線区画の縄文帯でＳ字状のアルファベット文が描かれている。地文はＬＲの単節斜縄文で，文様間は丁寧に磨り消されている。

164図４は口縁部が波状口縁を呈し，胴下部が膨らむ器形の深鉢形土器である。文様は口縁直下に形成された幅の狭い口縁部文様帯と，胴上部に形成された幅広い胴部文様帯に描出されている。口縁部文様帯の上端にあたる口縁直下には，沈線が１条巡り，波状口縁の波頂部下には，縦長の粘





142号住居跡炉堆積土

1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と暗褐色土 10YR3/4の混土
2　にぶい黄橙色土 10YR6/4
3　にぶい黄褐色土 10YR5/4（炭化物粒少量含む）
4　黒色土 10YR2/1
5　明黄褐色土 10YR6/6（修築部分の掘形堆積土）
6　にぶい黄褐色土 10YR5/3（修築部分の石組部掘形堆積土）
7　にぶい黄褐色土 10YR5/4と暗褐色土 10YR3/3の混土
（修築前石組部掘形堆積土）
8　にぶい黄褐色土 10YR5/3と暗褐色土 10YR3/3の混土（石組部掘形堆積土）
9　明黄褐色土 10YR6/6と黄褐色土 10YR5/6の混土（石組部掘形堆積土）
10　にぶい黄橙色土 10YR7/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（土器埋設部掘形堆積土）

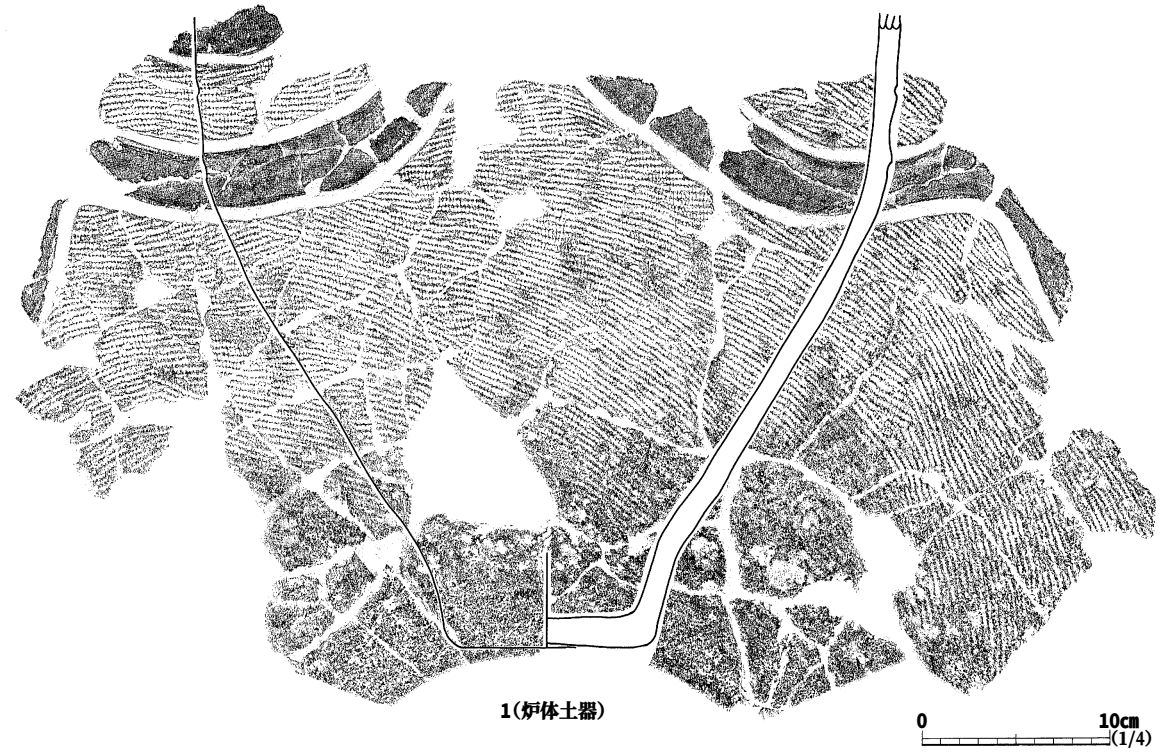


図162　142号住居跡炉と出土遺物(1)

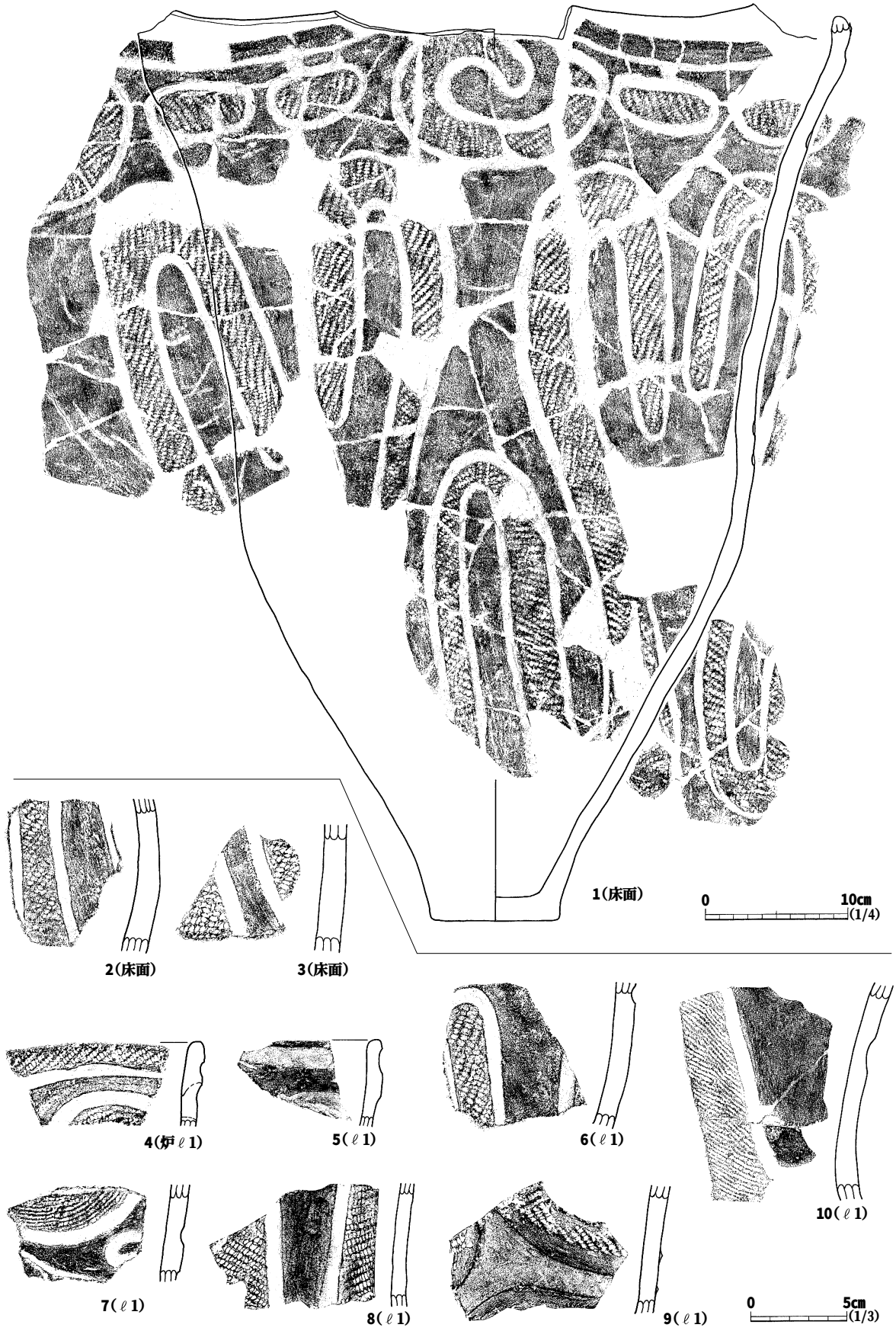


図163　142号住居跡出土遺物(2)

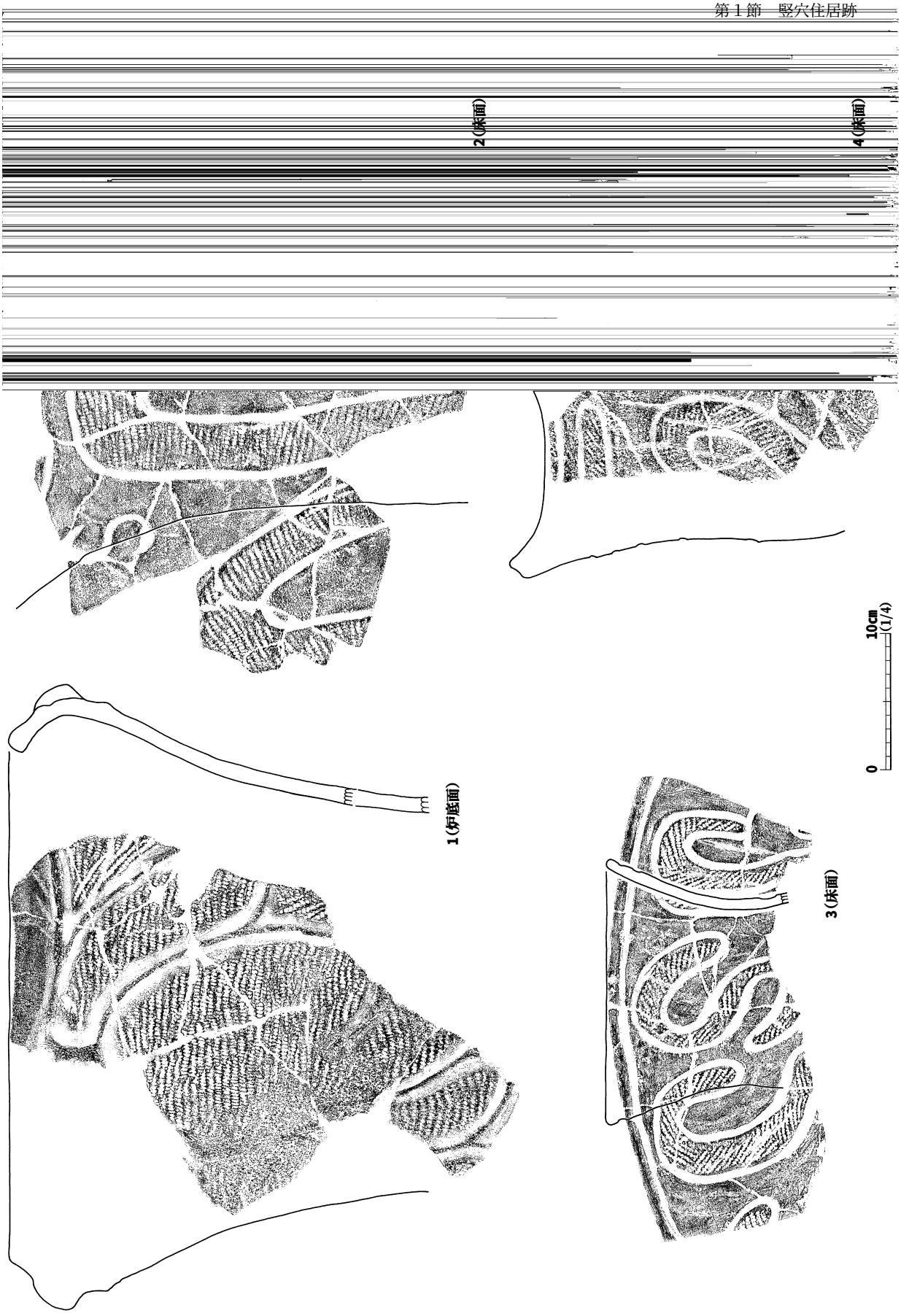


図164　142号住居跡出土遺物(3)

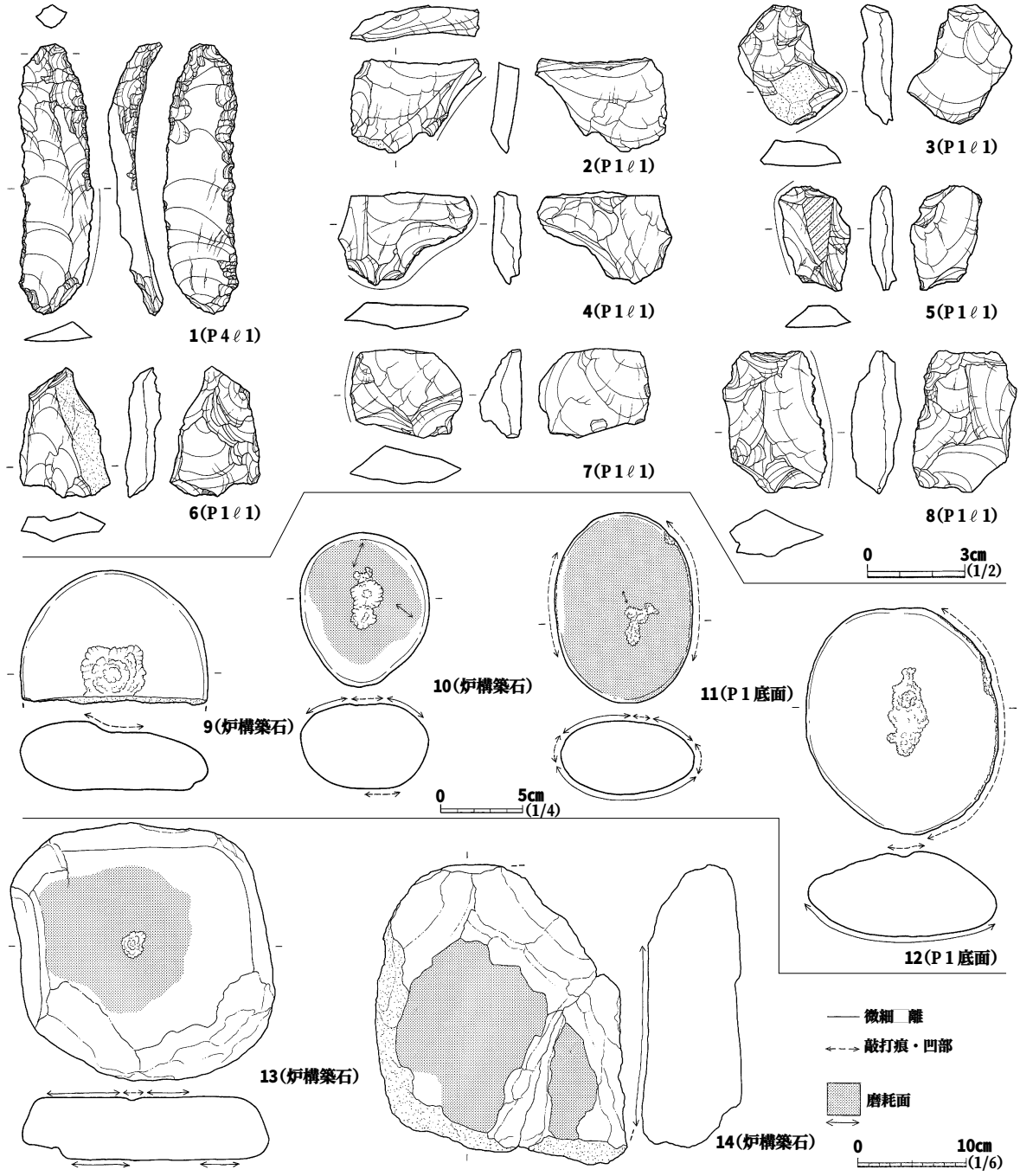


図165　142号住居跡出土遺物(4)

土瘤が貼付されている。それ以下の口縁部文様帯には，沈線区画の縄文帯による丸味を帯びたＵ字状の文様と楕円形区画が描かれ，前者が波頂部下，後者がその間に配置されている。一方，胴部文様帯には，縄文帯で描かれた横Ｓ字状の文様が横方向に連続している。この胴部文様帯の下には波状の沈線が施され，底部付近の地文域と明瞭に区分されている。地文はＬＲの原体による単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。

165図１～14に石器を示した。１は，珪質頁岩製の縦長剝片を素材とした石匙である。素材となった剝片の末端は，ウートラパッセ状を呈するため，側面観が弓形に湾曲している。素材剝片の末

端部に背腹両面から調整を加えて，基部を作り出している。素材の打面部は二次加工により除去されている。背面右側縁下部の未加工のまま残された縁辺部には微細剝離痕が連接している。２～８は，Ｐ１から出土した剝片である。すべてチャート製で，石質等の観察から３～５・７・８の５点は同一の母岩から剝がされた資料の可能性が高い。２～５・７・８では縁辺部に微細剝離痕が観察され，６の腹面右側縁には調整剝離が加えられている。９～12は磨石類である。器面中央には凹部が観察された。９は砂岩，10は斑状の流紋岩，11・12は粗質の花崗岩を素材としている。13・14は石皿類で扁平礫の平滑面を未加工のまま利用している。表面には，部分的に磨耗痕が観察された。13は粗質の流紋岩，14は花崗閃緑岩を素材としている。

まとめ　定型化した複式炉と，正三角形に配置された３個の主柱穴を有している。複式炉の中軸線は，ほぼ東西方向を示しており，その延長線を意識したような位置に地床炉，置石，ピット（Ｐ９）などが配置されていた。本遺跡では，複式炉の長軸を南北方向にもつ住居跡が多く，本住居跡のように東西方向に長軸をもつものは少ない。廃絶に際しては，深鉢形土器を床面に伏せて置き，柱を抜き取った上で，複式炉及び住居跡全体を埋めており，祭祀的な行為が行われた可能性がある。出土した縄文土器の中には，中通り地方南部や関東地方に見られる資料が多く含まれている。本住居跡の帰属時期は，炉体土器や床面出土土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と推察される。　（小　暮）

143 号 住 居 跡　ＳＩ143 （図166・167，写真111・112・358）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｑ・Ｒ40・41グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の西側には142号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，暗黄褐色土で埋まった東西に細長い不整な長方形状の輪郭を検出した。本遺構の南東側は削平を受けており，検出時はすでに床面が露出した状態であった。また，南西側には66号住居跡が重複し，本住居跡の半分以上を大きく破壊している。

重複　66号住居跡，71号建物跡より古く，145号住居跡より新しい。

堆積土　ℓ１は２種類以上の土が撹はんされたように混じり合う混土であり，ℓ２は層の上面が波打って堆積している状態が確認された。したがって，本住居跡の大部分は，人為堆積土によって埋没したものと推察される。ℓ３は，後述する貼床土である。

平面形・規模　66号住居跡によって切られているため，本来の平面形と規模は不明である。現状で確認できた遺構の範囲は，北側から東側にかけての周壁付近のみである。遺存する平面形状から推測すると，東西方向に長い不整な台形を呈していたものと考えられる。推定される中軸線は，N77°Wである。規模は，現状の壁上端で南北遺存長3.2m，東西遺存長4.8mを測る。

床面　掘形の底面に黄褐色系の混土ℓ３を貼り，その上を床面にしている。若干の凹凸が認められるが，ほぼ平坦な状態であった。床面の大部分は硬化していた。

周壁　床面から72°のやや急な角度で立ち上がる。遺存壁高は北壁で４～14㎝，東・西壁で約５㎝

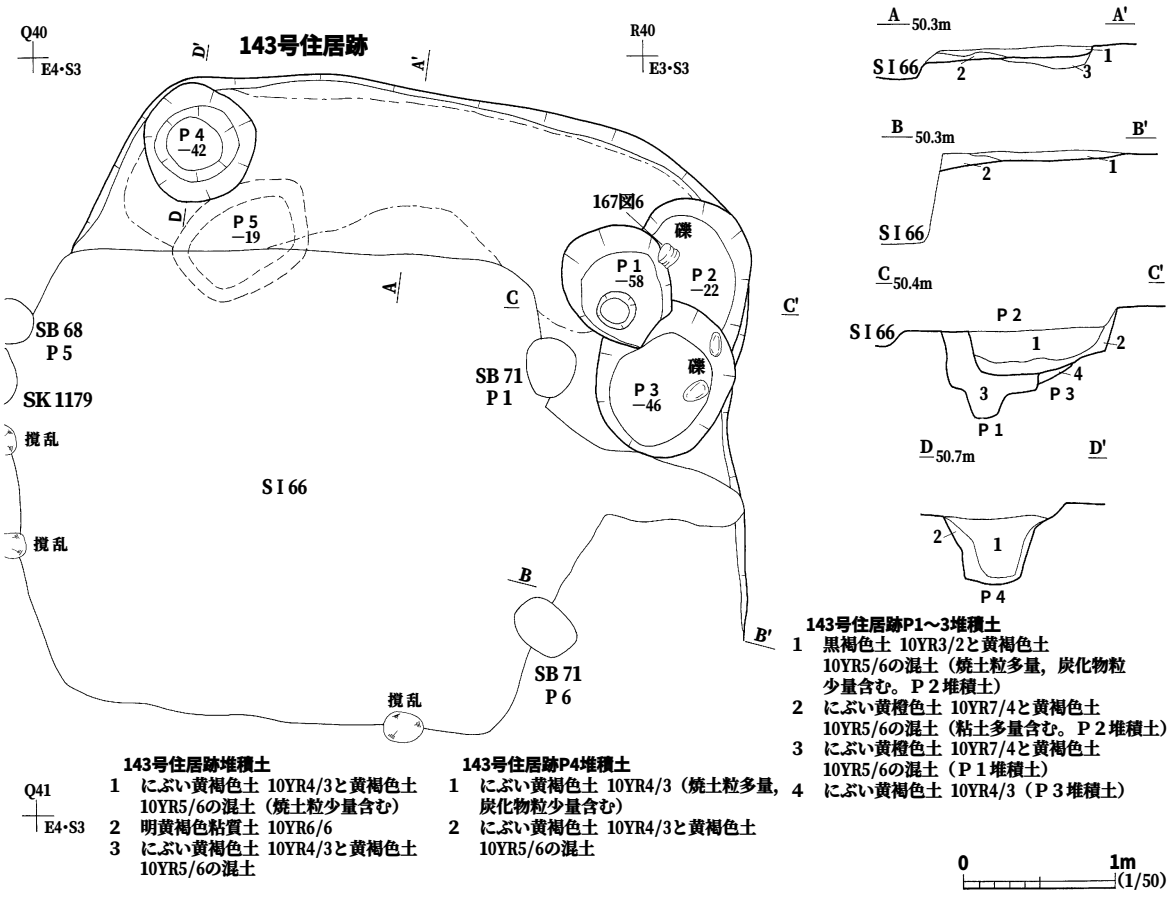


図166　143号住居跡

を計測する。南壁は削平され，遺存していなかった。

ピット　貯蔵穴と考えられるピットが北東コーナー部に３個，北西コーナー部に１個存在する。北東コーナー部にはＰ１～３が重複して構築されていた。新旧関係は古い順に，Ｐ３→Ｐ１→Ｐ２である。平面形はいずれも不整な楕円形で，規模は，Ｐ１が長径76cm，短径70cm，深さ58cm，Ｐ２が南北遺存長68cm，東西遺存長68cm，深さ22cm，Ｐ３が長径102cm，短径90cm，深さ46cmを測る。各ピットとも底面は平坦である。Ｐ１の底面には，直径23cm，深さ15cmを測る円形の小ピットが掘り込まれていた。堆積土はＰ１・２が混土，Ｐ３が基本土層にない暗黄褐色土であるため，いずれも人為的に埋められた可能性が高い。

Ｐ４は北西コーナー部に単独で存在した。平面形は円形で，規模は現状上端の直径が74cm，深さ42cmを計測する。断面形は開口部が広がるビーカー状を呈している。堆積土は，ℓ１が焼土や炭化物を撹はんしたように含む暗黄褐色土，ℓ２が混土であるため，人為的に埋められたものと考えられる。

Ｐ５は貼床の下で検出された床下ピットである。平面形は丸味のある不整な長方形を呈し，東西長94cm，南北長68cm，深さ19cmを計測する。堆積土は貼床土と同質の混土であった。

遺物出土状況　床面及びピットの底面から出土したのは，土師器片22点，縄文土器片５点である。167図６に示した筒形土器は，Ｐ２の底面から横倒しの状態で出土した。この他，堆積土中から土師器片300点，縄文土器片99点，石器11点，鉄製品１点が出土した。このうち，縄文土器や石器は

本住居跡の周辺に分布する縄文時代中期後半の竪穴住居跡や土坑に由来する遺物と推察される。本住居跡の廃絶時やその後の埋没過程で，内部に入り込んだものと考えられる。

遺物　167図１～９に土師器を示した。１～３はロクロ成形の土師器杯である。１・２は口唇部がやや外反し，体部が椀形を呈している。内面には黒色処理が施され，ミガキ調整が加えられている。３は体部が杯形を呈し，口縁部が外反する器形の杯で，内面調整や黒色処理は施されていない。４・５・７は土師器甕である。４・７の器形は口縁部が外側に強く屈曲し，口縁端部が若干上につまみ上げられる。ロクロ成形され，内面にはヘラナデによる調整痕が観察される。５は小型の甕で，膨らみをもつ胴部と強く外反する口縁部を有している。器面調整は内外面ともヘラナデが施されており，口縁部外面には成形時に残された指頭痕が観察される。６・８は筒形土器である。器面には，ヘラナデによる調整痕が観察され，粘土紐積み上げ痕が明瞭に残っている。９は甑の体部上半部に相当する破片資料で，耳が貼り付けられている。内外面ともヘラナデが施される。

167図10に示した鉄製品は，鏃もしくは槍先と推察される。偏平な二等辺三角形の刃部と角棒状の茎部が遺存している。

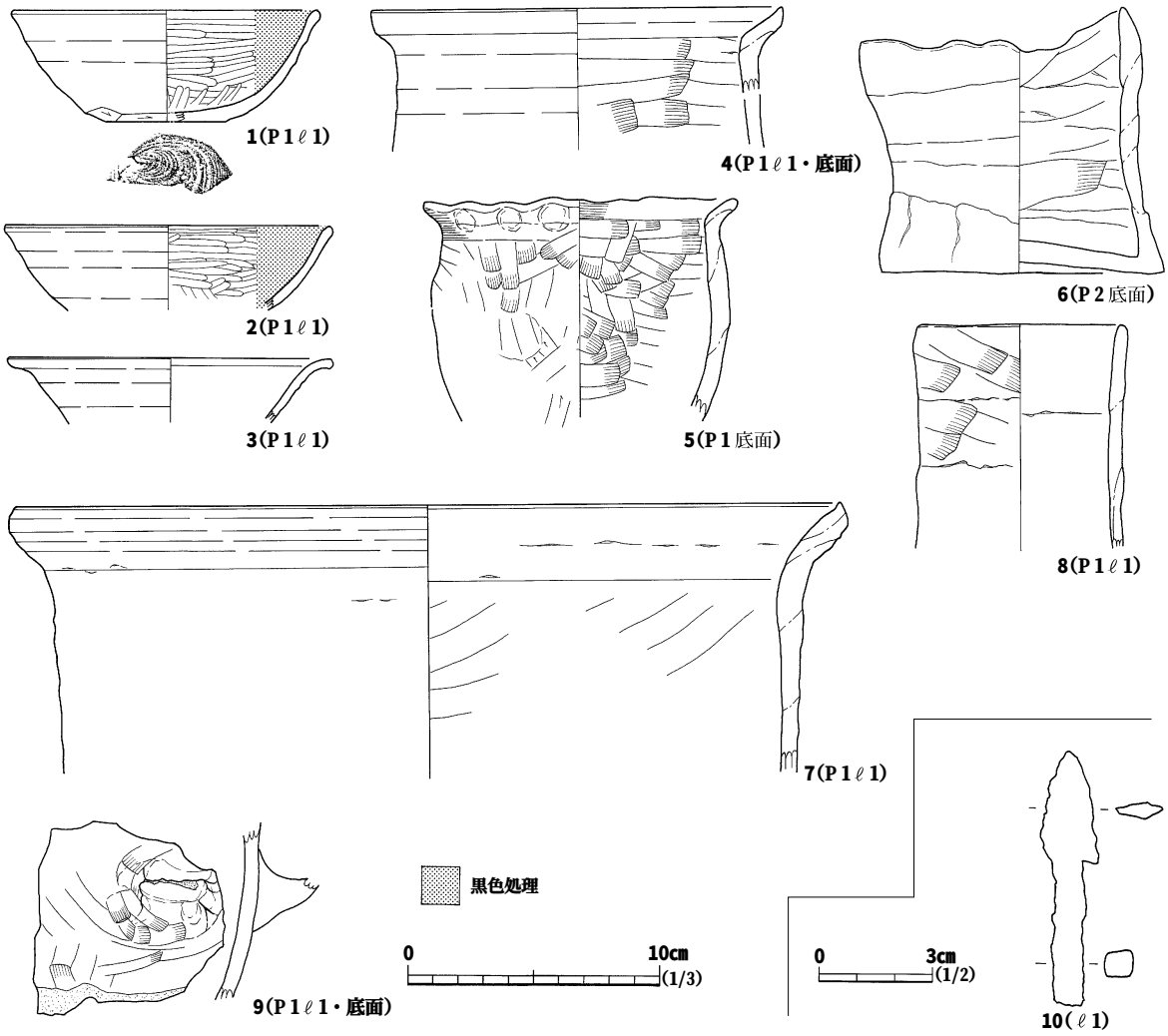


図167　143号住居跡出土遺物

まとめ　本住居跡は66号住居跡によって半分以上が壊されていて，極めて遺存状態が悪い。カマドや柱穴は確認されなかった。66号住居跡によって壊された部分や，削平を受けた部分に存在した可能性がある。堆積土には自然流入土が認められなかった。したがって，廃絶後すぐに埋められたものと推察される。本住居跡の帰属時期は，66号住居跡から９世紀後半の土師器が出土していることから，それ以前の時期の平安時代の所産と考えておきたい。　（小　暮）

144 号 住 居 跡　ＳＩ144 （図168，写真113・114）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｑ・Ｒ42グリッドに位置する竪穴住居跡である。遺構の南側半分は調査区外になる。本住居跡の北側には1025号土坑，西側には1002号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面で，暗黄褐色土で埋まった不整台形の輪郭を検出した。

重複　北壁際で1020号土坑と重複する。新旧関係では，本住居跡の方が新しい。

堆積土　２層に分けられる。いずれも混土であるため，本住居跡は人為的に埋められた可能性が高いと考えられる。

平面形・規模　平面形は，南側が調査区外にあるため不明である。調査できた部分の形状から推測すると，不整な方形もしくは長方形であろうと推察される。現状の壁上端で東西長を計測すると，2.8mである。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦な状態であった。床面のほぼ中央と推察される部分が硬化していた。

周壁　床面から48～74 °のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は５～11㎝を測る。

遺物出土状況　堆積土中から土師器片14点が出土した。

遺物　168図１・２に土師器を示した。１はロクロ成形された杯である。体部は椀形を呈し，口縁

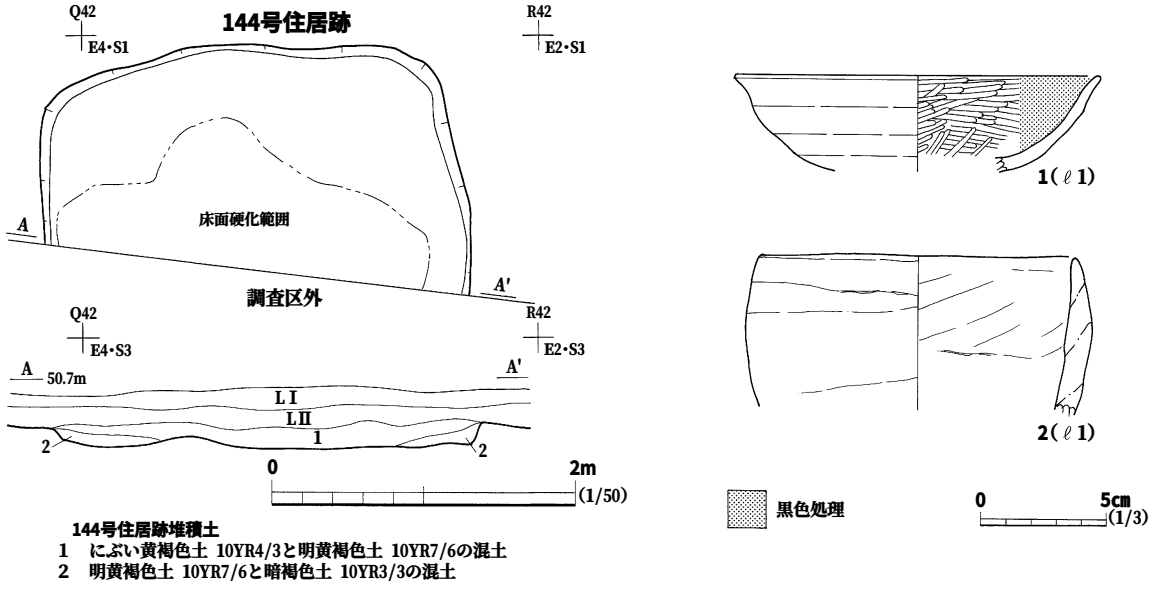


図168　144号住居跡と出土遺物

部はやや外反している。内面には黒色処理とミガキ調整が施されている。２は筒形土器で，底部付近を欠損している。内面にはヘラナデによる調整痕がわずかに認められ，外面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に観察される。

まとめ　不整な方形もしくは長方形を呈すると推察される小型の竪穴住居跡である。屋内施設は，調査した部分では認められなかったが，南側の未調査部分に存在する可能性がある。帰属時期は，堆積土中から内面黒色処理された土師器杯の細片が出土していることから，奈良時代以降になると推察される。（小　暮）

145号住居跡　ＳＩ145（図169・170，写真115・116・358）

位置・検出面　北区南西部の平坦面，Ｒ41グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡は削平を受けており，検出時すでに堆積土は消失し，複式炉の炉体土器と石組部の一部が露出した状態で確認された。検出面はＬⅣ上面である。

重複　66・143号住居跡，71号建物跡より古く，1036号土坑より新しい。

堆積土　削平されており，遺存していなかった。

平面形・規模　周壁が遺存していないため，不明である。

床面　大部分が基本土層のＬⅣに形成されているが，複式炉の周囲は，本住居跡より古い1036号土坑の堆積土上面である。床面の状態は，凹凸が少なくおおむね平坦であった。複式炉周辺の南北2.2m，東西3.2mの不整形の範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　削平されており，遺存していなかった。

複式炉　複式炉は床面硬化範囲のほぼ中央，Ｐ２とＰ３の中間に構築されている。炉は人為堆積土によって埋没しており，遺存状態は良好であった。円形状の土器埋設部に不整楕円形状の石組部が付くダルマ形を呈している。前庭部は存在しないようである。複式炉の構築順序は「炉体土器埋設→土器埋設部縁石・石組部側壁構築」である。

（規模）全長が115㎝，最大幅が66㎝を測る。炉の長軸は南北方向にあり，炉の中軸線はＮ12゜Ｗで，真北から若干西に振れている。

（堆積土）ℓ１は石組部と土器埋設部を埋める混土である。したがって，炉の大部分は人為的に埋められたものと推察される。炉体土器２の中にはℓ２・３の２層が認められた。いずれも使用時に堆積したもので，ℓ３は他の住居跡でも確認された漆黒色の粘質土である。ℓ４は後述する入れ子状態で埋設された炉体土器１と炉体土器２の間に認められた黒褐色土である。内側の炉体土器２を設置する際に堆積したものと考えられる。ℓ５は石組部の掘形堆積土，ℓ６・７は土器埋設部の掘形堆積土である。

（土器埋設部）炉体土器は，２個体の深鉢形土器を入れ子状態にしていた。外側の炉体土器１を先に埋設しているが，その底部付近に漆黒色の粘質土は認められなかった。また，その黒色粘質土が炉体土器１の土器胎土に付着浸透した形跡も確認されなかった。したがって，古い炉体土器１が炉の

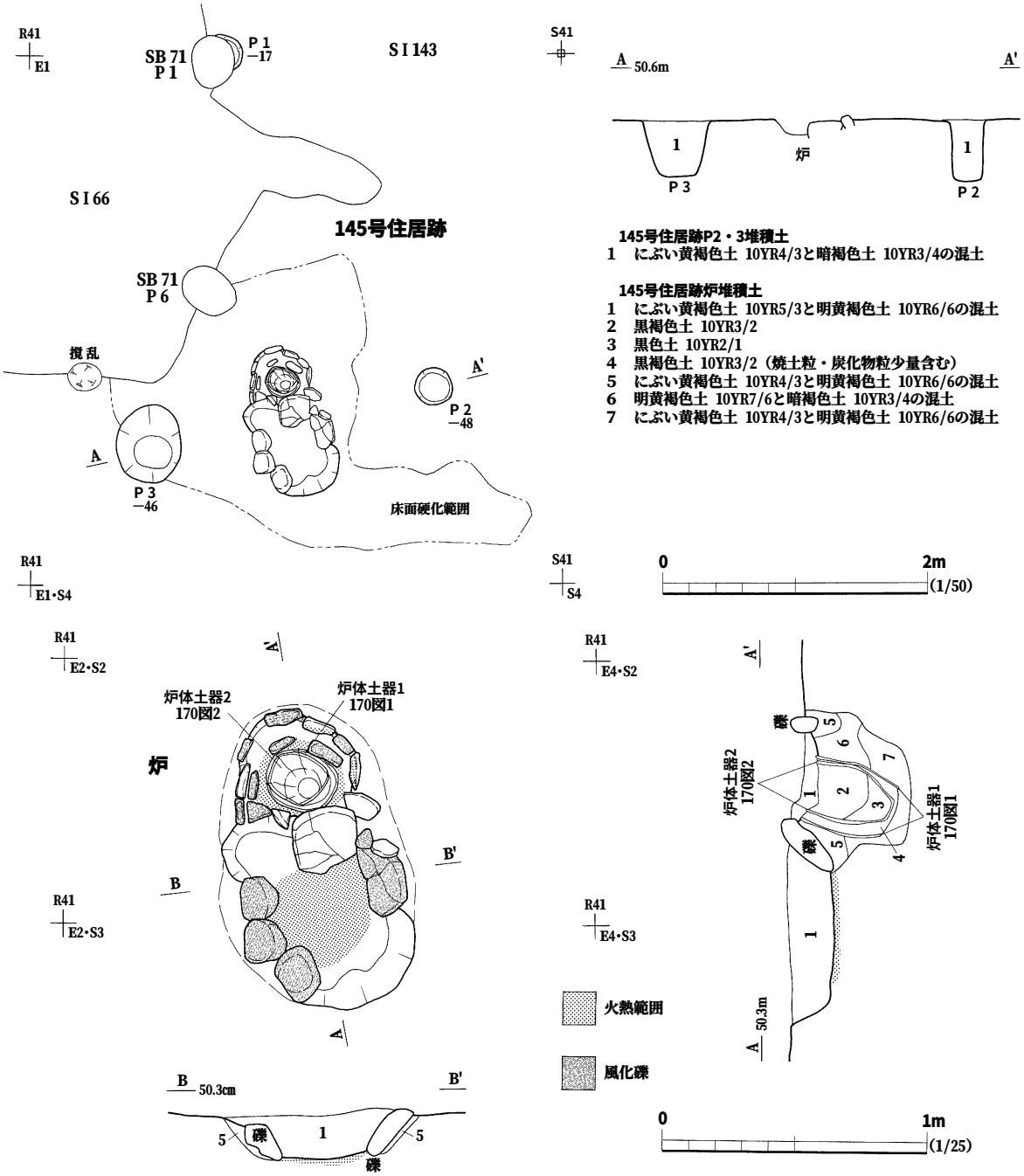


図169　145号住居跡

機能時に破損したため，その内側に新しい炉体土器２を埋めて補修したのではなく，２個体ほぼ同時に埋設した可能性が高いと考えられる。炉体土器１の外側には，長さ10～15cmの角礫を敷き，その外側に長さ25cm前後の直方体状の礫を並べ縁石としている。この縁石は，一部が抜き取られていた。南北方向の長さは約40cmで，炉体土器周辺の土は強く焼土化している。

（石組部）底面には敷石がなく，ＬⅣが直接火熱を受けて焼土化していた。焼土化した部分は，掘形底面から３cmの深さにまで及んでいた。側壁は板状の礫と人頭大の礫を並べて構築されており，一部が抜き取られた状態であった。土器埋設部との間には，特に大型の板状礫が用いられている。石

図170　145号住居跡出土遺物

組部の最大幅は66㎝，南北方向の長さは75㎝を測る。礫は表面に強い火熱を受けてもろくなったものが多い。なお，凹石１点が構築礫として転用されていた。

主柱穴　主柱穴はＰ１～３の３個である。Ｐ１は複式炉の中軸線上，Ｐ２・３は複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.9m，Ｐ２－Ｐ３間が2.2m，Ｐ３－Ｐ１間が3.0mを測り，南北方向に長い二等辺三角形の配置となっている。各柱穴の平面形は不整な円形もしくは楕円形で，断面形はU字状を呈している。規模はＰ１が深さ17㎝，Ｐ２が直径28㎝，深さ48㎝，Ｐ３が長軸58㎝，短軸50㎝，深さ46㎝を計測する。堆積土は混土であり，柱痕も認めら

れなかったため，人為的に埋められたものと推察される。

遺物出土状況　床面及び複式炉の底面から出土したのは，縄文土器片３点，石器１点である。複式炉の堆積土中からも縄文土器片20点，石器２点が出土している。

遺物　170図１・２に縄文土器を示した。１は胴下部に膨らみをもつ深鉢形土器で，口縁部及び底部付近を欠損している。文様は胴上部から口縁部にかけて集約されており，沈線区画の無文帯によるＣ字状，もしくはクランク状の文様が描かれているようである。隣り合う文様同士は，切り合っている。地文はＬＲの原体で施文された単節斜縄文である。２は口縁部を欠損した深鉢形土器で，胴下部に膨らみをもち，胴上部は外反する器形を有している。文様は胴上部の幅広い施文域に施され，沈線区画の縄文帯で逆「の」字状の文様が横方向に連続している。この文様を描出する沈線は，無調整に近い。文様施文域の下端には波状の沈線が施され，底部付近の地文域と明瞭に区分されている。地文はＬＲの原体で施文された単節斜縄文である。

170図３に示したのは，玉髄製の石鏃である。被熱しているため，表面の光沢が失われ，先端部が折れている。縁辺には表裏両面から細かい剝離が施され，基部の調整は最後に行われている。

まとめ　定型化した複式炉と，二等辺三角形に配置された３個の主柱穴を有している。複式炉の中軸線は，ほぼ南北方向を指している。また，廃絶に際しては柱を抜き取った後，複式炉及び主柱穴を埋めている。複式炉の石組は一部抜き取られていた。本住居跡の帰属時期は，炉体土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期中段階と推察される。　（小　暮）

150 号 住 居 跡　ＳＩ150 （図171，写真121・122）

位置・検出面　北区中央部の平坦面，Ｙ35・36，Ｚ35グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北側には117号住居跡が，周囲には1021・1037・1050号土坑が隣接している。検出面はＬⅣ上面である。検出時には12号溝跡により堆積土の大部分は削られており，床面の北西部と住居の北壁と南壁の一部が遺存するのみであった。

重複　12号溝跡と重複し，本遺構の方が古い。

堆積土　ℓ１～３は黒褐色土や暗褐色土を基調とし，ＬⅣである黄褐色土を塊状に含んでいることから人為堆積土と判断した。ℓ４は壁際から流れ込んだような堆積状況が観察されることから，自然堆積土と判断した。

平面形・規模　平面形は不整方形で，長軸方向はＮ40 ℃Ｗである。規模は現存する上端の長軸長で4.9m，短軸長4.1mを測る。

床面　基本土層のＬⅣにより形成されている。凹凸が若干認められるが，ほぼ平坦である。踏み締まった箇所は見られなかった。

周壁　床面から70～80 °と急傾斜で立ち上がり，遺存壁高は25～30㎝を測る。

炉跡　確認されていない。

主柱穴　遺存していた主柱穴はＰ１・２の２個である。柱穴規模は，長径60～72㎝，床面からの深

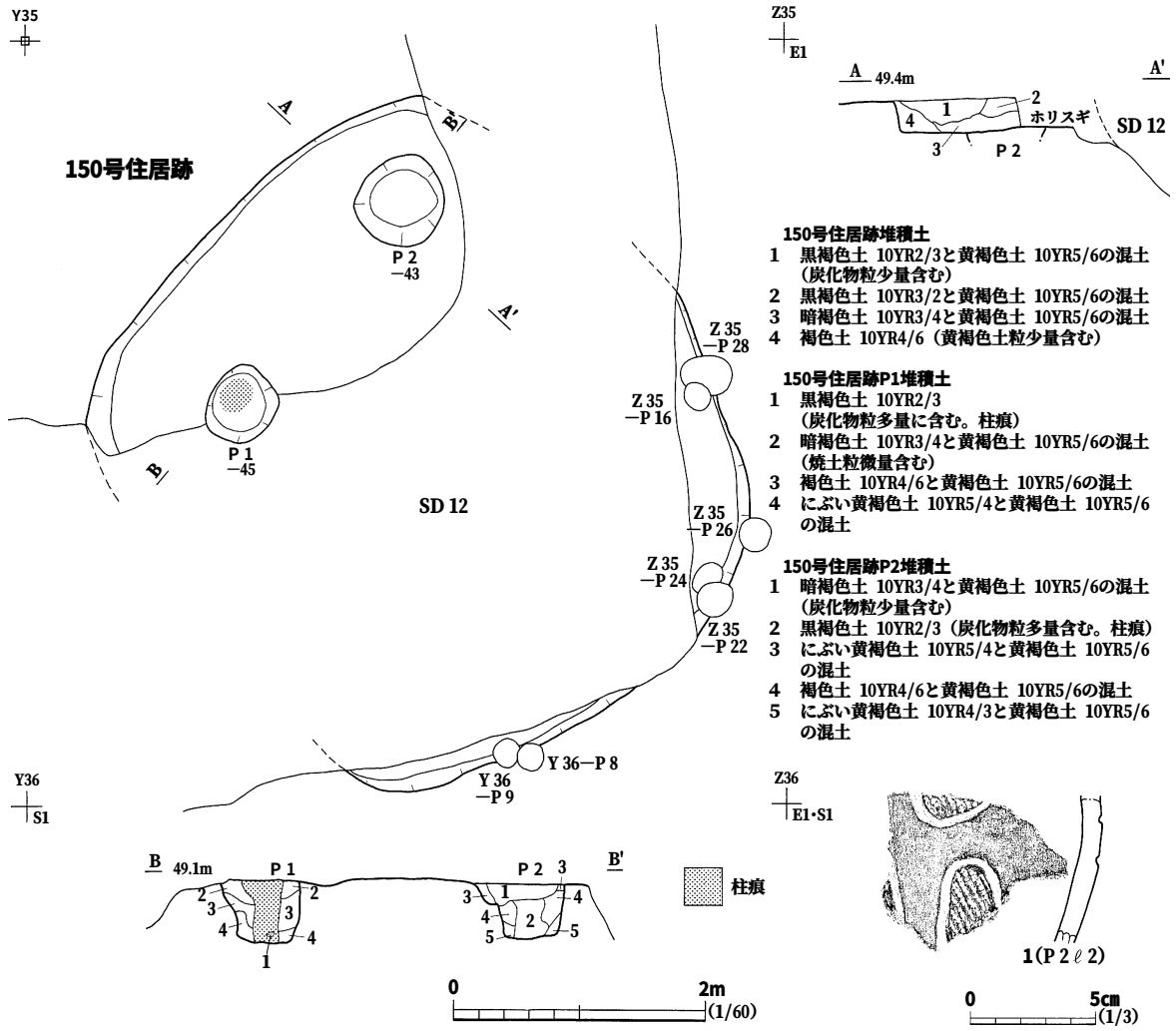


図171　150号住居跡と出土遺物

さ43～45㎝を測る。Ｐ１－Ｐ２間の芯々間距離は2.2ｍを測る。Ｐ１には直径28㎝の柱痕が認められた。またＰ２ℓ２にもＰ１の柱痕の堆積土と同質の黒褐色土が堆積していた。

遺物出土状況　Ｐ２ℓ２より縄文土器の胴部片(171図１)１点が出土した。その他，堆積土(ℓ１・２)より縄文土器の胴部片11点・石器２点が出土したが，小破片のため図示しなかった。

遺物　171図１は深鉢形土器の胴部片で，Ｕ字状と逆Ｕ字状を呈する沈線が縦方向に対向して描かれている。大木９式に比定されるものであろう。

まとめ　本遺構は，大部分が削平されているものの不整方形を呈する竪穴住居跡である。所属時期は，本住居跡の平面形や柱穴の出土遺物から判断すると縄文時代中期中葉の大木８ｂ～９式期に比定される可能性が高い。　（門　脇）

151 号 住 居 跡　ＳＩ151 （図172・173，写真122～124）

位置・検出面　北区北東部のほぼ平坦面，Ｗ・Ｘ25・26グリッドに位置する竪穴住居跡である。本遺構の周囲には532・533・535・536・749・874・877・1183・1229号土坑があり，東側には16号溝

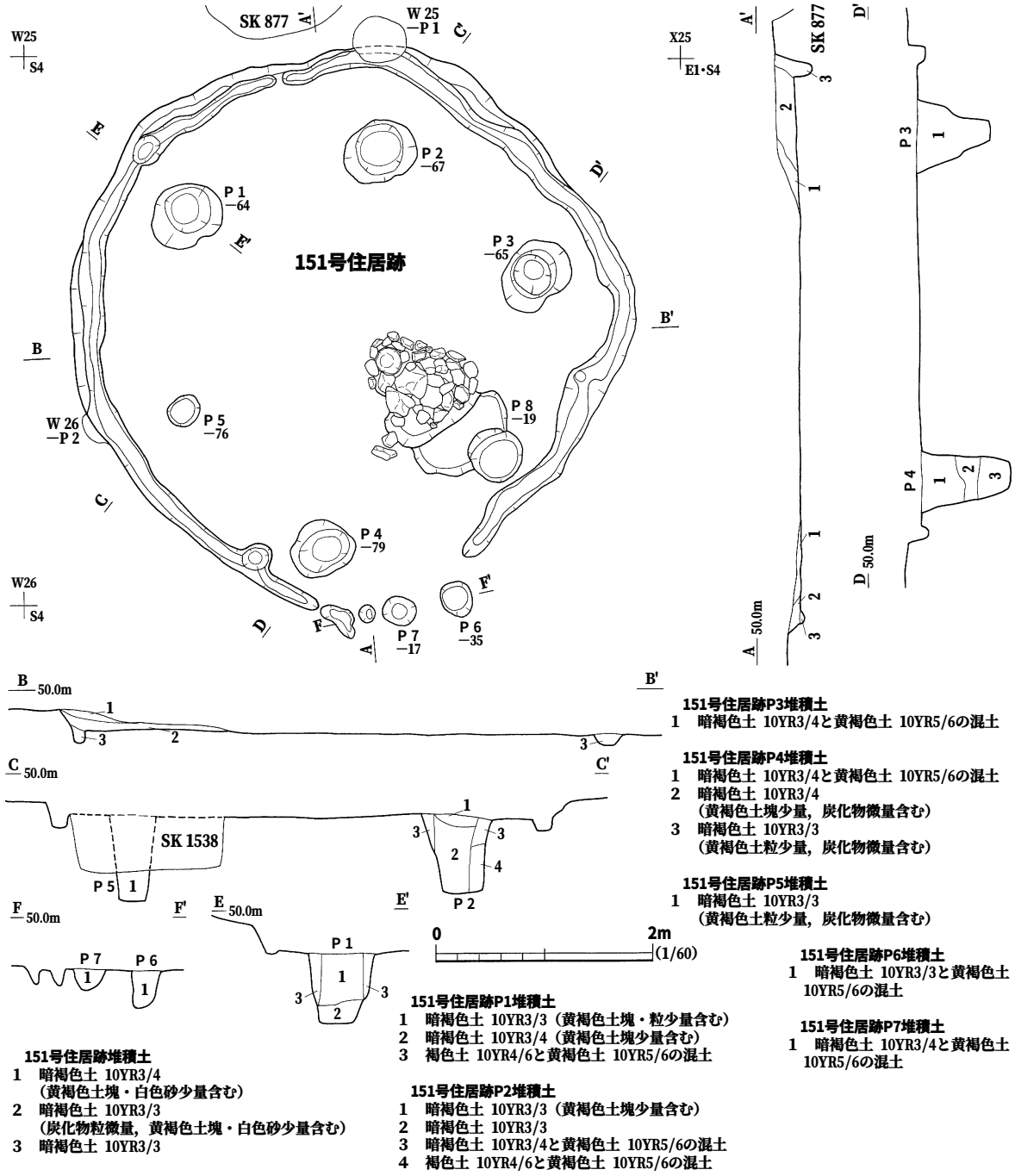


図172　151号住居跡

跡，南側には152号住居跡，北西側は86号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，直径5.0m程の円形の範囲であったが，その堆積土の大部分は削平され，床面や炉が露出した状態であった。

重複　W25・26グリッドの小穴と重複し，それより古い。以下，４軒の住居跡と土坑を古い順に示せば，159号住居跡→155号住居跡→152号住居跡・1538号土坑→151号住居跡となり，いずれよりも本遺構が新しい。この４軒の住居跡は，北側と南側で交互に構築されている。

堆積土　周溝内堆積土を含め３層に分かれる。前述したように堆積土の大部分が失われており，辛

うじて残存した土層断面の観察から判断すると，周壁に沿って流れ込みによる堆積が確認できることから，いずれも自然堆積と考えられる。

平面形・規模　円形に近い不整な隅丸方形であり，長軸方向はＮ52 ℃Ｗである。その規模は現状の壁上端で長軸の南北長5.0ｍ，短軸の東西長4.8ｍを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成され，ほぼ平坦である。踏み締まりと推察される硬化した部分は，確認できなかった。

周壁　床面から50～72 ℃のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は９～22㎝を測る。東・南東壁は削平され確認できない。

周溝　周壁面に沿いながら，ほぼ一巡するが，南側のみ約95㎝の範囲で確認できなかった。上端幅は10～25㎝，床面からの深さは２～18㎝を測り，一部に認められる小穴の深さは21㎝程を測る。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。遺存状態は良好で，円形状の土器埋設部と楕円形状の石組部，不整円形状の前庭部，及びこれに付随する小穴からなっている。

（規模）全長は約175㎝，最大幅が98㎝を測り，炉中軸線はＮ52 ℃Ｗである。

（堆積土）ℓ４・５の掘形堆積土を含めて５層に分かれる。ℓ１は炉埋設部の堆積土であるが，炉体土器は壊され一気に埋められている。ℓ２・３は土層断面の観察から人為堆積と考えられる。本炉は埋設土器を除去した後，人為的に埋められたものと判断している。

（土器埋設部）炉体土器は壊されて存在せず，土器片だけが検出された。炉体土器が設置されたと考えられる小穴の径は約26㎝，深さ約28㎝である。開口部の外側周辺は10～15㎝大の礫を円形状に敷き並べている。礫表面及びその周辺の土は赤く焼けている。

（石組部）底面は掘形内に大きい偏平な礫を敷き，その周辺に中小の扁平な礫を敷き詰めている。側壁は，板状の礫を礎とし，その間にこぶし大の礫を擂鉢状に積み上げながら構築されている。特に土器埋設部との間には大型の板状礫が用いられている。炉中軸線に沿った石組部の長さは約70㎝，最大幅は約85㎝を測る。礫表面は火熱を受け，赤色変化とともにもろくなったものが多い。

（前庭部）浅い箱形状を呈し，南東側壁に張り出してＰ８を伴っている。Ｐ８の規模は長径50㎝，短径47㎝，深さ19㎝であり，浅い箱型状部分は幅98㎝，長さ40㎝を測る。

主柱穴　北西にＰ１，北にＰ２，東にＰ３，南にＰ４，南西にＰ５の５個が確認された。当初Ｐ５を確認しないまま，西に重複する1538号土坑を調査したところ，底面よりピットを検出した。他の柱穴との距離を計測したところ各柱穴間の距離の数値が揃うため，このピットをＰ５とした。各柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.9ｍ，Ｐ２－Ｐ３間が1.8ｍ，Ｐ３－Ｐ４間が3.2ｍ，Ｐ４－Ｐ５間が1.8ｍ，Ｐ５－Ｐ１間が1.9ｍを測る。規模は長径30～70㎝，床面からの深さは64～79㎝を測る。柱穴内の堆積土は黄褐色土塊を多く含み，また，それが撹はんされたような状況も確認できることから，柱を抜き去った後，埋め戻したものと考えられる。

ピット　主柱穴の他に２個のピットがある。Ｐ６・７は本遺構南側Ｐ４の南東に位置する。Ｐ６は

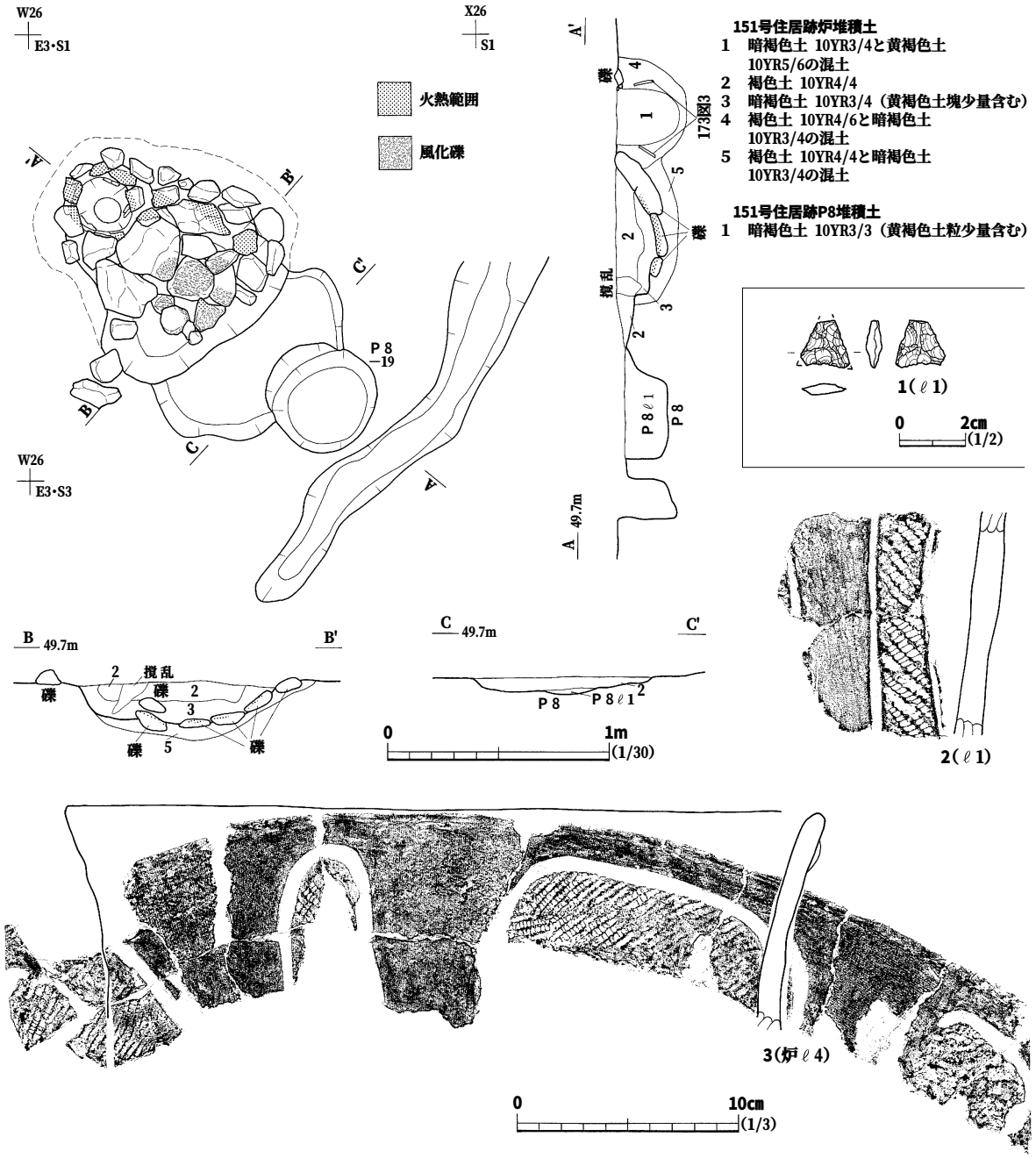


図173　151号住居跡炉と出土遺物

長径32㎝，深さ35㎝，Ｐ７は長径30㎝，深さ17㎝を測し，Ｐ６－Ｐ７間の距離は55㎝である。２個のピットは，周溝が確認できなかった位置に存在することから，本遺構の入口の屋根を支えた柱穴ではないかと考えている。

遺物出土状況　堆積土中から縄文土器片51点・石器12点，柱穴から縄文土器片４点・石器９点，複式炉から縄文土器片12点・石器12点が出土している。

遺物　173図２・３に縄文土器を示した。３は炉体土器に転用されていた深鉢形土器である。強い火熱を受けており，器壁が非常にもろくなっている。文様は沈線区画の縄文帯によって描出されるが，具体的な図形は不明である。地文は単節斜縄文で，文様間は磨り消されている。２にも縄文帯

による文様が描かれている。

173図１は流紋岩製の凹基式石鏃である。基部はわずかに内湾している。先端部と基部の両端は折損している。

まとめ　定型化した複式炉と，五角形に配置された５本の主柱穴を有している。周溝は，南側一部分で確認できなかったが，その位置に入口の屋根を支えた柱穴と考えられるＰ６・７がほぼ東西に配列されている。炉体土器は壊され，炉全体が埋められている。本遺構の帰属時期は，炉体土器の年代観から縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と考えられる。　（高　橋）

152 号 住 居 跡　ＳＩ152 （図174～176，写真125・126・358）

位置・検出面　北区北東部のほぼ平坦面，Ｗ・Ｘ26・27グリッドに位置する竪穴住居跡である。本遺構の周囲には535・536・547・548・549・550・1183・1538・1547・1565号土坑があり，北側には151・155号住居跡，東側には16号溝跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であるが，南東の一部は削平され，炉が露出した状態であった。径は5.0m程である。

重複　151号住居跡，16号溝跡と重複し，いずれよりも本遺構が古い。また，155号住居跡，1547・1565号土坑と重複し，いずれよりも本遺構が新しい（ＳＩ151重複関係参照）。

堆積土　周溝堆積土を含め３層に分かれる。ℓ１は流れ込みによる自然堆積と考えられ，ℓ２は基本土層のＬⅢ・Ⅳに類似した褐色系の土を基調とし，黄褐色土の小塊を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積と考えられる。ℓ３は周溝内堆積土であり，自然堆積と判断した。

平面形・規模　16号溝跡が本遺構の東壁を壊しており明確な形は確認できないが，およそ円形に近い不整な隅丸方形である。長軸方向はN30 ℃Wである。その規模は現状の壁上端で長軸の南北長5.0m，短軸の東西長4.8mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成され，ほぼ平坦である。踏み締まりと推察される硬化した部分は，確認できなかった。

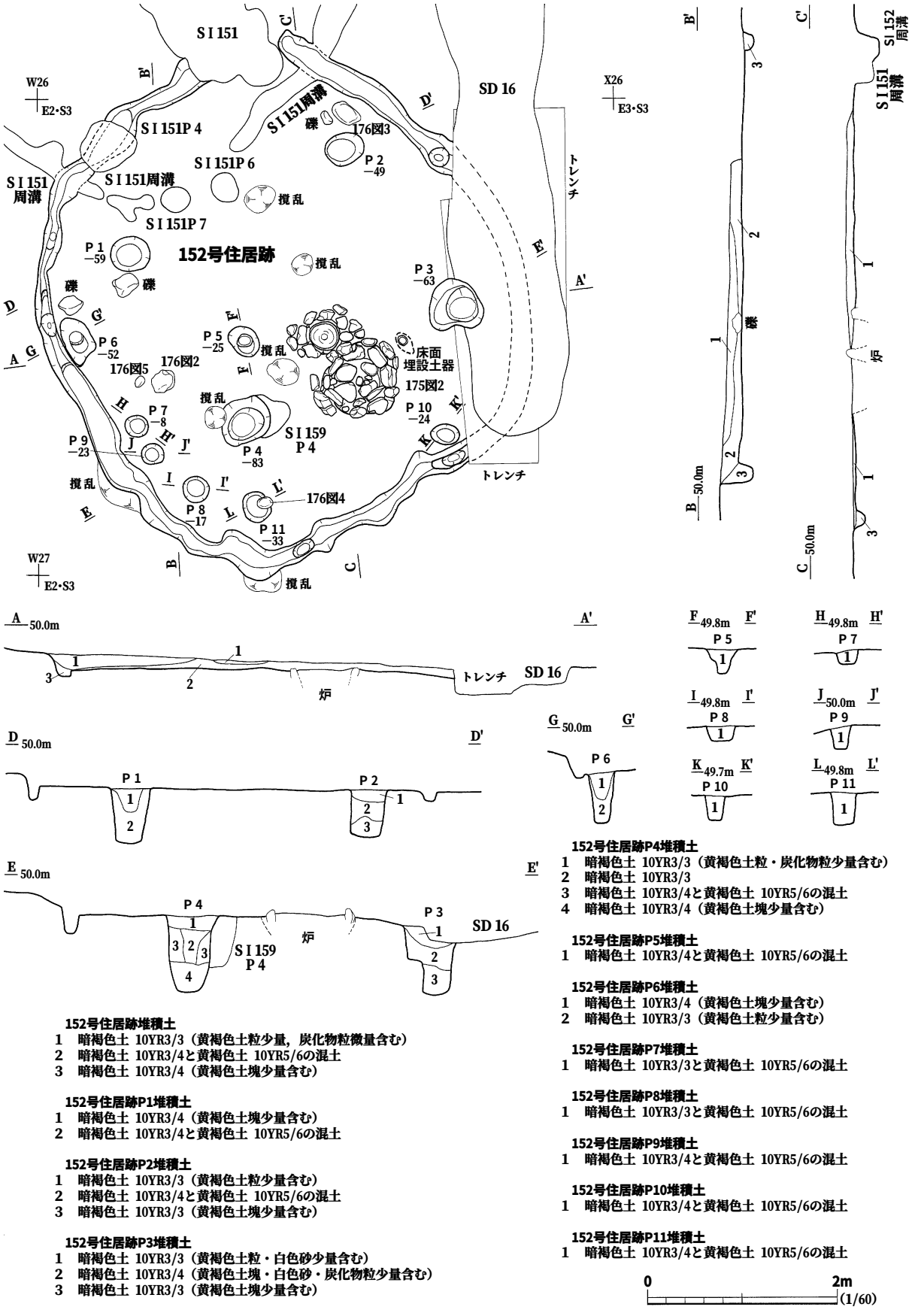
周壁　床面から70～85 ℃の急な角度で立ち上がり，遺存壁高は，西側に残存する壁での確認で12～25㎝を測る。

周溝　北側で151号住居跡の炉に，東側で16号溝跡に壊されているため，明確ではないが，ほぼ一巡すると考えられる。上端幅は10～33㎝，床面からの深さは５～23㎝を測り，一部に認められる小穴の深さは24㎝程を測る。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ３とＰ４のほぼ中間に構築されている。遺存状態は良好で，円形状の土器埋設部と，楕円形状の石組部から構成されている。また，石組部の北東隣に付属するように，直径11㎝程の土器が埋設してある。

（規模）全長は約130㎝，最大幅が98㎝を測り，炉中軸線はN37 ℃Wである。

（堆積土）ℓ６～８の掘形堆積土を含めて８層に分かれる。ℓ１～３は炉体土器内堆積土であり，人為堆積土である。ℓ４・５は石組部に認められた自然堆積土である。



152号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量，炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）

152号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

152号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊少量含む）

152号住居跡P3堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・白色砂少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊・白色砂・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土塊少量含む）

152号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3
3　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）

152号住居跡P5堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

152号住居跡P6堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）

152号住居跡P7堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

152号住居跡P8堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

152号住居跡P9堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

152号住居跡P10堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

152号住居跡P11堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

図174　152号住居跡

（土器埋設部）口径約30㎝の炉体土器に接して，10～20㎝大の礫を敷き並べている。東西方向の長さは約70㎝で，炉体土器周辺の土は赤く焼けている。

（石組部）底面は掘形内に大きい偏平な礫を敷き，その周辺に中小の扁平な礫を敷き詰めている。側壁は，板状の礫を礎とし，その間にこぶし大の礫を積み上げながら構築されている。特に土器埋設部との間には大型の板状礫が用いられている。炉中軸線に沿った石組部の長さは約75㎝，最大幅は約98㎝を測る。礫表面は火熱を受け，赤変とともにもろくなったものが多い。

埋設土器　複式炉の東側で１基確認した。床面より掘り込まれた長径25㎝，短径15㎝，深さ20㎝の

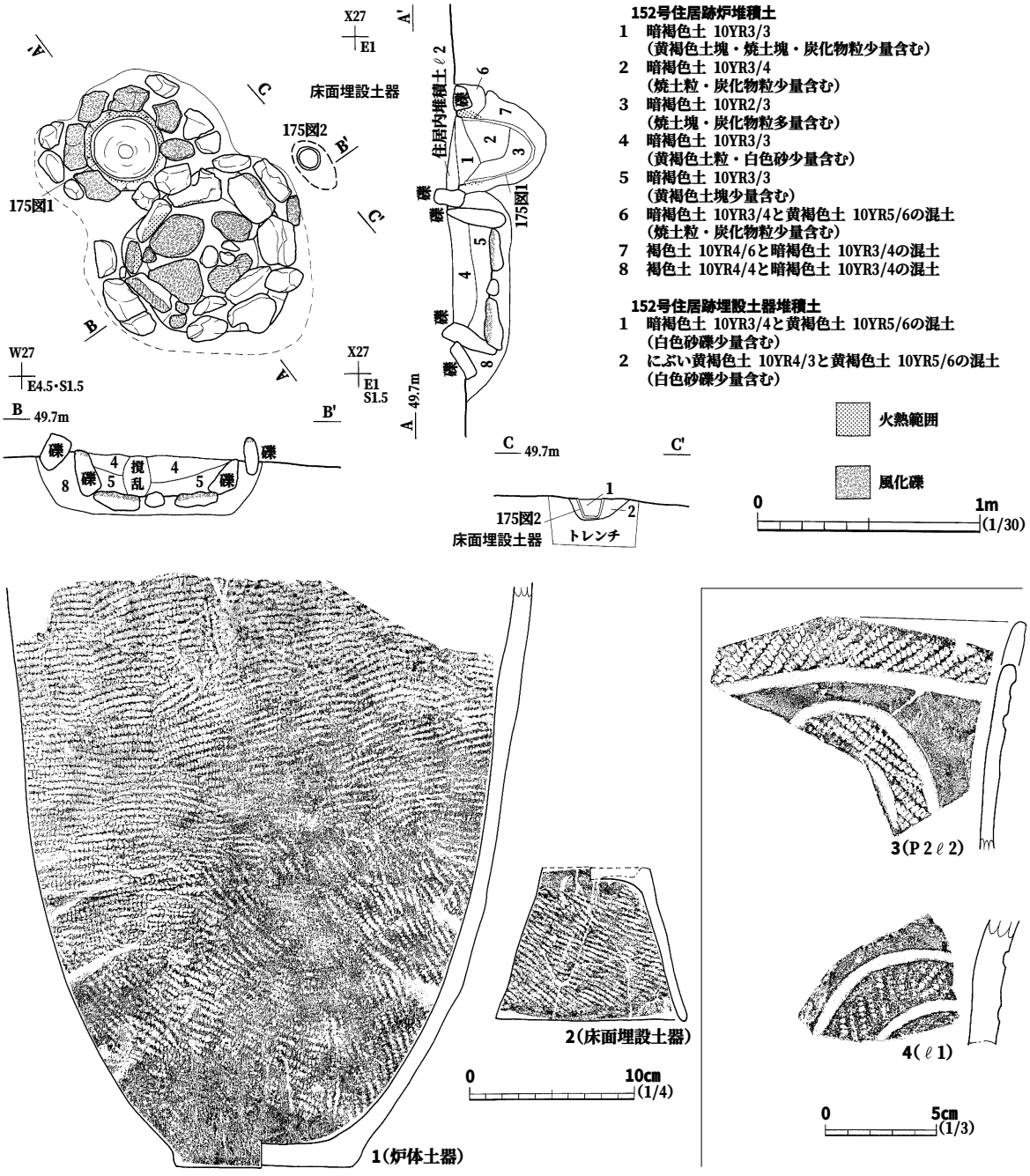


図175　152号住居跡炉と出土遺物(1)

楕円形の掘形内に，口径11㎝程の器台が逆位で埋設されていた。

主柱穴　西にＰ１，北東にＰ２，東にＰ３，南にＰ４の４個が確認された。各柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.5m，Ｐ２－Ｐ３間が2.1m，Ｐ３－Ｐ４間が2.6m，Ｐ４－Ｐ１間が2.1mを測る。規模は長径42～58㎝，床面からの深さは49～83㎝を測り，特に複式炉の両脇に位置するＰ３・Ｐ４が，一回り大きく深い。堆積土の観察では，柱痕は確認されず黄褐色土を多く含むことから，柱を抜き取った後，埋めたものと考えられる。

ピット　主柱穴の他に７個のピットがある。Ｐ５はＰ４の北に隣接し，Ｐ６～11は，本遺構の西から南にかけての周溝沿いに，不規則に配置されている。規模は長径24～46㎝，床面からの深さは８～52㎝を測り，Ｐ６が最も深い。用途については不明である。

遺物出土状況　床面から出土したのは，縄文土器片１点，石器７点である。堆積土中からは，縄文土器片59点，石器21点が出土した。柱穴内堆積土からは９点の縄文土器片，複式炉堆積土からは５点の縄文土器片が出土している。また，床面には埋設土器が１点あり，その掘形堆積土から石器が１点出土している。

遺物　175図１は深鉢形土器の胴下部で，炉体土器に転用されていた。文様は地文の単節斜縄文のみ観察される。同図２は器台である。同図３は波状を呈する口縁部資料で，口縁直下には縄文帯が一巡し，胴上部には沈線区画の縄文帯で文様が描出されている。同図４には縄文帯による文様の一部が観察される。

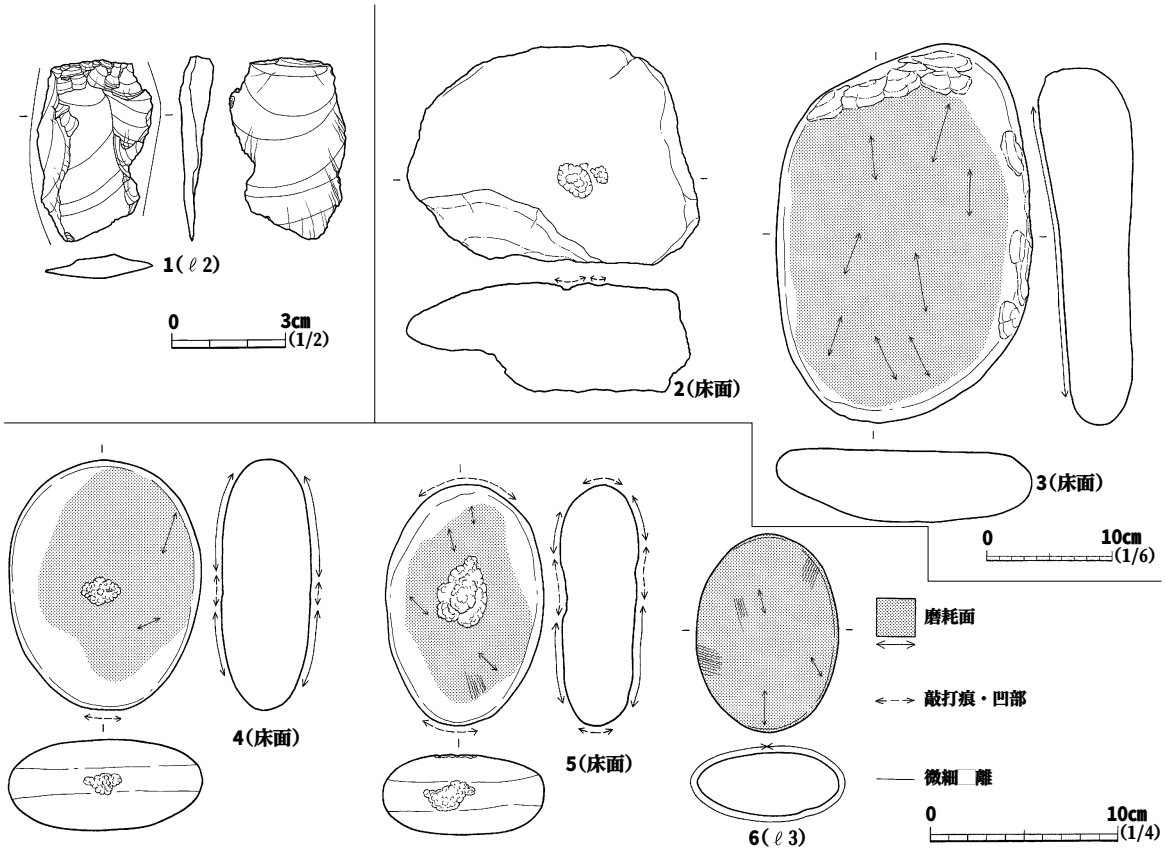


図176　152号住居跡出土遺物(2)

176図１は珪質頁岩製の縦長剝片である。打面は複剝離面打面で，背面上端部には打面縁調整がみられる。腹面上端の打瘤は平坦である。背面の両側縁には微細剝離痕が観察された。同図２は花崗岩製の多孔石である。表面中央に浅い凹部が観察された。同図３は粗質の流紋岩製の石皿である。素材には扁平な亜円礫が用いられ，表面の上側縁部にわずかな調整剝離を施して，形状を整えている。表面の平滑面には広い範囲にわたって顕著な磨耗面が観察され，特にその中央部は油脂光沢を帯び，暗褐色の付着物が認められた。同図４～６は磨石類である。４には浅い凹部が，５にはアバタ状に凹凸のある凹部が，それぞれ器面の両面中央部に認められた。５は器面の全域にわたって光沢を帯びた磨耗痕が観察された。４は砂岩製，５は粗質の流紋岩製，６はシルト岩製である。

まとめ　前庭部をもたない複式炉を有する竪穴住居跡である。複式炉のすぐ西側には埋設土器が存在する。主柱穴は４個で，方形に配置されている。周溝は全周するものと考えられる。本遺構の帰属時期は，縄文時代中期末葉の大木10式期と推察される。　（高　橋）

153 号 住 居 跡　ＳＩ153 （図177，写真127・128）

位置・検出面　北区中央やや西寄りの平坦面，Ｐ31・32グリッドに位置するカマドを有する竪穴住居跡である。本住居跡の東側には撹乱，西側には３号竪穴状遺構があり，これらの間のわずかな範囲で，カマド煙道部と暗褐色土が埋まった溝状範囲を確認した。

重複　３号竪穴状遺構，1487号土坑，Ｐ31グリッドＰ23と重複し，３号竪穴状遺構とＰ31グリッドＰ23より古く，1487号土坑より新しい。また遺構東側は撹乱により大きく破壊され，遺存していない。

堆積土　カマド部分も含め９層に分層した。この内，ℓ１・３・５が住居内堆積土であり，ℓ２・４・７～９は，後述する本住居跡の掘形堆積土やカマド内堆積土である。ℓ１は，自然流入土であり，ℓ３は，層中に焼土塊を多量に含むことから，カマド破壊時の堆積土と判断した。また，ℓ５も床面状に不規則に盛り上がる堆積土であるため，人為堆積土と推察される。したがって，本住居跡は廃棄後にカマドを破壊し，その後自然流入土が流れ込み埋没したものと推察される。

平面形・規模　東側及び西側が遺存していないため，全体形は不明である。ただ，確認できた住居跡掘形の形状から，おおよそ東西方向に長軸をもつ不整な長方形であったものと推測している。現況で確認できた壁上端及び床面での遺構の規模は，南北長1.6m，東西遺存長0.5mである。

床面　大半は貼床により形成され，カマド燃焼部の一部分のみ基本土層ＬⅣに形成されている。床面の残存部がわずかであり詳細は不明であるが，確認できた部分では，ほぼ平坦で北側に若干傾斜している。床面直下からは，東西方向に長軸をもつ不整な楕円形状の掘形が確認された。掘形内堆積土はℓ９としたが，暗褐色土と黄褐色土の混土である。掘形底面は凹凸が著しく，小穴状や溝状にくぼむ部分があり一定していない。

周壁　確認できた部分は北東コーナー部分のみであるが，床面から60 程のやや急な角度で立ち上がっている。遺存壁高は20㎝程を測る。また，周溝は確認されなかった。

カマド　住居跡南側よりカマドが１基確認された。燃焼部と煙道部のみで，袖等は遺存していない。

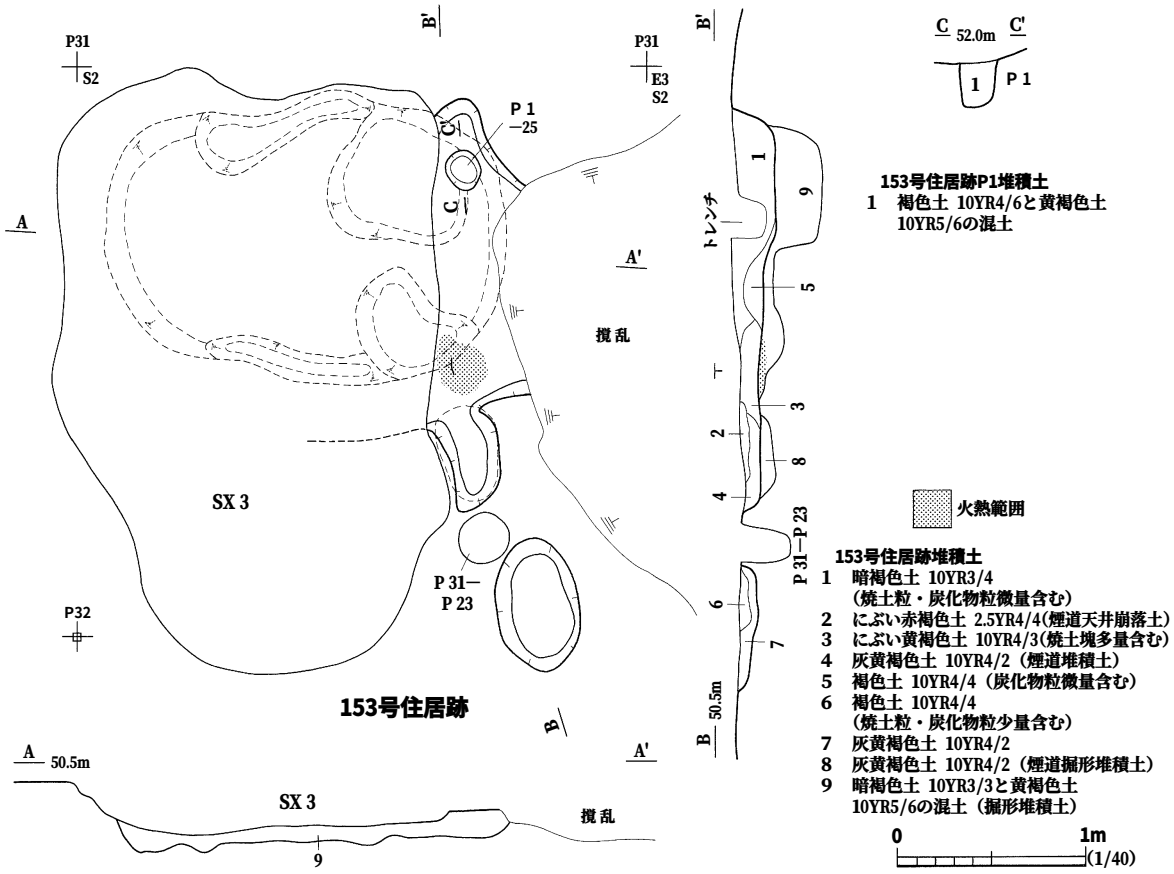


図177　153号住居跡

また，煙道も一部分であり，煙出し穴の底面のみが確認された。

(規模)煙出し穴南端から燃焼部奥壁までの推定南北長は145㎝であり，カマド燃焼部の推定幅は約40㎝である。

(堆積土)煙道部にのみℓ２・６・７の３層が確認された。ℓ２はカマド天井部の崩落土であり，ℓ６・７は自然流入土である。また，ℓ８はカマド煙道掘形堆積土である。

(燃焼部)煙道口直下の床面に，不整楕円形状の焼土化範囲が確認された。その範囲は明確に遺存していないが，南北35㎝程，東西25㎝程を測る。断ち割りの結果，最大で５㎝程の深さまで，焼土化が及んでいた。

(煙道部)煙道は，南壁から50㎝程で一端途切れているが，南端にある楕円形状の小穴が煙出し穴と推測されるので，本来は，南壁からやや南東方向に向かって掘削していたものと推察される。現況で確認できた煙道の幅は，30～40㎝程である。底面は，煙出し穴に向かって若干高くなっている。

主柱穴　北西コーナー部から確認できたＰ１のみである。直径20㎝，深さ25㎝を測り，床面に対しほぼ垂直に掘られている。堆積土は褐色土と黄褐色土の混土であり，人為堆積土で埋められている。これ以外にピットは確認されなかった。

遺物出土状況　縄文土器片３点，土師器片１点が出土した。細片のため，図示できるものはない。

まとめ　カマドを有する小型の竪穴住居跡である。遺構東西側を他の遺構と攪乱により破壊され，

遺存状態が極めて悪い。カマドは廃棄時に破壊されたものと推測され，袖部などは遺存していなかった。本住居跡の時期は，出土した遺物が少ないため不明であるが，平安時代に属するものと推測している。　（吉　田）

154 号 住 居 跡　ＳＩ154 （図178，写真128・358）

位置・検出面　北区北東部の平坦面，Ｕ・Ｖ27・28グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北西側は540・541・542・543号土坑，南西側に1365・1380・1381・1382号土坑，南東側に91号住居跡が隣接している。検出面はＬⅣ上面であり，炉と柱痕，周溝の一部が確認できた。

重複　本住居跡は，1494・1495号土坑と重複し，いずれよりも本住居跡の方が新しい。また，542・543号土坑及び，U27グリッドＰ１～３，Ｖ37グリッドＰ１の小穴は，周溝や炉の位置関係から本遺構の方が古いと考えられるが，２次調査時に調査されていたため明確ではない。

堆積土　周溝内堆積土は２層に分けられ，いずれも自然堆積である。

平面形・規模　検出した周溝の残存形状から推測される本遺構の平面形は円形で，床面の規模の推定直径は４ｍである。

床面　削平により、残存状態は悪いが，炉の石組部の周囲20㎝～50㎝の範囲で踏み締まりが確認された。

周壁　後世の撹乱や削平などにより，全く確認できなかった。

周溝　残存している部分は，炉の北西側約２ｍに位置し，長さ２ｍ，幅10～30㎝，床面からの深さは10～45㎝を計測した。他は確認できなかった。

複式炉　複式炉は周溝の南東側２ｍに位置し，北側から，円形状の土器埋設部と楕円形の石組部により構成されている。前庭部に相当する部分は構築されておらず，確認できなかった。

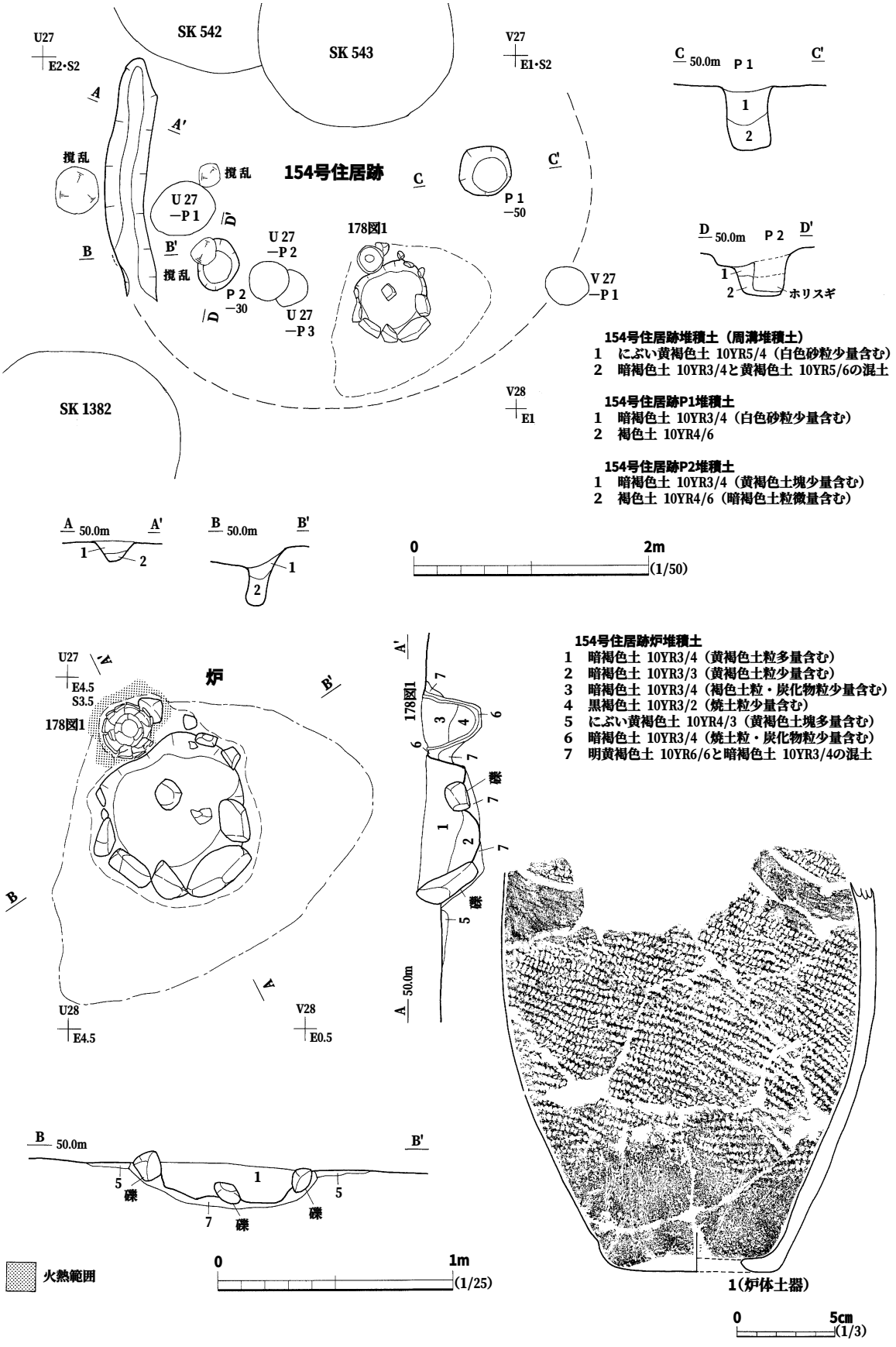
（規模）遺存する規模は土器埋設部の北側先端部分から石組部の末端まで長さ約100㎝，最大幅が石組部において75㎝を測り，炉中軸線はN30 Wを示している。

（堆積土）炉内堆積土は７層に分けられ，このうちℓ５は貼床土，ℓ６，７は掘形堆積土である。他は，自然堆積土と考えられる。

（土器埋設部）口径24㎝の炉体土器の周囲には，東側に縁石とみられる風化した花崗岩質の礫が１点残存していた。炉体土器周囲３～５㎝の土が焼土化している。炉体土器は，検出面から約25㎝の深さに埋設されている。

（石組部）石組部の最大幅は80㎝，南北方向の長さは75㎝を測る。北側部分の周縁には風化した小型の礫が数点疎らに点在し，その底面中央には，直径10㎝の風化した礫１点と長さ10㎝程の礫の破片１点が存在していた。南側部分は，長さ10～30㎝のしっかりした直方体状の礫で外傾する側壁を造っている。礫は，花崗岩質のものがほとんどで，風化してもろくなったものも多少確認された。

主柱穴　主柱穴はＰ１・２の２個である。Ｐ１は炉埋設土器部から北東に約1.2m，Ｐ２は炉埋設土器部から西に約1.3mに位置している。主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が2.5mを測り，Ｐ１－



154号住居跡堆積土（周溝堆積土）
1　にぶい黄褐色土 10YR5/4（白色砂粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

154号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（白色砂粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6

154号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（暗褐色土粒微量含む）

154号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/4（褐色土粒・炭化物粒少量含む）
4　黒褐色土 10YR3/2（焼土粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土塊多量含む）
6　暗褐色土 10YR3/4（焼土粒・炭化物粒少量含む）
7　明黄褐色土 10YR6/6と暗褐色土 10YR3/4の混土

図178　154号住居跡と出土遺物

Ｐ２の芯々間のラインは炉中軸線に対してＮ83 ℃Ｗを示している。現状の平面形は不整な楕円形もしくは円形で，断面形はＵ字状を呈している。規模は，Ｐ１が南北42㎝，東西45㎝，深さ50㎝，Ｐ２が南北46㎝，東西35㎝，深さ30㎝を計測した。堆積土はいずれも暗褐色を主体とした自然堆積である。

遺物出土状況　複式炉の土器埋設部から，炉体土器が１個体出土した。

遺物　178図１は，炉体土器に転用されていた深鉢形土器である。胴下部が膨らむ器形を有している。胴上部には，沈線区画の縄文帯によって文様が描出されている。地文は，単節斜縄文である。

まとめ　本遺構は，２本の主柱穴と複式炉が遺存している住居跡である。複式炉の中軸線はＮ83 °Ｗ方向を示しており，その延長線にほぼ直交するようにＰ１，Ｐ２が配置されていた。本住居跡の帰属時期は，縄文時代中期後半である。　（阿　部）

155 号 住 居 跡　ＳＩ155 （図179，写真129・130）

位置・検出面　北区北東部のほぼ平坦面，Ｗ・Ｘ25・26グリッドに位置する竪穴住居跡である。本遺構の周囲には532・533・535・536・749・874・877・1183・1229号土坑があり，東側には16号溝跡，南側には152・159号住居跡，北西側は86号住居跡が隣接している。検出面は151号住居跡の床面であり，径は約4.3ｍである。

重複　151・152号住居跡，1538号土坑と重複し，本遺構が古い。また，159号住居跡と重複し，本遺構が新しい（ＳＩ151重複関係参照）。

堆積土　暗褐色土系の周溝内堆積土１層のみであり，自然堆積土と推察される。

平面形・規模　本遺構の西側が1538号土坑に壊されているが，およそ不整な楕円形であり，長軸方向はＮ26 ℃Ｗである。その規模は長軸の南北長4.3ｍ，短軸の東西長4.0ｍを測る。

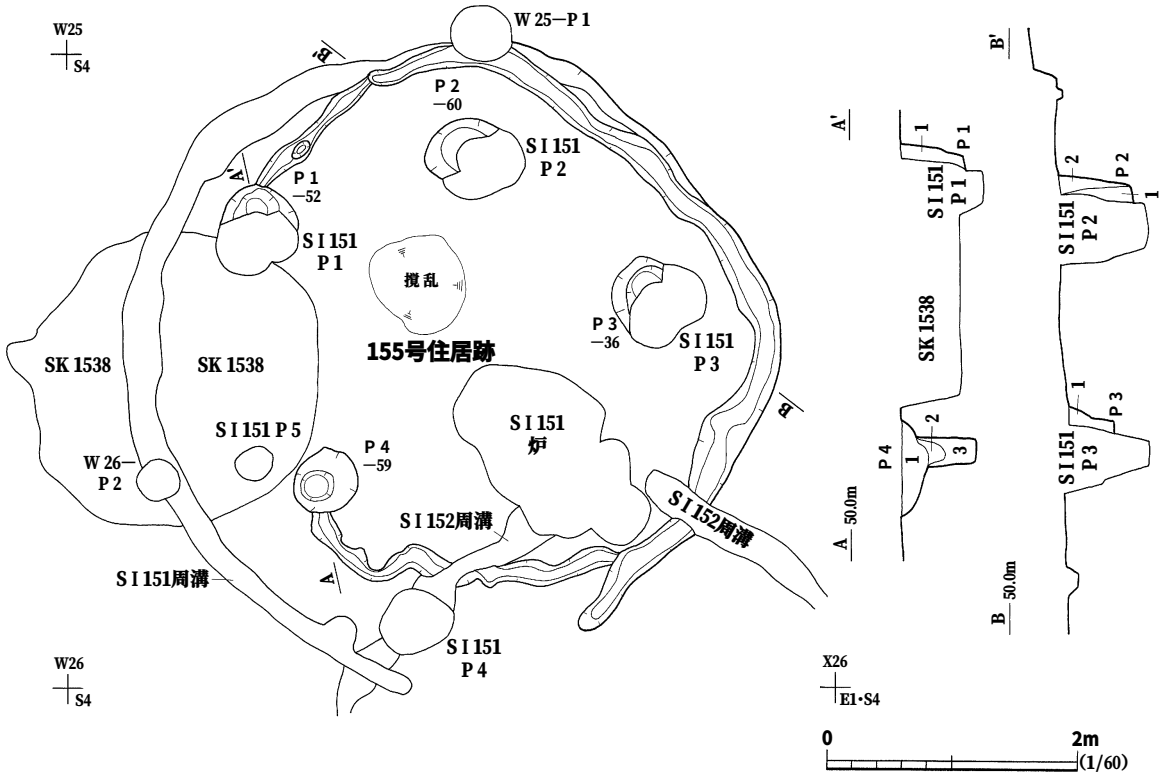
床面　基本土層のＬⅣに形成され，ほぼ平坦である。踏み締まりと推察される硬化した部分は，確認できなかった。

周壁　東側の大部分で，151号住居跡の周壁と共有する。床面から40～85 ℃のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は最大で17㎝を測る。

周溝　東側の大部分で，151号住居跡の周溝と共有する。Ｐ１とＰ４につながる形でほぼ一巡するが，Ｐ１－Ｐ４間に構築された1538号土坑に壊されている。上端幅は８～25㎝，床面からの深さは２～18㎝を測る。

複式炉　151号住居跡複式炉により破壊され，遺存していなかった。

主柱穴　北西にＰ１，北にＰ２，東にＰ３，南西にＰ４の４個が確認された。151号住居跡のＰ１～３にそれぞれ壊されているが，Ｐ４は単独で検出された。各柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が約1.7m，Ｐ２－Ｐ３間が約1.8m，Ｐ３－Ｐ４間が約3.0m，Ｐ４－Ｐ１間が約2.2mを測る。Ｐ１～３の残存部の規模は長径60㎝，床面からの深さは36～60㎝を測る。Ｐ４の規模は長径50㎝，床面からの深さは59㎝を測る。Ｐ１～３の堆積土は判然としないが，Ｐ４は柱を抜き去った後埋め戻した



155号住居跡周溝堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）

155号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）

155号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（暗褐色土粒微量含む）

155号住居跡P3堆積土
1　褐色土 10YR4/6（暗褐色土塊少量含む）

155号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　褐色土 10YR4/6（暗褐色土塊少量含む）

図179　155号住居跡

ものと考えられる。

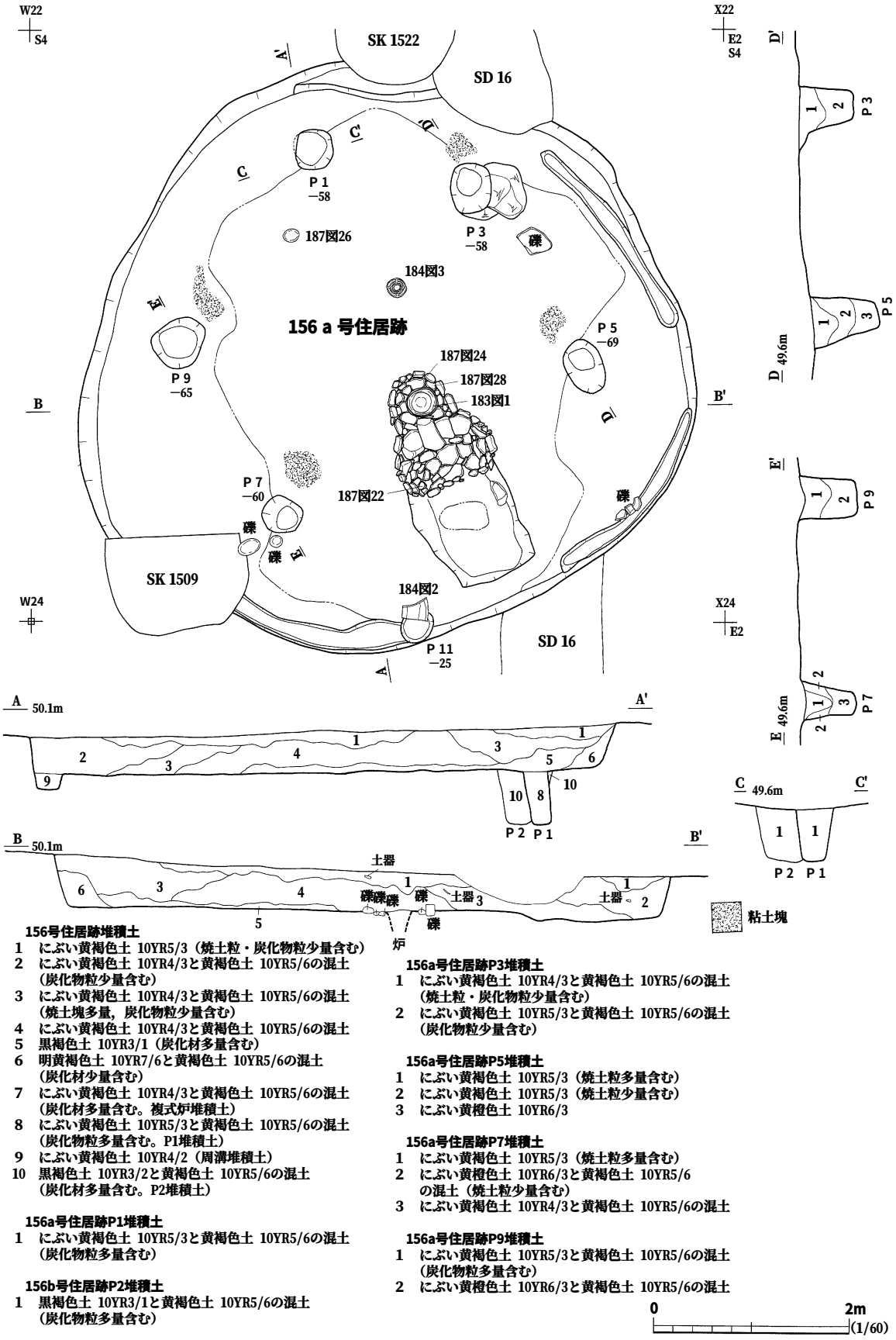
遺物　出土していない。

まとめ　本遺構は151号住居跡の内側に存在し，一部周壁と周溝を共有する。台形状に配置された４個の主柱穴を有している。本住居跡のＰ１～３は151号住居跡のＰ１～３に壊され，遺存状態は良好ではない。Ｐ４は単独で存在する。本遺構は，151号住居跡に建て替える前の住居跡と考えられる。この建て替えに先立って，152号住居跡が構築されるため，遺構番号を付して報告した。帰属時期は，遺構の切り合い関係から縄文時代中期末葉と推定される。　（高　橋）

156ａ・ｂ号住居跡　ＳＩ156ａ・ｂ（図180～187，写真131・132・359）

位置・検出面　北区北東部の平坦面，Ｗ・Ｘ22～24グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北西側には109号住居跡，南西側には86号住居跡が隣接している。検出面は大部分がＬⅣ上面である。炭化物粒や焼土粒を含む暗黄褐色土で埋まった直径3.5m程の不整円形の輪郭を検出した。このような状況から検出時は，焼失住居跡の可能性が高いと判断された。

重複　16号溝跡，1522号土坑より古く，1509・1561号土坑より新しい。また，後述するように，新旧２時期の柱穴と壁面の一部が認められたため，本住居跡は建て替えられた可能性が高い。したが



156号住居跡堆積土

1　にぶい黄褐色土 10YR5/3（焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土塊多量，炭化物粒少量含む）
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
5　黒褐色土 10YR3/1（炭化材多量含む）
6　明黄褐色土 10YR7/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化材少量含む）
7　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化材多量含む。複式炉堆積土）
8　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒多量含む。P1堆積土）
9　にぶい黄褐色土 10YR4/2（周溝堆積土）
10　黒褐色土 10YR3/2と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化材多量含む。P2堆積土）

156a号住居跡P1堆積土

1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒多量含む）

156b号住居跡P2堆積土

1　黒褐色土 10YR3/1と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒多量含む）

156a号住居跡P3堆積土

1　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒少量含む）

156a号住居跡P5堆積土

1　にぶい黄褐色土 10YR5/3（焼土粒多量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR5/3（焼土粒少量含む）
3　にぶい黄橙色土 10YR6/3

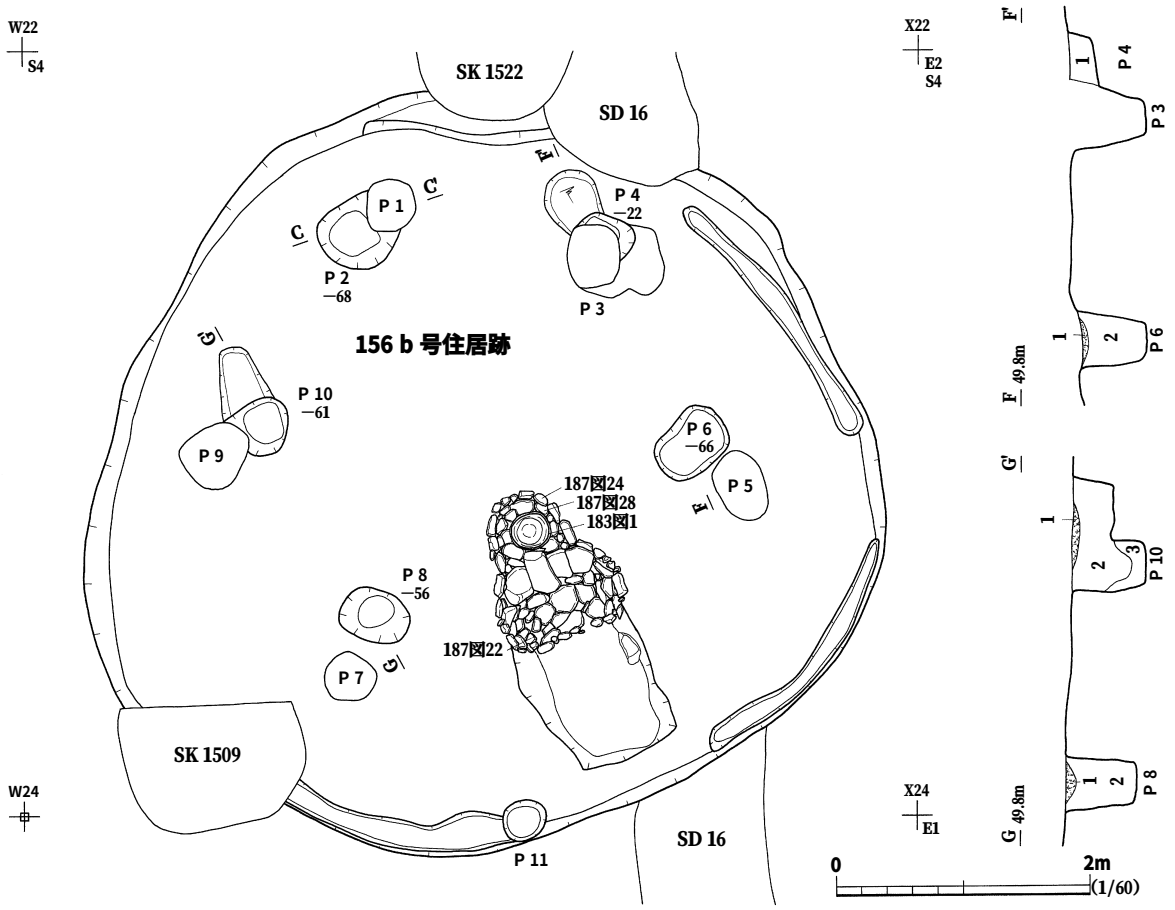
156a号住居跡P7堆積土

1　にぶい黄褐色土 10YR5/3（焼土粒多量含む）
2　にぶい黄橙色土 10YR6/3と黄褐色土 10YR5/6
の混土（焼土粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

156a号住居跡P9堆積土

1　にぶい黄褐色土 10YR5/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒多量含む）
2　にぶい黄橙色土 10YR6/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

図180　156ａ号住居跡



156b号住居跡P4堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（柱の抜き取り痕堆積土）

156b号住居跡P6堆積土
1　明黄褐色粘質土 10YR7/6
（古い柱穴の上面に貼られた土）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6
の混土

156b号住居跡P8堆積土
1　明黄褐色粘質土 10YR7/6（古い柱穴の上面に貼られた土）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

粘土塊

156b号住居跡P10堆積土
1　明黄褐色粘質土 10YR7/6（古い柱穴の上面に貼られた土）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土粒多量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

図181　156ｂ号住居跡

って，新しい方を156ａ号住居跡，古い方を156ｂ号住居跡として報告する。

堆積土　ℓ１は基本土層にない暗黄褐色系の土を基調としており，炭化物粒や焼土粒を撹はんしたように含んでいることから，人為堆積土と考えられる。本層には，縄文土器や石器を多く含んでいた。ℓ２～４は炭化物や強い火熱を受けたと推察される焼土塊を含む混土である。堆積順序は，まずℓ４が遺構中央で小さな塚状に盛り上がって堆積し，次にその周囲をℓ２・３が同心円状に取り巻いて堆積している。この３層は，本遺構の周囲から流入したり，人為的に埋め戻されて堆積したものではなく，遺構の真上から間髪を入れず次々に落下して堆積したものと推察される。その下は床面直上に堆積するℓ５で，火熱で燻されたような細かい炭化材を多量に含んでいた。このような埋没状況から，①本住居跡の上屋は土をふいた土屋根構造であること，②廃絶に際しては，まず火をかけられ，土屋根の下地だった木皮や草などの屋根材が焼け落ちて床面直上に堆積し（ℓ５の形

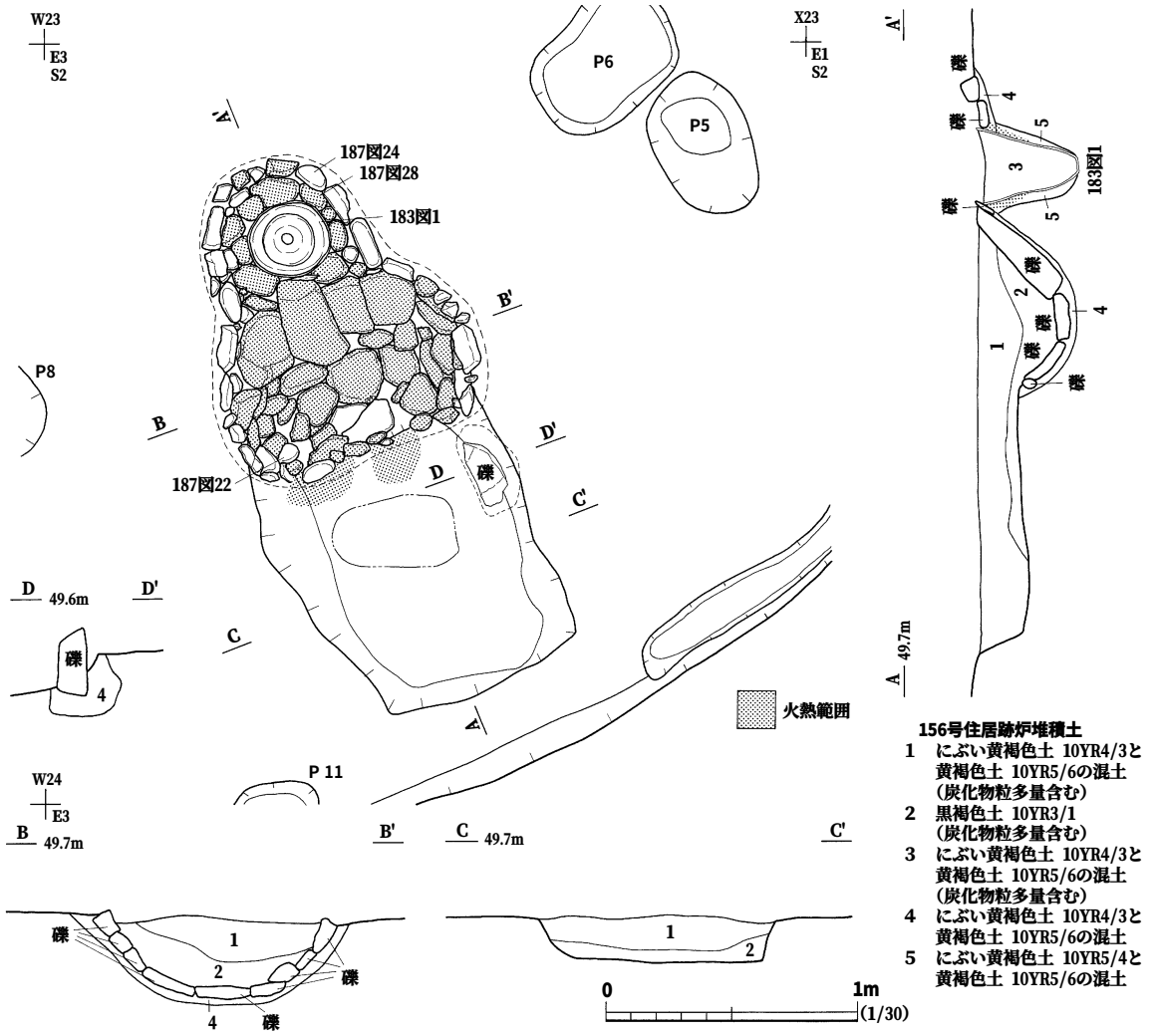


図182　156号住居跡炉

成），次に，土屋根を支える棟材が焼け落ち，それに伴って火熱を受けた焼土塊を含む葺土が遺構中央部から外側に向かって段階的に崩れ落ちたこと（ℓ２～４の形成）が想定される。ℓ６は西・北壁際に見られた混土で，上屋の改修に伴う周壁の修築土と推察される。ℓ７は複式炉の機能時に堆積した土，ℓ８・10は主柱穴を埋めていた混土である。ℓ８・10は，後述のように土屋根の崩落後，焼け残っていた柱を抜き取った際に堆積したものと推定される。ℓ９は周溝内に堆積しており，基本土層にはない暗黄褐色系の土であることから，人為堆積土と考えられる。柱や壁面の改修に伴って，周溝も埋められた可能性が高い。

平面形・規模　東西方向に若干長い不整な楕円形である。北東隅は16号溝跡と1522号土坑によって壊されていた。南西隅は本住居跡より古い1509号土坑を誤って先に掘り下げてしまったため，床面と周壁の一部を壊してしまった。竪穴の規模は，現状の壁上端で東西方向の長軸6.2m，南北方向の短軸5.8mを測る。竪穴の中軸線はN65 °Eである。

床面　大部分は基本土層のⅬⅣに形成されているが，南東隅は本住居跡より古い1561号土坑の堆積土上面であった。床面はほぼ平坦な状態であり，被熱痕跡は認められなかった。表面には若干の凹

凸が観察された。その小さなくぼみの中には，細かい炭化材を含むℓ５が詰まった状態であった。また，複式炉周辺から主柱穴の内側にかけての広い範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　床面から67～82 °の急角度で立ち上がる。遺存壁高は西壁で最高56㎝と高く，東壁で23～47㎝と低くなる。北壁は床面から23㎝の高さのところで，狭い三日月状の平坦面を形成している。この平坦面は何回も踏み固められたように硬く締まっており，ここからさらに27㎝上方に検出面がある。これらのことから，この部分は住居跡への出入りに使われたステップの可能性が高い。また，西壁には古い周壁の内側に黄褐色系の混土が盛り付けられ，新しい周壁を造っている状況が，前述の堆積土の観察から判明した。

周溝　東壁際と南壁際で小溝が確認された。東壁際の小溝は，北半分が壁から最大20㎝程離れている。したがって，この部分は改修された可能性が高い。周溝の上端幅は10～30㎝，床面からの深さは５～21㎝を計測する。

複式炉　複式炉は床面の南東側，Ｐ５とＰ７のほぼ中間に構築されている。この炉は後述するように土屋根の崩落土によって埋没しており，遺存状態は良好であった。円形状の土器埋設部に楕円形状の石組部，さらに不整長方形状の前庭部が続く形態を呈している。土器埋設部と石組部の礫は，ダルマ形に整然と組まれていた。複式炉の構築順序は「炉体土器埋設→石組部底石設置→土器埋設部縁石設置・石組部側壁構築」である。

（規模）全長が230㎝，最大幅が105㎝を測る。炉の長軸は南北方向にあり，炉の中軸線はＮ24 °Ｗで，真北からやや西に振れている。

（堆積土）ℓ１・２は石組部と前庭部，ℓ３は土器埋設部を埋める堆積土である。ℓ１・３は住居跡堆積土のℓ４，ℓ２は同ℓ５に対応する。したがって，いずれも土屋根の崩落土と考えられる。このことから，炉体土器の中に溜まった機能時の堆積土は，土屋根の崩落前，きれいに持ち去られていたことが判る。ℓ４は石組部と土器埋設部の縁石部分の掘形堆積土，ℓ５は炉体土器部分の掘形堆積土である。

（土器埋設部）口径31.4㎝の炉体土器の口縁部に沿って，長さ25㎝前後の楕円礫や角礫を敷き，その外側に長さ20㎝前後の直方体状の礫を並べて縁石としている。内側の敷石上面と外側の縁石上面の比高差は約５㎝である。なお，この縁石は土器埋設部から石組部の外側にかけて延びている。敷石及び縁石の構築礫として，凹石２点が転用されていた。土器埋設部の南北方向の長さは53㎝を測る。炉体土器周辺の土は強く焼土化していた。

（石組部）楕円形の掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面とし，その上に板状の礫と拳大の礫を積み上げて外傾する側壁を造っている。土器埋設部との間には，特に大型の板状礫が４個用いられ，急しゅんな壁面を形成している。石組部の礫は，隙間が生じないように適切な形と大きさのものが選ばれ，隣り合うもの同士が互いに密着する状態で組み上げられていた。また，前述のように石組部の外縁には，土器埋設部から続く縁石が巡っている。石組部の最大幅は105㎝，南北方向の長さは73㎝を測る。礫は表面に強い火熱を受けて，もろくなった状態のものが多い。なお，凹石１点と石核

１点が構築礫として転用されていた。

(前庭部)側壁がほぼ直立する箱形状を呈している。底面は凹凸が若干あるものの，おおむね平坦な状態であった。石組部に近い東西48㎝，南北27㎝の不整楕円形の範囲が硬化していた。また，石組部に接する東壁には，板状の礫を使った立石が認められる。この立石の下部は，掘形の中に埋め込まれ，しっかりと立てられていた。前庭部の規模は，最大幅102㎝，南北方向の長さ104㎝を測る。

主柱穴　主柱穴には新旧２時期があり，156ａ号住居跡に伴うもの(新しい方)をＰ１・３・５・７・９，156ｂ号住居跡に伴うもの(古い方)をＰ２・４・６・８・10と呼称した。新しい柱穴は，古い柱穴のすぐ近くに存在するため，上屋の建て替えに際して，柱の位置はほとんど移動しなかったものと推察される。

156ａ号住居跡の柱穴　Ｐ５・７を複式炉の両脇，Ｐ１を軸頂に据えた五角形に配置されている。柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ３間が1.6m，Ｐ３－Ｐ５間が2.1m，Ｐ５－Ｐ７間が3.4m，Ｐ７－Ｐ９間が2.1m，Ｐ９－Ｐ１間が2.4mを測る。各柱穴の平面形は不整な円形もしくは楕円形を呈し，断面形はＵ字状を呈している。規模はＰ１が直径40㎝，深さ58㎝，Ｐ３が長径50㎝，短径42㎝，深さ58㎝，Ｐ５が長径56㎝，短径37㎝，深さ69㎝，Ｐ７が直径38㎝，深さ60㎝，Ｐ９が長径54㎝，短径46㎝，深さ65㎝を計測する。どの柱穴にも柱痕が認められず，堆積土中に炭化物や焼土を含んでいることから，土屋根崩落後に抜き取られたものと推察される。なお，Ｐ３の東側には抜き取り痕が認められた。

156ｂ号住居跡の柱穴　Ｐ６・８を複式炉の両脇，Ｐ２を軸頂に据えた五角形に配置されている。軸頂のＰ２はＰ１のすぐ西側，Ｐ４・６はＰ３・５のすぐ北側，Ｐ８・10はＰ７・９のすぐ東側で検出された。柱穴間の距離は，Ｐ２－Ｐ４間が1.7m，Ｐ４－Ｐ６間が2.1m，Ｐ６－Ｐ８間が2.8m，Ｐ８－Ｐ10間が1.7m，Ｐ10－Ｐ２間が1.7mを測る。各柱穴の平面形は不整な円形もしくは楕円形を呈し，断面形はＵ字状を呈している。規模はＰ２が直径56㎝，深さ68㎝，Ｐ４が長径44㎝，深さ22㎝，Ｐ６が長径64㎝，短径44㎝，深さ66㎝，Ｐ８が長径53㎝，短径40㎝，深さ56㎝，Ｐ10が直径42㎝，深さ61㎝を計測する。どの柱穴にも混土が堆積し，柱痕は認められなかった。したがって，いずれの柱穴も人為的に埋められたものと推察される。開口部には黄褐色の粘質土が貼られ，陥没しないように補強された後，その上面を床面として使用していたと推察される。なお，Ｐ４・10の北側には抜き取り痕が認められた。

ピット　複式炉南側の周壁際でＰ11が検出された。平面形は楕円形で，規模は長径34㎝，短径30㎝，深さ25㎝を測る。中からは11点の剝片石器が出土した。サメの歯牙を模倣して製作されたと推察される異形石器が４点含まれている。

遺物出土状況　床面及び複式炉やピットの底面から出土したのは，縄文土器片32点，石器９点である。184図３に示した縄文土器は，複式炉中軸線上の床面に口縁部を密着させて，伏せた状態で出土した。185図１の香炉形土器と186図１の注口土器は，複式炉の土器埋設部西側の床面に押し潰された状態でまとまって出土している。また，本住居跡のＰ１・７周辺の床面からは，表面に煤が付

着した状態の楕円礫，南東壁際の周溝付近では角礫が３個並んだ状態で見つかっている。この他，堆積土中から縄文土器片340点，土師器片１点，石器45点が出土した。縄文土器と石器のほとんどは住居跡堆積土のℓ１から出土している。

したがって，土屋根の崩落後に形成されたくぼ地を埋める際に，これらの遺物を土と一緒に投棄したものと推察される。一方，土師器片は検出面付近から出土しているため，本住居跡に伴うものではないと考えている。

遺物　183～186図，187図１～15に縄文土器を示した。183図１は炉体土器で，ほぼ完形に復元された深鉢形土器である。胴下部が膨らみ，胴上部から口縁部にかけて外反する器形を有している。文様は，胴上部と胴下部に確保された施文域に，幅広の調整沈線で描出されている。胴上部の施文域には，沈線区画の縄文帯で横Ｓ字状のアルファベット文が描かれている。この施文域の上端には，波状の沈線が巡り，口縁端部との間に幅狭い無文帯を形成している。また，胴下部にも沈線区画の縄文帯によって描かれたＳ字状のアルファベット文が認められるが，これは正位に描かれたものと横位に描かれたものが交互に配置されている。地文はＬＲの原体で施された単節斜縄文である。この土器の文様は，口縁部を下にした逆位の状態で眺めると，同時期の典型的な文様構成になる。

183図２～８は，複式炉内及び床面出土の破片資料である。２・４～８は深鉢形土器，３は注口土器と推察される。文様は沈線区画の縄文帯や稜線区画の無文帯で描出されているが，具体的な図形は不明である。地文はいずれも単節斜縄文が施されている。

184図１・２は，大型の深鉢形土器である。文様は，稜沈線で区画された縄文帯によって描かれている。いずれも胴上部に施文域を有し，１にはU字状，２には逆「の」字状のアルファベット文が施されている。地文は，ＬＲの原体を使用した単節斜縄文である。

184図３は，口縁部が４単位の波状口縁を呈し，胴下部が膨らむ器形の深鉢形土器である。底部付近は欠損している。文様は稜沈線で描かれた楕円形区画で，波状口縁の波頂部間に配置されている。この楕円形区画は，縦に３個並んだ状態で１単位を構成し，器面全体で計４単位描かれている。楕円形区画の大きさは一定で，かつ各単位間は等間隔を保っていることから，最下段の楕円形区画は器形上の制約受けて，隣接するもの同士がかなり接近した状態で施文されている。そのため，楕円形区画の間は，縦長の粘土瘤を貼付したように器面が盛り上がっている。また，文様施文域の下端には，波状の沈線が施されており，底部付近の地文域と明瞭に区分している。地文はＲＬの原体で施文された単節斜縄文である。

185図１は把手付きの香炉形土器である。胴上部と胴下部に膨らみをもち，その側面には環状把手が計４個取り付けられている。この把手は左右対称の位置にあるため，上下の環の中に紐を通すことが可能である。口縁部は土器の最上部を覆う器壁の前面側に開口し，楕円形の窓枠状を呈している。

器壁の遺存状態を見ると，同大の開口部がその反対側に存在していたとは考えられず，単口であると判断している。土器の最上部には，沈線区画の縄文帯で文様が描かれている。口縁部に沿う沈

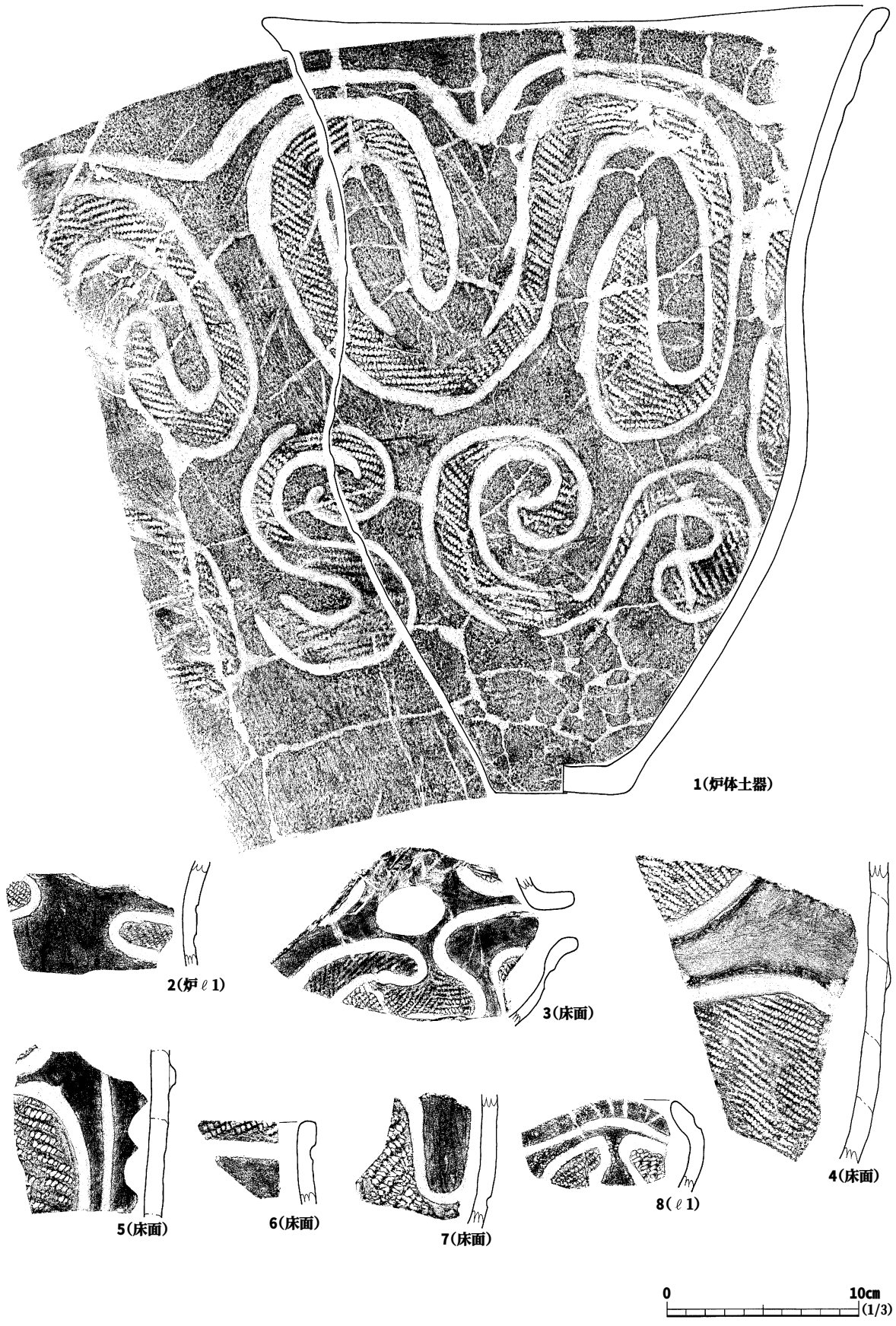


図183　156号住居跡出土遺物(1)

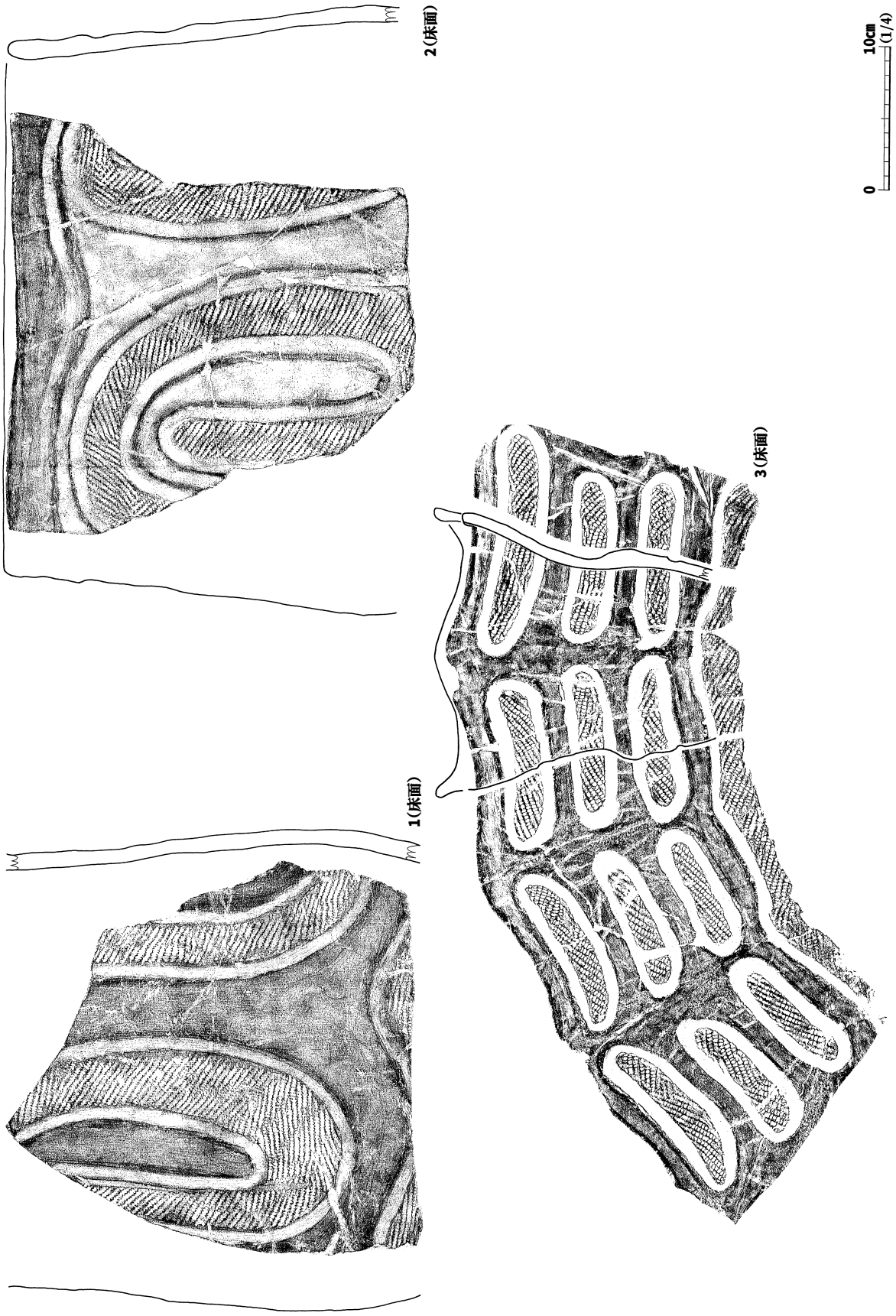


図184　156号住居跡出土遺物(2)

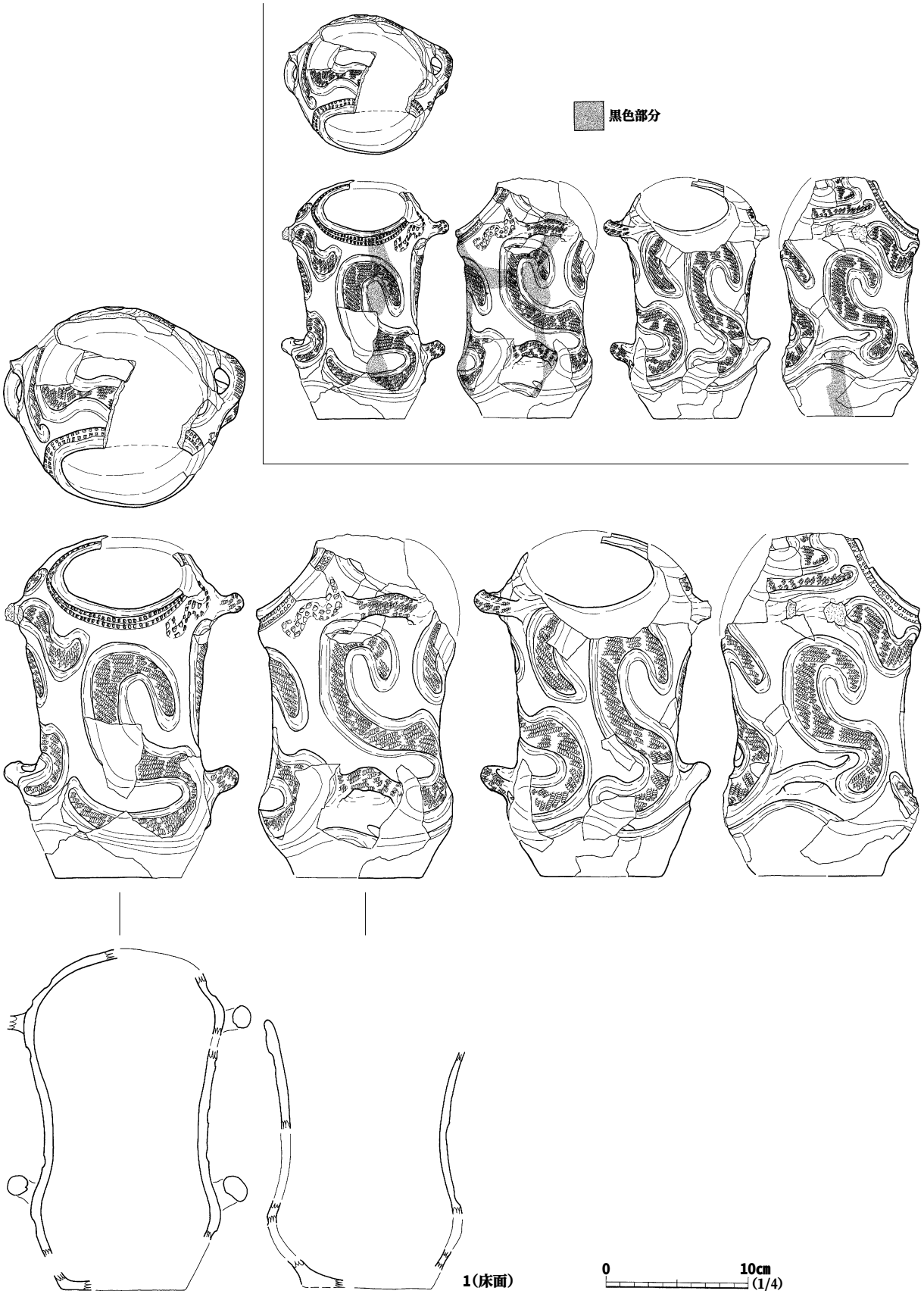


図185　156号住居跡出土遺物(3)

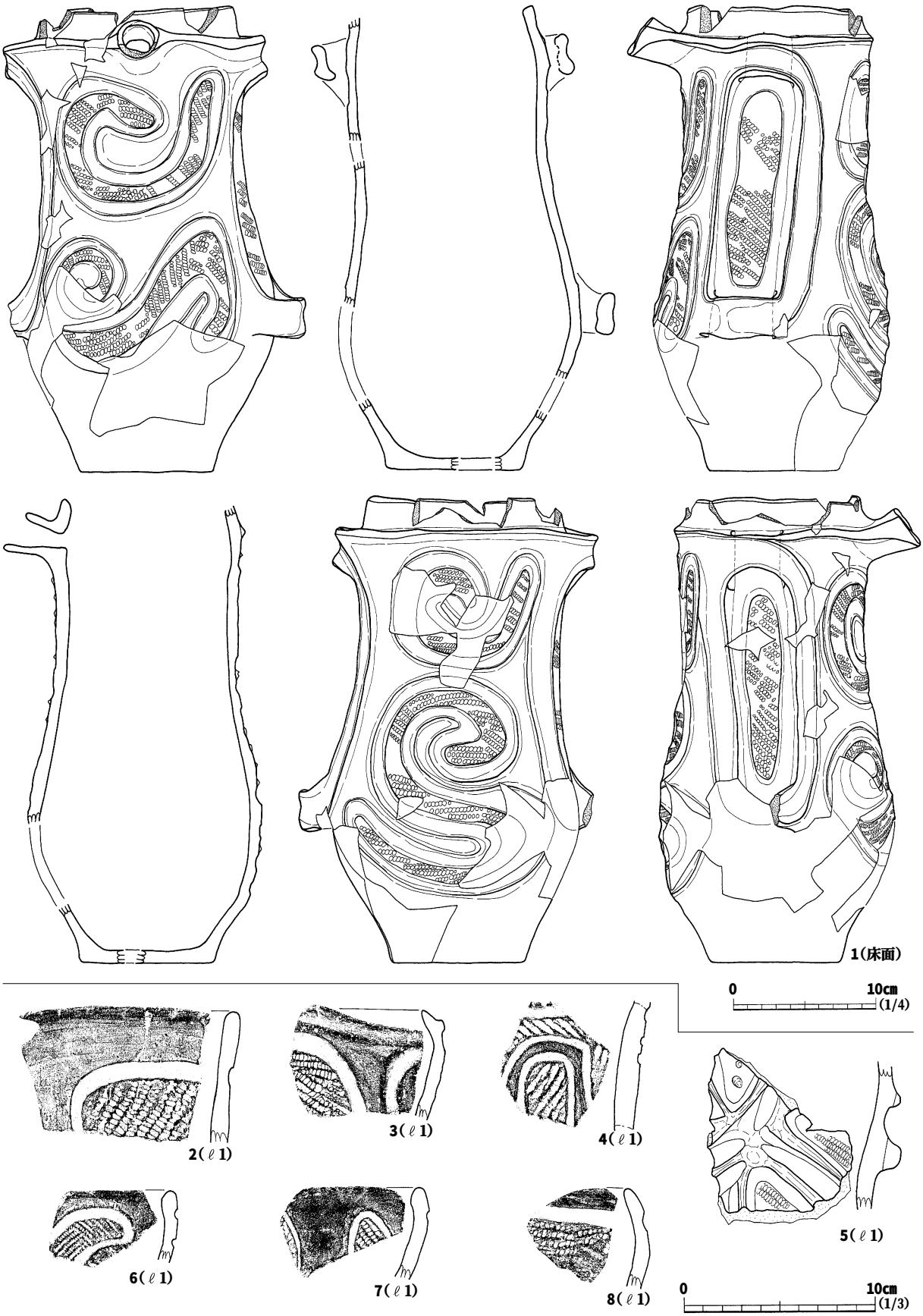


図186　156号住居跡出土遺物(4)

線の中には，細い角棒状の工具によって施された２列の刺突文が観察される。胴部には，沈線区画の縄文帯によってＳ字状のアルファベット文が描かれている。文様施文域の下端には，波状の沈線が施文される。地文はＬＲの原体を使用した単節斜縄文で，文様間は小石などを使って，丁寧に磨き上げられ，光沢を放っている。このミガキ調整は入念に行われており，そのため，器厚は３㎜前後と非常に薄くなっている。胎土には砂粒をあまり含まない精選された粘土が使われ，焼成は非常に良好である。

なお，185図右上に示したように，この土器の把手部から底部にかけては，黒褐色に変色した縦帯状の範囲が認められる。また，胴上部の把手下には，同様の変色範囲が横帯状に観察される部分がある。これは，土器に取り付けられた紐の痕跡と推察される。前述のように，本住居跡は故意に火を付けて廃絶されているため，この紐は火熱を受けて炭化し，土器の表面に帯状の痕跡を残したものと推察される。この変色範囲が蛇行しているのは，紐が緩んだ状態で炭化したためと推察される。

186図１は把手付きの注口土器である。同時期の深鉢形土器と同様に，胴下部に膨らみをもつ器形で，注口は胴上部の前面にあり，液体を注ぎ出しやすいように，若干上向きに作られている。環状把手は，胴上部と胴下部の膨らんだ部位の側面に計４個取り付けられており，左右対称の位置にある。したがって，上下の環の中に紐を通すことが可能である。

文様は沈線区画の縄文帯で描出され，胴上部にはＣ字状，胴下部にはＳ字状のアルファベット文が配置されている。地文はＬＲの原体を使った単節斜縄文で，文様間は丁寧に磨り消されている。胎土には砂粒をあまり含まない精選された粘土が使われている。

186図２～８，187図１～15に堆積土出土の破片資料を示した。186図２・３・６・７，187図２・３・５～８は沈線区画の縄文帯によって文様を描くものである。186図４は沈線区画の無文帯，187図４は稜沈線区画の無文帯で施文しているが，具体的な図形は不明である。186図５は，２本単位の隆線が一点に集まるような文様を描くもので，文様間には縄文や刺突文が観察される。186図８，187図９は，口縁直下に沈線で区画された幅狭い文様帯を有する資料である。187図１は口縁端部が平坦に面取りされ，その直下に１条の凹線が巡っている。この凹線の接点部は，突起状に張り出している。187図10～15は地文に細かい条線文を施す資料で，粗製土器の可能性が高い。

187図16～28に石器を示した。16～19は，鮫歯形の異形石器である。両面は丁寧な押圧剝離によって調整されている。表面右側縁はやや内湾ぎみに，左側縁は外湾ぎみに調整され，先端は中軸線から若干ずれている。両側縁の下端部は外側に張り出し，基部は丸みを帯びている。これらは平面形や大きさがほぼ同じであることから，規格性があると考えられる。これらの素材は16・18がチャート，17が珪質凝灰岩，19が玉髄を用いている。これらの機能については不明であるが，19の表面右半部の稜線には磨耗痕が観察されたことから，何らかの使用痕跡の可能性が高い。20はチャート製の石鏃未製品である。基部側は粗い調整のまま残されている。21は珪質頁岩製の縦長剝片である。腹面側の両側縁及び打面部に微細剝離痕が観察される。22は圧砕岩製の石核である。石質は極めて粗質であることから，剝片剝離を行うための石核ではない。炉の石組部から出土していること

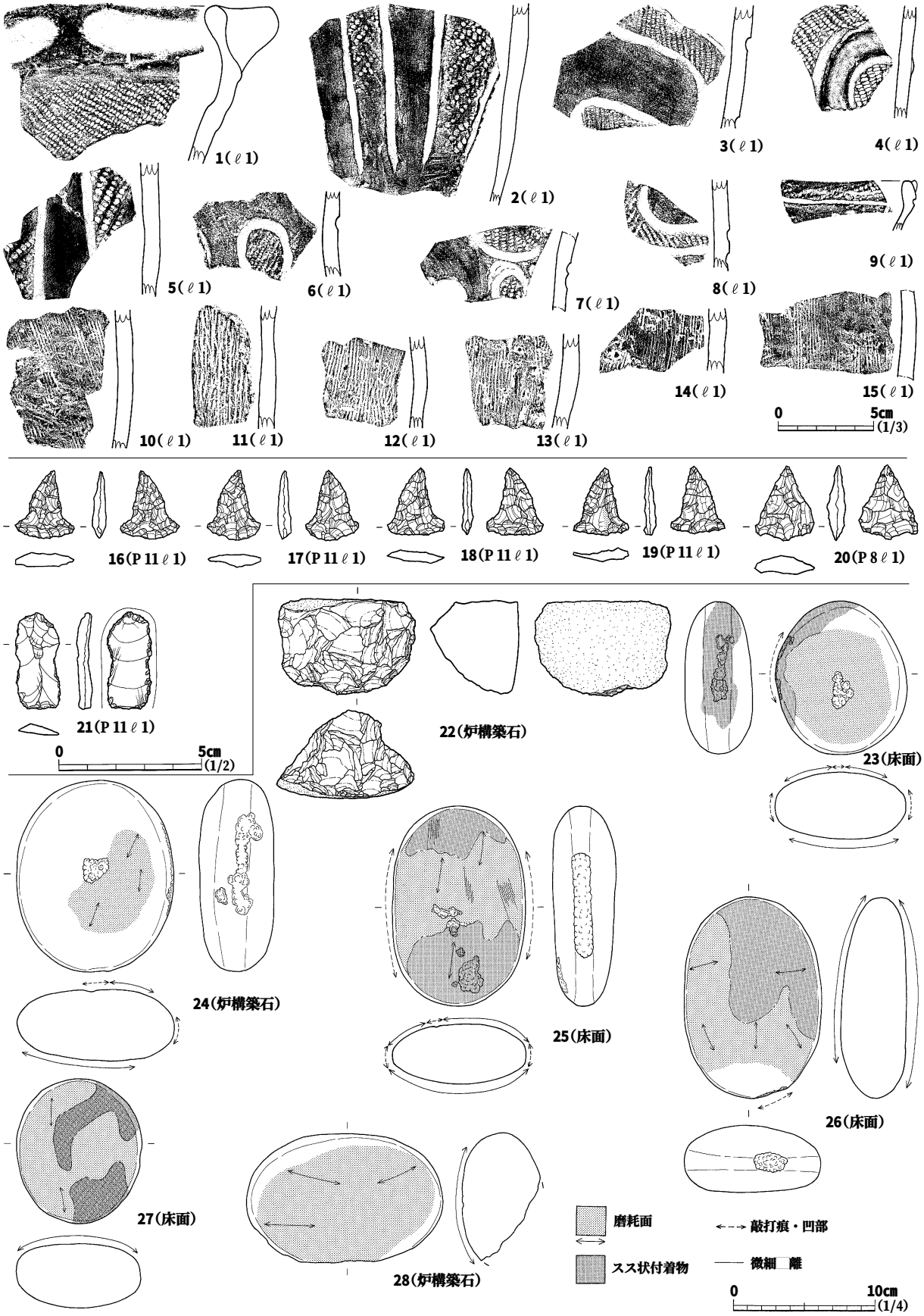


図187　156号住居跡出土遺物(5)

から，本資料は複式炉構築の際に礫を荒割りし，形状を整えたものと推察される。

187図23～25は器面中央に浅い凹部を有するアプライト製の磨石類である。側面部には部分的に敲打痕が観察された。表面には部分的に磨耗痕が認められた。26～28は，表面に磨耗痕のみが観察された磨石類である。28は粗質の流紋岩製，26・27はアプライト製である。また床面から出土した磨石類のなかで23・25・26・27の表面にはスス状の付着物が見られる。

まとめ　定型化した複式炉と，五角形に配置された主柱穴を有した竪穴住居跡である。主柱穴には新旧の２時期があり，周壁の修築が行われていたため，上屋の建て替えが行われたものと推察される。また，堆積土の状態から，本住居跡の屋根は土をふいた土屋根であった可能性が高いことが判った。廃絶に際しては，深鉢形土器を床面に伏せて置き，炉体土器の中に溜まった土を取り除いてから，上屋に火を放って焼却している。土屋根が崩落して凹地化した時点で柱の抜き取りが行われ，最後の凹地が人為的に埋められている。この時，縄文土器や石器も一緒に投棄された。

出土遺物の中には，香炉形土器，注口土器，鮫の歯牙を模したとみられる石器が含まれている。上記のように本住居跡は，同時期の他の住居跡と違う意図的な廃絶方法がとられており，出土遺物の中にも特殊なものが含まれることから，集落の中で特別な地位にあった人々が居住していた可能性が高いと考えている。帰属時期は，複式炉の炉体土器及び床面出土土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と推定される。　（小　暮）

158号住居跡　ＳＩ158　（図188～190，写真133・134・359）

位置・検出面　北区中央東側の平坦面，Ｘ・Ｙ29・30グリッドに位置する竪穴住居跡である。本住居跡の北側には1498号土坑，南側には1474号土坑，南西側には1393号土坑が隣接している。検出面は，本住居跡より新しい124号住居跡の床面である。暗黄褐色土で埋没した東西3.5m，南北3.8mの不整な長方形の輪郭を検出した。遺存する堆積土の層厚が薄かったため，複式炉の石組の一部が露出した状態で確認された。

重複　124号住居跡，1399・1498号土坑，12号溝跡と重複し，それらよりも古い。

堆積土　ℓ１は２種類の土が撹はんされたように混じり合う混土である。また，周溝内に堆積したℓ２，複式炉を埋めるℓ３・４も混土である。したがって，本住居跡は住居廃絶後，人為的な投棄土により埋没した可能性が高い。

平面形・規模　遺構の東側が12号溝跡によって壊されているが，東西方向に長い不整な隅丸長方形を呈するものと推察される。竪穴の規模は，現状の壁上端で東西遺存長4.0m，南北長3.9mを測る。竪穴の中軸線はＮ55°Ｅで，複式炉の中軸線とほぼ直交している。

床面　基本土層のＬⅣに形成されている。若干の凹凸は認められるが，ほぼ平坦な状態である。複式炉の周辺から北壁，西壁にかけての広い範囲が非常に硬く締まっていた。

周壁　床面から64～75°のやや急な角度で立ち上がり，遺存壁高は６～16㎝を測る。東側の壁は，12号溝跡によって壊されていた。

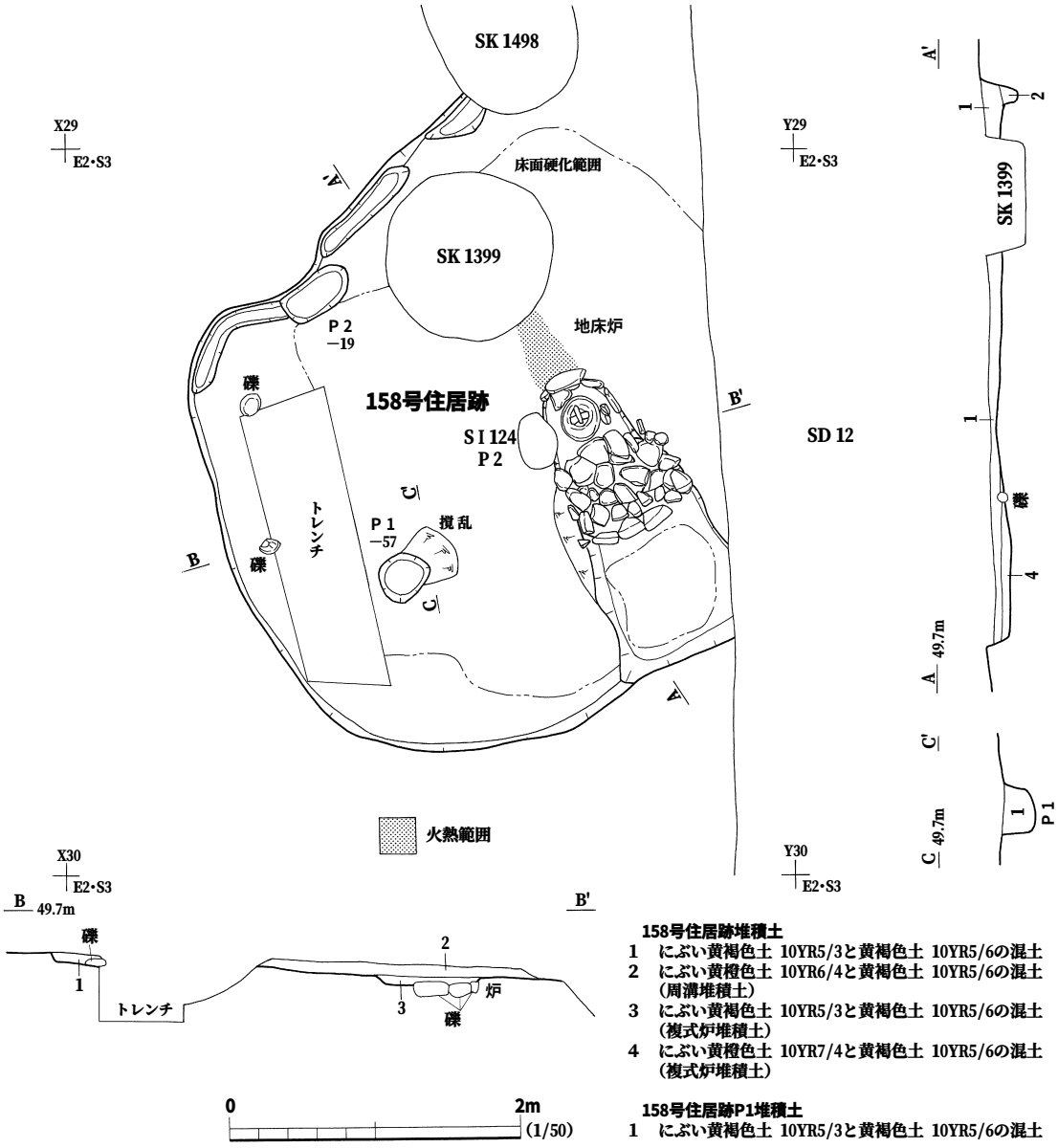


図188　158号住居跡

周溝　北壁際に小溝が確認された。２カ所で途切れ，東側は1498号土坑によって壊されていた。周溝の上端幅は10～20㎝，床面からの深さは２～14㎝を計測する。堆積土は混土であるため，人為的に埋められたものと判断している。

複式炉　複式炉は床面の南東側，Ｐ１の東側に構築されていた。前庭部の南東隅は12号溝跡によって壊されていたが，炉の遺存状態はおおむね良好であった。台形状の土器埋設部に楕円形状の石組部，さらに台形状の前庭部が続く形態を呈している。複式炉の構築順序は「炉体土器埋設→石組部底石設置→土器埋設部縁石設置・石組部側壁構築」である。

（規模）全長が215㎝，最大幅が推定約120㎝を測る。炉の中軸線はＮ28゜Ｗで，真北から若干西に振れている。

（堆積土）ℓ１～３は石組部と前庭部を埋める堆積土で，２種類の土が撹はんされたように混じり合

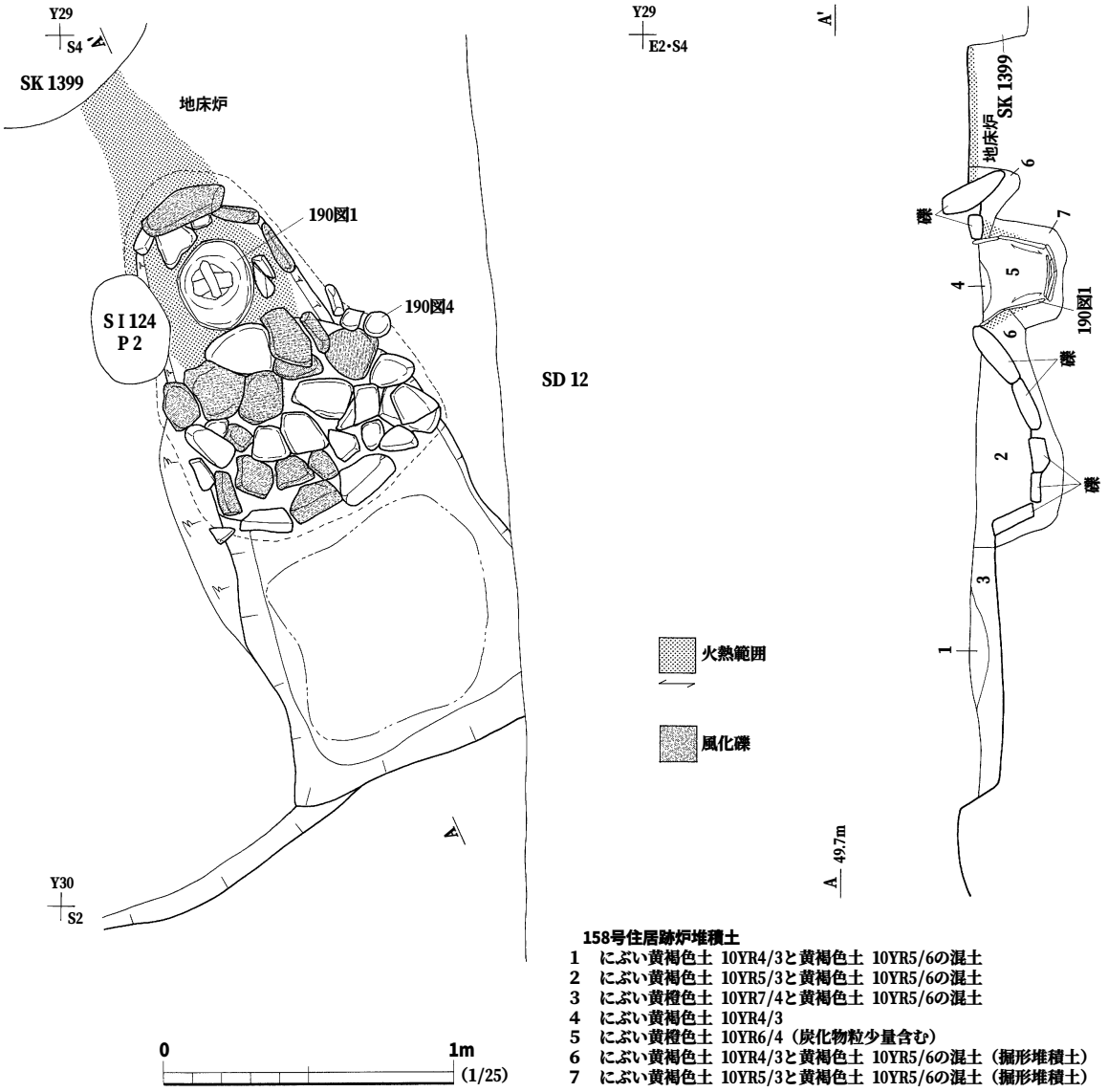


図189　158号住居跡炉

う混土である。また，ℓ４・５は，土器埋設部の炉体土器の中で確認された黄褐色系の土で，同種の土は基本土層の中には認められない。したがって，本炉は人為的な投棄土によって，一気に埋められたものと推察される。なお，炉体土器の底部内面は黒褐色を呈していたため，本来は黒褐色の粘質土が堆積していた可能性が高い。炉の廃絶に際して，取り除かれたものと推察される。ℓ６は土器埋設部縁石及び石組部の掘形堆積土，ℓ７は土器埋設部炉体土器の掘形堆積土である。

（土器埋設部）開口部の直径33㎝の炉体土器に接して長さ15㎝前後の角礫を敷き，その外側に，長さ20～30㎝の直方体状の礫を並べて縁石としている。内側の敷石はほとんどが抜き取られていた。また，土器埋設部の北側に位置する縁石は特に大きな板状の礫が使われ，炉体土器側に少し傾いて，庇状に設置されていた。炉体土器は胴部下半が欠損しており，敷き詰められた土器片の上に設置されていた。土器埋設部の南北方向の長さは51㎝を測る。炉体土器周辺の土は，よく火熱を受けて，強く焼土化している。

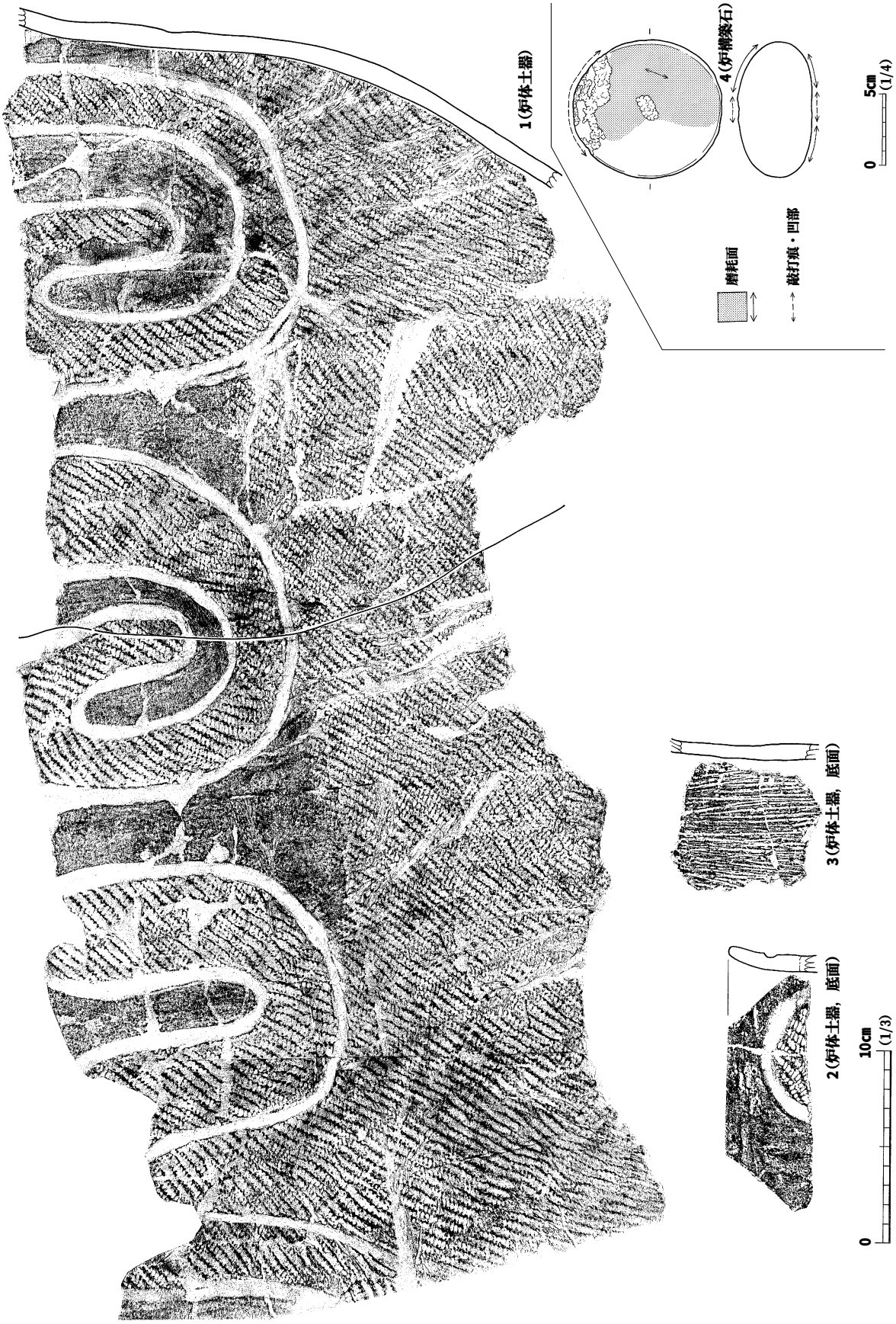


図190　158号住居跡出土遺物

（石組部）掘形内に偏平な礫を敷き並べて底面とし，その上に板状の礫を並べて外傾する側壁を造っている。北側の壁面には，少し大きめの礫が３個用いられ，底面から緩やかな傾斜で土器埋設部に接するように設置されていた。一方，前庭部側の構築礫はほぼ直立しており，石組部底面と前庭部底面の接する部分には，高さ13㎝の段が形成されていた。石組部の最大幅は85㎝，南北方向の長さは74㎝を測る。礫は表面に強い火熱を受けてもろくなったものが多い。なお，凹石２点が構築礫として転用されていた。

（前庭部）側壁がほぼ直立する箱形状を呈している。規模は最大遺存幅97㎝，南北方向の長さ90㎝を計測する。遺存壁高は，南・西壁が約15㎝と高く，東壁が約５㎝と低くなっている。底面は，ほぼ全面が硬化していた。

地床炉　床面が直接被熱した焼土化範囲が確認された。被熱した範囲は，複式炉の土器埋設部から，同炉の中軸線上を北西に向かって舌状に延びている。南北方向の長さは45㎝，東西方向の長さは18～42㎝を測り，床面からの深さは３㎝を測った。

主柱穴　確認された主柱穴は，複式炉の西側に位置するＰ１のみである。その他は，1399号土坑や12号溝跡によって壊されたものと推察している。このＰ１と複式炉の距離は，約１ｍである。Ｐ１の平面形は不整な楕円形で，断面形はＵ字状を呈している。規模は，長径38㎝，短径31㎝，深さ57㎝を計測する。堆積土は混土で，柱痕は確認されなかった。また，Ｐ１の東側には抜き取り痕があることから，本住居跡の柱は住居廃絶に伴って，抜き取られた可能性が高い。

ピット　主柱穴の他に，小さいピットが１個検出された。Ｐ２は北壁の周壁際に位置しており，長径50㎝，短径24㎝の平面楕円形を呈している。床面からの深さは19㎝を測った。用途は不明である。

遺物出土状況　床面及び複式炉やピットの底面から出土したのは，縄文土器16点，石器３点である。また，西壁付近の床面では，楕円形の自然礫が２個出土した。この他，堆積土中から縄文土器６点，石器７点が出土している。

遺物　190図１～３に縄文土器を示した。１は，胴下部に膨らみをもつ器形の深鉢形土器である。文様の施文域は胴上部で，沈線区画の縄文帯によって逆「の」字状の図形が描かれている。地文はＲＬの原体を使用した単節斜縄文で，文様間は磨り消される。２は，沈線区画の縄文帯によって文様を描出しているが，具体的な図形は不明である。３は条線文が施された資料で，粗製土器の可能性が高い。

190図４は，アプライト製の磨石類である。表裏両面とも磨耗しており，中央に円形の敲打痕が認められる。側面にも，アバタ状の細かい敲打痕が観察される。

まとめ　定型化した複式炉を有する竪穴住居跡である。複式炉の中軸線上には地床炉が認められた。廃絶に際しては，複式炉の炉体土器の中に堆積していた黒褐色土を取り除き，さらに柱を抜き取った上で，住居跡全体を埋めている。本住居跡の帰属時期は，炉体土器や床面出土土器の年代観から，縄文時代中期末葉の大木10式期古段階と推察される。　（小　暮）

159 号 住 居 跡　ＳＩ159 （図191，写真135・136・359）

位置・検出面　北区北東部のほぼ平坦面，Ｗ・Ｘ26・27グリッドに位置する竪穴住居跡である。本遺構の周囲には535・536・547・548・549・550・1183・1538・1547・1565号土坑があり，北側には151・155号住居跡，東側には16号溝跡が隣接している。検出面は152号住居跡の床面であり，周壁は存在しない。径は4.2m程と推測される。

重複　151・152・155号住居跡と重複し，いずれよりも本遺構が古い（ＳＩ151重複関係参照）。

堆積土　周溝内堆積土のみであり，暗褐色土と黄褐色土の混土層を確認した。

平面形・規模　東側では周溝が確認できないが，およそ不整な楕円形である。長軸方向はほぼ南北方向であり，その規模は現状の周溝上端で長軸の南北長4.2mを測る。

床面　基本土層のＬⅣに形成され，ほぼ平坦である。踏み締まりと推察される硬化した部分は，確認できなかった。

周壁　152号住居跡により破壊され，遺存していない。

周溝　ほぼ一巡すると考えられるが，東側では確認できなかった。上端幅は８～26cm，床面からの深さは４～14cmを測り，一部に認められる小穴の深さは22cm程を測る。

複式炉　複式炉は床面の南側，Ｐ１とＰ４のほぼ中間に構築されているが，152号住居跡の炉に壊されている。かろうじて，石組部掘形と前庭部の一部，土器埋設部が残存していた。

（規模）全長は約225cm，最大幅が94cmを測り，炉中軸線はＮ41 ℃Ｗである。

（堆積土）掘形堆積土を含めて４層に分かれる。いずれも土層断面の観察から人為堆積と考えている。

（土器埋設部）口径約28cmの炉体土器に接して，敷き並べた礫を抜き取ったと考えられる小穴が検出された。土器周辺の土は赤く焼けている。

（石組部）掘形の一部が残存するが，大部分は152号住居跡の炉を構築する際に，壊されたと考えている。床面からの深さは18cmを測る。

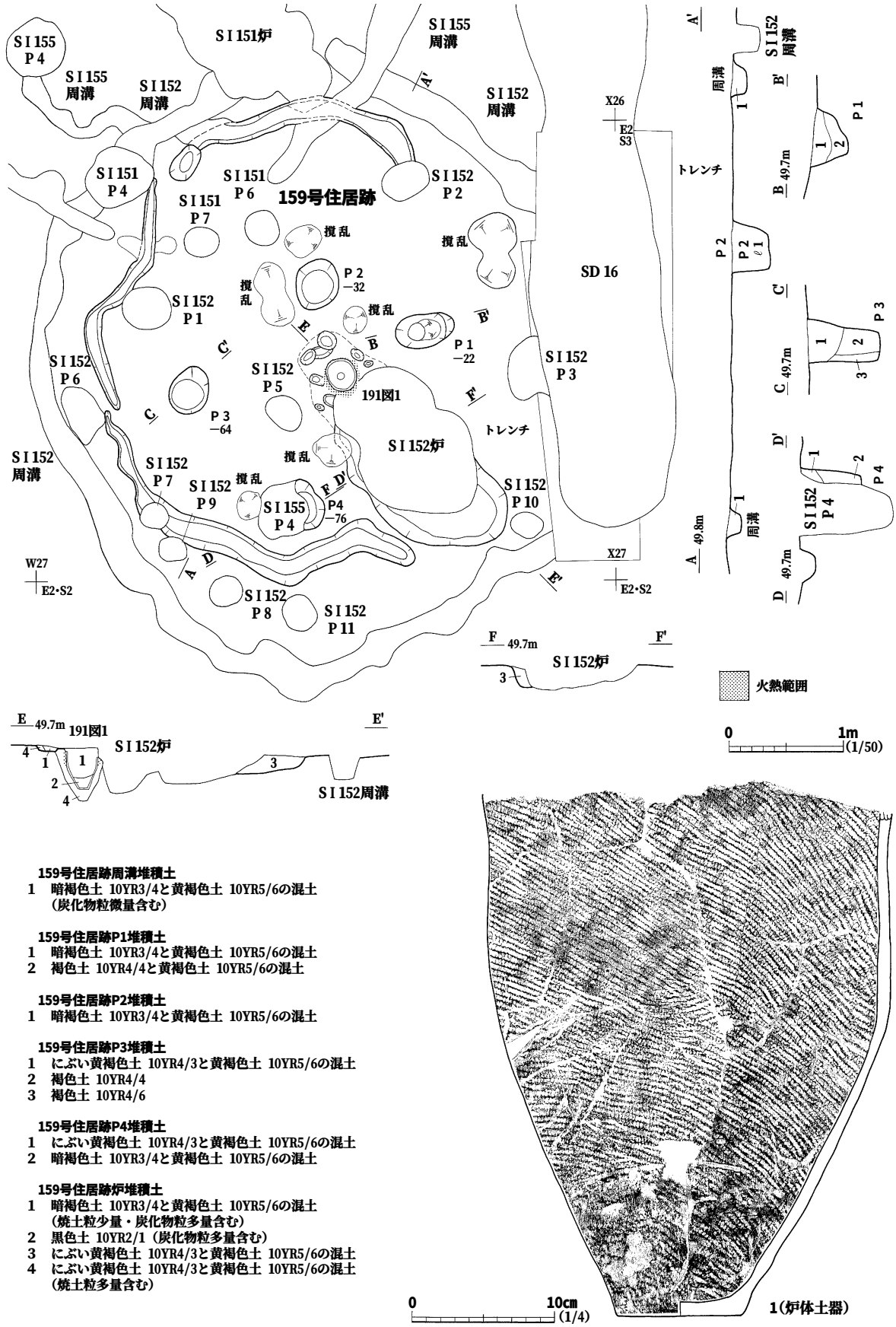
（前庭部）掘形の約半分が残存する。残りの約半分は152号住居跡の炉を構築する際に，壊されたと考えている。およそ楕円形状を呈し，残存している掘形の東西幅は約80cmを測る。

主柱穴　東にＰ１，北にＰ２，西にＰ３，南にＰ４の４個が確認された。Ｐ４は152号住居跡のＰ４に壊されている。各柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.0m，Ｐ２－Ｐ３間が1.5m，Ｐ３－Ｐ４間が1.5m，Ｐ４－Ｐ１間が1.8mを測る。Ｐ１～３の規模は長径41cm～52cm，Ｐ４は残存する部分で45cmを測る。床面からの深さは32cm～76cmを測る。堆積土の観察では，柱痕は確認されず黄褐色土を多く含むことから，柱を抜き取った後埋め戻したものと考えられる。

遺物出土状況　複式炉のℓ２から縄文土器２点が出土している。

遺物　191図１に縄文土器を示した。炉体土器に転用された深鉢形土器である。胴下部が膨らむ器形で，胴上部から口縁部にかけてを欠損している。文様は，地文の単節斜縄文のみ観察される。

まとめ　本遺構は152号住居跡の内側に存在し，東側では周溝が確認できなかった。152号住居跡



159号住居跡周溝堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒微量含む）

159号住居跡P1堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

159号住居跡P2堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

159号住居跡P3堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　褐色土 10YR4/4
3　褐色土 10YR4/6

159号住居跡P4堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

159号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土粒少量・炭化物粒多量含む）
2　黒色土 10YR2/1（炭化物粒多量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土粒多量含む）

図191　159号住居跡と出土遺物

構築によって複式炉は壊されているが，一部残存する形状から，およそ定型化した複式炉と考えられる。土器埋設部を取り囲むように，台形状に配置された４個のピットを主柱穴としたが，周溝の径や炉の大きさから考えると，間尺が狭く掘形が浅い。本遺構は，152号住居跡に建て替える前の住居跡と考えられるが，この建て替え前に155号住居跡が構築されていることから，遺構番号を付して報告した。帰属時期は，炉体土器の年代観から，縄文時代中期末葉と推察される。　（高　橋）

第２節　掘立柱建物跡・柱列跡

遺　　構（図192～224，写真147～206・213～215）

北区の２次調査において確認した掘立柱建物跡及び柱列跡は，それぞれ64棟及び25列である。これらの遺構について，全ての遺構配置図を付図３・４に，その略図を図192の下段に，柱間尺による建物跡の配置を同図上段と図193に示した。また，各遺構の計測値は，表９・10に示した。この他，各遺構を構成する柱穴とは判断できなかったが，北区からは多数の小穴が確認されている。この小穴については，本章第７節と付図を参照いただきたい。本節では，これら掘立柱建物跡と柱列跡について，総括して報告する。

１．建物群の分布について

馬場前遺跡の北区には，中央部よりやや南側を東西に走り，東端で大きく屈曲する12号溝跡を中心として，数条の溝跡が存在する。12号溝跡の北側の南北延長線上には３号溝跡があり，その西側には16・19号溝跡が，やはり南北方向に走っている。さらに，東側には，３号溝跡とほぼ平行に走る１・２号溝跡がある。また，12号溝跡屈曲部東側には18号溝跡が東西方向に走り，さらに，北西側には，やはり東西方向に走る８号溝跡がある。本遺跡北区の掘立柱建物跡と柱列跡は，これらの溝跡の位置と方向に密接に関わっている。

確認した建物跡は，その位置により，東西方向に走る12号溝跡の北側(内側)と南側(外側)に大きく２分することができる。さらに，12号溝跡の内側では，三つに細分される。一つは，中央部の34号建物跡を中心とした一群である。この一群を構成する建物跡の大半は，柱間が６尺前後であり，34号建物跡も柱間６尺を測る。この群内で７尺を超える建物跡は37号建物跡の１棟のみである。遺構密度が濃く，他の建物跡との重複関係を有するものが多い。

二つめは，これらの西側に位置する。５～９号建物跡が該当し，ここの建物群も柱間６尺の建物跡である。遺構密度はさほど認められない。

三つめは，中央部の建物群と12号溝跡の間に位置する建物群であり，18～20・26・27号建物跡が相当する。これらの建物跡群も，中央部の建物群と同様，６尺前後の間尺をもって構成されている。また，遺構密度は濃く，同一箇所に何棟もの建物跡が重複して存在している。

一方，12号溝跡の外側では，東半及び西半にそれぞれ建物群が位置する。東半の建物群は，41・48～49・50・61～63号建物跡であり，柱間６尺前後と７尺を超える建物跡で構成される。西半には，

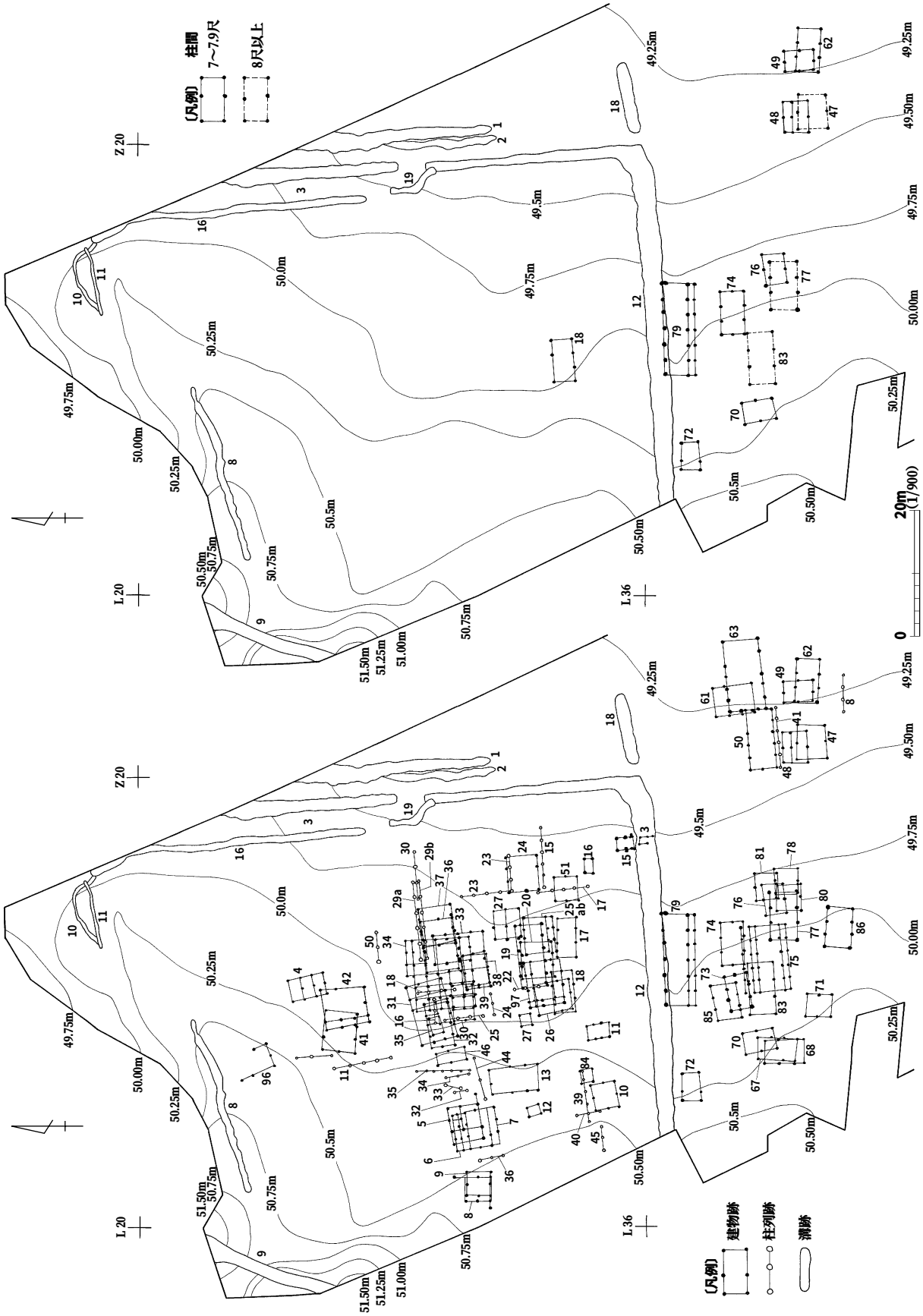


図192　柱間尺による建物跡の配置(1)

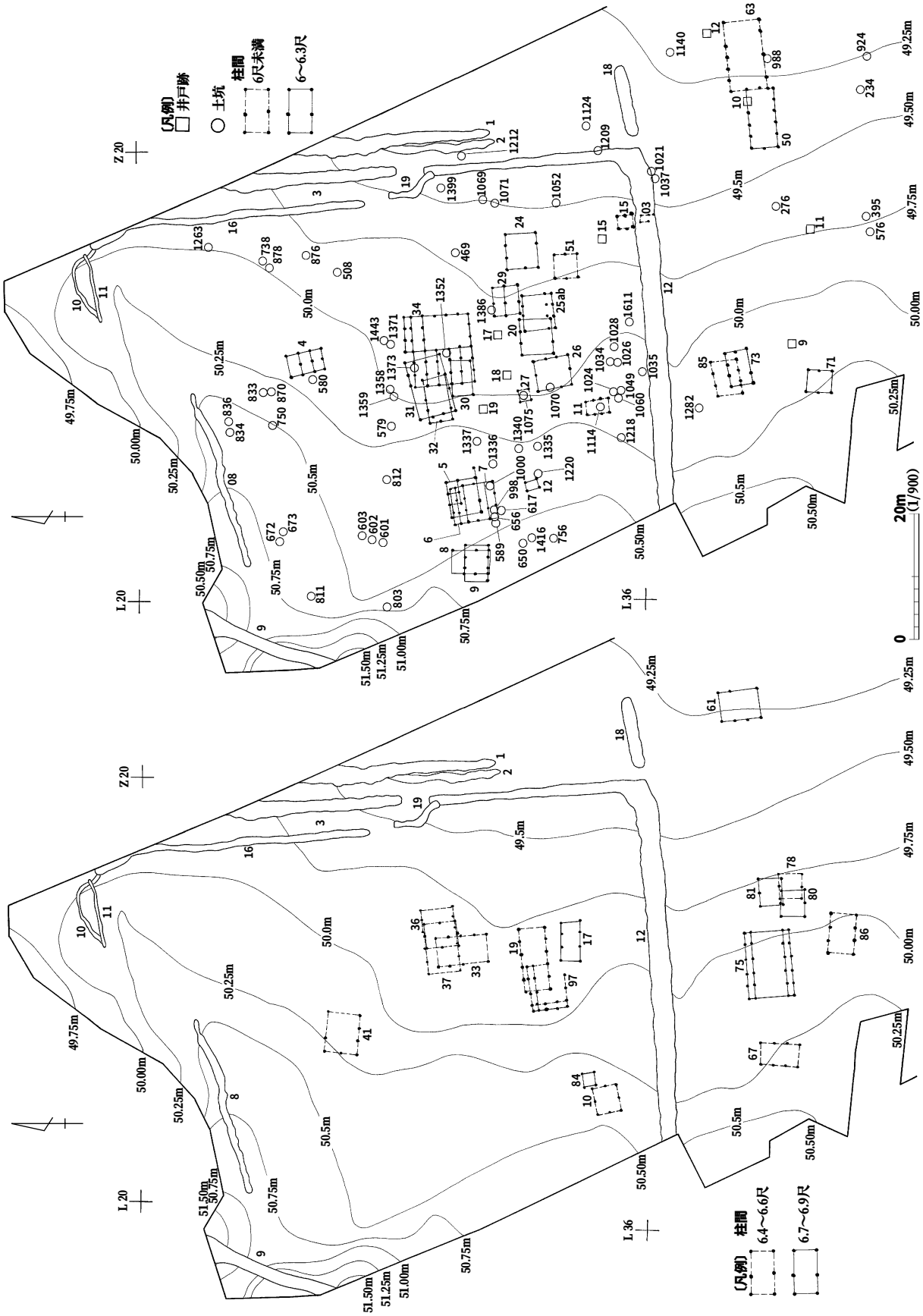


図193　柱間尺による建物跡の配置(2)

表７　建物跡と重複する遺構一覧

近世の土坑との重複

旧	新	（時期）
ＳＫ656（ＳＫ617→ＳＫ656）	ＳＢ６	17Ｃ初頭以降
ＳＫ617・ＳＫ998	ＳＢ７	17Ｃ初頭以降
ＳＫ1386	ＳＢ29	17Ｃ中頃以降
ＳＫ1352・ＳＫ1373	ＳＢ34	17Ｃ中頃以降

建物跡同士の重複

新	旧	（時期）
ＳＢ26	ＳＢ19	
ＳＢ25	ＳＢ20	
ＳＢ34	ＳＢ30	17Ｃ前半以前
ＳＢ34	ＳＢ33	17Ｃ前半以前
ＳＢ36	ＳＢ37	
ＳＢ38	ＳＢ39	
ＳＢ41	ＳＢ42	

溝跡との重複

新	旧	（時期）
ＳＤ12	ＳＢ79	17Ｃ前半以前

67・68・70・73～81・83・85・86号建物跡がある。この建物群を構成する建物跡は，12号溝跡内側の建物群とは対照的に，柱間が７尺を超える建物を中心として構成されている。

以上のように，北区の掘立柱建物跡群は，大きくこの５つの分布域を構成している。これらは後述するように，柱間からみた建物跡の位置と密接に関わっている。なお，柱列跡については，明確な分布の傾向は把握できなかった。ただ，29・30号柱列跡のように建物跡と平行して柱穴が並ぶものや，15・17・23号柱列跡のように建物を区画するように配置されたものも見られる。

２．各遺構との重複について

次に，他遺構との重複関係から導き出される建物跡の時期について，述べていく。各遺構との重複関係については，表７に示した。

以下，各遺構から出土した遺物より，重複する建物跡の年代を推察していきたい。ただ，時期を特定できる遺構が少なく，かつ出土遺物もわずかであるため，時期を決定できた遺構は少ない。

６・７号建物跡と重複し，これらより古い617号土坑からは，17世紀初頭に比定できる志野焼の茶碗が出土している。このため，６・７号建物跡は，17世紀初頭以降の建物跡と考えられる。また，1352・1386号土坑からは，いわゆる古寛永と呼ばれる銭貨が出土しているため，それぞれの遺構より新しい29・34号建物跡は，17世紀中頃以降の建物跡と判断できる。さらに，34号建物跡を構成する柱穴の１基からは，1,600年前後に比定される瀬戸・志野の丸皿が出土しており，前述の時期を補強している。したがって，34号建物跡より古い30・33号建物跡は，17世紀初頭以前の遺構であると判断できる。

この他，31号建物跡からは，18世紀前半に比定できる相馬焼の高台付椀が出土しており，30号建物跡の年代を裏付ける。また，12号溝跡からは，1620～1630年を上限とする遺物が出土していることから，重複する79号建物跡は17世紀前半以前の遺構と推測される。

以上の結果，少なくとも６・７・29・34号建物跡の時期は，古くても17世紀初頭であり，逆に30・33・79号建物跡の時期は，新しくても17世紀前半と判断できる。

３．柱間，長軸方向について

前項で述べた建物跡の時期を基準とし，桁行の柱間と長軸方向を考慮して作成した図が，図192上段と図193である。ただ，柱間については，等間隔をもつものが少なく，平均値をとっている。また，柱間及び長軸方向による分類から漏れた建物跡については，割愛している。次に，各図に示した建物跡についてその特徴を述べていく。

①柱間７～7.9尺及び柱間８尺以上の建物跡（図192上段） 前項で年代の下限が推定された79号建物跡は，柱間７～7.9尺の建物類に含まれる。これ以外で柱間７～7.9尺の建物跡は，18・48・49・62・70・72・74・76号建物跡があり，79号建物跡と合わせて９棟を数える。これらの建物跡は，さらに，その長軸方向がほぼ東西方向を示す48・72・74・79号建物跡と，これらより長軸方向がやや北の西南西－東北東を示す18・76号建物跡と，西北西－東南東の62号建物跡，及び長軸方向が南北方向となる49・70号建物跡に分けることができる。建物の構成では，梁行が１間ないし２間であり，桁行が２間ないし３間のものが多い。79号建物跡は，桁行６間で南側に庇をもつ構造を呈する。

柱間８尺以上の建物跡は，47・77・83号建物跡の３棟であり，これらの建物跡も，長軸方向がほぼ東西方向を示す47・77号建物跡と，西南西－東北東を示す83号建物跡とに分かれる。これらの建物構成では，梁行が１間であり，桁行２間ないし３間のものが多い。

これらのことから，柱間７～８尺の建物群は，東西方向に長軸をもつ47・48・72・74・77・79号建物跡と，これに直交するように南北方向に長軸をもつ49号建物跡の計７棟のグループと，長軸方向がやや北を向く18・62・76・83号建物跡と，南北方向に長軸をもつ70号建物跡の計５棟のグループの，二つに分けられる。

前者の建物跡群では，74・79・77号建物跡の３棟が，南北に整然と並び，さらに一部の柱列では，きれいに南北方向にそろっているのが認められる。また，同様に48・49号建物跡でも，その北側柱列が揃い，72号建物跡と79号建物跡の南側柱列もそろっている。このようなことから，48号建物跡と重複している47号建物跡を除いて，これら６棟の建物跡は，同時期に形成されたものであり，これらが一群となって構成されていたものと推測できる。

なお，これら７棟の建物跡は，74号建物跡を除いて，柱穴内に柱痕が認められず，全て抜き取られている。特に，77号建物跡は，建物を構成する８基の抜き取り痕が全て同一の北西方向を示している。これは，本建物に梁が掛かっていた状態，おそらく上屋が遺存していた状態で，南東方向に建物と引き倒した結果と判断している。この有り様は，後述する後者のグループを構成する５棟の建物跡とは，対照的となっている。

後者グループの５棟の建物群は，18・83号建物跡の２棟が，南北に間隔を開けて並んでいるが，これ以外の建物跡では，このような企画性は認められない。また，これら５棟の建物跡の柱穴内には，柱痕が認められるものが多く認められる。前述の建物跡群とは，その様相が明らかに異なっている。

これら柱間７～８尺の建物跡の年代は，出土遺物が少なく判然としないが，唯一判断できた79号建物跡が17世紀前半以前であるため，前者のグループがほぼ同一時期に推定でき，後者のグループについては，柱痕があるなど，遺存状態が比較的良好なものが多いことから，これらよりは新しい時期ではないかと推測している。

②柱間6.4～6.6尺及び柱間6.7～6.9尺の建物跡（図193下段） 前項で17世紀初頭以前と推定された33号建物跡は，柱間6.4～6.6尺の建物跡に含まれる。これ以外で柱間6.4～6.6尺の建物跡は，10・19・

36・37・41・67・78・86・97号建物跡であり，33号建物跡と合わせて10棟確認された。この内，柱間6.6尺の建物跡は，19・33・36・37・41・86号建物跡であり，確認棟数が多い。さらに，これらの建物跡は，長軸方向が西南西－東北東を示す10・19・37・78・97号建物跡と，西北西－東南東を示す41・86号建物跡，南北方向に長軸をもつ33・67号建物跡に分かれる。これらの建物群での規則的配置はあまり導き出せないが，長軸方向が同じである37号建物跡と19号建物跡，もしくは東側柱列がそろう33号建物跡と19号建物跡などは，どちらかが同時期に形成されていた可能性が推測される。柱穴内に柱痕を認めた建物跡が多く，建物を構成する一部の柱穴にのみ柱痕が認められたものもある。梁行１ないし２間，桁行３間の建物跡が多く見られ，19・37号建物跡は桁行５間の比較的大型の建物跡である。

柱間6.7～6.9尺の建物跡は，17・61・75・80・81・84号建物跡の６棟である。これらの建物跡の長軸方向は，南北方向を示す61号建物跡を除き，基本的に西南西－東北東を示している。配置的には，南北側に庇をもつ75号建物跡と81号建物跡が，東西に整然と並び，柱間もいずれも6.9尺と一致している。さらに，これらの東側にある61号建物跡も，これら２棟と南側柱列をそろえている。多くの建物跡では，柱穴内に柱痕を認めたものが多い。

これらの建物群の時期は，出土遺物が少なく不明であるが，柱間6.6尺の33号建物跡が17世紀初頭以前であるため，これらより間尺が長い6.9尺前後の建物跡は，さらに古いものと推測している。

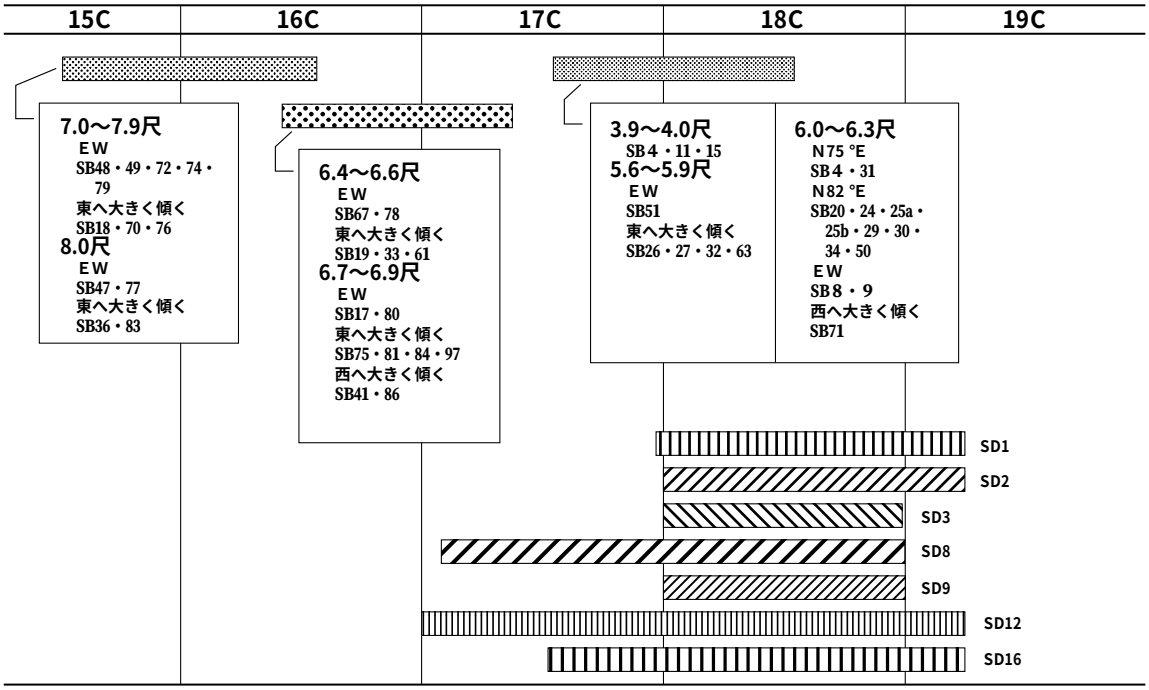
③柱間6.0～6.3尺及び柱間６尺未満の建物跡（図193上段）　今回の調査で最も多く確認できた柱間6.0～6.3尺の建物跡群である。図193上段に，これらの建物跡と，近世と思われる土坑及び井戸跡の略図を示した。

前項で17世紀初頭以後であると推定された６・34号建物跡は，柱間6.0尺の建物跡である。これ以外で柱間６尺の建物跡は，４・５・８・９・24・25ａ・25ｂ・26・30・32号建物跡であり，前述の２棟を加え計12棟である。この他，6.1～6.3尺の建物跡は，７・31・20・50・73号建物跡の５棟であり，5.9尺の建物跡は，51・63・85号建物跡の３棟である。

これらの建物跡は大半が東西方向に長軸方向をもつが，４・８・26・51号建物跡が南北方向を示す。東西方向を示すものでは，N84 °～86 °Eを示すグループ（ＳＢ20・24・25ａ・25ｂ・30・34・50・63；計８棟）と，N80 °～82 °Eを示すグループ（ＳＢ５・６・７・32・73・85；計６棟）及びN75 °Eの31号建物跡の大きく二つに分かれる。

この傾向は，各建物跡の位置と何らかの関連があると思われ，前者の建物跡は，調査区の比較的東側に存在し，後者はこれの西側に多く認められる。特に，12号溝跡で区画された範囲内にあるものでは，前者の建物跡は12号溝跡の東西方向とほぼ一致し，後者は８号溝跡西側の東西方向に一致する傾向を示す。これは，これらの建物跡と溝跡が，大きく関連していたことを示唆している。時期的には，新寛永の銭貨を出土した85号建物跡から，後者が新しく，前者が古い可能性が高い。また，区画内の建物跡では，柱穴内に柱痕を有するものが圧倒的に多いが，古い時期の可能性が高い25ａ・25ｂ号建物跡では柱が抜き取られ，新しい時期の５号建物跡の柱穴では，根固石と思われる

表８　柱間毎建物跡の推定時期一覧



礫が認められる。この他，９号建物跡のようにほぼ東西方向を向くものや，29・71号建物跡のように，柱間が一定していないものがある。

また，柱間６尺未満の建物跡では，11・27号建物跡が中央に土坑を有する。11号建物跡は1114号土坑，27号建物跡では1075号土坑である。これら２棟については，厠あるいは風呂等の居住に伴う付属施設の可能性が推測できる。

この他，12号溝跡の土橋状の高まりから確認できた３号建物跡は，橋脚の痕跡，その北側にある15号建物跡は，６脚門(正門)と判断している(図194上段参照)。特に，15号建物跡は，建て替えが認められ，当初は３・12・18号溝跡と関連した門(Ｐ１ｂ・３・４ｂ・５ｂ・６・８ｂで構成)であり，その後，16・19号溝跡及び12号溝跡からなる区画溝の変更に伴って造り替えた門(Ｐ１ａ・２・４ａ・５ａ・７・８ａで構成)と判断している。古い柱穴には，全て抜き取り痕が認められる。

４．柱列跡について

２次調査の北区において確認した柱列跡は，前述したように25列である。これらの遺構のほとんどが，掘立柱建物跡で触れた12号溝跡の内側に位置する。

分布は，前項で述べた建物跡群の周辺，個別の建物跡の周囲など多岐にわたり，傾向は見つけることができなかった。また，溝跡の外側に位置する柱列は，８号柱列跡の１基のみである。

軸長の方向でいくつかのグループに分類することは可能だが，建物跡及び各溝跡との明確な関係は見い出せなかった。柱間は4.4～10.7尺にわたる。この点に注目しても，分布及び軸長との相関関係は見い出せない。なお，25号柱列跡から，15世紀中葉と思われる青磁の稜花皿が出土している。

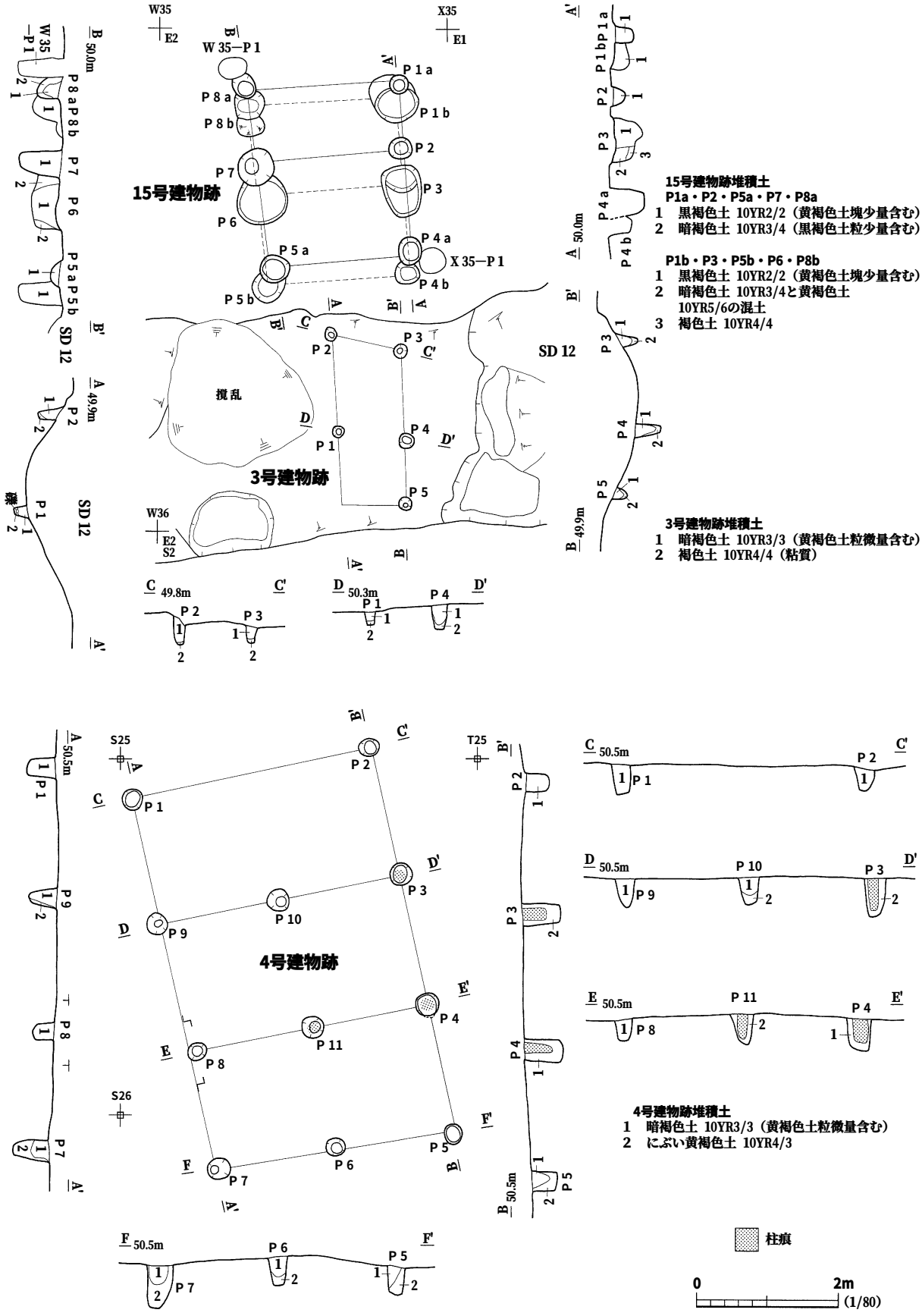


図194　３・４・15号建物跡

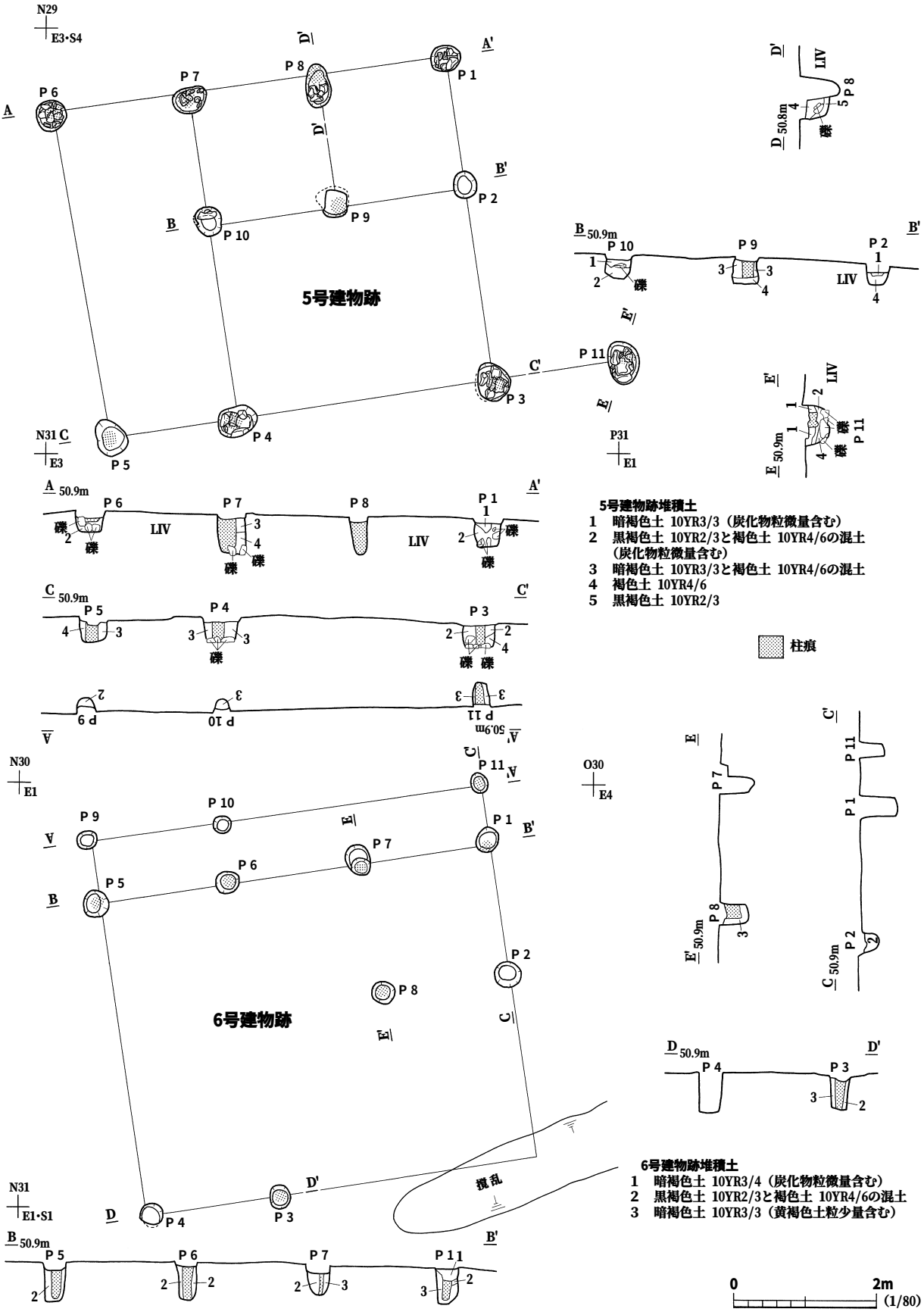

5号建物跡
6号建物跡
P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P 10
P 11
N29
E3・S4
N31
E3
P31
E1
N30
E1
O30
E4
N31
E1・S1
LIV
礫
攪乱
柱痕
5号建物跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（炭化物粒微量含む）
2　黒褐色土 10YR2/3と褐色土 10YR4/6の混土
（炭化物粒微量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/6の混土
4　褐色土 10YR4/6
5　黒褐色土 10YR2/3
6号建物跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（炭化物粒微量含む）
2　黒褐色土 10YR2/3と褐色土 10YR4/6の混土
3　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
0
2m
(1/80)

図195　５・６号建物跡

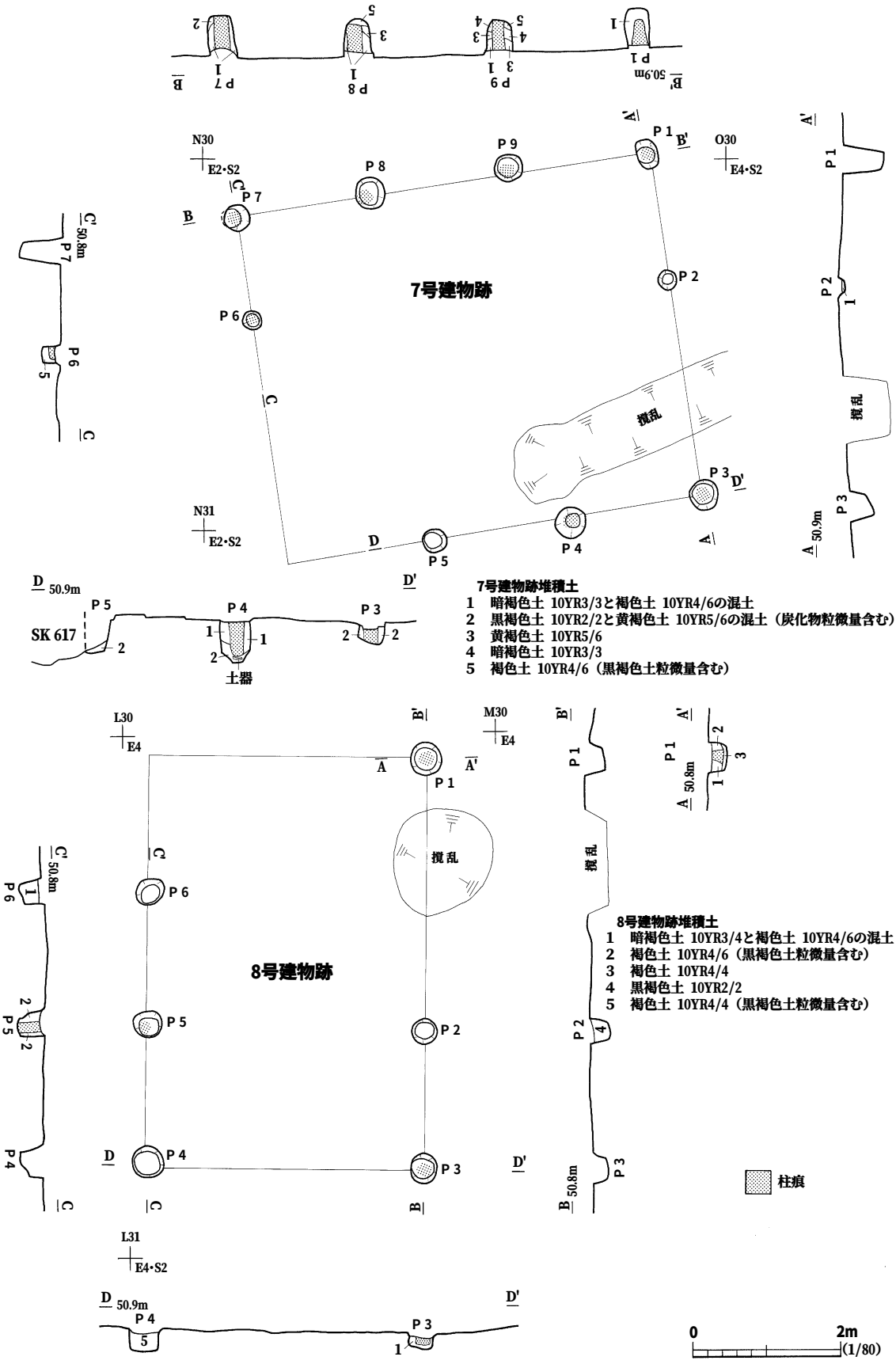

7号建物跡
8号建物跡
P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
N30
E2・S2
N31
E2・S2
O30
E4・S2
L30
E4
M30
E4
L31
E4・S2
SK 617
土器
撹乱
50.9m
50.8m
7号建物跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/6の混土
2　黒褐色土 10YR2/2と黄褐色土 10YR5/6の混土（炭化物粒微量含む）
3　黄褐色土 10YR5/6
4　暗褐色土 10YR3/3
5　褐色土 10YR4/6（黒褐色土粒微量含む）
8号建物跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と褐色土 10YR4/6の混土
2　褐色土 10YR4/6（黒褐色土粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/4
4　黒褐色土 10YR2/2
5　褐色土 10YR4/4（黒褐色土粒微量含む）
柱痕
0
2m
(1/80)

図196　７・８号建物跡

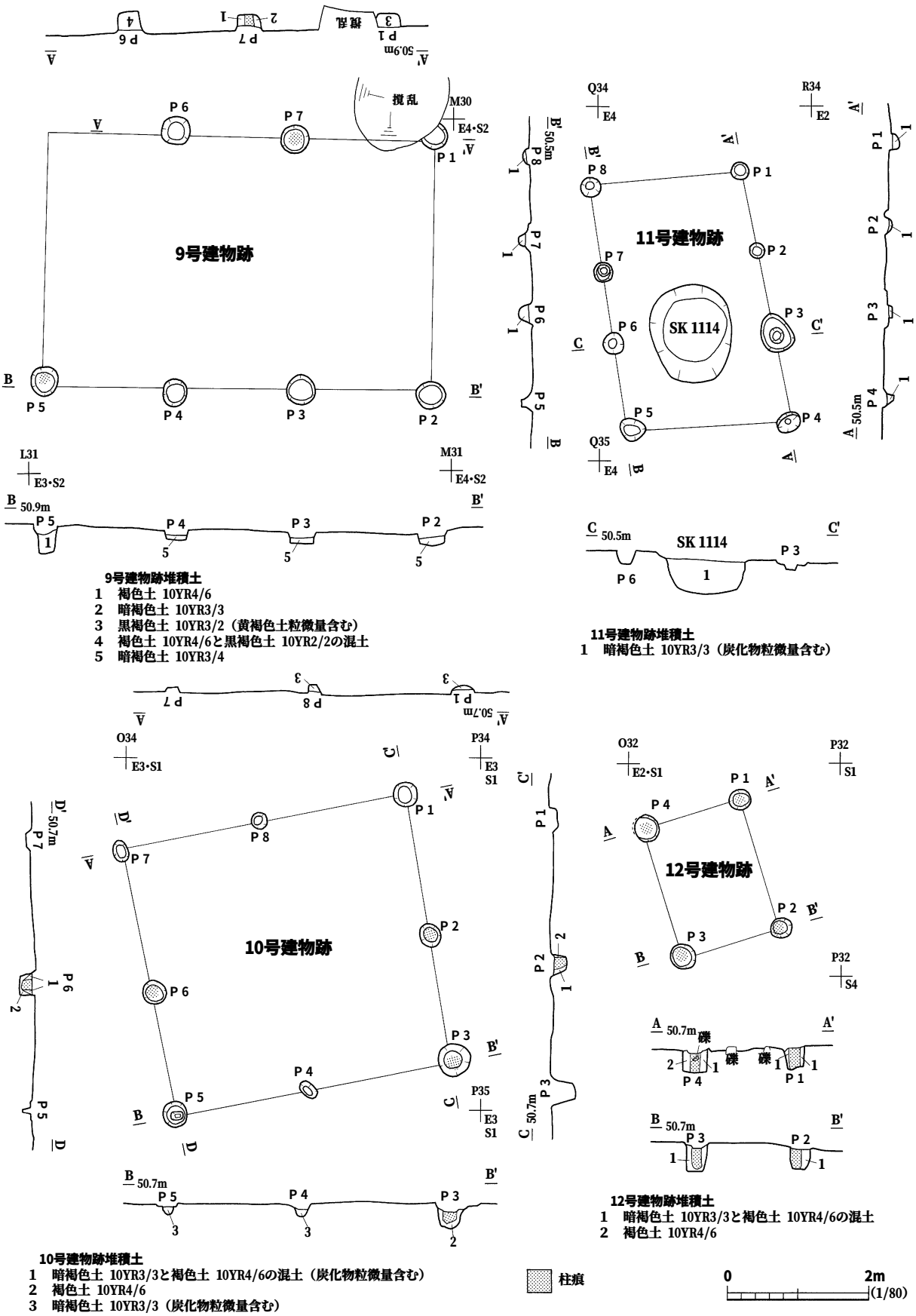


図197　９～12号建物跡

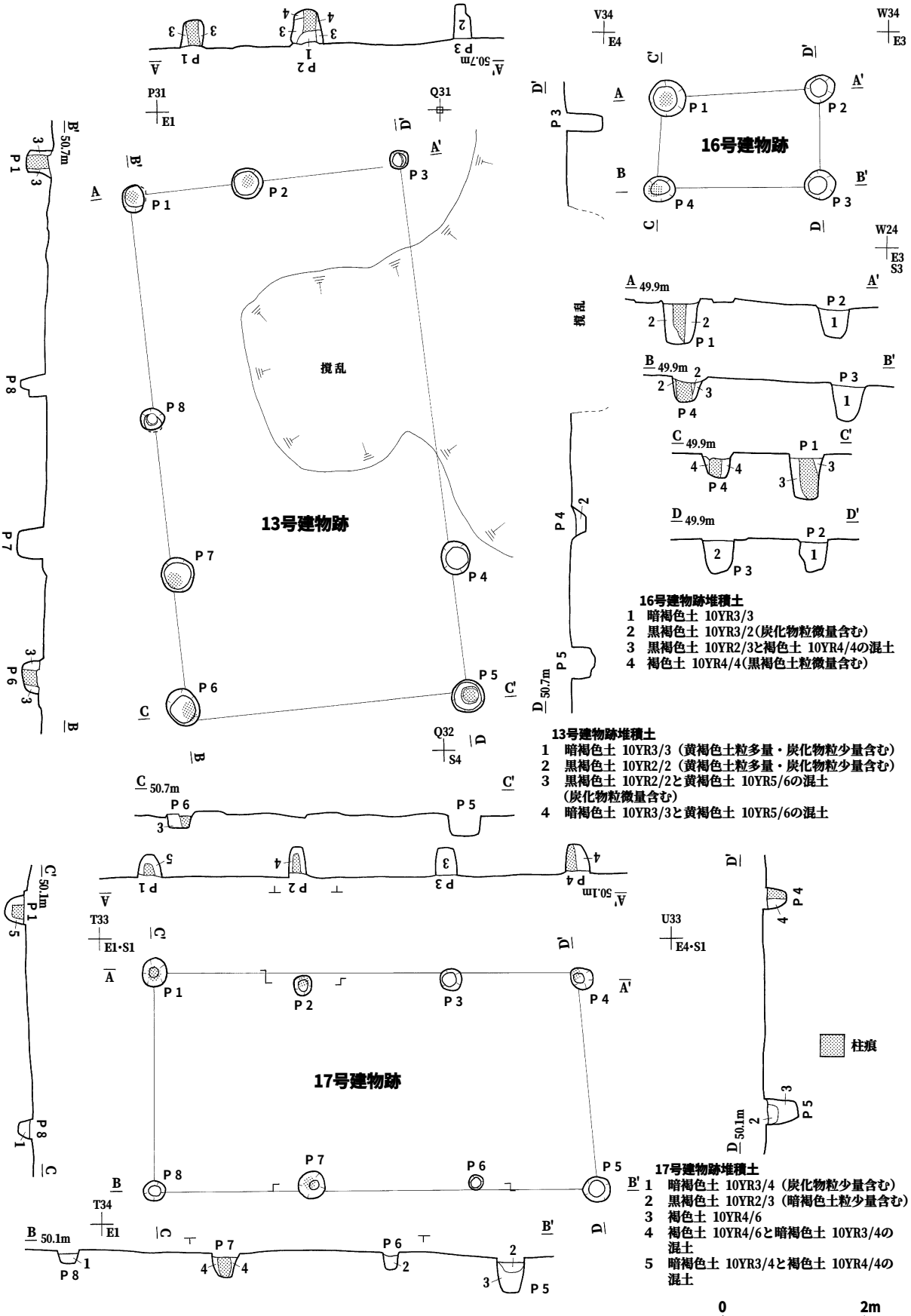


図198　13・16・17号建物跡

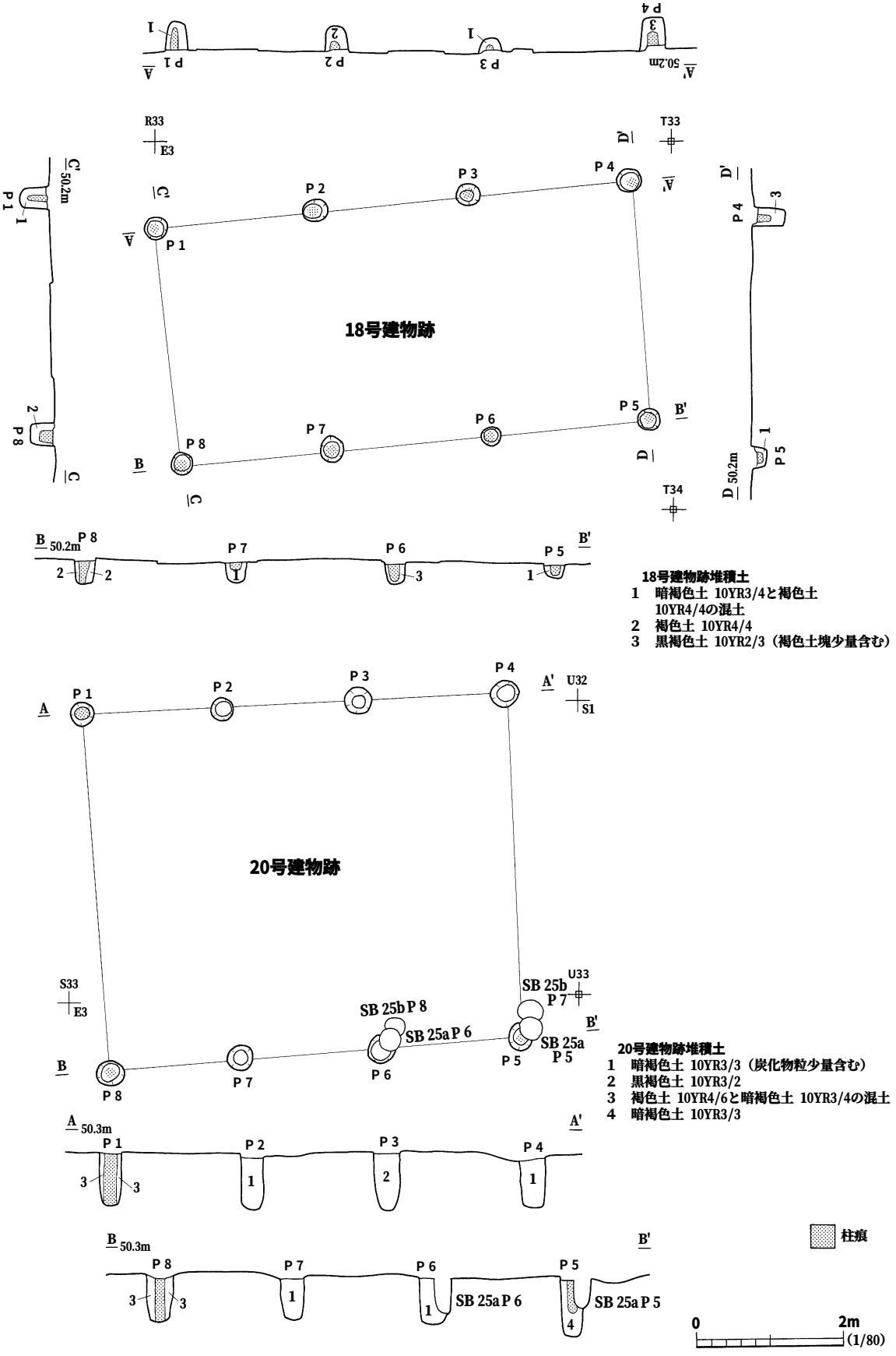


図199　18・20号建物跡

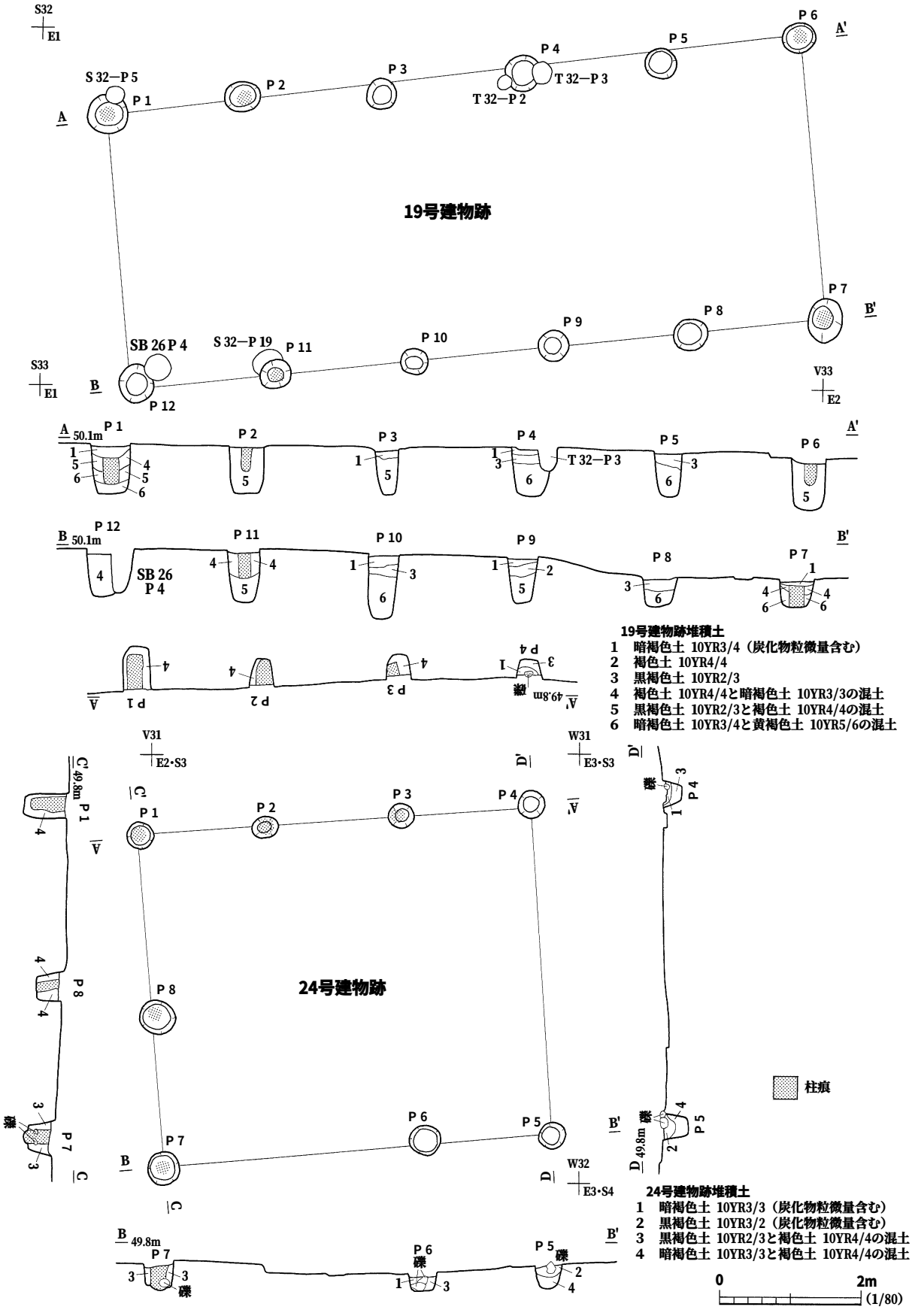


図200　19・24号建物跡

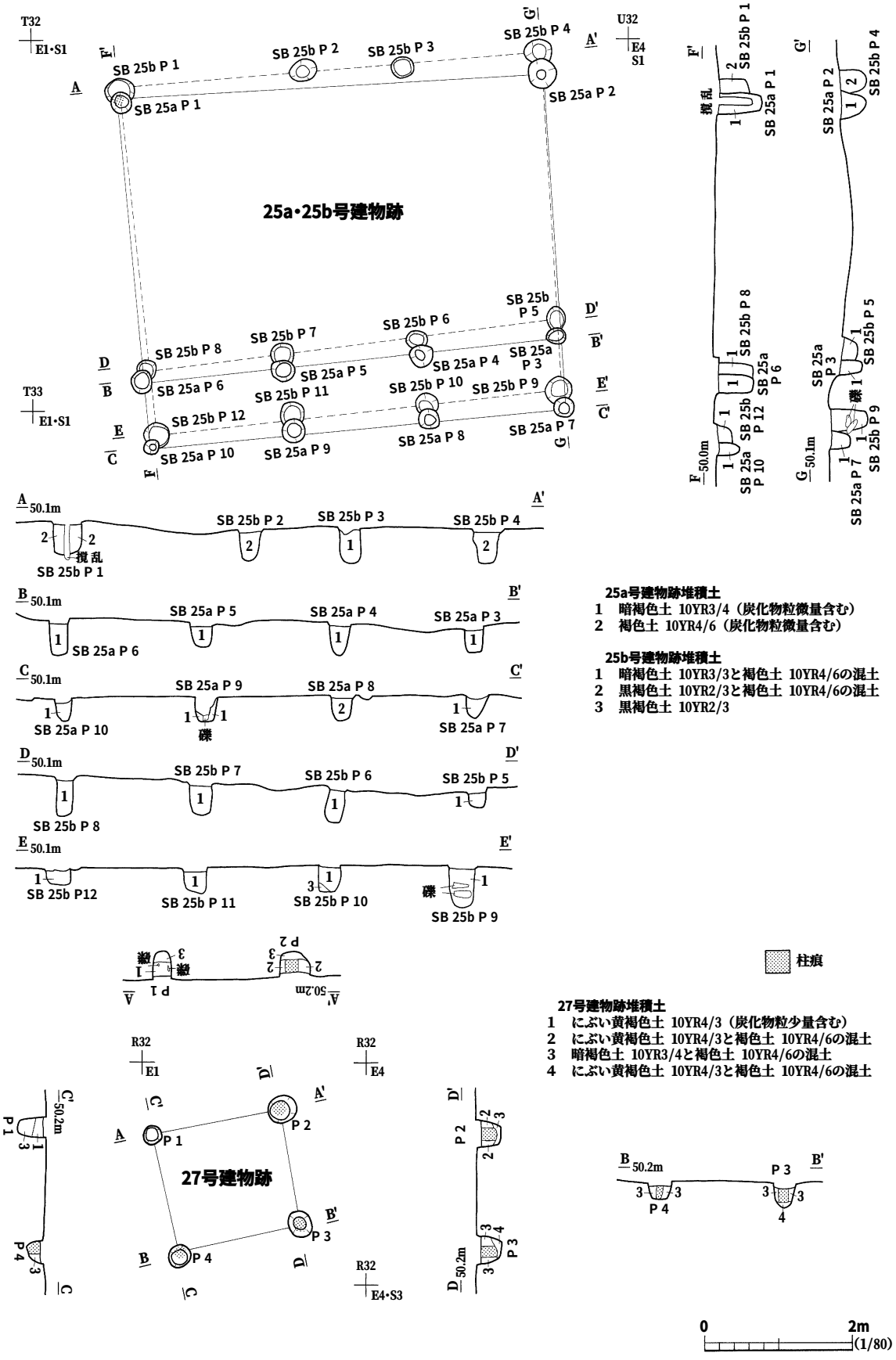


図201　25ａ・25ｂ・27号建物跡

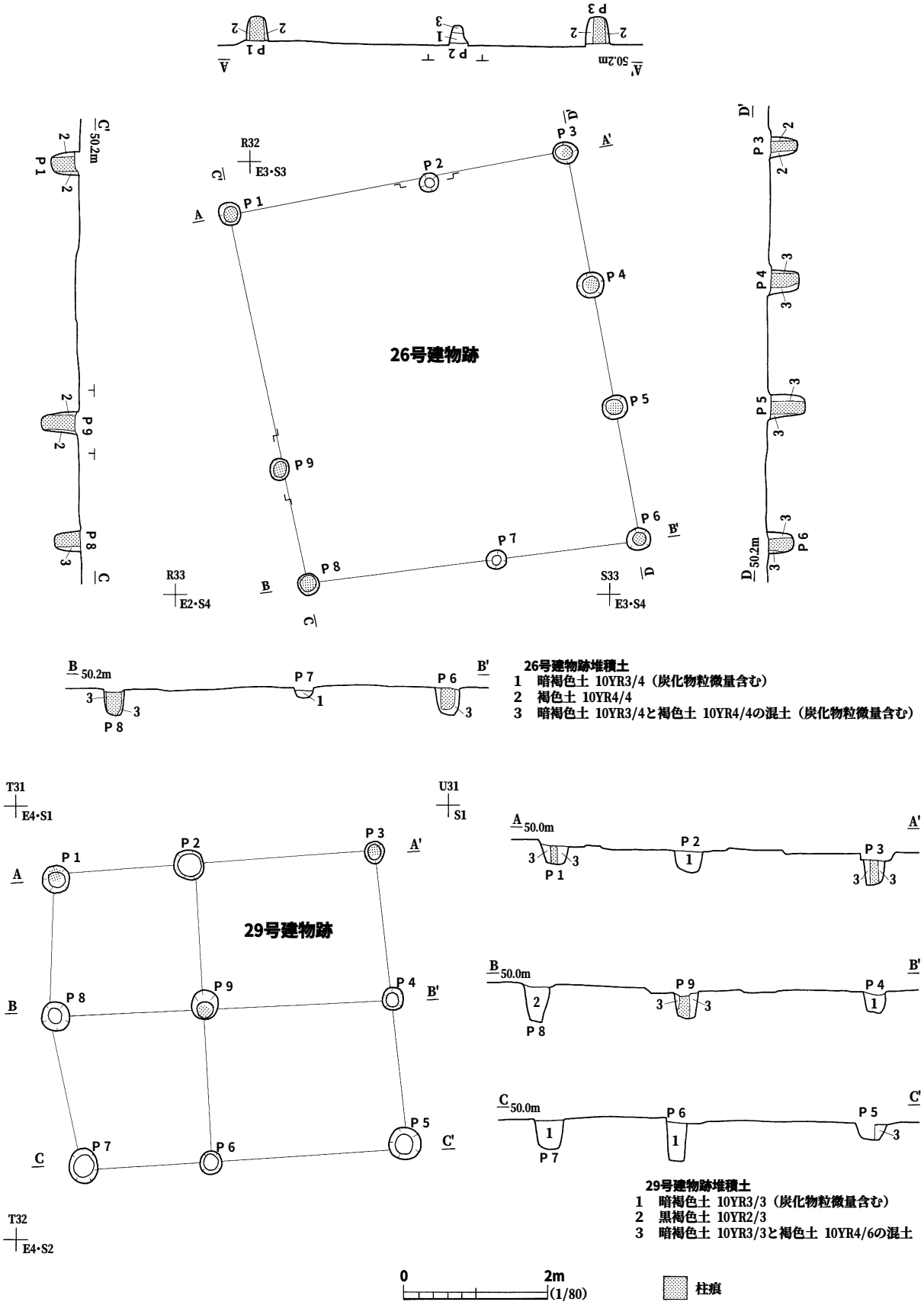


図202　26・29号建物跡

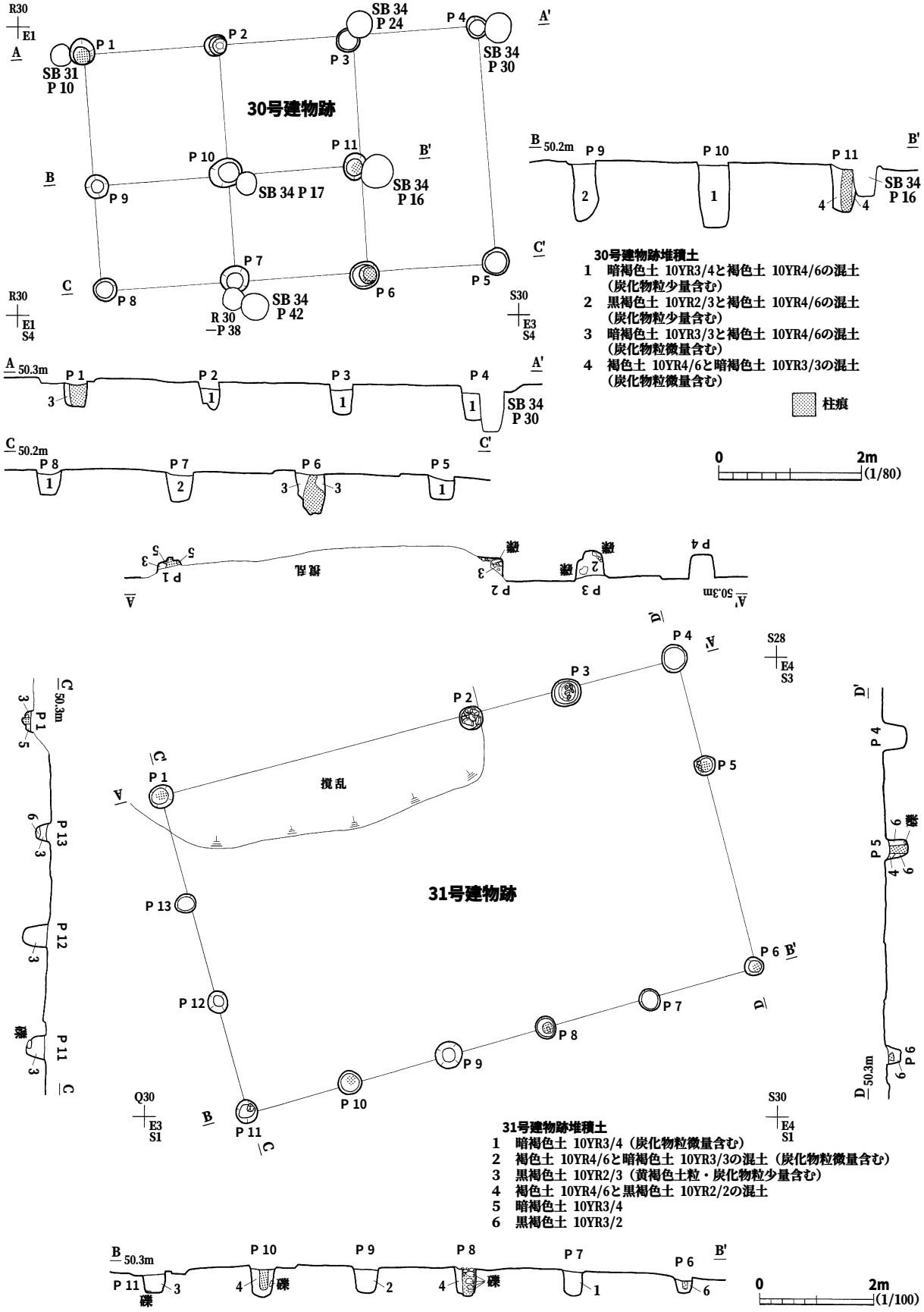


図203　30・31号建物跡

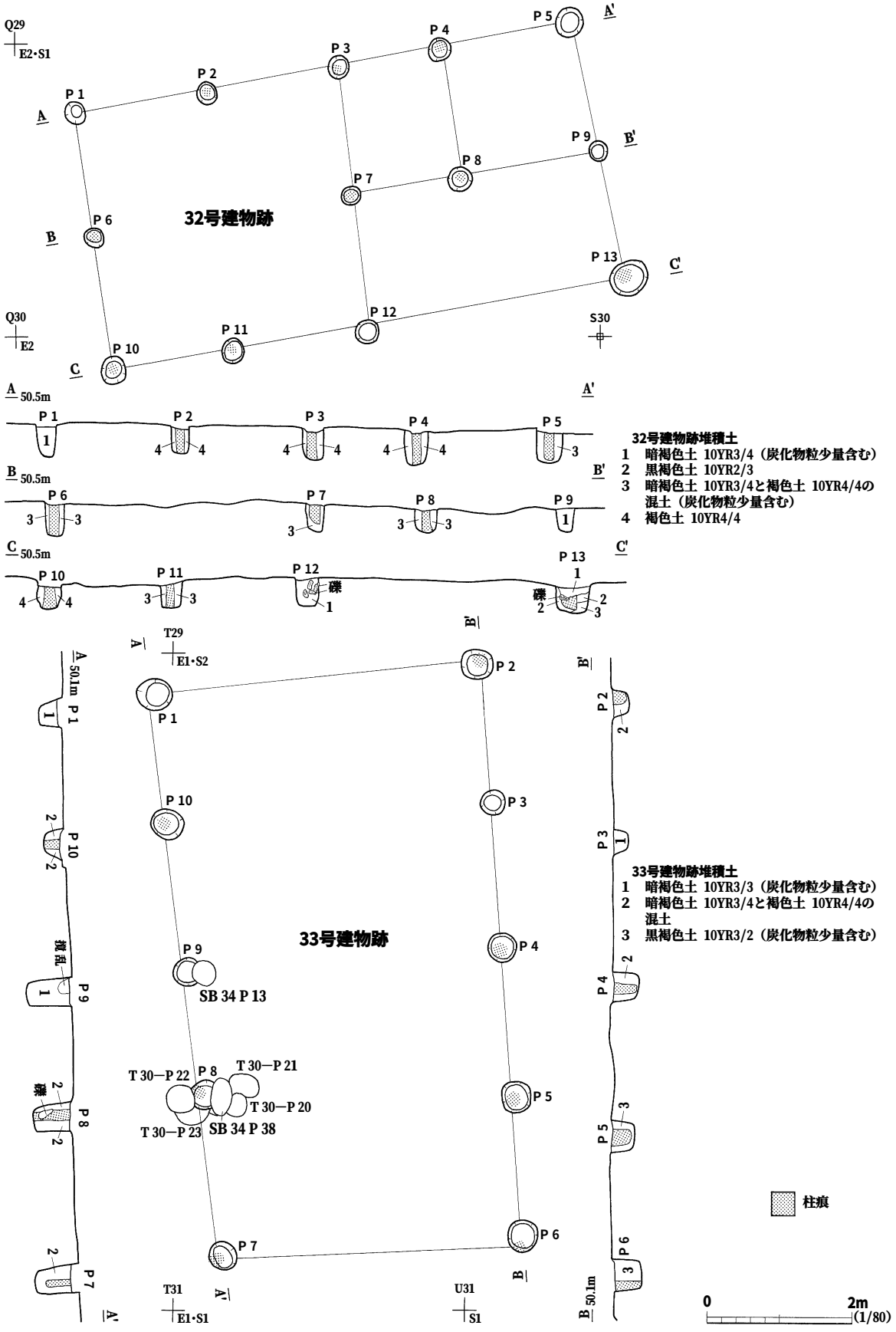


図204　32・33号建物跡

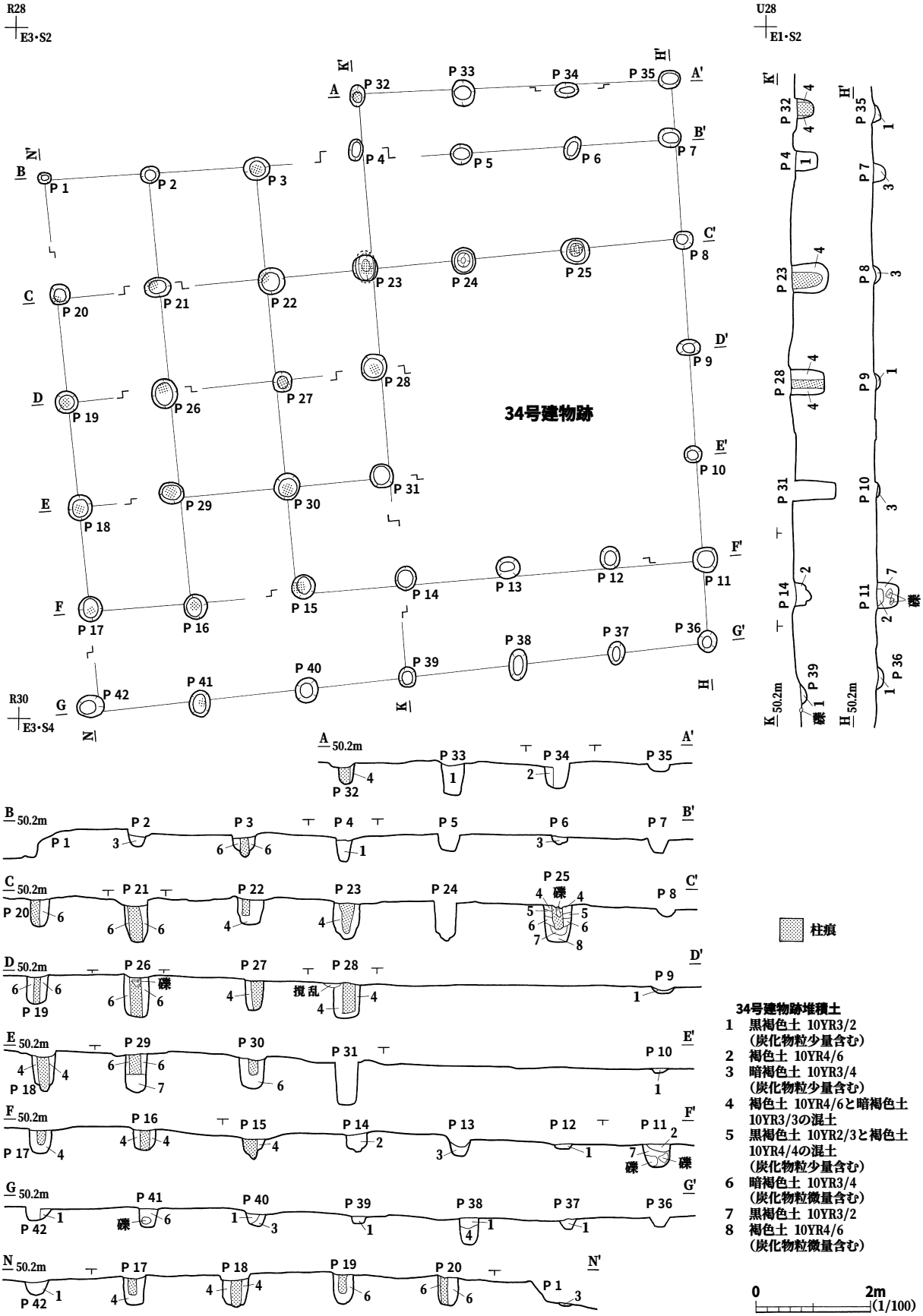

34号建物跡
柱痕
34号建物跡堆積土
1 黒褐色土 10YR3/2 (炭化物粒少量含む)
2 褐色土 10YR4/6
3 暗褐色土 10YR3/4 (炭化物粒少量含む)
4 褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/3の混土
5 黒褐色土 10YR2/3と褐色土 10YR4/4の混土 (炭化物粒少量含む)
6 暗褐色土 10YR3/4 (炭化物粒微量含む)
7 黒褐色土 10YR3/2
8 褐色土 10YR4/6 (炭化物粒微量含む)
0 2m (1/100)

図205　34号建物跡

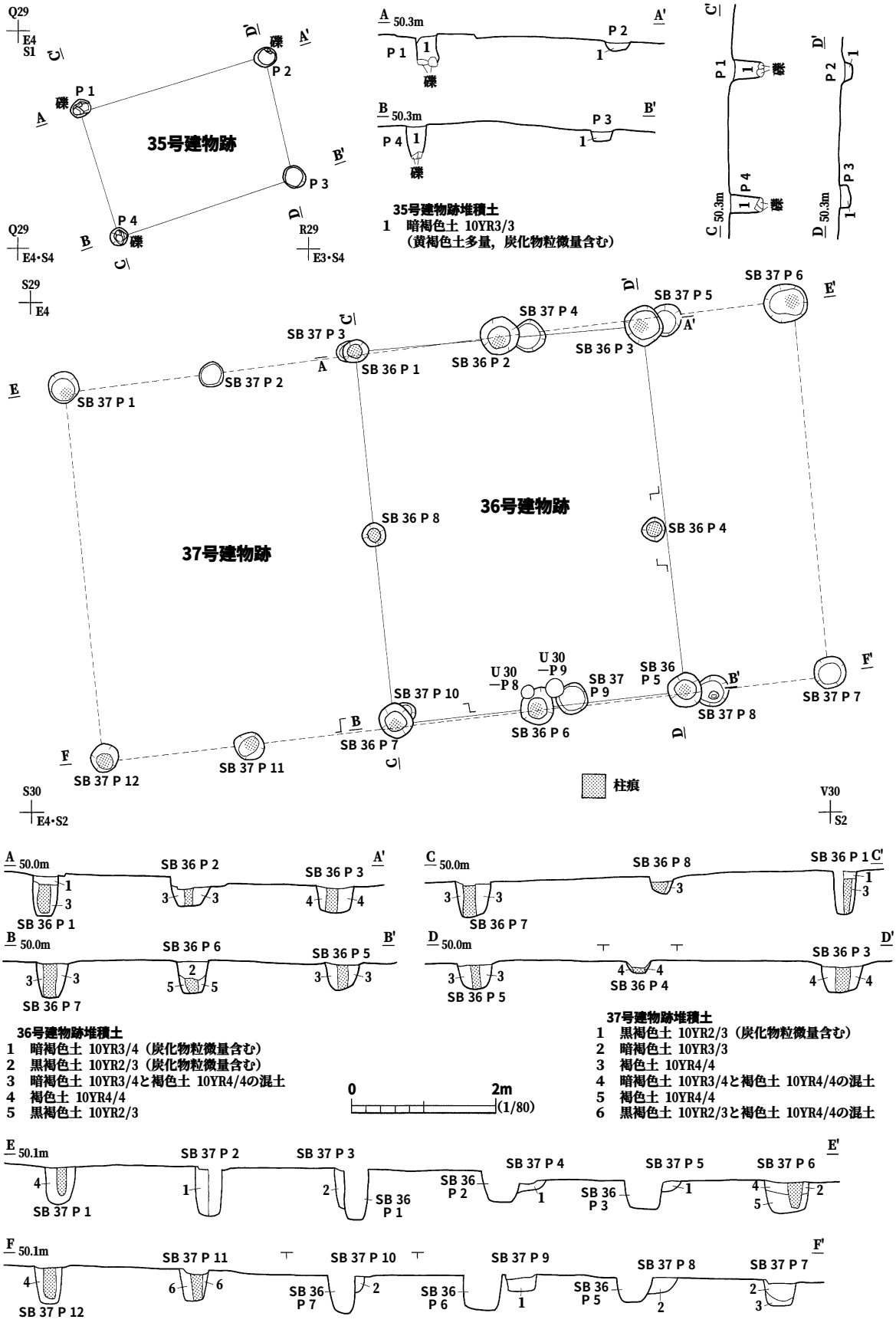


図206　35～37号建物跡

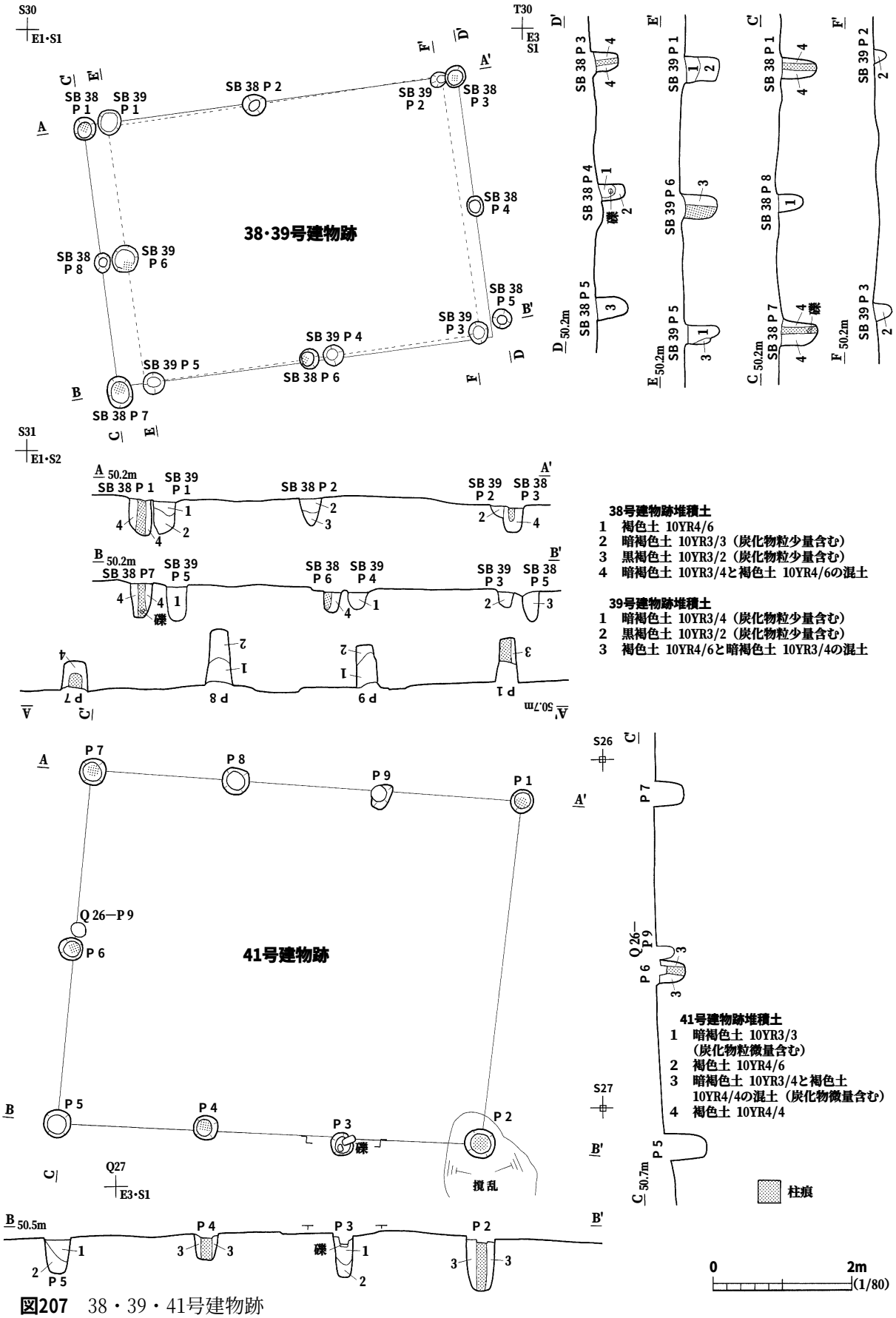


図207　38・39・41号建物跡

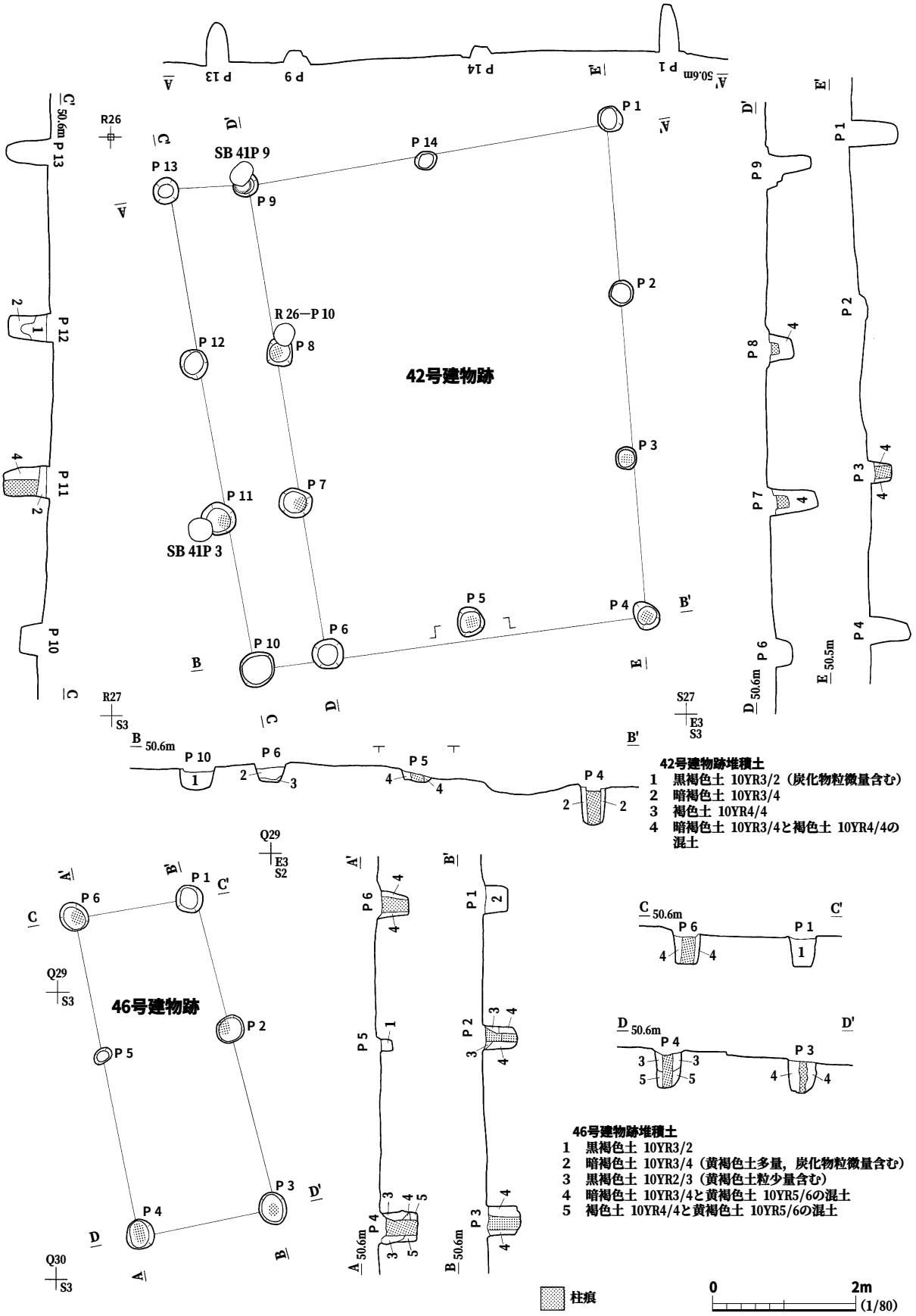


図208　42・46号建物跡

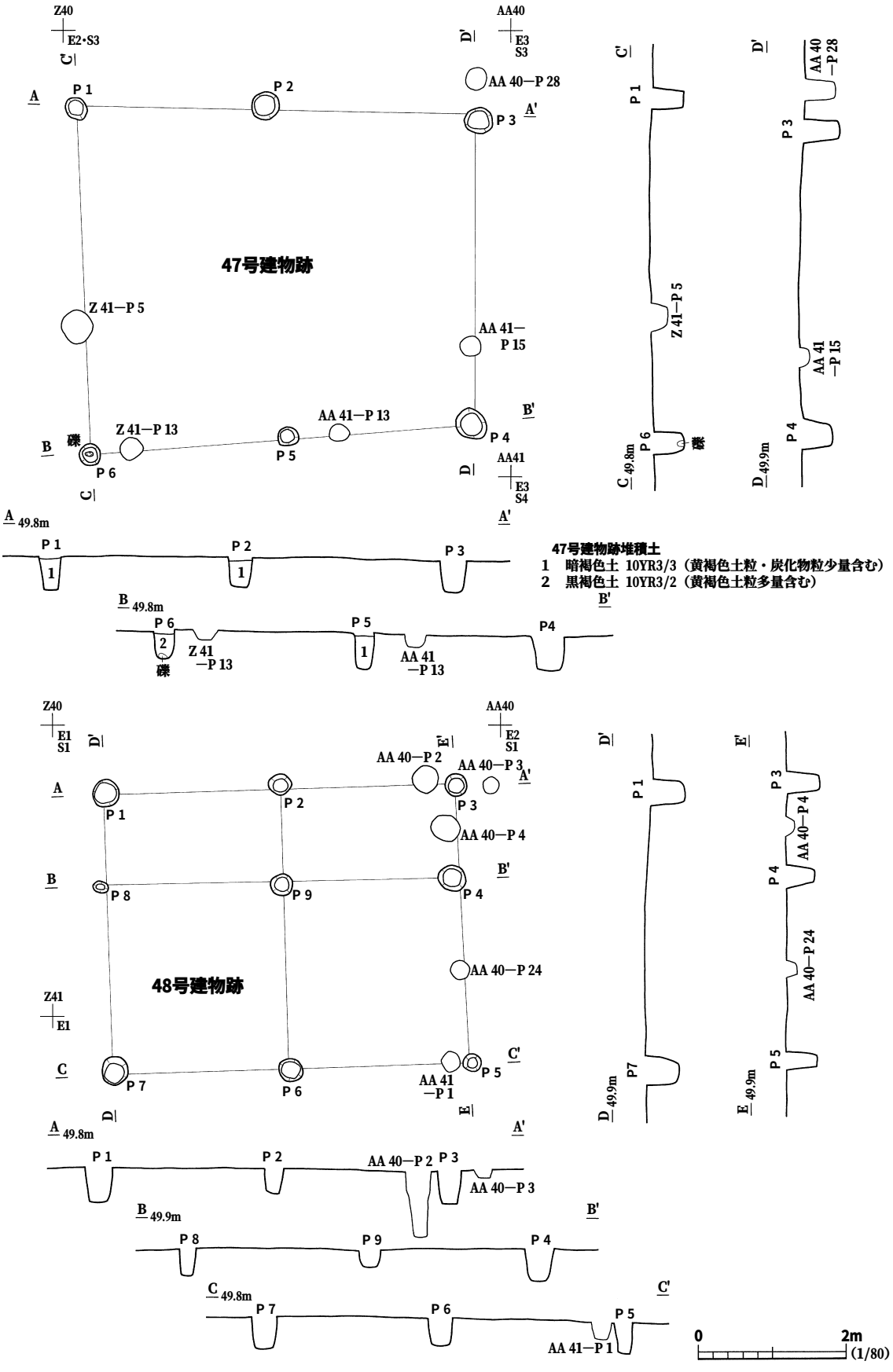


図209　47・48号建物跡

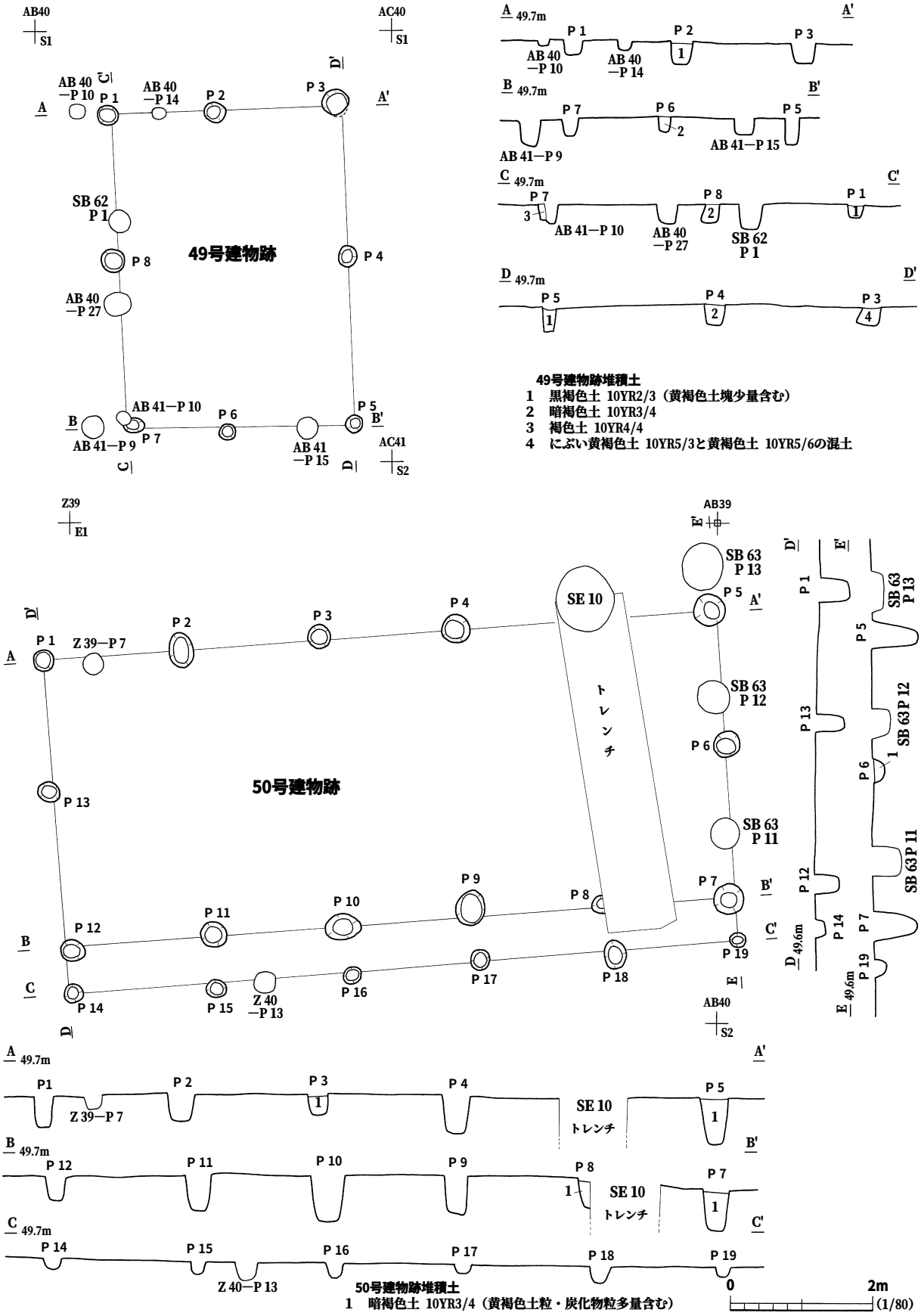


図210　49・50号建物跡

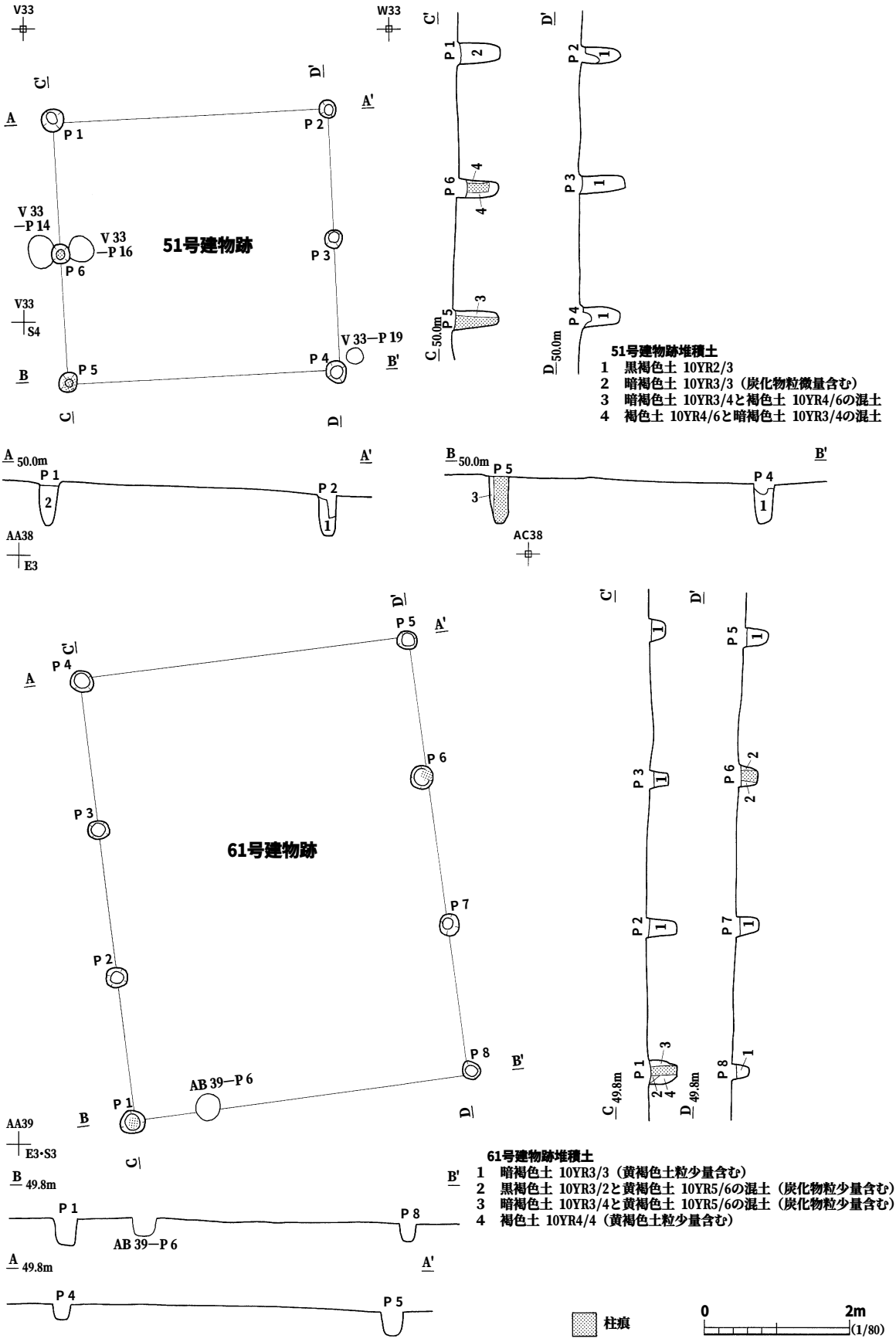


図211　51・61号建物跡

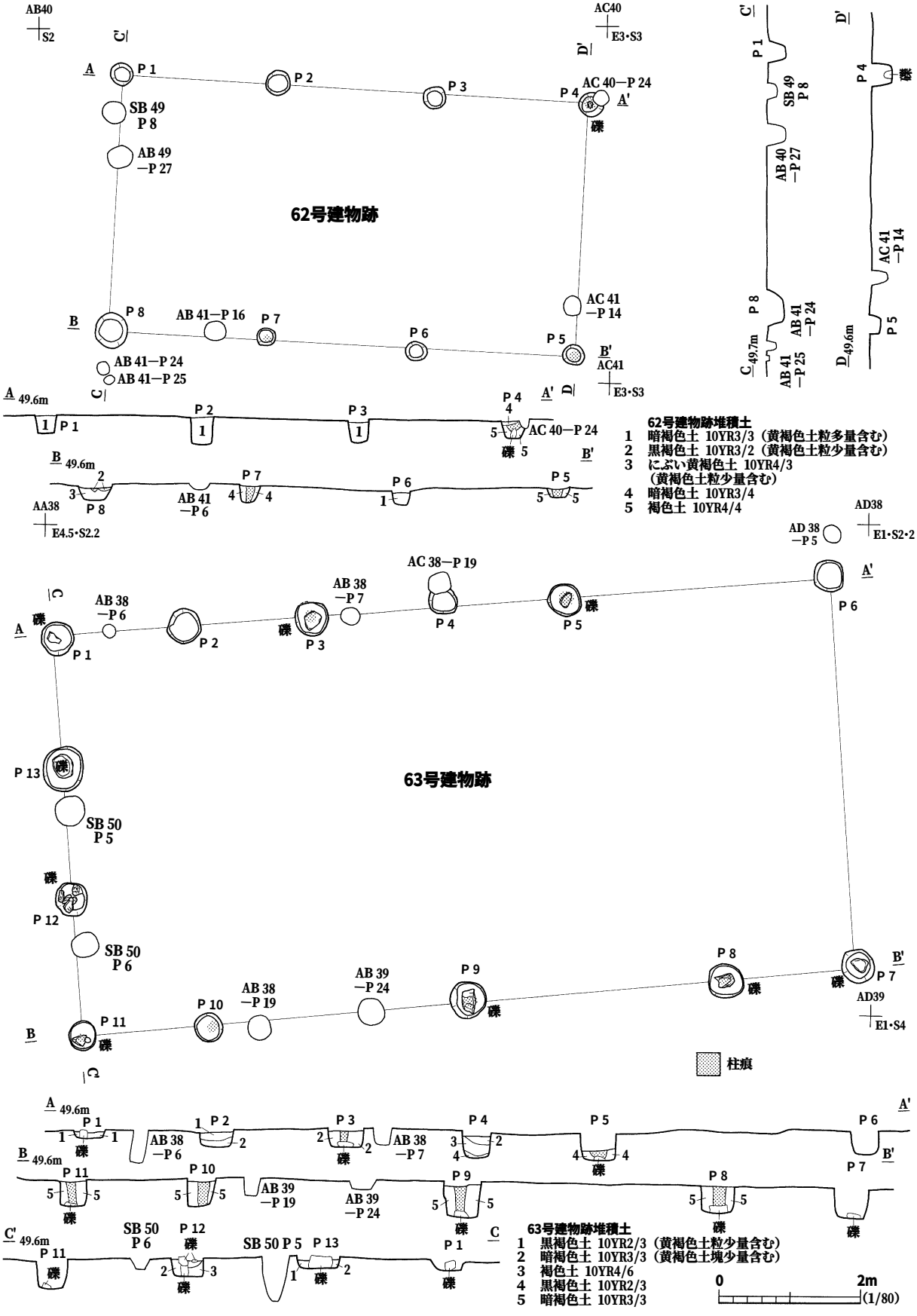


図212　62・63号建物跡

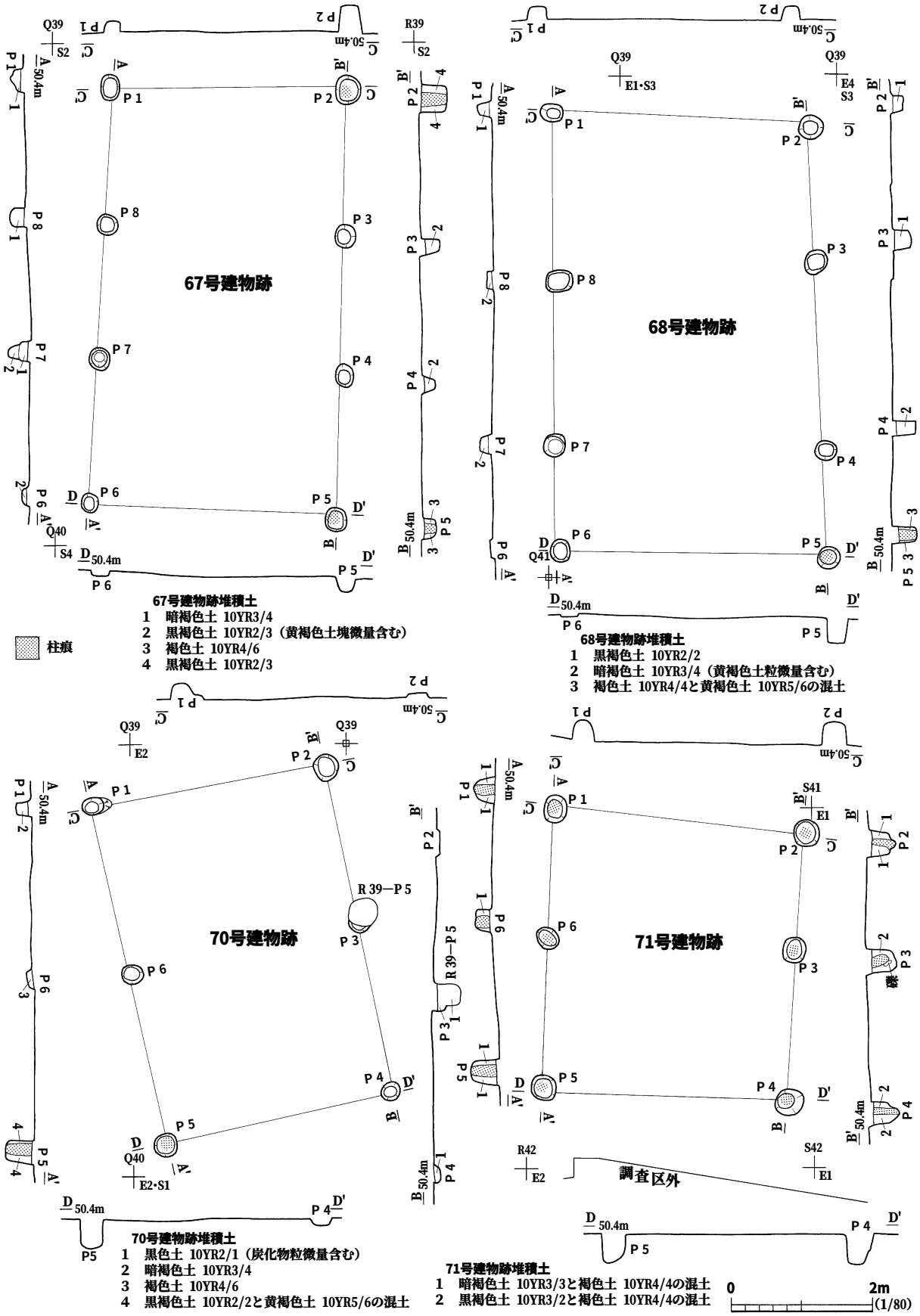


図213　67・68・70・71号建物跡

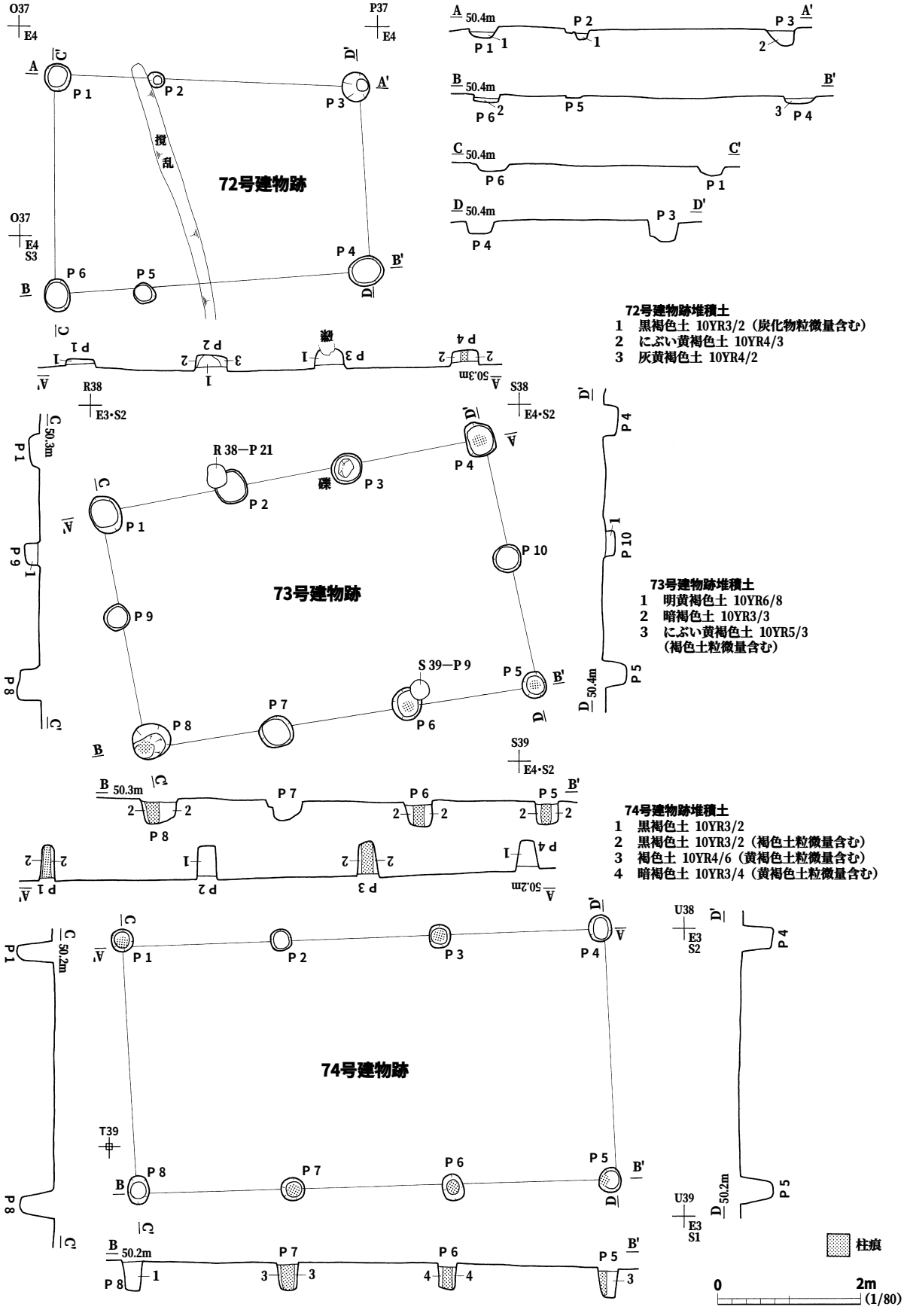


図214　72～74号建物跡

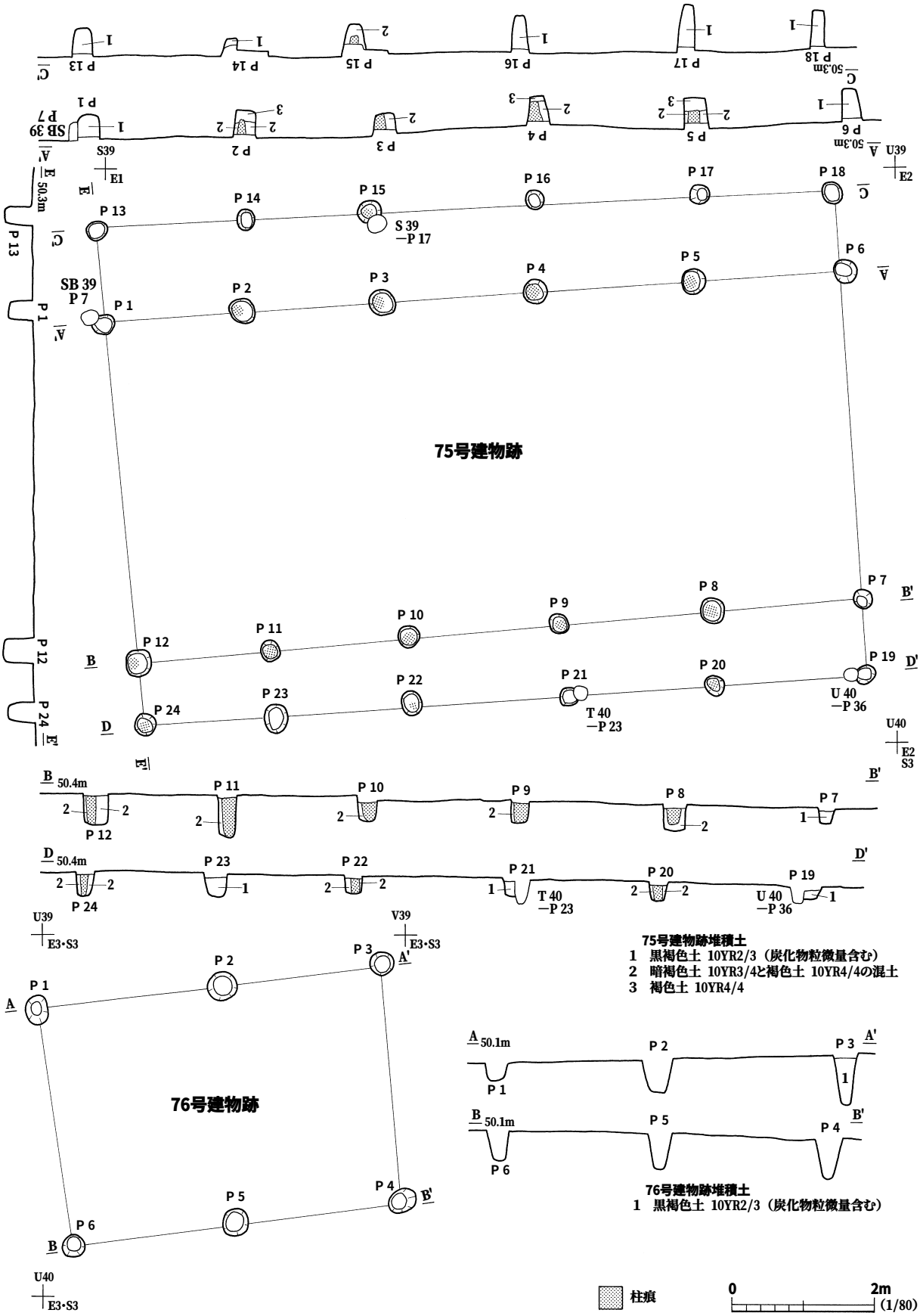


図215　75・76号建物跡

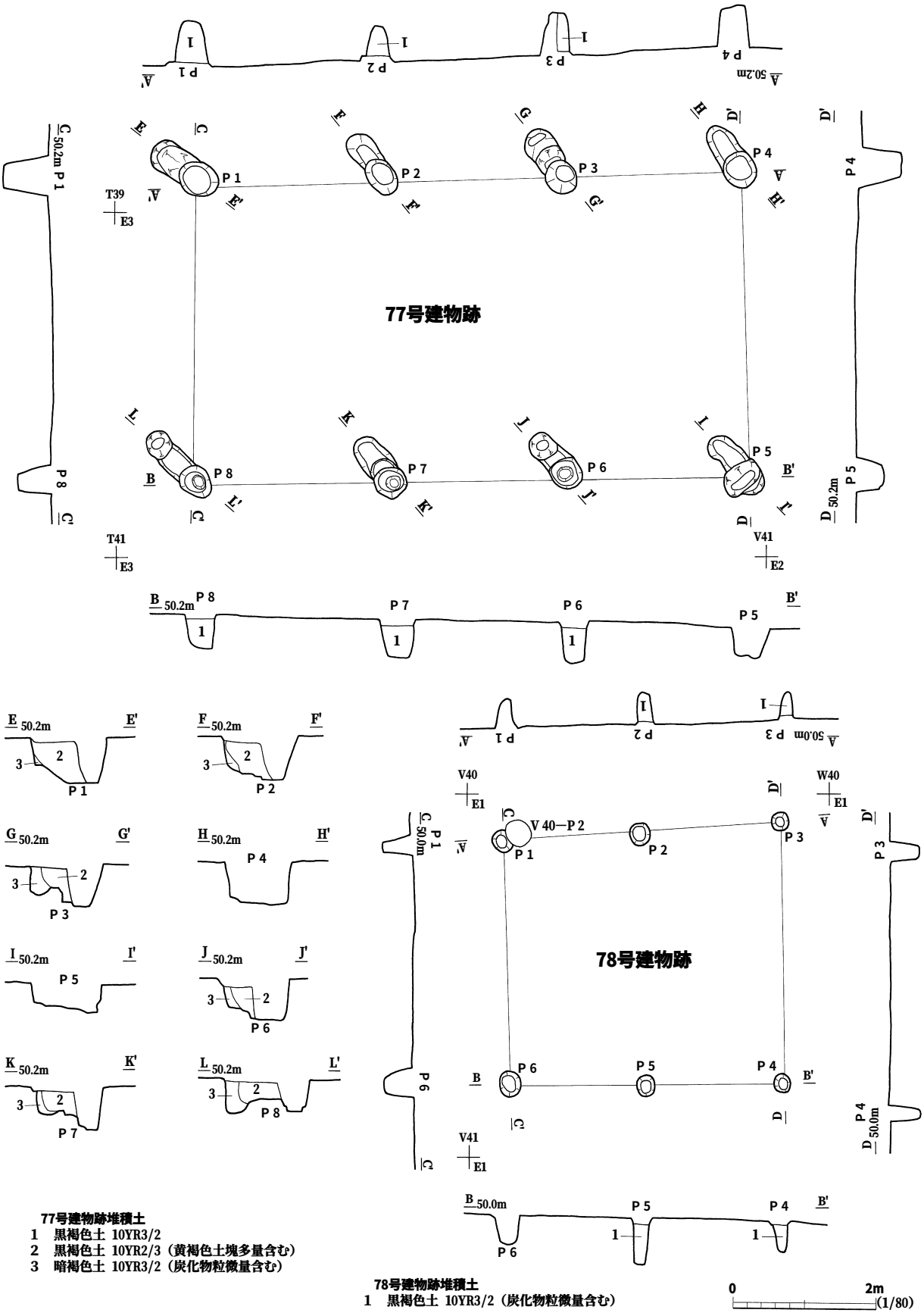


図216　77・78号建物跡

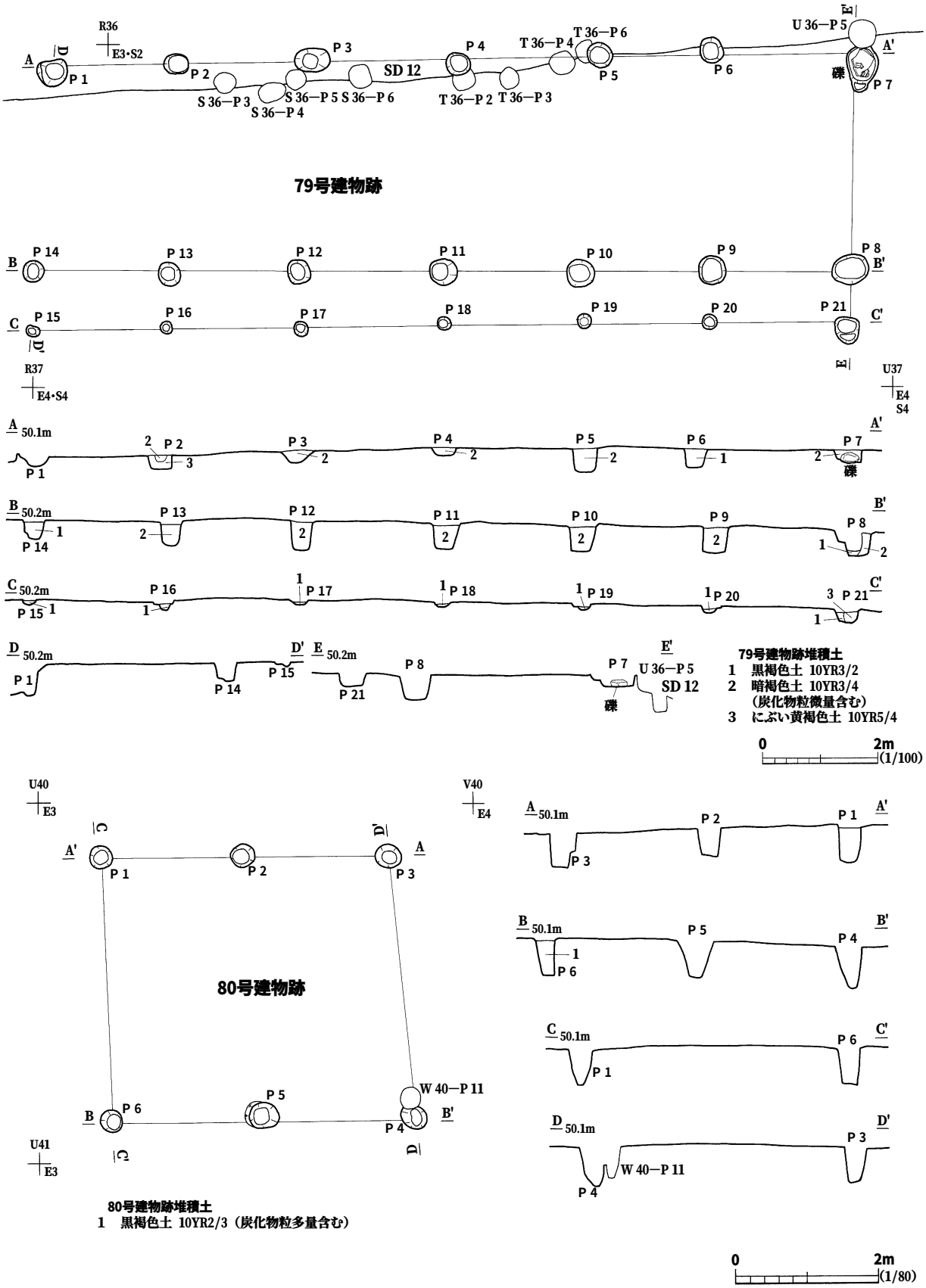


図217　79・80号建物跡

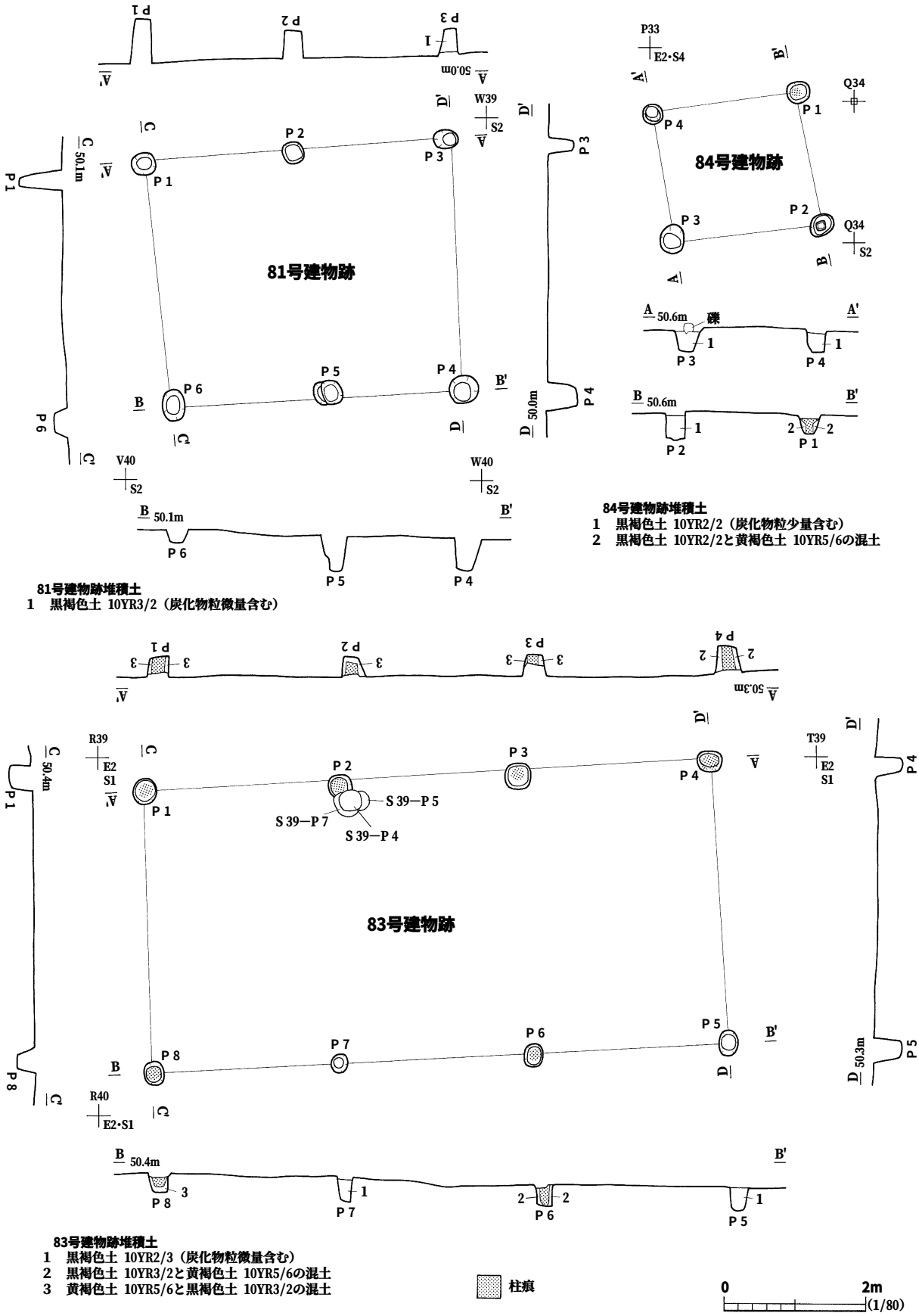


図218　81・83・84号建物跡

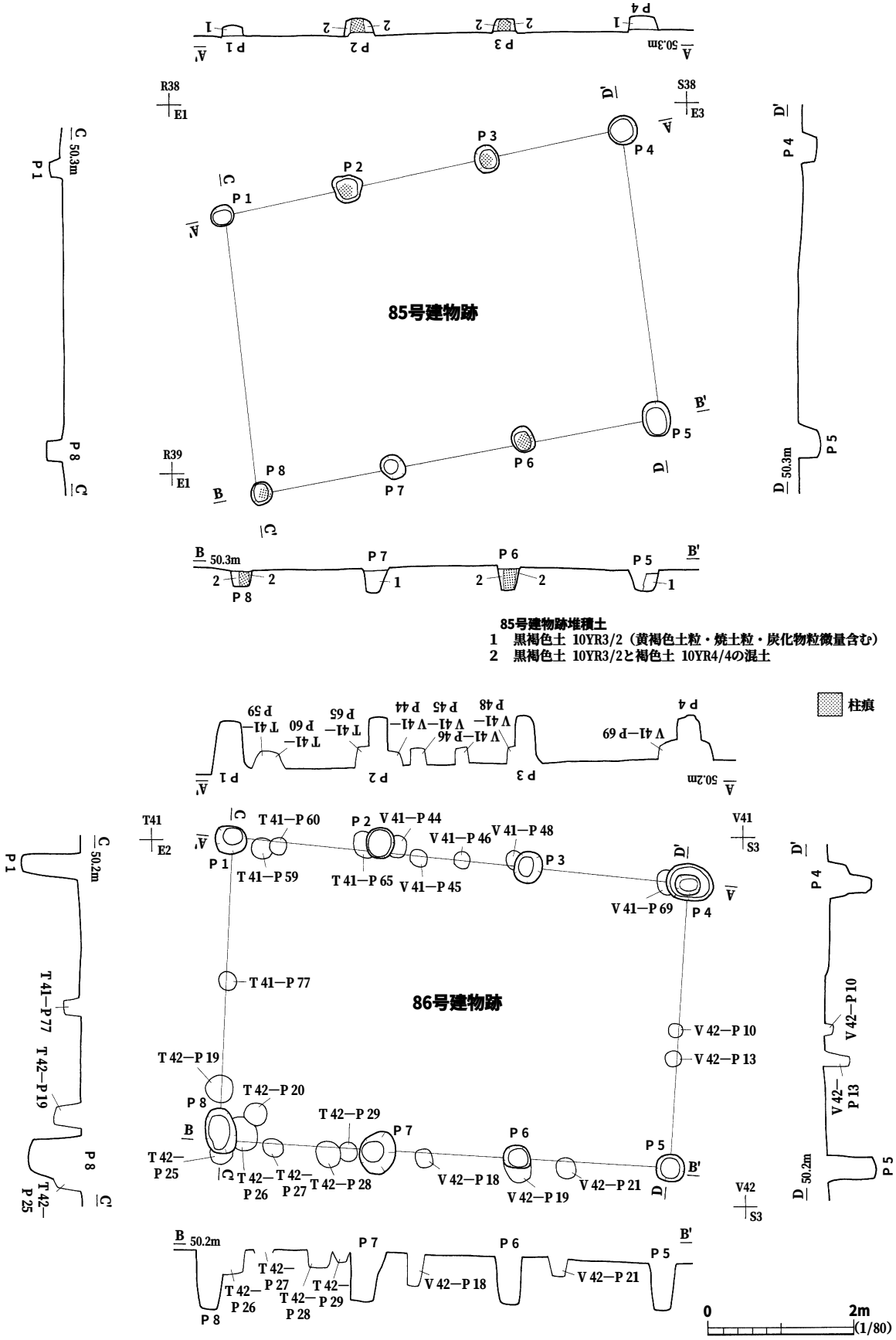


図219　85・86号建物跡

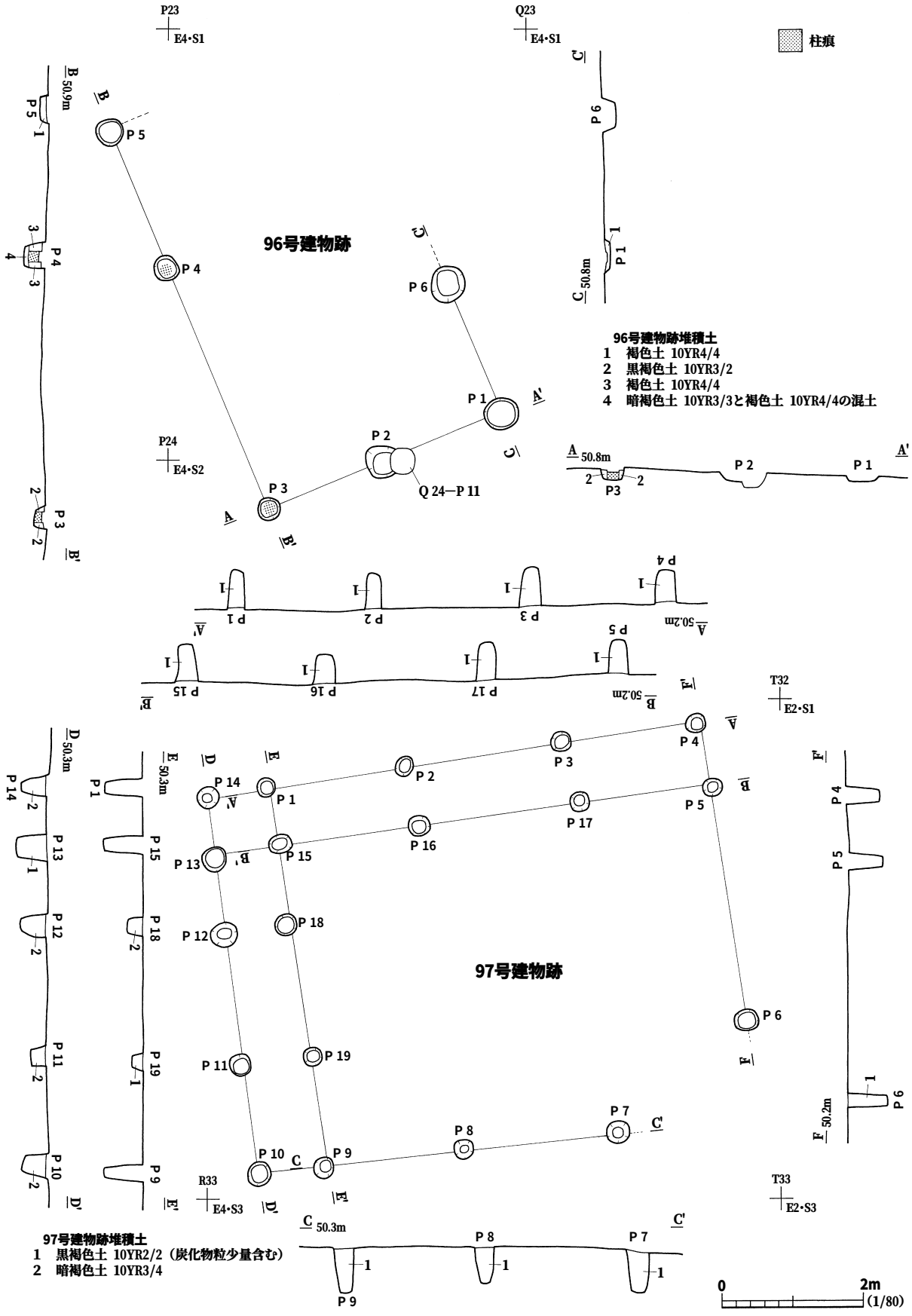


図220　96・97号建物跡

表９　馬場前遺跡北区掘立柱建物跡一覧(1)

＊：遺存値

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）番号	長軸方向	長軸（cm）	短軸（cm）	P番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	P－P	柱間（cm）	柱間（尺）	重複関係 古→新	出土遺物	時期・備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
3	194	W・X35・36	N３°W	225	91	Ｐ１	16	15	20	Ｐ１―Ｐ２	136	4.5	ＳＡ12，ＳＤ12→ＳＢ３		近世？ＳＤ12の土橋状高まりから確認。土橋上に設置された橋脚状遺構と推測。	147		H12	高田
						Ｐ２	18	15	34	Ｐ２―Ｐ３	100	3.3							
						Ｐ３	20	18	28	Ｐ３―Ｐ４	126	4.2							
						Ｐ４	22	20	35	Ｐ４―Ｐ５	90	3							
						Ｐ５	17	17	22	－	－	－							
						－	－	－	－	－	－	－							
						－	－	－	－	－	－	－							
						－	－	－	－	－	－	－							
4	194	S24・25・26	N13°W	540	339	Ｐ１	28	27	43	Ｐ１―Ｐ２	340	11.2	ＳＫ517，ＳＫ518，ＳＫ524，ＳＫ919，ＳＫ920，ＳＩ89→ＳＢ４		近世？	148		H12	高田
						Ｐ２	28	23	33	Ｐ２―Ｐ３	183	6							
						Ｐ３	30	30	55	Ｐ３―Ｐ４	184	6.1							
						Ｐ４	30	28	46	Ｐ４―Ｐ５	186	6.1							
						Ｐ５	27	22	38	Ｐ５―Ｐ６	161	5.3							
						Ｐ６	26	24	32	Ｐ６―Ｐ７	170	5.6							
						Ｐ７	32	28	52	Ｐ７―Ｐ８	169	5.6							
						Ｐ８	26	22	30	Ｐ８―Ｐ９	183	6							
						Ｐ９	30	28	40	Ｐ９―Ｐ１	180	5.9							
						Ｐ10	30	31	38	－	－	－							
						Ｐ11	30	29	42	－	－	－							
5	195	N・O29・30・31	N82°E	556	460	Ｐ１	42	37	40	Ｐ１―Ｐ２	182	6	ＳＫ806，ＳＫ1271→ＳＢ５	縄文土器７，石器２	近世？６脚門と思われる。建て替えあり。	149		H12	千葉
						Ｐ２	38	32	30	Ｐ２―Ｐ３	278	9.2							
						Ｐ３	54	47	34	Ｐ３―Ｐ４	364	12							
						Ｐ４	56	42	35	Ｐ４―Ｐ５	182	6							
						Ｐ５	51	41	36	Ｐ５―Ｐ６	458	15.1							
						Ｐ６	45	42	29	Ｐ６―Ｐ７	194	6.4							
						Ｐ７	48	36	57	Ｐ７―Ｐ８	182	6							
						Ｐ８	28	22	55	Ｐ８―Ｐ１	182	6							
						Ｐ９	40	34	38	－	－	－							
						Ｐ10	40	34	34	－	－	－							
						Ｐ11	60	44	36	－	－	－							
6	195	N・O29・30・31	N80°E	550	530	Ｐ１	36	33	50	Ｐ９―Ｐ10	190	6.3	ＳＫ656，ＳＫ806，ＳＫ1270，ＳＫ1271→ＳＢ６	縄文土器３，その他１	近世ＳＫ617→SK656→ＳＢ６P４であり，SK617が17Ｃであるため，ＳＢ６は17Ｃ以降の遺構。	150		H12	能登谷
						Ｐ２	38	36	30	Ｐ10―Ｐ11	360	11.9							
						Ｐ３	33	28	48	Ｐ11―Ｐ１	84	2.8							
						Ｐ４	30	30	56	Ｐ１―Ｐ２	180	5.9							
						Ｐ５	38	36	50	Ｐ３―Ｐ４	180	5.9							
						Ｐ６	32	30	50	Ｐ４―Ｐ５	445	14.7							
						Ｐ７	42	34	50	Ｐ５―Ｐ９	86	2.8							
						Ｐ８	32	32	40	Ｐ５―Ｐ６	182	6							
						Ｐ９	28	26	44	Ｐ６―Ｐ７	185	6.1							
						Ｐ10	26	26	20	Ｐ７―Ｐ１	180	5.9							
						Ｐ11	30	24	34	－	－	－							
7	196	N・O30・31	N82°E	558	458	Ｐ１	40	28	56	Ｐ１―Ｐ２	170	5.6	ＳＫ617，ＳＫ995，ＳＫ998，ＳＫ1330→ＳＢ７	縄文土器７	近世ＳＫ617→ＳＢ７Ｐ５であり，ＳＫ617から17Ｃ代の遺物が出土しているため，ＳＢ７は17Ｃ以降の遺構と考えられる。	151		H12	能登谷
						Ｐ２	27	24	9	Ｐ２―Ｐ３	286	9.4							
						Ｐ３	40	38	34	Ｐ３―Ｐ４	180	5.9							
						Ｐ４	42	40	59	Ｐ４―Ｐ５	186	6.1							
						Ｐ５	33	31	50	－	－	－							
						Ｐ６	27	26	25	Ｐ６―Ｐ７	140	4.6							
						Ｐ７	34	34	59	Ｐ７―Ｐ８	182	6							
						Ｐ８	42	39	42	Ｐ８―Ｐ９	190	6.3							
						Ｐ９	38	38	47	Ｐ９―Ｐ１	190	6.3							
8	196	L・M30・31	N２°E	550	370	Ｐ１	44	43	26	Ｐ１―Ｐ２	365	12	ＳＫ1273，ＳＫ1275→ＳＢ８		近世？	152		H12	能登谷
						Ｐ２	35	34	28	Ｐ２―Ｐ３	180	5.9							
						Ｐ３	42	35	19	Ｐ３―Ｐ４	370	12.2							
						Ｐ４	42	42	30	Ｐ４―Ｐ５	186	6.1							
						Ｐ５	46	38	36	Ｐ５―Ｐ６	180	5.9							
						Ｐ６	36	33	30	－	－	－							
9	197	L・M30・31	N88°W	542	362	Ｐ１	36	＊26	20	Ｐ１―Ｐ２	360	11.9	ＳＫ1273→ＳＢ９		近世？	153		H12	能登谷
						Ｐ２	40	38	21	Ｐ２―Ｐ３	178	5.9							
						Ｐ３	42	38	16	Ｐ３―Ｐ４	178	5.9							
						Ｐ４	38	34	15	Ｐ４―Ｐ５	186	6.1							
						Ｐ５	40	38	41	－	－	－							
						Ｐ６	43	42	31	Ｐ６―Ｐ７	170	5.6							
						Ｐ７	42	40	23	Ｐ７―Ｐ１	196	6.5							
10	197	O・P34・35	N79°E	48	382	Ｐ１	36	34	13	Ｐ１―Ｐ２	200	6.6	ＳＫ1215→ＳＢ10		近世？	154		H12	能登谷
						Ｐ２	30	29	22	Ｐ２―Ｐ３	184	6.1							
						Ｐ３	46	46	37	Ｐ３―Ｐ４	210	6.9							
						Ｐ４	26	18	18	Ｐ４―Ｐ５	186	6.1							
						Ｐ５	32	32	17	Ｐ５―Ｐ６	176	5.8							
						Ｐ６	34	30	22	Ｐ６―Ｐ７	210	6.9							
						Ｐ７	30	22	8	Ｐ７―Ｐ８	196	6.5							
						Ｐ８	23	21	15	Ｐ８―Ｐ１	210	6.9							
11	197	Q・R34・35	N８°W	350	210	Ｐ１	25	24	14	Ｐ１―Ｐ２	118	3.9	ＳＫ1080→ＳＢ11		近世？	155		H12	能登谷
						Ｐ２	22	21	11	Ｐ２―Ｐ３	120	4							
						Ｐ３	22	18	11	Ｐ３―Ｐ４	120	4							
						Ｐ４	34	22	17	Ｐ４―Ｐ５	216	7.1							
						Ｐ５	37	30	15	Ｐ５―Ｐ６	120	4							
						Ｐ６	30	27	19	Ｐ６―Ｐ７	104	3.4							
						Ｐ７	18	18	17	Ｐ７―Ｐ８	120	4							
						Ｐ８	18	16	10	Ｐ８―Ｐ１	212	7							
12	197	O32	N17°W	188	142	Ｐ１	30	27	32	Ｐ１―Ｐ２	188	6.2	ＳＫ1220→ＳＢ12	縄文土器１	時期不明	156		H12	能登谷
						Ｐ２	30	28	30	Ｐ２―Ｐ３	140	4.6							
						Ｐ３	36	34	41	Ｐ３―Ｐ４	188	6.2							
						Ｐ４	38	33	33	Ｐ４―Ｐ１	140	4.6							
13	198	O・P31・32・Q32	N５°W	754	44	Ｐ１	40	30	40	Ｐ１―Ｐ２	164	5.4	ＳＫ1216，ＳＫ1423，ＳＫ1489，ＳＫ1525，ＳＸ３→ＳＢ13	縄文土器４	時期不明	157		H12	能登谷
						Ｐ２	44	42	50	Ｐ２―Ｐ３	210	6.9							
						Ｐ３	28	26	52	Ｐ３―Ｐ４	560	18.5							
						Ｐ４	48	41	20	Ｐ４―Ｐ５	190	6.3							
						Ｐ５	48	46	33	Ｐ５―Ｐ６	406	13.4							
						Ｐ６	54	42	29	Ｐ６―Ｐ７	182	6							
						Ｐ７	50	48	37	Ｐ７―Ｐ８	230	7.6							
						Ｐ８	32	30	36	Ｐ８―Ｐ１	310	10.2							
15	194	W・X35	N６°W	245(a)，250(b)	208(a)，200(b)	Ｐ1ａ	25	25	26	Ｐ1ａ―Ｐ3	125	4.1			近世？	158		H12	山元
						Ｐ1ｂ	60	46	25	Ｐ1ｂ―Ｐ2	55	1.8							
						Ｐ1ｃ	62	＊22	13	－	－	－							
						Ｐ２	32	30	22	Ｐ2―Ｐ4ｂ	180	5.9							
						Ｐ３	56	36	44	Ｐ3―Ｐ4ａ	100	3.3							
						Ｐ４ａ	38	30	50	Ｐ4ａ―Ｐ5ａ	200	6.6							
						Ｐ４ｂ	35	＊30	32	Ｐ4ｂ―Ｐ5ｂ	200	6.6							
						Ｐ５ａ	42	40	18	Ｐ5ａ―Ｐ6	100	3.3							
						Ｐ５ｂ	＊40	40	60	Ｐ5ｂ―Ｐ7	175	5.8							
						Ｐ６	74	70	42	Ｐ6―Ｐ8ａ	160	5.3							
						Ｐ７	50	＊30	60	Ｐ7―Ｐ8ｂ	80	2.6							
						Ｐ８ａ	＊32	30	36	Ｐ8ａ―Ｐ1ａ	210	6.9							
						Ｐ８ｂ	46	＊40	40	Ｐ8ｂ―Ｐ1ｂ	210	6.9							
						Ｐ８ｃ	36	＊23	10	－	－	－							

表９　馬場前遺跡北区掘立柱建物跡一覧(2)

＊：遺存値

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）番号	長軸方向	長軸（cm）	短軸（cm）	P番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	P－P	柱間（cm）	柱間（尺）	重複関係 古→新	出土遺物	時期・備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
16	198	V・W34	N３°W	220	134	P１	52	50	63	P１—P２	218	7.2			近世？	159		H12	菊田
						P２	42	36	46	P２—P３	140	4.6							
						P３	44	41	51	P３—P４	230	7.6							
						P４	44	34	36	P４—P１	128	4.2							
17	198	T・U33	N９°W	620	38	P１	40	32	30	P１—P２	210	6.9	SI114, SI111→SB17		近世？	160		H12	関
						P２	30	24	42	P２—P３	208	6.9							
						P３	31	30	38	P３—P４	182	6							
						P４	32	30	40	P４—P５	300	9.9							
						P５	40	33	47	P５—P６	170	5.6							
						P６	20	20	24	P６—P７	230	7.6							
						P７	40	36	34	P７—P８	216	7.1							
						P８	31	30	18	P８—P１	308	10.2							
18	199	Q・R・S33	N86°E	634	326	P１	30	30	40	P１—P２	216	7.1	SK1032, SI113, SI114→SB18		中・近世？	161		H12	関
						P２	33	30	35	P２—P３	212	7							
						P３	33	32	20	P３—P４	220	7.3							
						P４	35	28	42	P４—P５	324	10.7							
						P５	30	30	20	P５—P６	216	7.1							
						P６	28	22	33	P６—P７	214	7.1							
						P７	36	30	30	P７—P８	206	6.8							
						P８	32	30	34	P８—P１	324	10.7							
19	200	S・T・U・V32・S33	N83°E	980	394	P１	55	55	70	P１—P２	194	6.4	SK1094, SK1098, SK1344, SK1539, SI115→SB19→SB26	縄文土器１, 石器１	近世？	162		H12	菊田
						P２	50	42	67	P２—P３	196	6.5							
						P３	40	38	64	P３—P４	200	6.6							
						P４	39	38	66	P４—P５	200	6.6							
						P５	43	43	64	P５—P６	200	6.6							
						P６	46	41	74	P６—P７	402	13.3							
						P７	62	48	39	P７—P８	192	6.3							
						P８	48	33	42	P８—P９	196	6.5							
						P９	42	40	65	P９—P10	200	6.6							
						P10	37	35	90	P10—P11	196	6.5							
						P11	45	39	75	P11—P12	206	6.8							
						P12	55	48	67	P12—P１	386	12.7							
20	199	S・T32・33	N86°E	580	490	P１	32	30	74	P１—P２	192	6.3	SK1094, SI114, SI115→SB20→SB25	縄文土器２, 通風管１, るつぼ１	近世？	163		H12	佐々木
						P２	34	30	76	P２—P３	180	5.9							
						P３	37	36	80	P３—P４	196	6.5							
						P４	38	32	68	P４—P５	466	15.4							
						P５	36	31	80	P５—P６	190	6.3							
						P６	39	36	65	P６—P７	190	6.3							
						P７	34	32	58	P７—P８	180	5.9							
						P８	38	34	64	P８—P１	490	16.2							
24	200	V・W31・32	N86°E	550	467	P１	38	35	63	P１—P２	180	5.9	SK1056, SK1085, SK1537, SI120→SB24	煙管１	近世？	164	360	H12	山元
						P２	33	28	40	P２—P３	180	5.9							
						P３	33	33	35	P３—P４	190	6.3							
						P４	37	37	27	P４—P５	466	15.4							
						P５	40	35	34	P５—P６	180	5.9							
						P６	42	40	24	P６—P７	370	12.2							
						P７	50	44	48	P７—P８	214	7.1							
						P８	50	46	34	P８—P１	254	8.4							
25ａ	201	T・U32・33	N87°E	570	473	P１	30	28	62	P１—P２	570	18.8	SK1081, SK1540, SI115, SB20→SB25ａｂ	縄文土器３	近世？	165		H12	菊田
						P２	40	38	34	P２—P３	355	11.7							
						P３	27	22	34	P３—P４	190	6.3							
						P４	32	30	44	P４—P５	185	6.1							
						P５	32	30	33	P５—P６	190	6.3							
						P６	32	28	48	—	—	—							
						P７	28	26	30	P７—P８	180	5.9							
						P８	28	26	34	P８—P９	180	5.9							
						P９	33	30	33	P９—P10	194	6.4							
						P10	20	20	30	P10—P１	473	15.6							
25ｂ	201	T・U32・33	N86°E	566	470	P１	40	＊30	44	P１—P２	246	8.1		石器２	近世？	165		H12	菊田
						P２	28	38	40	P２—P３	136	4.5							
						P３	30	28	48	P３—P４	185	6.1							
						P４	38	＊33	46	P４—P５	360	11.9							
						P５	＊33	26	24	P５—P６	192	6.3							
						P６	29	＊23	46	P６—P７	180	5.9							
						P７	32	＊32	42	P７—P８	183	6							
						P８	25	＊24	54	—	—	—							
						P９	37	＊33	57	P９—P10	184	6.1							
						P10	30	＊29	37	P10—P11	180	5.9							
						P11	33	＊31	34	P11—P12	180	5.9							
						P12	34	33	22	—	—	—							
26	202	R・S32・33	N11°W	550	475	P１	34	32	38	P１—P２	280	9.2	SK1063, SK1072, SK1074, SB19→SB26		近世？	166		H12	関
						P２	29	27	24	P２—P３	196	6.5							
						P３	34	28	36	P３—P４	186	6.1							
						P４	36	34	42	P４—P５	176	5.8							
						P５	36	32	50	P５—P６	184	6.1							
						P６	36	30	37	P６—P７	200	6.6							
						P７	27	26	10	P７—P８	260	8.6							
						P８	30	30	36	P８—P９	166	5.5							
						P９	30	28	54	P９—P１	360	11.9							
27	201	R32	N78°E	174	162	P１	26	23	38	P１—P２	174	5.7	SK1074→SB26		近世？	167		H12	菊田
						P２	42	36	34	P２—P３	160	5.3							
						P３	38	30	33	P３—P４	166	5.5							
						P４	31	30	23	P４—P５	163	5.4							
29	202	T・U31・32	N86°E	446	416	P１	40	38	24	P１—P２	184	6.1	SK1087, SK1342, SK1344, SK1386, SK1530, SK1531, SI115→SB29		近世？	168		H12	山元
						P２	40	40	30	P２—P３	260	8.6							
						P３	28	24	34	P３—P４	210	6.9							
						P４	32	30	26	P４—P５	200	6.6							
						P５	46	43	20	P５—P６	266	8.8							
						P６	34	28	50	P６—P７	180	5.9							
						P７	48	40	40	P７—P８	218	7.2							
						P８	40	38	48	P８—P１	196	6.5							
						P９	40	34	34	—	—	—							
30	203	R30・S29・30	N86°E	546	330	P１	36	36	30	P１—P２	190	6.3	SK1396, SK1459→SB30→SB31, SB34		近世？	169		H12	山元
						P２	30	28	30	P２—P３	180	5.9							
						P３	34	＊26	34	P３—P４	180	5.9							
						P４	32	28	34	P４—P５	328	10.8							
						P５	38	36	28	P５—P６	176	5.8							
						P６	42	38	54	P６—P７	182	6							
						P７	40	38	36	P７—P８	182	6							
						P８	32	32	28	P８—P９	146	4.8							
						P９	33	31	79	P９—P１	184	6.1							
						P10	46	40	88	—	—	—							
						P11	38	＊26	67	—	—	—							

表９　馬場前遺跡北区掘立柱建物跡一覧(3)

＊：遺存値

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）番号	長軸方向	長軸（cm）	短軸（cm）	P番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	P－P	柱間（cm）	柱間（尺）	重複関係 古→新	出土遺物	時期・備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
31	203	Q・R29・30・R・S 28・29	N75°E	920	572	P１	43	41	16	P１—P２	560	18.5	SB30, SK1068, SK1091, SK1169, SK1368, SK1526→SB31	P12より相馬焼高台つきの椀出土（18世紀前半）	近世？	170		H12	関
						P２	42	42	30	P２—P３	180	5.9							
						P３	54	48	40	P３—P４	196	6.5							
						P４	50	46	38	P４—P５	190	6.3							
						P５	40	34	32	P５—P６	360	11.9							
						P６	34	32	20	P６—P７	190	6.3							
						P７	40	36	40	P７—P８	190	6.3							
						P８	40	36	46	P８—P９	180	5.9							
						P９	46	46	42	P９—P10	180	5.9							
						P10	42	42	48	P10—P11	184	6.1							
						P11	42	38	30	P11—P12	200	6.6							
						P12	40	36	40	P12—P13	180	5.9							
						P13	38	32	20	P13—P１	200	6.6							
32	204	Q・R・S 29・Q30	N80°E	710	360	P１	30	28	46	P１—P２	185	6.1	SK1169, SK1477, SK1478→SB31		近世？	171		H12	佐々木
						P２	28	26	39	P２—P３	185	6.1							
						P３	32	28	46	P３—P４	145	4.8							
						P４	32	31	48	P４—P５	180	5.9							
						P５	38	38	44	P５—P９	180	5.9							
						P６	28	26	46	P９—P13	177	5.8							
						P７	26	26	42	P13—P12	355	11.7							
						P８	32	32	34	P12—P11	190	6.3							
						P９	26	24	33	P11—P10	165	5.4							
						P10	38	35	33	P10—P６	186	6.1							
						P11	32	32	38	P６—P１	170	5.6							
						P12	32	32	40	—	—	—							
						P13	52	47	40	—	—	—							
33	204	T・U29・30・31	N４°W	84	460	P１	48	42	34	P１—P２	450	14.9	SK1351, SK1362, SK1385, SK1462, SI123→SB33→SB34		近世？	172		H12	関
						P２	44	42	22	P２—P３	195	6.4							
						P３	38	34	22	P３—P４	200	6.6							
						P４	42	38	35	P４—P５	205	6.8							
						P５	44	40	33	P５—P６	200	6.6							
						P６	46	42	36	P６—P７	418	13.8							
						P７	40	38	60	P７—P８	230	7.6							
						P８	42	＊24	53	P８—P９	165	5.4							
						P９	40	＊24	60	P９—P10	206	6.8							
						P10	46	42	28	P10—P１	180	5.9							
34	205	R・S・T 28・29・30	N84°E	1100	920	P１	22	20	8	P１—P２	180	5.9	SK1351, SK1352, SK1362, SK1368, SK1372, SK1373, SK1376, SK1377, SK1396, SK1458, SK1459, SK1475, SK1476, SK1478, SI123, SB30, SB33→SB34	縄文土器１, 陶磁器２　P22より瀬戸・志野の丸皿出土（1600年前後）	近世？	173		H12	菊田
						P２	30	30	28	P２—P３	185	6.1							
						P３	44	42	36	P３—P４	180	5.9							
						P４	35	27	40	P４—P32	100	3.3							
						P５	40	33	30	P32—P33	185	6.1							
						P６	30	35	16	P33—P34	185	6.1							
						P７	40	33	26	P34—P35	180	5.9							
						P８	36	33	12	P35—P７	100	3.3							
						P９	42	28	10	P７—P８	175	5.8							
						P10	30	28	8	P８—P９	190	6.3							
						P11	47	46	40	P９—P10	185	6.1							
						P12	38	35	6	P10—P11	180	5.9							
						P13	38	38	28	P11—P36	140	4.6							
						P14	40	35	30	P36—P37	160	5.3							
						P15	40	40	36	P37—P38	190	6.3							
						P16	44	40	36	P38—P39	190	6.3							
						P17	40	38	40	P39—P40	180	5.9							
						P18	45	40	60	P40—P41	190	6.3							
						P19	38	36	48	P41—P42	200	6.6							
						P20	38	34	48	P42—P17	170	5.6							
						P21	48	35	68	P17—P18	180	5.9							
						P22	46	44	48	P18—P19	185	6.1							
						P23	50	46	64	P19—P20	180	5.9							
						P24	42	40	64	P20—P１	210	6.9							
						P25	50	45	68	—	—	—							
						P26	50	44	76	—	—	—							
						P27	38	34	54	—	—	—							
						P28	50	46	62	—	—	—							
						P29	40	40	70	—	—	—							
						P30	45	43	54	—	—	—							
						P31	40	40	72	—	—	—							
						P32	36	26	32	—	—	—							
						P33	47	40	62	—	—	—							
						P34	42	26	40	—	—	—							
						P35	38	30	16	—	—	—							
						P36	38	30	14	—	—	—							
						P37	40	28	20	—	—	—							
						P38	53	30	48	—	—	—							
						P39	32	30	12	—	—	—							
						P40	40	38	20	—	—	—							
						P41	38	35	32	—	—	—							
						P42	46	40	24	—	—	—							
35	206	Q・R29	N18°W	265	180	P１	30	26	45	P１—P２	265	8.7			時期不明	174		H12	千葉
						P２	32	26	15	P２—P３	170	5.6							
						P３	32	30	18	P３—P４	255	8.4							
						P４	26	24	45	P４—P１	180	5.9							
36	206	T・U29・30	N６°W	520	400	P１	42	30	60	P１—P２	200	6.6	SK1378, SK1458, SK1481, SB37→SB36		中・近世？	175		H12	菊田
						P２	54	52	30	P２—P３	200	6.6							
						P３	56	52	40	P３—P４	280	9.2							
						P４	32	32	16	P４—P５	230	7.6							
						P５	52	48	40	P５—P６	200	6.6							
						P６	50	46	46	P６—P７	200	6.6							
						P７	50	48	50	P７—P８	260	8.6							
						P８	32	30	24	P８—P１	255	8.4							
37	206	S29・T・U28・29・30	N84°E	112	520	P１	44	40	54	P１—P２	200	6.6	SK1351, SK1378, SK1379, SK1476, SK1481, SK1545→SB37→SB36		時期不明	176		H12	菊田
						P２	34	30	70	P２—P３	200	6.6							
						P３	36	30	75	P３—P４	200	6.6							
						P４	46	36	16	P４—P５	200	6.6							
						P５	56	52	16	P５—P６	210	6.9							
						P６	60	50	45	P６—P７	510	16.8							
						P７	46	46	40	P７—P８	160	5.3							
						P８	46	36	35	P８—P９	200	6.6							
						P９	44	40	25	P９—P10	230	7.6							
						P10	50	48	24	P10—P11	220	7.3							
						P11	40	40	45	P11—P12	200	6.6							
						P12	40	40	52	P12—P１	510	16.8							

表９　馬場前遺跡北区掘立柱建物跡一覧(4)

＊：遺存値

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド番号）	長軸方向	長軸（cm）	短軸（cm）	P番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	P－P	柱間（cm）	柱間（尺）	重複関係 古→新	出土遺物	時期・備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
38	207	S・T30・31	N82°E	532	380	P１	32	28	52	P１—P２	244	8.1	SK1351, SK1361, SK1397→SB39→SB38		時期不明	177			佐々木
						P２	34	28	38	P２—P３	288	9.5							
						P３	30	28	36	P３—P４	190	6.3							
						P４	26	23	38	P４—P５	170	5.6							
						P５	30	28	48	P５—P６	286	9.4							
						P６	28	26	52	P６—P７	268	8.8							
						P７	44	36	50	P７—P８	186	6.1							
						P８	28	24	38	P８—P１	194	6.4							
39	207	S・T30・31	N81°E	478	372	P１	38	36	48	P１—P２	478	15.8	SK1351, SK1397→SB39→SB38		時期不明	177		H12	佐々木
						P２	22	20	18	P２—P３	366	12.1							
						P３	28	28	24	P３—P４	212	7							
						P４	30	30	24	P４—P５	260	8.6							
						P５	32	30	47	P５—P６	170	5.6							
						P６	28	28	50	P６—P１	208	6.9							
41	207	Q・R26・27	N85°W	615	55	P１	32	30	64	P７—P８	200	6.6	SK538, SK630, SK682, SK684, SK687, SK846, SK849, SB42→SB41	縄文土器２	近世？	178		H12	国井
						P２	30	28	80	P８—P９	210	6.9							
						P３	30	30	65	P９—P１	205	6.8							
						P４	35	34	38	P１—P２	490	16.2							
						P５	40	38	50	P２—P３	200	6.6							
						P６	32	30	42	P３—P４	195	6.4							
						P７	38	36	40	P４—P５	200	6.6							
						P８	38	36	80	P５—P６	250	8.3							
						P９	35	30	60	P６—P７	255	8.4							
42	208	R・S25・26・27	N10°W	680	620	P１	36	32	70	P13—P９	112	3.7	SK517, SK518, SK523, SK846, SK847, SK1153, SI133→SB42→SB41	縄文土器11, 陶磁器２	時期不明	179		H12	国井
						P２	36	34	10	P９—P14	250	8.3							
						P３	32	28	28	P14—P１	265	8.7							
						P４	40	35	56	P１—P２	245	8.1							
						P５	40	38	18	P２—P３	230	7.6							
						P６	44	40	25	P３—P４	220	7.3							
						P７	48	42	70	P４—P５	240	7.9							
						P８	38	36	40	P５—P６	210	6.9							
						P９	36	＊20	60	P６—P10	102	3.4							
						P10	48	48	24	P10—P11	210	6.9							
						P11	45	＊40	60	P11—P12	225	7.4							
						P12	40	40	58	P12—P13	240	7.9							
						P13	36	36	60	—	—	—							
46	208	Q29・30	N12°W	450	190	P１	40	40	43	P１—P２	190	6.3	SK1090, SK1421, SK1422→SB46		時期不明	180		H12	能登谷
						P２	42	36	50	P２—P３	254	8.4							
						P３	46	38	49	P３—P４	190	6.3							
						P４	42	40	56	P４—P５	254	8.4							
						P５	27	20	23	P５—P６	190	6.3							
						P６	42	36	45	P６—P１	162	5.3							
47	209	Z・AA40・41	N89°W	540	466	P１	32	28	46	P１—P２	255	8.4			中・近世？	181		H12	坂田
						P２	40	36	40	P２—P３	290	9.6							
						P３	38	35	44	P３—P４	410	13.5							
						P４	45	40	45	P４—P５	250	8.3							
						P５	30	26	50	P５—P６	266	8.8							
						P６	30	28	40	P６—P１	466	15.4							
48	209	Z・AA40・41	N88°E	480	375	P１	37	36	46	P１—P２	235	7.8			中・近世？	182		H12	能登谷
						P２	31	28	35	P２—P３	236	7.8							
						P３	30	30	46	P３—P４	125	4.1							
						P４	38	34	43	P４—P５	250	8.3							
						P５	24	24	41	P５—P６	246	8.1							
						P６	33	31	38	P６—P７	238	7.9							
						P７	40	33	43	P７—P８	250	8.3							
						P８	20	16	38	P８—P１	126	4.2							
						P９	30	29	23	—	—	—							
49	210	AB40・41	N３°W	450	310	P１	29	27	21	P１—P２	150	5	SI106→SB49		中・近世？	183		H12	坂田
						P２	28	26	32	P２—P３	170	5.6							
						P３	38	35	28	P３—P４	216	7.1							
						P４	29	26	29	P４—P５	234	7.7							
						P５	24	22	32	P５—P６	180	5.9							
						P６	21	20	22	P６—P７	135	4.5							
						P７	28	20	26	P７—P８	230	7.6							
						P８	33	31	25	P８—P１	204	6.7							
50	210	Y・Z・AA・AB39・40	N86°E	700	38	P１	22	20	33	P１—P２	194	6.4	SK1133→SB50		近世？	184		H12	坂田
						P２	36	25	28	P２—P３	196	6.5							
						P３	24	22	22	P３—P４	190	6.3							
						P４	32	29	38	P４—P５	360	11.9							
						P５	34	31	47	P５—P６	190	6.3							
						P６	28	26	12	P６—P７	220	7.3							
						P７	33	31	45	P７—P８	180	5.9							
						P８	＊24	18	32	P８—P９	188	6.2							
						P９	36	30	40	P９—P10	186	6.1							
						P10	36	28	47	P10—P11	182	6							
						P11	26	26	39	P11—P12	200	6.6							
						P12	26	22	25	P12—P13	224	7.4							
						P13	22	20	30	P13—P１	190	6.3							
						P14	18	18	10	P14—P15	150	5							
						P15	21	18	13	P15—P16	144	4.8							
						P16	19	18	15	P16—P17	135	4.5							
						P17	22	18	10	P17—P18	142	4.7							
						P18	30	23	17	P18—P19	130	4.3							
						P19	17	15	10	—	—	—							
51	211	V33	N３°W	380	360	P１	32	30	63	P１—P２	380	12.5	SK1042, SK1059, SI116→SB51	縄文土器１	近世？	185		H12	千葉
						P２	25	24	56	P２—P３	175	5.8							
						P３	25	24	65	P３—P４	180	5.9							
						P４	30	28	53	P４—P５	370	12.2							
						P５	30	26	68	P５—P６	180	5.9							
						P６	26	24	58	P６—P１	180	5.9							
61	211	AA・AB38・39	N７°W	66	466	P１	34	32	37	P１—P２	196	6.5			近世？	186		H12	坂田
						P２	30	28	42	P２—P３	204	6.7							
						P３	29	26	25	P３—P４	204	6.7							
						P４	32	29	22	P４—P５	450	14.9							
						P５	27	25	33	P５—P６	188	6.2							
						P６	33	30	27	P６—P７	208	6.9							
						P７	30	26	30	P７—P８	200	6.6							
						P８	26	24	22	P８—P１	466	15.4							
62	212	AB・AC40・41	N86°W	660	360	P１	32	32	27	P１—P２	220	7.3			中・近世？	187		H12	坂田
						P２	35	35	40	P２—P３	220	7.3							
						P３	32	30	33	P３—P４	220	7.3							
						P４	35	＊33	24	P４—P５	350	11.6							
						P５	31	27	13	P５—P６	224	7.4							
						P６	30	27	21	P６—P７	212	7							
						P７	26	25	25	P７—P８	220	7.3							
						P８	50	45	23	P８—P１	360	11.9							

表９　馬場前遺跡北区掘立柱建物跡一覧(5)

＊：遺存値

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）番号	長軸方向	長軸（cm）	短軸（cm）	P番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	P－P	柱間（cm）	柱間（尺）	重複関係 古→新	出土遺物	時期・備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
63	212	AA・AB・AC・AD 38・39	N84 °E	1100	560	P１	47	45	12	P１—P２	180	5.9	SK926, SI103, SI105, SI106→SB63	縄文土器１, 陶磁器２, 鉄滓１	近世？	188		H12	坂田
						P２	49	47	25	P２—P３	180	5.9							
						P３	48	47	28	P３—P４	186	6.1							
						P４	40	＊36	39	P４—P５	174	5.7							
						P５	47	44	38	P５—P６	370	12.2							
						P６	44	42	35	P６—P７	550	18.2							
						P７	50	44	42	P７—P８	180	5.9							
						P８	50	47	40	P８—P９	360	11.9							
						P９	51	50	52	P９—P10	360	11.9							
						P10	40	40	40	P10—P11	180	5.9							
						P11	41	38	40	P11—P12	195	6.4							
						P12	47	44	27	P12—P13	185	6.1							
						P13	63	55	15	P13—P１	180	5.9							
67	213	Q39・40	N３°E	595	341	P１	36	27	13	P２—P３	205	6.8	SK1232, SK1233, SI142→SB67		近世？	189		H12	新海
						P２	42	36	37	P３—P４	195	6.4							
						P３	35	29	28	P４—P５	195	6.4							
						P４	35	28	20	P５—P６	344	11.4							
						P５	39	32	21	P６—P７	200	6.6							
						P６	29	27	8	P７—P８	185	6.1							
						P７	33	30	32	P８—P１	190	6.3							
						P８	31	30	23	P１—P２	325	10.7							
68	213	P・Q38・39・40	N１°W	610	373	P１	34	27	20	P２—P３	186	6.1	SK1179, SK1233, SI142, SK1234→SB68		近世？	190		H12	新海
						P２	35	35	18	P３—P４	265	8.7							
						P３	39	33	27	P４—P５	148	4.9							
						P４	31	29	32	P５—P６	372	12.3							
						P５	33	33	35	P６—P７	146	4.8							
						P６	31	27	6	P７—P８	230	7.6							
						P７	35	31	16	P８—P１	235	7.8							
						P８	43	30	10	P１—P２	360	11.9							
70	213	Q・R39・R40	N12°W	482	322	P１	33	28	23	P２—P３	205	6.8	SK1232→SB70		中・近世？	191		H12	新海
						P２	40	35	5	P３—P４	250	8.3							
						P３	45	42	38	P４—P５	323	10.7							
						P４	30	28	20	P５—P６	250	8.3							
						P５	35	34	40	P６—P１	235	7.8							
						P６	32	29	11	P１—P２	330	10.9							
71	213	R・S40・41	N３°E	390	345	P１	38	33	30	P２—P３	166	5.5	SI145, SI143, SI66, SK1174→SB71		近世？	192		H12	新海
						P２	40	40	40	P３—P４	205	6.8							
						P３	39	45	42	P４—P５	340	11.2							
						P４	42	39	44	P５—P６	205	6.8							
						P５	40	35	41	P６—P１	185	6.1							
						P６	37	30	25	P１—P２	355	11.7							
72	214	O・P37	EW	434	35	P１	40	39	14	P１—P２	140	4.6			中・近世？	193		H12	新海
						P２	25	＊24	15	P２—P３	285	9.4							
						P３	40	40	25	P３—P４	260	8.6							
						P４	49	42	10	P４—P５	315	10.4							
						P５	32	29	4	P５—P６	125	4.1							
						P６	46	38	12	P６—P１	305	10.1							
73	214	R・S38・39	N82°E	550	332	P１	56	45	10	P１—P２	185	6.1	SK1323, SK1327→SB73		近世？	194		H12	新海
						P２	48	45	25	P２—P３	165	5.4							
						P３	45	45	28	P３—P４	190	6.3							
						P４	50	40	24	P４—P５	350	11.6							
						P５	39	35	35	P５—P６	177	5.8							
						P６	48	42	36	P６—P７	185	6.1							
						P７	50	48	41	P７—P８	190	6.3							
						P８	55	51	70	P８—P１	333	11							
74	214	T・U38・39	N89 °E	647	345	P１	32	31	50	P１—P２	220	7.3			中・近世？	195		H12	新海
						P２	30	30	49	P２—P３	220	7.3							
						P３	35	29	51	P３—P４	225	7.4							
						P４	38	36	43	P４—P５	350	11.6							
						P５	36	32	42	P５—P６	210	6.9							
						P６	38	29	36	P６—P７	220	7.3							
						P７	35	33	40	P７—P８	210	6.9							
						P８	41	31	49	P８—P１	345	11.4							
75	215	R・S・T・U39・40	N85 °E	1114	692	P１	＊30	30	34	P１—P２	188	6.2	SK1173, SK1294, SK1303, SK1446, SI79→SB75		近世？	196		H12	新海
						P２	36	32	48	P２—P３	196	6.5							
						P３	36	36	30	P３—P４	214	7.1							
						P４	36	32	40	P４—P５	210	6.9							
						P５	38	34	44	P５—P６	214	7.1							
						P６	34	32	46	P６—P７	460	15.2							
						P７	26	26	22	P７—P８	210	6.9							
						P８	36	32	36	P８—P９	210	6.9							
						P９	30	26	32	P９—P10	210	6.9							
						P10	30	28	32	P10—P11	196	6.5							
						P11	32	26	60	P11—P12	194	6.4							
						P12	38	34	44	P12—P１	474	15.6							
						P13	30	28	40	P13—P14	210	6.9							
						P14	30	26	25	P14—P15	170	5.6							
						P15	34	＊22	44	P15—P16	232	7.7							
						P16	26	24	52	P16—P17	236	7.8							
						P17	28	28	64	P17—P18	180	5.9							
						P18	30	24	52	P18—P６	110	3.6							
						P19	＊26	26	16	P７—P19	104	3.4							
						P20	30	27	28	P19—P20	210	6.9							
						P21	26	＊18	26	P20—P21	202	6.7							
						P22	32	30	25	P21—P22	216	7.1							
						P23	40	33	35	P22—P23	194	6.4							
						P24	30	28	36	P23—P24	184	6.1							
						－	－	－	－	P24—P12	90	3							
						－	－	－	－	P１—P13	134	4.4							
76	215	U・V39・40	N82 °E	480	340	P１	41	34	72	P１—P２	265	8.7			中・近世？	197		H12	新海
						P２	42	40	47	P２—P３	222	7.3							
						P３	35	32	24	P３—P４	335	11.1							
						P４	41	32	55	P４—P５	230	7.6							
						P５	36	36	51	P５—P６	225	7.4							
						P６	33	30	42	P６—P１	330	10.9							
77	216	T・U・V39・40	N89 °E	760	416	P１	52	48	64	P１—P２	258	8.5	SK1007, SK1010, SK1428, SK1429→SB77		中・近世？	198		H12	新海
						P２	52	38	62	P２—P３	256	8.4							
						P３	50	44	60	P３—P４	244	8.1							
						P４	＊44	42	60	P４—P５	430	14.2							
						P５	＊38	＊38	39	P５—P６	256	8.4							
						P６	52	44	58	P６—P７	240	7.9							
						P７	42	42	60	P７—P８	274	9							
						P８	48	42	44	P８—P１	420	13.9							

表９　馬場前遺跡北区掘立柱建物跡一覧(6)

＊：遺存値

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）番号	長軸方向	長軸（cm）	短軸（cm）	P番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	P－P	柱間（cm）	柱間（尺）	重複関係 古→新	出土遺物	時期・備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
78	216	V・W40	N86 °E	385	360	P１	32	＊25	41	P１—P２	195	6.4			近世？	199		H12	新海
						P２	33	28	45	P２—P３	195	6.4							
						P３	27	24	39	P３—P４	362	11.9							
						P４	26	22	41	P４—P５	190	6.3							
						P５	29	25	65	P５—P６	190	6.3							
						P６	＊32	＊22	42	P６—P１	335	11.1							
79	217	R・S・T・U36・37	EW	1420	464	P１	50	44	21	P１—P２	210	6.9	ＳＫ1018→ＳＢ79→ＳＤ12		中・近世 ＳＤ12より新しい遺構である。	200		H12	新海
						P２	46	36	26	P２—P３	230	7.6							
						P３	60	40	23	P３—P４	256	8.4							
						P４	42	38	12	P４—P５	246	8.1							
						P５	46	41	44	P５—P６	200	6.6							
						P６	46	40	34	P６—P７	264	8.7							
						P７	＊80	56	20	P７—P８	364	12							
						P８	68	54	42	P８—P21	100	3.3							
						P９	48	47	46	P21—P20	240	7.9							
						P10	50	44	46	P20—P19	220	7.3							
						P11	50	46	46	P19—P18	244	8.1							
						P12	42	40	50	P18—P17	250	8.3							
						P13	42	40	44	P17—P16	236	7.8							
						P14	38	36	35	P16—P15	234	7.7							
						P15	24	16	12	—	—	—							
						P16	20	18	17	—	—	—							
						P17	26	26	9	—	—	—							
						P18	23	22	8	—	—	—							
						P19	24	22	10	—	—	—							
						P20	26	24	12	—	—	—							
						P21	46	42	26	—	—	—							
80	217	U・V40	EW	420	365	P１	33	33	50	P１—P２	190	6.3			近世？	201		H12	新海
						P２	35	32	40	P２—P３	205	6.8							
						P３	39	33	47	P３—P４	365	12							
						P４	40	34	56	P４—P５	215	7.1							
						P５	54	39	52	P５—P６	205	6.8							
						P６	32	32	51	P６—P１	365	12							
81	218	V39・40	N85 °E	425	340	P１	35	33	60	P１—P２	205	6.8			近世？	202		H12	新海
						P２	31	30	80	P２—P３	220	7.3							
						P３	37	28	40	P３—P４	350	11.6							
						P４	41	40	45	P４—P５	180	5.9							
						P５	42	35	49	P５—P６	220	7.3							
						P６	46	34	18	P６—P１	340	11.2							
83	218	R・S39・40	N86 °E	84	396	P１	38	36	30	P１—P２	270	8.9	ＳＫ1446,ＳＩ79,ＳＩ104→ＳＢ83		中・近世？	203		H12	新海
						P２	34	＊26	30	P２—P３	250	8.3							
						P３	40	40	30	P３—P４	270	8.9							
						P４	36	30	40	P４—P５	394	13							
						P５	36	30	34	P５—P６	270	8.9							
						P６	30	28	30	P６—P７	274	9							
						P７	28	24	32	P７—P８	260	8.6							
						P８	34	28	28	P８—P１	396	13.1							
84	218	P33・34	N85 °E	212	180	P１	32	32	26	P１—P２	188	6.2	ＳＫ1215→ＳＢ84		近世？	204		H12	新海
						P２	36	29	39	P２—P３	206	6.8							
						P３	40	36	33	P３—P４	188	6.2							
						P４	30	28	32	P４—P１	204	6.7							
85	219	R・S38・39	N80 °E	540	380	P１	32	28	20	P１—P２	170	5.6	ＳＫ1005,ＳＫ1327→ＳＢ85	Ｐ６より新寛永通宝３枚出土	近世？	205		H12	新海
						P２	42	41	25	P２—P３	195	6.4							
						P３	39	34	20	P３—P４	187	6.2							
						P４	41	41	23	P４—P５	398	13.1							
						P５	48	40	28	P５—P６	180	5.9							
						P６	36	30	33	P６—P７	183	6							
						P７	36	31	35	P７—P８	175	5.8							
						P８	33	31	20	P８—P１	380	12.5							
86	219	S40・41・42	N87 °W	620	410	P１	45	40	73	P１—P２	200	6.6	ＳＫ1008→ＳＢ86		近世？	206		H12	新海
						P２	42	20	66	P２—P３	200	6.6							
						P３	45	39	65	P３—P４	220	7.3							
						P４	65	52	65	P４—P５	385	12.7							
						P５	38	37	64	P５—P６	207	6.8							
						P６	40	35	66	P６—P７	200	6.6							
						P７	60	50	68	P７—P８	210	6.9							
						P８	65	47	80	P８—P１	415	13.7							
96	220	P・Q23・24（SA38から変更）	N23 ° W	572	353	P１	47	45	8	P１—P２	180	5.9	ＳＩ82→ＳＢ96		時期不明			H12	新海
						P２	48	52	22	P２—P３	174	5.7							
						P３	33	32	18	P３—P４	362	11.9							
						P４	36	34	30	P４—P５	210	6.9							
						P５	39	39	14	—	—	—							
						P６	50	46	18	P６—P１	200	6.6							
97	220	R・S・T32・33（SA19・20ａb・21から変更）	N81 °E	700	540	P１	28	25	54	P14—P１	85	2.8	ＳＫ1077,ＳＫ1094,ＳＫ1539,ＳＩ114→ＳＢ97		時期不明			H12	佐々木
						P２	28	26	53	P１—P２	195	6.4							
						P３	30	28	56	P２—P３	225	7.4							
						P４	28	28	48	P３—P４	195	6.4							
						P５	27	26	50	P４—P５	90	3							
						P６	33	28	56	P５—P６	330	10.9							
						P７	33	32	60	P７—P８	215	7.1							
						P８	27	26	50	P８—P９	195	6.4							
						P９	30	30	60	P９—P10	100	3.3							
						P10	35	34	36	P10—P11	150	5							
						P11	30	30	22	P11—P12	190	6.3							
						P12	38	34	36	P12—P13	110	3.6							
						P13	36	34	42	P13—P14	83	2.7							
						P14	32	30	36	—	—	—							
						P15	34	26	54	—	—	—							
						P16	30	30	42	—	—	—							
						P17	28	28	54	—	—	—							
						P18	31	30	22	—	—	—							
						P19	28	26	15	—	—	—							

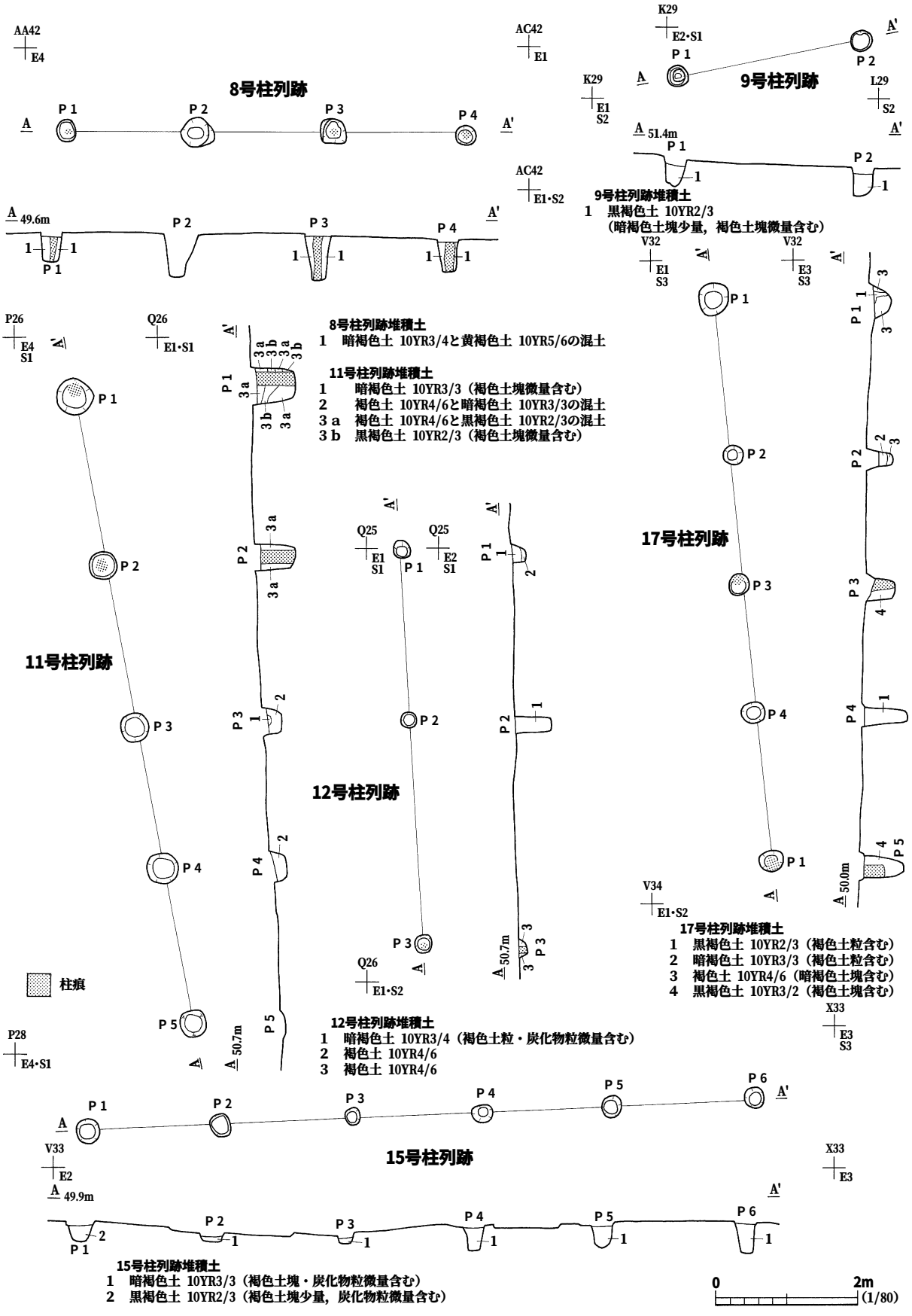


図221　８・９・11・12・15・17号柱列跡

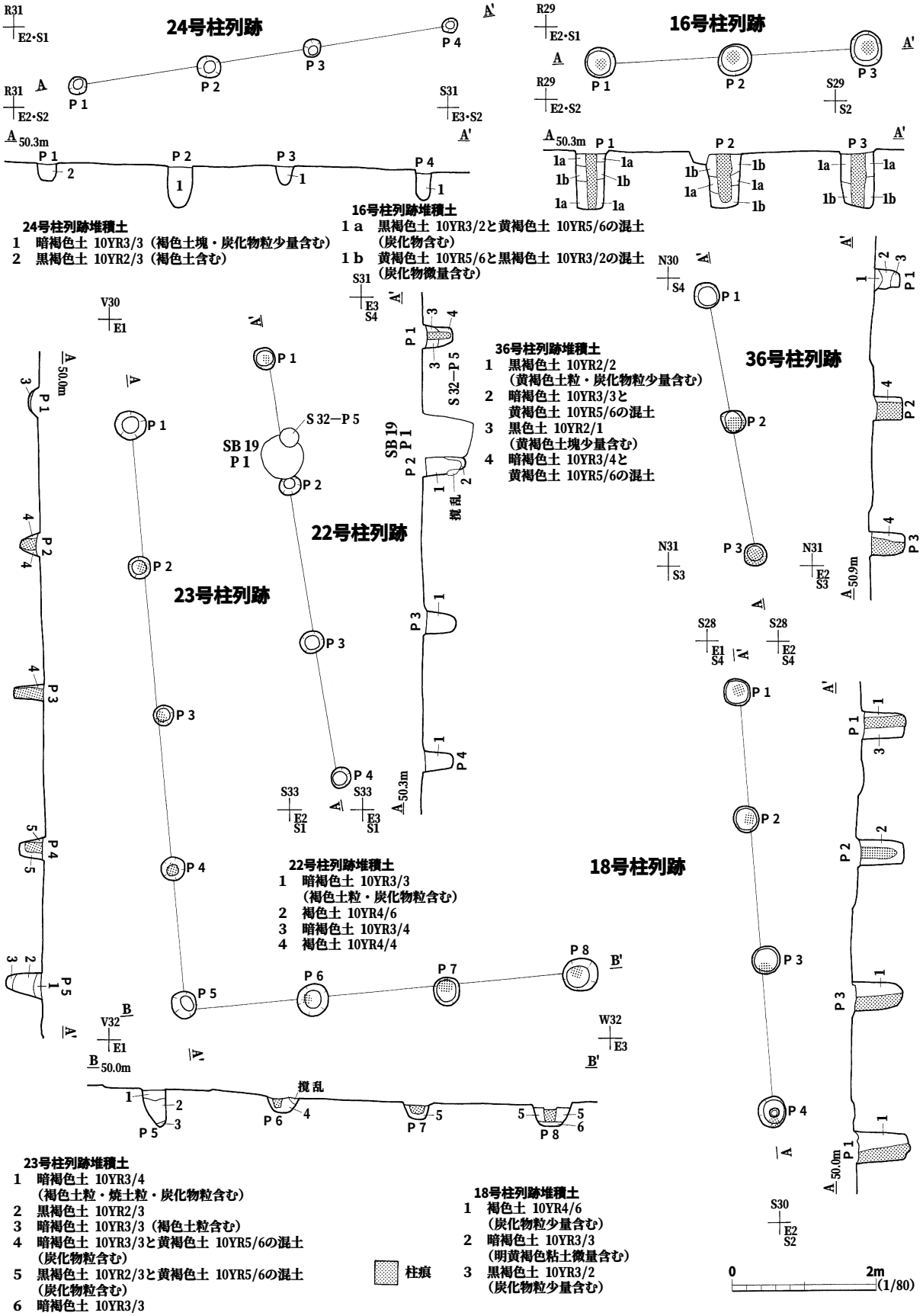
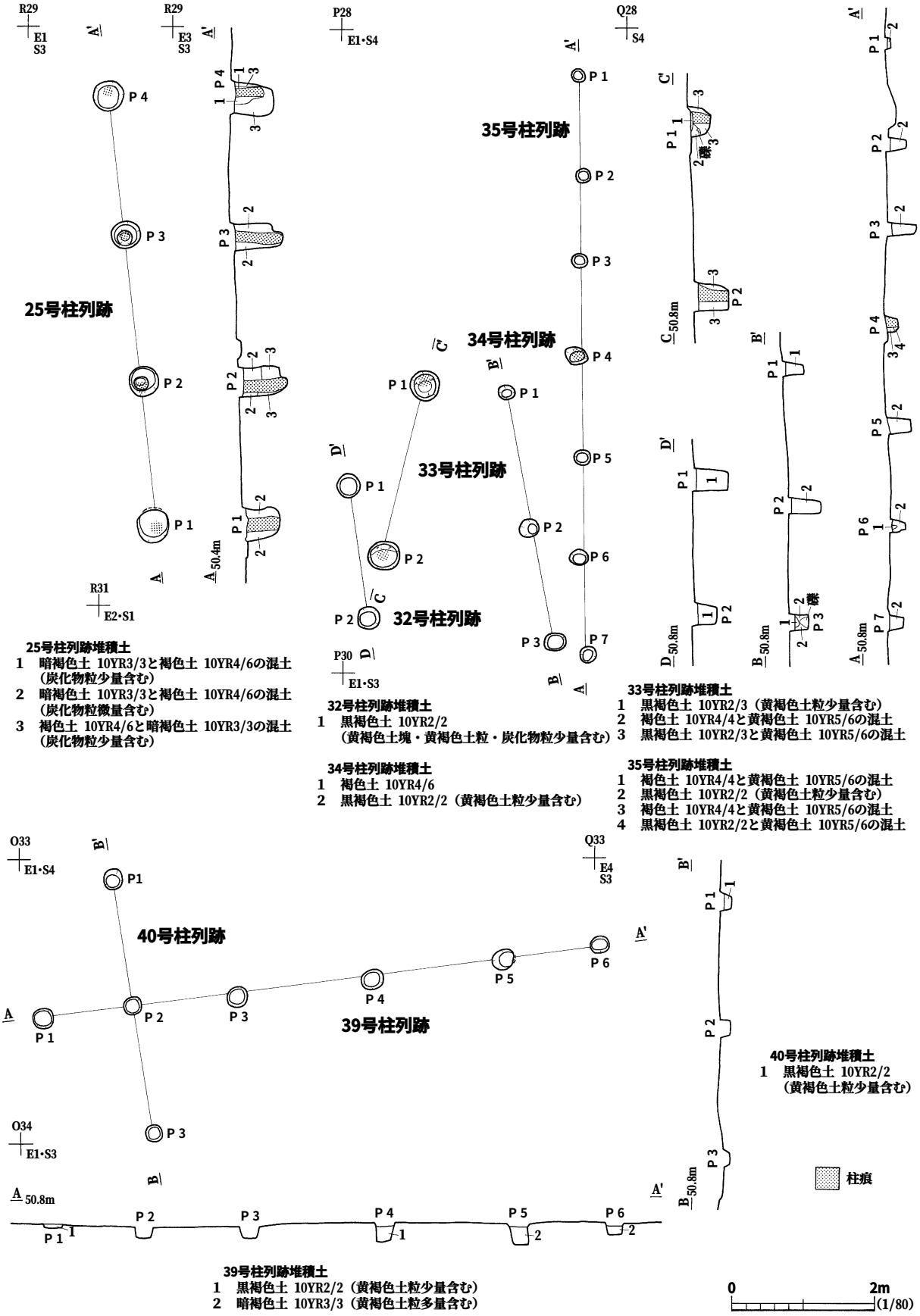


図222　16・18・22～24・36号柱列跡



25号柱列跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3と褐色土 10YR4/6の混土（炭化物粒微量含む）
3　褐色土 10YR4/6と暗褐色土 10YR3/3の混土（炭化物粒少量含む）

32号柱列跡堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（黄褐色土塊・黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）

34号柱列跡堆積土
1　褐色土 10YR4/6
2　黒褐色土 10YR2/2（黄褐色土粒少量含む）

33号柱列跡堆積土
1　黒褐色土 10YR2/3（黄褐色土粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
3　黒褐色土 10YR2/3と黄褐色土 10YR5/6の混土

35号柱列跡堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　黒褐色土 10YR2/2（黄褐色土粒少量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
4　黒褐色土 10YR2/2と黄褐色土 10YR5/6の混土

40号柱列跡堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（黄褐色土粒少量含む）

39号柱列跡堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒多量含む）

図223　25・32～35・39・40号柱列跡

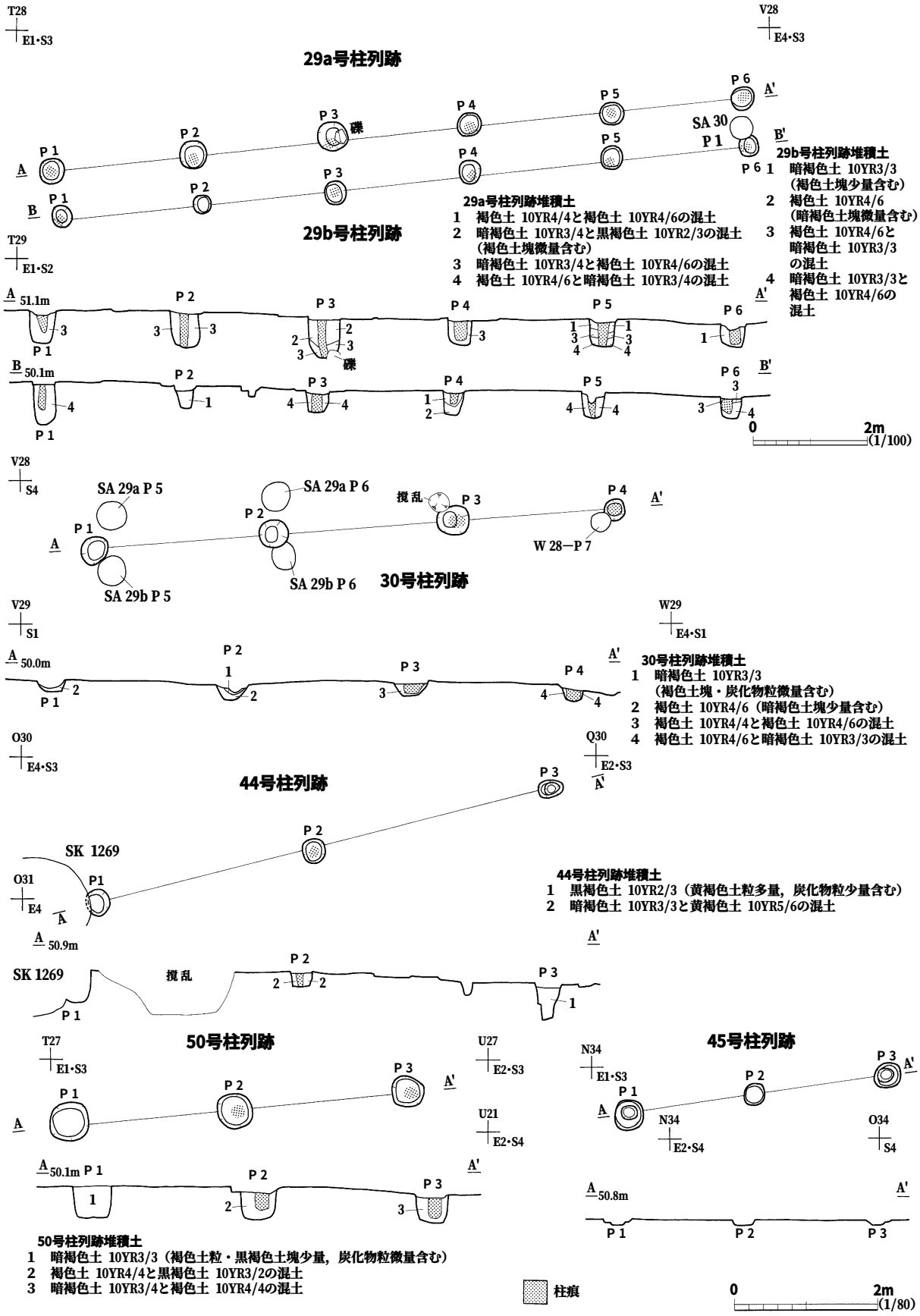


図224　29ａ・29ｂ・30・44・45・50号柱列跡

表10　馬場前遺跡北区柱列跡一覧

遺構番号	遺構挿図番号	位置（グリッド）番号	長軸方向	長軸（cm）	P番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	P－P	柱間（cm）	柱間（尺）	重複関係 古→新	出土遺物	時期・備考	写真図版番号 遺構	写真図版番号 遺物	調査年度	担当者
8	221	AA・AB・AC42	N89°W	556	P１	30	26	41	P１—P２	180	5.9			時期不明	213		H12	坂田
					P２	48	42	59	P２—P３	190	6.3							
					P３	36	35	64	P３—P４	186	6.1							
					P４	30	27	45	—	—	—							
9	221	K29	N78°E	262	P１	30	28	45	P１—P２	262	8.6	SK621→SA９		時期不明	213		H12	能登谷
					P２	30	30	40	—	—	—							
11	221	P・Q26・Q27・28	N11°W	900	P１	52	51	62	P１—P２	250	8.3	SK538, SK582, SK693→SA11	縄文土器２	時期不明	213		H12	国井
					P２	41	38	58	P２—P３	230	7.6							
					P３	40	40	26	P３—P４	200	6.6							
					P４	46	44	26	P４—P５	220	7.3							
					P５	40	40	8	—	—	—							
12	221	Q25・26	N５°W	550	P１	26	24	20	P１—P２	240	7.9	SK700, SG4→SA12		時期不明	213		H12	高田
					P２	24	22	54	P２—P３	315	10.4							
					P３	24	24	12	—	—	—							
15	221	V・W・X32	N87°E	630	P１	36	36	30	P１—P２	185	6.1	SK1057, SI116→SA15		時期不明	213		H12	千葉
					P２	34	27	12	P２—P３	185	6.1							
					P３	24	22	14	P３—P４	184	6.1							
					P４	29	25	35	P４—P５	180	5.9							
					P５	31	27	36	P５—P６	200	6.6							
					P６	30	27	46	—	—	—							
16	222	R29・S29	N87°E	364	P１	40	40	80	P１—P２	180	5.9	SK1478→SA16		時期不明	213		H12	関
					P２	48	44	74	P２—P３	180	5.9							
					P３	50	46	80	—	—	—							
17	221	V32・33・34	N６°W	800	P１	48	42	30	P１—P２	220	7.3	SI116→SA17		時期不明	213		H12	菊田
					P２	30	30	40	P２—P３	180	5.9							
					P３	30	30	42	P３—P４	180	5.9							
					P４	36	30	64	P４—P５	220	7.3							
					P５	35	30	62	—	—	—							
18	222	S28・29・30	N５°W	580	P１	40	40	62	P１—P２	176	5.8	SK1367, SK1373→SA18		時期不明	213		H12	関
					P２	38	36	64	P２—P３	200	6.6							
					P３	42	40	70	P３—P４	206	6.8							
					P４	42	40	76	—	—	—							
22	222	S31・32・33	N10°E	590	P１	32	28	42	P１—P２	180	5.9		鉄製品１，木炭３	時期不明	214	360	H12	千葉
					P２	30	26	60	P２—P３	220	7.3							
					P３	33	30	46	P３—P４	193	6.4							
					P４	29	27	40	—	—	—							
23	222	V30・31・W31	N６°W	800	P１	45	40	14	P１—P２	200	6.6	SK1085, SK1387, SI120→SA23		風倒木痕・時期不明	214		H12	千葉
					P２	30	30	28	P２—P３	210	6.9							
					P３	30	27	42	P３—P４	210	6.9							
					P４	34	32	36	P４—P５	190	6.3							
					P５	38	36	51	P５—P６	174	5.7							
					P６	45	45	23	P６—P７	200	6.6							
					P７	40	36	22	P７—P８	184	6.1							
					P８	50	44	30	—	—	—							
24	222	R・S31	N80°E	516	P１	26	24	28	P１—P２	184	6.1	SK1100, SK1348→SA24	縄文土器１	時期不明	214		H12	佐々木
					P２	40	32	58	P２—P３	146	4.8							
					P３	21	20	26	P３—P４	188	6.2							
					P４	20	20	33	—	—	—							
25	223	R29・30	N７°W	610	P１	48	43	49	P１—P２	200	6.6		陶磁器４，石器１ P３よりb青磁稜花皿出土（15c中葉）	時期不明	214		H12	千葉
					P２	41	41	67	P２—P３	215	7.1							
					P３	41	38	73	P３—P４	204	6.7							
					P４	53	52	60	—	—	—							
29a	224	U・V・28・T・U・29	N84°E	1200	P１	46	44	60	P１—P２	250	8.3	SK1378, SK1379, SK1545, SI91→SA29a		時期不明	214		H12	菊田
					P２	50	50	62	P２—P３	240	7.9							
					P３	52	50	70	P３—P４	240	7.9							
					P４	42	40	46	P４—P５	245	8.1							
					P５	44	40	50	P５—P６	230	7.6							
					P６	42	40	40	—	—	—							
29b	224	V・28・T・U・V・29	N84°E	1200	P１	38	36	74	P１—P２	250	8.3	SK1379, SK1545, SI91→SA29b		時期不明	214		H12	菊田
					P２	32	30	36	P２—P３	230	7.6							
					P３	40	38	38	P３—P４	235	7.8							
					P４	42	38	44	P４—P５	240	7.9							
					P５	42	38	44	P５—P６	240	7.9							
					P６	36	32	46	—	—	—							
30	224	V・W・28・V・29	N86°E	720	P１	38	42	18	P１—P２	245	8.1	SI91→SA30		時期不明	214		H12	菊田
					P２	40	40	20	P２—P３	250	8.3							
					P３	44	40	20	P３—P４	230	7.6							
					P４	32	28	25	—	—	—							
32	223	P29・30	N８°W	186	P１	34	32	50	P１—P２	186	6.1			時期不明	214		H12	能登谷
					P２	32	31	34	—	—	—							
33	223	P29・30	N14°E	250	P１	42	38	33	P１—P２	250	8.3	SK1258→SA33		時期不明	214		H12	能登谷
					P２	46	40	49	—	—	—							
34	223	P29・30	N10°W	354	P１	24	20	30	P１—P２	190	6.3			時期不明	214		H12	能登谷
					P２	27	26	45	P２—P３	160	5.3							
					P３	30	24	28	—	—	—							
35	223	P28・29・30	N１°W	804	P１	20	18	8	P１—P２	140	4.6			時期不明	215		H12	能登谷
					P２	22	20	28	P２—P３	120	4							
					P３	22	19	42	P３—P４	134	4.4							
					P４	34	26	20	P４—P５	140	4.6							
					P５	24	21	37	P５—P６	140	4.6							
					P６	26	22	37	P６—P７	134	4.4							
					P７	24	22	22	—	—	—							
36	222	N30・31	N10°W	362	P１	37	35	37	P１—P２	180	5.9	SK970→SA36	縄文土器４	時期不明	215		H12	能登谷
					P２	36	33	42	P２—P３	184	6.1							
					P３	32	30	51	—	—	—							
39	223	O34・P34	N83°E	778	P１	29	28	6	P１—P２	126	4.2			時期不明	215		H12	能登谷
					P２	26	24	16	P２—P３	146	4.8							
					P３	30	28	16	P３—P４	190	6.3							
					P４	32	28	28	P４—P５	190	6.3							
					P５	32	28	30	P５—P６	130	4.3							
					P６	26	24	18	—	—	—							
40	223	O33・34	N９°W	360	P１	28	26	17	P１—P２	178	5.9			時期不明	215		H12	能登谷
					P２	27	25	16	P２—P３	180	5.9							
					P３	24	24	9	—	—	—							
44	224	Q・P30・31	N76°E	648	P１	37	32	46	P１—P２	310	10.2			時期不明			H12	能登谷
					P２	36	32	22	P２—P３	340	11.2							
					P３	35	26	51	—	—	—							
45	224	N・O34	N82°E	358	P１	44	40	8	P１—P２	176	5.8			時期不明	215		H12	能登谷
					P２	32	30	8	P２—P３	184	6.1							
					P３	40	34	7	—	—	—							
50	224	T・U27	N85°E	1280	P１	58	56	46	P１—P２	236	7.8	SK858, SK1364→SA50→SK860		時期不明	215		H12	国井
					P２	52	48	40	P２—P３	240	7.9							
					P３	48	44	41	P３—P４	236	7.8							
					P４	46	42	64	P４—P５	246	8.1							
					P５	46	42	54	P５—P６	240	7.9							
					P６	60	48	54	—	—	—							

５．まとめ

前項までで述べたことをまとめると，２次調査の北区において確認した掘立柱建物跡は，大きく三つの時期に分けることができる。

最も古い建物群は，12号溝跡の機能以前の17世紀前半以前であり，柱間７尺以上及び6.7～6.9尺の建物跡が該当する。この建物群では，前述したように，柱間が７尺以上で，比較的整然と並んだ７棟の建物跡(ＳＢ47・48・49・72・74・77・79)と，これに後続すると思われる３棟(ＳＢ62・70・76)及び6.7～6.9尺の柱間をもつ４棟(ＳＢ17・61・75・81)が該当する。また，柱間８尺を超える18・83号建物跡は，松嶋氏によれば，柱間７～7.9尺の建物跡より，さらに古い時期の建物跡だと思われる(松島2000)。

次の時期の建物跡は，柱間6.4～6.6尺の建物跡であり，特に6.6尺の６棟(ＳＢ19・33・36・37・41・86)は，前述の７尺前後の建物跡群に比べ，北側に寄った場所にまで確認されるようになる。これらの建物群は，他の遺構との重複や出土遺物などからは所属時期が判断できない。前述した松嶋氏によれば，16世紀末葉から17世紀中頃の建物跡と柱間尺が一致する。

最後のグループは，柱間６尺前後の建物跡である。この中には，３・15号建物跡など12号溝跡と関連したと思われる遺構が含まれるが，大部分の建物跡は柱間６尺前後に集中している。この建物跡の所属時期は，出土遺物や重複する遺構などにより，17世紀中葉から18世紀前半と思われる。この時期は，松嶋氏による柱間尺の変遷と一致している。

本遺跡で最も確認軒数が多い６～6.3尺の建物群は，３・12・18号溝跡に区画された内側(北側・東側)に，柱間６尺の建物跡を北側(ＳＢ30・34)と南側(ＳＢ20・24・25ａ・25ｂ)に配し，建物の周囲には井戸跡や土坑が伴って，これら全体で一つの居住空間を形成していたものと思われる。建物群の南東側には，橋状遺構と正門があり，一般の邸宅ではなく，かなり計画性をもった屋敷地であったと推測している。その後，溝跡の改修・改築が行われ(本章第３節参照)，これに伴い正門も改築されたものと考えられる。そして，これらの建物群の後に，８号溝跡と長軸方向が一致する５～７号建物跡や31・32号建物跡等のグループが存在していたものと推定している。

柱列については，柱間尺，長軸方向，出土遺物などによる所属時期の判断はしかねるが，分布域が建物跡の分布域とほぼ一致するため，建物跡の所属時期と同様，15世紀後葉から18世紀前半と推測している。

なお，各溝跡の形成時期と建物跡の関係を表８に示した。　（千葉・吉田）

遺　　物（図225，写真360）

各建物跡及び柱列跡から出土した遺物点数については，表９・10に，抽出した遺物は図225に示した。225図１は肥前の陶器皿で，内面には緑釉が認められる。底部と内面見込み部分は無釉，見込み部分は蛇の目剝ぎである。18世紀前半に比定できる。同図２は，瀬戸志野焼の丸皿で，灰白色釉を施している。1600年前後とみられる。同図３は相馬焼の陶器椀の体部片である。18世紀前半に比定できる。同図４は縄文土器片で，口縁部に縄文が，その直下には隆線を描出している。縄文時

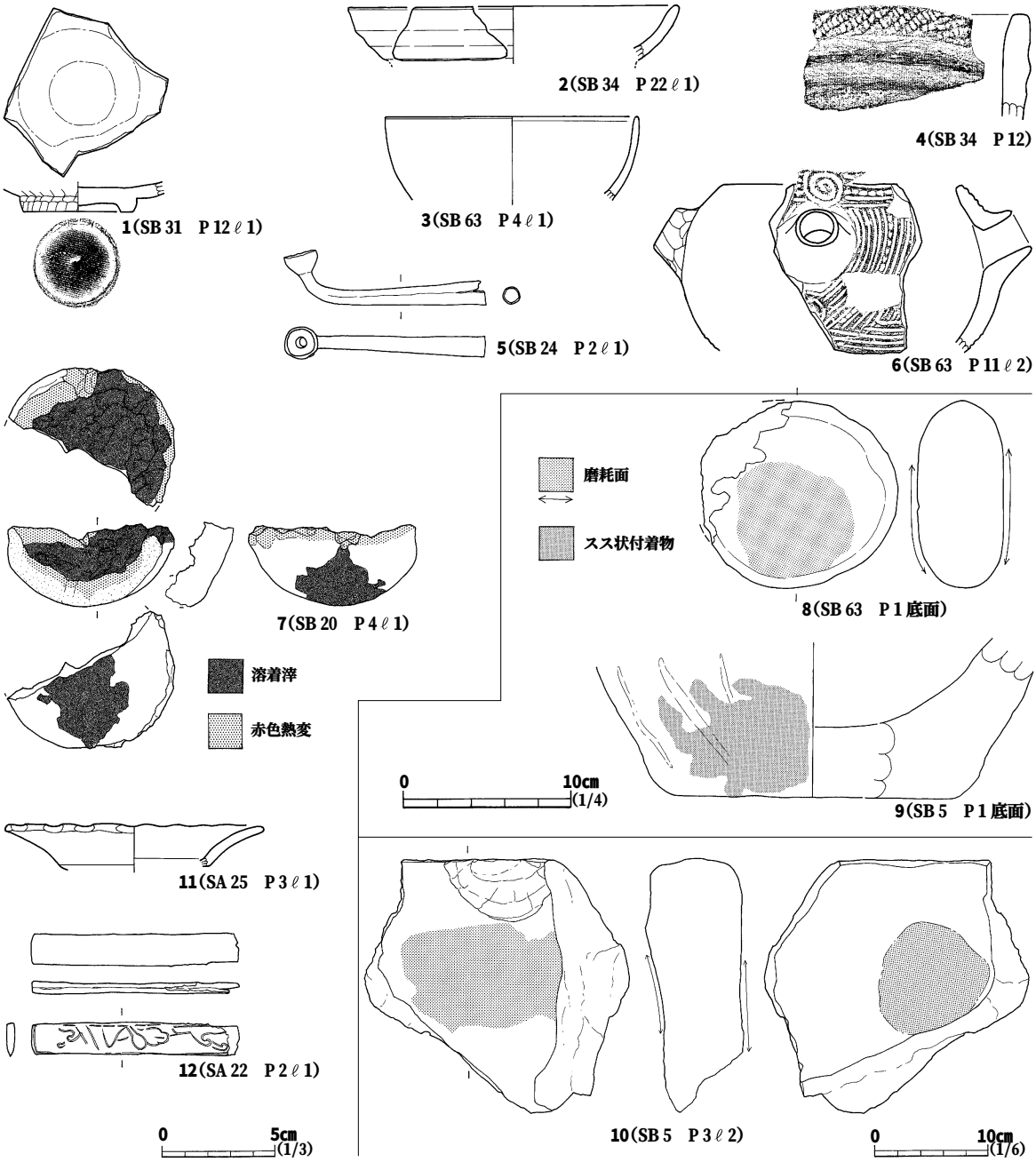


図225　５・20・24・31・34・63号建物跡出土遺物と22・25号柱列跡出土遺物

代中期末葉頃の資料と思われる。同図５は煙管の雁首で，管の部分がかなり細身となっている。同図６は注口土器で，注口部を中心に櫛歯状工具による弧状と直線文様とが施される。胎土中には砂粒を多く含む。縄文時代後期前葉の綱取Ⅱ式期に比定される。同図７は坩堝である。半球形の椀形のくぼみの内面には，溶着滓が付着している。溶着滓の状態から，おそらく鉄用と思われる。同図８は一部欠損するが，円形の礫の両面に磨耗痕のある磨石である。同図９は石鉢の底部で，外面に筋状の線が縦位にみられる。同図10は石皿であろう。表裏両面に滑らかに磨滅したくぼみが認められる。同図11は青磁の綾花皿で，口唇部に菊花状のえぐりがある。15世紀後半代に比定できる。同図12は小柄または笄の柄で，銅製の薄板を折りあわせて鉄製の茎を包んでいる。　（宮田・吉田）

福島県文化財調査報告書第398集

常磐自動車道遺跡調査報告34

馬場前遺跡（２・３次調査）

〈本 文 編 1〉

平成15年３月20日発行

編　集　　財団法人　福島県文化振興事業団
発　行　　福島県教育委員会　　（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
　　財団法人　福島県文化振興事業団（〒960－8116）福島市春日町５－54
　　日本道路公団東北支社いわき工事事務所
　　（〒970－0101）いわき市平下神谷字仲田100
印　刷　　株式会社　阿部紙工　　（〒960－2195）福島市庄野字柿場１－11

この報告書は中性紙を使用しています。